

# 県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書

ひらた 遺跡

2000

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団



平田遺跡の立地する国仲平野（金北山より撮影）



平田遺跡周辺の景観

（国土地理院 1976年9月8日撮影）



板杭列 1 掘出状況



平田遺跡出土土器

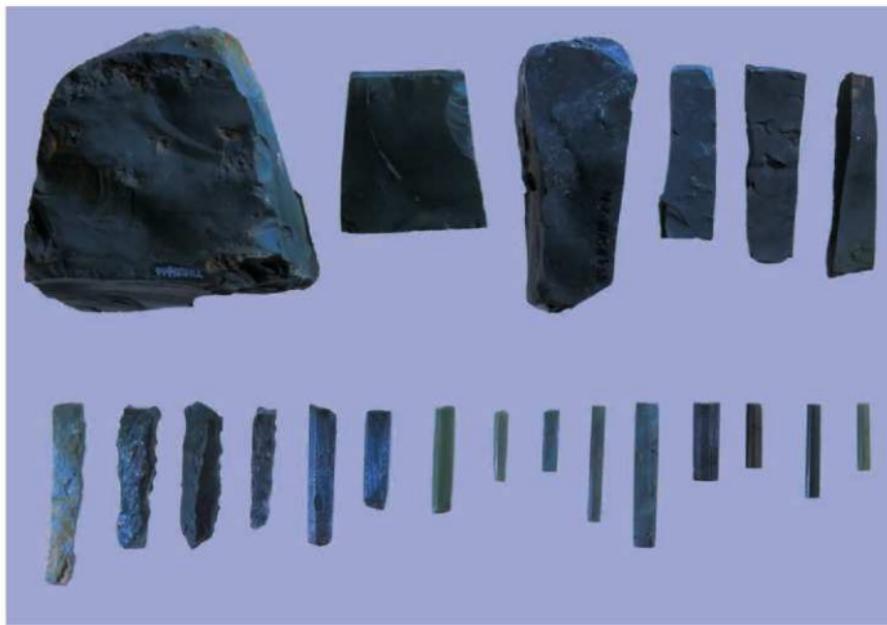


平田遺跡出土土器



管 玉 6・7工程、完成品（左から5番目は長さ12.8mm径2.4mm）

工具類（玉研石・擦切具・石針）



細型管玉製作工程 (綠色凝灰岩)



細型管玉製作工程 (鐵石英)

## 序

新穂村西部地区県営担い手育成ほ場整備事業は、平成7年度に採択された事業です。西部地区的換地計画面積は542.5haにおよび、単位面積も5,000～10,000m<sup>2</sup>と大規模になり、将来の農業経営が期待されるところです。

本書は、この事業に先立ち、平成8年～9年度に調査した「平田遺跡」の発掘調査報告書です。平田遺跡は、弥生時代中期後半の玉作遺跡として有名な県指定史跡「新穂玉作遺跡」の一つです。

調査の結果、たくさんの遺構、遺物が検出されました。周溝を伴った住居跡は3棟確認され、これらを取り巻くように環濠が確認されました。平野部での環濠の確認は県内では初例で、県内（佐渡）にも環濠集落が営まれていた事が明らかとなりました。また、河川跡からは、流路設定のための板杭列が発見されました。これは、全国的にあまり例がなく、貴重な発見となりました。当時すでにかなり高度な土木技術があった事がうかがえます。土器は櫛描文土器を中心として多く出土し、佐渡地方の当期の土器編年研究に好材料を提供してくれました。また玉作資料も膨大な量の出土があり、佐渡の管玉製作技術が再認識されたとともに、その技術系譜を考える上で貴重な資料となりました。このように今回の発掘調査結果は、佐渡・北陸の弥生文化の解明に欠かせないものとなりました。

今回の調査成果が、佐渡・北陸の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後にこの調査に関して多大なご協力とご支援を賜った新穂村教育委員会、ならびに地元の方々をはじめ、新潟県農地部農地整備課、同佐渡農地事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

新潟県教育委員会

教育長 野 本 憲 雄

## 例　　言

1. 本報告書は、新潟県佐渡郡新穂村大字下新穂336-1ほかに所在する平田（ひらた）遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査は新穂村西部地区営業は場整備事業に伴い、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が新潟県から受託して実施した。
2. 発掘調査は、新穂村から依頼を受け、埋文事業団が平成8年7月から12月および平成9年4月から10月に実施した。発掘調査面積は、上・中・下層合わせて平成8年度は1,355m<sup>2</sup>、平成9年度は5,073m<sup>2</sup>の合計6,428m<sup>2</sup>である。
3. 整理及び報告書作成にかかる作業は平成9年11月から平成12年3月にかけて埋文事業団が行った。
4. 出土遺物及び記録類は、新穂村教育委員会が保管・管理している。遺物の註記は遺跡名「平田」出土地点及び層位を併記した。
5. 本書の作成は埋文事業団調査課職員があつた。ただし、岩石の石材鑑定は糸魚川市フォッサマグナミュージアムに、木製品の樹種同定、植物の種実遺体同定および板杭の放射性炭素年代測定は、（株）パレオ・ラボに依頼した。石器の石材名は宮島宏氏、竹之内耕氏（フォッサマグナミュージアム）からご指導を受け、個別の分類作業は田海が行った。また、木製品についても樹種同定結果を基にスギ等は田海が分類した。
6. 木製品の品名、用途等については、東京都立大学文学部山田昌久助教授からご指導を賜った。
7. 本文の註は脚註とした。引用参考文献は著者および発行年（西暦）を文中に（　）で示し、巻末に掲載した。
8. 既成の地図を用いた場合は、その出典を記した。
9. 本書に掲載した遺物の番号は、土器、石器、木製品別に通し番号とし、実測図・写真とともに共通番号とした。
10. 本書の作成作業は、田海係長統括のもと、主に高橋保が遺構を、坂上有紀が土器を、田海義正が石器、木製品をそれぞれ担当し、遺物実測、トレース（遺構、木製品を除く）は埋文事業団整理職員が行った。図版作成については、株式会社セピアに依頼した。遺物写真は田海・坂上有が撮影した。
11. 本書は高橋保、田海義正、坂上有紀が分担執筆したもので、執筆分担は第I章、第II章2、第III章1、第IV章が高橋、第V章1が坂上、第V章2、3が田海である。編集は坂上有が行った。
12. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示、御協力を頂いた。ここに記して御礼申し上げる。

青木一男	赤澤徳明	甘粕 健	石川日出志	小川忠明	金子拓男	鹿取 渉
河合 忍	川村浩司	計良勝範	木島 勉	斎藤基生	坂井秀弥	佐波農地事務所
竹之内耕	田中 靖	寺村光晴	柄木英道	富山正明	中村五郎	橋本博文
羽生令吉	久田正弘	本間嘉晴	増山 仁	光谷拓実	宮島 宏	安 英樹
柳平則子	山口 充	山本 仁	山本正敏	両津市シルバーパートナーズ		

# 目 次

第Ⅰ章 序 説 .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 .....	2
1. 地理的環境 .....	2
2. 国仲平野における遺跡の分布 .....	4
第Ⅲ章 調査の概要 .....	6
1. 発掘調査 .....	6
A. グリッドの設定     B. 調査方法     C. 調査体制     D. 調査経過	
2. 整理作業 .....	9
A. 整理方法     B. 整理体制	
第Ⅳ章 遺 跡 .....	11
1. 基本層序 .....	11
2. 遺跡の概要 .....	11
3. 遺構各説 .....	13
A. 上 層 .....	13
B. 中 層 .....	18
C. 下 層 .....	20
D. まとめ .....	27
第Ⅴ章 遺 物 .....	28
1. 土 器 .....	28
A. 器種分類 .....	29
B. 施工工具と文様について .....	32
C. 土器各説 .....	36
D. まとめ 幼生時代中期の土器について .....	59
2. 石 器 .....	76
A. 石器各説 .....	76
B. 平田遺跡の細型管玉の特徴と工程の分類 .....	82
C. 佐渡玉作遺跡群の研究史 .....	86
D. まとめ .....	90
3. 木 製 品 .....	94
A. 木製品の種類 .....	94
第Ⅵ章 自然科学分析 .....	96
1. 平田遺跡出土石器の石材鑑定 .....	96

2. 平田遺跡出土木製品の樹種同定	100
A. 方法と記載	100
B. 結果と考察	103
3. 平田遺跡出土の種実遺体同定	105
4. 平田遺跡で検出された板杭列の放射性炭素年代測定	105
『要 約』	107
『引用文献』	108

## 挿図目次

第 1 図 佐渡の地質概観図	3	第 17 図 平田遺跡出土甕（下層）	
第 2 図 国仲平野における遺跡分布図	5	スス付着と容量組成の関係	67
第 3 図 グリッド設定図	6	第 18 図 平田遺跡出土の中部高地系土器	67
第 4 図 年度別発掘調査区	7	第 19 図 平田遺跡出土の東北系土器	68
第 5 図 標準土層及び遺構確認面模式図	11	第 20 図 各系統の土器1 北陸系・中部高地系	70
第 6 図 発掘調査位置図	12	第 21 図 各系統の土器2 東北系・東海系・近江系	71
第 7 図 土器の部位名称	28	第 22 図 弥生時代中期 遺跡分布・波及経路	75
第 8 図 豊・甕の分類	31	第 23 図 管玉製作工程（新徳技法）	88
第 9 図 鉢の分類	32	第 24 図 新徳技法と下谷地2・3工程	89
第 10 図 土器の文様呼称と表現方法	34	第 25 図 管玉製作工程1 緑色凝灰岩	91
第 11 図 鉢 類別構成比	61	第 26 図 管玉製作工程2 鉄石英	92
第 12 図 台付鉢の比率	61	第 27 図 石針製作工程	93
第 13 図 豊 文様構成比	62		
第 14 図 甕 文様構成比	63		
第 15 図 甕 容量組成の比較	66		
第 16 図 平田遺跡出土甕 容量組成（層位別）	67		

## 表目次

第 1 表 佐渡の地質	2	第 14 表 試料No.3のX線マイクロアナライザによる全岩分析結果	98
第 2 表 調査経過	8	第 15 表 試料No.4のX線マイクロアナライザによる全岩分析結果	99
第 3 表 豊・甕 類別構成比	61	第 16 表 試料No.5のX線マイクロアナライザによる全岩分析結果	100
第 4 表 鉢 文様構成比	63	第 17 表 平田遺跡出土木製品の樹種・製品別集計	103
第 5 表 平田遺跡出土土器 口縁部の貼付別文様構成比	64	第 18 表 平田遺跡出土木製品の樹種同定結果	104
第 6 表 豊・鉢 貼付の比率	64	第 19 表 放射性炭素年代測定結果	106
第 7 表 平田遺跡出土土器 口縁部形態別貼付の比率	64	別表 1 土器観察表	113
第 8 表 土器編年対応表	74	別表 2 石器観察表	141
第 9 表 平田遺跡 石器器種別数量	76	別表 3 木製品観察表	149
第 10 表 管玉製作工程別数量	82		
第 11 表 主要遺構工程別・石材別数量（緑色凝灰岩・鉄石英・普通輝石安山岩）	85		
第 12 表 工程別・石材別調査区内分布	86		
第 13 表 試料No.2の螢光X線分析装置による全岩分析結果	97		

## 図版目次

### 圖 面

- 図版 1 造構全体図 上層、中層、下層  
図版 2 造構実測図 1 上層 IIIAB72～74区  
図版 3 造構実測図 2 上層 IIIAB70～72区  
図版 4 造構実測図 3 上層 69～71区東壁断面図  
図版 5 造構実測図 4 上層 IIIAB67～69区  
図版 6 造構実測図 5 上層 IIIAB66～68区  
図版 7 造構実測図 6 上層 IIIAB62～65区  
図版 8 造構実測図 7 上層 IIIAB61～63区  
図版 9 造構実測図 8 上層 IIIAB59～62区  
図版 10 造構実測図 9 上層 IIIAB58～61区  
図版 11 造構実測図 10 上層 IIIAB57～59区  
図版 12 造構実測図 11 上層 IIIAB55～57区  
図版 13 造構実測図 12 上層 IIIAB53～55区  
図版 14 造構実測図 13 中層  
図版 15 造構実測図 14 中層  
図版 16 造構実測図 15 中層  
図版 17 造構実測図 16 下層 IIIAB67～70区 河川跡  
図版 18 造構実測図 17 下層 IIIAB68、69区 板杭列1  
図版 19 造構実測図 18 下層 IIIAB69区 板杭列3～5  
図版 20 造構実測図 19 下層 板杭列1～5  
図版 21 造構実測図 20 下層 IIIAB65～68区  
図版 22 造構実測図 21 下層 65～69区西壁断面図  
図版 23 造構実測図 22 下層 SB114断面図  
図版 24 造構実測図 23 下層 IIIAB64～66区  
図版 25 造構実測図 24 下層 IIIAB61～64区  
図版 26 造構実測図 25 下層 SB110  
図版 27 造構実測図 26 下層 SB110断面図  
図版 28 造構実測図 27 下層 各造構断面図  
図版 29 造構実測図 28 下層 IIIAB59～61区  
図版 30 造構実測図 29 下層 各造構断面図  
図版 31 造構実測図 30 下層 IIIAB56～58区  
図版 32 造構実測図 31 下層 IIIAB54～57区  
図版 33 弥生土器実測図 1 上層 SD1・SD2  
図版 34 弥生土器実測図 2 上層 SD5・SD6・SD7・SD8  
図版 35 弥生土器実測図 3 上層 SD8・SK11・SD13  
図版 36 弥生土器実測図 4 上層 SD13・SD14・SD15・SD16・SD17・SD18  
図版 37 弥生土器実測図 5 上層 SD18・SD19・SD20  
図版 38 弥生土器実測図 6 上層 SD21・SD23  
図版 39 弥生土器実測図 7 上層 SD23・SD25・SX26  
図版 40 弥生土器実測図 8 上層 SX26・SD29・SD30・包含層  
図版 41 弥生土器実測図 9 中層 SX32  
図版 42 弥生土器実測図 10 中層 SX32・SK103・SK105・SK107  
図版 43 弥生土器実測図 11 中層 SX111・SX117  
                  下層 SB110  
図版 44 弥生土器実測図 12 下層 SB110  
図版 45 弥生土器実測図 13 下層 SB110・SD110・SD112  
図版 46 弥生土器実測図 14 下層 SD112  
図版 47 弥生土器実測図 15 下層 SD112  
図版 48 弥生土器実測図 16 下層 SD112

- 图版 49 弥生土器実測図 17 下層 SD112  
图版 50 弥生土器実測図 18 下層 SD112  
图版 51 弥生土器実測図 19 下層 SD112・SD113・SB114・SD114  
图版 52 弥生土器実測図 20 下層 SD114・SB115・SD115  
图版 53 弥生土器実測図 21 下層 SD115  
图版 54 弥生土器実測図 22 下層 SD115・SK121・SK122・SK124  
图版 55 弥生土器実測図 23 下層 SK124・SK127・SK128  
图版 56 弥生土器実測図 24 下層 SK130・SK131・SK132・SK134  
图版 57 弥生土器実測図 25 下層 SK139・SK141・SK142・SK144・SK145・SK146 SK147  
图版 58 弥生土器実測図 26 下層 SK147・SK148・SK151・SK152  
图版 59 弥生土器実測図 27 下層 SK153・SK155・SK156  
图版 60 弥生土器実測図 28 下層 SK156・SK158・SX160・SK161  
图版 61 弥生土器実測図 29 下層 SX164  
图版 62 弥生土器実測図 30 下層 SX164  
图版 63 弥生土器実測図 31 下層 SX164  
图版 64 弥生土器実測図 32 下層 SX164・SK165・SX167  
图版 65 弥生土器実測図 33 下層 SX167  
图版 66 弥生土器実測図 34 下層 SX167  
图版 67 弥生土器実測図 35 下層 SX167・包含層  
图版 68 弥生土器実測図 36 下層 包含層  
图版 69 弥生土器実測図 37 下層 包含層  
图版 70 弥生土器実測図 38 下層 包含層  
图版 71 弥生土器実測図 39 下層 包含層  
图版 72 弥生土器実測図 40 下層 包含層  
图版 73 弥生土器実測図 41 下層 包含層／排水  
图版 74 土製品実測図 上層 SD13・SD23  
下層 SB110・SD112・SD114・SB115・SD115・包含層  
图版 75 石器実測図 1 下層 SB110  
图版 76 石器実測図 2 下層 SB110  
图版 77 石器実測図 3 下層 SB110  
图版 78 石器実測図 4 下層 SB110  
图版 79 石器実測図 5 下層 SB110  
图版 80 石器実測図 6 下層 SB110  
图版 81 石器実測図 7 下層 SB110  
图版 82 石器実測図 8 下層 SB110  
图版 83 石器実測図 9 下層 SB110  
图版 84 石器実測図 10 下層 SB110  
图版 85 石器実測図 11 下層 SB110  
图版 86 石器実測図 12 下層 SB110  
图版 87 石器実測図 13 下層 SB110  
图版 88 石器実測図 14 下層 SB110  
图版 89 石器実測図 15 下層 SB110・SB114  
图版 90 石器実測図 16 下層 SB114  
图版 91 石器実測図 17 下層 SB114  
图版 92 石器実測図 18 下層 SB114  
图版 93 石器実測図 19 下層 SB114  
图版 94 石器実測図 20 下層 SD114・SB115  
图版 95 石器実測図 21 下層 SB115  
图版 96 石器実測図 22 下層 SD115  
中層 SX111・SX116  
图版 97 石器実測図 23 中層 SX116  
图版 98 石器実測図 24 中層 SX117  
图版 99 石器実測図 25 上層・中層・下層 各遺構  
图版 100 石器実測図 26 下層 SD112・SD113・包含層  
图版 101 石器実測図 27 上層・下層 包含層／表採

図版102	木製品実測図	1	上層	SD18
図版103	木製品実測図	2	上層	SD18
図版104	木製品実測図	3	上層	SD18
図版105	木製品実測図	4	上層	SD18
図版106	木製品実測図	5	上層	SD18
図版107	木製品実測図	6	上層	SD18
図版108	木製品実測図	7	上層	SD18・SK11・SD17・SD23
図版109	木製品実測図	8	上層	SD23
			下層	SB110・SD112・SB115
図版110	木製品実測図	9	下層	SK151・SK152
図版111	木製品実測図	10	下層	SK152
図版112	木製品実測図	11	下層	SK152・SX167
図版113	木製品実測図	12	下層	SX167・包含層
図版114	木製品実測図	13	下層	板杭列1・支柱・板杭列1-1
図版115	木製品実測図	14	下層	板杭列1-1
図版116	木製品実測図	15	下層	板杭列1-1・板杭列1-2
図版117	木製品実測図	16	下層	板杭列1-2
図版118	木製品実測図	17	下層	板杭列1-2
図版119	木製品実測図	18	下層	板杭列1-2
図版120	木製品実測図	19	下層	板杭列1-2・板杭列2
図版121	木製品実測図	20	下層	板杭列2
図版122	木製品実測図	21	下層	板杭列4・板杭列5・板杭列6

### 写 真

図版123	平田遺跡出土土器
図版124	細型管玉製作工程
図版125	石針製作工程・その他の石器・管玉、石針顕微鏡写真・石材鑑定試料写真
図版126	石材鑑定 偏光顕微鏡写真
図版127	木製品 樹種同定顕微鏡写真1
図版128	木製品 樹種同定顕微鏡写真2
図版129	木製品 樹種同定顕微鏡写真3
図版130	木製品 樹種同定顕微鏡写真4
図版131	木製品 樹種同定顕微鏡写真5・種実遺体同定顕微鏡写真
図版132	造構 1 上層 SD1・SD2, 21, 22・SD4・SD5・SD6, 7
図版133	造構 2 上層 SK10・SK11・SD13～16・SD16・SD17・SD18
図版134	造構 3 上層 SD18・SD19, 20・58～62区全景・SD20・SD21・SD23
図版135	造構 4 上層 SD25・SX26・SD28, 29・SD30・SD34・67～74区全景
図版136	造構 5 中層 SK102・SK103・SK107・SK108・SK109
図版137	造構 6 中層 SX116, 117・SX116
図版138	造構 7 中層 SX111・SX117
図版139	造構 8 中層 SX118～120・SX125・SX126 下層 SB110
図版140	造構 9 下層 SB110
図版141	造構 10 下層 SB110・SB114
図版142	造構 11 下層 SD112・SB114・SB115
図版143	造構 12 下層 SD112
図版144	造構 13 下層 板杭列1
図版145	造構 14 下層 板杭列1・板杭列2・板杭列8
図版146	造構 15 下層 板杭列1・板杭列7・SD113・SK121・SK122
図版147	造構 16 下層 SK122, 123・SK124・SK127・SK128・SK130
図版148	造構 17 下層 SK131・SK132・SK134・SK135・SK139
図版149	造構 18 下層 SK141・SK142・SK143・SK144・SK145
図版150	造構 19 下層 SK146・SK147・SK148・SK151・SK152
図版151	造構 20 下層 SK153・SK154・SK155・SK156
図版152	造構 21 下層 SK157・SK157, 158・SK158・SK162・SX163・SX164・SK165・166

- 図版153 弥生土器 1 上層 SD1・SD2・SD5・SD6・SD7・SD8  
図版154 弥生土器 2 上層 SD6・SD8・SK11・SD13  
図版155 弥生土器 3 上層 SD8・SD13・SD14・SD15・SD16  
図版156 弥生土器 4 上層 SD16・SD17・SD18・SD19・SD20・SD21・SD23  
図版157 弥生土器 5 上層 SD23・SD25  
図版158 弥生土器 6 上層 SX26・SD29・SD30・包含層  
図版159 弥生土器 7 中層 SX32  
図版160 弥生土器 8 中層 SX32・SK103・SK105・SK107・SX111・SX117  
図版161 弥生土器 9 下層 SB110  
図版162 弥生土器 10 下層 SB110・SD110・SD112  
図版163 弥生土器 11 下層 SD112  
図版164 弥生土器 12 下層 SD112  
図版165 弥生土器 13 下層 SD112  
図版166 弥生土器 14 下層 SD112  
図版167 弥生土器 15 下層 SD112・SD113・SB114・SD114  
図版168 弥生土器 16 下層 SD114・SB115・SD115  
図版169 弥生土器 17 下層 SD115・SK121・SK122・SK124  
図版170 弥生土器 18 下層 SK122・SK124・SK127・SK128・SK130  
図版171 弥生土器 19 下層 SK130・SK131・SK132・SK134・SK139・SK141・SK142  
図版172 弥生土器 20 下層 SK142・SK144・SK145・SK146・SK147・SK148・SK151・SK152  
図版173 弥生土器 21 下層 SK153・SK155・SK156・SK158  
図版174 弥生土器 22 下層 SK158・SX160・SK161・SX164  
図版175 弥生土器 23 下層 SX164  
図版176 弥生土器 24 下層 SX164・SK165・SX167  
図版177 弥生土器 25 下層 SX164・SX167  
図版178 弥生土器 26 下層 SX167  
図版179 弥生土器 27 下層 SX167・包含層  
図版180 弥生土器 28 下層 包含層  
図版181 弥生土器 29 下層 包含層  
図版182 弥生土器 30 下層 包含層  
図版183 弥生土器 31 下層 包含層／埴土  
図版184 土製品 上層 SD13・SD23  
下層 SB110・SD112・SD114・SD115・SB115・包含層  
図版185 弥生土器 No.28・No.466 拡大写真  
図版186 弥生土器 口縁部の文様  
図版187 石器 1 下層 SB110  
図版188 石器 2 下層 SB110  
図版189 石器 3 下層 SB110  
図版190 石器 4 下層 SB110・SB114  
図版191 石器 5 下層 SB114  
図版192 石器 6 中層 SX111  
下層 SD114・SB115・SD115  
図版193 石器 7 上層・中層・下層 各造構  
図版194 石器 8 上層・下層 各造構・包含層  
図版195 木製品 1 上層 SD18  
図版196 木製品 2 上層 SD18  
図版197 木製品 3 上層 SD18  
図版198 木製品 4 上層 SD18・SK11・SD17・SD23  
図版199 木製品 5 上層 SD23  
下層 SB110・SD112・SB115・SK151・SK152  
図版200 木製品 6 下層 SK152・SX167  
図版201 木製品 7 下層 SX167・包含層・板杭列支柱・板杭列1-1  
図版202 木製品 8 下層 板杭列1-1・板杭列1-2  
図版203 木製品 9 下層 板杭列1-2・板杭列2  
図版204 木製品 10 下層 板杭列2・板杭列4・板杭列5・板杭列6

# 第I章 序 説

## 1. 調査に至る経緯

扱い手育成基盤整備事業である新穂村西部地区県営ほ場整備事業は、平成7年度に採択され事業がスタートした。事業予定区域内には、たくさんの遺跡が存在しており、遺跡の取り扱いについては、その資料を得るために、確認調査の実施が必要となった。そのため、新穂村教育委員会は、平成6、7年度に新潟県教育委員会の協力を得て、確認調査を実施した。対象遺跡は県史跡の「新穂玉作遺跡」(竹ノ花(小谷地)、桂林、平田、城ノ島)、塚田遺跡、藏王遺跡、舟下沖やしき遺跡、白山神社付近遺跡である。ほ場整備事業は、とりあえず県道金井・新穂線から北側が予定されていた。県指定史跡の3地点及び藏王、塚田遺跡について確認調査を実施した結果、県指定史跡については、弥生時代中期～後期にかけての玉作遺跡であり、指定地外にも連続と遺跡が広がっていることが判明し、遺構、遺物の出土に疎密は見られるものの3地点とも連続することが判明した。また、古墳時代の藏王遺跡、古代の塚田遺跡も広がりとして連続することも明らかとなった。

この調査結果を受けて、佐渡農地事務所、県教育委員会、新穂村教育委員会は、遺跡の取り扱いについて協議した。遺跡面積が膨大なこと、村には発掘調査のできる専門職員がいないことから、なるべく発掘調査必要面積を減らすこと3者は一致した。佐渡農地事務所で検討した結果、水田部分は原則として盛り土で対応することとし、発掘対象から除外された。したがって発掘調査が必要な部分は、幹線道路、水路部分及び掘削の及ぶ一部の水田となった。その結果村で平成8年度に調査が必要な範囲は、中央を南北に走る農道部分で面積は約10,000m<sup>2</sup>となった。

県教育委員会では平成8年度から、今まで市町村で対応していた県営ほ場整備事業について、可能な範囲で協力するとの考えを示していたことから、新穂村は、県に対して協力要請を行った。県教育委員会で検討した結果、平成8年度は、新穂村と神林村に対して協力をを行うことになった。しかし、その委託方法等について、協議がまとまらず4月1日からの実施は困難な状況にあった。ようやく契約にこぎつけたのは、7月1日になってからであった。平成8年7月1日付けで、県農地部長から県教育長に発掘調査依頼があり、県教委はこれを(財)新潟県埋蔵文化財調査事業團に再依頼した(平成8年7月1日付け教文第703号-2)。これより先、県、新穂村、埋文事業團は、県と村との費用負担割合(県92.5%、村7.5%)等を記した基本協定を締結した。また、県と埋文事業團とは、7月1日付けで委託契約書を締結した。なお、調査面積は、事業団約6,000m<sup>2</sup>、新穂村約4,000m<sup>2</sup>である。

なお、調査は平成8年度1年間の予定であったが、調査に入ったのが遅かったこと、下層にも遺跡が確認されたこと、現農道部分が秋の刈り入れ終了後でないと調査できなかつたこと等により調査を終了できず、翌年度まで延びることとなつた。

(県が、ほ場整備事業に着手するに至った経緯及び市町村との費用負担の基本的考え方は、新潟県埋蔵文化財調査報告書第89集に詳しい。)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

佐渡島は、本州、北海道、九州、四国を除く、日本最大の島で、面積約857km<sup>2</sup>、周囲227kmの広さである。中央の国仲平野を挟んで北に大佐渡、南に小佐渡と分かれる。大佐渡山地には標高1,173mの金北山をはじめとして1,000m近い比較的高い山並みが連続し、小佐渡丘陵は標高645mの大地山を最高として比較的低い山並みとなっている。佐渡島で確認される最古の岩石は今からおよそ2~3億年前の古生代後期のものであるが、佐渡島の大部分は火山によってできた火山岩類および日本海の海底で堆積した地層が重なったものである。火山活動は約2,000万年前で、それによって入川層、相川層、真更川層、金北山層が形成された。この火山活動によって、安山岩、流紋岩の溶岩や軽石、火山灰が多量に噴出したが、佐渡鉱山などの金銀鉱床は、この火山活動に関係してできたとされる。他の岩石としては、凝灰岩、玄武岩、硬質頁岩などがある。日本海が誕生するのは今からおよそ1,700万年前である。この時に堆積していったのが下戸層、鶴子層、中山層である。これらの地層が隆起運動で変形しながら海上に現れ、佐渡島が誕生した。佐渡島が現在とほぼ同じ形になったのは今からおよそ数十万年前とされている。第四紀の中頃になると隆起運動が活発となり、高い山地が形成され、それと氷河・間水期の繰り返しによる海面上の上下運動が重なり段丘地形が作られていった。現在5段の段丘面が確認されている。

国仲平野は中央部が沖積層であるが、周りには中位段丘、低位段丘がよく発達している。加茂湖はこの中位段丘によって囲まれている。平野西側の真野湾にそってはハ幡砂丘が発達している。国仲平野の土地利用が確認されるのは、現在のところ弥生時代に入つてからである。

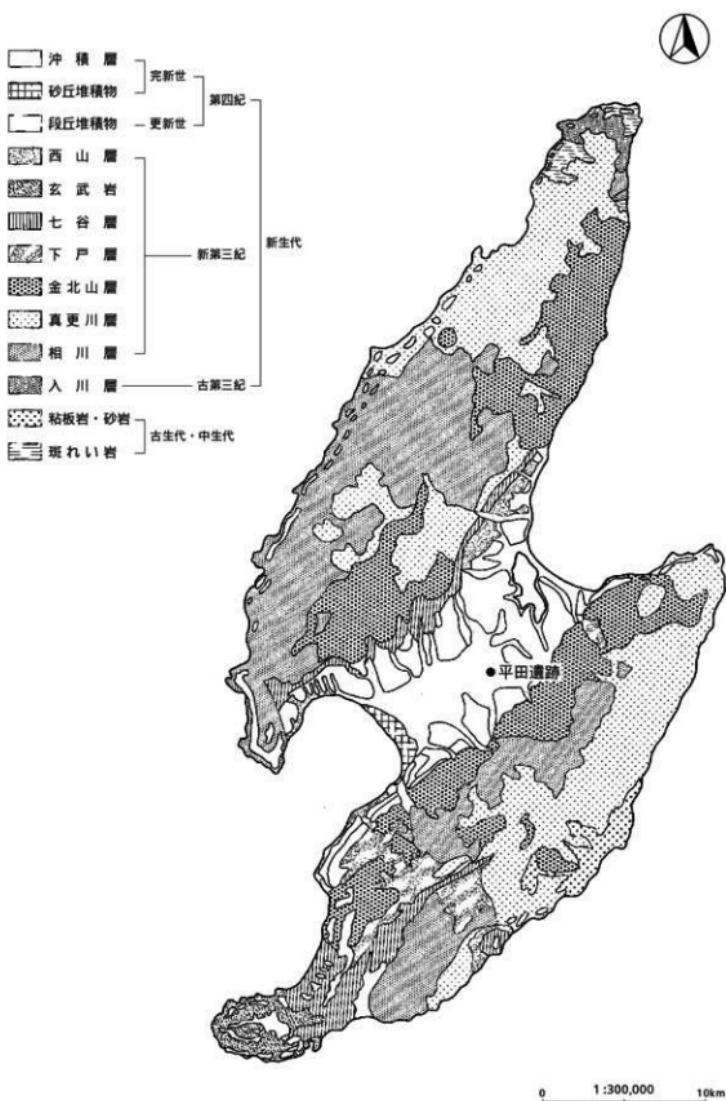
丘陵からは100を超す大小の河川が流れ出ており、その谷筋には、地層の頭部が多く認められる。玉作関係で利用されている岩石には、安山岩、流紋岩、碧玉、緑色凝灰岩、鉄石英等があり、いずれも地元で産出する。佐渡でこれだけ玉作が盛んになったのは、原材料が容易に入手できることも要因の一つである。

管玉に使われている緑色凝灰岩は、畠野町猿八付近、鉄石英は畠野町松ヶ崎付近、石針に使われている普通輝石安山岩は、両津市北部、石鏡は、畠野町と赤泊村を結ぶ県道多田・皆川・金井線の岸付近で現在採取できるが、弥生時代の人たちがそこで採取したかどうかは、わからない。

地質時代	地層名	特徴	おもなできごと
完新世	金丸層	粘土・シルト・砂および漂砾の不規則互層	国仲平野の誕生
第四紀	後	1万年	
更	後	15万年	佐渡島の隆起と段丘の形成
新	中	2万年	
紀	前	170万年	佐渡島の誕生
	河内層		
新	後	510万年	
生	中	1000万年	深くなる古日本海
代	中		
三	新	1600万年	
紀	前	1下戸層	古日本海の誕生
	河内層		
	安山岩層	珪藻土層、グロコナイト層	
	相川層	硬質頁岩、グロコナイト層、玄武岩板状构造、ハイブロクラスサイト	
	入川層	珪藻土層、砂岩、石灰岩、珪藻土	
	花崗岩		
中生代	2.5億年	粘板岩、チャート、砂岩、礁岩	火山活動とともに大陸の時代
古生代	基礎岩層	石灰岩、基底質石灰岩、変玄武岩、変ハレンレイ岩、蛇紋岩	大昔の昔の時代

第1表 佐渡の地質

[神誠・小林 1993 を一部改変]



第1図 佐渡の地質概観図

〔新潟県地質図(1989)を改変〕

## 2. 国仲平野における遺跡の分布

佐渡島における人類の足跡は現在のところ旧石器時代には認められていない。しかし、小木町長者ヶ平遺跡においては、ナイフ型石器の出土があり（本間・椎名 1953）、旧石器時代の所産の可能性は高い（堅木 1998）が1点のみの出土であり、今後の補強資料の出土が待たれる。地形的には、更新世の段丘の発達も見られ、今後旧石器時代遺跡の発見の可能性は高い。

縄文時代に入ると草創期から遺物の出土が知られる（小熊・立木 1998）。小木町長者ヶ平遺跡では有舌尖頭器、羽茂町八升ヶ平遺跡では尖頭器2点が出土している。真野町にいやの田遺跡、関山遺跡では、局部磨製石斧が出土している。また、真野町小布勢遺跡でも尖頭器の出土がある。これらの遺跡はいずれも南佐渡の南西側に位置していることは興味深い。

さて、国仲平野周辺はどうであろうか。地図のトーンは表層地質図（垂直的分布図）（経済企画庁 1973）である。平野中央部より西側は泥層を主とする地域で、一番地盤の悪い地域である。その周辺に砂層を主とする土が堆積する。その周り平野部全体には砂礫+砂岩の層がある。国府川に流れ込む各河川流域は、砂礫を主とする地域となる。縄文時代の遺跡は、加茂湖縁辺部に特徴的で、既に縄文時代には現在の加茂湖が形成されていた事が分かる。その他の縄文遺跡は、砂礫+砂岩の地域に立地している。縄文晩期の遺跡の確認は少なく、三宮遺跡などはやや高い丘陵上に位置する。おそらく、平野低地部にも晩期終末から、弥生時代中期前半にかけての遺跡も存在するであろうことが予想される。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、縄文遺跡よりやや低い国仲平野の低地に分布するようになる。中央部の一番低い泥層縁辺の砂層を主とする地域に重なる。国仲平野で確認されている弥生時代遺跡は中期中葉以降で、弥生文化が定着した時代になる。代表的なものが新穂玉作遺跡である。4地点に分かれしており、現在県史跡となっている。A地区（竹ノ花）、B地区（桂林）、C地区（平田）、D地区（城ノ島）である。これら4地点は、国府川の作り出す扇状地状の地形に立地している。標高は9mで、周辺に当時の水田が広がっていた事は、想像に難くない。村教育委員会で平成6～8年度にかけて実施した確認調査結果によると、A～Cの3地点は、地点により粗密の差はあるものの、古墳時代初頭にかけての連続する遺跡である事が判明した。また、村教育委員会が発掘調査を実施した蔵王遺跡や塚田遺跡も連続しており、連続と遺跡の存続が窺える。面積は30万m<sup>2</sup>を超える大遺跡となる。弥生時代から古墳時代にかけての中心地であり、蔵王遺跡では特殊建物や内行花文鏡などが出土している事から、有力者が所在していた事を考えられ、背後の丘陵部に前期古墳も予想される。同じく県史跡である下畠玉作遺跡はやはり国府川左岸に位置するがこの周辺にも遺跡が大きく展開する可能性がある。国府川右岸は左岸と異なり、丘陵が急激に落ち込みほとんどが泥層を主とする地域である。弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、左岸に比べて数は少なく、丘陵縁辺部に分布する。平野部では深く埋没しているものと思われる。河川改修や水田造成に伴って板杭などが出土した例もあり、この平野部には當時行われた河川改修や水田造成の土木工事跡などがそのまま埋まっている可能性が高い。千種遺跡は、国府川河川改修の際に発見された遺跡である。多くの土器や木製品が散乱状態で出土している（県教委 1953）。

奈良、平安時代に入ると、遺跡の立地は、丘陵部に後退する。このことが何に起因するかは、明確でないが、平野部の沈降による居住条件の悪化、丘陵部の新開発等が考えられる。以前にも増して平野部での水田開発は活発となり、平野部では条里制構もみとめられる。真野町竹田沖条里遺構、同金丸沖条里遺

構、畠野町寺田条里遺跡などがそうである。



第2図 国仲平野における遺跡分布図

{土地分類図(表層地質図)より  
昭和48年経済企画庁総合開発局・調査機関 新潟県}

## 第III章 調査の概要

### 1. 発掘調査

#### A. グリッドの設定

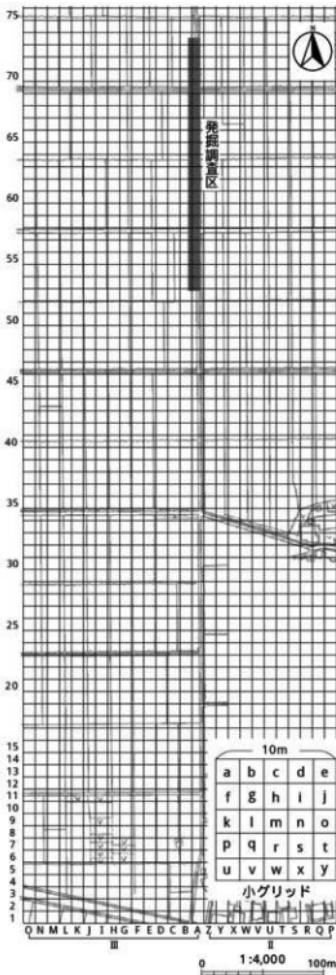
今回のは場整備事業に関わる発掘調査は、広範囲にわたるため、当面の発掘予定地全域をカバーできる形でグリッドを設定した。基点は、今回発掘調査対象となった2号幹線計画の中心基点を利用した。

基線は現農道（計画幹線）及び水田配列方向に並行するように設定した。したがって、国家座標とは一致しない。グリッドは10m方眼を基本グリッドとし、その中を2m間隔の25小グリッドとした。小グリッドは北側から横方向に小文字のa～e、二段目がf～j、…五段目がu～yとした。基本グリッドの南北方向は1、2、3の算数字、東西方向はローマ数字I、II、IIIとアルファベット大文字A、B、Cを組み合わせて表記した。したがって、は場整備事業の一一番東側はIAとなり、発掘調査を実施した部分はIII A、III Bとなる。小グリッドまで表記すると III A60aなどとなる。

#### B. 調査方法

調査には7月から入ったが、調査対象となっている現農道は、秋の刈り入れ後でないと調査できなかつたため、それ以外の水田部分から調査に入ることとし、北側78グリッド付近から開始した。

調査は、水田耕作土である表土及び底土については、バックフォーにより慎重に剥ぎ、その後作業員を投入して包含層発掘に入った。遺物は、包含層では小グリッド毎に取り上げ、遺構出土遺物については、玉作遺跡であることからなるべくドット取り上げとした。遺構、遺物の実測にはリプログラフを採用した。また、農道部分はバックフォーにより掘削した。水田のため、排水が必要であったが、本格



第3図 グリッド設定図

的な暗渠は設定せず、調査区周囲に幅30cm程度の溝をホソにより掘削し、対応した。

### C. 調査体制

発掘調査体制は以下のとおりである（平成8・9年度）。

主 体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

（理事長 平野清明）

管 理 藍原直木（平成8年度事務局長）

須田益輝（平成9年度事務局長）

山上利雄（平成8年度総務課長）

若槻勝則（平成9年度総務課長）

亀井 功（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

調査担当 高橋 保（調査課調査第3係長）

調査職員 石山精哉（平成8年度調査課調査第3係文化財調査員）

金子泰之（平成9年度調査課調査第3係文化財調査員）

桑原 喬（平成9年度嘱託員）

基礎整理 柳谷栄子、和泉裕子、青木多美子、金永里香、

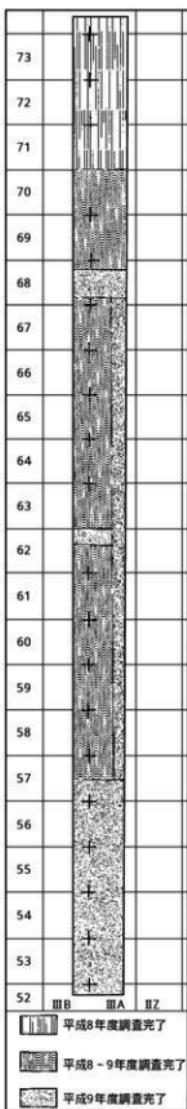
島倉はるみ、吉川志幕

### D. 調査経過

#### 平成8年度

7月11日より北側85地区から、バックフォーによる表土剥ぎを開始する（南北、東西に走る現農道、水路部分を除く）。7月中旬には発掘調査予定の46区までの表土剥ぎを行った。その結果、北側は75区以北、南側は51区以南が出土遺物、遺構も少ないと判断し調査区から除外した。これと並行して、表土剥ぎを終了したところからグリッド杭打設を行い、北側の74区から包含層剥ぎ、遺構精査に入った。作業員は村のほうで募集していただいたが、集まりが悪く、当初予定の半分程度だったため作業は遅れた。7月の後半から8月にかけては、高校生の応援を得た。遺構は溝がほとんどで、覆土は黒色土であったため、確認は容易であった。10月に入り、刈り入れが終了したことから、南北農道部の表土剥ぎを中旬から開始し、10月中旬に表土剥ぎを終了した。

調査をしている中で、下層にも包含層が存在していることが確認された。予想以上の遺跡であることが判明し、今年度終了が困難と判断されたため、佐渡農地事務所と今後の取り扱いについて協議した。その結果、上層のみで下層の存在しない71ラインまでは引き渡すこととし、それ



第4図 年度別発掘調査区

以外は、平成9年度に送ることとなった。また、57ラインより南側については、上層も合わせて9年度とした。それ以外の農道部を除く上層については、12月初旬で調査を終了し、撤収した。上層発掘終了面積は1,355m<sup>2</sup>であった。出土遺物は、浅箱コンテナで約160箱である。

なお、現地説明会は平成8年11月23日に、村教育委員会が実施した蔵王遺跡と合わせて実施し、多くの皆さんに見学いただいた。

調査終了後3月までは、埋蔵文化財センターにて、遺物の注記や遺構図面等の基礎整理を行った。

#### 平成9年度

調査は、4月中旬から開始した。平成8年度は作業員不足であったため、周辺市町村からも作業員を募集する事とし、30~40人を確保した。まず、8年度に終了していなかった上層部から調査に入った。57ライン以下及び調査区内にある2本の東西農道の排除および表土剥ぎをバックフォーにより開始した。およそ6月いっぱいまで上層の調査を終了したが、6月からは、上層と並行して中・下層の調査も開始した。土層観察は南北方向の両側面で行っていたが、場所により層序が一定していなかったり、遺構が重複していたりで、明確に中層、下層を認識するのが困難であった。住居跡のSB110、114、115は周溝の確認によって認識された。遺物の取り上げは、8年度同様に包含層は小グリッド毎に、遺構はドットで取り上げる事を原則とした。SD110のすぐ西側については玉作関係資料が多く出土したため、4回くらいに分けて掘り下げた。雨天により調査できない日には、玉作関係資料の見られる遺構や包含層の土の水洗を行い、玉作関係資料や炭化米の収集に努めた。現地説明会は10月4日に実施し、多くの方の見学があった。また10月8日には、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。当日は雨模様であったが日程の変更もできず、遺構に雨水がたまる中、撮影を強行した。したがって良好な撮影成果は得られなかつた。河川跡の板杭部分については、9月以降に調査を行った。板杭が多く出土したため、実測には村教育委員会の応援を得た。幹線農道の建設が迫っていたため、河川跡内の砂利は全て除去せず板杭部分のみとして、10月いっぱいで何とか調査を終了し、佐渡農地事務所に現地を引き渡した。発掘調査面積は上層、中層、下層合わせて5,073m<sup>2</sup>であった。出土遺物は、浅箱コンテナで約320箱である。11~12月にかけては、村歴史民俗資料館の近くにプレハブを移設し、そこで遺物の水洗や資料整理等の作業を行い、12月前半で佐渡から引き上げた。

なお、発掘調査区については佐渡農地事務所と協議し、村の発掘調査した蔵王遺跡とあわせ、砂により遺構を保護した後、道路盛土を行う事とした。

12月後半以降3月までは、センターにおいて遺構実測図等の資料基礎整理を行った。遺物については、水洗、注記が現地で終了しなかつたため、外部委託とした。

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
平成8年度	表土剥削											
	包含層剥削											
	遺構発掘											
	遺構実測											
平成9年度	基礎整理事業											
	表土剥削											
	包含層剥削											
	遺構発掘											
平成9年度	遺構実測											
	基礎整理事業											

第2表 調査経過

## 2. 整理作業

### A. 整理方法

平田遺跡の整理作業は新津市大字金津にある新潟県埋蔵文化財センターで行った。

**遺物の扱い** 土器には全て出土地点が注記されている。報告掲載遺物は出土地点を示した注記番号のほかに、図版と遺物番号を土器に注記した。石器は石材毎に原則1つずつに通し番号をつけ、袋に収納した。それら全ての観察表を作りデータを保管した。そのうち報告書に掲載した遺物分と「実測外遺物観察表」を含め石器観察表はデジタルデータで埋蔵文化財調査事業團に保管している。

木製品はPEG法で保存処理した小型品12点の他は水漬け状態にある（平成12年3月現在）。木製品の実測遺物は図版と実測番号を記入したカードを付けた。実測外の遺物にも出土地点を示したカードを付けている。

**実測図・図版の作成** 土器・石器には写真（フィルム・デジタルカメラ）とパソコンを活用した。

土器：完形品と器形復元できる遺物の実測は、①器形を取りしり、外面調整は（ハケ目や文様）写真を利用した。②ハケの各単位をチャコペン等で区画し、写真撮影。④フィルムをパソコンで読み込み、画像処理し（Adobe Photoshop4.0）、A4版の光沢紙にプリントした。⑤その写真を鉛筆トレースし、マイラーにハケ目や刻み等を写し取る。⑥それを複写機で倍率にして手取りの器形図の下書きとし、ハケ目の各単位や文様を手取り図に写した。⑦ハケ目の各単位を詳細に観察し、条線を数えて描き実測図を完成。口縁部の刺突文も土器を横位にして撮影した。

この作業の利点はまとめて撮影し、パソコンでプリントすることにより複数の整理職員が遺物実測に取り掛かれることにある。また、職場のパソコンを利用して写真のプリント代の節約にもなった。

石器：管玉製作工程品は該して小さく、さらに展開図が必要になるため実測の効率化が大きな課題となった。石器をデジタルカメラ（ニコンE2N・レンズ マイクロニッコール105mm）で撮影し、パソコンを利用して鉛筆トレースの下図を作った。

①遺物を展開して撮影するために透明アクリル板で固定具を2種類作った。1つは石核等の撮影用に正2枚の正方形板の四隅にボルト・蝶ナットをつけ、その間に遺物の正面性を確認して挟んだ。これをカメラ下で6面展開して撮影した。一方は管玉製作工程の小さな遺物用にアクリル板を細く切り（幅10mmから50mmまで3種類を作成）、各板を長短に分割しL形に90度になるよう接合した。遺物をゴム粘土でアクリル板に正面を確認し仮接合した。これで正面と左右の展開、上面を簡単に撮影でき、裏面・底面は三角定規を支点にクリップで留めて撮影した。②デジタルカメラを垂直にセットし、遺物に斜めからライトを当て、展開して撮影する。③パソコンで画像を調整して、展開した写真をプリントする。④マイラーに外形と刺離線を描き、複写機で倍率を調整する。⑤各面を方眼紙に展開通りに並べて貼り付ける。⑥調査員がリング・フィッシャーを描き図は完成する。この作業では6面展開の石核を日に3個／人を目指した。土器と同様に同時に複数名の作業が可能である。デジタルカメラはその場で撮影の良否が判断できるので、作業時間の短縮化に有効であった。

図版の作成は土器・石器ともトレース図まで事業團で行い、以降を外部委託し図版を作成した。遺構は原図をレイアウト案とともに委託した。木製品は実測図をレイアウト案とともに委託し、図版を作った。

写真図版も遺構・遺物ともフィルムから直接取り込み、図版とした。原稿にプリント写真は使用しなかった。

## B. 整理体制

整理体制は以下のとおりである（平成10・11年）。

整理　財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 野本憲雄）

管理　須田益輝（事務局長）

若槻勝則（総務課長）

本間信昭（調査課長）

庶務　椎谷久雄（総務課主任）

整理担当　田海義正（調査課調査第3係長）・坂上有紀（嘱託員）

整理職員　柳谷栄子、和泉裕子、室塚真弓、東條シゲ子、田辺恵美子、鈴木芳子、青木多美子、

島倉はるみ、吉川志穂、北見順子、葛西美津子、吉田珠世



整理作業の様子



発掘作業の様子

# 第IV章 遺跡

## 1. 基本層序

遺跡は水田部分で、遺構も多く複雑な堆積状況を示していたが基本的層序は以下のとおりである。以下遺構説明等で、アラビア数字のI、II、III、IVは基本層序を表す。I層は表土、耕作土である。II層は灰色粘土層で、中世・古代の遺物が混じる。III層が黒色土で弥生時代中期遺物包含層である。このIII層下で確認される上層遺構の覆土には、III層の入った中期の遺構とIII層を切って覆土に砂または小砂利の入っている弥生後期の遺構がある。IV層は褐色土で、粘性のない砂質の土で洪水堆積土である。このIV層の間に中層遺構が存在する。下部が下層遺構検出となる。地山は61区以北では褐色の粘質土、以南では青灰色粘土である。

遺構は、上、中下層にわたって確認されたが、上層では覆土の堆積状況によって3段階を確認できる。一番新しいと考えられるのが、III層を切っていて、覆土にIII層が全く認められないものである（SD2等）。次がIII層の流れ込みが下部に認められ、上部に黄褐色土シルト土が堆積するもの（SK10等）。一番古いのが、覆土がIII層のみのものである。中層は、炭等の確認で遺構が認識できたものが多い。

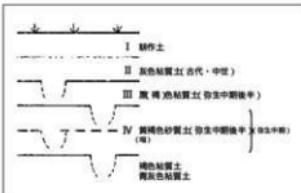
## 2. 遺跡の概要

平田遺跡は、新穂玉作遺跡の1つで、一部は県指定史跡となっている。過去に発掘調査は実施されていないが、玉作関係の資料が多く採集されている。特に鉄石英の採集が多い。今回発掘調査を実施したのは、指定地の西側にある。遺跡は数万m<sup>2</sup>にわたるため、今回の調査範囲が遺跡全体のどの部分に当たるかは明確でない。平田遺跡は、県史跡「新穂玉作遺跡」の中の1つで、昭和27年の指定である。発掘調査は行われていないが、玉作関係資料が多く表採できる範囲で指定されたものと考えられる。すぐ南には、弥生時代後期から古墳時代前期にわたる蔵王遺跡がある。今回の発掘調査と同時進行の形で、村教育委員会が発掘調査を実施している（第6図）。調査の結果、杉材の厚を円形に割り抜いた大きな礎版を持つ、1×1間の特殊な建物や2×2間の建物で、桁行が布振りで、細長い角材を柱の枕木としているものなどが検出され、その特異性が窺える。また遺物では、佐渡島内初出土の内行人文鏡や珠文鏡がある。遺構、遺物共にその特殊性が認められる、興味ある遺跡である。

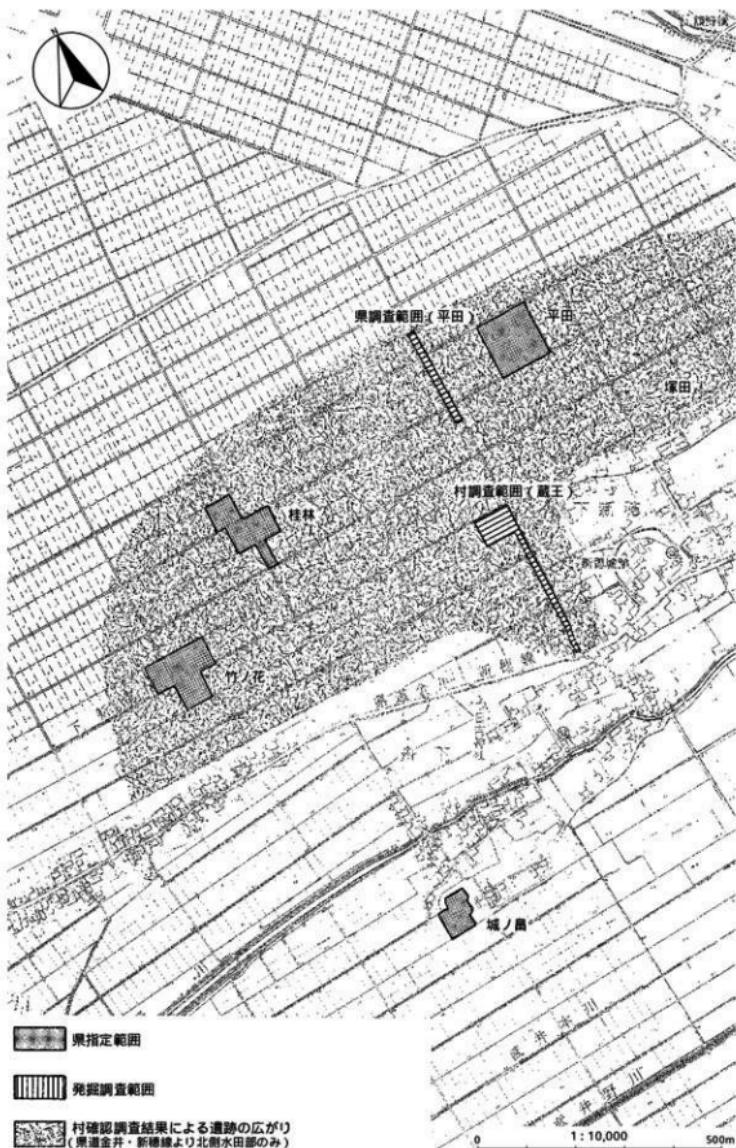
遺構としては3層にわたり確認された（図版1）。

### 上層

主に溝が主体である。溝方向は西北西—東南東が多い。これは自然河川および地形の方向と一致する。特にSD18、23は、幅が4m近くと規模が大きく、砂利等が含まれている事から水が流れていたものと考えられる。流れの方向は東から西に向かう。溝からは多くの木製品や土器が出土している。これより規



第5図 標準土層及び遺構確認面模式図



第6図 発掘調査位置図

模の小さい溝も見られる。特徴的なものとして、SD1、13、14、20といった方形に巡ると考えられる溝である。溝幅は4m近くあるが浅いものである。遺物はあまり多くないがそこそこ見られる。しかし、方形に区画された中には遺構等は確認されておらず、性格不明である。土器は弥生中期後半の櫛描文土器を中心として、後期後半の土器も一部にみられる。中期の土器の中には山草荷式土器も見られ、本土と同様な在り方を示している。玉作関係資料も多く見られた。

#### 中層

遺構としては円形で浅い土坑が多い。いずれも炭が底面に認められた。玉作関係ではSX116、117において、緑色凝灰岩、鉄石英、安山岩、メノウがまとまって出土した。意識的にまとめられておいた事は確実であるが、性格は不明である。

#### 下層

多くの遺構が確認された。住居跡は3軒。いずれも周溝、周堤をもった円形の平地式住居跡である。周溝からは、多くの遺物が出土している。SB114では、玉作りを行っていた可能性がある。SB114では、上屋部材の炭化材および床敷の炭化材が確認された。SD112の溝は、緩くカーブする幅2mくらいの溝である。自然地形方向とは逆方向の溝であり、平田遺跡の中心部（指定地）を巡るようなカーブを描く事から、集落を区画する環濠と判断される。砂利の多く入った河川跡では、板杭が多く出土した。河川内の水を分流するための施設と考えられる。

### 3. 遺構各説

#### A. 上層（図版2～13 写真図版（以下写真）132～135）

##### SD1（図版2 写真132）

III A・III B（以下 III AB）71～73区に位置する、長方形にめぐると考えられる溝である。遺跡の北端に位置している。溝の幅は一定していないが、約3～4.5mの浅い皿状を呈している。深さは、深いところで50～80cmを測る。覆土は、上層に黄褐色シルト層がある。この層は洪水堆積土と考えられ、遺物はほとんど認められない。この下に黒褐色土層がある。この層に中期及び後期の遺物が多く包含されている。遺物は細片が多いが一括土器もいくつか認められる。遺物は特に南西側の溝に集中しており、偏りが認められる。東側が明らかでないため断定的なことは言えないが、およそ長方形にめぐると考えられる。この溝により囲まれている部分は北西方向を示しており、東西の短辺はおよそ8m、南北の長辺は11m以上を測る。溝で囲まれた内側からの出土遺物はほとんどなく、遺構も認められない。

##### SD2（図版3 写真132）

III AB 71～72に位置し、南東方向から北西方向に直線的に延びる溝である。すぐ北側にSD1がある。幅は2m前後、深さ約1mを測る。断面形はV字状に近い。覆土は黒褐色の砂層一枚でやや大きめの砂利を含んでおり、洪水等で一気に埋没したと考えられる。溝の掘り込みは、SD1の覆土である黄褐色土、黒褐色土を切っており、SD1埋没後に掘られたことがわかる。遺物は下層から弥生後期の土器の出土がある。

**SD 3 (図版2)**

調査区の一番北側に位置する。落ち込みが一部確認されたのみで、どのような形になるか明らかでない。覆土堆積状況は、SD1と同じである。遺物は土器片が少数出土している。

**SD 4 (図版5 写真132)**

IIIAB68に位置する溝である。北東方向から南西方向に向かって直線的に延びる。幅約1.5m、深さ約20cmの浅い皿状を呈する。覆土は黒褐色土で、締まりは強い。炭化物を少し含む。土器片が少数出土している。

**SD 5 (図版6 写真132)**

IIIAB67に位置する溝でSD6と接続する。ほぼ南北に走る溝で、長さ約7m、幅1.8mを測る。深さは約30cmと浅く、皿状を呈する。SD6と同規模となる。覆土は黒色土である。土器が少数出土している。

**SD 21 (図版3 写真132・134)**

IIIAB71～72に位置し、南東方向から北西方向に直線的に延びる溝である。SD2と約1m離れ、ほぼ並行して走る。溝幅は約2m、深さ50cmを測る。溝の断面形はU字状を示している。覆土はSD2と同様黒褐色砂層であり、在り方からすると、SD2と同時存在した可能性が高い。覆土からの遺物の出土は少ないが、下層から土器片が比較的まとまって出土している。

**SD 22 (図版3 写真132)**

IIIAB71に位置し、ほぼ東西に走る溝である。溝幅は約1m、深さ約20cmの浅い皿状を呈する。覆土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物は、ほとんどない。SD21と途中で合流するが、切り合い関係からSD22のほうが古いことがわかる。

**SD 23 (図版3・4 写真134)**

IIIAB70に位置し、南東方向から北西方向に直線的に延びる溝である。大きな溝で幅約4.5m、深さ1.5～2mを測る。覆土の堆積状況は複雑で、長期にわたってこの溝が存在していたことが予想される。まず、最下層には礫層がある。その上層には、III層と考えられる黒褐色土の流れ込みがあり、その上に黄褐色シルトがある。このIII層及び黄褐色シルトの在り方は、SD1と同じである。また、このIII層を切るように砂利層が最後に堆積している。したがってこの溝はSD1より古く作られ、SD1より後まで存続したことがわかる。出土遺物も比較的多く、土器、木製品等がある。土器は中期から後期終末まで認められる。最上層の砂利層からは、終末期の高壙が出土している。

**SD 23' (図版4)**

IIIAB70西側セクションで確認されたが、平面では確認されなかった。したがって土坑か溝かの判断はつかない。幅約2m、深さ60cmを測り、断面皿状を呈する。SD23が切っており、SD23より早く埋没したことがわかる。覆土は黄褐色系のシルトで、IV層との区別が難しい。

**SD 25** (図版4・5 写真135)

IIIAB69に位置し、SD23の南側に並行するように直線的に走る溝である。溝幅約1m、深さ約60cmを測る。覆土は、上層に黒褐色及び暗灰黄色砂質シルトがあり、下層には砂屑が堆積する。この溝は、III層を切って作られており、弥生時代後期と考えられる。下層からは土器細片が多く出土している。

**SK 10** (図版6 写真133)

IIIA67に位置する溝である。北東方向から南西方向に延びるが、やや東西に向いている。東側では立ち上がりが認められるが、西側は調査区外に延びている。幅約1.2m、長さ5m以上となる。深さは、約20cmを測る。覆土は、上面が暗褐色シルト、下面が黒褐色粘質シルトであるが、覆土上面の土は造構確認面との区別が難しい。出土遺物は少なく、下面から土器片が少し出土したにすぎない。

**SD 6** (図版6 写真132)

IIIAB66、67に位置する溝である。北東方向から南西方向に向かって調査区外に延びる。SD7と交わっている。断面の観察からSD7のほうが新しいことがわかる。溝幅は約2m、深さ40cmくらいで、断面は浅い皿状を示している。覆土は灰色～黒褐色土で、砂、砂利等が見られないことから、通水していた溝などではなかったと考えられる。中からは土器片が多く出土している。

**SD 7** (図版6 写真132)

IIIAB66に位置する溝である。北西方向から南東方向に延びる溝である。溝幅は、SD6よりも小さく約1.7m、深さ約40cmである。断面は浅い皿状を呈する。覆土は上面に灰色の粘質土があり、その下に黒褐色土が認められ、SD6との埋没時期差を表している。遺物は比較的多く、玉作関係資料も見られる。

**SK 11** (図版6 写真133)

IIIAB66に位置する土坑で、SD6とSD7に挟まれた位置にある。長さ2.5m、幅1mの楕円形に近い土坑で、深さは20cmである。断面形は皿状を呈する。覆土は、上面に造構確認土と同じ色の黄褐色粘質土があり、その下に帶状に黒色粘質シルトがある。下部には、炭が多く検出された。遺物は少なく、壺口縁等がある。また、骨片等も認められた。

**SD 8** (図版7)

IIIAB64に位置する溝である。ほぼ東西に走るが東側でやや南に向く。溝幅約2.5m、深さ約20cmの浅い皿状を呈する。覆土は、黒または黒褐色粘質土で比較的多くの土器が出土している。

**SK 12** (図版7)

IIIAB64に位置する土坑で、SD8のすぐ北側に位置する。東西に長い楕円形を呈するが、不整形である。東西の長軸3m、南北の短軸1.5mで、断面は浅い皿状を呈する。覆土は黒色土で、土器片が少数出土している。

**SD 9 (図版7)**

IIIAB63に位置する溝で、東西に延びている。溝は東側で幅0.8mであるが、細くなって立ち上がる。西側は徐々に幅を増し、約2.0mとなる。深さ20cmで浅い皿状を呈している。覆土は黒色土で土器片が少數出土している。

**SD 13-1・2・3 (図版8 写真133)**

IIIAB61～63に位置する溝である。幅約2～3m、深さ40～50cmの浅い皿状を呈する。溝は、方形に開むように逆コの字に走る (SD13-1)。逆コの字の南北の長さは約11mである。覆土は黒色土である。南側ではSD16と重複し、北側では、逆に西方向に走る溝が認められる (SD13-3)。溝は13-1に比べて小さく、幅は西側で約2.3m、SD13-1につながる部分で約80cmである。SD13-2、3で開まれた部分もコの字となる。南北の長さは約14mである。方形に開まれた部分で造構等は確認されていないが、玉原石の鉄石英が数点認められた。溝の中からは比較的多くの遺物が出土している。

**SD 14 (図版10 写真133)**

IIIAB59、60に位置する方形に巡ると思われる溝である。幅は4m前後、深さ40cm前後で浅い皿状を呈する。覆土は、上面に暗褐色土、下面にⅢ層の黒色土がくる。溝で開まれた南北の長さは約7m、東西は10m以上となる。西側は溝が広く、幅はつかめていない。溝で開まれた部分は、やや北西方向を向く。内側には造構等確認されていない。溝からの遺物の出土はあまり多くない。

**SD 15 (図版9 写真133)**

IIIAB60、61に南北に走る溝である。SD14とSD16とを連結する。幅約1m、深さ40cmで浅い皿状を呈している。覆土はSD14と同じである。SD14とSD16との新旧関係は不明。SD13-2、SD15、SD14の北側で開まれた部分も方形に近いテラスとなるが、造構等は確認されていない。

**SD 16 (図版9)**

IIIAB61を東西に走る細い溝で緩いS字状を呈する。SD13の溝の中を走る。幅約80cm、深さ50cmで、覆土はSD13と同じである。

**SD 17 (図版10 写真133)**

IIIAB59に位置する細い溝である。SD14の南側溝の中に沿って走る。幅約1m、深さ60cmで、SD14の覆土下部に溝は認められる。SD14埋没後にSD17が形成されている事がわかる。覆土は細かい砂利層であり、水が流れている事を示す。

**SD 18 (図版11 写真133・134)**

IIIAB58区に位置する溝である。南東方向から北西方向に延びる。北側には並行してSD17が走っている。溝幅約4m、深さ1mの横広がりの溝である。最下層に灰色の砂層があり、その上に粘質シルト層、その上層に再び砂質シルト層が来る。Ⅲ層の黒色土も、中層でゆるやかに落ち込む。セクションの観察

から、溝はだんだんと細く、浅くなつていったことがわかる。このような埋没状況はSD23と共に通する。溝の中からは、農具をはじめとして多くの木製品が出土しているが、用途不明品が多い。

#### SD 19 (図版11 写真134)

IIIAB57、58にある細いY字状の溝である。SD23の南側を並行して走る溝は、幅約30cm、深さ8cmと細く、浅い。III層の黒色土が入る。南西方向に走るこの溝は、幅約40cm、深さ5cmの浅い皿状を呈する。覆土は、黄褐色の粗い砂質である。

#### SD 20 (図版12 写真134)

IIIAB55～57に位置する方形にめぐると考えられる溝である。SD1、SD14と同じあり方を示し、企画性が窺える。方向は約45°西に傾く。溝幅は3～4m、深さは30～40cmの浅い皿状を呈する。覆土はIII層の黒色土を中心としている。出土遺物は、土器を中心として多く出土している。溝に囲まれた方形部分は、南北9～10m、東西12m以上となる。遺構は確認されない。

#### SX 26 (図版5 写真135)

IIIAB68に位置する落ち込みである。SD4までの幅を持った溝であったが、ちょうどこの部分が東西に走る農道部分にあたっていたため、うまく確認できなかった。覆土はIII層の黒色土が落ち込んでおり、その上面に季大の裸が散乱していた。溝幅約7～8m、深さ約50cmを測る。土器が少し認められた。この真下から砂利河川跡、板杭が確認されていることから、板杭機能が消失、埋没後この部分に溝が存在していたと判断される。

#### SK 27 (図版7)

IIIA64、65に位置する不整形の土坑である。南北に走る農道部にあたっていたため、西側をうまく確認できなかった。底部の状況から、北東から南西方向に向く細長い土坑と考えられる。長さは約5mを測る。断面は浅く広い皿状で、中央部がやや深い。覆土はしまりのある黒色土で、部分的に黄褐色のブロックが入る。土器片が出土している。

#### SD 28 (図版13 写真135)

IIIAB55に位置する溝である。ほぼ東西に走る。幅約1.2m、深さ約20cmの皿状を呈する。覆土からは近世以降の陶磁器が出土しており、近世以降の溝であることがわかる。

#### SD 29 (図版13 写真135)

IIIA55に位置するL字状の溝である。南北方向の溝はSD28に切られており、北側でSD20と合流しているが、SD20との新旧関係は不明。幅は広いところで1.6m、狭いところで約1mである。覆土は、黒色土で硬く結まっている。出土遺物は少ない。

#### SD 30 (図版13 写真135)

IIIAB54、55に位置する細長い土坑で、北西方向を向いている。幅約2.6m、長さ8.4mで、底面は2

段のテラスとなっており、断面は浅い皿状を呈する。覆土は、硬く締まった黒色土で砂利を多く含んでいる。土器片が上面から出土している。

#### SD 32 (図版13)

IIIAB53、54に位置する溝である。東西に走るが、東側でクランク状に南側に曲がる。幅60～80cm、深さ約20cmである。覆土は暗灰色土である。出土遺物はほとんどない。

#### SD 34 (図版7 写真135)

IIIAB63に位置する細長い溝である。幅約50cm、長さ4.5mで南北に走る。断面形は箱型に近く、深さは約40cmである。覆土は暗褐色土で、砂質である。上面から土器が出土している。

#### SD 35 (図版7)

IIIAB63に位置する東西方向に延びる溝である。溝幅は西側で約3mであるが、東側で不整形に細くなり、消えている。覆土は砂または砂利で、III層を切っていることから、中世以降の溝と考えられる。深さは、10～20cmと浅い。出土遺物はない。

### B. 中層 (図版14～16 写真136～139)

#### SK 102 (図版14 写真136)

III B66tに位置する土坑である。円形で浅い皿状を呈する。直径約1m、深さ5cmである。覆土は上面にIV層の黄褐色土が入り、下面に炭が一面に認められる。遺構確認は、この炭が周囲に円形に認められたことによる。土器片が少し出土している。

#### SK 103 (図版14 写真136)

III A66l、gに位置する。SD7の下面にあり、SD7の覆土と間違え一部掘りすぎたため、全体の平面形をつかむことができなかった。確認範囲は長さ2m、幅1mで、やはり底面に炭屑が認められる。

#### SK 107 (図版1 写真136)

III A66uに位置する小土坑である。長さ約80cm、幅約60cmを測り、深さは約10cmである。埋土は、IV層に細かい砂利が入る。一括土器が認められる。

#### SK 108 (図版14 写真136)

III A67、68に位置する円形に近い土坑である。直径約2.5mで、調査区外に半分が隠れている。深さは約10cmで底面には一面に炭が堆積している。土器片が少量出土している。

#### SK 109 (図版14 写真136)

III A64hに位置する土坑である。東西1m、南北60cmの範囲で薄く炭が認められた。掘り込みはほとんど認められず、土器片が数点認められる。

**SX111-1・2 (図版15 写真138)**

IIIAB62に位置する。掘り込みは認められないが、炭の広がりが近接して2地点で認められた。西側(SX111-1)は、長さ1.2m、幅70cmの楕円形の範囲で炭が認められ、中に緑色凝灰岩、鉄石英、玉髓のチップが多く認められた。炭とともに廃棄した可能性がある。東側(SX111-2)は、長軸80cm、短軸60cmの範囲に炭が認められた。

**SX116-1・2 (図版16 写真137)**

玉作関係石材がまとまって出土した地点である。ピット等の掘り込みは認められない。集中箇所が2箇所認められる。SX116-1は、IIIA60hに位置する。メノウ原石の集中地点である。径約10cmの範囲に、22個の転石がまとまっていた。人為的に置かれたものと判断される。また、そこから約40cmほど北東位置のIIIA60c地点にあるSX116-2は、径約30cmの範囲に散在する。緑色凝灰岩が10点で、いずれも打削された第3工程段階のもので接合資料もある。これにメノウの剥片と石針材料である黒色緻密安山岩が各1点認められる。

**SX117 (図版16 写真137・138)**

IIIA60iに位置する。打削された玉原石がまとまって出土した。SX116から約1.5m東南東よりにある。明らかに人為的に置かれた様子が窺える。管玉の使用石材である緑色凝灰岩(19点)、鉄石英(5点)および石針石材である黒色緻密安山岩(5点)が認められる。いずれも第2・3工程のものである。およそ10cmの範囲で固まって出土したが、ピット等の造構は認められなかった。

**SX118・SX119 (図版15 写真139)**

IIIAB61に位置する。掘り込み等はないが炭の広がりが認められた。SX118は東西2m、南北1.5m、SX119は南北2m、東西1.5mである。土器片が少数認められる。

**SX120 (図版15 写真139)**

IIIB61eに位置する。東西60cm、南北30cmの範囲に白色粘土が認められた。人為的に持ち込まれたものであろう。

**SX125 (図版15 写真139)**

IIIA58wに位置する。炭及び礫の集中地点である。炭は約70cm×80cmの範囲に認められた。すぐ東隣に南北方向2条の礫群がある。2条とも約1mの長さで帶状に認められるが、配置したような並び方は認められない。礫は拳大の自然石で、焼けている痕跡は認められない。

**SX126 (図版1 写真139)**

IIIB58oに位置する、炭集中区である。径約80cmの範囲に認められたが、薄い堆積である。土器片が少し認められる。

**S X 32 (図版1)**

III B53、SD32下部で確認された土器の集中区である。遺構としての確認はできなかった。南北6m、東西3~4mの範囲である。

**C. 下層 (図版17~32 写真139~152)****SB 110 (図版25~27 写真139~141)**

III A61~63に位置する住居跡である。調査区では約3分の1が確認された。円形で周溝、周堤を持つ平地式の住居跡である。周堤外側での推定直径約9~10m、周溝外側での推定直径約16~17mとなる。周堤は、幅約80cm、高さ約20cmで、褐色土で黒褐色土が斑状に入る土を利用して作っている。周溝は、上面で幅2~3m、深さ40~50cmで、断面形は皿状を呈する。北側では上層のSD13と重複しており、上面にⅢ層の土が堆積し、その下にⅣ層の土が流れ込んでいる。下部には暗褐色土と炭屑が互層に入っている。住居と確認する前、全体を掘り下げていったところ、周堤上の高まりおよび周溝が確認された。また、内側では、炭化した木材と考えられる木が、放射状に検出された。木は、幅約10~20cm、長さ60cm前後で検出されたが、長さはもっと長かったものと考えられる。厚みはなかったため、板状であった可能性が高い。セクション図では、5層下面の炭層に当たる。住居の上屋構造の一部と考えられる。そこを掘り下げると、住居の床面が検出され炭化面が認められた。放射状に一面に敷かれており、幅20~30cmの単位が認められた。周溝に沿って、それを押さえるように棒状の木が認められた。編んだ痕跡などは認められなかったため、板材であった可能性が高い。柱穴は確認できなかった。住居および周溝からは、玉作資料をはじめ多くの遺物が出土している。

**SD 112 (図版24・25・28・29 写真142・143)**

III B60~III A65にかけて緩くカーブを描く溝である。幅2~2.5m、深さ1m前後の断面U字状の溝である。覆土は洪水堆積土と考えられる黄褐色土と砂利層である。SB114との切り合い関係は明確でないが、SD114が埋没後も存続していたこと、SB114を切っている可能性が高い事から、SD112のほうがSB114より新しいと判断される。また下層のSK147を切っている事等から、中層段階まで存続していた可能性が高い。この溝は、自然地形が南東から北西方向に向かって傾斜しているにもかかわらず、逆の北東から南西方向に走っていることから、自然流路ではなく、人工的に掘られた溝であることがわかる。ある時期の平田遺跡の中心地（指定地あたりか？）をめぐる環濠の可能性が高い。周溝内からは、土器をはじめ、多くの遺物が出土している。

**SD 113 (図版24 写真146)**

III B65に位置する溝である。南西方向に走るが一部を確認したに過ぎない。SD115との切り合いは明確でない。幅約2m、深さ約50cmで中央が溝状に深くなる。

**SB 114 (図版21・23 写真141・142)**

III A65、66に位置する平地式の円形住居である。まわりに周溝（SD114）を持つ。約2分の1が調査

区外である。住居の推定直径約8m、周溝外側の直径約12mと考えられる。周溝は南側でSD112と、西側でSB115の周溝と重複している。SB115との前後関係は不明。周溝は幅約2m、深さは南側で70cm、北側では50cmとなっており、断面形は逆台形に近い。調査では確認できなかったが、セクション図から周堤が存在した可能性が高い。およそ幅1m、高さ20cmと推定される。中央には、直径約40cm、深さ40cmの土坑があり、炭が流れ込んでいる。この土坑を中心として同心円状に溝が2条巡っている。内側の溝は幅約40cm、深さ20cmである。円周の直径は内側で約4mとなる。連続はせず途中で途切れ、また重複して土坑も見られる。この溝の外側にも細い溝があるが、北側でのみの確認である。幅約20cm、深さ10cmである。推定円周直径は4.6mである。ピットは8基ある。P1、2、5およびP6、13、7が同心円状に並ぶが、柱穴となるかどうかは明確でない。床面には炭が多く堆積している。玉作関係資料が多く、中央では砥石が出土している。

#### SB 115 (図版21・22 写真142)

IIIAB66、67に位置する円形の住居跡である。SB110、114と同様の形態である。全体の約2分の1を検出した。上面での推定直径11mであるが、正円を描かず不整形である。周溝(SD115)は南東側でSB114周溝と重複する。周溝の幅は北側で約3m、南側はSD113と重複するため、規模は不明であるが、深さは約60cmの皿状を呈する。周溝覆土は褐色の粘質土で炭片を含んでいる。周溝北東側では、やや高いテラス状となっている。やはり南側の断面観察から周堤が存在した可能性が高い。幅約90cm、高さ30cmと推定される。ピットは約20基確認されたが、企画性は認められず柱穴の配置は定かでない。しかし、P5では柱根が、P3では礎板が残存しており、建物の柱になると考えられる。北側床面では炭面が認められた。住居の中央西側のセクション部分では、土坑が認められる。幅1.4m、深さ50cmの椀状で、炭が多く入っている。

#### SK 121 (図版25・28 写真146)

IIIA63、64に位置する土坑である。南北2.2m、東西1mの楕円形を呈する。深さは約50cmで断面皿状を呈する。覆土は褐または褐色で縁まりは強い。出土遺物は少ない。

#### SK 122 (図版25・28 写真146・147)

IIIA63、64に位置する細長い土坑である。長さ3.8m、幅約1m、深さ20cmの浅い皿状を呈する。上面に薄く炭層が認められる。下面に褐色土が堆積する。

#### SK 123 (図版225・28 写真147)

IIIA64に位置する細長い土坑である。近接してSK122がある。長さ3.6m、幅0.6~1.2m、深さ20cmで南側が幅広となっている。上面に炭が認められ、SK122と同様の在り方を示す。

#### SK 124 (図版25・28 写真147)

IIIA63に位置する不整形の土坑である。中央に深い部分があり、南側及び東側に浅い土坑が連続する。中央の深い部分は、東西約1m、幅40cm、深さ約65cmで、下面には人頭大の礎が認められる。南側及び東側の浅い部分は、深さ約30cmである。上面で比較的多くの土器片が出土している。

**SK 127 (図版24・28 写真147)**

III A64に位置する細長い土坑である。SD112に近接して存在する。長さ1.7m、幅80cm、深さ30cmで、断面形は浅い皿状を呈する。覆土はほとんど黒褐色土で炭を多く混入する。土器片が比較的多く出土している。

**SK 128 (図版25・28 写真147)**

III A63に位置する土坑である。2つの土坑が連続していく、SK124に接している。東西2.4m、南北約1mを測る。深さは西側で25cm、東側はやや深くなっている。覆土は橙色で、下部に炭が混じる。比較的多くの土器が出土している。

**SK 130 (図版25・28 写真147)**

III A63に位置する円形に近い土坑である。SD110に近接する。上面からまとまって土器が出土している。直径約1m、深さ約50cmで、断面形は皿状を呈する。覆土は、上面に炭層が見られ、土器が集中している。また大きな礫も見られる。

**SK 131 (図版24・28 写真148)**

III A64に位置する土坑である。不整形で、南側が細く、北側では広がり、北東側で調査区外に延びる。溝幅は細いところで60cm、広いところで2mを測る。深さは20~40cmで、断面形は皿状を呈する。覆土は灰、明褐色で縦まりがある。出土遺物は比較的多い。

**SK 132 (図版25・28 写真148)**

III A63に位置する不整形の土坑である。SD110に近接して存在する。長軸1.8m、短軸1.4m、深さ30cmの浅い皿状を呈する。覆土は黒褐色の炭・灰層と、黄褐色土が互層となっており、底面には焼土が認められる。土器片も比較的多い。

**SK 134 (図版21 写真148)**

III A67、68に位置する不整形の土坑である。SB115の東側に位置する。ほぼ南北に細長い土坑で、長軸8.4m、短軸約1.5m、深さ約40cmである。断面形は浅い皿状を呈する。覆土は、底面に黒褐色土がレンズ状に入り、中央部及び上面には黄褐色土が入る。遺物は少ない。

**SK 135 (図版25 写真148)**

III A63に位置する不整形の土坑である。南北1.2m、東西60cmを測る。

**SK 139 (図版25・30 写真148)**

III B61、62に位置する円形の土坑である。直径約2mであるが、多少不整形である。深さ約40cmで皿状を呈する。覆土は褐灰色土で比較的多くの土器が出土している。

**SK 141 (図版29・30 写真149)**

ⅢB61に位置する小土坑である。SK139の南側に位置する。南北長軸1m、短軸50cmで、深さ20cmと浅い。断面形は皿状を呈する。覆土は黒色に近く、土器の大型破片が出土している。

**SK 142 (図版29 写真149)**

ⅢA61に位置する浅い土坑である。南北1.4m、東西60cmの楕円形を呈する。炭片が認められる。

**SK 143 (図版29・30 写真149)**

ⅢB61に位置する小土坑である。SK141の南側に位置する。長軸1.4m、短軸40～60cmの細長い不整形である。深さは20cmと浅く、皿状を呈する。出土遺物はない。

**SK 144 (図版29・30 写真149)**

ⅢA61に位置する不整形の土坑である。SK143の東側に位置する。円形に近いが、南側が突出する。突出部を除くと、東西1.5m、南北1.3mとなる。深さは約30cmの浅い皿状を呈する。覆土は下部に黒色土、炭が入り、底面に土器がまとまって出土した。

**SK 145 (図版25・30 写真149)**

ⅢA62に位置する土坑で、東側にはSB110がある。南北約60cm、東西約50cmの楕円形を呈する。平面プランは、土坑縁辺に炭が確認されたことにより認識された。断面皿状を呈する。上層には炭が皿状にあり、比較的多くの土器が炭に混じって出土している。

**SK 146 (図版25・30 写真150)**

ⅢA62に位置する土坑で、SK145に隣接する。SK145と同様、炭範囲の確認によって認識された。東西、南北ともに40cmくらいであるが、平面形は不整である。断面では深さ約30cmであるが、東側がそれより約10cm深くなっている。上面に、炭、灰が認められ、土器片も比較的多い。

**SK 147 (図版25・30 写真150)**

ⅢA63西壁で確認された土坑である。SD112がこの土坑を切っていることから、SD112のほうが新しいことがわかる。南北約2.4m、東西は不明であるが、方形プランになることが予想される。深さは北側で70cmを測る。上部にはSD112の埋土が見られる。その下部には褐色土が見られ、最下部に黒色粘質土が厚く堆積する。上面に土器片が見られる。

**SK 148 (図版25・28 写真150)**

ⅢA63に位置する土坑である。周囲には土坑群が密集する。南北1.6m、東西1.2mの縦長不整形で、断面形は、皿状を呈する。埋土は灰色でよく締まっている。中央に後世の搅乱砂が円柱状に見られる。土器片が比較的多く出土した。

**SK 151 (図版29・30 写真150)**

III A60、61に位置する土坑である。西隣にSK152がある。東西4m、南北2mの楕円形を呈する。深さは約30cm、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、締まりのある褐色である。土坑内からは多くの自然木、木製品、土器が出土している。

**SK 152 (図版29・30 写真150)**

III A60に位置する土坑で、西側でSD112と接しており、同時存在と考えられる。東西5m、南北約2.6mの楕円形を呈する。深さ約70cmで断面形はU字状を呈する。埋土は、褐色または灰色の粘性土で、木製品、土器等が多く出土している。SD112から流入した可能性がある。

**SK 153 (図版29・30 写真151)**

III A60に位置する土坑である。長軸約1.3m、短軸約1.2mの楕円形を呈する。主軸は北西方向を向く。深さは10cmと浅く、断面形は皿状となる。覆土は暗褐色土で、底面には一面に炭が認められる。土器数個体が出土している。

**SK 154 (図版29・30 写真図版151)**

III A60に位置する土坑である。東西2.2m、南北1.2mの隅丸長方形を呈する。深さは20cmと浅く、断面形は皿状となる。覆土は灰色土で底面に炭層が見られる。土器の出土は少ない。この土坑に切られるかたちで、細長い溝がある。幅は20~40cm、深さ約20cmのU字状をしている。

**SK 155 (図版29・30 写真151)**

III AB59に位置する細長い土坑である。東西約5m、南北約1mを測る。深さ約20cm、断面形は皿状となる。覆土は褐色で粘性が強く、下層にいくと黒色で、炭片が混じる。出土遺物は少ない。

**SK 156 (図版29・30 写真151)**

III B59に位置する土坑である。近接してSD112がある。長軸4.4m、短軸最大幅2mの洋梨型を呈する。深さは約30cmで、断面皿状を呈する。覆土は粘性のある灰色土で、炭片が混じる。覆土上面より多くの土器が出土している。

**SK 157 (図版29・30 写真152)**

III A59の東壁に位置する土坑または溝である。2本が並行して走る。壁までの長さは約1.2mで、東の調査区域外に延びている。幅は北側の溝で約1m、深さ80cm、南側の溝で幅約70cm、深さ50cmである。覆土は中層で炭層が認められ、その下部が黒褐色土となっている。少数の土器が出土している。

**SK 158 (図版29・30 写真152)**

SK157のすぐ南隣に位置する。覆土の状況はSK157と全く同じであり、同じ使われ方をしていたことがわかる。東壁面での幅は約2m、深さは北側で50cmであるが、南側にいくにしたがって浅くなる。西

側では二股に分かれる。

#### S D 159 (図版29)

III A59、60に位置する、南北に延びる細い溝である。SK154との切り合いは、断面図からSD159のほうが古いことがわかる。長さは南北8.5mで、北端で東側に約1m直角に曲がる。幅は20~30cmで、北側の東西部分は幅約40cmである。深さは約10cmである。

#### S X 160 (図版29)

III A59pに位置する。土器及び炭面が認められたが、掘り込み等は明確でない。

#### S K 161 (図版31)

III A58vに位置する土坑である。長さ2m、幅約60cmを測る。下面から土器が少し出土している。

#### S K 162 (図版25・28 写真152)

III A63に位置する土坑である。近接してSK148がある。調査区東側の壁面で確認されたため、全体の規模、形状は明らかでない。南北約1m、東西約60cmを測る。深さは確認面で約50cm、断面形はU字状を呈する。下面に灰色の粘質土が堆積する。遺物の出土は少ない。

#### S K 163 (図版32 写真152)

III B56に位置する。掘り込みは見られないが、炭の広がりにより確認された。2地点に分かれており、北側は南北80cm、東西60cmの広さに、炭、焼土が見られた。約1m南側に径約1.4mの範囲で、炭、焼土の広がりが認められ、緑色凝灰岩、鉄石英等の玉作関連石材のチップが多く散乱していた。

#### S X 164 (図版32 写真152)

III A55、56に位置する不整形の落ち込みである。南東に向かって浅く落ち込んでゆく。東側壁面で幅約4.6mを測る。覆土は、灰色粘質土が堆積している。覆土からは多くの土器大型破片が出土している。廃棄された状態が窺われるが、造構の全体が分からぬいため、その性格は不明である。

#### S K 165 (図版30・31 写真152)

III A56に位置する土坑である。近接してSK166がある。東壁に接し平面形は不明である。壁面で南北0.6m、東西は0.5mで、深さは約20cmである。覆土は、炭を多く含んだ黒色土である。

#### S K 166 (図版30・31 写真152)

SK165の北隣に位置する。やはり東壁に接して約半分が確認された。平面形は円に近いと推定される。壁面で南北1.6m、東西70cmを測る。覆土は、下面で炭層が互層となっている。

#### S X 167 (図版31)

III A57に位置する不整形の落ち込みである。SK165、167を囲むように浅い溝がまわるが、SX167は

その北側にあり、SX164とは約7m離れている。覆土はやはり黒色土である。SX164と同様に多くの土器が出土した。

#### SD 168、P 169～173（図版24）

III A65に位置する溝及びビットである。溝（SD168）は、SD112に沿って南北に延びる。長さ6m、幅約30cm、深さ10mと浅い。重複して約1～1.2m間隔で小ビットが並ぶ。また、約1m離れて、溝に並行して小ビット（P170～173）が並ぶ。間隔は、北から1.4、0.6、1.1mである。

#### 河川跡板杭列（図版17～20 写真144～146）

III AB69、70に確認された河川跡及び板杭、杭列である。上層SX26の下部で確認された。川幅は東側で16m、西側で約23mを測る。下部はほとんど砂利層である。板杭列は、この砂利層に埋没するように確認された。下層遺構存在時にはこの板杭も存在していたと考えられる。

#### 板杭列1（図版17・18・20 写真144～146）

一番規模の大きいものである。ほぼ東西に並んで検出された。長さは約7mに渡っているが、西側は調査区外に続いている。板杭は二重に打たれている。背面の状況から見ると、この板杭列1は、西側から構築していくことがわかる。西側は長さ50cm、直径5～10cmくらいの杭が何重にも密に打ち込まれ、それを裏から横添え木で支えている。使われている木は、自然木のままのものとまわりを切り角材状にしたものがある。また板材も認められる。そこから東側は、幅約10～50cm、長さ約100～170cm、厚さ5cm前後の杉材の板杭を二重に打ち込んでいる。裏側には横木とそれを支える支柱がある。粘土層への打ち込みは流路側で約40cm、背面で約70cmである。この粘土層は、水の流れた面（板杭の南側）では低く、背面（北側）では高くなっている。支柱は自然木の又部分を利用している。いずれも杉材と考えられる。この板材の中には穿孔のあるものもあり、建築部材等を二次利用した可能性がある。

#### 板杭列2（図版17・18・20 写真145）

板杭列1の東端で約60°の角度で交わる。水を分流するためと考えられる。長さ約3mが残存していた。使われている木は、板杭列1と同じであるが、細い杭も見られ、並びはやや雜である。

#### 板杭列3～5（図版17・19・20）

いずれも細い木を杭として打ち込んだものである。板杭列3は一番北東側に位置する。細杭2本が確認されたのみである。板杭列4は板杭列3と東西に並ぶ位置にあり、約2m離れている。板材列4は約1.3mの間に7～10本の細杭が十数cm間隔で打たれている。板杭列3と同規模の木を利用している事から、東西に連続していた可能性がある。板杭列1とは約6m離れ、並行して設置されている事から、同時に機能していた可能性が高い。板杭列5は、板杭列1の北約3mの位置にある。方位に対し約45°の角度で設置されており、板杭列1とは並行しない。約2.5mの範囲に15本の細角杭が、十数cm間隔で打たれている。

#### 板杭列6（図版17）

板杭列2と並んでいる。約2mほど離れている。数枚の板であるが、板杭列2と連続していた可能性がある。

#### 板杭列7（図版17 写真146）

一番北東よりで確認された。4枚の板材と4本の杭である。南北方向に並ぶ。

## 板杭列 8 (図版17 写真145)

板杭列2に直交するように5~6枚が検出されたが、実測前に崩落してしまった。

以上の板杭列、杭列は一定の方向性がなく、作り替え等が行われた結果と考えられる。

## D. まとめ

今回調査した地点は、県史跡範囲からは離れていたものの、多くの造構が確認された。上層については、住居等が確認されず溝がほとんどであったことから、集落居住地とはやや離れた地点であったと考えられる。直線的に延びる溝のうち、砂や砂利の入っている溝は弥生後期後半のもので、水田用水路であった可能性がある。方向は自然地形に合っており、南東方向から北西方向に向かい、国府川に合流していたと考えられる。

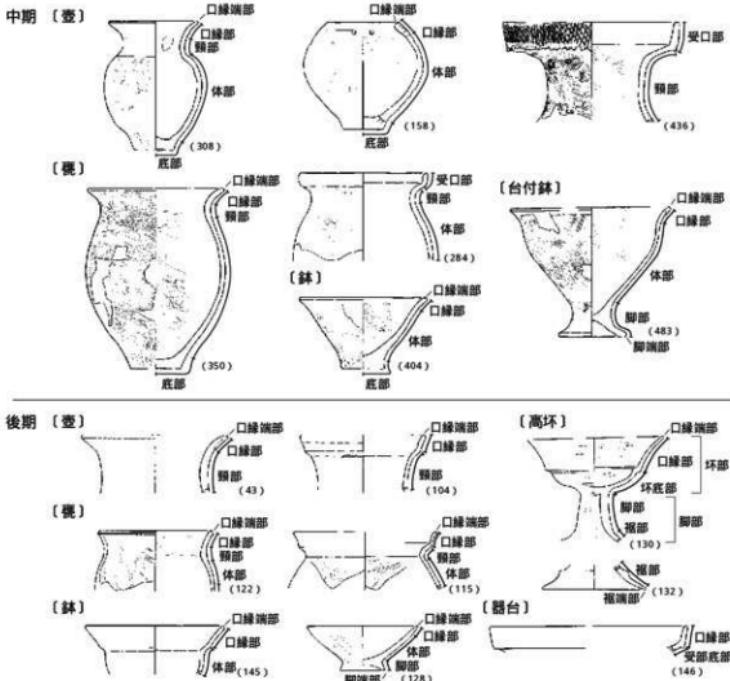
下層は中期後半の集落である。平野部の集落として環濠が確認された事は意義が大きい。県内でも初めての確認である。環濠の取り巻く範囲は不明であるが、方向から考えると、県指定地を取り巻いている可能性がある。また、現在県指定地となっている各地点（桂林、竹の花、城ノ富）も、環濠で囲まれていると考えられる。弥生中期の平野部における住居跡の確認は、県内では柏崎市下谷地遺跡に次ぐものであるがいくつかの違いを指摘できる。下谷地遺跡では、周溝は円として連続せず、途中、途中で切れているが、ここで確認された周溝は一周している。時期的には下谷地遺跡が一時期古い事は明らかであり、時間的な変化と考えられる。周堤は、下谷地遺跡では認められなかったものである。北陸地方では、富山県下老子笠川遺跡（弥生時代終末期）（岡本 1997）で周堤をもつ住居跡が確認されている。周溝の上を周堤として盛り上げるが形態が一般的であったと考えられる。したがって、下谷地等の住居にも周堤は存在したものと考えられる。SB110では、炭屑が2枚確認された。上面で確認されたのは、屋根構造を示しているものと考えられる。住居の中心に向かう放射状の配置は、屋根が円形であった事を示すものである。下層は床構造である。周堤に添って内側に丸木がめぐり、そこから中心に向かって、薄い板状のものが敷かれている。材質が何であったのかは、残念ながら分からなかったが、住居形態を知る上で重要である。

弥生時代の板杭列の確認も県内初である。本格的な土木工事による水田開発の一端を示すものであり、水路制御を行いながら、水の管理を行っていたと予想される。この国仲平野では、過去にも金井町千種遺跡で同形態の板杭が出土しており、弥生時代から古墳時代にかけての水田跡や板杭を使った水路等が、埋没しているものと考えられる。

# 第V章 遺物

## 1. 土器

中層、下層からは弥生時代中期後半という限られた時期のものが出土している。上層からは弥生時代中期後半、後期後半のほか、古代から近世の土器、陶磁器<sup>1)</sup>も出土しているが、少量であるため図化は行わない。遺構出土遺物については残存度の高いものを中心に図化したが、遺物量が膨大なため、特徴のあるものや出土例の少ないものを抽出するようにした。口縁部文様はバラエティーに富んでいるため、残りの良いものに加えてほぼ全ての文様パターンを図化した（第10図参照）。逆に底部は、当該期では器種が異なるものでも同様の成形技法をとるため、底部片から器種を判断することは非常に困難であり、図化したものは少ない。部位名称は以下の通りである。



第7図 土器の部位名称

( ) は造物 No.

1) 具体的には、須恵器壺、甕、珠洲焼甕・擂鉢、青磁甕、唐津焼、瀬戸焼などがある。

### A. 器種分類 (第8・9図)

当遺跡出土土器は弥生時代中期後半のもの、中でも在地（北陸）系の土器が圧倒的多数を占める<sup>1)</sup>。したがって、器形分類は中期の在地系土器のみを行い、その他は大別器種分類にとどめた。分類の基準として、文様は多種多彩にわたるため対象とせず、主に形態を重視して行った。当該期に見られる器種としては壺形土器（以下壺）、壺形土器（以下壺）、鉢形土器（以下鉢）があり、壺と鉢には台付のものも見られる。分類は、各器種ごとの大別を A、B、C…、細別を 1、2、3…と表した。

#### 壺形土器

A類…外反口縁を持ち、短頸で卵胴形を呈するもの。

A1類…頸部が締まるもの。

A2類…広口で頸部があまり締まらないもの。

A3類…広口で頸部が締まるもの。口縁部は水平近くまで外反する。

B類…外反口縁で、頸部がやや筒形状を呈するもの。A類同様に卵胴を呈する。

B1類…口縁部の外反度が強いもの。頸部に貼付凸帯を有するものが多い。

B2類…口縁部の外反度が弱いもの。直口するものも含まれる。

C類…外反口縁を持ち、長頸となるもの。

C1類…頸部が筒形状にのび、球胴を呈するもの。

C2類…頸部は裾広がりとなり、長胴のもの。

D類…いわゆる細頸長頸壺。個体差があるが、数が少ないため大別のみにとどめた。

D1類…単純口縁のもの。

D2類…内縫口縁のもの。

E類…外反口縁を有し、器形不明のもの。口縁部の外反度によって 2 類に細分した。

E1類…口縁部の外反度が大きく、カーブを描きながら聞くもの。

E2類…口縁部の外反度がそれほど大きくななく、直線的に聞くもの。

F類…受口状口縁を呈するもの。

F1類…受口部に稜を持ち、有段となるもの。

F2類…受口部に明瞭な稜を持たず、緩い受口状を呈するもの。

G類…口縁端部が上方または下方に伸びるもの。外見は受口状口縁とほぼ同様であるが、つくりが異なる。

G1類…貼付により下方に伸びるもの。内面には稜を持たず、内縫状となる。

G2類…貼付により下方に伸びるもの。内面は外反口縁と同様である。1点のみ。

G3類…上方に伸びるもの。

H類…口縁部が内縫し、くの字状を呈するもの。体部は直線的に聞く。1点のみ。

I類…口縁部、頸部、体部の境が明確に区別でき、体部が大きく張り出するもの。1点のみ。

J類…無頸壺。

J1類…底部が口径に対して小さく、器形が横長のもの。

1) 北陸地方の土器については、第20図参照。

J2類…底部が小さく、球形のもの。

### 壺形土器

A類…外反口縁を持つもので、口径が最大径となるもの。

A1類…体部が張らず、そのまま底部まで収束する器形のもの。口縁部の外反度が弱いものが多い。

A2類…体部がやや膨らみをもつもの。口縁部の外反度が強いものが多い。

A3類…口縁部が水平近くまで外反し、口縁内面に面を持つもの。

A4類…頸部のヨコナデが強く、体部との境界に段をもつもの。

B類…口径と体部径がほぼ同じで、最大径となるもの。体部最大径は体部中位より若干上にくるものが多い。

B1類…口縁部の外反度が弱いもの。

B2類…口縁部の外反度が強いもの。

B3類…口縁部が水平近くまで外反し、口縁内面に面を持つもの。

B4類…頸部のヨコナデが強く、体部との境界に段をもつもの。

C類…体部径が最大径となるもの。

C1類…口縁部の外反度が弱いもの。

C2類…口縁部の外反度が強いもの。

D類…頸部が筒形状になるもの。最大径は体部径にくるものが多い。

E類…口縁部がやや内脣するもの。2点のみ。

F類…口縁がくの字状に外反するもの。数が少ないため細分は行わない。

G類…受口状口縁となるもの。

G1類…受口部に稜をもつもの。ヨコハケで受口部外面を調整しているものもある。

G2類…1類と同様に受口部に稜を有するが、頸部がほとんどしまらないもの。

G3類…受口部が丸みを持つもの。受口部をヨコナデによって作り出しているものもある。

H類…口径に対して器高が小さく、(1 : 1以下)鉢形のような器形をとるもの。

### 鉢形土器

A類…口縁部が外反し、体部は膨らみをほとんど持たずに収束するもの。

A1類…口縁から底部まで直線的に収束するもの。

A2類…口縁部のみ大きく開き、頸部に若干括れを持つもの。

A2類…A類の器形で台付きのもの。

B類…口縁部が内脣するもの。体部は丸みを持つ。

B1類…口縁部の内脣が弱いもの。器高に対して口径が大きくなると思われる。

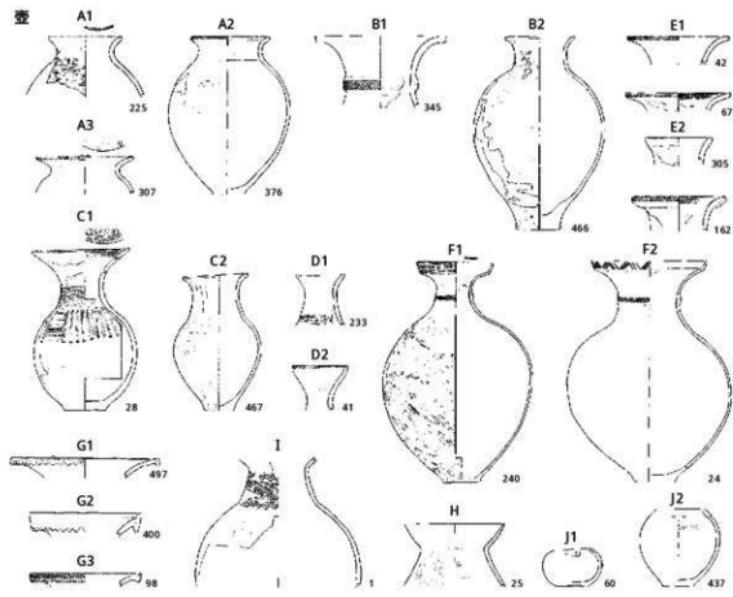
B2類…口縁部が内脣するもの。B1類に比べ、器高に対する口径比は小さい。

B3類…B類の器形で台付きのもの。

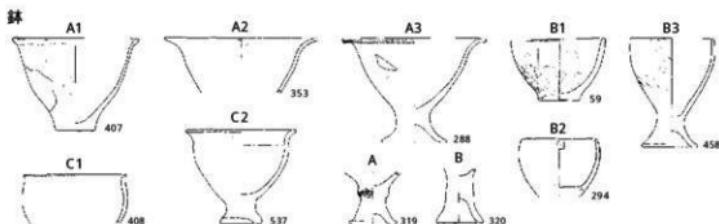
C類…口縁部は外反し頸部に括れを持つ。体部に丸みを持つ。

C1類…台がつかないもの。

C2類…台付のもの。



第8図 壺・甌の分類



第9図 鉢の分類

### B. 施文工具と文様について（第10図 写真版186参照）

平田遺跡では、先述したように様々な系統の土器が見られるため、文様・工具も多種に及ぶ。そこで文様を模式化し一覧として表し、合わせて文様の呼称を定義しておきたい。これはあくまでも当遺跡出土土器の呼称であり、他遺跡での呼称とは必ずしも一致しないことを予めご了承いただきたい。

文様は柳描文系・沈線文系の2つに大別できる。大きさは柳描文系=在地系（北陸系）、沈線文系=東北系に分けられるが、中部高地では壺=沈線文系、甕=柳描文系と器種によって使い分けがなされている。したがって工具の違いによる系統分別は困難であり、文様パターンや胎土など他の要素から推定することとなる。以下、個々について説明する。

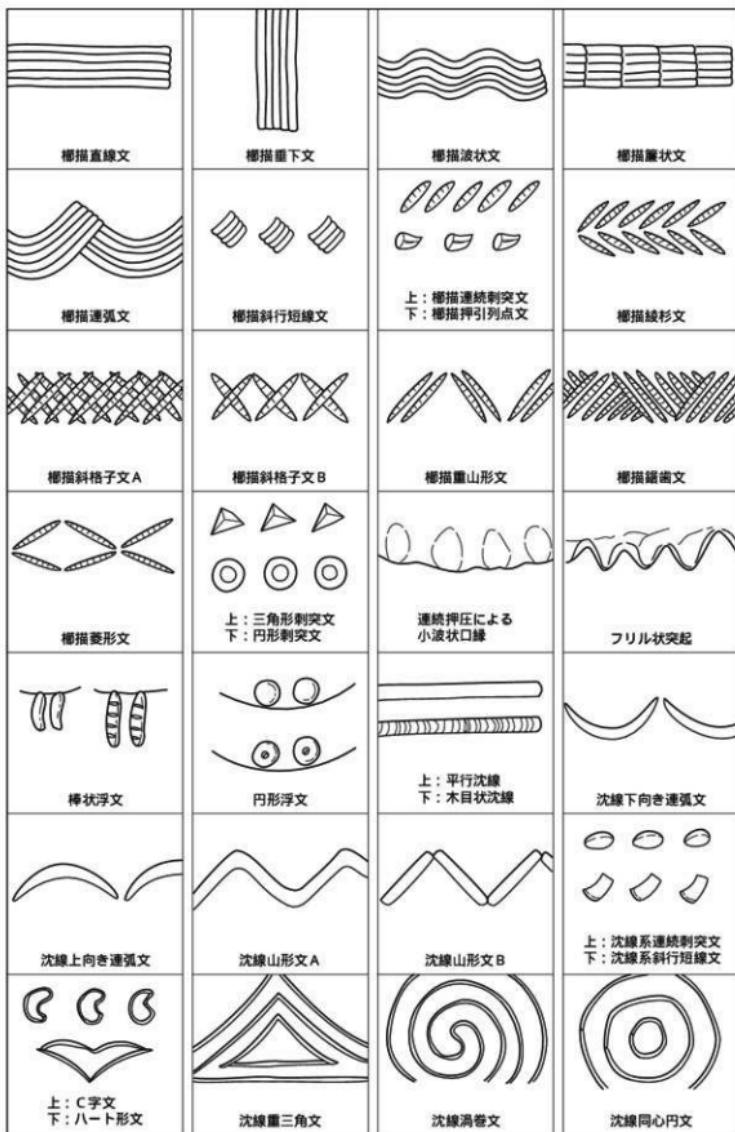
#### 柳 描 文 系

柳描文の施文工具については「木片等の小片の先端を細く削ったもの」と「柔軟ならざる程度の植物の枝茎を束ねたもの」（小林 1930）とがあり、その後氏は前者を柳Ⅰ種、後者を柳Ⅱ種と呼び分け、さらにⅡ種を細分した（小林 1964）。それは「A. 先端が2つに分かれたものをいくつか束ねたもの」「B. 先端が丸い棒状のものを束ねたとみられるもの」「C. 管状のものを束ねたもの」の3つであり、これらを組み合わせて表現している（ex.「柳Ⅱ種A」など）。近年、長野県松原遺跡で出土した柳描文土器の施文具について徳永哲秀氏が論考しており（徳永 1996）、氏は上記の柳Ⅱ種にあたるもの結束の度合いについて注目している。間隔を持つ沈線には、緩やかに結束させた工具や、結束させた工具を1本ずらして条線間に開くように施文されているものがあるとし、これを「簾状工具」と定義した。また中部高地系の土器には、柳Ⅰ種はおよそ用いられていないという。小林氏の分類は「簾状工具」のようなものは含まれていないと考えられる。当遺跡出土土器ではⅠ種、Ⅱ種とも見られ、さらに「簾状工具」施文と思われるものも見られる。以下の記述では柳Ⅱ種に「簾状工具」も含めて考えることとし、基本的には小林氏の分類にしたがって記述していく。

・柳描直線文…横方向に長く引いたもの。途切れずに全周するものもこう呼ぶが、数は少ないと思われる。工具幅（以下、この用語は器面に残っている幅のことを指し、実際の工具幅とは異なることを予め断っておきたい）は5～10mmのものがほとんどである。頸部・体部に施文され、在地系・中部高地系の2系統に見られる（ex. 図版61～435）。

・柳描垂下文…柳描直線文が縱方向に引かれたもの。工具幅は直線文と変わらない。在地系では口縁内面から頸部に見られ、中部高地系では体部上位に見られる（ex. 図版68～500、図版45～216）。

- ・櫛描波状文…工具を器面から離さずに、連続して上下（左右）に動かすことによってできる文様。文様幅は直線文と同じである。縦、横両方向のものが見られる。在地系、中部高地系に見られ、頸部から体部に施文されるものが多い。在地系では口縁内面に施文される例もある（ex. 図版37-87、図版45-216）。
- ・櫛描簾状文…器面を軽く押さえ、少し横方向に引いてまた押さえる、という動作を繰り返すことによってできる文様。1単位の長さは5~10mmのものが多くみられるが、中には2cm程のものもあることから、2cm程度までの単位を持つものを簾状文としたい。工具幅は直線文と同じである。在地系では頸部から体部上位、中部高地系では頸部のみに見られる（ex. 図版37-82）。
- ・櫛描連弧文…1単位の長さが2~3cm程度の円弧を連ねて描いたもの。下向きである。工具幅は1cm前後である。在地系の体部に見られる（ex. 図版36-61）。
- ・櫛描斜行短線文…斜め方向に短く引いて止めたもの。工具幅・単位幅とも4~5mmで、正方形を呈するものが多い。在地系の口縁内面・体部上位に見られる（ex. 図版48-265）。
- ・櫛描連続刺突文…縦、斜方向に工具を押し付けるもの。（刺突文の場合は工具を押し付ける角度が様々であり、文様の幅が工具の幅を直接表すとは限らない。よって刺突文の場合は、文様の幅を刺突痕の幅と呼ぶことにする。）刺突痕の幅は5mm前後のものが多い。在地系の口縁内面・端部・端部下・外面と中部高地系の口縁端部に多く見られる（ex. 図版62-439・444）。
- ・櫛描押引列点文…沈線文系に見られる押引列点文と同じ形状であるが、櫛歯状あるいは簾状の工具を使用しているので、敢えて区別した。工具幅は2~3mm、1単位の長さは4~5mmである。折衷型？の頸部に平行沈線と共に施文される例がある（ex. 図版37-84）。
- ・櫛描綾杉文…連続刺突文を数段、方向を変えて施文することにより綾杉状を呈するもの。単位を持って方向転換したり、菱形文を挟む場合もある。連続刺突文2段分で綾杉文1段としたため、連続刺突文3段分といった綾杉文として半端なものは1.5段等と呼称した。刺突痕の幅は1cm程度のものが多い。在地系の口縁内面・外面に多く見られる（ex. 図版60-426）。
- ・櫛描斜格子文…逆方向の連続刺突文を重ねることにより斜格子状を呈するもの。刺突の角度がきつく重なり合うものをA、X字状に重なるものをBとした。刺突痕の幅はAが1~3cm、Bが6mm程度のものが多い。Aは在地系の受口状口縁外側・頸部に多く見られるほか、口縁端部・内面にも見られる。Bは口縁端部・内面に見られる（ex. A…図版46-239、B…図版45-236）。
- ・櫛描重山形文…刺突を交互逆方向に施文することにより山形状を呈するもの。刺突を1つずつ交互に施文するものを山形文、2つ以上のものを重山形文と呼ぶ。刺突痕の幅は2~3cmである。在地系の口縁外側に見られる。北陸での類例はほとんどないようである（ex. 図版34-24）。
- ・櫛描鋸歯文…刺突痕の幅は1.5cmまたは3cm程度のものがある。在地系の口縁外側・頸部に見られる（ex. 図版43-189）。
- ・櫛描菱形文…刺突痕の幅は1cm前後である。在地系の口縁内面に見られるが、数は少ない。綾杉文の単位文様として施文されることが多い（図版67-481）。
- ・三角形刺突文…断面が三角形状の棒状工具による刺突。工具の最大幅は5mm前後である。在地系の口縁内面に見られる（ex. 図版47-256）。
- ・円形刺突文…筒形状で中空の材による刺突。竹管など植物の茎を使用しているものと思われる。工具幅は3~5mm程度である。在地系の口縁内面に多く見られるが、稀に頸部・体部上位にも施文される（ex. 図版34-28）。



第10図 土器文様呼称と表現方法

・連続押圧による小波状口縁…口縁内面に間隔をあけて連続押圧することにより、正面から見ると波状を呈するもの。稀に内外面をつまみ波状にするものもある。押圧の幅は7mm程度のものが多い。在地系の口縁内面に見られる (ex. 図版 59 - 414)。

・フリル状突起…口縁外面下部に貼付を施した後刺突・押圧を加え、つまみ出すことにより三角錐状の突起となるもの。突起1つの大きさは幅12mm、高さ5mm程度のものが多い。口縁、特に受口状口縁の外面に多く見られる (ex. 図版 58 - 400)。

### 沈線文系

沈線文系の施工工具としては大別して2つに分けられる。1つは、断面に角ができるような鋭い工具と、浅く幅広で断面が丸みを持つ工具である。ここでは前者を鎌状工具、後者を棒状工具と呼称する。主に前者は東北系土器、後者は中部高地系土器に多く見られるが、当遺跡では模倣品と考えられるものが多く、東北系の文様パターンでも棒状工具で施したもののが認められるため、系統による工具の違いは明確でない。よって施工工具については個々の説明で行うこととした。

・平行沈線…横方向に長く引いたもの。工具幅は1mm未満／1.5mm程／3mm程の3タイプが認められる。在地系の頸部・東北系の頸部・口縁内面・中部高地系の頸部・体部に見られる (ex. 図版 35 - 36)。

・木目状沈線…ハケ状工具を器面に垂直な状態で、横方向に連続して押し付けることで、平行沈線を作り出すもの。文様幅 (この場合工具の厚さとなる) は3～4mmである。在地系の頸部・脚部に見られる (ex. 図版 72 - 543)。

・沈線下向き連弧文…1単位5～15cm程度と幅がある。工具幅は平行沈線と同じである。連弧文が2段以上のものは重連弧文と呼ぶ。東北系の口縁～体部・中部高地系の体部に見られる (ex. 図版 35 - 33)。

・沈線上向き連弧文…当遺跡では1点しか認められない。1単位23mm、工具幅は3mmである。折衷型の口縁外に見られる (ex. 図版 37 - 85)。

・沈線山形文A…連続して山を描くもの。1単位15～25mm、工具幅3mm程度である。東北系・中部高地系の頸部に見られる (ex. 図版 36 - 58)。

・沈線山形文B…1単位を2回に分けて書き、連続して山を描かないもの。1単位2～6cm程と幅がある。工具幅1.5mm程／3mm程の2タイプがある。東北系・中部高地系の頸部・体部に見られる (ex. 図版 72 - 548)。

・沈線系連続刺突文…棒状工具などを連続して押し付けるもの。所謂「押引列点文」もこれに含めた。文様幅は3mm程度である。在地系の口縁内面・頸部に、わずかだが認められる (ex. 図版 36 - 52)。

・沈線系斜行短線文…鎌状工具を斜め方向に短く引いて止めたもの。工具幅2mm、単位幅4mm程度である。在地系の口縁内面に見られる (ex. 図版 51 - 307)。

・沈線重三角文…三角形を入れ子状に重ねて描いたもの。渦巻文と渦巻文の間を充填する文様として用いられる。工具幅は1mm未満である。東北系の体部に見られる (ex. 図版 73 - 573)。

・沈線渦巻文…工具幅は1mm程度である。東北系の体部上位に見られ、渦巻文は6～8単位程度で体部を一周する (ex. 図版 45 - 222)。

・沈線同心円文…当遺跡では1点しか見られない。工具幅は1mm程、1単位の径は12cm前後である。東北系の体部上位に見られる (ex. 図版 35 - 34)。

## その他の

- ・棒状浮文…棒状の細長い粘土紐を貼付したもの。東北系、在地系の口縁外面の端部近くに貼付される。東北系では幅4~6mm、長さ1cm程度であるが、在地系では幅5mm程、長さ2cm程度のもので、浮文上に横方向の刺突が入る場合が多い（ex. 図版35-33、46-239）。
- ・円形浮文…円形の貼付のこと。浮文上に刺突文を施す場合もあり、3タイプが見られる。①浮文のみ。丸く盛り上がる。②浮文上に棒状工具で刺突するもの。③浮文上に円形刺突文を施すもの。径6mm前後のものが多い。在地系の口縁内面に多く見られ、稀に体部にも見られる（ex. ①…図版52-315、②…図版57-379、③…図版56-365）。

## C. 土器各説

ここでは、上層から遺構、時期、器種、系統ごとに項目を設け説明を行うが、掲載点数の少ない遺構については、特に系統の項目を設けていない。ここで言う「～系」とは、あくまでも元々の系譜がその地域にあると考えられるものを指し、個体によってはかなり変容していると思われるものもあることを最初に断っておきたい。ただし、在地化して比較的どの遺跡でも見られるような個体については系統別を行わない。東北地方については、大きくは東北系で一括したが、の中でも宇津ノ台式系と呼ばれるような土器も見られる。このような土器は秋田県宇津ノ台遺跡の他ではあまり顕著ではなく、また資料不足のため、系譜や分布域については不明である。そのため、それらの土器については宇津ノ台式系と呼ぶこととし、東北系の中の1分類として取り扱う。

後期の土器については、ほとんど後期後半のものと考えられるが、の中でも時期が判断され得るものには事実記載の項目で記述を行った。

### 器面調整について

当遺跡出土土器に見られる器面調整としてはハケ調整、ナデ調整、ミガキ調整があり、それぞれ「ハケ」、「ナデ」、「ミガキ」など調整を省略して呼称する。

- ・ハケ調整については方向を示し「タテハケ」「ヨコハケ」等と表した。
- ・ナデ調整は、回転の力をを利用して施されたと思われるものを「ヨコナデ」とし、そうでないものについては「横方向ナデ」と表した。「ナデ上げ」は間隔を持って縱方向ナデが行われるものこう呼び、全面に縱方向のナデが施されているものについては「縱方向ナデ」とした。
- ・ミガキ調整については大部分がヘラミガキと思われるが、はっきりと単位の分からぬものが多く、両方向の矢印によって方向を示した。
- ・ケズリ調整については砂粒の動いた方向を簡略的に図化し、方向を示した。工具の単位が分かるものは破線で表した。

### (1) 上層

#### SD1 (図版33-1~8 写真図版 (以下写真) 153)

中期では壺・甕、後期では甕・脚部が少量出土している。

**壺 中期 (1) I類** 頸部が長く体部は球形に張り出すと思われる。口縁・頸部・体部がはつきりと分かれる。このような作り方は東北系の土器に見られるものである（ex. 第21図57）。頸部には太目の櫛歯

状工具（工具幅9mm）で波状文、簾状文（第10図で説明）を交互に施文している。（2）は筒状を呈し、頸下部に簾状工具で簾状文、波状文を交互に描く。第20図4のような器形になるか。文様施文には幾種類かの工具を使用していると推測される。

**壺 後期** （4）貼付口縁を持つ。器厚は11mmと厚手である。

**甕 後期** （5）有段口縁部に擬凹線があり、口縁端部に面を持つ。（6）はくの字状口縁だが、体部内面にケズリが施される。ケズリ調整は当遺跡では稀にしか見られない。どちらも、法仏式に比定されると思われる。

**高坏 後期** （7）有段で、坏下部は直線的である。長岡市横山遺跡（駒形他 1992）に類例があり、月影式期と考えられる。

#### SD2（図版33-9～18 写真153）

中期は微量、後期は壺・甕・高坏・蓋が見られる。

**壺 後期** （9）有段口縁壺である。体部は球形に張り出すと思われる。内面の有段部は僅かだが面を有する。

**甕 後期** （10）外面は明確な稜を持つが、頸部はほとんど括れない。（11・12）は付加状口縁甕である。（13）口縁が大きく外反し口縁内面に平坦な面を持つ。

**高坏 後期** （15）は口縁部が大きく外反するが、全体の器形は不明である。（16）は有段の脚部で、段部分には擬凹線が入るものである。（17）はハの字状に開く。端部はきれいに面取りがなされる。

**蓋 後期** （18）円形のつまみを持つ。

全体として、おおよそ法仏式併行と考えられる。

#### SD5（図版34-19・20 写真153）

中期、後期とも見られるが微量である。

**壺 中期** （19）E1類。口縁内面は簾状工具による沈線斜格子文Aを施した後、上下を平行沈線（上1条、下2条）で区画している。

**甕 後期** （20）体部のみで、口縁形態は不明である。体部内面はケズリ調整である。頸部は貼付により肥厚し、接合痕がはっきり見て取れる。

#### SD6（図版34-21～25 写真153・154）

中期壺・甕、後期壺・甕が出土している。

**壺 中期** （24）F2類。口縁部は緩く内轉し体部が球形になる。口縁外面には柳描重山形文Bが施文され、同一工具により、頸部の貼付凸帯上に柳描斜格子文Aをめぐらせる。（25）H類である。口縁が内轉し、体部が直線的に張り出す。当該期では他に類例を見ない器形である。

**甕 中期** （23）B1類。小型の甕である。口縁端部近くで折れ曲がるように外反する。器高に比して底径が大きく、ずん胴である。

**甕 後期** （22）体部があまり張らない器形は柏崎市戸口遺跡A地区（品田 1990）に類例がある。法仏式併行と考えられる。

## SD 7 (図版34-26・27 写真153)

中期壺・甕がわずかに出土している。

壺 (26) E1類。口縁部が大きく開いて内面に面を持ち、綾杉文が施文される。器厚は11mmと厚手である。

甕 (27) A2類。頸部内面に稜を有する。

## SD 8 (図版34-28~35-37 写真153~155)

中期は壺・甕が確認できる。東北系の土器も出土している。後期はごく微量である。

壺 中期 (28) C1類である。SK12から出土した破片が接合している。口縁部がラッパ状に開き、頸部は細くやや長い。文様構成が口縁部・頸部・体部とはっきり区別できる。円形刺突文が多用され、口縁部内面、頸部、体部に使用される。特に体部では、筒状の材を3本束ねた簾状工具で垂下文を描くが、その間を縱方向の円形刺突文で充填する。この垂下文は、突いてから上へ引いたものと考えられる。体部文様は同一文様が一周するのではなく、半分ほどが垂下文+円形刺突文、4分の1ほどは垂下文・直線文が両方見られ、直線文部分は真ん中に簾状文が入る。簾状文施文は左回りである。残りの4分の1は垂下文が無く、縱方向の円形刺突文のみである。頸部には木目状沈線が4本入る。木目状沈線は遠賀川式土器にも施される文様だが、北陸ではIV様式段階にも存在する(久田1993)(ex. 第20図7)。円形刺突文の施文具は竹管と考えられる。このような文様構成は、他地域では見られない。(29) F2類。ヨコナデによつて受口状口縁を作り出す。焼成前穿孔と思われる孔が1つある。

甕 中期 (30) A2類。口縁部が大きく外反し、内面には綾杉文が密に施文される。(37) 頸部片である。条数は不明であるが、櫛描直線文と波状文が施文される。

甕 後期 (32) くの字状口縁甕。口縁端部は円錐状を呈する。

東北系 壺 (33) 内側する口縁には、幅2mmほどの棒状工具により1本描きで下向き重連弧文が施文され、文様の間には棒状浮文が2個ずつ貼り付けられる。頸部は貼付凸带を持つ。凸帶の中間にナデを施すことにより、2段貼付のように見せている。肩部には重連弧文が三重以上に重ねて施文される。(34) も同様だが、体部最大径付近に簾状工具による沈線同心円文を配し、それらを下向き連弧文で繋いでいる。(35) も同一系統と思われるが、類例が現在のところ見当たらない。主となる口縁のほかに、4つほど注口がつくものと推測される。注口付近では、1つの破片には下向き重連弧文が施文されるが、同一個体と思われる2つの破片には垂下文や上向き連弧文など異なる文様が描かれる。

中部高地系 壺 (36) 頸部片と思われる。太い棒状工具による平行沈線が入る。

## SK 11 (図版35-38~40 写真154)

中期壺・甕が微量出土している。

壺 (38) F1類。当遺跡出土のF類壺の中では、この1点のみが際立って小さい。(40) は中部高地系壺の頸部と考えられる。沈線山形文Aと平行沈線が施文される。

## SD 13 (図版35-41~36-53 写真154・155)

出土量は上層遺構の中では多いほうである。中期が圧倒的に多く、後期は少量である。中期では壺・

甕・鉢・脚部、後期は壺・甕が見られる。

**壺 中期** (41) D2類。口縁部が内凹し、細頸・長頸である。(52) 頸部と思われる。縱方向に連続刺突文が7段施される。

**壺 後期** (43) 長頸壺になると思われる。貼付<sup>1)</sup> 口縁を持つ。

**甕 中期** A1類 (44) と B1類 (45・46) が見られる。掲載図は3点とも無文であるが、口縁部に文様があるものも存在し、無文甕：文様甕の比率は約1：1である。(53) G3類。北陸系と中部高地系の折衷型と考えられる。受口部と外面の沈線山形文は中部高地系の要素、端部の連続刺突文と体部の器形は北陸の要素である。ただし、受口部の作り方は、中部高地系の技法ではないようである。

**甕 後期** (47) くの字状口縁。口縁部の外反は強くない。口縁端部を上下につまみ出している。法仏式併行と考えられる。

**東北系 壺** (52) 内凹口縁に沈線連弧文を施し、文様間に棒状浮文を貼り付ける。連弧文は1本描きである。描き継いだ痕跡が見られ、文様も滑らかな弧を描いておらず、崩れた感じである。

**折衷 甕** (53) 口縁部形態と文様は中部高地系、その他は在地系と考えられる。ただし、受口状口縁の成形はヨコナデによって作り出す中部高地系の技法によるものではないと思われる。

#### SD 14 (図版36-54~57 写真155)

出土遺物は中期のみで、少量である。壺と甕が見られる。

**壺** (54) 口縁内面に櫛描波状文が施されるが、類例は少ない。(55) 体部片と思われる。棒状工具3本結束で(櫛Ⅱ種)、施文していると考えられる。(57) 細頸長頸の壺である。体部も長胴形を呈する。

**甕** (56) 口縁内面に円形刺突文を挟んで、箆状工具による沈線絞杉文が施文される。

#### SD 15 (図版36-58・59 写真155)

出土遺物は中期のみで、少量である。壺と甕が見られる。

**壺** (58) 中部高地系壺の体部上位と思われる。平行沈線の間に山形文が施文される。

**鉢** (59) B1類。口縁端部はきれいに面取りが行われる。器厚9mmと厚手である。

#### SD 16 (図版36-60~62 写真155・156)

出土遺物は中期のみで、少量である。壺と甕が確認できる。

**壺** (60) J1類。無頸壺の完形品である。底径が大きく横長の器形である。(61) 体部片である。櫛描連弧文が2段以上施文される。

#### SD 17 (図版36-63 写真156)

出土遺物は後期のものが多く、中期は微量である。中期甕・後期壺・甕・高杯が確認できる。

**壺 後期** (63) 有段口縁の広口壺である。口縁部外面は上位までヨコナデされるため、若干の凹凸ができる。山形状の沈線文様が見られる。口縁有段部の中位はややくぼみを持つ。新津市八幡山遺跡(金子)

1) 「貼付」という語句について このように口縁部を肥厚させる手段として、折り返すものと貼り付けするものの2種類が考えられる。この個体については折り返してではなく貼り付けであるが、断面観察の困難な個体もあり、両者の使い分けが難しいと判断したため、本稿では「貼付」に統一して述べることにする。

1999)、上越市裏山遺跡(滝沢2000)に類例が見られる。法仏式古段階に比定されると思われる。

#### SD 18 (図版36-64~37-85 写真156)

中期壺・甕・鉢・脚部、後期甕が確認できる。出土量は中期のものが大多数を占め、後期の遺物はごく少量であり、図化は行わなかった。在地系の他、中部高地系や東北系の土器も見られる。

壺 A2類 (64・65)、E1類 (67)、E2類 (66)、F1類 (68)、F2類 (69) がある。65は口縁部に貼付を持つが、その面に縦に2回ずつ刺突し、縦長の櫛描連續刺突文を作り出している。67は口縁端部は沈線により上下に分かれ、下部に櫛描連續刺突文が施される。口縁は大きく外反し内面には櫛描綾杉文が2段施されるが、下段は一部綾杉文様ではなく同一方向の刺突となっており、崩れた印象を受ける。68は受口部外面に櫛描綾杉文1段と、同一方向の連続刺突文が用いられる。70は壺体部片と思われる。簾状文と波状文が左回りに施される。

甕 (71) B1類。口縁部の外反度が場所によってかなり異なる。外面にはスヌが全面に付着している。体部内面には粉殻圧痕が見られる。(72) H類である。スヌ等の付着は見られず、鉢として使用された可能性も考えられる。(75) 体部片である。櫛描波状文が3段かそれ以上施される。

鉢 (73) B2類。非常に薄手だが貼付がなされる。櫛描綾杉文が鋭く施文される。(74) B1類である。

中部高地系 壺 (76) 体部で沈線重山形文Bの一部が見られる。

#### 東北系

壺 (77) 体部最大径付近の破片と思われる。上部には籠状工具による沈線渦巻文、下部にはLR単節縄文が施される。

甕 (79) 頸部から体部にかけての部分と思われる。頸部と体部との境界が明瞭で、頸部は無文、体部には平行沈線と山形文Aが施文される。直線文は2本描きである。全面にスヌが厚く付着している。(80) 体部片である。2本描きの重菱形文が施文される。スヌ等の付着は全く見られない。

器種不明 (78) 体部片である。外面はミガキ調整である。籠状工具によるC字文が重ねて施文されているものと考えられる。

#### その他

壺 (81) A2類とした。頸部外面には平行沈線と波状文が見られ、口縁内面には櫛描重菱形文が施文されている。口縁の残存率が低いため、この文様が全周するかどうかは不明であるが、綾杉文で、単位を持って方向転換する際の文様と同様であり、綾杉文が施文されていた可能性も考えられる。(82) は体部片である。垂下文の下に直線文、簾状文が左回りに施文される。工具は櫛II種によるものである。垂下文は直線文の後に施文されている。下部は縄文？が施されるが地文のハケ調整が良く残っている。

甕 (85) は櫛II種工具による上向き連弧文が受口部に施文される。口縁端部にはLR単節縄文が施され、器形と端部施文から見ると中部高地系であるが、上向き連弧文と受口部の作り方は当該地域には見られない要素であり、折衷したものと考えられる。(84) 頸部から体部にかけての部分と思われる。頸部には1本描きによる平行沈線と連続刺突文が施される。

#### SD 19 (図版37-86 写真156)

出土遺物は中期のみで、ごく微量である。

甕 (86) 口縁部はこの1点のみ。中部高地系の内輪口縁甕である。丁寧にナデ調整された後、太い棒状

工具により波状文が描かれる。

#### SD 20 (図版37-87~91 写真156)

出土遺物は中期のみである。壺・甕・脚部が見られる。

壺 (87) C1類。文様の多い土器は数少ないが、これはその中でも特徴ある1点である。頭部から体部上位まで文様が施されるが、簾状文、波状文、連弧文の3種を使用し、縱横両方向の施文を行っている。類例としては金沢市松寺遺跡出土土器（第20図2）がある。

甕 (90) A2類。口縁端部下にはきちんと成形しきっていないところがあり、接合痕が見られる。

脚部 (91) B類。ゆがみが著しい。

#### SD 21 (図版38-92~94 写真156)

中期壺・甕、後期壺・甕・鉢・高杯が確認できるが、中期は小片のみであり圓化は行わなかった。

壺 (92) 縫い有段口縁を持ち、長頸になると思われる。

甕 (93) 付加状口縁を有する。(94) くの字状口縁。内面ヨコナデにより端部が若干上方にのびる。接合痕が内外面とも残っている。

いずれも法仏式に比定されると考えられる。

#### SD 23 (図版38-95~39-134 写真156·157)

上層の遺構中、出土量が最も多い。中期壺・甕・鉢・後期壺・甕・高杯が存在する。

口縁部のみで比率を出すと中期55%、後期45%と他の遺構に比較して後期の割合が高い。特に1層からの出土が多い。

壺 中期 B2類 (95)、E1類 (97)、E2類 (96)、G3類 (98) が見られる。98は口縁内面をヨコナデによって上方に伸ばし、浅い受口状に作る。外面には櫛描斜格子文A、下端には連続刺突文を施している。金沢市西念・南新保遺跡に類例がある（第20図12）。

壺 後期 (103) 有段口縁を持つ。内面口縁部と頭部の境は特にヨコナデが強く、稜が2本入る。(104) 有段部に擬凹線らしき凹凸が確認できる。長頸壺になると思われる。口縁部と頭部の境に鎧状工具による沈線の刺突文様が見られる。いずれも法仏式併行と考えられる。

甕 中期 A2類 (105·106)、C1類 (107) がある。105は頭部厚が11mmと厚手である。106は内面には稜線が入る。ハケ調整は筋の細かい工具で行われている。体部内面はハケ調整の後一部ナデ上げが施される。108は口縁端部は連続刺突文を施した後、沈線を引く。内面の斜行短線文は摩滅しているが、櫛II種工具によるものと推察される。

甕 後期 (109·110) は外面に擬凹線が施される。109は頭部内面にはっきりと稜が入るが、110は稜を持たない。(111~115) は有段無文である。擬凹線甕同様、頭部に稜の入るものと入らないものがある。112は内面にケズリ調整が見られる。114は貼付によって外面を有段口縁に見せている。頭下部と体部との境に稜を持ち、体部にはケズリ調整を行う。(121) くの字状口縁。体部内面にケズリ調整が行われるが器厚は薄くない。(122) は岡上では判り難いが口縁内面に幅3mmの面を持つ。端部には沈線が引かれる。(123) は逆のくの字口縁で、この1点のみである。頭部と体部との間には接合痕が明瞭に残り、成形時の粘土の離ぎ足し方が見て取れる。口縁部は大きく外反し内面に面を持つ。(124) は体部片

である。肩部に櫛描連続刺突文が見られる。114を除く109～118はおおむね法仏式と考えられる。114は月影式期まで下るかもしれない。

**鉢 中期** (127) 口縁部は貼付されるが、下端はきれいに整形されておらず、幅が一定しない。

**鉢 後期** (128) 有台の浅鉢である。体部と脚部との接合部分にはしほるようなケズリ調整が行われる。(126) も同様の器形であろうか。内面にはミガキ調整が見られる。

**高环** (130) 环底部に丸みを持つ器形である。裾部はそれほど広がらないと推測される。卷町大沢遺跡B'地区(前山田 1994)に類例がある。器形から月影式期に比定される。(131)は小型高环で、130同様に月影式期に特徴的なものである。(132) 有段であり、西山町内越遺跡(横山田 1983)に類例がある。法仏式に比定される。

**蓋 後期** (125) 西念・南新保遺跡(楠 1996)に類例がある。法仏式新段階に比定できると思われる。

#### そ の 他

**壺 中期** (133) F1類。受口部外面の山形文というモチーフは中部高地系であるが、器形、工具とも北陸系のものである。折衷したものと思われる。

**壺 中期** (134) 84と同様のものである。連続刺突文は2条の櫛歯状工具を使用し、1段ずつ施したと考えられる。

#### S D 25 (図版39-135-136 写真157)

中期壺・甕、後期甕が見られるがいずれも小片であり、全体量も少ない。

**甕 中期** (135) A1類。口縁内面に連続刺突文が施されるが、摩耗が著しくはつきりしない。

**甕 後期** (136) 口縁外面に擬凹線が入る。口縁は断面三角形状を呈し、法仏式併行と考えられる。

#### S X 26 (図版39-137~40-148 写真158)

中期壺・甕・鉢、後期壺・甕・器台・脚部が確認できる。中期と後期の比率は約6:4である。

**甕 中期** (137) D類である。口径に対して器高が低く、すん胴である。頭部はやや筒形状を呈し、口縁内面には2個2段の円形浮文が対になって貼付される。浮文の中央を細い棒状工具で刺突し、ドーナツ状としている。(139) H類である。全面にススが付着している。

**甕 後期** (142) は口縁外面に2本稜線があり、当遺跡では数少ない例である。金沢市西念・南新保遺跡(楠 前掲)に類例がある。法仏式新段階に比定できると思われる。

**鉢 後期** (145) 有段鉢。法仏式新～月影式古段階に比定されると思われる。

**高环 後期** (147) 环部のみである。器面は摩耗が著しいが、内外面にわずかにミガキ調整が見られる。

**器台 後期** (146) これ1点のみの出土である。受部が有段でほぼ直立する。ただし、口縁部の残存率がかなり低いため、口径は若干前後する可能性がある。器形から月影式期のものと考えられる。

**その他** (148) 中部高地系壺の頭部と思われる。平行沈線が5条引かれる。

#### S D 29 (図版40-149 写真158)

出土遺物は中期のみで、微量である。

**甕** (149) A2類。口縁部はこれ1点のみである。口縁部が若干肥厚する。端部は面取りされる。

## SD 30 (図版 40-150 写真 158)

出土遺物は中期のみで、少ない。甕のみ確認できる。

甕 (150) 口縁内面に円形刺突文が4段施文される。刺突文の幅は3mmで、細い筒状工具を使用している。施文間隔は一定でなく、崩れた感じがする。

## 包 含 層 (図版 40-151~156 写真 158)

壺 中期 (151) F1類。受口部外面に斜格子文A、下端に連続刺突文を施文する。刺突は深く鋭い。

壺 後期 (152) 細頸長頸壺である。有肩部に擬四線が入る。頸部内面に簾状工具で刺突したような痕跡がある。

甕 中期 (153) A2類。口縁外表面はヨコナデの強さが一定しないため、単位間は平行沈線が1条引かれているように見える。ハケも縱横に入り、入り始めを曲線状に描くなど、珍しい要素が見られる。(154) B2類。胎土は緻密で硬い。口縁内面の斜行短線文は3段であるが、4段になるところが2箇所見られる。中部高地系 甕 (155) 頸部から体部にかけての部分と思われる。櫛描簾状文の下に波状文、わずかだが垂下文が確認できる。文様構成は中部高地系であるが、波状文などを施文している工具は北陸系のそれと同じである。

その他 (156) 施文工具は櫛術状工具を2本結束させたものではないかと推測する。縱行短線文、直線文、斜行短線文、波状文を左回りで施文する。このような文様構成は類例がない。斜行短線文の部分は一見繩文にも見え、繩文を意識して施文したものとも考えられる<sup>1)</sup>。

## (2) 中 層

## SX 32 (図版 41-157~42-170 写真 159-160)

出土遺物は中期のみである。壺・甕・鉢が見られる。

壺 (157) A2類。口縁部を貼付し端部に櫛描斜格子文Aを施す。刺突は鋭い。頸部上位には平行沈線が2条、棒状工具で引かれるがごく浅く、消えている箇所もある。体部内面にはハケ調整の後ナデ上げが見られる。(158) J2類である。口縁貼付部分が非常に薄い。体部は表面がほとんど剥落しており、実測図は原形よりも若干小さくなっていると考えられる。(159) J2類。口縁の貼付部分は5mmと厚く、ぼってりとした感じである。貼付上の櫛描連續刺突文は幅広で鋭い。内面はハケの後ナデ上げが施されるが、接合痕が明瞭に残っている。(160) J類。口縁貼付部分に小さな斜行短線文状の文様が施文される。孔は貼付部分上に開けられるが、このような位置に開けるものは、当遺跡では少ない。

甕 A2類 (161~164)、B1類 (170)、B2類 (165~166)、C1類 (167~169)、D類 (168) がある。162~165は口縁端部が面取りされる。166の内面はハケ調整の後、体部中位を中心に縱方向ナデが施される。167は口縁部のタテハケはヨコナデによりほとんど消されている。底部付近に2つ孔がある。1つは未貫通、1つは貫通しており、焼成後穿孔の可能性が高い。168はヨコナデにより頸部がやや筒形状になる (D類)。170はB1類とした。口縁はごく短い。

1) 長野県埋蔵文化財センター 賀田明氏のご教示による。

## SK 103 (図版42-171・172 写真160)

出土遺物は中期のみで、微量である。壺・甕が見られる。

壺 (171) J類。口縁部に貼付しないタイプである。

甕 (172) A2類。

## SK 105 (図版42-174・175 写真160)

出土遺物は中期のみで微量である。甕のみ確認できる。

甕 (174) B1類。頸部までヨコナデが広くわれ、やや筒形状を呈するが、体部の張りがないためそのまま緩やかに底部へ収束する。(175) A2類。位置によって口縁の形態が異なる。一方は端部の幅がなく、もう一方はしっかり面取りされ、端部直下がヨコナデによって凹む形となっている。ハケは粗い目の原体(幅11mm、条の太さ2mm)を使用している。

## SK 107 (図版42-173 写真160)

出土遺物は中期のみで、微量である。甕のみ確認できる。

甕 (173) 数少ないE類の1つである。器形はゆがみが著しい。体部上位のヨコハケは一直線状に連なっており、その部分だけ器壁に凹みが出来ている。

## SX 111 (図版43-176~179 写真160)

出土遺物は中期のみで、微量である。壺・甕・脚部がある。

壺 (176) J類。外面に稜線が2本、口縁からほぼ等間隔で入る。このような形態は珍しい。

甕 (177) A2類。内面はハケ調整だけで整形される。口縁端部は面取りされる。(178) A2類。ハケが明瞭に残っている。口縁端部には棒状工具による連続刺突文があり、外面には連続押圧の痕跡が残る。

脚部 (179) B類。貼付凸帯に柳描斜格子文Aが施されるが、一方の刺突が細く小さいため、連続刺突文のように見える。环部の立ち上がりは急であり、鉢B類のような器形になると予想される。

## SX 117 (図版43-180・181 写真160)

出土遺物は中期のみで、微量である。甕・鉢が確認できる。

甕 (180) 口縁内面の連続刺突文は深くはつきりしている。先端が丸い柳歯状工具を使用する。

鉢 (181) A2類である。SD112 (288) のように脚部がつく可能性もある。

## (3) 下層

## SB 110 (図版43-182~45-223 写真161・162)

出土遺物は多量で、口縁部片による個体数では最多である。壺・甕・鉢がそれぞれ見られるが、形になるものはそれほど多くない。在地系が圧倒的多数を占めるが、東北系、中部高地系もわずかに出土している。器種判断できたものは約6割で、そのうち壺37%、甕57%、鉢6%である。

壺 A2類 (183)、D1類 (185)、E1類 (184・186・187)、E2類 (182)、J1類 (188) が見られる。

182の口縁部の貼付は4mmと厚い。口縁端部は沈線を引いた後、その上下に連続刺突文を施文しており、

刺突を沈線が切るという通常のパターンとは異なる。口縁内面は櫛描綾杉文が施文されるが無文部分も見られ、文様は単位施文または部分施文と考えられる。185は中部高地系の器形であるが、在地・北陸地方にもわずかながら確認できる。頭部に一部ミガキ調整が見られる。188は偏平な形の無頸壺である。口縁部の残存度が低いので不明だが2孔1対の孔が存在した可能性がある。(189)は筒形の頭部を持つ。貼付凸帯の上には櫛描鋸歯文が施文される。内面の垂下文は6単位で入ると考えられ、施文工具は櫛II種と推測する。

**甕** A1類(190・191)、A2類(192~195)、A3類(196・197)、D類(198)、G1類(200・201)、H類(199)がある。191は台付甕であるが、当遺跡ではこれ1点のみである。口径に対し器高が低い。195は貼付口縁を持つ。一部に原体の異なるハケ状のものが見られる。196・197は口縁内面を持つ(A3類)。この場合、内面に文様が施されるのが一般的であるが、196には入らない。198の口縁部は端部に沈線を引き下部または上下に連続刺突文が施される。1箇所だけ横方向の刺突が見られる。口縁・頭部と体部のハケ状工具は異なるものを使っている。199は推定器高9.5cmである。口縁内面文様は櫛歯状工具によるものと思われるが、筋が明瞭でなく鎧状工具による沈線文様にも見える。200は受口部にヨコハケ、頭部にタテハケという調整である。近江の湖西系に類例が求められる(第21図参照)が、穂線が不明瞭でハケ状工具も全く異なる。201の受口部は刺突文様があるが、文様パターンは不明である。鋸歯文が削れたものであろうか。(212)口縁内面に櫛描斜格子文Aを施文した後、上下を平行沈線(各2条)で区画する。

**鉢**(206) A1類。手づくねのためかゆがみが大きい。接合痕も明瞭に残る。(207) A2類。脚部が付く可能性がある。ハケ調整1単位の長さが短い。(208) B3類。器面の摩耗が著しく、器厚4mmと薄い。この器形は類例に乏しい。現在のところ石川県久江ツカノコシ遺跡<sup>1)</sup>で確認できる程度である。(209) B1類。口縁端部は直立気味となり、体部も直線的に収束するものと思われる。

**脚部**(210) A類。裾広がりとなる。厚手で端部も丸みを持ち、ぼってりとした感じである。(211)有段となるものはこれ1点のみである。木葉痕が見られる。

**蓋**(218) 体部には円形刺突文が縱に2列、4単位で施文される。文様はきちんと施文されず崩れた感じを受ける。(219) 2孔ずつ、3単位で施される。そのうち1単位は2つとも貫通しているが、他の単位では1孔が貫通、1孔が未貫通となっている。

#### 中部高地系

**壺**(214) 頭部。上部はLR単節繩文、下部に櫛II種工具で引いたと考えられる平行沈線4条が見られる。上下間は太い沈線で区切られる。

**甕**(215) の受口部外面は地文繩文(LR単節)の上に沈線重山形文Bが施文され、上方の連結部に円形浮文が貼り付けられる。ヨコナデによって受口を作り出している。(216)は体部片である。櫛描波状文を垂下文で切っている。内外面ともミガキ調整が施される。

#### 東 北 系

**壺**(221・222・223)は体部上位に施文される渦巻文の一部である。223はミガキ調整が見られるが、他は摩耗が著しく不明である。胎土は細粒(特に長石)を多く含み、礫の多い在地の土とは異なる。

**不明**(220) 頭部片と思われる。沈線による平行沈線、重山形文Bもしくは重菱形文が施文されている。

1) 石川県埋蔵文化財センター 久田正弘氏のご教示による(未報告資料)。西念・南新保遺跡で器形が類似している土器(第20図29)が1点あるが、後期前半に比定されている(袖1996)。

地文はハケ調整である。

### その他

(213) 内唇口縁に櫛描重山形文Bが施される。器形と文様パターンの流れは中部高地系、工具は北陸系と考えられ、両者の折衷型と考えられる。(217) 壺の頸部もしくは体部片か。櫛描簾状文が重ねて施文される。

### SD 110 (図版45-224~228 写真162)

出土遺物は少量である。小片が多く器種が特定できないものが多い。壺・甕のみ確認できる。

壺 E1類 (224~226) が見られる。225の口縁端部は面取りされ、下端に鏡状工具による沈線連続刺突文が入る。226は口縁内面に櫛描斜格子文Aが施文される。このように沈線が入らない個体は、北陸地方でも見られるパターンである。(227) 体部片と思われる。円形刺突文が横方向に施文される。

甕 (228) B1類。口縁部の外反度も少なく、体部あまり膨らみを持たない。口縁外面はきれいにヨコナデされ、ハケが消される。

### SD 112 (図版45-229~51-301 写真162~167)

最も出土遺物が多い。壺・甕・鉢・脚部が見られる。やはり在地系が多数を占めるが、折衷型などがわずかに見られる。器種判断可能67%、うち壺27%、甕66%、鉢7%である。

壺 A1類 (229)、A2類 (230~232)、B1類 (234)、B2類 (235~236)、D1類 (233)、F1類 (237~240)、J2類 (242~244) が見られる。231は貼付口縁で、内面を押圧して小波状にしている。233は細頭で、体部下位に最大径がくると思われる。中部高地系に多く見られる器形であるが、北陸地方でも数点出土している。柏崎市下谷地遺跡(高橋等 1979)にも類例がある。頸部下位に櫛描直線文と斜行短線文が施文されるが、文様により工具を変えている。234の口縁部は大きく外反し、内面に斜行短線文が5段(一部6段)施文される。文様の幅が、ある箇所から突然変わる。観察した結果、その理由は以下の通りであると推測した。最初は2条の櫛歯状工具を使用し細かい斜行短線文を3段ずつ施文していたが、工具が擦り減り櫛歯の筋が見えなくなってきたため、それを1本として2本結束の工具を作り、残りの部分を施文した。欠損部分があるため、確信は持てないが可能性はあるのではないかと思われる。頸部は貼付凸帯を有する。凸帯中間に沈線を引き2段に分け、さらに縱方向の櫛描刺突を行なう。236は貼付口縁で端部に斜格子文Bが施文される。237~240はF類であるが、個体によりそれぞれが異なる。237は頸部へ至るまでの角度が他と比べて緩やかである。全面にススが厚く付着している。239は受口部外面に櫛描斜格子文Aや綾杉文が施文され、棒状浮文で区画される。2本ずつ6単位で貼付されると推測されるが、そのうち1単位は沈線が用いられる。棒状浮文上の刺突は2本同時になされる。受口部下端のフリル状突起は、貼付の後刺突、押圧により作り出している。頸部の貼付凸帯は非常に薄い。240は当遺跡最大の壺である。器高71.9cm、体部最大径47.5cmを測る。受口部外面は上下にそれぞれ2本ずつ沈線を引き、間に綾杉文が施文される。金沢市西念・南新保遺跡に類例がある(第20図10)。他の個体に比べ刺突の長さが短い。受口部下端には同一工具により連続刺突文が施される。頸部の貼付凸帶は239同様非常に薄い。これも金沢市西念・南新保遺跡に類例がある(第20図9)。241は頸部が筒形状を呈する。頸部から体部上位までハケが良く残っているが、下位は摩耗により消えている。内面は体部下位にナデ上げが見られる。242~244のJ類では口縁部が貼付されるのが一般的であるが、242は沈線を引

き口縁部文様帶を区画している。244は残存部位においては確認できなかったが、口縁部の孔が存在した可能性もある。底部内面はナデにより円形に窪み、尖底ぎみとなる。(245・246)は体部片である。ともに櫛描直線文と斜行短線文が施文される。

**甕** (247~287) A類が圧倒的に多いがE類以外はすべて確認できる。A類では、頭部径と体部径の差がほとんどないA1類(247~250)、体部が若干膨らみをもつA2類(251~265)が主体となる。その他、A3類(266)、A4類(267~268)、B1類(251~278)、B2類(269~272)、C1類(273~276~287)、E類(279)、F類(277)、G1類(280~282)、G2類(281)、G3類(283~284)、H類(285)と多種が揃っている。247の口縁内面の櫛描連続刺突文は残存部分の3分の1しか施文されず、残りは無文である。単位施文か、あるいは部分施文の可能性が考えられる。250は口縁部外面をヨコナデするかわりにヨコハケを施している。260は口縁端部は面取りされるが、外面にヨコナデは施さない。264の体部内面のナデ上げは比較的密である。266の頭部はヨコナデにより少々凹みが見られる。267・268は頭部が強くヨコナデされるため、体部との間に若干段を有する(A4類)。どちらも口縁部は面取りされ、端部と内面に櫛描連続刺突文を施文する。268は底部に螺旋状のハケが明瞭に残る。278は小型甕である。口縁部の開きはほとんどなく、筒状の器形になると思われる。272は堅緻なつくりで口縁部の面取りもしっかりと行われ、加賀地域の面取りされる甕と比較しても違和感が感じられない。273・274の体部のハケ調整は横方向で、タテハケに直交するようなかたちになる。277は目の粗いハケで調整される。口縁部は内外面連続刺突文が施文されるが、異なる工具を使用している。外面は櫛歯状工具、内面は棒状工具であると思われる。279の口縁内面はヨコナデにより内彎する。貼付口縁の外面は押圧される。この技法は当遺跡の甕に数点見られるが、他地域ではほとんど類例がない。体部上位にススが厚く付着する。280は受口部が開き頭部径と体部最大径との差がほとんどない。282の受口部は稜を有するが、稜部分はきれいに整形されておらず、雑に作られたような感じである。281は頭部の括れ、体部の膨らみもなく、メリハリのない器形である。受口はつまみ上げて立ち上がらせたような感じである。283は頭部に若干の屈曲を有する。受口部はヨコナデによって作り出される。284の受口の作り方は粘土積み上げと推測されるが、内面はヨコナデを強くすることによって凹みを出している。285は日類としたが、脚部が付いて台付鉢になる可能性もある。286の口縁内面は細い角棒状の工具で斜行短線文状の文様を施す。

**鉢** A2類(289)、A2類(288)、B1類(290~292)、B2類(293~294)が見られる。288の口縁部は反り返るように開く。内面は丁寧に調整されている。290はハケ痕が明瞭に残る。内彎した口縁の端部はヨコナデにより少し凹む。291・292の口縁部は貼付される。器高は低く、浅鉢形を呈すると推測される。293・294は口縁部が若干内彎する。貼付はなされず、孔が1つ(1対になる可能性もある)開けられる。

**脚部** (295・297) A類。(296) B類。(297) 中実の脚部で、当遺跡では稀である。

#### そ の 他

**壺** (299) 口縁端部、内面に櫛描斜格子文Aを描いた後、箆状工具による平行沈線を1本描きで上に1本、下に2本引き区画する。頭部にも3条以上引かれる。

**甕** (298) A1類の器形であり、口縁部には櫛描連続刺突文が施文されるが、刺突の後に縄文(LR単節)も施文され、内面にも縄文の押圧が見られる。この縄文は櫛描連続刺突文を模倣したものと考えられる。全体の文様構成を推測してみると、端部に刺突・縄文が交互に何単位かで施文されるか、刺突は残存

部分付近のみで、残りは縄文で施文されるというパターンが考えられる。2通りの施文が考えられるとすれば、後者の場合刺突部分は正面となり、正面観のある土器の可能性がある<sup>1)</sup>。(300) 体部上位に笠状工具による沈線直線文と山形文が交互に施文される。体部下位はミガキ調整が見られる。(301) 蓋または脚部と考えられる。体部上位はハケ、中位から裾部にかけては縄文（LR単節）が施され、縄文部分を区画するように平行沈線が引かれる。孔が2つ見られるが、対をなさない。内面に一部赤彩痕が見られるが、範囲は不明である。いずれの系譜か不明であるが、胎土は在地のものである。

#### SD 113 (図版51-302・303 写真167)

壺・甕・鉢がある。器種判断可能な個体は70%、うち壺29%、甕60%、鉢11%である。

甕 (303) B2類。口縁内の櫛描絆杉文の刺突間に若干の屈曲がある。口縁端部は面取りされ、外面もヨコナデが強いため端部が若干肥厚する。

#### SB 114 (図版51-304・305 写真167)

壺・甕・鉢が確認されるが、出土量は少ない。器種判断可能な個体は87%、うち壺23%、甕69%、鉢8%である。

壺 (305) E2類。口縁部の外反度は弱く、直立に近い。薄く貼付が施される。

#### SD 114 (図版51-306・52-320 写真167・168)

壺・甕・鉢・脚部が確認できる。器種判断可能な個体は79%、うち壺24%、甕70%、鉢6%である。

壺 (306・308) A2類。308はほぼ完形である。頸部のナデが強く体部との境に若干段ができる。底部内面は笠状工具で削り取ったような痕跡がある。(307) A2類。口縁端部には櫛描連続刺突文、一部斜格子文が施文される。斜格子文の部分が先述した正面観になる可能性も考えられる。内面には沈線系斜行短線文が施される。文様はごく浅く、断面が線状あるいは長方形の笠状工具で施文されたものと推察する。円形浮文は2個3単位で貼り付けられたと思われる。(309) D1類。口縁部外面に連続刺突文が施文されるが、途中で方向を変えている。496のような器形が推測される。(310) G1類。口縁部に方向を変えて粘土を接合することで、有段口縁状に見せている。口縁下端は刺突、つまり出しによりフリル状突起を作り出している。内面は連続刺突文の上（一部下）に沈線を引く。

甕 (312) A2類。ハケ調整は一般的には口縁部（タテハケ）→体部（ヨコ・ナナメハケ）という順番で施されるが、この個体はタテハケを最後に行っている。口縁端部は一部平行沈線状の線が見られる。(313) A2類。体部もタテハケ調整である。数は少ない。(314) A3類。(315) B1類。口縁内面の櫛描斜行短線文は、工具が幅広で深く施文されている。施文された後に円形浮文を貼付するが、断面半円形で盛り上がった形である。2個8単位で貼付されていると推測する。

鉢 (317) 緩い受口状を呈する。外面には絆杉文が密に施文される。(318) B2類。口縁部は内彎し、外面に櫛描絆杉文を施す。当遺跡では最大の鉢である（容量8.1ℓ）。

脚部 (319) A類。貼付凸帯を有する。凸帯上には斜格子文Aが施文される。鉢部分の立ち上がりは緩やかで、口縁部が外反する器形となると思われる。(320) B類。中ほどに貼付凸帯の痕跡が確認できる。

1) 長野県埋蔵文化財センター 上田典男氏のご教示による。

## S B 115 (図版 52-321・322 写真 168)

壺・甕・鉢がわずかに確認できるほどで、少量である。

壺 (321) B2 類。口縁部は貼付されて肥厚する。ほとんど外反せず、直口壺となる。

甕 (322) 口縁部外面は粘土をきれいに整形されず粘土がはみ出たようになっている箇所がある。

## S D 115 (図版 52-323~54-342 写真 168・169)

出土遺物は多量である。在地系の他、中部高地系との折衷型が数点見られるが、搬入品も 1 点認められる。器種判断できた 77% のうち、壺 23%、甕 74%、鉢 3% である。

壺 (323) B1 類。口縁部は貼付される。外面に櫛描連続刺突文が施文される。頸部はタテハケが良く残っている。(325) 頸部。貼付凸帶の上に櫛描斜格子文 A が施されるが、刺突を意図的に交差させていない箇所が見られる。

甕 (326~330) A2 類。326 は体部外面の器面が剥落しており、調整不明である。内面では体部上位のみナデ上げが見られる。329 は口縁内面に斜行短線文が施文されるが、文様施文の描き始め・描き終わりと考えられる箇所が見て取れる。文様は左回りで施文されており、文様が徐々に大きくなる様子が窺える。330 は口縁部が貼付され、外面に櫛描連続刺突文が施文される。体部上位のヨコハケは口縁～頸部のタテハケと直交しており、体部中位近くではナナメハケも見られることから、ヨコハケはこの部位に限られたもので櫛描直線文を意識したものと推測される。(332・333) B3 類。332 は口縁部から頸部にかけてはヨコナデが丁寧に行われ、ハケ日が消されている。体部は斜方向ナデが一部施される。(334) B4 類。口縁内面には櫛描綾杉文と円形刺突文が施文される。施文具は竹管と考えられる。(335) D 類。内面には稜が入る。ナデはほとんど施されない。(336) H 類。口縁端部下には櫛描連続刺突文が施文されるが、刺突間の間隔が広い。(338-1・2) 同一個体と思われるが接合しない。頸部片には櫛 II 種工具による波状文と垂下文、体部片には簾状文、斜行短線文が施文されている。垂下文は波状文と同一工具で 2 回(以上)引き、条数を多く見せている。体部文様、胎土は在地のものであるが、頸部文様構成は中部高地系であり、多少折衷したものとも考えられる。

脚部 (339) A 類。貼付凸帶が付き、断面形は三角形を呈する。脚部内面は平らな面を持つ。

中部高地系 壺 (340) 体部片と思われる。ハケ調整の上に平行沈線を施す。(341) 体部下位と思われる。沈線重連弧文または波状文の一部と考えられる。(342) 当遺跡唯一の搬入品である。胎土が明らかに在地系とは異なる。石英などの細粒が多く入り、ざらざらした感触がある。文様帶は底部近くまで下がってきていている。沈線重山形文の間に繩文 (LR 単節、2 本撚り)、爪形文が施される。内面は螺旋状にハケが施される。

## S K 121 (図版 54-343・344 写真 169)

壺・甕が確認できる。小片が多く器種が判断できたのはわずか 43% である。

壺 (343) A1 類。口縁部は貼付され、内面を押圧することにより小波状口縁としている。(344) A2 類。

## S K 122 (図版 54-345~347 写真 169・170)

壺・甕・鉢が確認できる。小片が多い。器種判断可能な個体約 50%、うち壺・鉢各 11%、甕 78% である。

壺 (345) B1類。口縁部はきれいに面取りされる。頸部は貼付凸帯が付き、櫛描斜格子文Aが施される。

甕 (346) D類。貼付口縁の上に押圧が施される。頸部がやや筒形状となる。(347) A2類。口縁端部の幅が狭い。頸部の括れが少なく、メリハリのない器形である。

#### SK 124 (図版54-348~55-355 写真169・170)

壺・甕・鉢が確認できる。器種判断できた約半数の中での構成比率は壺73%、甕17%、鉢10%である。

甕 (348・349) A2類。348は全くスヌが付着していない。ハケ調整が明瞭に残り、口縁部のヨコナデも見られない。349は頸部に稜を持つ。口縁端部と内面に連続刺突文が交互に施文されるが、交互に単位を持って施文されるのか、内面の刺突は残存部位だけのものなのかは不明である。後者の場合、正面観を持つ土器という可能性もある。(350・351) B2類。350は頸部内面に一部ミガキ調整が見られる。重量感のある土器である。(352) B3類。観察の結果、施文工具はハケ調整具と同一であると推測される。

鉢 (353) A2類。頸部に若干括れを持ち、口縁が大きく外反する形である。脚部が付く可能性がある。内外面ともナデが施される。

#### 中部高地系

甕 (355) 受口状口縁。口縁端部と外面に繩文 (LR 単節) が入る。繩文の粒は細かく、燃りがきつい。

蓋 (354) 外面に沈線を放射状に入れる。栗林期特有の蓋である。

#### SK 127 (図版55-356・357 写真170)

出土量は微量で、確認できたのは甕のみである。

甕 (356) A2類。頸部のナデは横方向ナデで調整されている。(357) A2類。SK134出土破片と接合した。比率は半分ずつとなっている。体部最大径が上位にくる器形である。

#### SK 128 (図版55-358~363 写真170)

壺・甕がある。出土量は少なく、器種判断可能な個体40%、うち甕が7割を占める。

甕 (358) A1類。口縁部貼付の上に櫛歯状工具で重山形文Bを施すが、やや崩れている。内面は櫛描斜行短線文が入るが、内外面の施文工具は異なる工具を使用している。(360) 体部片と思われる。櫛描直線文を挟んで斜行短線文が施文されている。

甕 (359) A1類。器面の剥落が著しい。スヌは頸部のみ付着しているが、もとは全面に厚く付着していたものと思われる。(361) B2類。(362) C2類である。頸部はくびれ、内面には稜線が入る。外面は体部もタテハケで調整され、全面タテハケであったと思われる。

#### そ の 他

壺 (363) 体部下位に浅い沈線が引かれる。ミガキも見られ、底部のつくりも在地とは異なり中部高地系と思われる。

#### SK 130 (図版56-364~367 写真170・171)

壺・甕・鉢が見られ、器種判断可能な個体約70%。うち壺20%、甕73%、鉢7%である。

壺 (364) B2類。口縁内面は押圧・刺突ではなくナデ取り小波状口縁を作り出している。施文は右回りで行われる。(365) A2類。口縁部は大きく外反し内面に多く装飾が施される。斜行短線文の下に円形刺

突文が施文され、2個2段の円形浮文が8単位で貼付されると推測される。円形浮文上には、内面に施文したものと同一の円形刺突文が刺突される。

**甕** (367) B2類。当遺跡出土甕の中では大型に入る。口縁部の割れ口にはススが付着している。

**SK 131** (図版56-368~370 写真171)

**甕** (368・369) B2類。368は面取りされている。

脚部 (370) A類。

**SK 132** (図版56-371・372 写真171)

器種が特定できない小片が多い。甕と判断できたものが8割以上を占め、壺・鉢も見られるがわずかである。脚部が1点出土している。

**壺** (371) G1類。口縁部が下方に伸び、有段口縁状を呈す。外面いっぱいに櫛描綫杉文を施文し、棒状浮文2本が貼り付けられる。浮文上の刺突は1本ずつ行われている。

**SK 134** (図版56-373~375 写真171)

出土量は少ない。器種判断可能な個体60%。壺・甕・脚部が確認できる。

**甕** (373) A2類。(374) G1類。受口状口縁は粘土積み上げの角度を変えることによって作っている。その接合部付近の内面に粘土を付加し、接合部分を強化している。口径12.0cm、推定器高13cmで口径に比して器高が低く、ずん刷の器形と予測される。頸部上位には孔が1つ見られる。

脚部 (375) B類。脚の長さが長く棒状になる。中位から裾にかけて櫛描斜行短線文が施文される。脚部に斜行短線文が施文された類例はなく、珍しい例である。

**SK 139** (図版57-376~378 写真171)

ほぼ完形に復元できた376以外はすべて小片である。壺・甕のみ確認できる。出土量は少量ながらも異系統の土器が2個体存在する。

**壺** (376) A2類。口縁端部は連続刺突文の後、横方向刺突を連続して行い沈線状に見せている。内面の斜行短線文は摩耗が著しくはつきりしない。ススの付着も一部見られる。

東北系 **壺** (378) 内側口縁の外側に鏡状工具による沈線下向き連弧文を施文し、間を沈線三角文で充填する。対を成さない孔が2つ見られる。

その他 **甕** (377) 器形、調整は在地のそれと同様であるが、口縁端部と内面に繩文(LR単節)が施文されている。櫛描連続刺突文を模倣したものと考えられる。

**SK 141** (図版57-379 写真171)

口縁部は掲載したこの1点のみの出土である。出土量もごく微量である。

**壺** (379) E1類。厚手である。大きく外反した口縁の内面には綫杉文が施文される。櫛齒状工具によるものと思われるが摩耗が著しくはつきりしない。大きい(径15mm)円形浮文2個が貼り付けされる。浮文の中央を棒状工具で刺突し、ドーナツ状とする。

## SK 142 (図版57-380~382 写真171・172)

出土量はごく微量であるが、一応壺・甕・鉢が各1~2点ずつ確認できる。

**壺** (382) D1類。器面の摩耗が著しい。

**甕** (380) B1類。体部外面にも一部ナデが施される。口縁部内面を押圧し小波状口縁にしている。

**鉢** (381) A1類。上から見ると梢円形を呈す。口縁部の穿孔部分付近のみ瘤状に貼付される。孔は1対をなすと思われる。

## SK 144 (図版57-383・384 写真172)

出土量はごく微量である。甕のみ確認できる。

**甕** (383) A2類。口縁部は粘土を整形しきらずはみ出している箇所がある。体部のヨコハケは直線的である。(384) B1類。当遺跡出土の甕の中ではスマートな器形である。ヨコナデは見られない。

## SK 145 (図版57-385~388 写真172)

出土量は少量である。器種判断可能な個体約60%、うち壺57%、甕43%で鉢は確認できなかった。

**壺** (386) E1類。装飾の多い土器である。大きく外反した口縁の内面には櫛描斜行短線文と円形刺突文が交互に施文される。工具は竹管と考えられる。端部は面取りされ、櫛描斜格子文Aを施す。(387) E2類。口縁部は貼付され、外面に櫛描綫杉文を施文する。端部の櫛描連續刺突文は全周せず、無文部分が見られる。単位を持って施文されるか、またはその部分だけ無文になる可能性が考えられる。

**甕** (388) A1類。口縁内面は櫛描連續刺突文が施文される。口縁の欠損部分にもスグが付着している。

## SK 146 (図版57-389 写真172)

出土土器のうち、口縁部は掲載した1点のみである。出土量はごく微量である。

**壺** (389) B2類。口縁部は薄く貼付される。ほとんど外反せず直口壺となる。

## SK 147 (図版57-390~58-393 写真172)

出土量は少量である。壺・甕のみ確認できる。器種判断可能な個体85%、うち壺64%、甕36%である。

**壺** (390) A2類。口縁内面は押圧により小波状口縁となる。(392) 当遺跡最大の無頸甕 (J2類) である。口径10.0cm、体部最大径21.7cmを測る。ハケ調整の後、内外面に一部ナデが施される。

**甕** (393) E類。口縁内面はヨコナデにより端部近くを内擣させる。このような口縁部を持つ土器は、当遺跡ではこの1点のみである。

## SK 148 (図版58-394 写真172)

出土量は微量である。小片がほとんどで甕しか確認できない。

**甕** (394) A2類。全体的に摩耗しており、施文工具を特定できない。頸部内面付近に接合痕が見られる。

## SK 151 (図版58-395~398 写真172)

出土量は少量。壺・甕・蓋が確認できる。器種判断可能な個体76%、うち壺25%、甕75%である。

壺 (395) A1類。SX160出土土器に同一個体と思われる破片がある。口縁の外反部分は緩やかながら若干屈曲をもち、なめらかに外反しない。口縁内面には連続刺突文が密に施文される。

甕 (396) A2類。頸部と体部との境がはっきりせず、体部もほとんど膨らみを持たない。体部最大径は中位にくると思われる。(397) B2類。外面ともヨコナデを用いずハケで調整している。

蓋 (398) つまみ内面の中央には突起がある。この突起は周辺をナデで削り取ることで作り出している。体部内面は全面赤彩されるが、調整は粗雑である。

#### SK 152 (図版58-399~405 写真172)

壺・甕・鉢・脚部が見られる。器種判断可能な個体約90%、うち壺・鉢各12%、甕が76%である。粗粒圧痕のついた底部が1点見られる。

壺 (399) E2類。口縁部は貼付され、内面に櫛描綾杉文が施される。外面とも赤彩された可能性があるが、範囲等不明であり断定はできなかった。(400) G2類。口縁部を下方に伸ばす。フリル状突起は貼付の後刺突、ナデを施し整形している。外面は櫛歯状工具による刺突が見られるが、連続するものではない。内面には平行沈線が1条見られる。

甕 (402) B2類。全面にススが厚く付着している。口縁内面には櫛描斜行短線文が施文されるが、文様の描き始めに描き終わり部分が重なっているのが確認できる。(403) D類。口縁端部の上下はヨコナデもしくは貼付のため若干隙間が空いたところへ、連続刺突文を施すことによって上下を接合していると思われる。施文は右回りであり、徐々に文様が大きくなってくるのが見て取れる。

鉢 (404) A1類。体部は直線的に立ち上がり、そのまま口縁に至る。底部の厚さは最小16mmで小型にしては厚さがある。

脚部 (405) A類。裾部、体部ともハの字状に聞く。

#### SK 153 (図版59-406~408 写真173)

出土量はごく微量であるが、壺・甕・鉢がそれぞれ確認できる。

甕 (406) A2類。口縁部は反り返り気味に開き、内面綾杉文の刺突間に若干の屈曲ができる。体部ナナメハケ→頸部タテハケの順に調整される。破片によりススの付着しているものとそうでないものがあり、廃棄後に被熱したと思われる。

鉢 (407) A1類。口縁部は貼付され、接合のためヨコナデが施されるが、うまく接合されていないところも見受けられる。(408) C1類。頸部がわずかに括れ、体部は丸みを持つ。脚部が付くかどうかは不明。

#### SK 155 (図版59-409~411 写真173)

出土量は微量である。甕・脚部のみ確認できる。

甕 (409) A1類。口縁部はあまり外反せず、体部も張らない器形である。器厚は3mmの所もあり薄い。

(410・411) A2類。411は体部上位のヨコハケが目立つ。内面は連続刺突文と綾杉文が施文される。施文工具は文様別に使い分けており、綾杉文は薄く幅広の工具、連続刺突文は丸みのある工具を使用している。

#### SK 156 (図版59-412~60-420 写真173)

壺・甕・鉢(台付鉢も含む)・脚部が確認できる。器種判断可能な個体約90%、うち壺・鉢各19%、甕

62%。

**壺** (412) A2類。口縁部を貼付し、端部に櫛描連続刺突文を密に施す。(413) F1類である。受口状口縁壺では珍しく無文である。丁寧に調整されており、ハケ目はほとんど消されている。

**甕** (415) A2類である。頭部の屈曲は直線的である。口縁部は面取りがなされる。(414) H類。内面押圧により小波状口縁とする。

**鉢** (416) C1類。(417) A2類。頭部が括れ直線的にすぼまる。脚部が付く可能性もある。(418) B3類。棒状脚部を持つ台付鉢である。

**脚部** (420) 壁端部上に連続刺突文が施文される。貼付凸帯の痕跡が見られる。凸帯を貼り付ける前にタテハケで調整していたことが窺える。

**東北系 甕** (419) 頭部は笠状工具による平行沈線が5条、1本描きで引かれる。体部は自純自縛による結節繩文(LR)が施され、端部にもLR繩文が施される。

#### SK 158 (図版60-421~425 写真173・174)

壺・甕・鉢が確認できる。器種判断可能な個体は約60%、うち壺・鉢各15%、甕70%である。

**壺** (421) J類。横長偏平の器形になると思われる。2孔1対の孔は貼付部分直下に穿たれる。

**甕** (423) F類である。口縁部は面取りされる。口径と体部最大径がほぼ一致する。

**鉢** (425) C1類。口縁外面に櫛描連続刺突文が施文される。施文工具は丸みを持ち、幅の狭い(3.5mm)ものが使用されている。

#### SX 160 (図版60-426 写真174)

出土遺物はごく微量である。壺・甕が確認できる。

**甕** (426) A2類。口縁内面には櫛描綫杉文が間隔を空げず密に施文される。

#### SK 161 (図版60-427~429 写真174)

**甕** (428) C2類。全体的にゆがんでいる。数少ない体部の張る器形である。

**不明** (429) 口縁部は水平近くまで外反し、内面に櫛描連続刺突文と円形刺突文が右回りで施される。施文工具は竹管(幅5mm)と考えられる。

#### SX 164 (図版61-430~64-458 写真174~177)

出土遺物は多いが個体数はそれほど多くなく、復元率が高い。破片も大きいものが多い。器種判断可能な個体91%、うち壺29%、甕63%、鉢8%である。

**壺** B1類(431)、B2類(433)、C2類(432・434)、F1類(436)、J2類(437)がある。(430)大型壺になると思われる。厚手で、口縁は面取りした後、櫛描斜格子文Aを施文する。432は口縁部が水平近くまで外反し、内面に櫛描連続刺突文と綫杉文を施文する。頭部はやや長く裾広がりとなり、緩やかに体部へと移行する。底部付近のみ粗いハケ状工具を使用する。433の口縁部はほぼ直立する。体部内面は上位と下位にナデが密に施される。(435) 体部片である。櫛描波状文と直線文が交互に施文される。櫛目の粗い工具を用いる。円形浮文が2個1対で貼付されるが、単位不明である。浮文の中央は棒状工具で刺突される。(436) 受口部外面に櫛描斜格子文Aが施文される。一方の刺突は「斜」というより「綫」

方向の刺突である。下端は貼付の後刺突・つまみ出しでフリル状突起を作っている。実測図上では窓えないが、外面の受口部下端直下には横方向のハケが見られ、全周している。(437) ハケ目がほとんど消されるほどナデ調整が行われ、丁寧なつくりである。貼付部分との境目に孔が穿たれる。

**壺** A類が主体となる。A1類(438・440・442)、A2類(439・441・443～448)、B1類(449)、B2類(450～452)、C1類(453・454)、C2類(455)、H類(456)が見られる。438は粗いハケを使用。口縁部にはヨコナデを模したような痕跡がある。体部内面のみナデ調整が見られる。439・441は同じ器形、調整の度である。439は刺突が密に施される。444は全体的に厚手である。端部の連続刺突文は、丸く厚みのある櫛歯状工具を用いている。446は口縁部が大きく外反し・内面に斜行短線文を施文する。範状工具を2本1組にして施文していると考えられる。断面形が若干菱形状になるものがあることから、いったん引いたところで止め、その後は抜くような感じで施文すると考えられる。447は口縁部と体部とでは異なるハケ状工具で、体部外面のみ粗いハケが用いられる。448は口縁端部に厚みがなく、断面形が尖り気味である。全面タテハケで調整される。450は体部外面にもナデが行われる。ただし、ハケを消し去るほど密には施されない。451の外面底部近くは横方向のナデが見られる。体部内面は縱方向のナデが密に施される。底部はハケ痕が見られる。453は口縁の開きが少なく体部に最大径がくる。455は小型で、推定口径は9.0cmである。おそらく単純な外反口縁を持つと思われる。器面は平滑にされる。456はスヌ等の痕跡は見られない。脚部がついて台付鉢となる可能性もある。

**鉢**(457) B2類。小型の鉢である。孔が1つ見られる。対になるかは不明。(458) B3類。B類の器形に脚部が付いたものである。身が深く深鉢状を呈する。

#### S K 165 (図版64～459・460 写真176)

出土量は少量である。壺・壺のみ確認できる。小片が多く器種判断できたものは半数にすぎない。

**壺**(459) 口縁が水平に開き頸部は筒状となる。内面は平坦な面を持ち、櫛描絆文が施文される。

**不明**(460) 口縁端部には櫛描連続刺突文が施文されるが、一部2段、あるいは3段になる箇所がみられる。施文方法は、端部に段を持つようにヨコナデを施し、整形しきらううちに下方から粘土を押し上げるようにして刺突するのではないかと推測する。2段刺突の箇所は下段のみ同様の技法で行われ、上段から施文されたものと思われる。2段刺突の箇所は単位施文か、正面観の可能性もあると考えられる。

#### S X 167 (図版64～461～67～486 写真176～179)

SX164と同様のあり方を示し、復元率が高い。器種判断できたものは81%で、そのうち壺19%、甕73%、鉢8%である。

**壺**A1類(461)、A2類(462・463)、B2類(466)、C2類(467)、J類(468)がある。461は口縁端部と内面に櫛描連続刺突文が同一工具により密に施文される。端部の連続刺突文は、徐々に縦から斜方向になり、文様の描き始めと終わりとでは角度が異なっているのが見て取れる。462の口縁内面には連続刺突文と斜行短線文が施文されるが、文様の描き終わり箇所では無理に文様を充填している様子が窓える。(465) 頸部は筒形状を呈す。体部径に対し器高が低く、ずん胴形となる。調整はヨコハケが目立つ。内面下位は図示されていないがヨコハケが目立つ。底部形成は円盤状粘土（これにもハケ調整が見られる）から積み上げたことが見て取れる。円盤状粘土の回りに粘土を付加しており、さらに絞ったような痕跡が認められる。466は口縁部があり外反せず、頸部は筒状となる。体部外面中位ほどに、長さ5cm、幅

12mmほどの大きさで布状のものの圧痕が残っている（写真図版185参照）。体部外面は一部ナデ調整される。体部内面は図示していないが縦方向ナデが施される。底部の厚さは3.3cmと厚い。外面に木葉痕が残る。467は完形品である。頸部は長いが所謂細頸壺にはならない。ハケ調整が明瞭に残る。口縁部調整（タテハケ）が後に施される。468は口縁貼付部分に綾杉文が密に施文される。体部にススが見られる。

**甕** A1類（470・471）、A2類（472～474）、A3類（475～477）、B2類（480）、H類（478）が見られる。470の端部は明確な面を持つ。473は器高・底径に比して口径が大きく、不安定でバランスの悪い器形である。474はハケ状工具を2種類用いているが、部分的な使い分けは行っていない。475は口縁が大きく開いて面を持ち、内面には連続刺突文が施される。破片の割れ口にもススが付着しており、土器廃棄後に被燃したものと思われる。476は口縁直下でヨコナデが強く、口縁の外反を作り出しているため、短く折れ曲がるような形態となる。内面に面を有し、櫛描綾杉文を施す。478は403と同様の方法で外面の連続刺突文を施文。ハケ目が明瞭に残る。479・481は端部の面取りが行われ、外面のヨコナデにより口縁端部下端がわずかに下に伸びる。口縁から頸部にかけて、ヨコナデに加えて縦方向ナデも施される。（479）内面に三角形刺突文が見られ、（481）は櫛描菱形文が見られる。残存部分が少なく全体構成は不明であるが、綾杉文の一部分である可能性もある。

**鉢**（482・483）どちらもA類であるが、482は身が浅い。483は外面で脚部と見えるところも容器部分であり、断面形を見るとかなり脚部が偏平であることが分かる。

**脚部**（485）つくりから脚部と推定した。外面は沈線が1本引かれる。内側は空洞であり、さらに上方まで続くと思われる。類例がなく器形を想像することは困難である。

**東北系 壺**（486）体部片である。籠状工具による沈線渦巻文とその間をつなぐ重三角文の部分である。重三角文の下に繩文は見られない。

#### 包 合 層（図版67-487～73-571 写真179～183）

**壺** A2類（488）、B1類（489）、B2類（491・492）、C1類（496）、E1類（487・498・500）、E2類（490）、F1類（493・494）、F2類（495）、G1類（497）、J2類（502）、頸部がある。489の頸部には貼付凸帯があり綾杉文が施文されるが、刺突間に太い沈線を引き区画している。490は口縁部がほとんど開かない。貼付部分には重山形文状の刺突が施されるが、施文工具は摩耗のため特定できない。491・492はどちらも口縁部が薄く貼付される。491は口縁内面が若干凹む。493～495はF類であるがそれぞれに器形が異なる。493はしっかりと段を持ち、粘土積み上げによって作られたものであることが断面から窺える。外面には櫛描鋸歯文が施文され、下端はフリル状突起を有する。刺突とつまみ出しによって作られているが、フリルの高さがなく中途半端な印象である。内面は受口部をヨコナデせず、ヨコハケのみで調整している。494は受口部外面にヨコハケを施し、稜を有する。全面にススが付着し、甕である可能性も否定できない。495は緩い受口状を呈する。口縁内外面はハケをナデ消す。497のフリル状突起はつまみ出しによって作られたと考えられる。498は口縁内面に櫛描波状文と連続刺突文の痕跡が見られるが、小片のため文様が全周するかどうかは不明である。499は文様構成は櫛描綾杉文と円形刺突文の組み合わせと考えられる。孔が2つ開けられている。502の口縁部は貼り付けされないが、綾杉文が施文される。摩耗が著しく工具は特定できない。（504）は頸部片である。ハケが明瞭に残り、沈線が3本入る。（505）は体部片である。櫛歯状工具による斜行短線文、直線文、間隔の広い波状文が見られる。外面は平滑にされる。（503）は残存器高50.5cm、体部最大径45.2cmを測る大型壺である。球

形を呈する。

**甕** A1類 (506~511)、A2類 (512~520・523)、A3類 (521・522)、B1類 (524・536)、B2類 (525~527)、B3類 (528)、C1類 (529・530)、D類 (531・532)、G2類 (533) がある。A類が多数を占める。506の口縁端部はほぼ水平に面取りがなされ、幅広の端部を持つ。507は体部の膨らみが滑らかでなく、凹凸がある。口縁内面はほとんどヨコナデが行わぬ。508は内面の横行短線文には無文部分が見られ、残存部分から推定すると4単位の無文帯を持つと思われる。510は底部の厚さは全体から見ると薄く、底部から体部の立ち上がりも直線的である。体部ヨコハケは口縁部タテハケと直交する。513は当遺跡最大の甕であり、推定器高33.3cmをはかる。体部は摩耗著しく、ハケ痕が消えている。口縁部内外面とも棒状工具による連続刺突文と思われるが、工具はそれほど異なるものを使用している。514は反り返り気味の口縁内面に綾杉文を密に施文している。515は面取り痕が明確ではないが、端部直下のヨコナデが強く端部が若干下に伸びる。520は口縁～頸部と体部とに施されるハケ原体が異なり、頸部外面のみ筋の細いハケを使用している。521は口縁内面に面を持つが、綾杉文の施文工具はスス付着のため特定できない。524はメリハリのない器形である。面を持たない口縁端部に、細かい櫛描連続刺突文が施文される。526は底部が穿孔されている。焼成後穿孔と考えられる。529・530は同じC1類でも529は口縁部が短く、530は長い。530はスス等の付着が全く見られない。532は頸部の括れ部分からハケ目の方向がはっきり変わるものに対し、531はそれほど変化が見られない。533は284 (SD112)と同様のつくりである。536は小型甕である。底部にはドーナツ状の粘土痕が見られる。

**鉢** A2類 (538)、B1類 (540)、B2類 (539)、C2類 (537) が見られる。537は頭部が凹み、形態としては甕A3類・B4類と同系と考えられる。脚部は中実で重量感がある。538の口縁部は水平に開き直線的に屈曲する。施文工具は筋の明瞭でない櫛齒状工具を使用している。工具を2本緩く結束させて（櫛Ⅱ種）施文しているものと推測する。539は口縁部が若干内彎する。貼付部分に綾杉文を施文する。

**底部・脚部** パリエーションが豊富である。(541) おそらく壺の底部と思われる。内面には赤色顔料が見られるが、結論から述べると、これは装飾品として塗彩されたものではないと考える。その理由として、まず土器の調整が丁寧ではなく、内面はハケ痕が残り凹凸もあること。次に、赤色顔料自体もきれいではなく、むらがあること。これらの要素から、塗彩されたものではなく貯蔵されていたものではないかと推測した。また、破片の削れ口には痕跡が見られないことから、顔料を調合する際のパレットとして使用された可能性も低いと考える。脚部 (543~545) A類、(546) B類である。543は貼付凸帯の中央に木目状沈線を施し凸帯を2段に見せている。544は裾部の開きが少ないよう見えるが、裾部の粘土帯が剥がれている可能性もある。断面三角形の凸帯が貼付される。坏部と脚部の接合は円盤充填によるものと考えられる。546は体部・脚部内面に平坦な面を有する。

#### 中部高地系

**壺** (549・550) 壺の頭部片であろう。平行沈線と沈線山形文が施される。

**甕** (551) 受口部外面と口縁端部に繩文 (LR单節)、外面には沈線重山形文が施文され、上部には山形文を連結する円形浮文が貼付される。(552) 口縁部は若干内彎する。外面に振幅の大きい櫛描波状文、頸部に簾状文が施される。頸部内面には稜を有する。

**蓋** (553) 中央から裾に向かって十字状に沈線が入り、間を重山形文で充填する。

#### 東北系

**壺** (554) 口縁部は内彎する。口径7.6cmと小さく、おそらく長頸壺になるのではないかと思われる。

外面には下向き重連弧文、内面には平行沈線2条が籠状工具で施文される。摩耗著しい。(555・556) 頸部片である。555は5条の平行沈線を垂下沈線で区画している。(557～559)は体部片である。体部上位に籠状工具による沈線渦巻文、下位に直前段多条の縄文(LR)を施すタイプの壺であろう。籠状工具による沈線文様部分は平滑にされている。559は渦巻文を連繋する重三角文も見られる。

**甕** (560) 波状口縁を持ち、頸部が筒状を呈する。口縁部・頸部・体部が明確に区分できる器形である。口縁部と頸部、頸部と体部の間に同一パターンの文様を施す。平行沈線4条、下向き重連弧文を施すが、すべて1本描きで施文している。地文に縄文は見られず、ハケ調整が主となるが、文様帶の間はミガキ調整も見られる。胎土は在地のものとは異なり、鉱物が多く入っている。(561) 壺であるが壺の文様が用いられる。体部はおそらく渦巻文であろう。上位には渦巻文間を充填するハート形文、C字文が施文される。C字文は2～3筆で描いている。口縁内面と頸部外面上には籠状工具による沈線直線文が入る。頸部には両面穿孔と思われる孔がある。

**不明** (562) 体部片と思われる。籠2本描きによる重山形文と直線文が交互に施される。(563) 頸部片と思われる。籠2本描きによる重菱形文が施文される。

**蓋** (564) 体部のみRL単節縄文が施されるようである。

#### その他

(565) E2類。口縁外面に籠状工具による沈線直線文2条と重山形文が施文され、内面は櫛描斜格子文Aの上下に籠状工具による平行沈線2条を施し区画している。刺突の幅は一定でなく、崩れた印象である。(566) 口縁外面に円形刺突文が2段見られる。受口部下端には稜が入る。(567) 内外面ともミガキがなされる。外面上部は赤色塗彩される。鉢と思われるが、類例がなく系統も不明である。(568) 壺と考えられる。櫛II種工具で斜方向に短線文状の文様を描く。中部高地系壺に見られる櫛描綴羽状文の影響を受けた可能性もあるが、系統不明である。(569) は底部に近い部分と思われる。RL単節縄文が施される。(570) 粒がやや大きめのLR単節縄文が施される。(571) ミニチュア土器と思われる。脚部はつまみ出しによって作られたと考えられる。体部と脚部の境目に押圧痕が残っている。

#### 排土 (図版73-572～576 写真183)

中部高地系 壺 (572) 頸部片と思われる。地文はLR縄文で、平行沈線で区画した中をナデ消し、重山形文を施文する。

東北系 壺 (573) 体部上位に籠状工具による沈線渦巻文、下位に直前段多条の縄文(LR)を施すタイプであろう。渦巻文を連繋する重三角文と下位の縄文部分と思われる。(574・575) 渦巻文あるいは連弧文の一節と考えられる。外面は丁寧にミガキが施される。(576) 壺の体部片であろうか。全面赤彩される。調整も丁寧である。

#### (4) 土製品 (図版74-577～602 写真184)

**有孔円盤状土製品** (577～601) 上層から8個、下層から25個出土した。直径2.1cmから4.7cmのものまであり、平均3.7cmである。土器を転用しており、断面が若干反り返り気味のものが認められる。また、ススの付着したものが何点か認められる。打ち欠いて整形するため、正円形とならないものが多く見受けられる。焼成後穿孔と考えられ、孔は両面から穿たれている。円盤中央に孔が穿たれているもの・片側から穿孔途中のもの(588)・両面から穿孔途中のもの(591)がある。また、中央の孔に加えて穿孔途中

の孔が見られるもの（580）が1点ある。

土製丸玉（602）直径1.5cm。1点のみの出土である。いびつな形状である。

#### D. ま と め 弥生時代中期の上器について

新潟県において弥生時代中期後半期は複数系統（北陸・在地系、中部高地系、東北・日本海側・太平洋側一系など）の土器が入り組み、また地域によってその比率がかなり異なるという複雑な様相を呈している。また、調査事例が少なく良好な一括資料に恵まれなかつたため、最近までは研究も停滞気味であった。

佐渡では、柳描文土器は早くから玉作遺跡に共伴する土器として知られていた。それらは「竹ノ花式」<sup>1)</sup>と設定され、石川県小松市八日市地方遺跡出土土器との類似性が指摘された（新潟県教委 1953）。その後は小規模な調査は行われたものの、時期差を追えるような資料に恵まれず現在に至っている。一方、越後（以下、佐渡地方を除く新潟県地域のことをこう呼称する。）では、古くから山草荷式が知られていた。しかしその編年観については、資料不足から山草荷式→天王山式→竹ノ花式（上原・磯崎 1968）、山草荷1式〔東北系太平洋側〕→天王山式→山草荷2式〔北陸系+東北日本海側〕（大木・中村 1970）など、系統差が時期差として認識されていた。これに対し、閔雅之氏は「縄目文→柳目文→無文」といった単純な変遷ではなく、縄文と柳描文の共伴の可能性を指摘した（閔 1970）。

1977年に柏崎市下谷地遺跡、83年に同市小丸山遺跡、97年には和島村松ノ脇遺跡が発掘調査され、下谷地→小丸山→松ノ脇という編年観が与えられた（品田 1985、丸山 1998）。しかし後者2遺跡は全て包含層出土土器であり、大まかな流れとしてとらえることしかできない状況にある。最近では資料が蓄積しているとは言え、まだ今後の資料増加に期待するところが大きい。

当遺跡では、上層と下層から弥生時代中期後半の土器が出土しており、西方、つまり北陸地方から波及した北陸系柳描文土器が主体を占めることは前述した通りである。このような様相は柏崎市下谷地遺跡、同小丸山遺跡といった日本海沿岸地域に共通する。現在のところ、新潟県内では中期前葉～中葉の様相が明らかではないが、和島村大武遺跡からは柳描文最盛期以前の土器が検出されており<sup>2)</sup>、柳描文土器は北陸地方と比較してもそれほど時間差なく波及したものと思われる。よって柳描文土器が主体となる地域においては、これを在地系としておきたい。当遺跡の在地系土器は、体部文様がほとんど消滅（特に甕においては）し、口縁部文様に集約されている。このことから柳描文最盛期といわれる時期よりも新しいと考えられる。

以上のことを踏まえ、本稿ではまず、主体が在地系（北陸系）である他遺跡との比較検討を器形・文様・容量の3面から行い、それから他地域（北陸以外）との比較、最後に編年の位置づけという流れで述べていきたい。

##### （1）類別構成比率について（第3表 第11・12図）

これから分析で比較対象とする遺跡は、新潟県から柏崎市下谷地遺跡（高橋他 1979）・同小丸山遺跡（品田 1985）・和島村松ノ脇遺跡（丸山 1998）、富山県から石塚遺跡（山口 1987・1988・1995・1996）、

1) 竹ノ花 新穂玉作遺跡A～D地区のうち、A・B地区が竹ノ花集落と呼ばれていたため、当初竹ノ花遺跡と呼称されたことによる。竹ノ花式提唱後、さらにI式、II式に細分されたがその根拠は明らかにされておらず、実態は不明である。

2) 理文事業団 平成5～9年度調査：未報告。

石川県から羽咋市吉崎・次場遺跡（福島 1987）・七尾市細口源田山遺跡（土肥 1982）・富来町山王丸山遺跡（的場 1994）・鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡（柄木 1995）（以下杉谷遺跡と略す）・金沢市磯部運動公園遺跡（増山 1988）（以下磯部遺跡）・同専光寺養魚場遺跡（増山 1992）（以下専光寺遺跡）・西念・南新保遺跡（楠 前掲）の計11遺跡である。石川県については前者4遺跡を能登地方、後者3遺跡を北加賀地方として細分した。

まず、平田遺跡での分類を基準とした各遺跡の類別構成比を算出した<sup>1)</sup>。ただし、凹線文系土器は数に含まれない。報告書記載遺物からの数値であるため、必ずしもその遺跡の様相を確実に把握されない可能性もある。しかし、ここでは大まかな違いということで認識していることを予めご了承いただきたい。

#### [壇]

平田遺跡と下谷地遺跡、磯部遺跡は比率の差こそあれ、各類が揃う点では同様である。F類は新潟・富山に比べ石川県では比率が高くなっている。数値から見たところ時期・地域による違いはあまり見出せず、遺跡差によるものが大きいかもしれない。山王丸山遺跡ではB類の、専光寺遺跡ではA類の比率が突出している。また平田遺跡では上層のみC類の比率が高い。

口縁部形態の比率でも、同様に傾向は見出せない。平田遺跡について言えば、無類の比率が最も高く、逆に受口状口縁の比率が低いということである。どの形態も、消滅することなく存続するということであり、あまり変化がないと言える。

#### [甕]

新潟県地域…越後においてはA類の減少、C類・D類・F類の増加が指摘できる。平田遺跡はこれらとは若干異なったあり方を見せる。A類の多さは下谷地遺跡と匹敵するがB類・C類が少なく、E類・G類といった越後にはみられない器形が出土している。内縫・受口状口縁甕の高い比率は佐渡地方に特徴的といえるかもしれない。

富山県（石塚遺跡）…D類・E類・F類は見られないもののその他は平田遺跡とほぼ同じ比率となる。

石川県地域…やはり越後と同様にA類の減少、C類・F類の増加が確認できるが、相違点はD類が遺跡によっては見られること、F類が早い段階から見られることである。F類は凹線文系土器の影響を受けた器形であると考えられるため、西方にある当地では当然のことと言えよう。G類については傾向を見出せない。というのも、もともと外来の器形であるため、遺跡の立地等により、入り方に差が出てきたものと思われる。

#### [鉢]

数が少ないとおり、傾向を出すのは困難である。数量から見ると平田遺跡と磯部遺跡が際立つ。また、比率は異なるが、数量の多い遺跡（多い方から順に平田、磯部、吉崎・次場）はA類、B類、C類の全てが揃っている。しかし西念・南新保遺跡2期ではC類が存在せず、一概には言えないところである。

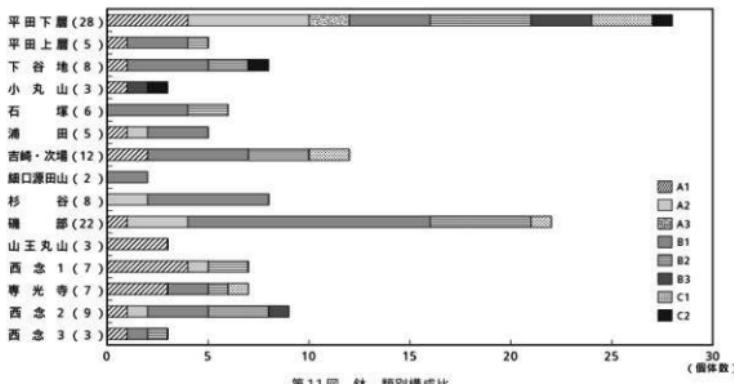
#### （台付鉢について）

グラフを見てわかる通り、新潟県地域では一定の割合を占めるのに対し、その他の地域では西念・南新保遺跡2期のB3類1点のみであり、数量の多い磯部遺跡では全く見られない。これは新潟県地域の特徴と言えるのではないだろうか。ただし、ここで言う「台付鉢」とは在地系のものを指し、凹線文系土器は

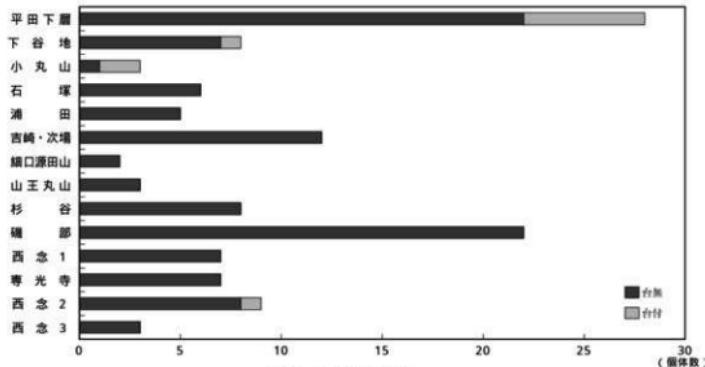
1) 西念・南新保遺跡出土土器は、弥生時代中期後半～古墳時代まで連綿と続いており、中期後半は3期に区分されている。今回は、この時期区分に従って、時期ごとに算出した。

	壺										甕										
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計(個体数)	A	B	C	D	E	F	G	H	計(個体数)	
下 谷 地	31.3	18.8	2.1	4.2	25.0	12.5	2.1			4.2	100% (48)	86.7	35.8	4.5	3.0					100% (67)	
小 丸 山	24.0	36.0			20.0	12.0				8.0	100% (25)	41.4	31.0	13.8	6.9					100% (29)	
平 田 下 層	25.3	18.7	4.0	5.3	24.0	8.0	4.0			10.7	100% (75)	57.2	21.0	7.2	2.2	1.5	1.5	5.1	4.3	100% (138)	
平 田 上 層	10.8	3.6	14.3	3.6	32.1	21.4	3.6	3.6	3.6	3.6	100% (28)	50.0	25.0	5.0	5.0					100% (20)	
松 ジ ル	22.2	33.3				44.5					100% (9)	22.2	33.4	11.1	11.1					100% (9)	
石 塚	16.3	39.5				25.6	11.6	2.3		4.7	100% (43)	57.9	22.2	13.3	2.2					100% (4)	
浦 田	35.5	16.1	3.2		9.7	22.6				12.9	100% (31)	60.0	8.0	8.0	12.0	4.0	8.0			100% (25)	
古崎・次堀	12.5	39.5				25.0	25.0				100% (8)	65.0	15.0	20.0						100% (20)	
細口瀬田山	20.0	46.7			13.3	20.0					100% (15)	75.0	12.5	12.5						100% (8)	
山 王 丸 山	26.7	53.3	6.7	6.7						6.7	100% (16)	57.2	21.4						7.1	14.3	100% (14)
杉 谷	27.8	27.8				16.7	5.5			22.2	100% (18)	37.0	11.1	33.3					14.8	3.8	100% (27)
鐵 形	27.0	13.5	1.1	2.2	25.8	21.4	5.6			3.4	100% (89)	95.3	24.2	9.1	0.4	1.4	6.4	1.8	1.4	100% (219)	
西 念 1	32.4	10.8		2.7	24.3	21.6				8.1	100% (37)	41.8	14.9	22.4					5.9	7.5	100% (67)
専 光 寺	60.0	10.0				30.0					100% (10)	42.4	16.7	24.2					1.6	12.1	100% (66)
西 念 2	36.6	28.3	1.7	1.7	28.3	1.7	1.7				100% (60)	26.4	12.1	29.7	1.1				23.1	7.7	100% (91)
西 念 3	38.5					30.7	23.1			7.7	100% (13)	25.0		28.6					46.4		100% (28)

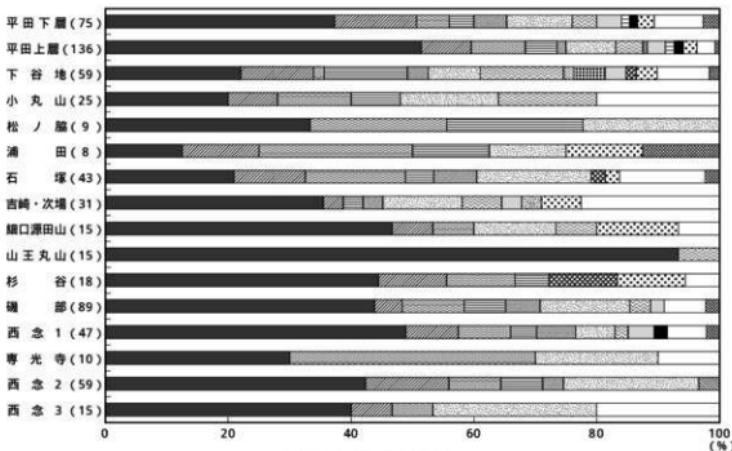
第3表 壺・甕 類別構成比



第11図 鉢 類別構成比



第12図 台付鉢の比率



第13図 壺文様構成比

含まれていない。逆に石川県地域、特に北加賀では四線文系の台付鉢が出現する時期であり、この点が地域差となってくる。

## (2) 口縁部文様構成比率について (第13・14図 第4~6表 図版186)

平田遺跡出土土器の特徴の1つに、口縁部を貼付するものがある。従って、口縁部全体からみた文様構成と、貼付口縁の文様構成の2つに分けて考えてみたい。

### a. 口縁部の文様構成

#### [壺]

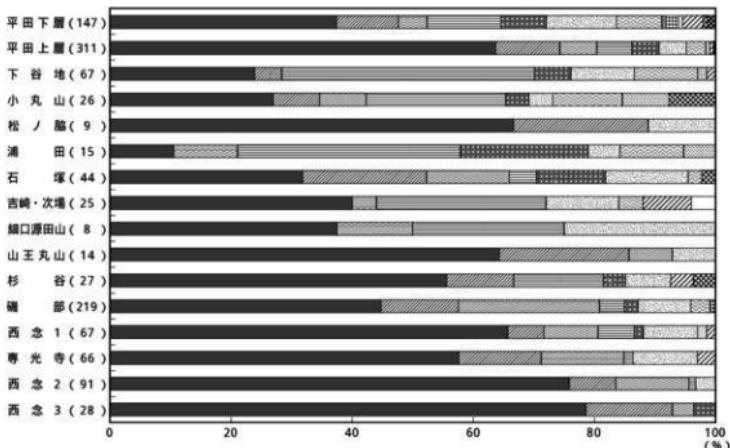
文様構成比……概に無文化傾向は読み取れないようである。全体的な傾向としては、押圧による小波状口縁（グラフでは内側押圧）・フリル状突起・斜行短線文は新しい時期（中期末）になるとほとんど見られなくなる。綾杉文は中期後半を通して内外面とも多く見られる。地域別で見ると、新潟県地域では斜行短線文の比率が高いようである。平田遺跡、下谷地遺跡、西念・南新保遺跡1期では、それぞれ種類は異なるが文様パターンが豊富である。平田遺跡では、上層の方が文様パターンが多い。いずれも中期後半の中では古相を呈する遺跡である（必ずしも併行するというわけではない）。

施文部位の比率…明らかな傾向は見出せなかった。時期が下るにつれて内側から端部下へと変遷するのではという予測もあったが、傾向としては言えない。ただし、下谷地遺跡や吉崎・次場遺跡の時期は端部下の施文がごくわずかであり、それ以降の時期は増加するということは言えるかもしれない。全体的な地域傾向としては、新潟県地域は内側施文の比率が高い。

#### [糞]

文様構成比…全体的な傾向として（遺跡差はあろうが）、時期が下るにつれ無文化が進む。また、壺同様、新潟県地域では斜行短線文の比率が高く、平田遺跡では文様パターンが豊富である。

施文部位の比率…無文化が進むことは先述したが、逆に内側施文が減少する傾向が窺える。注目される点



第14図 瓷文様構成比

〔第13・14図凡例〕	
■	11. 内側・円形
■■	12. 2部位・連続
■■■	13. 2部位・斜格子
■■■■	14. 沈線・斜格子
■■■■■	15. 2部位・綾衫
■■■■■■	16. 外側・連続
■■■■■■■	17. 外側・山形
■■■■■■■■	18. 外側・斜格子
■■■■■■■■■	19. 外側・綾衫
■■■■■■■■■■	20. 外側・押圧
■■■■■■■■■■■	21. フリル状突起

	無文	端部連続	端下連続	内側連続	2部位連続	内側綾衫	内側斜彎	外側綾衫	外側斜格子	合計
下谷地	6	1	1							8
小丸山	3									3
平田下層	17	1	2	1		2	1			24
平田上層	23							1		24
石塚	5					1				6
浦田					1			4		5
吉崎・次場	6	4				2				12
網口源田山	1					1				2
山王丸山	2			1						3
杉谷	7							1		8
穂部	12	1		2	6	1				22
専光寺	4					3				7
西念1	2	8						1		9
西念2	3	2						1		3
西念3								6	3	136
計	96	7	3	2	3	3	12	1		

第4表 鉢文様構成比

は、内側施文の比率である。新潟県・富山県地域、能登地域での比率と北加賀地域の比率との間には大きな差が見られる。地域様相の類似性を示唆する上での基礎データの1つとなり得ると考えられる。

#### 〔鉢〕

文様構成・施文部位比率…数が少ない中の比率であるため、あくまでも可能性でしかないが、地域により施文される文様比率が異なるようである。新潟県地域では端部刺突、能登地域では端部+内側刺突(2部位)、北加賀地域では綾衫文・斜格子文(内側・外側)の比率が高い。時期に関わるような文様差は見出せなかつた。

1) 端下=端部下、連続=連続刺突文、円形=円形刺突文、三角=三角形刺突文。2部位というのは、外側と内側、端部と内側など2つの面に施文する個体を指す。

器種	壺				甌				鉢			
	下層		上層		下層		上層		下層		上層	
部位	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
貼付の有無	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
無文	43.4	21.5	54.9	50.0	37.6	60.0	63.7	29.9	76.2	100.0	66.7	
壺部・連続	10.6	28.7	5.7	17.8	13.8	10.0	10.6	1.2				
壺下・連続	2.9	14.3	7.4	4.8	6.1	10.0	6.1	1.2				
内側・連続	5.0	7.1	4.9	3.2	12.4		5.8		37.9			
内側・押圧	8.2	7.1	0.8	1.6	6.7		4.5		24.7			
内側・縫杉	11.1		9.0	14.5	12.3		4.5		1.7			
内側・斜切	7.3	7.1	4.0		7.5		3.2					
内側・菱形			0.8		0.1	10.0						
内側・三角					0.9							
内側・円形	1.8		0.8		0.5		0.6					
2部位・連続	1.5		2.5		1.8		0.6					
2部位・縫杉				1.6								
2部位・斜格子	0.3				0.1							
沈刷・斜格子	0.6			1.7		0.1						
外側・連続		7.1										
外側・押圧					10.0							
外側・山形			1.7		0.1		0.4					
外側・縫杉	4.1	7.1	2.5	6.5				1.7	9.5		33.3	
外側・斜切	0.9		2.5					1.7	14.3			
フリル状突起	2.3		0.8									
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.0	100.0	100.0	100.0	100.0

第5表 平田遺跡出土土器 口縁部の貼付別文様構成比 [%]

## b. 貼付口縁の文様構成

まず、貼付口縁の比率を見ると、壺では11遺跡中7遺跡で見られる。概して新潟県地域は比率が高く、中でも平田遺跡が突出している（第6表）。鉢も7遺跡で確認されているが、甌の場合と異なり、比率の違いはそれほど見られない。どちらの器種でも新潟・富山県地域と能登地域に多いところが特徴としてあげられる。甌では、平田遺跡にしか認められなかった。当遺跡でも930個体中、12個体（1.3%）という低い比率であるが、他遺跡には全く確認されていないことも合わせ、当遺跡<sup>1)</sup>の特徴の1つとして考えたい。

そこで、平田遺跡出土の貼付口縁について考えてみたい。貼付口縁全体における割合は、下層出土土器では壺54%・鉢19%・甌11%である。甌が多いように思われるかもしれないが、これは甌の総個体数が膨大であるため、個数は多くても比率が低くなってしまうことによるものである。上層では壺82%・鉢18%で、甌は1点も確認されなかった。

まず、口縁部形態別における貼付口縁の比率をみると（第7表）、外反口縁では全体とほぼ同様の比率となった。無頭口縁の場合（甌はないが）、比率が断然大きくなり、甌64%（外反口縁では13%）、鉢32%（外反口縁では11%）を占める。無頭口縁の貼付比率が高いことは容易に想像でき、当然の結果であるとも言える。

次に、貼付口縁に施される文様について。貼付口縁と貼付されない口縁（以下貼付無口縁）とで文様構成比をみると（第5表）、貼付口縁は文様の種類が限定されているのが窺える。壺は無文・連続刺突文・縫杉文・甌は無文・連続刺突・縫杉文・内側押圧、鉢は無文・縫杉文・斜格子文・斜格子文という3～4種類に限られる。いずれの器種も無文が50%以上を占め、特に鉢では76%にも達する。それに対し貼付されない口縁では、文様種類が5～12種類となり、どの器種も増加する。ただし、鉢はそれほど変化が見られない。貼付の有無に関係なく文様の種類が限定されるようである。全体で見ても、無文・連続刺突文・押圧による小波状口縁・縫杉文・斜格子文の5種類である。貼付有無による文様構成比をみると、貼付口縁

	あり	なし	比率(%)
平 田	61	313	16.3
下 谷 地	5	49	9.3
小 丸 山	3	25	10.7
東 石 壇	2	43	4.4
次 場	4	31	11.4
移 谷	1	18	5.3
磯 部	2	89	2.2

第6表 壺・鉢貼付の比率

	全 体	外 反 口 縁	無 頭 口 縁
壺	16.3	12.8	63.6
甌	1.3	1.2	
鉢	25.3	11.3	32.1

第7表 平田遺跡出土土器 口縁部形態別貼付の比率 (%)

ではいずれの器種も、下層より上層のほうが無文の比率が低くなり、逆に貼付無口縁では無文の比率が高くなる。全体としては時期が新しくなると無文化が進むということで、貼付無口縁はそのまま傾向と合致するが、貼付口縁では逆の傾向が見られることは興味深い。

### (3) 器面調整について

器面調整については特に統計をとらなかったので数値として提示することはできないが、ある程度傾向が見出せるため、それについて述べておきたい。

まず、ハケ調整について。中期中葉（櫛描文最盛期頃）では、外面は全面タテあるいはナナメハケで同方向に調整するものが多数を占めるが、時期が下ると口縁ータテハケ、体部一ヨコあるいはナナメハケというように体部上位で明らかに方向を変えているものが目立つようになる。中には、体部上位のみ異なる工具（大体は粗い目のハケ）でヨコハケを施したり（ex. 第20図16）、簾状文風に単位を短くしているものも見られる（ex. 第20図25）。これらは、文様（櫛描直線文、簾状文）を意識したものであり、櫛描文の崩れととらえることが可能である<sup>1)</sup>。平田遺跡では（330）などがあるが、目立ってヨコハケをするものは多くない。ただし、口縁と体部以下の調整が別方向にされているものが主流となっている。

次に、ナデ調整について。北陸では凹線文系土器の波及と共にヨコナデが広く普及する。新潟県では現在凹線文系土器は確認されておらず、波及しなかったのではないかという考えが主流となってきている。ただし、凹線文系土器波及期に併行する時期から口縁部や頸部をヨコナデする土器が増加し、間接的には影響を受けている。平田遺跡では口縁から頸部をヨコナデするものがほとんどであるが、北加賀地域のようにしっかりと端部の面をとる、というようなものは少なく、崩れた感じを受ける。これは県内の土器に共通して認められるものである。ただし、（267・268）のように頸部まで強くヨコナデするものはあまり見られない。平田遺跡出土土器のなかでも新しい方に位置づけられるのではないだろうか。

### (4) 容量組成について

土器の容量組成から時間的変化を追うことや作り分けの程度を分析したりする試みは1980年代頃から活発になってきた。特に東北・北陸地方では小林正史氏が精力的に研究を続けられている（小林 1998a）。

当遺跡出土土器は復元可能な個体が多数出土したため、有効なデータが得られるのではないかと思い、当遺跡出土土器の容量組成、他遺跡との比較を行いたいと考えた。しかし、筆者が力量不足のため、方法からデータの比較まで、先学諸氏（特に小林氏）の研究成果に便乗した形になってしまったことを最初にお詫びしておきたい。

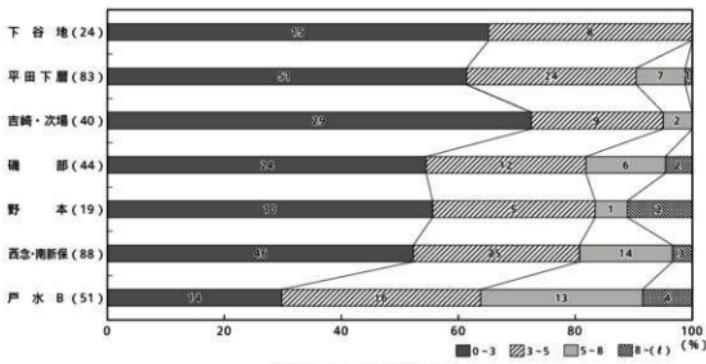
#### a. 分析方法

主に小林氏が実践されている分析方法を参考にさせていただいた。測定方法は中点円柱法（藤村 1981）を用い、底部まで残存する土器のほか、器高の2/3以上（推定）残存する土器を対象とした。容量は口縁部までの容量であり、「実質的に内容物を入れたと推定される部分」つまり「有効容量」ではない（小林 1995）。

#### b. 他遺跡との比較（第15図）

中期後半期の北陸地方と新潟県の遺跡とを比較してみたい。他遺跡のグラフは小林1994を引用させて

1) 金沢市教育委員会 増山仁氏のご教示による。



第15図 瓢容量組成の比較

いただき、下谷地遺跡のグラフは小林1998をもとに作成した。ここでは0~3ℓを小型、3~5ℓを中型、5~8ℓを大型、8ℓ以上を特大型と呼称する。下谷地遺跡では全て中型以下であり、大型は見られない。それに対し平田遺跡では大型の比率が高くなっている。概して、時期が下るにつれ大型の比率が高くなることは、以前から指摘されている通りである。現在吉崎・次場遺跡と下谷地遺跡が併行すると考えられていることから、平田遺跡は下谷地遺跡よりも新しい様相を有する。ただし、その比率については地域によって異なると思われる。新潟県では現在、凹線文系土器波及の波は達しなかったのではないかと考えられており、土器の変化も停滞的になるため、北陸地方よりも大型の比率が低くなると推測される。

#### c. 平田遺跡出土の甕（第16図）

上層、下層の各遺構から出土した土器（上層11点、下層83点）を対象とした。下層では1~2ℓのものが最も多い。5ℓまでの中型が大多数を占め、9ℓ以上の大型は1個体も認められなかった。それに対して上層では0~1ℓのものが最も多く、最大でも3.8ℓであった。グラフからは、時期が新しくなるにつれて小型化することが指摘できる。しかし、上層の測定個体が11個体と少ないため、確定性に不安が残る。そこで口径平均値を求め比較してみたところ、下層（183個体）18.7cm、上層（30個体）16.3cmという結果が出た。当遺跡ではA類が主体となり、A・B類を合わせた比率は下層78%、上層75%で、口径の縮小化はそのまま容量の小型化につながると考えられる。この傾向は、北陸・在地系の流れとしては矛盾しない。しかし、当該期に出現する凹線文系土器は概して大型であり、それらは在地系と補完関係にあると考えられている。凹線文系土器が存在しない越後で、その実態をどうとらえるか現段階では判断できない。今は事実を述べるにとどまり、今後の資料増加を待ち改めて検討したい。

#### d. スス付着との関係（第16図）

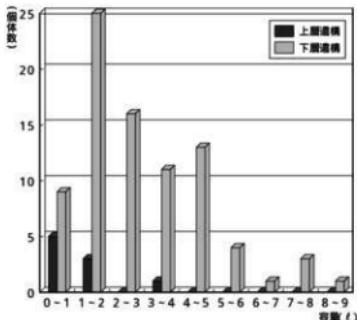
器面のススやコゲの付着は、器形や使用法の違い、また内容物や水分量によってそれぞれ異なるため、それらの詳細な観察によって用途の違いなどを推測できると考えられている（小林1993）。

ここでは、スス・コゲの付着状態を4つに分類し、容量との関係をグラフ化した。

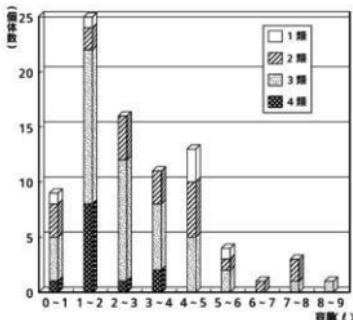
1類…内外面ともスス・コゲの見られないもの。

2類…外面のみスス・コゲが見られるもの。

3類…内外面とも部分的にスス・コゲが見られるもの。



第16図 平田遺跡出土甕 容量組成（層別）

第17図 平田遺跡出土甕（下層）  
スヌ付着と容量組成の関係

4類…内外面とも全面スヌ・コゲが見られるもの。

概して言えることは、容量の小さい方にのみ4類が認められるということである。しかし、その逆の傾向—大型には1類・2類が多くなるような傾向は見出せなかった。1類に関しては同様である。ただし、容量の測定できない甕も観察したところでは、小型と大型には2類が多く見られる傾向がある。1・2類は液体の煮沸用と考えられ、小型であれば飲食用、大型であれば液体煮沸用の用途が推測される（小林1991）が、今回の結果ではそのようにはっきりとした傾向は見出せなかった。

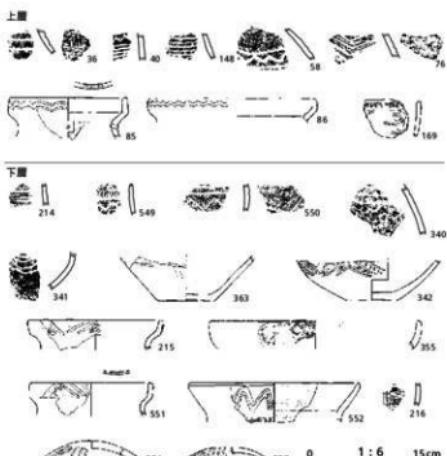
### (5) 外来系土器について

先述した通り、当遺跡からは少量ながら中部高地系、東北太平洋系、東北日本海系、東海系、近江系の土器が出土しており、折衷型もそれ認められる。これから、県内の類例も含め系統ごとに見ていくたい。

#### a. 中部高地系

（第18図・第20図下）

上層 壺・甕がある。壺では頸部の平行沈線、胴部の沈線山形文が見られ、甕では受口状口縁、頸部櫛描縦状文や櫛描波状文を垂下文で区切るといったものが見られる。これらはいずれも中期後半を3段階に分けた場合2～3期に多く見られる文様・器形である。ただし、85の口縁部の沈線上向き連弧文は中部高地には



第18図 平田遺跡出土の中部高地系土器

見られないという<sup>1)</sup>。

下層 壺・甕・蓋がある。壺では頸部平行沈線、沈線山形文、体部の沈線連弧文、山形文、直線文が見られる。342は沈線山形文の間に縄文・爪形文を施している。これは2期に多く見られる文様パターンである。

また甕では受口状口縁（地文縄文）に沈線山形文を施すもの、縄文のみのものや、内傾口縁で櫛描波状文、頸部廉状文のもの（552）<sup>2)</sup>がある。552を除けば中期後半2期新段階～3期に見られる。蓋では十字状に沈線を入れるものがある。地文に縄文が施されるものは1期に見られる。当遺跡のものは縄文が入らないので、若干新しいと言えるかもしれない。

中部高地の土器として、長野市松原遺跡の土器を挙げた（第20図）。平田遺跡で出土している小片は、およそそのような器形になるものと予想される。

やはり松原遺跡からも外來系土器が出土している。東北系（第20図44・45）、北陸系との折衷（第20図46～54）土器が見られるが、観察したところ胎土は全て在地のものであり、搬入品と思われる土器は認められなかった。その辺の土器の動き等は興味深いが、今後の課題としたい。

〈折衷〉 口縁形態・モチーフが中部高地系、その他は北陸系と考えられるものに、壺24（図版34）、133（図版39）と甕53（図版36）がある。548（図版72）はモチーフのみ中部高地系である。（重）山形文は北陸では見られない文様である。逆に、文様は北陸系、器形が中部高地系と考えられるものに、壺233（図版45）がある。185（図版43）も器形がこの系統に入ると思われる。また、器形は北陸系で、本来櫛描文様が施文されるかわりに縄文を施すものが甕298（図版51）、377（図版57）、547（図版72）である。上層、下層とも中期後半2～3期に位置づけられると考えられる。県内では、信濃川上流域、魚野川流域を中心に、北は村上市砂山遺跡まで存在し、広い分布域を持つ。



第19図 平田遺跡出土の東北系土器

1) 長野県埋蔵文化財センター 青木一男氏のご教示による。

2) この土器については、中期後半とは言い難いとのご指摘を受けた。このような口縁部形態は後期初頭であり、また幅のある波状文を施すものは後期前半から見られるということである（青木氏）。

特に、中心地域ではこの系統が主体となり、文化圏の違いを窺わせる（第22図参照）。

北陸系を主体とする遺跡（下谷地、小丸山、松ノ脇）ではいずれも中部高地系が定量出土している。下谷地遺跡では、甕に横羽状文や体部中位の連続刺突文などが施文され、古い様相を示す。中部高地でも1期の様相ははつきりしていないが、2期以前に併行すると思われる。小丸山遺跡では波状文や縦羽状文が見られ、また無文の受口状口縁甕も存在（この個体は折衷型の可能性もあると思われる）することから、2～3期併行と考えられる。松ノ脇遺跡では頸部簾状文や波状文、また受口部外面に波状文を施すなど、新しい要素が多くなり、おむね3期併行と考えられる。平田遺跡出土土器は2期新～3期と考えられる。越後出土の土器と比較してみると、受口状口縁が目立つこと、折衷型が多いことが挙げられる。

#### b. 東 北 系（第19図・第21図上）

上層 甕・壺がある。壺は1本描きによる沈線重連弧文と同心円文を持つ体部（34）がある。同心円文を下向き重連弧文により連繋するものは、太平洋側地域ではほとんど見られず、山形市七浦遺跡に類例がある（第21図56・59）（加藤他 1986）。また、内唇口縁に沈線連弧文が施されるもの（51）、満巻文または同心円文の下に縄文が施される胴部（77）と、C字文の重なりが見られる体部（78）が見られる。それから、甕84（図版37）・134（図版39）もかなり変容しているがこの系統に含めておきたい。また、口縁、体部に下向き重連弧文を持つ33は、棒状工具で文様を描いており、東北地方で見られる鋭い籠描文様とは異質のものである。半円形で完結するタイプの下向き連弧文も珍しい。（35）は小さい注口が4つつくものと思われるが、類例が現在のところ見当たらない。

〈宇津ノ台式系〉（第21図68～81参照）平行沈線と山形文の施文される頸部（第19図79）と、重菱形文の施される体部（同80）がある。

〈折衷〉 1（図版33）の文様、調整などは在地のものと全く同じであるが、内唇口縁・やや長頭で体部が張り出す器形は東北系の影響と思われる。

下層 甕・甕・蓋がある。甕では口縁が内唇し沈線連弧文が施されるものがある。頸部は平行沈線に垂下文が入るもの、胴部は満巻文の下に縄文のあるものとないものの2者が見られる。甕では、外反口縁で頸部に平行沈線、体部に結節縄文の施されるもの（419）と、胴部に満巻文または同心円文が施され、C字文で隙間を充填するもの（561）がある。満巻文は通常甕に施文される文様であり、甕には見られないもので、非常に珍しい。

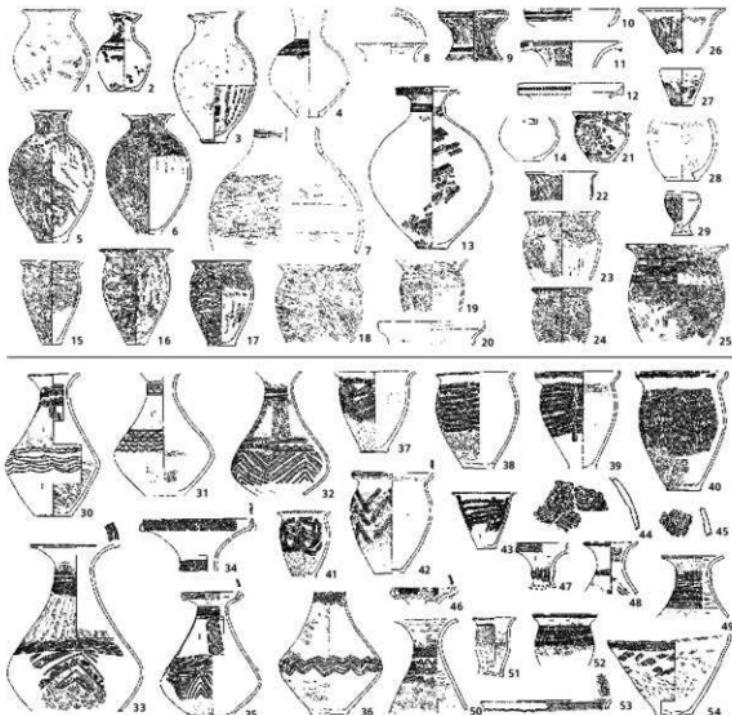
〈宇津ノ台式系〉 甕・器種不明のものがある。甕は頸部の上下に平行沈線、連弧文を持つもの（560）、重山形文あるいは重菱形文をもつものがある。560の下向き連弧文の部分は、本来山形文や菱形文が施されるものであり（ex. 第21図69・80など）、変容していると考えられる。562は甕の可能性が高いと思われるが、当該地域での甕の実態が明らかでないため器種不明とした。また、19（図版34）、299（図版51）、565（図版73）などのように口縁内面に斜格子文と平行沈線を施すもの、宇津ノ台遺跡に類例が存在する。宇津ノ台遺跡では斜格子文（第21図72・75・76）のほか、綾杉文（第21図71・73・75）、円形刺突文（第21図63）も見られ、それらの一群は櫛描文系として認識されている（馬目 1983）。一方、299（図版51）のような斜格子文に沈線が入るものは、現在のところ当該地域のほかには佐渡でしか確認されていない。従って、宇津ノ台遺跡出土の櫛描文系土器の祖型？が佐渡に存在したと言えよう。越後側では検出されていないため、海路による波及が推測されるが、あくまでも現段階でのことであり、今後の資料増加によっては変わる可能性もある。

下層の土器は、満巻文と縄文の組み合わせ、ほとんどが1本描きで施文すること、沈線部分にミガキが

施される（ただし1条おきではない）ことなどから、およそ川原町口式<sup>1)</sup>に相当すると考えられる。

県内では、下谷地遺跡、小丸山遺跡ではほとんど見られず、「山草荷式」で有名な加治川村山草荷遺跡（中村他 1970、高橋<sup>田</sup>前掲）など日本海沿岸域を中心に存在する（第22図参照）。佐渡では、下畠玉作遺跡（計良<sup>田</sup> 1972）で出土している。山草荷遺跡では、2本描きによる沈線渦巻文、重三角文といった東北系土器のほか、重菱形文の宇津ノ台式系土器も見られる。それらの中には櫛描重菱形文<sup>2)</sup>も確認でき、在地系との折衷型も存在する。山草荷遺跡出土土器は川原町口式併行とされており、平田遺跡とほぼ同時期のものということになる。

内野手遺跡では口縁部に重連弧文を持つ壺が検出されている（田村 1999）。2本描きであり、沈線間



第20図 各系統の土器1 北陸系（上段）・中部高地系（下段） [13=1/20, その他=1/12]

平田遺跡出土土器と類似するもの、また該地における外来系土器を主に抽出したもので、全体様相を表すものではない。

1) 山草荷式と川原町口式は同義語として使用される場合もあるが、本稿では系統=土器の源流地域との認識から、川原町口式の名称を使用した。

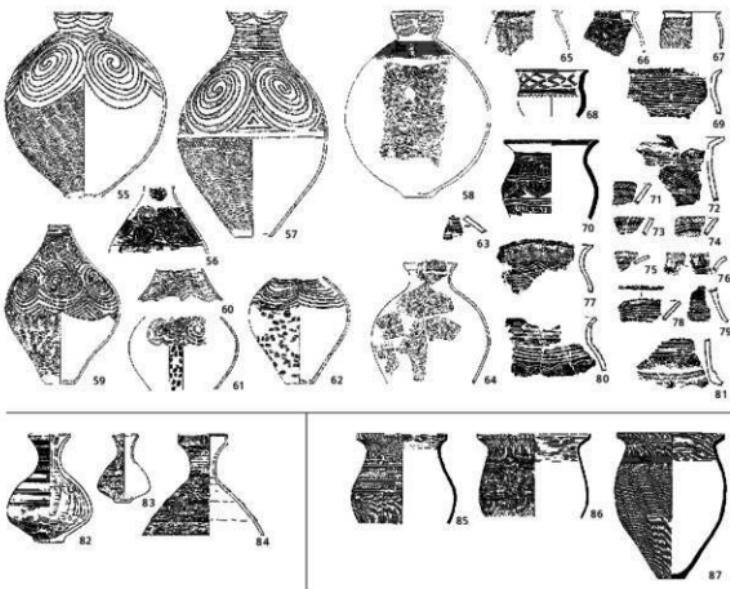
2) 櫛描菱形文が施される壺は、山北町間ノ内遺跡（須藤 1987）、加治川村山草荷遺跡（高橋<sup>田</sup>前掲）でも確認できる。また、櫛描山形文は上記2遺跡のほか、新潟市石動遺跡（廣野 1997）、豊栄市松影A遺跡（埋文事業団平成11年調査：未報告）で出土している。

の間隔が狭いこと、浮文が文様連結部に貼付されないなど後出的な様相を示す。

また、長松遺跡では宇津ノ台式系が見られる（田辺 1991）。重菱形文の連結部に縦方向の刺突を施す甕や、頸部に山形文と平行沈線を施した折衷的な甕もある。重菱形文+縦方向刺突の甕は松ノ脇遺跡でも出土している。佐渡では、浜端洞穴遺跡（中川 1969）で認められる。

宇津ノ台式については、当該地域の様相が明らかになっていないこともあり、その編年的位置づけについては見解の統一をみていない。山形県の編年でみると第IV期（加藤他 前掲）に併行するものと思われる。県内では山草荷遺跡、長松遺跡など日本海沿岸域に分布しているが数は多くない。

全体でみると、その位置づけは前述の第IV期（須藤編年）の5期（須藤 1996）に併行するものと考えられる。下肩と上肩ではそれほど大きな違いは見られないが、上肩土器における施文の崩れ、類例がない土



第21図 各系統の土器2 東北系（上段）・東海系（下段）・近江系（下段右）

[68~81]=1/8, その他=1/12]

#### 第20・21図出典

- |   |                                   |
|---|-----------------------------------|
| 1.11.15.16.18.19.26.27 金沢市磯部運動公園遺跡<br>（増山 1988）           | 55.57.64.67 会津若松市一ノ坂B遺跡（芳賀他 1988） |
| 2 金沢市松寺遺跡（河合 2000）  | 56.60.61 山形市七浦遺跡（加藤他 1986）        |
| 3.13 七尾市細口源田山遺跡（土肥 1982）                                  | 58 会津若松市門田条里遺跡（石川 1999）           |
| 4.7~10.12.20.23.25.28.29 金沢市西念・南新保遺跡<br>（楠 1996）          | 59 山形市西高等学校校地遺跡（加藤他 1986）         |
| 5.6.14.21 富来町山王丸山遺跡（堤 1994）                               | 62 山形市南河原遺跡（同上）                   |
| 17 金沢市戸水B遺跡（中屋 1994）                                      | 65.66 福島市勝口前畠遺跡（斎藤 1995）          |
| 22 高岡市石塚遺跡（山口 1988）                                       | 63.68~81 大曲市宇津ノ台遺跡（橋 1985）        |
| 24 金沢市専光寺養魚場遺跡（増山 1992）<br>30~54 長野市松原遺跡（飯島 1993・青木 1998） | 82~84 清洲町ほか朝日遺跡（石黒他 1994）         |
|   | 85 近江八幡市出町遺跡（兼康 1989）             |
|   | 86 新旭町針江北遺跡（同上）                   |
|   | 87 彦根市妙楽寺遺跡（同上）                   |

器の存在などを考えると、若干新しい要素を抽出でき得る。ただし、東北では中期末段階になると半截竹管状工具で2本描きが行われるようになるが、当遺跡ではそのような土器は確認されていない<sup>1)</sup>。

#### c. 東海系（第21図82～84参照）

東海系・近江系の「系統」という語については、前述したように「元の系譜がこの地域に辿れる」という広い意味で使用する。41（図版35）は、器形が東海地方に系譜を求められるのではないかと思われる。内脣口縁を持つ細頸壺は福井県以西には見られるが、以東では認められない。県内では下谷地遺跡から貝田町式の壺、小丸山遺跡から伊勢湾周辺に系譜が辿れる壺が出土している。

#### d. 近江系（第21図85～87参照）

200（図版44）、280～282（図版50）、494（図版67）、566（図版77）はそれぞれ器形は異なるが、近江に系譜を求められる可能性がある。

近江西部型（岩崎 1989）と呼ばれる壺は、全体に粗いハケで調整し、受口部外面にヨコハケ、頸部～体部にナナメハケを施すものである。頸部のナナメハケによって受口部を作り出すような感じである<sup>2)</sup>。200、282、494は形態こそ異なるが、ハケ調整の方向に共通性を見出せる。県内に類例はないが金沢市西念・南新保遺跡（第20図20・25）で確認されている。280、281、566は所謂近江系のものは全く異なり、折衷型と言えるかもしれないが、受口状口縁ということでここに含めた。特に566の円形刺突文は在地の要素と思われる。受口状口縁の壺は金沢市磯部遺跡や西念・南新保遺跡、高岡市石塚遺跡（第20図22）にも存在する。近江から北陸地方に至るまで在地の要素など取り入れながら変容し、佐渡へ波及した可能性も考えられる。

#### e. その他

25（図版34）は器形に類例が求められない。内脣口縁で頸部が直線的なものは東北系に見られるが、頸部はこれほど張り出さない。中部高地系では内脣口縁の壺が存在するが、これほど頸部がしまらない。調整は在地系と言えるが、体部にタテハケが密に施されるところなどは異質な感じがする。現段階では系統不明である。301（図版51）は蓋あるいは脚部と考えられる。地文純文に平行沈線を施す例は中部高地で多く見られるが、壺の頸部～体部に限られ、蓋には施文されない。また、器形は東北に類例があるが、このような文様構成のものは確認できない。従ってどの系統、折衷型にも分類できなかった。

### （6）平田遺跡出土土器の編年的位置づけ

これまでみてきた項目もあわせて、平田遺跡出土土器の特徴を挙げる。

- ① 体部文様がほとんど消滅し、文様は口縁部に集約される。
- ② 壺の類別構成比ではA類の比率が下谷地遺跡とほぼ同じである。また、壺・甕とも多くの類が存在する。
- ③ 壺C類が多く見られる（上層）。
- ④ 受口状口縁壺が多く、バラエティーが豊富である。
- ⑤ 台付鉢が多い。脚部も多く出土（中・下層で100点）している。
- ⑥ 壺・甕とも無文の比率が高い。その一方で文様のパターンが多い。中でも円形刺突文の多さ（他遺跡と比較してのことであり、絶対的な量としては少ない）が特徴と言える。

1) ただし、半截竹管ではなく簾状工具で2本描きを行った可能性のある土器は存在する。

2) 福井県埋蔵文化財センター 赤澤徳明氏のご教示による。

⑦ 貼付口縁の比率が高い。壺にも施すものがある。

⑧ 容量組成では下谷地遺跡よりも新相を示す。

越後では現在、中期後半を3期区分する編年案が示されている（田中他 1999）。いずれの遺跡もある程度の時間幅があり、それぞれが重なる時期もあると思われる。

当遺跡出土土器の編年位置づけについて、結論から言うと、上記の特徴、他系統との併行関係から、II期～III期に併行するものと考えられる。主体はII期にあり、一部III期に下るものもあると思われる。

まず、無文の比率が高いこと、容量組成で中型の比率が増加していることなどから、平田遺跡の土器は下谷地遺跡のものよりは確実に新しいと言える。しかし、類別構成や文様構成からみた場合、下谷地→小丸山→松ノ脇は変化の段階を追うことが出来るが、平田遺跡は独特の様相を示すため、その流れには入れられないということになる。例えば壺H類、I類や円形刺突文、沈線+斜格子文などは越後では確認されていない。これは佐渡という立地の違いによるものと思われるが、佐渡島内に比較できる良好な資料が現段階では少ないため明言できない。そのため、併行関係にあると考えられる小丸山遺跡・松ノ脇遺跡と比較しても、下限の位置づけは困難であり、曖昧なものにならざるを得ない。

さらに、この時期北陸地方で編年の目安となっている四線文系土器が、県内では存在しないことも1つの要因である。北陸系土器の波及経路と考えられる能登・富山でも四線文系土器は未確認であり、新潟も四線文系土器そのものは波及しなかったと考えている。ただし、口縁へ頭部のヨコナデや筒形状の頭部、くの字状口縁の壺などは存在し、また金井町藤津遺跡では脚部に沈線が入るものが出土地している。したがって、四線文系の要素（四線文系と在地系の折衷型とも言えるが）は流入したと言えよう。

平田遺跡出土土器と北陸の土器とを比較してみると、大きく異なる点が上述したものに加え3点ある。1つめは特徴⑤に挙げた、在地系台付鉢の存在である。北陸では四線文系の台付鉢、高杯は時期が新しくなるにつれ増加し定量を占めるが、在地系のものはごく少ない<sup>1)</sup>。それに対し新潟においては北陸系主体の遺跡では大体出土している。

平田遺跡では上述したように100点以上脚部が出土している。全体に占める割合は5%と少ないが、この個体数は特筆される。形態には大きく分けて2種類あり、棒状のものとそうでないものがある<sup>2)</sup>。特に、棒状のものは越後でも確認されていない。このような台付鉢の多さは新しい様相を示すものと思われる。

2つめは特徴④に挙げた、受口状口縁壺のバラエティーの豊富さである。受口状口縁壺自体はよく見られ、特に北加賀地域ではこの時期から近江系の受口状口縁壺が一定量を占めるようになる。しかし在地系との折衷型のものは少なく、さらに越後では全く出土していない。このことも新しい様相の一つとして捉えられるのではないかと考える。

3つめは特徴③に挙げた、壺C類の多さである。下層出土土器では少いが、上層では高い比率となっている。平田遺跡では、新相でC類が増加する傾向が見出せるが、このような長頸・球胴の壺は北陸・越後ともごくわずかである。

これらの要素を考慮すれば、下層出土土器もIII期まで下る可能性があると考えられる。上層出土土器については、溝出土資料ということもあり、下層土器よりも相対的に新しいということのみで、厳密な時期設定は行うことは困難である。ただし全体的に見てそれほど時期差は感じられず、中期末までの時期に

1) ただし、四線文系の影響が見られる在地系台付鉢は、西念・南新保遺跡（楠 前掲）で1点確認できる。

2) 棒状のものは高杯とした方が良いのかもしれないが、体部の立ち上がりが急角度になるものが多く、45度のような形態になる可能性も考えられるため、本稿ではすべて「台付鉢」とした。

畿内	石川		富山	新潟				長野	福島	秋田	山形		
	豊	北加賀		中越	佐渡	阿賀北	魚沼						
III	古崎・次場 V-5号溝	下安原 SD101	石塚 Alspit 4号pit 浦田 SK09	(+)	(+)	(+)	(+)	†?	泡ノ森	飯森	地蔵池	日向	
	古崎・次場 V-5号七机	鐵部第3次 SK03							南御山2				
	古崎・次場 I-4号溝	(+)					(+)	長表			津山	堂森I	
	相口源田山	織第 第1・2次		1期	浦田 SD05	下谷地			栗林古 新相	二ツ差	志賀沢	(+)	堂森II
IV	山王丸山	寺光寺	内全 ・南 新保 1	2期	小丸山	平田	山草荷	(+)	栗林中 新相	川原町口	宇津ノ台	堺田	郡之神
	杉野 チャノバタケ	戸木B		3期		根ノ脇 高畠	†?	(長松) (砂山)	牛ヶ首	栗林新 天ヶ (桜井)			
	栗垣須田	鍋		4期		(八幡山) ↓		(+)	(+)	吉田	天王山	(+)	向山 ↓

第8表 土器編年対応表

[久田 1993、田中 1999、寺島 1999、石川 1996、馬上 1986、橋 1986より転載。一部改変]

おさまるのではないかと考えており、およそⅢ期併行と考えたい。後期初頭の様相が全く不明であるため、後期に入る資料も存在する可能性も否定できないが、その点は今後の資料増加に期待するところである。

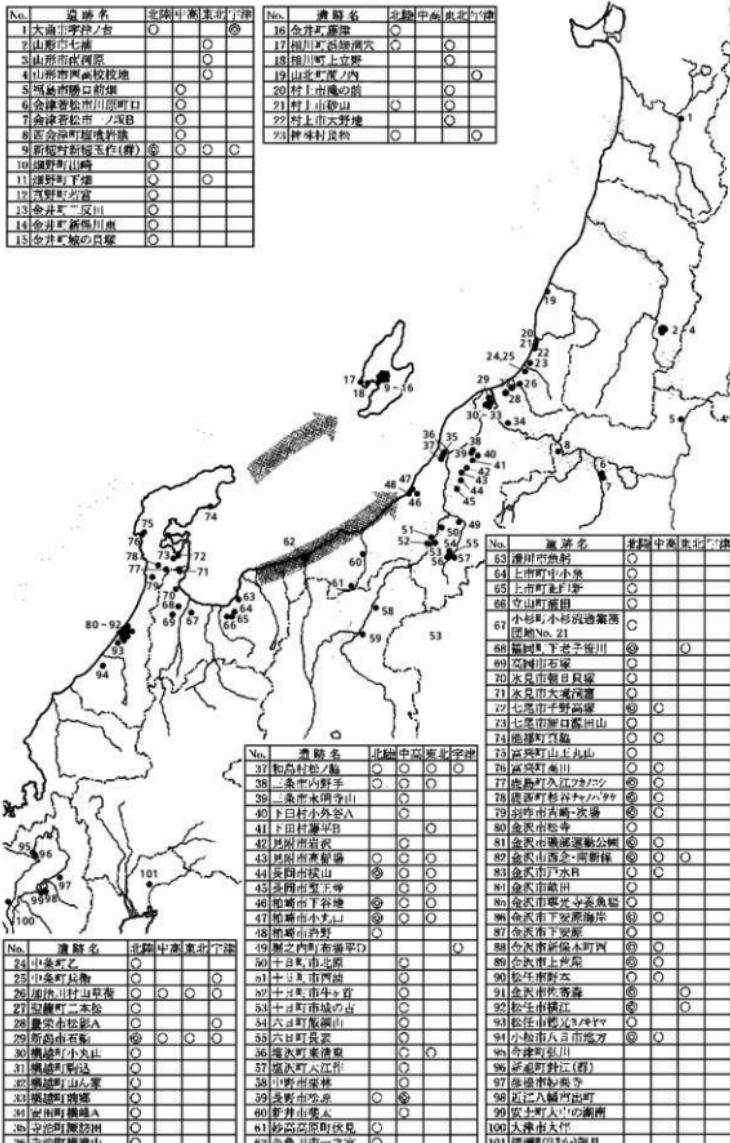
弥生時代中期後半期は、複数系統の土器があり組み、地域によってその構成比率が異なることは、はじめに述べた通りである。そこで、異系統土器の分布状況から、各系統の勢力範囲・波及経路のイメージを図化してみた。これを見ると、水上交通による交流が改めて確認できる。中部高地系は信濃川を下り、北は砂山遺跡まで分布を広げている。また上越地方や富山・石川県地域にも散見されることから、上越経由あるいは岐阜経由で波及したのかもしれない。東北系は阿賀野川を挟んで南北に分布している。北は山草荷遺跡、南は米清東遺跡<sup>1)</sup>まで伸びている。宇津ノ台式系はほとんどが海岸沿いであるが、堺之内町布場平D遺跡（梅川 1995）でも出土している。そのほか、東海系は柏崎沿岸域・佐渡にあり、近江系は佐渡のみである。

佐渡では、県内に見られるどの系統の土器も出土していることが窺える。離島という立地にもかかわらず、このように多様な土器が見られることは、やはり「管玉の大量生産地」によるところが大きいと言えるのかもしれない。

佐渡における当該期の遺跡は玉作遺跡がほとんどであり、当時の一大生産地であったことは周知の事実である。だが、それに伴う土器については、良好な一括資料に乏しく編年的位置づけは困難であった。

所謂「竹ノ花式」と呼ばれていた柳描文系土器は、柳描文最盛期のもので、県内では下谷地段階に併行するものである。今回の調査により、今までの資料よりも新しい段階の土器が確認されたことは、編年作業においても一步前進したと言える。しかし、これは巨大な玉作遺跡のうちのごくわずかな様相にすぎず、編年の確立にはまだまだ資料の蓄積が必要である。玉作遺跡の始まりと終焉の様相が把握できない現段階では、全体について述べることは困難であり、推測の域を超えるものではない。平田遺跡についても、あくまでも事業団調査分についての見解である。近年、玉作遺跡の調査が増加しているため、今後明らかにされる資料に期待するところである。今後の資料蓄積待ち、改めて再検討したい。

1) 堀沢町教育委員会 安立熙氏のご教示による。



第22図 弥生時代中期遺跡分布・波及経路(イメージ)

## 2. 石 器

佐渡玉作遺跡群の中核をなす新穂玉作遺跡の発掘である今回の調査は、弥生時代管玉研究の出発点となつた遺跡群の発掘でもあり、当初よりその成果が期待された。発掘調査の結果は予想通り、專業的な玉作集団の痕跡を垣間見せるものであった。

石器組成には菅玉とその工具となる石器や礫など玉作関係とした資料が、総数4,849点のうち（剥片類を除く）3,570点、約74%を占める。玉作集落の石器組成を物語っている。石斧は扁平片刃石斧である。石包丁等はいずれも小破片で6点と少ない。石鑿は有茎が主体を占める。

器種名	石	鐵	石	石	石	石	不	圓	圓	台	四	石	鐵	石	石	鐵	鐵	形	鐵	鐵	鐵	石	工程	石	鐵	勾	平	角	玉	不明	石	製品	潤	潤	鉛
	打	磨	石	石	石	石	定	形	石	石	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	形	石	鐵	鐵	鐵	工	車	玉	玉	玉	製	片	片	片			
質	質	鐵	鐵	淨	淨	丁	丁	形	石	器	石	石	石	石	石	石	石	形	石	鐵	鐵	鐵	鐵	工	車	玉	玉	玉	製	片	片	片			
数量	46	1	16	14	6	11	72	5	983	8	38	26	15	2	73	2	2	1	699	53	1344	595	824	5	2	1	2	2	1	122	339	5			
計																																			
					</td																														

第9表 平田遺跡 石器器種別数量

### A. 石器各説

石器の資料提示 遺構単位で資料を選択し示した。提示資料は管玉製作の工程品とその工具、石鑿、扁平片刃石斧、磨製石斧未製品、勾玉未製品、玉類、敲石、凹門、砥石、石包丁、不定形石器、原石類などである。管玉製作工程とそれに関わる工具は多く示した(分類はB参照)。

今回示す管玉製作工程品（B参照）は緑色凝灰岩製管玉と鉄石英製管玉、製作工具では石針・擦切具・玉砥石・楔形石器・紡錘車（彈み車）等がある。SB110出土石器の管玉工程品・玉作工具は分類基準と多様さを図示するために多く掲載した。他の住居跡などの出土石器や管玉工程品については各器種と工程の典型を図化した。

実測図を掲載した遺物は、遺物観察表で内容を示した。それを「実測遺物観察表」と呼ぶ。また、掲載外の遺物も全点を器種分類・観察して出土量や工程分類などの分析に利用した。その際に作成した観察表を「実測外遺物観察表」と呼ぶ。記録した遺物は、通し番号の付いたポリ袋に入れ保管用の箱に収納した。

### (1) 主要遺構出土の石器

SB 110 (図版 75-1 ~ 89-174 写真図版 (以下写真) 187 ~ 190)

管玉製作工程品は多く出土しているが、床面直上や1箇所への集中などは少なく工房跡と証明できる出土状況ではなかった。出土遺物は細型管玉製作工程品、玉馱石針あるいは管玉製作工程品、石針製作工程品、擦切具、勾玉未製品、楔形石器、石製紡錘車、閃石、敲石、砥石、石鐵、石錐、剥片がある。

緑色凝灰岩製 細型管玉製作工程（以下細型は略す）（1～76 写真187・188）

1工程(1~9) 1は石核形成途中のもの、礫面にラミナが見られる転石で2箇所に剥離がある。一面が平滑に磨かれているが、その面は打面に利用していない。

1-1工程 2・3は直方体状の石核を作る。2つとも表面の円磨は進んでいない。

1-2工程 4~8は直方体状から板状の石核を作る。

1-3工程 9は漂石を打撃により割り取る。

2工程 (10~12) 10・12は頭部の一稜に擦切溝を施している。10は板状剥片。11は頭部中央に擦切溝が見られる。板状剥片を剥離した石核。12は端部除去剥片と考えられる。

3工程 (13~52)

3-1工程 21~28・36は2工程から角柱状剥片を得る。23は打撃で角柱状剥片を作る。他は頭部に擦切溝を残す。板状剥片から3工程目的剥片を取る際に生まれる端部除去剥片である。

3-2工程 13~16・18・38・40は直方体状や板状の石核から角柱状剥片を取る。図示したものは全て端部除去剥片である。この類は石核から角柱状剥片を得るため大型の剥片が多い。

3-3工程 17は楕円窓の長軸方向に剥離を加え、剥離面から擦切溝を施す面を作り出し、分割して角柱状剥片を取る。

3-4工程 19・20・29・34・35・37・39・41~52は直方体状の石核を施溝分割して角柱状剥片を取る新穎技法をまとめた。31・32・39は大型の角柱状剥片をさらに分割する作業行程が判る資料である。

52は頭部と側縁に擦切溝を持つ少ない例である。43は頭部四辺に擦切溝を持つ。46は頭部と底部に擦切溝を持つ。

3工程の完成形は30mm程と20mm程の2種類がある。47は3工程の1つの目的形と思われる。49は施溝剥離の際、端部が薄くなったものであるが、目的通りの角柱状剥片であれば20mm台の典型である。3工程製で廃棄される剥片は、一端から施溝され分割し均一な厚さにならなかつたものである。45・49等はその例である。51に見られる底部からの剥離は、台石上で剥離作業を行ったことを証明するものである。44は分割の際、下部を欠損する。

4工程 (53~67) 角柱状剥片のねじれを修正し、正四角柱を作る目的で側面に押圧剥離を施す。四辺すべてに剥離を施す例は少なく、施溝分割された剥離面は比較的平滑のため、押圧剥離されないか(53・55・58・61)、一部に限られる(54・57・59)。64~67は側面の押圧剥離の後、研磨作業に入る。

5工程 (68~71) 68は12面体に研磨される。5工程の最終に近く、6工程の穿孔に入っている可能性もある。いざれも一端が欠損しており、作業効率を上げるために粗い作業が原因とも考えられる。

6工程 (76) 本工程に分類した多角柱は1点で長さ21mm、片側穿孔される。

7工程 (72~75) 4点の7工程品はすべて片側穿孔。72~74は完成品と言えるが、研磨作業が終了しても細かな稜は残る。

勾玉未製品 (77 写真188) 濃緑色の珪化の進んだ緑色凝灰岩の小礫を素材にする。外側縁には滑らかな自然面を持つ。表面は研磨され、内側は押圧剥離によって抉られる。左面には穿孔の取り掛かりとなる径0.7mmの抉りがある。

鉄石英製 管玉製作工程 (78~110 写真188)

1工程 (78~81)

1-1工程 79・81は素材を平板に分割し、その分割面を打面に調整剥離を行い三角形状の石核を作る。

1-3工程 78・80・83。78は漂石を素材に自然面に擦切溝を施し、角を打撃し分割する。80は分割面に剥離を加える。

2工程 (82~86) 82は礫の長軸方向を両極打法で板状の剥片を得る。83・84は石核から板状剥片を

作る。85は頭部に擦切溝を持つ端部除去剥片。86は剥離作業中に破損したものである。

### 3工程（88～99）

3-1工程 91は擦切溝の底部には幅4.8mmの分割具の打痕が見られる。

3-2工程 94～97。94はやや薄いが綫長の角柱状剥片を取る。95・96は横長剥片を取り、端部を調整している。97は端部に自然面を持つ。調整中に頭部が薄く剥離されたもの。90は側後に施溝し分割する。側面剥離もあることから4工程と考えても良い。

3-3工程 87～89・93は稍円窪を素材に施溝分割している。93・98・99は打撃で角柱状剥片を取る。

3-4工程 92は頭部の三辺に擦切溝を持つ。

4工程（100～104） いずれも側面調整の押圧剥離を施す。101と104は擦切溝を残す。103は潔面を研磨し平坦面から剥離する。104は潔面を残し四面に剥離が入る。

5工程（105～108） 105・106は多角柱に研磨を始めたばかりのもの。106は端部が折れている。107は13面体で5工程完了に近いが一端が折れる。108は10面体に研磨されるが、器体の空隙のため放棄されたものか。

7工程（109・110） 109は片側穿孔。終孔部には器壁に向かい内側からの微細剥離が全周に見える。ほぼ完成品と思われるが稜が残る。110は両側穿孔。外面の稜は磨かれ目立たないが、破損している。

### 玉鶴・メノウの石針および管玉製作工程品（112～117 写真189）

4工程（112～114） 33点とも綫長剥片を素材に側面剥離を施す。いずれも自然面を残す。玉鶴やメノウの転石・漂石が遺跡に多量に持ち込まれる。剥片剥離は縦を長軸方向に置き両極打法を用いる。

5工程（115） 5面体に研磨され始める。

完成品（116・117） 116は12面体に研磨されている。磨痕は長軸方向からやや斜め方向に残る。両端は欠損している。外面に回転の擦痕はない。117はメノウ製石針の完形品である。長さ20.8mm、太さ2.6mm。先端部に回転の痕跡があり光沢を帯びる。

### 石針製作工程（118～132 写真191）

1工程（118・119・120） 118は潔面を残す石核。90度の打面転移が行われ、自然面から剥離がなされる。119は自然面を残す石核調整剥片。120は打ち割り面を打面に持つ剥片。緑色凝灰岩1～2工程の板状の石核に分類する。

2工程（121・122） 121は板状の石核の自然面を取る端部除去剥片である。122は頭部の両側縁に擦切溝を持つ典型的な板状剥片である。端部が薄くなり放棄されたものであろう。

3工程（123～128） いずれも頭部に擦切溝を施す。123は板状剥片から角柱状剥片を得ている。124～126は隣り合う2辺に擦切溝が見られる。施溝分割を繰り返す資料である。127・128は更に分割が進んだもので、3工程の目的剥片に近いが、端部が薄くなり放棄されている。

4工程（129～131）側面剥離が施されている。

完成品（132） 円錐状の石針である。長さ7.8mmと短い。側面と端部には回転痕がない。上端部は斜めで角は削り落とされている。この短い石針の使用には疑問が残るが再生品の可能性もある。

擦切具（133～141 写真189・190） 長さ59～152mm、幅31～91mm、厚さ8～15mm。三角形から略方形。刃部は石英の層状構造の縞模様に対し平行に研ぎ出されることが多い。擦切具の作り方は、板状に剥がれる石材の周辺を長方形に剥離する。その後、長辺部を表裏面から研磨し、断面がU字形あるいはV字形の刃部を作る。これをそのまま使う（136）か三角形状（133）・台形状（134）に削取り使用

したものと思われる。141は長さ88mmと小さいが刃部加工前の素材と思われる。

**砥石 (142・143)** 完形品はない。142は破損品のため全体形は不明。中央部は使い込まれて厚さ約5mm。砥面は表裏面。143は凝灰岩製玉砥石片。

**楔形石器 (144～149)** 石材は鉄石英と玉髓・メノウが全てを占める。管玉素材の施溝分割の型として利用されたと考えられる。144は鉄石英製で上端部の幅が5mm、149は両端に剥離のある安山岩剥片か。打製石鎌・石鎌未成品 (150～160) 11点出土した。使用石材は7種類と豊富である。基部まで確認できる製品は全て有茎式である。長さは25mm以下150～153で重さ1g前後と、完形ならば長さ35mm以上で重さ2.5g・3.1g (153・155) に二分できる。155は未成品の可能性もあるが側刃が左右対称に張り出し5角形で特徴的である。157・158は欠損のため形態は不詳であるが大型の石鎌である。(156・159・160) は未成品。

**石錐 (161・162)** 2点出土した。161は分厚い多角形で尖端部に錐部を作る。162は一定の幅の棒状で一端に錐部を作り出す。蜂屋分類 (蜂屋1985)によれば前者はⅡ類、後者はⅢ類になる。

**紡錘車 (163)** 凝灰岩の中央を敲打により両面から穿孔する。長さ66mm幅56mm、厚さ27mm。孔の径は11～12.5mm、端部は敲打後に研磨し円形に近づける。肉厚なため紡錘車よりも弾み車に分類した方が良いか。

**凹石類 (164～172)** 安山岩を主に利用した凹石が6点出土した。凹石と敲石の機能が一体化している点や大きさなどは縄文時代のそれと区別がない。170は僅かな磨痕があるか。171は側縁部を利用している。172は玉髓の裸を利用し、上下端部に敲打面がある。

**不定形石器・剥片 (173・174)** 173は玉髓剥片の一辺に連続する微細剥離がみられ、抉りもある。174は一辺に使用によって生じたと思われる連続する微細剥離がある。

#### SB114 (図版89～175～93～242 写真190～191)

出土石器は緑色凝灰岩と鉄石英の管玉製作工程、石針製作工程、擦切具、砥石、楔形石器、石鎌、不定形石器、扁平片刃石斧、磨製石斧未成品、剥片等である。

**緑色凝灰岩製 管玉製作工程 (175～198 写真190)** SB114から1工程石核は出土していない。175・173は2工程。179は3工程2。180は精円小縫に剥離を加え柱状にしていて、表裏面に自然面が残る。184は長さ40.2mmの大型品である。185は長さ34.5mmの4工程である。192～195の5工程は一端を欠く。198は長さ22mmの6工程で孔は貫通しない。

**鉄石英製 管玉製作工程 (199～211 写真191)** 199の石核は蹠素材で自然面を残す。200・201は小縫を分割している。203は縫を柱状に剥離し、一面に研磨痕を持つ。208は頭部に2分割用に擦切溝を持つ。

**石針 (212)** は板状剥片で表裏面を打撃で調整する。(213～215) の3工程は板状剥片を素材とする。224の完成品の端部中央は僅か窪み回転使用が考えられる。

**擦切具 (225)** は長さ171mm、刃部長148mmで中央が内側する。断面形は片刃状である。(228) は上下2辺に刃部を持つ。

**砥石 (231)** は4面に砥面を持つ。

**楔形石器 (234・235)** は玉髓の小楕円縫を利用する。

**磨製石斧未成品 (241)** は擦切技法を用いる。(242) は扁平片刃石斧成品。自然面の残りから偏平縫が

素材と思われ、断面形から掠切技法が窺える。

#### SD 114 (図版94-243~248 写真192)

緑色凝灰岩製 管玉製作工程 (244) は小梢円碟を素材に施溝分割を行う。上端を調整し打面を作り、施溝分割を行う。接合資料。(245) は管玉成品。長さ 17.8 mm。

その他の玉類 (246) は長方形で粗く研磨され、一端が欠損。穿孔は不明。長さ 37 mm。  
石 錐 (247) 鉄石英製。完形品。

#### SB 115 (図版94-249~95-279 写真192)

緑色凝灰岩製 管玉製作工程 (249~258) 249は1工程3類の小碟素材の石核。250は2工程板状剥片で下部が欠損する。252~254は頭部に平行する掠切溝を持ち、2工程板状剥片を素材とする事がわかる。256は6工程で片側穿孔である。

鉄石英製 管玉製作工程 (259) は碟素材の2工程品。(261) は碟素材から3工程角柱状剥片を得る。(262) は側面研磨。(264) は両端欠損。

石針製作工程 (265) は碟素材で小型の板状剥片を分割し始めた2工程石核。(266・267) は小碟を用いた3工程。

掠切具 (268・269) 268は両刃に鋭角的な刃部を持つ。

その他 (270) は砥石で中央に窪みを持つ。砥面は1面で破損する。(271) は自然面を持つ玉髓製の楔形石器。273は扁平片刃石斧完形品。(274~277) は凹(くぼみ)石および敲石。(278) は玉髓製石核で被熱により外皮が黒変する。(279) は玉髓製楔形石器。

#### SD 115 (図版96-280~284 写真192)

280は砥石、砥面は2面。筋状痕跡がある。282は小型の扁平片刃石斧。長さ 38 mm。283は敲石。端部に打痕有り。284は褐灰色安山岩碟の表裏面に鋭い溝が刻まれる。玉類には用いない石材である。

#### SX 111 (図版96-285~290 写真192)

炭とチップ類が多量に廃棄された状態で検出された。水洗選別で多くの工程品が検出された。そのうち緑色凝灰岩の5工程品が一端欠損の状態で検出され、損傷状態と廃棄の関連が注目される。287は長さ 26.4 mm。290は玉髓の4工程。

#### SX 116-1・116-2 (図版96-291~97-298 写真193)

玉作関係石材が一括出土した。管玉石材は緑色凝灰岩のみである。工程は1から3工程で、3工程の大形剥片が注目される。291は板状剥片を探る典型的な2工程の石核である。292は立方体に近い板状剥片の頭部中央の角に施溝する。未分割であるが、準備の施溝がなされたものは次(3)工程に分類した。295は同じく頭部中央に掠切溝を持つ。292・293の2点だけでは作業の規則性を見出すことは難しいが、施溝や分割など同一作業をまとめて行うことが読み取れるか。296は石針材2工程の板状剥片。297は掠切具で刃部に研磨はない。台形状の規則的な割れは、台形の底辺を刃部にする意図も考えられる。

## SX 117 (図版98-299~306 写真193)

管玉石材は鉄石英の2点以外、緑色凝灰岩が18点。いずれも2・3工程で比較的大型の剥片が目立つ。302は頭部中央の角に施溝、未分割。石針材(304・305)も頭部に擦切溝を持つ。施溝をまとめて行う等、製作工程を窺うことができる資料と思われる。

## (2) 各遺構出土の石器 (図版99-307~100-343 写真193・194) 遺構名は観察表参照。

石製品 (307) は両端欠損、両側縁も磨かれ面を持つ。器種不明。

管玉製作工程 緑色凝灰岩 (308~312・324・325・337)。鉄石英 (322)。309は緑色凝灰岩6工程、被熱し表面が発泡する。337は側辺に擦切溝を持つ珍しい緑色凝灰岩3工程。

砥 石 (313・315・323・334・335・338・342・343) 313は白色凝灰岩製の置砥石。315は軟質で緻密の緑色凝灰岩製砥石。偏平盤を利用し、砥面は2面にある。浅い筋状の使用痕が見られる。管玉製作工程の4工程以降の研磨に用いられたと考えられる。類例は342・351・353。323の砥面は2面あり、一端には深い横筋がある。338は軟質で緻密な白色凝灰岩製。砥面は2面あるが主要面は平滑に調整されている。背面には鋭い2条の平行線を刻む。

石針材 (314) は珪質の安山岩が使用されている。

勾玉未成品 (320) は灰褐色多孔質の安山岩を用いる。長さ26mm、幅12.6mm。

玉 類 (326) は横幅11mmの緑色凝灰岩製の有孔玉。全面に粗い研磨が見られる。

石包丁 (329) は石包丁破片。今回の調査ではこの一点のみ確認された。

石 鐸 有茎式 (316~318・321・327・330)。凸基式 (331・333)。平基式 (328)。凹基式 (332) は両側縁が括れる。

紡錘車 (336・340) は有孔の円盤状石製品。周縁を剥離や敲打で整形し一部研磨している。

敲 石 (339) は蛇紋岩で下半を欠損する。

磨 石 (319) は線状痕がある。

凹 石 (341) は台石の使用が予想される。窪みは深く、3面にみられる。

## (3) 包含層・表採の石器 (図版100-344~101-377 写真194)

勾玉未製品 (344) は穿孔で粗い研磨がみられる。

角 玉 (345・346) 345は穿孔途中で破損している。四角柱に剥離、研磨している。計良分類のA類「四角玉」で、新穂玉作遺跡に特徴的なものである(計良 1950)。

管玉製作工程 鉄石英 (347~349・370・375~377)。緑色凝灰岩 (367~369)。メノウ (350) は5工程。

砥 石 (351~354) 緑色凝灰岩の偏平盤を使用した目の細かなもの351・353と、352の安山岩を使う目的粗いものがある。

紡錘車 (355・356) は周縁を敲打により整形し、上下面を研磨する。

石 鐘 凸基式 (357・362)。有茎式 (358~361・363)。最大の363は長さ46mm。

石 錐 (364・365) は断面形葉が三角から菱形で厚く仕上げる。先端に使用痕はない。

模形石器 (366)。

玉類（371）は三角形に剥離し、各面を粗く研磨する。

扁平片刃石斧（372・373） 373は長さ47.5mm、いずれも蛇紋岩を使う。

磨製石鏃（374）は淡緑色、側縁刃部はゆるく外彎し器厚は薄い。基部近く中央に両側穿孔があり、平基を僅か削りこみ、痕跡的な茎を作り出す。長さ21mm。

## B. 平田遺跡の細型管玉の特徴と工程の分類

ここでは各工程を提示し、佐渡島の弥生時代中期の管玉製作技術を検討したい。

**細型管玉** 細型管玉は緑と赤の二種類がある。1つは淡黄緑色から濃緑色を呈し、長さ9.0～14.7mm、直径2.1～3.0mmのものである。この管玉の石材は緑色凝灰岩あるいは碧玉と呼ばれているものである<sup>1)</sup>。

もう一方は赤色から暗赤色の細型管玉で、長さ12.7～14.8mm、直径2.4～2.6mmを計る。從来、鉄石英あるいは赤玉と呼ばれる<sup>2)</sup>。

緑色と赤色に分類される管玉のほかに、淡灰白色から淡灰緑色の珪化した凝灰岩製の管玉も少数見られる。管玉表面が風化作用で製作時の色調が失われたものもあると思われるが、石核にも同様の石材が見られる。これらは緑色管玉の範疇に了解されていたものと思われる。

	1工程	2工程	3工程	4工程	5工程	6工程	7工程	完成品	計
緑色凝灰岩	実測	11	9	61	24	15	9	6	2 137
	実測外	167	126	561	134	15	0	0	1,003
	サンプリング	5	4	139	45	11	0	0	204
	計	183	139	761	203	41	9	6	2 1,344
鉄石英	実測	5	10	22	9	10	4	2	0 62
	実測外	109	50	205	74	9	0	1	0 448
	サンプリング	0	1	51	23	10	0	0	0 85
	計	114	61	278	106	29	4	3	0 595
普通質灰岩	実測	3	5	17	7	1		2	35
	実測外	46	18	250	42	0		3	359
	サンプリング	3	6	320	98	2		1	430
	計	52	29	587	147	3		6	824

第10表 管玉製作工程別数量

### (1) 緑色凝灰岩製 細型管玉の製作工程 (第25図 写真124上)

#### 原石(素材)の選択

遺跡で検出される原石には自然面が見られ、緑色凝灰岩・鉄石英(赤玉石)とも転石・漂石がそのまま搬入され利用されていたと思われる。緑色凝灰岩原石の大きさは1工程石核から見ると大人の握り拳位かやや小さいものが多く利用されていたと思われる(図版75-1~3)。礫面の摩滅は少なく遺跡付近の河

1) 石材は第VI章 自然科学分析 参照。緑色管玉素材は、石材鑑定の結果「珪化した酸性凝灰岩」と「珪化した酸性火山岩」と呼ぶ。本文中ではこれらを「緑色凝灰岩」と呼ぶ。管玉材の削れた角は非常に鋭く、貝殻状に似た破断面を持ち光沢を帯びる。玉砾石や敲石に使用される緑色凝灰岩は、破断面には光沢がなく珪化は進んでいない。

2) 岩石名:碧玉。微細な石英と赤鉄鉱からなる。分析資料は热水からの珪酸分の沈殿と鉄バクテリアによる鉄分の取り込みで、生成されたと考えられる。

碧玉と呼ばれてきた緑色の美しい管玉素材は、石材鑑定で「珪化した酸性凝灰岩・珪化した酸性火山岩」と呼ぶ。今回の報告書の記述では一般に使われてきた「緑色凝灰岩」を使う。碧玉とは角川『大字源』によれば「青く美しい玉」の意で、碧(へき)一字では「あお・みどり」と読み、字義は「あおいし」「美しい青緑色の石」。佐渡玉作遺跡で作られた緑の玉は、国語的にはまさしく碧玉と呼ぶに相応しいものである。

原で得られる原石を使用していると考えられる。握り拳大の原石が選ばれる一方で、海浜で拾えるような表面の摩滅が進んだ小型の縦長礫も素材に使用している<sup>1)</sup>（図版78-19、90-180、94-244・249）。鉄石英も表面の摩滅度からみて転石や漂石を利用している。原石で最大のものは長さ74.4mm、重さ212.56g。素材は円磨の進んだ楕円礫が選ばれる割合が多い（図版82-78・82、83-87、91-201・203、98-303）。これらは現在も海浜で容易に拾うことができ、弥生時代も緑色凝灰岩小礫と一緒に得ていたものと予想される。

#### 1工程 原石（素材）から略立方体・略直方体の石核を作る

原石（素材）の大きさと目的とする石核により3分類した（1工程1類等は1-1と表す）。

1-1 拳大の礫から打撃により立方体状の石核を作る（図版75-2・3、94-243）。大きさは40mm台から50mm台。次の2工程に備え各面を平坦に仕上げるように意識している。

1-2 打撃によって直方体状から板状の石核を作る。1工程の主体を占めると考えられる。大きさは長さ17~35mm、幅24~77mm、厚さ10~56mmで1-1工程石核よりも全体に小さい（図版76-4~8）。この石核からは2工程を経ることなく、3工程の大型の角柱状剥片が作られる。

1-3 小型の漂石や転石を利用する。長さ40~50mmの楕円形の礫を利用して、主に長軸方向に加押し縦長剥片を得る（図版94-249）。端部を水平に分割・除去し、作業面にする。施溝した縦長剥片（図版78-17、94-244）は、1-3を素材に工程を進めたものである。

#### 2工程 石核から打撃や擦切で板状剥片を探る

この工程資料は、板状剥片と板状剥片を剥離し始めた石核、石核調整剥片、削片である（図版77-10~12、89-175・176、94-244・250、96-291、98-299）。2工程の素材の多くは1-1石核と考えられる。2工程に分類される板状剥片等は少ない。

#### 3工程 角柱状剥片の作出

その方法は4種類ある。

3-1 2工程の板状剥片の一端に施溝して打撃剥離し、角柱状剥片を得るもの。頭部には1条以上の掠切溝を持つ。打撃のみで角柱状剥片を剥離するものもあるが、施溝するものに比べ少ない。

資料の提示：2工程の板状剥片に角柱状剥片を取る目的で施溝したもののは、剥離されなくても3工程に分類した（図版97-295、98-302）。また、掠切溝があっても2工程作成用の施溝は3工程の観察欄には「溝あり」とはしていない。

打撃で角柱状剥片を得る場合は、最低1側面に端部（頭部・底面）を打面に持つ剥離があるものを対象とした（図版77-13、79-23）。

3-2 直方体や板状に作られた石核（1-2）を利用し、掠切溝や打撃でやや大型の角柱状剥片を得るもの（図版78-18・22、90-179、96-293・294など）。この段階で得られる剥片は定型的な角柱状を呈さないものも多い。石核段階の調整剥離痕が見られる場合がある。この角柱状剥片を更に施溝・分割し、小型の角柱状剥片を作る（図版80-31・32・39）。

3-3 楕円礫を素材に、長軸方向を打撃あるいは施溝して角柱状剥片を得るものである。1-3が素材となる（図版78-17）。

3-4 新穂技法と呼ばれる直方体の石核に施溝分割して、素材を得るもの、半截するものである（図版

1) 遺物観察表の備考欄に標素材等の記載があるものが該当する。

96-292, 97-294など)。

#### 4工程 角柱状剥片から正四角柱

3工程の角柱状剥片のねじれや膨らみを押圧剥離によって除去するもの。側面剥離(計良他 1961)、側面打製(寺村 1980)と呼ばれる作業にある。正四角柱を目的としているため、側面を研磨する資料(図版 82-64~67等)も含めた。側面の剥離面が平滑になっていれば必要以上に剥離は加えない。擦切溝による剥離面は比較的平坦であるため、側面剥離は少ない。

資料の提示: 擦切溝・打削による剥離面を作業面にし、少しでも剥離作業を始めたものを含む。4工程以前の側面剥離は対象としない。大きさは3工程角柱状剥片に規定されるため、長さ 11~36.5mm(図版 82-64・67)と差がある。

#### 5工程 多角柱に研磨

正四角柱の側稜から砥石で磨き落とす。作業進行により多角柱から円柱に近くなる。図版 82-71は8面体、70は15面体、68は径 2.5mm に 11 面の研磨面を持ち、円柱に近い。本工程では完全に角を研ぎ落とさず多角柱のまま、次の穿孔に入る。

#### 6工程 多角柱に穿孔

多角柱に穿孔したものと、穿孔途中のものを含む。穿孔終了直後の多角柱は7工程の仕上げ研磨前と同じである。穿孔の方向は、一方向穿孔を採用するが、長い管玉には二方向穿孔が採用される傾向にある。一方向穿孔の場合は、開口部直径は 0.7~2.2mm。終孔部径は小さく(72 は 0.85mm)、その孔口は面取りされている。穿孔の長さは工具の石針と密接不可分だが、図版 100-346 の角玉には長さ 17.9mm の孔が一方向穿孔されていた(穿孔部径の観察は PEAK SCALELUPE 10×を使用した)。

#### 7工程 仕上げ研磨

穿孔を終えた多角柱をさらに研磨して、円柱状にする。研磨途中の管玉と作業終了後の製品が含まれる。工具は梢円形の偏平鑽を利用した軟質の緑色凝灰岩製の玉砥石(図版 99-315・338、100-342・351・353)などの利用が考えられる。艶出しに現在は梢が木砥として利用されているが、今回の調査では仕上げ研ぎに使われたような痕跡を持つ木器は出土していない。

### (2) 鉄石英製 細型管玉製作工程(第26図 写真124下)

鉄石英は緑色凝灰岩よりも硬く緻密で、剥離に規則性を求める難い石材である。そのため3・4工程を比較すると長い角柱状剥片は見られない。この加工の困難さから緑色凝灰岩に比べ、梢円鑽を利用する割合が多い。

#### 1工程

鉄石英の転石・漂石を打ち割り立方体状から直方体状の石核を作り出す(図版 82-79・81等)。また、梢円鑽から打撃や施溝分割で板状剥片(図版 82-78・80・82、83-84・85等)や角柱状剥片を作る。転石・漂石は剥片資料の最大長が 107mm あることや、自然面(表皮)を持つ長さ 85mm の剥片等から観察して 10cm 前後の鑽が集められていたと考えられる。また、長さ 50mm 以下の梢円鑽を利用し、両極打法や施溝分割で目的剥片を得る頻度は緑色凝灰岩より多い。

#### 2工程

鉄石英では緑色凝灰岩に比べ、明確な板状剥片は作り難い。これは石材の性質からくるものと梢円鑽から3工程角柱状剥片を得ていたものが多いことによるものと考えられる(図版 83-87・89・93、91-

201・203等)。

### 3 工程

本工程に分類した278点のうち、擦切溝を持つ角柱状剥片は152点、打撃による角柱状剥片は77点となる。角柱状剥片の長さは平均19.8mmと緑色凝灰岩に比べ短い。

### 4 工程

本工程以下は緑色凝灰岩の製作工程と基本的に同じである。正四角柱を目的とする側面剥離は1面単位で隅へ順に移動するものと(図版83-100・101, 84-104)、1面あるいは2面を連続剥離後、対辺に作業移動する場合がある(図版83-102・103)。

#### (3) 石針製作工程(第27図 写真125上)

管玉に穿孔する石の道具を石針と呼ぶ(図版85-132, 94-224, 写真189・191)。

石針に用いられる石材は「普通輝石安山岩」と呼ぶ<sup>1)</sup>。石針素材も転石や漂石を利用している。石材の表面は風化し、灰白色を呈すが内部は黒色緻密である。原石(素材)は石核の大きさからみて10cm程度と推定される(図版86-118)。他に精円彫の使用もあり長さ50mm前後の礫が選ばれている(図版95-265)。

石針製作工程では施溝・打撃剥離が最も良く取り入れられ、各工程が典型的に示されている(図版92-212~224)。石針は管玉製作工程の5工程相当、多角柱を終了した段階で(円柱に近い)で製品となる。

	1工程	2工程	3工程	4工程	5工程	6工程	7工程	完成品	計
緑 凝 灰 岩	SX111	1	3	27	14	10	0	1	0
	SX116	1	3	6	0	0	0	0	10
	SX117	0	5	13	0	0	0	0	18
	SB110	15	18	97	53	4	1	4	0
	SD110	0	0	4	0	5	0	0	9
	SB114	1	2	93	22	9	1	0	0
	SD114	1	6	5	6	1	0	0	20
	SB115	2	4	34	5	0	2	1	0
	SD115	9	5	24	6	1	0	0	45
	計	30	46	303	106	30	4	6	1
鐵 英 石	SX111	0	1	8	5	3	0	0	0
	SX116	0	0	0	0	0	0	0	0
	SX117	1	1	0	0	0	0	0	2
	SB110	6	6	3	16	4	0	2	0
	SD110	0	0	0	3	0	0	0	3
	SB114	1	3	23	6	5	0	0	38
	SD114	4	2	22	5	2	0	0	35
	SB115	0	1	11	4	2	0	0	18
	SD115	1	4	9	0	1	0	0	15
	計	13	18	76	39	17	0	2	0
普通 輝 石 安 山 岩	SX111	1	0	102	3	1	0	0	0
	SX116	0	1	0	0	0	0	0	1
	SX117	0	0	5	0	0	0	0	5
	SB110	5	3	36	8	0	0	1	53
	SD110	0	0	1	3	0	0	0	4
	SB114	9	6	193	68	1	0	0	279
	SD114	5	4	4	0	0	0	0	13
	SB115	0	2	45	22	0	0	0	69
	SD115	3	1	0	0	0	0	0	4
	計	23	17	386	104	2	0	0	535

第11表 主要遺構工程別・石材別数量(緑色凝灰岩・鉄石英・普通輝石安山岩)

1) 第VI章 自然科学分析 参照。

石針は円柱形（図版92－224、写真125）と円錐形（図版85－132）に2分類できる<sup>1)</sup>。円錐形石針の作用面は太い方である。石針は図示した2点を含め先端部が僅か痩む特徴がある。従来、この石針が果たして穿孔に利用できるのか疑問視する意見もあった。新穂村教育委員会が1998年に調査した平田遺跡から出土した管玉製作工程品に折れた石針が入っていた。管玉孔から石針が確認された例は2点ある<sup>2)</sup>。これらの遺物から石針を利用した管玉穿孔は疑問のないものとなった。

#### (4) 擦切具

擦切具は施溝分割作業に使われる。石材は灰白色から淡褐色の積層状の流紋岩<sup>3)</sup>を使用している。その断面は細かな年輪のように見える。層状に剥離する性質を利用して、遺跡で板状に加工し、刃部を研ぎ出している。流理に対し刃は並行に加工するものを基本とする<sup>4)</sup>（図版86など）。

施溝作業に使われるものの2工程と3工程では溝の幅が違い、擦切具の断面形もそれに対応する（計良由松・勝範 1962）。

#### (5) 平田遺跡玉作関係資料の調査区内の分布

遺跡の面積が数十万m<sup>2</sup>に及ぶ中で、今回の調査範囲はあまりに小さい。そのため今回の分布傾向を平均的な姿を求めることにはならないが、調査区内を微視的に見て資料の分布範囲、石材別の在り方を第12表にまとめた。

緑色凝灰岩										鉄石英										普通輝石安山岩													
1工程	2工程	3工程	4工程	5工程	6工程	7工程	完成品	1工程	2工程	3工程	4工程	5工程	6工程	7工程	完成品	1工程	2工程	3工程	4工程	5工程	完成品												
66			1	1				73	1		1					68																	
67	3	1	1	10	4	1	1	72	1							69																	
68	4	14	2	13	9	2	1	71								70																	
69	2	14	2	10	4	45	2	8								71																	
70	3	13	4	11	5	27	2	1								72																	
71	2	8	3	11	10	1	1									73																	
72	5	24	3	20	30	13	5	44	2	3	1	2				74																	
73	11	1	4	4	22	3	4									75																	
74	60	2	9	11	27	2										76																	
75	59	2	2	2	2	1										77																	
76	58	8	3	1	3	4										78																	
77	57	4	8	2	2	11	9	4								79																	
78	56	1	3	1	23	7	15	1	1							80																	
79	55	1	2	7	7	2										81																	
80	54	1														82																	
81	53	1														83																	
82	52	17	19	77	11	39	94	84	3	14	6	2	2	2		84																	
83	51															85																	
84	50	117	19	77	11	39	94	84	3	14	6	2	2	2		86																	
85	59	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		87																	
86	58	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		88																	
87	57	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		89																	
88	56	1	2	2	1	7	4	1	3							90																	
89	55	1														91																	
90	54	1														92																	
91	53															93																	
92	52	35	50	10	30	33	18	26	92	1	10	1	1	1	1		94																

第12表 工程別・石材別調査区内分布

1) 下谷地遺跡（斎藤他 1979）でも同様に2分類できる。P55。

2) 新穂村教育委員会 小川忠明氏のご教示による。

3) 第VI章 自然科学分析 参照。従来は「石英粗面岩」と呼ばれていた。

4) 傾覆実験では流紋岩の流理に並行で直交する2種類の刃部を作り、管玉材で試した。直交する刃部は作業中に刃部の剥離や欠損が多く生じ、施溝の往復運動が困難であった。

## C. 佐渡玉作遺跡群の研究史

### (1) 管玉製作工程の研究史

管玉の製作工程の研究は計良由松氏による佐渡新穂村玉作遺跡における先駆的な研究が発点となつた。寺村光晴氏の研究（寺村 1966）、さらに越後における玉作遺跡の柏崎市下谷地遺跡（斎藤他 前掲）等が特筆される。

研究史『佐渡史学』第2集（1960）から工程を箇条書きで表すと以下のようになる。

- ・玉材に極めて浅い溝を施し（施溝作業）、整状器で二等分しながら必要な太さの四角柱体を割り取る（半截作業）。
- ・所要の太さに割り取られた四角柱状体の側棱を押圧剥離して角（側棱）を欠き取り、丸味をもたせていく（打ち欠き作業）。
- ・側面を砥石にかけ四角柱から順次、多角柱に研磨して円柱に近づける（研磨作業）。
- ・円柱状に研磨されたものに、金属製の錐で回転しながら孔を穿つ（穿孔方法）。
- ・仕上砥にかけ全体を調整し、つやを出して完成する。

統いて佐渡玉作遺跡の特徴を①各遺跡共、櫛目文を主体とした中期から後期に位置する弥生式土器と、玉の製作資料や石器類を作出し、わが国で最も古い時代の玉作址である。②管玉は各遺跡とも長さ1cm前後、径0.25cm前後、径孔0.15cm前後の細形の製作が主である。鉄石英の太形は発見されていない。③新穂村地内の玉作遺跡C地点（平田遺跡）では、管玉の原料に鉄石英が最も多く使用され、他の遺跡では碧玉が主である。④各遺跡とも必ず石鋸が伴出し、第2工程（施溝作業）で、浅い溝をつけそこより二分しながら四角柱状体に割り取る。⑤荒作り中に穿孔することなく、必ず円柱状に研磨する第5工程後に穿孔される。⑥錐は先端がU形か管状のものを回転し、玉材に関係なく両側穿孔を主体とし、片側穿孔あり。⑦各遺跡とも低地帯や周辺にあり、水田農業が行われていた。⑧硬玉製（ヒスイ）の勾玉も加工されていた。また角玉もある。と玉作の時代と遺物の特徴、素材の種類、製作手法などを鋭く観察した。昭和36年『考古学雑誌』に「後期弥生式文化の攻玉法」（計良・椎名 1961）が発表された。それにより1工程の原石打削から7工程の仕上げ研磨・完成まで製作工程の呼称を確定し、技術復元が完成された。以下に、各工程を概観したい。

#### 1工程 原石打削（原石から石核を得る）

素材を5~6cmに打ち割る。原産地から採取した原石は上下面の打撃調整が多い。河原石は周囲全体に打撃し方形に仕上げる。

#### 2工程 施 溝

方形に調整された素材（石核）に石鋸（掠切具）で深さ4~5mmの溝をつける。施溝工具は石英粗面岩製の石鋸と呼ぶ薄板状の石器で、それを前後に引いて溝をつける。

#### 3工程 半 截

溝をつけた原石の溝の中にのみのような工具を挿入して、加熱して二等分、四等分と切断した。四角柱状体は一個の原石から十数個採れたと思われる。

#### 4工程 側面剥離

四角柱状体は表面を剥離して、次の研磨工程を容易にする。側面を2~3mmずつ剥離し、一側面から四

側面まで繰り返すと、剥離痕ついた丸みを帯びた柱状が出来る。剥離順序は鉄石英では一面が終了すると次の面に移るが、碧玉は対する面(表裏)に移動する場合が多い。上、底面には加工しない。

#### 5工程 研磨

砂岩、粘板岩質の砥石で研磨にかかる。四面剥離の他、三面剥離のみでも研磨にかかるものが意外に多い。三面剥離のみでも研磨しやすい状態になったことを物語る。平砥石を用い荒・中・仕上と変えたであろう。研磨面が14、5面ついているものがあり、10面以上の研磨痕が残るものについてのみ、上面・底面を研磨している。穿孔しない管玉の形をつくる。

#### 6工程 穿孔

片側穿孔が大多数で、両側穿孔は至って少ない。孔径は0.8~1.5mm位である。穿孔具については明らかでないが、孔壁には螺旋状の筋が幾重にも認めら

れるので、金属器を回転しながら開けたと考えられる。穿孔中の破損した孔底中心は微かに突起していることから、穿孔具の先端は凹んでいるか、管状と推定できる。

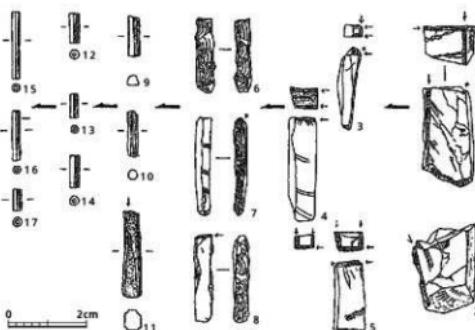
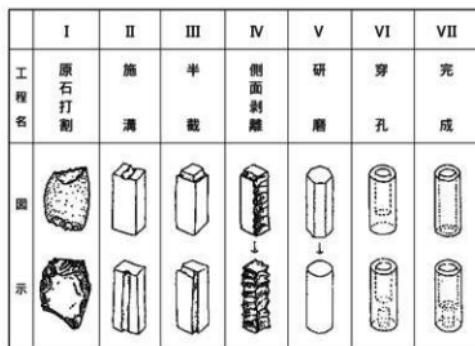
#### 7工程 完成

6工程を経て穿孔されたものに感嘆な調整をして完成している。出来上がった管玉は長さ10mm前後、径0.2~0.3cmの細形管玉であり、孔径は玉の太さに比して甚だ大きい。

ここに弥生時代の管玉製作技術の工程復元が提示され、我が国の管玉研究の基礎となった。

#### (2) 柏崎市下谷地遺跡の弥生時代玉作

『下谷地遺跡調査報告書』(斎藤他 前掲)では佐渡玉作遺跡の土器形式との時間差はほとんどないとされ<sup>1)</sup>、「玉類の製作技法その他非常に似通っており、両者間に強い結びつきがあったと考えられる。」と技



第23図 管玉製作工程 (新穂技法)

[計良・椎名 1961 から転載 一部改変]

術の共通性が指摘されている。玉類の出土量は著しい違いがあり、出土量の多い佐渡は専業集団によるものとし、下谷地遺跡は「室内工業的に製作から消費まで自己の中で完結していたと思われる。」と推測している。玉類の出土量から生産体制を推測する方法は評価すべきで、さらに集落（集団）の需要と流通までも視野に入れた研究が必要であろう。下谷地遺跡でも管玉製作を7工程に分類している。その中でも1から3工程の理解に差がある。

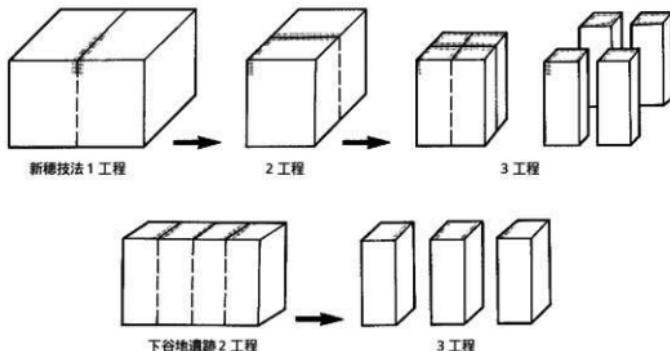
その工程は1工程：原石から石核を作る。2工程：石核から板状剥片を作る。3工程：板状剥片から角柱状剥片を作る。4工程：側稜の調整。5工程：正四角柱から多角柱への研磨。6工程：多角柱への穿孔。7工程：穿孔後の仕上げ研磨。

### (3) 佐渡玉作遺跡と柏崎市下谷地遺跡との技術比較

佐渡玉作遺跡と下谷地遺跡（斎藤前掲）の報告書共に、製作技術を7工程に分類している。下谷地遺跡では1から3工程にかけて、遺物の認識に把握に違いがある。その差をまとめると以下のようになる。

新穂技法<sup>1)</sup>では施溝・半裁を繰り返し、目的の角柱状剥片を得るとされている。下谷地3工程<sup>2)</sup>の角柱状剥片頭部の擦切溝に注目すると、施溝・半裁の繰り返しでは生まれない資料が約1/4あった。それは頭部四辺中の一辺だけの施溝と、平行する二辺への施溝である（第24図下）。頭部の一辺あるいは二辺に擦切溝を持つ角柱状剥片を得るには、打面が平坦な板状の素材でなければならない。そこから下谷地2工程が導かれ、板状剥片を得る根拠となっている。

下谷地3工程ではその板状剥片に施溝して目的である角柱状剥片を割り取る。この3工程で2つの施溝分割技術がある。1つは頭部（端部）に施溝する新穂技法。一方は側面（縁）に施溝する「大中の湖技法」（佐藤 1970）の特徴を持つ角柱状剥片がある<sup>3)</sup>。側面施溝の3工程品は163点中44点、約37%を占め、



第24図 新穂技法と下谷地遺跡2・3工程

1) 寺村光晴 1980 「第一章 研究の基礎的前提 三 攻玉技術の基礎」『古代玉作形成史の研究』で、「新穂遺跡出土遺物においてはじめて注目されたので新穂技法と称している。」と施溝技術の名称を提唱した。

2) 下谷地遺跡の製作工程を、佐渡玉作遺跡の工程と混同しないように「下谷地○工程」と呼ぶ。

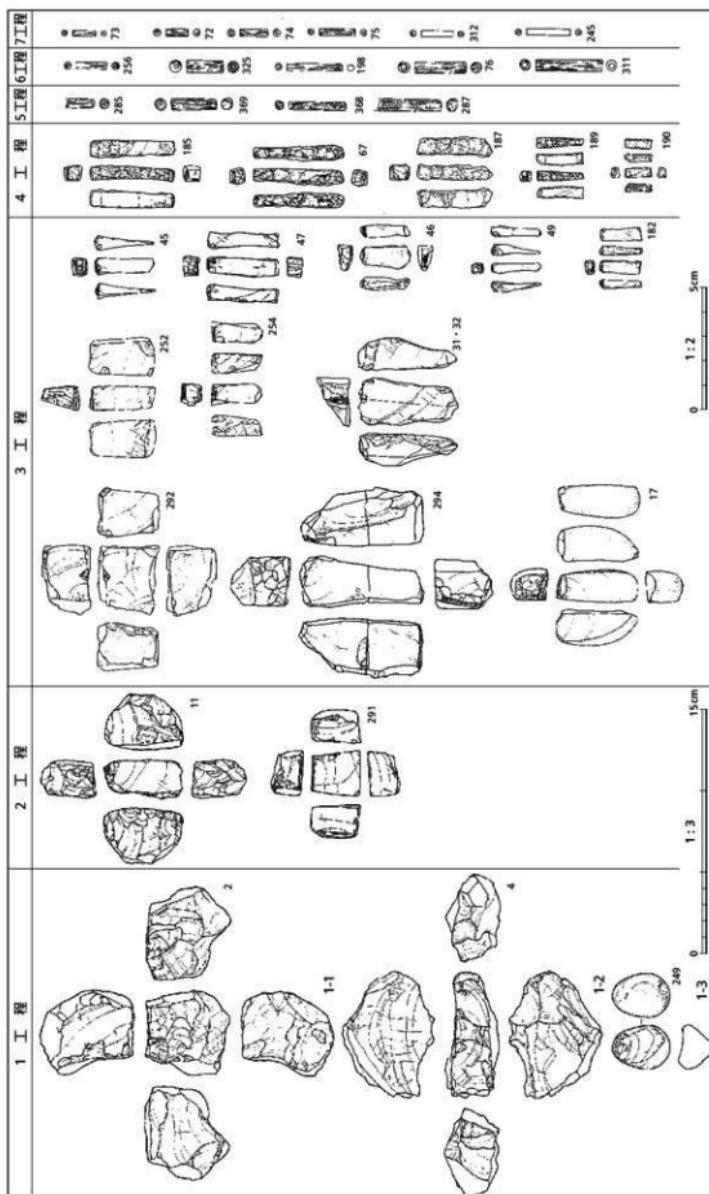
3) 大中の湖技法は側面へ施溝して分割するが、角柱状剥片に押圧剥離を施さず研磨に移行する。分布は畿内から能登半島基部西岸まで、北陸地方西半分と言える。新潟県中央部の海岸近くにある三島郡和島村大武遺跡で、本技法の一括資料が検出された（新潟県教育委員会 平成8年調査：未報告）。

平田遺跡に比べ目立って高い数字である。

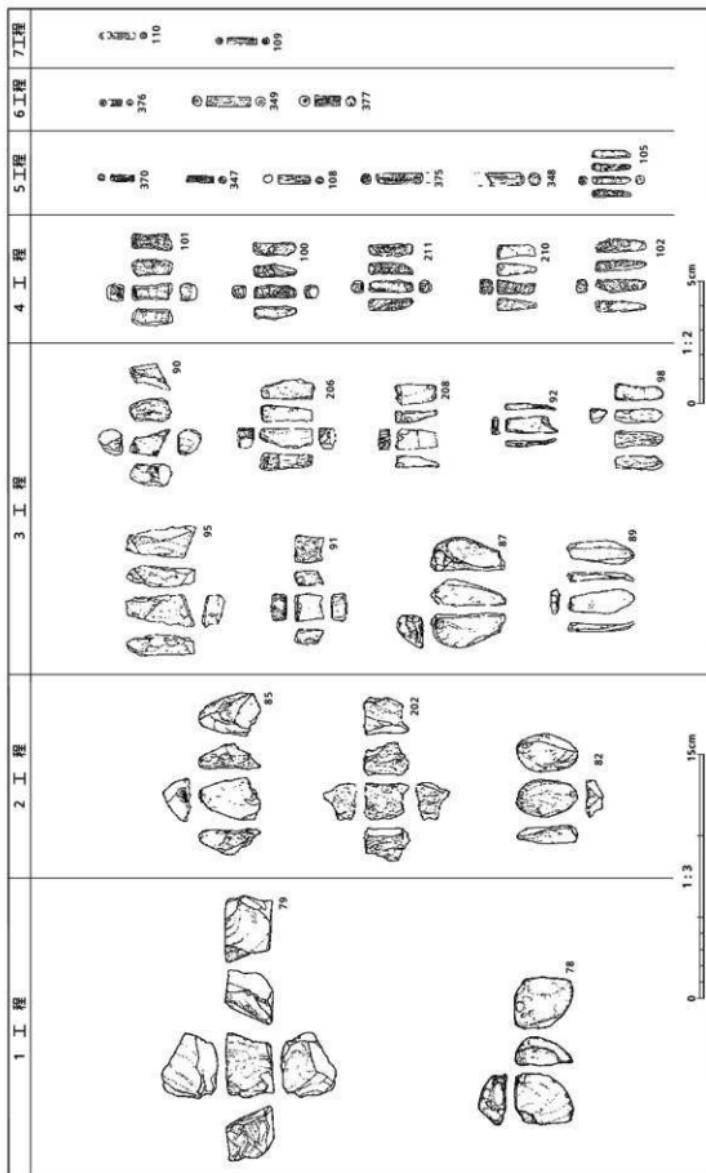
#### D. まとめ

本遺跡の細型管玉の製作工程をまとめると以下のようなになる。

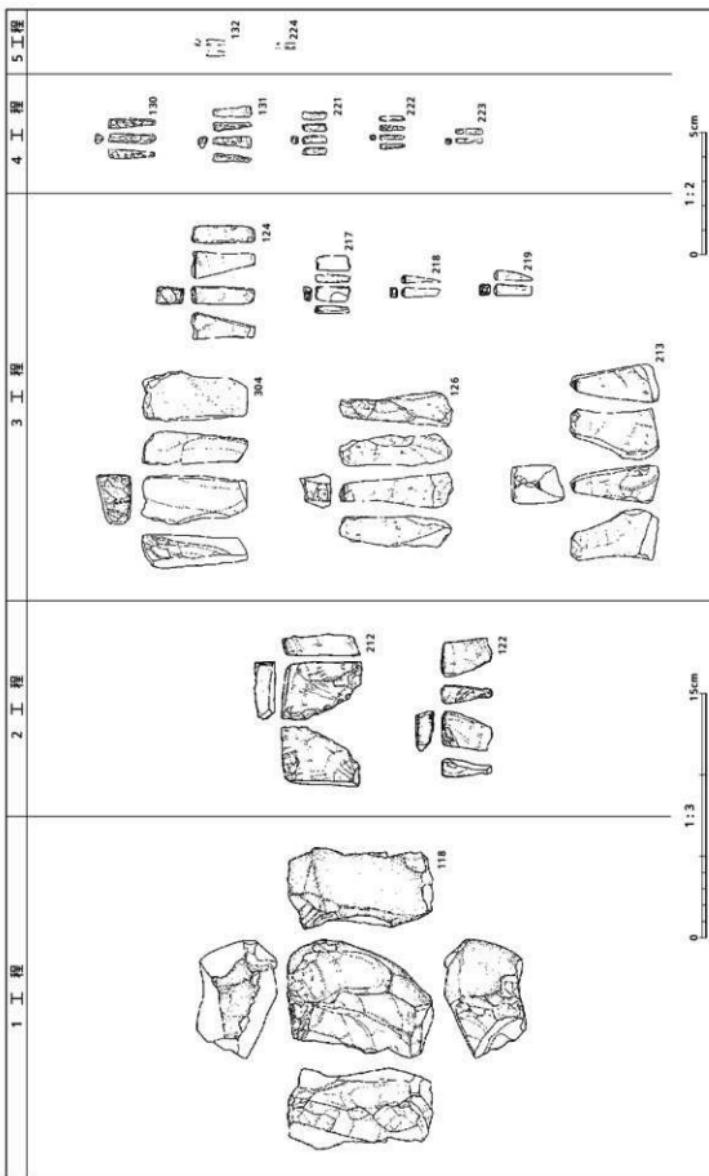
- ① 今回調査した部分では、素材や工程品とも緑色凝灰岩が鉄石英を上回る。
- ② 石核は直方体を目指しているが、定型的な石核は少なく、打撃によって簡単に作る不定形な石核が主体となる。原石は長さ 5 cm 程の小型精円礫を利用するものもある。
- ③ 板状剥片を作る 2 工程は少ない。1 工程石核を分割（施溝・打撃）し、3 工程の角柱状剥片を探る。
- ④ 施溝部位は各工程とも頭部（端部）に集中し、側面（稜）施溝は例外的である。頭部からの分割剥離は不定形な剥片が生じ、素材を無駄にする確率が高いと思われるが、石材産地が近接する佐渡の遺跡群に特徴的な技法と言える。
- ⑤ 穿孔は石針（普通輝石安山岩）を利用している。メノウ製の石針もある。穿孔方向は片方向を基本とし、両側穿孔は少ない。両側穿孔の場合も中央部で連結するものではなく、一方の深さが足りない場合に補足的に行う。
- ⑥ 製品は緑色凝灰岩で長さ 9 ~ 14.7 mm、太さ 2.1 ~ 3 mm。鉄石英は 12.7 ~ 14.8 mm、太さ 2.4 ~ 2.6 mm と細く纖細である。
- ⑦ 穿孔・分割とともに金属器の使用は認められない。
- ⑧ 勾玉、角玉、分類不詳の玉も併せて作る。
- ⑨ メノウ・玉髓の転石が搬入原石では一番多いが、その製品は少ない。被熱している割合が高く、水洗で多くの破碎片が検出された。水洗の網目は 1 mm を使用した。さらに細かい砂は回収できなかった。多量のメノウ搬入の主用途は、研磨剤である可能性を指摘しておきたい。



第25圖 管玉製作工程1 綠色變灰岩



第26圖 管玉製作工程2 級石英



第27圖 石針製作工程

### 3. 木製品

#### A. 木製品の種類

出土木製品を農具・工具・狩猟具・祭祀具・建築部材・土木部材・容器・紡織具・その他不明製品などにまとめた。図化は遺構単位で実測し、種別でまとめて掲載した。

遺物のうち12点(2・3・4・15・23・28・29・33・34・106・110・114)はPEG法で保存処理を行つたが、他は水漬け状態である(平成12年3月現在)。

遺物の法量、種類、材質、観察所見は別表にまとめた。以下、主な遺物について説明したい。

#### SD 18 (図版 102-1 ~ 108-93 写真図版 (以下写真) 195 ~ 198)

**農具** 鋤柄・平鋤・穂打具・豎杵ほか。3は組み合わせ平鋤で2はその鍬柄の端部であろう。4は穂打具で先端部が面取りしてある。基部には樹皮を巻く。基部端は欠損。5・7~9は農具の柄か。6は鍬の柄孔破損品。8は柄の握り部分だが、削りは粗く未完成。10の豎杵は長さ130cm。両端が尖る。中央には握りのこぶを持ち古い様式を残す。杵部の直径は6.3~5.5cm。握り部は4.5cm。こぶの部分は5.5cm。使用材はヤブツバキ。

**工具** 15の袋状鉄斧柄頭は斧台と柄を仕口で組む珍しいものである。長さ14.1cm、幅4.1cm。仕口孔は外側3.4cm×2.5cm。鉄斧装着部分は細く段を持つ。鉄斧の袋状に隠れる部分のため加工が粗いか。17は楔と思われる。12~14・18~21は固定具か。細型管玉の穿孔用具か。6工程品を穴に入れ固定し穿孔するための有孔の材と予想したが、固定の困難さや安定度からみて、穿工具の可能性は低い。16は固定具。表に刻みが3箇所ある。一端欠損。

**狩猟具** 弓生時代の弓を武器と狩猟具を分離することは難しく、ここでは狩猟具とした。23はイヌガヤ製の丸木弓。端部には1.5cmの弦が作られる。弓幹には巻かれた樹皮痕がある。半分以上欠いているが、長さ45.8cm、最大径2cm。22は弓材の削れたもの。端部に削りがみられる。

**容器** 25~27は箱材の一部。25は端部を薄く削り取り、平面形は台形状に仕上げる。28はサクラ材。器形から椀状の容器に分類した。復元口径11.6cm。29は容器の底板。直径24.3cm。スギの柾目板。

**紡織具** 32は糸巻き具の中央交差部分。幅2.4cm、厚さ2.6cm。断面は扁平。

**祭祀具** 33・34は劍形木製品。33は長さ15.6cm、幅2.1cm。34は長さ23.5cm、幅3.2cm。両面から削り出し、刃部を作るが加工は粗い。

**建築部材** 35~40は床材や板壁材である。39は焼け焦げた部分があり、棟の形が見える。

**その他** 11は垂木材の一部か。24はたも網かんじ形下駄の部品か。30は攪拌具か。器壁は中央部で0.9cmと薄く、ゆるく内凹する。柄の根元で折れる。柾目であることや、内凹する形状から鍬の用には適さない。ムクロジ材。43は下端部が面取りされ、上部はものを挟めるような溝が作られる。

袋状鉄斧柄頭(15)は、鉄器の導入を示す明らかな資料である。鉄斧によって加工されたと思われる端材(65~67・70)なども傍証となろう。その時期は溝出土の土器形式からみて中期後葉にあたり、当遺跡への鉄器の導入時期が示唆される。

## SD 23 (図版108-96~109-106 写真198・199)

96は横槌で柄を欠く。側面が欠ける。

## SD 112 (図版109-108・109 写真199)

108は鋤未成品。

## SB 115 (図版109-110・111 写真199)

110は柱根。腐蝕が進むが本来は四角に面取りしていた。

## SK 152 (図版110-120~112-143 写真199・200)

121は石斧柄頭。大型蛤刃石斧のものと思われる。先端部と側面、柄を欠く。123はトチ材の高杯状木製品の脚部か。124は杓子形木器未成品。片側面と柄部を欠く。125は木鎌。幅2.5cmで扁平。長さ20.5cm。祭祀具か。126の楔は刃部が摩滅している。127・128は板杭片。131はアカガシ材片。農具の端材か。134は杉材の柄。

## SX 167 (図版112-144~113-148 写真200・201)

144は丸木弓。両端欠損。一端は焼ける。弓幹には細い樹皮を3箇所に分け巻きつける。径2.5cm、長さ64.1cm。イヌガヤ材。147は杉皮で端部を丸に仕上げる。用途不明。148はナラ材で両端が切られる。素材か。

## 包 含 層 (図版113-149~155 写真201)

149は板状の建築部材。断面形は18.8cm×8cm。150は柱か。155は紡織具。

## 板杭列と支柱 (図版114-156~122-228 写真201~204)

板杭列1~6にはスギが利用される。それを支える支柱はスギの他にコナラ等の広葉樹が使われる。検出された板杭を列ごとに実測した。157・187・193は放射性炭素年代測定法で年代測定をした。

板杭列1は、調査区内では122点の板杭と支柱・杭で構成される。173・174などの幅広の杭と176等の棒状の杭がある。加工は板状に削取り、先端を両側面から削り尖らす。その工具は削りの痕跡から鉄斧を使用したと考えられる。184などの厚い材は表面先端の削りもある。板杭の大きさは幅約20~49cm。最長は187の167.8cmで、全ての杭は上部が腐蝕しているために当初の規模はわからない。板杭は接合作業を試みたが、重なるものはなかった。しかし、年輪の方向が一致するものなどがあり、一木から削り取る作業が予想される。そこから計算されるスギの直径は約1.5~2m程の大木が考えられる。河川の土木工事に際し、転用材の利用だけでは資材を供給できないのでスギの大木を利用していたことが分かった。

## 第VI章 自然科学分析

ここでは石器石材の石材鑑定、木製品の樹種同定、種実同定、板杭の年代測定を行った。その結果を掲載し、各分析の目的を簡単に記す。

石材鑑定では、細型管玉に使われる「緑の石」と「赤い石」、施溝用の掠切具、穿孔用の石針を対象とした。これらの管玉材は從来「碧玉」や「鉄石英」と呼ばれていたものである（計良 前掲等）。今回の報告にあたって、試料をカラー図版で示し（図版125・126）分析結果を明示した。

木製品の樹種同定は特に農具・工具類について分析を依頼した。種実は溝SD115から出土したものを作成した。板杭列の年代測定では、同構造は下層で発見され、鐵器の加工痕が認められた。しかし、遺物では鉄斧や斧台（頭）、鐵器用と考えられる砥石が発見されていないことから、板杭は下層で発見されたものの、その設置時期に疑問を持ち年代測定を依頼した。その結果、下層の土器と矛盾のない弥生時代中期の年代が得られた。

### 1. 平田遺跡出土石器の石材鑑定（写真図版125・126）

#### A. 試料No.1 [岩石名：流紋岩]

##### 肉眼での特徴

流状組織が顕著な灰色～灰白色の岩石で、流理構造には若干の褶曲があるが、全体的にはほとんど平行である。風化した表面には気孔のような穴が認められるが、風化を受けていない新鮮な部分には気孔は認められない。この穴は気孔ではなく、斑晶鉱物が溶脱した跡と考えられる。

##### 顕微鏡観察

組織：斑状組織

斑晶鉱物：石英>>斜長石>不透明鉱物

石基鉱物：石英、ガラス>粘土鉱物>不透明鉱物

淡褐色のガラスからなる層と微細な石英からなる層が互層することにより、顕著な流理構造を形成している。褐色の粘土鉱物も流理構造に調和的な配列をして存在している。斑晶の石英は他形で0.5mm程度の大きさである。斑晶の斜長石は長柱状自形結晶（1.2mm×0.4mm）でアルバイト式双晶と黒帯構造を示す。斑晶の不透明鉱物は丸みを帯びた0.2mm程度の大きさである。

#### B. 試料No.2 [岩石名：普通輝石安山岩]

##### 肉眼での特徴

肉眼ではほとんど斑晶を認めることができない黒色緻密な岩石で、気孔はまったくない。風化した部分は灰白色を呈し、シルト岩や泥岩のような外観を示す。風化皮殻の厚さはきわめて薄い（0.1mm以下）。

##### 顕微鏡観察

組織：無斑品質に近い斑状組織。石基は填間組織。

斑晶鉱物：斜長石>普通輝石>粘土鉱物、不透明鉱物

石基鉱物：ガラス、斜長石>普通輝石>不透明鉱物

斑状組織を持つが斑晶に非常に乏しく無斑晶質に近い。斜長石の斑晶は独立して存在しているが、普通輝石の斑晶は斜長石、不透明鉱物とともに集斑晶を形成している。斜長石の斑晶は自形～半自形の短柱状～卓状結晶（1.5 mm × 0.5 mm）でカールスバット式双晶やアルバイト式双晶をなし、累帶構造を示す。斑晶の斜長石には丸みを帯びた褐色～淡緑色のガラス包有物を含んでいる。斑晶の普通輝石は短柱状結晶（0.5 mm）である。斑晶の不透明鉱物は他形～半自形結晶（0.4 mm）である。褐色の粘土鉱物化した柱状鉱物（0.2～0.4 mm）の外縁部は石基の普通輝石が取り囲んでいる。

#### 蛍光X線分析による全岩分析結果

##### 試料調整方法

分析用粉末の作成：試料をダイヤモンドカッターで切断し、風化している部分を除去する。#220のカーボランダムを用いてダイヤモンドカッターで切断した際に付着した金属を取り除いた後、蒸留水と超音波洗浄器を用いた3分間洗浄を3回行う。100°Cに保温したホットプレート上で十分に乾燥させる。放冷後、鉄鉢で1～3 mmの粒に碎く。ヘイコー製セラミックのミルに3分間かけ、分析用微粉末を作成した。

分析用ガラスピードの作成：ガラスピード試料0.4g、融剤（四ホウ酸リチウム）4gで作成したので希釈率は10倍である。実際にガラスピードを作成した時は、試料0.3999g、融剤（無水四ホウ酸リチウム）4.0001gである。これらを白金ルツボ内に入れて混ぜ合わせる。リガク製蛍光X線分析装置RIX-2000を用いた。

分析：試料の全岩分析にはフォッサマグナミュージアムのリガク製蛍光X線分析装置RIX-2000を用いた。標準試料として通産省工業技術院地質調査所が調整した地球科学標準試料を用いた。分析した元素は珪素、チタン、アルミニウム、鉄、マンガン、マグネシウム、カルシウム、ナトリウム、カリウム、燐の10元素である。分析結果は、全鉄をFeOとし、無水での合計が100wt. %になるように再計算した値である。

全岩分析の結果から試料No.2の岩石は安山岩に相当する二酸化珪素（SiO<sub>2</sub>）含有量を持つことがわかる。カリウムの含有量はmedium-K安山岩に相当する。安山岩としてはチタン（TiO<sub>2</sub>）に富んでいる。

SiO <sub>2</sub>	57.20
TiO <sub>2</sub>	1.47
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	17.16
FeO	8.86
MnO	0.13
MgO	3.06
CaO	6.85
Na <sub>2</sub> O	4.11
K <sub>2</sub> O	0.88
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.27
	100.00

第13表 試料No.2の蛍光X線分析装置による全岩分析結果

#### C. 試料No.3

〔岩石名：碧玉〕

##### 肉眼での特徴

肉眼では赤褐色緻密な岩石で、貝殻状に似た破断面を示す。削れた角は非常に鋭利である。

##### 顕微鏡観察

組織：等粒状組織

構成鉱物：石英、赤鉄鉱

石英は0.1 mm程度の他形結晶で顯著な波動消光を示す。赤鉄鉱は最大0.5 mm程度の長柱状～毛状の形態を示す（写真126 No.3）。これらは非常に微細（0.01 mm以下）の球状の赤鉄鉱が数珠状につながったものの集合体である。赤鉄鉱は通常の薄片の厚さ（0.03 mm）では不透明であるが、部分的に濃赤色に見える。

## X線マイクロアナライザによる分析結果

研磨薄片を作成し、フォッサマグナミュージアムのX線マイクロアナライザを用いて定量分析を行った。使用したX線マイクロアナライザは日本電子製走査型電子顕微鏡JSM-6300にオックスフォード製エルギー分散型X線スペクトロメーターLINK QX-2000を装着した分析走査型電子顕微鏡(EDS)である。分析条件は加速電圧15kV、分析時間100秒、分析範囲 $0.01\text{ mm} \times 0.008\text{ mm}$ である。分析結果を第14表に示す。

第14表の分析結果はほとんど二酸化珪素からなる結果(No.3-001と002)と酸化鉄を多く含む結果(No.3-003~005)がある。これは試料が微細な石英と赤鉄鉱からなるため、分析した範囲にある石英を赤鉄鉱の量比が分析した結果に表れたものと考えられる。若干の焼が検出されるほかは、他の成分は検出限界以下であった。通常の火山岩が珪化を受けてできた岩石ではなく、热水からの沈殿と鉄バクテリアなどによりこの岩石ができたと考えられる。

## 走査型電子顕微鏡による破断面の観察

全蒸着をした試料の破断面をフォッサマグナミュージアムの走査型電子顕微鏡(日本電子製JSM-6300)を用いて表面の観察および二次電子像の写真撮影を行った。観察および写真撮影の条件は加速電圧20kV、ワーキングディスタンス39mmである。

二次電子像の観察では貝殻状の割れ目を示す部分と0.0001mmほどの粒状の物質が集合した状態の破断面を示す部分が認められた。

	No.3-001	No.3-002	No.3-003	No.3-004	No.3-005	No.3-006
SiO <sub>2</sub>	99.60	99.56	76.34	73.51	96.46	100.00
TiO <sub>2</sub>	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
FeO	0.00	0.00	23.66	26.49	3.11	0.00
MnO	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
MgO	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
CaO	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
Na <sub>2</sub> O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
K <sub>2</sub> O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.40	0.44	0.00	0.00	0.43	0.00
	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

第14表 試料No.3のX線マイクロアナライザによる全岩分析結果

## D. 試料No.4

[岩石名：珪化した酸性凝灰岩]

## 肉眼での特徴

肉眼では濃緑色緻密な岩石で、緑色の濃淡があり縞状の組織を示す。貝殻状に似た破断面を示す。割れた角は非常に鋭利である。

## 顕微鏡観察

組織：隠微晶質

構成鉱物：石英&gt;&gt;不透明鉱物&gt;粘土鉱物

大部分を占める石英は隠微晶質で0.005mm程度の他形結晶を示す。粘土鉱物や不透明鉱物が石英の粒間にほぼ一様に存在している。幅0.05mmの石英脈が不規則に存在している(写真126 No.4)。まれに0.15mm程度の大きさを持つ丸みを帯びた～や角張った他形粒状の石英が存在する。この石英は元の凝

灰岩に含まれていた破片と思われる。

#### X線マイクロアナライザによる分析結果

研磨薄片を作成し、フォッサマグナミュージアムのX線マイクロアナライザを用いて定量分析を行った。使用したX線マイクロアナライザは日本電子製走査型電子顕微鏡JSM-6300にオックスフォード製エネルギー分散型X線スペクトロメーターLINK QX-2000を装着した分析走査型電子顕微鏡(EDS)である。分析条件は加速電圧15kV、分析時間100秒、分析範囲0.01mm×0.008mmである。分析結果を第15表に示す。

No.3の碧玉との違いはアルミニウム、カリウムに富むことである。この特徴はNo.5の珪化した酸性火山岩にも共通している。アルミニウムやカリウムは粘土鉱物中に存在しているものと考えられる。ナトリウムなどの他の成分は珪化作用に伴う水溶液の関与によって岩石中から抜け出たと考えられる。

#### 走査型電子顕微鏡による破断面の観察

全蒸着をした試料の破断面をフォッサマグナミュージアムの走査型電子顕微鏡(日本電子製JSM-6300)を用いて表面の観察および二次電子像の写真撮影を行った。観察および写真撮影の条件は加速電圧20kV、ワーキングディスタンス39mmである。

二次電子像の観察では貝殻状の割れ目を示す部分が認められた。

	No.4-001	No.4-002	No.4-003	No.4-004	No.4-005	No.4-006
SiO <sub>2</sub>	79.59	79.71	84.10	83.08	81.94	86.49
TiO <sub>2</sub>	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	10.70	10.50	8.18	8.80	9.36	7.06
FeO	0.00	0.64	0.85	0.54	0.47	0.96
MnO	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
MgO	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
CaO	0.00	0.00	0.28	0.28	0.00	0.00
Na <sub>2</sub> O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
K <sub>2</sub> O	9.70	9.15	6.59	7.30	8.23	5.50
Pr <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

第15表 試料No.4のX線マイクロアナライザによる全岩分析結果

#### E. 試料No.5

【岩石名：珪化した酸性火山岩】

##### 肉眼での特徴

肉眼では灰緑色緻密な岩石で、貝殻状に似た破断面は認められない。割れた角は非常に鋭利である。

##### 顕微鏡観察

組織：隠微品質

構成鉱物：石英、赤鉄鉱

隠微品質の石英は0.005mm程度の大きさを持つ他形結晶である(写真126 No.5)。まれに丸みをやや帯びた斜長石(0.6mm×0.4mm)がある。この斜長石はアルバイト式双晶、累帶構造を示し、内部に丸みを帯びた含有物を含んでいる。この斜長石は火山岩に含まれる斜長石斑晶の構造と似ている。斜長石の周りは褐色の粘土鉱物が多く存在する。

#### X線マイクロアナライザによる分析結果

研磨薄片を作成し、フォッサマグナミュージアムのX線マイクロアナライザを用いて定量分析を行った。

使用したX線マイクロアナライザは日本電子製走査型電子顕微鏡JSM-6300にオックスフォード製エネルギー分散型X線スペクトロメーターLINK QX-2000を装着した分析走査型電子顕微鏡(EDS)である。分析条件は加速電圧15kV、分析時間100秒、分析範囲0.01mm×0.008mmである。分析結果を第16表に示す。

No.3の碧玉との違いは、アルミニウム、カリウムに富むことである。この特徴はNo.4の珪化した酸性凝灰岩にも共通している。分析値には多少のばらつきがあるが、これは分析範囲に存在する鉱物の量比によるものと考えられる。アルミニウムやカリウムは粘土鉱物中に存在しているものと考えられる。ナトリウムなど他の成分は珪化作用に伴う水溶液の関与によって岩石中から抜け出たと考えられる。

#### 走査型電子顕微鏡による破断面の観察

全蒸着をした試料の破断面をフォッサマグナミュージアムの走査型電子顕微鏡(日本電子製JSM-6300)を用いて表面の観察および二次電子像の写真撮影を行った。観察および写真撮影の条件は加速電圧20kV、ワーキングディスタンス39mmである。

二次電子像の観察では貝殻状の割れ目を示す部分はなかった。破断面を見る限りNo.4と差はない。

	No.5-001	No.5-002	No.5-003	No.5-004	No.5-005	No.5-006
SiO <sub>2</sub>	85.17	83.16	76.95	92.48	85.83	91.12
TiO <sub>2</sub>	0.00	2.15	0.00	0.00	0.00	0.00
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	8.13	7.66	12.07	4.27	7.28	4.99
FeO	0.00	0.53	0.00	0.45	0.47	0.51
MnO	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
MgO	0.00	0.39	0.00	0.00	0.31	0.00
CaO	0.27	0.24	0.46	0.24	0.24	0.00
Na <sub>2</sub> O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
K <sub>2</sub> O	6.43	5.87	10.52	2.57	5.87	3.38
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

第16表 試料No.5のX線マイクロアナライザによる全岩分析結果

## 2. 平田遺跡出土木製品の樹種同定 (写真図版127~131)

松葉 亂子 (パレオ・ラボ)

### はじめに

新潟県佐渡郡新穂村大字下新穂にある平田遺跡から出土した木材の樹種同定を行った。平田遺跡は、佐渡国仲平野のほぼ中央に位置する標高8~10mの微高地に位置しており、弥生時代の中期を中心とした遺跡である。遺跡からは、環塗を伴った集落が確認され、それらに伴い農具・容器・杭・矢板などの木製品が出土している。これらの木製品の樹種が明らかにする事で、木材利用を解明する一端となすことを目的として、樹種を調べ、ここに報告する。

### A. 方法と記載

分析試料は37点である。木製品が大部分である。分析試料の詳細は、同定結果とともに第18表に示す。同定は、横断面、接線断面、放射断面の3方向の木材組織切片を、光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較することにより行った。木材組織切片は、木製品から直接片歯剃刀を用いて作成し、得られた切

片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。この内、各分類群を代表する標本について写真図版にし、同定根拠は後述する。なお、作成した標本は、標本番号(NGT283~324)を付し(株)パレオ・ラボで保管している。

#### 同定根拠

スギ *Cryptomerica japonica*(L.fil.)D.Don TAXODIACEAE 図版127-1a~1c : 標本番号NGT310

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は、大型のスギ型で、通常一分野あたり2個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは、常緑の針葉樹で、本州～屋久島の温帯～暖帶に分布している。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia*(Knight)K.Koch CEPHALOTAXACEAE 図版127-2a~2c : 標本番号NGT311

水平・垂直両樹脂道と共に持たない針葉樹。早材から晩材にかけての移行は緩やかで晩材部は少ない。樹脂細胞が散在する。仮道管に顯著な螺旋肥厚が見られ、放射組織はすべて放射柔細胞からなり単列同性。分野壁孔は1~2個のトウヒ型。

以上の形質により、イヌガヤ科のイヌガヤの材と同定した。イヌガヤは、常緑小高木～低木の針葉樹で、本州(岩手県以南)～九州に分布する。

コナラ属クヌギ節 *Quercus Sect. Cerris* FAGACEAE 図版127-3a~3c : 標本番号NGT298

年輪のはじめに丸い道管が一列に並び、晩材部では徐々に径を減じた丸い道管が放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は單一、放射組織は、複合放射組織と単列同性の物からなり、道管との壁孔は柵状。木部柔組織が、接線方向にほぼ帶状に分布する。

以上の形質により、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定した。クヌギ節は、いずれも落葉高木のクヌギ(岩手県以南～琉球)とアベマキ(山形県以西～九州)が含まれる。

コナラ属コナラ節 *Quercus Sect. Prinns* FAGACEAE 図版128-4a~4c : 標本番号NGT316

大型で丸い道管が単独、時に複合して年輪界に一列に並ぶ環孔材。晩材部では急激に径を減じた多角で薄壁の道管が散在し火炎状を呈し、木部柔組織は接線状に配列する。放射組織は単列と大型の複合放射組織からなり、同性。道管放射組織間壁孔は楕円形の対列状～柵状。

以上の形質により、ブナ科のコナラ節の材と同定した。コナラ節には、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシ等が含まれ、いずれも落葉高木である。

アカガシ亜属 Subgen. *Cyclobalanopsis* sp. FAGACEAE 図版128-5a~5c : 標本番号NGT302

中型で厚壁の円形の道管が単独で、放射方向に幅を持って配列する放射孔材。道管の穿孔は單一。木部柔組織は1~3細胞幅程度の接線方向の帶状を呈す。放射組織は、単列同性で、時に複合状となる。放射組織道管間の壁孔は柵状を呈す。

以上の形質により、ブナ科コナラ属アカガシ亜属の材であると同定した。日本に産するアカガシ亜属には8種が含まれ、いずれも常緑高木。

ヤマグワ *Morus australis* Poir. MORACEAE 図版128-6a~6c : 標本番号NGT317

年輪の始めに、大道管がならび、そこから順次径を減じた小道管が接線状～斜め接線状に配列する傾向を持つ環孔材。道管の穿孔は單一で、時にチローシスを含む。小道管は螺旋肥厚をもち、木部柔組織は周開状。放射組織は異性で、1~5細胞幅程度である。

以上の形質により、クワ科のヤマグワの材と同定した。ヤマグワは、北海道～琉球の温帯～亜热带に分布する落葉低木である。

シキミ *Ilicium anisatum* L.; *Lreligiosum* Sieb. et Zucc. ILLICIACEAE 図版129-7a～7c : 標本番号NGT290

極めて小型の角張った道管が均一に散在する散孔材。年輪のはじめに道管が一列に並ぶ傾向がある。道管の大きさは、年輪内で変化がなく、年輪界は不明瞭である。道管の穿孔は、横棒が非常に多い階段穿孔で、内壁に不明瞭な螺旋肥厚を持つ。放射組織は1～2列で異性。

以上の形質から、シキミ科のシキミの材と同定した。シキミは、本州（宮城県以南）～琉球の暖帯～亜热带に分布する。

ヤツツバキ *Camellia japonica* L.; *Thea hozanensis* Hayata; T.Nakaii Hayata THEACEAE 図版129-8a～8c : 標本番号NGT300

小型の道管が単独、時に2～3個複合して年輪界に向かって径を減しながら散在する散孔材。道管穿孔は10～20本ほどの横棒からなる階段状で、木部柔組織は散在状。放射組織は異性で背は低く、2～3細胞幅。單列部分や直立細胞には、しばしば大型の結晶細胞が見受けられる。

以上の形質から、ツバキ科のヤツツバキの材と同定された。ヤツツバキは、青森県～琉球の暖帯に広く分布する常緑高木である。

サクラ属 *Prunus* sp. ROSACEAE 図版129-9a～9c : 標本番号NGT292

小型の丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材。道管の穿孔は單一で、内壁には明瞭な螺旋肥厚をもつ。放射組織は1～5細胞幅程度で、同性に近い異性。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定した。日本のサクラ属は、落葉・常緑の低木～高木の25種知られている。

カエデ属 *Acer* sp. ACERACEAE 国版130-10a～10c : 標本番号NGT301

中型の丸い道管が単独もしくは複合して年輪内に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は單一で、内壁には微細な螺旋肥厚が見受けられる。放射組織は單列同性で、1～4細胞幅。木部柔組織はしばしば年輪界付近で結晶を持つ。

以上の形質により、カエデ科のカエデ属の材と同定された。カエデ属は、日本に28種自生する。亜热带性のものを除けば落葉広葉樹である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume HIPPOCASTANACEAE 国版130-11a～11c : 標本番号NGT297

小形で丸い管孔が単独あるいは数個複合して均一に分布する散孔材。道管の穿孔は單一で、道管内壁に螺旋肥厚が有る。放射組織は單列同性で、しばしば階級状に配列する。道管との壁孔は小形で密であるが、ヤナギ属のように蜂の巣状を呈す事はない。

以上の形質より、トチノキ科のトチノキの材と同定した。トチノキは、北海道～九州の主に低山帶に分布する落葉高木である。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. SAPINDACEAE 国版130-12a～12c : 標本番号NGT286

中型の道管が単独もしくは數個複合して散在している。木部柔組織は、連合翼状を呈し著しく、道管の穿孔は單一、内壁に微細な螺旋肥厚がある。道管内には、黄褐色のゴム状の物質が詰まる事が多い。放射組織は、2～4細胞幅程度、輪郭は不整で同性である。

以上の形質から、ムクロジ科のムクロジの材と同定した。ムクロジは、落葉高木で、茨城・新潟県以南～琉球の暖帯から亜热带に広く分布する。

ハイノキ属 *Symplocos* sp. SYMPLOCACEAE

図版131-13a～13c : 標本番号NGT305

小型の道管がほぼ単独でややまばらに均一に散在する散孔材。道管の直径は、晩材部でやや減少する。道管の穿孔は30～40本ほどの横棒からなる階段状、放射組織は異性で2細胞幅程度、背の高い翼部を持つ。

以上の形質により、ハイノキ科のハイノキ属と同定した。日本では、落葉・常緑の小高木～低木の計21種が含まれる。

## B. 結果と考察

ここでは、平田遺跡の結果を中心として考察する（第17表）。

最も多く確認された樹種は、アカガシ亜属の12点で、スギ、サクラ属、ヤツツバキ、ヤマグワ等がそれに続いている。今回確認された樹種は、いずれも佐渡郡に自生しており、アカガシ亜属が多く確認されている事が特徴である。

現在佐渡郡の天然のアカガシ亜属林は、畠野町の長谷寺で天然のウラジロガシ林他に確認されるに過ぎないが（新潟県 1993）、気候的には暖帯であるため、当時平野部ではアカガシ亜属林が成立していたと考えられる。これら植生以外に、調査対象に農具が多い事もアカガシ亜属が多く確認された原因であると考えられる。特に鋤・鍬といった農具は、アカガシ亜属が使用される割合が高い製品で、アカガシ亜属の分布域では大部分の農具にこの樹種が利用されている。他に特定の製品に多用される樹種は、弓のイヌガヤと堅杵・石斧のヤツツバキがある。イヌガヤは、柔曲性に優れているため鳥浜貝塚の小型弓ほか、全国的に弓に多く使用されている樹種である（鈴木他 1996）。杵や柄は、ヤツツバキが特定して使用されるわけではないが、アカガシ亜属などとともに、散孔材（中～小型の道管が年輪内にほぼ均一に散在する木材）が多く利用される製品である。前述した鳥浜貝塚でも、柄にユズリハ属（散孔材）が使用されている。農具の樹種の選択性には、全国的な傾向と一致した樹種選択が窺われる。

また、日本海沿岸域の木材利用の特徴として、縄文時代からのスギの多用が確認されているが、本遺跡では板杭に使用されるのみであった。これが板状の製品が少ないという、製品の偏りにより生じた傾向であるか、佐渡郡という立地にかかる問題かどうかは、今後の分析結果に判断を任せたい。

全体的に樹種の選択性は、全国的な傾向と一致しているが、分析対象にされた製品に偏りがあることや分析点数の問題から、木材利用のごく一部が明らかになったに過ぎないと考えられる。建築材などの大型の製品や背景となる植生変遷が明らかになれば、より鮮明にこれらの結果が明らかになるものと考えられる。

製品名	ス	イ	ク	コ	ア	ヤ	シ	ヤ	サ	カ	ト	ム	ハ	総計
	ヌ	ヌ	ガ	ナ	カ	マ	マ	ブ	ク	エ	チ	ク	ノ	キ
	ギ	ギ	ギ	ナ	ガ	マ	キ	ツ	ラ	デ	ノ	ロ	ジ	属
くさび						1								1
丸木弓	2													2
鍬			1											1
鋤			2											2
袋状軸孔柄頭			1											1
石斧							1		1					2
堅杵							1							1
柄		2	1											3
總打ち具か						1								1
機杵具												1		1
棒状工具								1						1
容器								1						1
板杭	2													2
杭		2	1											3
建築部材	1													1
高杯形木製品											1			1
素明材	1	1												2
不明	1			5	1		1	2						10
総計	4	2	1	2	12	4	1	3	4	1	1	1	1	37

第17表 平田遺跡出土木製品の樹種・製品別集計

NGT No.	樹種	製品名	部位	遺物No.	グリッド	遺構No.	取上No.
NGT283	サクラ属	用途不明		1	IIIAB58	SD18	110①
NGT284	アカガシ亜属	用途不明		2	IIIAB58	SD18	110②
NGT285	サクラ属	棒状工具		7	IIIAB58	SD18	108
NGT286	ムクロジ	攪拌具	「かい」、「へら」	8	IIIAB58	SD18	84
NGT287	アカガシ亜属	不明		10	IIIAB58	SD18	115③
NGT288	アカガシ亜属	不明		11	IIIAB58	SD18	115③
NGT289	アカガシ亜属	袋狀鉗斧柄頭		13	IIIAB58	SD18	102
NGT290	シキミ	總打ち具か		25	IIIAB58	SD18	75
NGT291	アカガシ亜属	鋸	組合平鋸	26	IIIAB58	SD18	101
NGT292	サクラ属	容器		29	IIIAB58	SD18	
NGT293	スギ	不明		32	IIIAB58	SD18	
NGT294	アカガシ亜属	鍛	柄穴	40	IIIAB58	SD18	
NGT295	ヤマグワ	不明		42	IIIAB58	SD18	
NGT296	アカガシ亜属	鋸	未製品	54	IIIAB58	SD112	
NGT297	トチノキ	高环形木製品		58	IIIAB58	SK152	
NGT298	クヌギ	素材		63	IIIAB58	SX167	
NGT299	ヤブツバキ	不明		68	IIIAB58	SD18	125
NGT300	ヤブツバキ	石斧	柄頭	70	IIIAB58	SK152	38
NGT301	カエデ属	石斧	柄材	80	IIIAB58	SD18	35
NGT302	アカガシ亜属	素材		108	IIIAB58	SK152	
NGT303	ヤマグワ	くさび		109	IIIAB58	SK152	
NGT304	アカガシ亜属	不明		112	IIIAB58	SK152	
NGT305	ハイノキ属	棒状工具		113	IIIAB58	SK152	
NGT306	アカガシ亜属	柄	端部	129	IIIAB58	SD18	
NGT307	アカガシ亜属	柄	端部	131	IIIAB58	SD18	
NGT308	イヌガヤ	丸木弓		139	IIIAB58	SD18	105
NGT309	ヤマグワ	柄?		148	IIIAB58	SK152	4
NGT310	スギ	建築部材		151	IIIAB58	P3	SB115
NGT311	イヌガヤ	丸木弓		154	IIIAB58	SX167	3
NGT312	ヤブツバキ	堅杵		159	IIIAB58	SD18	80①~④
NGT313	スギ	板杭		166	IIIAB58	板杭列1-2	3
NGT314	スギ	板杭		183	IIIAB58	板杭列2	9
NGT315	コナラ節	杭		214	IIIAB58	板杭列1-1	
NGT316	コナラ節	杭		217	IIIAB58	板杭列2	31
NGT317	ヤマグワ	杭		229	IIIAB58	板杭列2	14
NGT318	スギ	板杭		244	IIIAB58	板杭列2	

第18表 平田遺跡出土木製品の樹種同定結果

## 引用文献

- 新潟県 1993 「続新潟のすぐれた自然」『新潟県自然環境保全試料策定調査書』植物編 464pp.  
 能代修一・鈴木三男・網谷克彦 1996 「鳥浜貝塚から出土した木製品の樹種」『鳥浜貝塚研究』1 福井県立若狭歴史民俗資料館 23-79pp.

### 3. 平田遺跡出土の種実遺体同定 (写真図版131)

新山 雅広 (パレオ・ラボ)

#### はじめに

平田遺跡は、新潟県新穂村に所在する。ここでは、弥生時代中期と考えられているSD115から出土した大型植物化石の検討を行った。試料は、既に洗い出された状態でプラスチックケースに入っていた。

#### A. 結果と若干の考察

検討した結果、いずれもヒヨウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl.の種子（完形15個体）であった。種子の一部が欠損しているものや変形により、正確な大きさの不明な2個体を除く、13個体について長さと幅の計測を行った。その結果、長さ約9.5～11.2mm（平均約10.4mm）、幅約6.4～7.4mm（平均6.9mm）であり、非常に小さかった。藤下（1982）によれば、このような現生のセンナリヒヨウタンよりも小さい長さが10mm台以下の種子は、縄文時代と弥生時代に集中して出土しているが、どのようなヒヨウタン仲間なのかは明らかになっていないようである。

#### 引用文献

藤下典之 1982 「菜畑遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L.とヒヨウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl.の種子について」『菜畑遺跡』 唐津市教育委員会 455-463pp.

### 4. 平田遺跡出土木材の放射性炭素年代測定

(株)パレオ・ラボ

#### A. 測定結果

新潟県にある平田遺跡から出土した木材3点について、放射性炭素年代測定を行った。測定等は地球科学研究所にお願いし、測定はAMS法を用いた。測定結果は第19表に示す。なお、表中の測定値は、以下のとおりである。

- $^{14}\text{C}$ 年代測定値：試料の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に西暦1950年から何年前(yrs BP)かを計算したものである。半減期は5568年を用いた。
- 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値：試料の炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定して試料の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で、算出した年代である。
- $\delta^{13}\text{C}$ 測定値：試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比である。この安定同位体比は、下式のように標準物質の同位体比からの千分偏差(%)で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\%) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]} \times 1000$$

$$(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}] = 0.0112372$$

- 曆年代：過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動に対する補正により、曆年代を算出する。それには年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の測定、サンゴのU-Th年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により、

補正曲線を作成し、曆年代を算出する。最新のデータベース（INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al.1998, Radiocarbon 40(3)）により約19000年までの換算が可能になった。

\*但し、10,000年BP以前のデータは、まだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨いたします。

2SIGMA : 95% Probability      1SIGMA : 68%Probability

測定番号	試料データ	放射性炭素年代 yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ ‰	補正放射性炭素年代 yrBP	曆年代
Beta-141084	Hitara.1 No.157	2130 ± 40	-29.7	2050 ± 40	交点 BC50 2SIGMA BC 170 to AD 45 1SIGMA BC 100 to 5
Beta-141085	Hitara.2 No.193	2190 ± 40	-25.1	2190 ± 40	交点 BC340, 320, 205 2SIGMA BC 375 to 155 1SIGMA BC 360 to 280 1SIGMA BC 240 to 185
Beta-141086	Hitara.3 No.187	2140 ± 50	-24.1	2160 ± 40	交点 BC190 2SIGMA BC 365 to 80 1SIGMA BC 350 to 310 1SIGMA BC 210 to 165

第19表 放射性炭素年代測定結果

## 要 約

1. 遺跡は国仲平野の中央部、標高約9mに位置する弥生時代中期の玉作遺跡である。上層、中層、下層で遺構が確認された。上層は中・後期、中・下層は中期である。
2. 遺構としては、上層で方形に巡る溝や河川跡が確認された。下層では住居跡、環濠、板杭列などが確認された。住居跡は、円形平地式で周溝、周堤をもつ。3棟確認された。住居内側での直径は約8～10mと推定される。住居内及び周溝からは、多くの土器、玉作関係資料が出土した。
3. 環濠は、遺跡の中心部（調査区外）を巡るようその一部が確認された。幅約2～2.5m、深さ約1mで、多くの遺物が出土した。平野部での環濠集落の確認は、県内では初例である。
4. 板杭列は、遺跡北側の埋設河川跡内から出土した。板状の杉材の先端部を尖らせてそれを密に打ち込んだもので、流路調節を行ったものと考えられる。本格的な土木工事の始まりで、県内では初例である。
5. 出土土器の時期は弥生時代中期後半および後期後半である。
6. 弥生時代中期の土器は在地の櫛描文系土器が9割以上を占める。異系統の土器としては中部高地系（栗林式）、東北系（川原町口式、宇津ノ台式）が認められ、近江や東海に源流を求められると考えられる土器も僅かながら見られる。
7. 在地系土器は体部文様がほとんど消滅し、文様は口縁部に集約される。櫛描文が盛行した時期よりも1段階新しい様相を呈す。在地系は壺・甕とも無文の比率が高い。その一方で文様のパターンが多い。中でも円形刺突文の多さは特徴的である。
8. 台付鉢が多い、脚部も多く出土（中・下層で100点）している。
9. 出土石器は管玉製作工程品・製作工具・石鎌・扁平片刃石斧・磨製石斧未成品・勾玉未成品・敲石・凹石・砥石・石包丁・不定形石器などがある。
10. 石器では細形管玉製作工程品とその工具の大量出土が最も注目される。細型管玉は緑色と赤色の2色に分類される。勾玉・角玉なども併せて作る。
11. 石核は直方体を目指しているが、定型的な石核は少なく、打撃によって簡単に作る不定形の石核が主体となる。原石は長さ5cm程の小型楕円礫を利用するものもある。
12. 施溝部位は各工程とも頭部（端部）に集中し、側面（稜）施溝は例外的である。頭部からの分割剥離は不定形な剥片が生じ、素材を無駄にする確率が高いと思われるが、石材産地が近接する佐渡の遺跡群に特徴的な技法といえる。
13. 穿孔は石針（普通輝石安山岩）を利用してしている。メノウ製の石針もある。穿孔方向は片方向を基本とし、両側穿孔は少ない。両側穿孔の場合も中央部で連結するものではなく、一方の深さが足りない場合に補足的に行う。また、穿孔・分割ともに金属器の使用は認められない。
14. 製品は緑色凝灰岩で長さ9mmから14.7mm、太さ2.1mmから3mm。鉄石英は12.7mmから14.8mm、太さ2.4mmから2.6mmと細く纖細である。
15. メノウ・玉髓の転石が搬入原石では一番多いが、その製品は少ない。被熱している割合が高く、水洗で多くの破砕片が検出された。水洗の網目は1ミリを使用した。さらに細かい砂は回収できなかつた。多量のメノウ搬入の主用途は、研磨剤である可能性を指摘したい。

## 引用文献

- 青木一男 1998 『松原遺跡』弥生・総論4 弥生中期・土器図版 (財)長野県埋蔵文化財センターほか  
 飯島哲也 1993 『長野市の埋蔵文化財第58集 松原遺跡Ⅲ』 長野市教育委員会  
 石川日出志 1996 「東日本弥生中期広域編年の概略」『弥生土器を語る会20回記念論文集』 弥生土器を語る会  
 石川日出志 1999 「天王山式土器中期説に反論する」 新潟県考古学会研究発表資料  
 石黒立人他 1994 『朝日遺跡』V (土器編・総論編) (財)愛知県埋蔵文化財センター  
 岩崎直也 1989 「邪馬台国出現前夜の近江－弥生土器から－」『滋賀考古』創刊号 滋賀考古学研究会  
 上野 章 1972 「弥生時代 附・古式土器部」『富山県史』考古編 富山県  
 上原甲子郎・磯崎正彦 1968 「北陸地方」II『弥生土器集成』本編2 東京堂出版  
 馬目順一 1983 「東北南部」『弥生土器』II ニュー・サイエンス社  
 梅川勝史他 1995 「第1章第3節 堀之内町の遺跡と遺物」『堀之内町史』資料編上巻 堀之内町  
 大木直枝・中村五郎 1970 「山草荷2土器について」『信濃』第22巻9号 信濃史学会  
 岡本淳一郎 1997 「「廻溝をもつ建物」について」『埋蔵文化財調査概要－平成8年度－』 (財)富山県文化振興財团  
 埋蔵文化財調査事務所  
 小熊博史・立木宏明 1998 「佐渡島における縄文時代草創期の遺物」『新潟考古』第9号 新潟県考古学会  
 堅本宜弘 1998 「小木町長者ヶ平遺跡採集の尖頭器」『越佐補遺差』第3号 越佐補遺差の会  
 加藤 稔也 1988 「最上川流域の弥生土器集成・資料編ー(II) 村山編ー」『山形考古』第4巻第1号 山形考古学会  
 金子正典他 1999 「第3章第2節 土器 第3項 弥生後期」『新潟県の考古学』 高志書院  
 兼康保明 1989 「9 近江地域」『弥生土器の様式と編年』(近畿編I) 木耳社  
 神藏勝明・小林巖雄 1993 「第5章 佐渡の生い立ち(地質)」「図説佐渡島 自然と歴史と文化」 (財)佐渡博物館  
 ・新潟交通株式会社  
 河合 忍也 2000 「第1回北陸弥生文化研究会『戸水B式』を考え 発表要旨集」 北陸弥生文化研究会  
 楠 正勝 1996 『金沢市文化財紀要119 西念・南新保遺跡』IV 金沢市教育委員会  
 経済企画庁総合開発局 1973 『土地分類図(新潟県)』  
 計良由松 1950 「佐渡における新穂村文化のはじめ」附・玉作遺跡発掘報告  
 計良由松 1960 「佐渡玉作遺跡について」『佐渡史学』第二集 佐渡史学会  
 計良由松・勝範 1962 「佐渡新穂玉作遺跡遺物の研究」『佐渡史学』第三、四集合併号 佐渡史学会  
 計良由松・椎名仙草 1961 「後期弥生式文化の攻玉法」『考古学雑誌』第47巻第1号 日本考古学協会  
 計良由松他 1972 『下畠玉作遺跡 第1次緊急調査概要』 番野町教育委員会  
 小林正史 1993 「第7章第1節 土器の使用痕について」『野本遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター  
 小林正史 1994 「第6章第2節 弥生時代の甕の器形と製作技術による作り分け－戸水B遺跡を中心として－」  
 『金沢市戸水B遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター  
 小林正史 1995 「縄文から弥生への煮炊き用土器の大きさの変化」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会  
 小林正史 1998 「煮炊き用土器の作り分けと使い分け－道具としての土器の分析－」『遺跡・遺物から何を読み取るか(II)－食の復元－』 帝京大学山梨文化財研究所  
 小林行雄 1930 「弥生式土器に於ける柳目式文様の研究」『考古学』1-56  
 小林行雄・佐原 真 1964 「第三章第一節 弥生式土器の製作技術」『紫雲出 香川県紫雲出山弥生式遺跡の研究』  
 許間町教育委員会  
 駒形敏朗他 1992 「第三章第三節 弥生時代の遺跡と遺物」『長岡市史』資料編1 考古 長岡市  
 斎藤基生・高橋 保也 1979 「第6章 総括」『新潟県埋蔵文化財調査報告書19 下谷地遺跡』 新潟県教育委員会  
 斎藤義弘 1995 『福島市埋蔵文化財報告書第68集－一般国道13号福島西道路関連遺跡発掘調査報告－勝口前畠遺跡2』第2分冊 福島市教育委員会ほか

- 佐藤宗男 1970 「大中の湖南遺跡における玉作について」『古代文化』第22巻第1号 古代学協会
- 品田高志 1985 「IV小丸山遺跡」『羽列大平・小丸山』柏崎市教育委員会
- 品田高志 1990 「第VII章 戸口遺跡」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13 吉井遺跡群II-新潟県柏崎市吉井遺跡群第II期発掘調査報告書』柏崎市教育委員会
- 須藤 隆 1987 「9-1 東日本における弥生文化の成立と展開」『弥生文化の研究』4 弥生土器II 雄山閣出版
- 須藤 隆 1996 「東北地方の弥生土器」『日本土器事典』雄山閣出版
- 閔 雅之 1970 「新潟県における櫛目土器の問題-特に県北半を中心として-」『信濃』第22巻第4号
- 滝沢規朗 2000 「新潟県における弥生後期の土器編年」『第9回東日本埋蔵文化財研究会 東日本弥生時代後期の土器編年』[第1分冊] 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 橋 善光 1983 「東北北部」『弥生土器』II ニュー・サイエンス社
- 田中 靖也 1999 「第3章第2節 土器 第3項 弥生中期後半」『新潟県の考古学』高志書院
- 田辺早苗 1991 「神林村埋蔵文化財報告第3 長松遺跡発掘調査報告書」神林村教育委員会
- 田村浩司 1999 「内野手遺跡・経塚山遺跡」三条市教育委員会
- 寺島孝典 1999 「長野盆地南部の様相」『99シンポジウム『長野県の弥生土器編年』発表要旨』長野県考古学会 弥生部会
- 寺村光晴 1966 『国学院大学考古学研究報告第三冊 古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴 1980 「古代玉作形成史の研究」吉川弘文館
- 土肥富士夫 1982 「細口源田山遺跡」七尾市教育委員会
- 徳永哲秀 1996 「松原遺跡の櫛描文土器-その施文具のあり方を追う(その1)-」『長野県埋蔵文化財センター紀要』第5号 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 橋本英道 1995 「第4章 杉谷チャノバタケ遺跡」「谷地・杉谷遺跡群」石川県立埋蔵文化財センター
- 中川成夫 1969 「佐渡浜端・夫婦岩洞穴遺跡」立教大学考古学研究会
- 中屋克彦 1994 「金沢市戸水B遺跡 金沢西地区土地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書」石川県立埋蔵文化財センター
- 新潟県教育委員会 1953 「新潟縣文化財報告書 第一(考古編) 千種」新潟県教育委員会
- 新潟県 1989 「新潟県地質図(改訂版)」
- 芳賀英一他 1988 「第2編 一ノ堰B遺跡」『福島県文化財調査報告書第191集 国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告VI 一ノ堰A・B遺跡』福島県教育委員会
- 蜂屋晴美 1985 「4. 石難」『弥生文化の研究』5道具と技術』雄山閣出版
- 久田正弘 1993 「能登における弥生時代中期の一様相(2)」『石川考古学研究会々誌』第36号 石川考古学研究会
- 廣野廣造 1996 「石動遺跡 平成7年度発掘調査概報」新潟市教育委員会
- 福島正実 1987 「吉崎・次場遺跡」資料編(1) 石川県立埋蔵文化財センター
- 藤村東男 1981 「土器容量の測定」『考古学研究』第28巻第3号 考古学研究会
- 本間嘉晴・椎名仙草 1953 「佐渡小木半島周辺の考古学的調査」『新潟県文化財年報』第二 南佐渡 新潟県教育委員会
- 前山精明他 1994 「II-3 遺跡と遺物」『巻町史』資料編1 考古 巷町
- 増山 仁 1988 「金沢市文化財紀要70 金沢市磯部運動公園遺跡」金沢市教育委員会
- 増山 仁 1992 「金沢市文化財紀要102 金沢市専光寺養魚場遺跡」金沢市教育委員会
- 的場勝俊他 1994 「山王丸山遺跡」富末町教育委員会
- 丸山一昭 1998 「松ノ脇遺跡」和島村教育委員会
- 山口辰一 1987 「高岡市埋蔵文化財調査概報第3冊 石塚遺跡調査概報I」高岡市教育委員会
- 山口辰一 1988 「高岡市埋蔵文化財調査概報第6冊 石塚遺跡調査概報II」高岡市教育委員会
- 山口辰一 1995 「高岡市埋蔵文化財調査概報第27冊 石塚遺跡調査概報III」高岡市教育委員会
- 山口辰一 1996 「高岡市埋蔵文化財調査概報第29冊 石塚遺跡調査概報IV」高岡市教育委員会
- 横山勝栄・坂井秀弥他 1983 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第33 国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書 内越遺跡」新潟県教育委員会

別表1 土器観察表

別表2 石器観察表

別表3 木製品観察表

凡例

(土 器)

- ・層 位 上段は包含層の層位（上・中・下）、下段は遺構での層位を表す。
- ・取上 No. 発掘調査時の取上げNo.を記した。
- ・器種、系統、分類、調整 本文参照。
- ・法 量 単位はcmである。
- ・色 調 『新版 標準土色帖』（農林水産省 農林水産技術会議事務局監修）に従った。
- ・胎 土 内眼観察によるものであり、鉱物名とは異なる場合もある。粒の大きさは $\phi$ 2mm以上を礫、2mm未満を砂粒とし、どちらも含む場合は砂礫とした。
- ・焼 成 土器製作時における焼成の具合は、使用や埋蔵されている状況により現在目にするものとは異なるため、現在観察した結果を3段階に分け記載した。
- ・付 着 物 被熱等によるものは、炭化物をスス、変色をコゲとして表した。

(石 器)

- ・整理 No. 整理時に出土石器全点に通し番号を付したもの。
- ・取上 No. 土器と同様である。
- ・法 量 単位はmmである。
- ・重 量 単位はgである。

(木製品)

- ・取上 No. 土器と同様である。
- ・法 量 単位はcmである。
- ・材 質 顕微鏡による樹種同定に加え、肉眼観察の結果も記載した。

## 土器類解説(1)

No.	遺物	グリッド	部位	高さ	幅上	幅下	時間	地質	含 量	高頻	中頻	低頻	口徑	底径	高さ	底面	側面	外觀	測量・内面	測量・外觀	測量・内面	測量・外觀	口徑・底径等	測量・外觀等	測量・外觀等	測量・外觀等	
1	■ A72a 上	SD1	265 中部	砂	累~	1							9.5			石英・長石 砂	石英・長石 砂	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	
2	■ A72f 上	SD1	98 中部	砂	累	1							10.4			石英・長石 砂	石英・長石 砂	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	
3	■ A72f 上	SD1	1 中部	砂	口縁	1	在地						16.2	17.0		石英・長石 砂	石英・長石 砂	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	
4	■ A72f 上	SD1	171 後期	砂	口~	在地							7.02	16.0	13.9	灰白	石英・長石 砂	石英・長石 砂	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
5	■ A72a 上	SD1	5-12 後期	黄	1	1	在地						17.39	16.0	12.4	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
6	■ A72b 上	SD1	61 後期	黄	口~	1	在地						13.39	14.0	12.2	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
7	■ A72a 上	SD1	3 後期	高評	1	1	在地						13.04	12.9	11.9	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
8	■ A72g 上	SD1	211 後期	砂	口~	在地							11.02	16.0	10.6	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
9		SD2	後期	砂	口~	1	在地						6.32	14.6	10.6	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
10		SD2	後期	黄	口~	1	在地						2.32	25.0	23.6	灰白	灰白	石英・長石 砂									
11		SD2	後期	黄	口~	1	在地						8.32	20.8	17.6	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
12		SD2	後期	黄	口~	1	在地						3.32	17.6	13.0	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
13		SD2	後期	黄	口~	1	在地						4.32	15.0	11.0	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
14		SD2	後期	黄	口~	1	在地						6.32	25.4	20.6	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
15		SD2	後期	高評	1	1	在地						10.32	26.4		灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
16	■ A72g 上	SD2	266 後期	砂	口~	在地							14.6			灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
17		SD2	後期	高評	1	1	在地						15.4			灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
18		SD2	後期	黄	口~	1	在地						3.6			灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
19	■ A67 上	SD5	1 中部	砂	口縁	1	在地						2.32	13.8		灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
20	■ A67m 上	SD5	48 後期	黄	口~	1	在地						17.4	18.6	3.0	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
21	■ B65e 上	SD6	458 中部	黄	口~	A2	在地						6.32	13.8	9.5	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
22		SD6	後期	黄	口~	1	在地						4.32	12.0	10.0	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	
23	■ B65e 上	SD6	457 中部	黄	口~	B1	在地						18.32	10.4	8.6	16.6	12.2	灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
24	■ A65m 上	SD6	463 中部	黄	口~	P2	所						17.32	24.9	14.0	26.0		灰白	灰白	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂

主語謂語（2）

十一  
總論 (3)

## 土器類解説 (4)

通号	グリッド	部位	基盤	施上	時期	施様	施付	含	高脚	口沿	縁脚	底脚	底面	色調・外因	焼物	外因	焼物	外因	焼物	外因	焼物	外因	
71	■AS6q 上	SD18	245 介脚	奥	休	口~	B1 在地		5/32	19.9	16.8	18.3	灰白	浅黄	白	口沿・砂輪	白	口沿・砂輪	白	口沿・砂輪	白	口沿・砂輪	白
72	■AS6q 上	SD18	66 中脚	奥	休	口~	H 在地		31/32	15.4	11.4	5.1	11.4	橙・灰	白	高石・砂輪	白	高石・砂輪	白	高石・砂輪	白	高石・砂輪	白
73	上	SD18	中脚	休	口~	B1 在地		1/32	19.6	14.5	灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
74	■AS6 上	SD18	中脚	休	口~	B1 在地		2/32	17.5		灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
75	上	SD18	中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
76	上	SD18	中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
77	■AS6d 上	SD18	59 中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
78	上	SD18	中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
79	上	SD18	中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
80	上	SD18	中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
81	■AS6 上	SD18	中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
82	上	SD18	9 中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
83	■AS6 上	SD18	小脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
84	上	SD18	6 中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
85	上	SD18	36 中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
86	上	SD19	2/32 中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
87	■AS6d 上	SD20	178 中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
88	■AS6v 上	SD20	260 中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
89	上	SD20	中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
90	上	SD20	中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
91	上	SD20	中脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
92	上	SD21	後脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
93	上	SD21	後脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	
94	上	SD21	後脚	休							灰白	灰白	灰白	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	砂輪	白	

(二) 廉政簡語十

土壤微生物(6)

通名	学名	分類	原産地	特徴	栽培	販賣	輸出	内需	口蹄疫等	照相、体感文書等
黒鶴	カラマツ	松科	日本、朝鮮半島、中国	高木	日高、日向、山地、山腹、山地、山腹、山地、山腹	常綠	常綠	常綠	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
119 上 SH23	黒鶴 魔	木	在地	5.22 20.0 17.6	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
120 上 SH23	黒鶴 魔	木	在地	4.22 21.6 19.4	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
121 三 A707 上 SH23	黒鶴 魔	木	在地	9.22 17.4 16.2 18.3	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
122 上 SH23	黒鶴 魔	木	在地	8.22 13.5 12.2 14.6	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
123 上 SH23	黒鶴 魔	木	在地	4.22 18.0 15.8 17.7	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
124 三 A706 上 SH23	黒鶴 魔	木	在地	6.22 18.0	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
125 三 A708 上 SH23	黒鶴 魔	木	在地	2.0	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
126 上 SH23	黒鶴 魔	木	在地	6.3	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
127 上 SH23	中間 林	木	在地	6.22 18.0	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
128 三 A707 上 SH23	中間 林	木	在地	9.22 13.4	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
129 上 SH23	中間 林	木	在地	12.22 16.6	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
130 上 SH23	中間 林	木	在地	1.22 11.0	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
131 三 A709 上 SH23	中間 林	木	在地	1.22 11.0	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
132 上 SH23	中間 林	木	在地	12.2 18.4	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
133 上 SH23	中間 林	木	在地	11.22 17.0 9.7 14.6	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
134 上 SH23	中間 林	木	在地	2.22 15.0 13.9	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
135 上 SH23	中間 林	木	在地	4.22 15.5 12.8	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
136 上 SH25	中間 魔	木	在地	5.22 13.9	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
137 三 A686 上 SH26	中間 魔	木	在地	11.22 17.0 9.7 14.6	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
138 上 SH26	中間 魔	木	在地	7.22 12.4 10.8 11.5	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
139 三 A686 上 SH26	中間 魔	木	在地	12.22 10.9 8.5	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
140 上 SH26	中間 魔	木	在地	4.22 20.2 16.2	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
141 上 SH26	中間 魔	木	在地	2.22 15.0 13.9	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
142 上 SH26	中間 魔	木	在地	5.22 19.3 16.0	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
143 上 SH26	中間 魔	木	在地	6.22 17.3 15.6	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ
144 上 SH26	中間 魔	木	在地	4.22 24.0 21.4	伐薪	伐薪	伐薪	伐薪	口ナガハケアゲ ヨコナギ	口ナガハケアゲ ヨコナギ

## 土器類解説(7)

遺物	グリッド	部位	基準	施上	時期	種類	器形	寸法	底径	口径	高さ	最高	内面	外面	施工	外觀	測量・外観	測量・外観	測量・外観
No.																			
145	上	SX326	後期	鉢	口~	在地	高脚	19.3	12.0	12.0	3.02	15.5	12.0	高脚	高脚	口付	口付	口付	
146	上	SX326	後期	鉢	口~	在地	高脚	2.32	2.0	2.0	2.32	2.0	2.0	高脚	高脚	口付	口付	口付	
147	上	SX326	後期	高脚	口~	在地	高脚	?	?	?	?	?	?	高脚	高脚	口付	口付	口付	
148	上	SX326	中期	盆	圓筒	在地	高脚	5.32	3.0	3.0	5.32	3.0	3.0	高脚	高脚	口付	口付	口付	
149	上	SZ329	中期	盆	口~	在地	高脚	5.32	1.6	1.6	5.32	1.6	1.6	高脚	高脚	口付	口付	口付	
150	三B54	上	SZ329	6.3 中期	甕	口縁	在地	1.32	20.1	20.1	1.32	20.1	20.1	甕	甕	口付	口付	口付	
151	三B58n	II期	中期	盆	口縁	F1	在地	3.32	19.0	19.0	3.32	19.0	19.0	高脚	高脚	口付	口付	口付	
152	三A109	上	-70	後期	鉢	口~	在地	6.32	13.3	10.8	6.32	13.3	10.8	高脚	高脚	口付	口付	口付	
153	三A109	上	-70	中期	甕	口~	A2 在地	3.32	22.2	20.0	3.32	22.2	20.0	甕	甕	口付	口付	口付	
154	三A109	上	-70	中期	甕	口~	B2 在地	9.32	22.0	17.1	9.32	22.0	17.1	甕	甕	口付	口付	口付	
155	三B58n	II期	中期	甕	口~	在地	12.32	19.0	19.0	12.32	19.0	19.0	甕	甕	口付	口付	口付		
156	三A57n	II期	中期	甕	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	口付	口付	口付	
157	三B53n	中	SX32	3.3 中期	盆	口~	A2 在地	15.32	11.4	11.4	15.32	11.4	11.4	高脚	高脚	口付	口付	口付	
158	三B53n	中	SX32	4 中期	盆	口~	12 在地	12.32	9.0	9.0	14.7	11.32	9.0	14.7	高脚	高脚	口付	口付	口付
159	中	SX32	7 中期	盆	口~	12 在地	2.32	12.0	12.0	11.32	14.4	11.6	高脚	高脚	口付	口付	口付		
160	三B53n	中	SX32	3 中期	甕	口~	A2 在地	24.32	17.4	17.4	24.32	17.4	17.4	甕	甕	口付	口付	口付	
161	三B53n	中	SX32	4.0 中期	甕	口~	A2 在地	11.32	14.4	11.6	11.32	14.4	11.6	甕	甕	口付	口付	口付	
162	中	SX32	中	甕	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	口付	口付	口付	
163	中	SX32	中	甕	口~	A2 在地	3.32	21.0	19.5	3.32	21.0	19.5	甕	甕	口付	口付	口付		
164	三B53n	中	SX32	中	甕	口~	A2 在地	5.12	19.4	15.8	5.12	19.4	15.8	甕	甕	口付	口付	口付	
165	三B53n	中	SX32	3.0 中期	甕	口~	B2 在地	5.32	18.6	17.8	5.32	18.6	17.8	甕	甕	口付	口付	口付	

遺物	グリッド	部位	高さ	幅上	幅下	時間	種類	器形	内面	外面	底面	側面	付脚	蓋	外縁	縁部・内面	縁部・外縁	縁部・側面	縁部・底面	縁部・側面
166 ■■■530 千	SX32	24 中縦	奥	深	浅	口縁	直	22.32	21.8	18.1	6.1	22.5	底白	浅腹	口コナラ	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ	
167 ■■■530n 千	SX32	中縦	奥	口～	C1 在地	24/32	18.4	17.1	6.4	23.1	浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
168 ■■■530n 千	SX32	18 中縦	奥	口～	D 在地	4/32	17.0	15.0	16.6		浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
169 ■■■530n 千	SX32	26 中縦	奥	口～	C1 在地	3/32	26.0	22.7			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
170 ■■■530n 千	SX32	40 中縦	奥	口～	B1 在地	25/32	10.0	8.6	4.9	12.5	浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
171 ■■■A60q 千	SK103	36 中縦	奥	口～	J 在地	6/32	6.2				浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
172 ■■■A60s 千	SK103	中縦	奥	口～	A2 在地	6/32	15.8	13.8			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
173 ■■■A60s 千	SK107	1 中縦	奥	口～	E 在地		19.4	6.4			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
174 ■■■A60v 千	SK105	234 中縦	奥	口～	B1 在地	6/32	16.7	13.3	5.5	21.8	浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
175 ■■■A60q 千	SK105	12 中縦	奥	口～	A2 在地	10/32	21.5	18.0	19.5		浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
176 ■■■A60s 千	SX111	中縦	奥	口～	J 在地	8/32	8.5				浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
177 ■■■A60s 千	SX111	中縦	奥	口～	A2 在地	5/32	15.6	12.3			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
178 ■■■A60s 千	SX111	中縦	奥	口～	A2 在地	5/32	24.8	18.8			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
179 ■■■A60s 千	SX111	中縦	奥	口～	J 在地	8/32	18.0	16.4			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
180 ■■■A64i 千	SX117	中縦	奥	口縁	在地	3/32	19.0	16.4			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
181 ■■■A64i 千	SX117	中縦	奥	口～	A2 在地	3/32	23.0				浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
182 ■■■A62 F	SH110	中縦	奥	口縁	E2 在地	6/32	15.0				浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
183 F	SH110	560 中縦	奥	口～	A2 在地	24/32	7.7	6.5			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
184 ■■■A620 F	SH110	1109 中縦	奥	口～	E1 在地	18/32	14.0	10.8			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
185 F	SH110	581 中縦	奥	口～	D1 在地	19/32	8.0	5.8			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
186 F	SH110	1244 中縦	奥	口～	E1 在地	4/32	15.0	9.5			浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		
187 F	SH110	527 中縦	奥	口縁	E1 在地	3/32	12.2				浅腹	口縁	直	第一段八脚	コナラ	内：コナラ	内：コナラ	内：コナラ		

卷之九

(10)

十一號期數 (11)

物語	原題	脚本	監督	音楽	撮影	編集	美術	衣装	色彩	音響	効果	脚	原題	脚本	監修	外題	脚	原題	脚本	監修	内題	脚	原題	脚本	監修	内題	脚	
「クリッピング」	原題	脚本	監督	音楽	撮影	編集	美術	衣装	色彩	音響	効果	脚	原題	脚本	監修	外題	脚	原題	脚本	監修	内題	脚	原題	脚本	監修	内題	脚	
231 ■ BG3	F SD112	中継 他	口~ A2 休	11/32 15.4 13.3	長石・砂岩	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚												
232 F SD112	4 中継 他	口~ A2 休	12/32 15.4 11.6	長石・砂岩	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚													
233 F SD112 214 中継 他	口~ D1 休	10/32 7.8 4.8	長石・砂岩	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚														
234 F SD112 493 中継 他	口~ B1 休	25/32 16.4 10.3	長石・砂岩	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚														
235 F SD112	中継 他	口~ E2 休	2/32 14.6 11.0	長石・砂岩	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚													
236 F SD112	中継 他	口~ E2 休	6/32 13.6 11.6	長石・砂岩	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚													
237 F SD112 2086 中継 他	口~ F1 休	1/32 19.6	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚														
238 F SD112 117 中継 他	口~ F1 休	3/32 19.8	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚														
239 □ A64 S 65	F SD112 153 中継 他	口~ F1 休	25/32 18.6 9.5	長石・砂岩	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚													
240 F SD112 347 中継 他	口~ F1 休	7/32 23.8 11.6 47.5 12.7 71.9 長石	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚														
241 F SD112 196 中継 他	口~ F1 休	10/32 36.5 8.5	長石・砂岩	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚														
242 □ A60 S 65	F SD112 729 中継 他	口~ J2 休	19/32 8.0	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚													
243 ■ BG4	F SD112 9 中継 休	原/6 休	12/32 5.4	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚													
244 ■ A65h F SD112	中継 他	口~ J2 休	8/32 8.8	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚													
245 F SD112	中継 他	休	6/32	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚													
246 F SD112	中継 他	休	6/32	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚													
247 F SD112 27 中継 美	口~ A1 休	15/32 23.4 19.8 20.4	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚														
248 F SD112	中継 美	口~ A1 休	20/32 18.0 15.0	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚													
249 F SD112 17 中継 美	口~ A1 休	6/32 19.6 17.6 18.6	長石	砂岩	石英	白	青	音響	音響	脚	原題	脚本	監修	脚														

通号	グリッド	部位	基盤	施上	時期	施様	施付	全觀	高輪	口沿	縁幅	底幅	底厚	色調・外因	施・外因	施痕・外因	施痕・内因	施痕	外因	施痕・外因	施痕・内因	施痕・外因	施痕・内因	
250	F	SD112	373 中輪	奥 体	口~	A2 在地	9/32 22.4 18.8 20.9	洗痕	洗痕	直	6.22	13.8	11.7	13.0	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	体コヅ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文	
251	■ABP	F	SD112	中輪	奥 体	口~	A2 在地	10/32 13.8 11.7	洗痕	洗痕	直	6.22	13.8	11.7	13.0	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	体コヅ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文
252	■BSh	F	SD112	中輪	奥 体	口~	A2 在地	10/32 10.8 16.6 17.6	洗痕	洗痕	直	6.22	10.8	16.6	17.6	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文
253	■ABSh	F	SD112	中輪	奥 体	口~	A2 在地	9/32 19.6 16.0 16.0	洗痕	洗痕	直	6.22	19.6	16.0	16.0	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文
254	F	SD112	366 中輪	奥 体	口~	A2 在地	9/32 15.4 13.0 14.0	洗痕	洗痕	直	6.22	15.4	13.0	14.0	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文	
255	F	SD112	273 中輪	奥 体	口~	A2 在地	14/32 13.6 11.0 12.1	洗痕	洗痕	直	6.22	13.6	11.0	12.1	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文	
256	■ABc	F	SD112	中輪	奥 体	口~	A2 在地	8/32 16.2 11.4	洗痕	洗痕	直	6.22	16.2	11.4	11.4	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文
257	■AOb	F	SD112	中輪	奥 体	口~	A2 在地	7/32 21.4 17.4 18.8	洗痕	洗痕	直	6.22	21.4	17.4	18.8	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文
258	F	SD112	213 中輪	奥 体	口~	A2 在地	8/32 18.8 15.2 16.6	洗痕	洗痕	直	6.22	18.8	15.2	16.6	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文	
259	F	SD112	8 中輪	奥 体	口~	A2 在地	9/32 26.4 20.0 21.1	洗痕	洗痕	直	6.22	26.4	20.0	21.1	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文	
260	F	SD112	495 中輪	奥 体	口~	A2 在地	6/32 17.4 13.6 14.8	洗痕	洗痕	直	6.22	17.4	13.6	14.8	5/19.5 横	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文	
261	F	SD112	350 中輪	奥 体	口~	A2 在地	9/32 18.2 14.4 16.7	洗痕	洗痕	直	6.22	18.2	14.4	16.7	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	全曲入ス	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文	
262	F	SD112	573 中輪	奥 体	口~	A2 在地	6/32 13.6 12.0 14.3	洗痕	洗痕	直	6.22	13.6	12.0	14.3	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	一筋2.5mm 全曲入ス	体コヅ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文	
263	■ABP	F	SD112	中輪	奥 体	口~	A2 在地	17/32 18.4 13.2 17.9	洗痕	洗痕	直	6.22	18.4	13.2	17.9	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	一筋2.5mm 全曲入ス	体コヅ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文
264	■BGR	F	SD112	中輪	奥 体	口~	A2 在地	12/32 20.0 15.2 17.4	洗痕	洗痕	直	6.22	20.0	15.2	17.4	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	一筋2.5mm 全曲入ス	体コヅ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文
265	F	SD112	中輪	奥 体	口~	A2 在地	13/32 18.4 13.4 16.0	洗痕	洗痕	直	6.22	18.4	13.4	16.0	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	一筋2.5mm 全曲入ス	体コヅ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文	
266	F	SD112	5 中輪	奥 体	口~	A2 在地	9/32 16.4 12.6 14.5	洗痕	洗痕	直	6.22	16.4	12.6	14.5	にぶい・滑	洗痕	洗痕	無	一筋2.5mm 全曲入ス	体コヅ	口:ヨコハゲ 体:ヨコナナハ 底:ヨコナナハ	内:黒褐色文 外:黒褐色文	内:黒褐色文 外:黒褐色文	



十一  
第十一章

十一屆全國人大

主張與寫實 (16)

固有名	学名	分類	原産地	栽培地	品種	特徴	栽培方法	収穫期	外観	味	香り	特徴	付加価値	流通・内需	口溶け等	個別・標準的評価	個別・体感的評価	全体・標準的評価	全体・体感的評価
野菜物	野菜物	グリーン	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説	解説
331	Y SD115	中根 葵	地上	土壌	野菜	野菜	野菜	7/32	17.5	13.1	16.7	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
332	■AGc F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	20/32	19.2	14.6	18.7	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
333	F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	15/32	14.8	11.4	14.4	6.0	16.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
334	F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	8/23	14.0	11.8	13.4	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
335	■AG71 F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	13/32	18.0	15.2	18.2	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
336	■AG71 F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	6/22	18.5	15.4	15.9	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
337	F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	7/6	18.1	15.4	16.8	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
338	■AG71 F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	7/6	18.1	15.4	16.8	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
339	F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	6/20	18.1	15.4	16.8	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
340	F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	6/20	18.1	15.4	16.8	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
341	■AG71 F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	6/20	18.1	15.4	16.8	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
342	F SD115	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	6/20	18.1	15.4	16.8	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
343	■AG6c F SK121	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	9/22	13.2	9.4	10.6	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
344	■AG6c F SK121	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	12/22	10.5	9.0	9.5	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
345	■AG6c F SK122	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	1/23	21.1	11.4	11.4	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
346	■AG6w F SK122	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	24/22	19.4	16.1	18.9	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
347	■AG6w Y SK122	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	24/22	18.6	16.0	17.6	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
348	■AG6Y F SK124	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	10/23	21.6	17.9	19.3	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味
349	■AG3 Y SK124	中根 葵	地中	土壌	野菜	野菜	野菜	7/23	22.0	20.0	20.8	5.6	24.2	味濃	淡色	苦味	甘味	甘味	甘味

(17)

卷之十

遺物	グリッド	所蔵	基準	基上	時期	種類	器形	内面	底面	外縁	縁部	外縁	測量・内面	測量・外縁	測量・内面	測量・外縁
387 三A22	Y	SK145	5 中頸	直	口縁	E2 在地	6/32	12.8		にふく縁	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:タマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ	
388 三A22	F	SK145	45 中頸	直	口縁	A1 在地	7/32	19.8	16.0	16.8	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ	
389 三A22	Y	SK146	中頸	直	口縁	E2 在地	7/32	11.8	11.5	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
390 三B23	Y	SK147	4 中頸	直	口縁	E2 在地	5/32	15.0	11.0	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
391 三B23	F	SK147	8 中頸	直	口縁	E2 在地	8/32	8.0	10.8	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
392 三B23m	F	SD112	中頸	直	口縁	E2 在地	14/32	10.0	21.7	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
393 三B23	F	SK147	9 中頸	直	口縁	E 在地	5/32	18.3		底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
394 三A23	Y	SK148	23.4 中頸	直	口縁	A2 在地	19/32	14.6	12.1	17.0	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ	
395 三A23	F	SK151	中頸	直	口縁	A1 在地	8/32	14.3	11.5	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
396	Y	SK151	12 中頸	直	口縁	E2 在地	5/32	21.6	17.4	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
397	F	SK151	43 中頸	直	口縁	E2 在地	1/32	18.5	15.0	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
398	F	SK151	中頸	直	口縁	E 在地	5/3			底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
399	F	SK152	中頸	直	口縁	E2 在地	5/32	10.8		底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
400 三A23	F	SK152	中頸	直	口縁	G2 在地	3/32	24.5		底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
401	F	SK152	中頸	直	口縁	A2 在地	19/32	17.2	13.6	14.6	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ	
402 三A23a	F	SK152	中頸	直	口縁	E2 在地	13/32	15.0	12.5	16.1	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ	
403 三A23	F	SK152	中頸	直?	口縁	D 在地	11/32	19.4	14.2	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
404 三A23a	F	SK152	中頸	直	口縁	A1 在地	2/32	16.2		底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
405 三A23a	F	SK152	中頸	直	口縁	A 在地	8/3	21.7	15.6	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ		
406 三A23m	F	SK153	中頸	直	口縁	A2 在地	27/32	17.2	13.6	15.6	底	石英	石英・砂岩	口縁コマハケ→ 底:ヨコナマハケ	口縁:ヨコナマハケ 底:ヨコナマハケ	

遺物	グリッド	所在	高さ	幅	厚さ	時間	地質	層位	基底	頂部	断面	外観	測量・外観	測量・外観	測量・外観	測量・外観
No.	No.		Hm.													
407 三AS0	F m-1	SK153 中層	実測	A1 在地	14/32	22.0	6.8	15.0	根	石英 長石 基岩	柱状 斜面	口縁コナード+不規則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	
408 三AS0	F	SK153 中層	柱	口～C1 在地	7/32	16.4	17.2	17.2	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
409 三AS0a	F	SK155 中層	柱	口～A1 在地	13/32	16.0	16.2	17.0	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
410 三AS0a	F SK155a	12 中層	要	口～A1 在地	15/32	20.0	15.0	18.2	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
411	F	SK155 中層	柱	口～A2 在地	24/32	16.4	15.4	16.8	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
412 三BS50	F	SK156 中層	柱	口～A2 在地	4/32	15.6	12.0	12.0	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
413 三BS50a	F	SK156 中層	柱	口～F1 在地	10/32	16.0	16.0	16.0	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
414	F	SK156 10 中層	要	口～H 在地	5/32	19.0	13.0	14.8	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
415 三BS50a	F	SK156 中層	柱	口～A2 在地	11/32	20.0	16.0	16.0	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
416 三AS0f	F SK156	中層	柱	口～C1 在地	9/32	19.0	16.4	16.8	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
417	F	SK156 8 中層	柱	口～A2 在地	8/32	16.0	16.0	16.0	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
418	F	SK156 中層	柱	口～B3 在地	2/32	15.4	11.2	13.1	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
419 三AS0b	N4	SK156 中層	柱	口～E 在地	4/32	13.3	12.3	13.1	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
420	F	SK156 中層	柱	口～F 在地	10/32	19.6	18.0	19.8	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
421 三AS0	F d-4	SK157 中層	柱	口～J 在地	8/32	7.6	13.0	13.0	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
422 三AS0	F	SK158 中層	柱	口～A1 在地	7/32	14.6	11.4	11.5	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
423 三AS0	F	SK158 中層	柱	口～F 在地	10/32	19.6	18.0	19.8	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
424 三AS0	F	SK158 中層	柱	口～G 在地	3/32	19.6	19.6	19.6	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
425 三AS0	F	SK158 中層	柱	口～C1 在地	5/32	18.8	19.1	19.1	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
426	F	SK160 中層	柱	口～A2 在地	7/32	22.0	17.6	17.6	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		
427 三AS0v	F	SK161 中層	柱	口～A2 在地	8/32	16.0	14.0	13.4	根	石英 長石 基岩	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面	口：ヨコナード+不規 則 斜面		

(21)

(22)

遺物	グリッド	所在	基準	基準	所上	時期	種類	器形	合	在地	高輪	馬場	口徑	底径	高さ	底厚	内面	色調	外側	表面	外觀	測量・剖面	測量・剖面	口縁文様等	測量・剖面文様等	圖	
464	■ A56r ↓	SX167	中輪	直	圓~A						1.17	22.7															
465	F	SX167	中輪	直	圓~B						1.32	24.9	7.8														
466	F	SX167	中輪	直	口~R2	在地					7.02	14.8	11.3	28.6	5.6	42.4	浅腹盤	灰白	長石・砂礫	堅	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A			
467	F	SX167	中輪	直	完形	C2	在地				32.732	10.3	7.5	14.4	4.6	22.3	灰白	長石・砂礫	堅	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A				
468	F	SX167	中輪	直	口~J	在地					6.32	8.9		17.1				にふくい型	砂礫	堅	體入	口縁文	口縁文	口縁文	口縁文		
469	F	SX167	中輪	直	圓~B									26.6	7.2			浅腹盤	灰白	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A		
470	F	SX167	中輪	直	圓~A1	在地					21.32	15.6	15.0					にふくい型	砂礫	堅	體入	口縁文	口縁文	口縁文	口縁文		
471	F	SX167	中輪	直	口~A1	在地					4.02	17.1	14.6	15.4					口縁文	砂礫	堅	體入	口縁文	口縁文	口縁文	口縁文	
472	F	SX167	中輪	直	口~A2	在地					7.02	20.8	17.6	17.0					浅腹盤	灰白	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	
473	■ A56c ↓	SX167	中輪	直	完形	A2	在地				24.32	16.6	12.9	14.2	5.9	17.5	口~E~N										
474	F	SX167	中輪	直	口~A2	在地					9.32	15.4	11.8	14.5					口縁文	砂礫	堅	體入	口縁文	口縁文	口縁文	口縁文	
475	F	SX167	中輪	直	完形	A3	在地				21.32	21.5	17.6	17.7	6.3	24.6	浅腹盤	砂礫	堅	體入	口縁文	口縁文	口縁文	口縁文			
476	F	SX167	中輪	直	口~A3	在地					17.32	14.0	12.0	12.5					浅腹盤	灰白	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	
477	■ A56	g'm	中輪	直	口~A3	在地					13.32	20.0	16.4	17.2					口縁文	砂礫	堅	體入	口縁文	口縁文	口縁文	口縁文	
478	■ A56g ↓	SX167	中輪	直	圓~H	在地					16.32	19.0	14.0	15.6					全周口縁	砂礫	堅	體入	口縁文	口縁文	口縁文	口縁文	
479	F	SX167	中輪	直	口~B2	在地					4.02	20.0	16.5					にふくい型	砂礫	堅	體入	口縁文	口縁文	口縁文	口縁文		
480	■ A56t ↓	SX167	中輪	直	口縫						5.32	26.0	20.3	6.2					浅腹盤	灰白	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	圓~A	
481	■ A57m ↓	SX167	中輪	直	口縫						1.32	18.6	15.6					口縫	砂礫	堅	全周口縫	口縫	口縫	口縫	口縫		

通号	グリッド	地盤	高さ	基層	地上 Hm.	時期	地質	層位 含層	高程 Hm.	口径	底径	高さ	底面	側面	外觀	測量・外觀	測量・外觀	口部文様等	測量・外觀文様等	圖	考
482	Y	SX167	中層	抹	土	口~	A2 在地		4.32	18.6				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
483	Y	SX167	中層	抹	土	口~	A3 在地		5.23	18.2	17.0	7.9	15.7	灰陶	石基	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	
484	Y	SX167	中層	抹	土	口~	A2 在地		6.0	16.0				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
485	Y	SX167	中層	抹	土	口~	A3 在地		6.0	16.0				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
486	Y	SX167	中層	抹	土	口~	A2 在地		6.0	16.0				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
487	Y	SX167	中層	抹	土	口~	E1 在地		6.32	16.0	11.2			口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
488	Y	AS64v N上	中層	抹	土	口~	A2 在地		7.02	11.0	8.8			口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
489	Y	AS651 N2	中層	抹	土	口~	B1 在地		4.32	17.9				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
490	Y	AS653 N	2000 中層	抹	土	口~	E2 在地		4.32	16.5				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
491	Y	AS72g Y	2001 中層	抹	土	口~	B2 在地		27.32	13.1	13.3			口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
492	Y	AS90 N	中層	抹	土	口~	B2 在地		9.32	14.4	12.7			口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
493	Y	AS9c N2	中層	抹	土	口~	F1 在地		6.32	20.4				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
494	Y	AS9f N	中層	抹	土	口~	F1		14.32	15.5	11.4			口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
495	Y	AS9c N2	中層	抹	土	口~	F2 在地		6.32	15.5				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
496	Y	AS9c N2	中層	抹	土	口~	C1 在地		7.5	21.4				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
497	Y	AS9p N2	中層	抹	土	口~	G1 在地		4.32	18.2				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
498	Y	AS9p N2	中層	抹	土	口~	E1 在地		3.32	19.0				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
499	Y	AS9q N2	中層	抹	土	口~	D1 在地		4.32	17.0				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
500	Y	AS9l N	中層	抹	土	口~	E1 在地		4.32	17.0				口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
501	Y	AS9h N	中層	抹	土	口~	E2 在地							口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
502	Y	AS9dy N	1033 中層	抹	土	口~	J2 在地		12.32	8.2		13.0	10.7	灰陶	灰陶	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			
503	Y	AS9r N	1168 中層	抹	土	口~	K 在地							口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ	口:コナデ			



通号	グリッド	方位	基盤	地上 高さ cm.	時期	地質	含 量	底質	口徑 mm.	底径 mm.	高さ mm.	底質	色調・外因	測量・外因	測量・内因	口部文様等											
522 三AB7 F		1044 中層	奥 体	口~A3 在地		17/32	19.4	15.4	17.9			17/32	19.6	16.2	16/32	19.6	16.2	16/32	19.6	16.2	16/32	19.6	16.2	16/32	19.6	16.2	
523 三AB7n F		1013 中層	奥 体	口~A3 在地		13/32	17.6	14.6	16.9			13/32	20.4	18.1	17/32	19.6	16.2	16/32	19.6	16.2	16/32	19.6	16.2	16/32	19.6	16.2	
524 三AB7c N		中層	奥 体	口~B1 在地		13/32	22.3	24.1	20.4			13/32	20.0	16.3	18.7	13/32	20.0	16.3	18.7	13/32	20.0	16.3	18.7	13/32	20.0	16.3	18.7
525 三B69 F		1001 中層	奥 体	口~B2 在地		13/32	20.4	18.1	22.3			13/32	20.4	18.1	22.3	13/32	20.4	18.1	22.3	13/32	20.4	18.1	22.3	13/32	20.4	18.1	22.3
526 三AB7n N		中層	奥 体	口~B2 在地		13/32	20.0	16.3	18.7	5.4	22.6	13/32	20.0	16.3	18.7	13/32	20.0	16.3	18.7	13/32	20.0	16.3	18.7	13/32	20.0	16.3	18.7
527 三AB7 F		中層	奥 体	口~B2 在地		13/32	21.8	18.6	21.8			13/32	21.8	18.6	21.8	13/32	21.8	18.6	21.8	13/32	21.8	18.6	21.8	13/32	21.8	18.6	21.8
528 三AB7n N		中層	奥 体	口~B3 在地		9/32	21.4	18.7	20.3			9/32	21.4	18.7	20.3	9/32	21.4	18.7	20.3	9/32	21.4	18.7	20.3	9/32	21.4	18.7	20.3
529 三B69n F		中層	奥 体	口~C1 在地		13/32	17.2	16.0	19.4			13/32	17.2	16.0	19.4	13/32	17.2	16.0	19.4	13/32	17.2	16.0	19.4	13/32	17.2	16.0	19.4
530 三AB7c F		中層	奥 体	口~C1 在地		6/32	20.4	18.2	22.3			6/32	20.4	18.2	22.3	6/32	20.4	18.2	22.3	6/32	20.4	18.2	22.3	6/32	20.4	18.2	22.3
531 三AB7m N		中層	奥 体	口~D 在地		27/32	17.0	13.8	17.0	4.7		27/32	17.0	13.8	17.0	27/32	17.0	13.8	17.0	27/32	17.0	13.8	17.0	27/32	17.0	13.8	17.0
532 三AB7n N		中層	奥 体	口~D 在地		8/32	16.5	16.0	19.0			8/32	16.5	16.0	19.0	8/32	16.5	16.0	19.0	8/32	16.5	16.0	19.0	8/32	16.5	16.0	19.0
533 三AB7e F		1010 中層	奥?	口~E 在地	G3	4/32	19.8					4/32	19.8			4/32	19.8			4/32	19.8			4/32	19.8		
534 三AB7q F		中層	奥 体	口~F 在地		9/32	15.0	10.6				9/32	15.0	10.6		9/32	15.0	10.6		9/32	15.0	10.6		9/32	15.0	10.6	
535 三AB7p N		中層	奥 体	口~F 在地		4/32	21.4	17.2				4/32	21.4	17.2		4/32	21.4	17.2		4/32	21.4	17.2		4/32	21.4	17.2	
537 三AB7 F-a		1022 中層	奥 体	口~G 在地		20/32	17.6	15.4	15.3	6.5	15.3	20/32	17.6	15.4	15.3	20/32	17.6	15.4	15.3	20/32	17.6	15.4	15.3	20/32	17.6	15.4	15.3
538 三AB7w N		中層	奥 体	口~H 在地		3/32	19.6					3/32	19.6			3/32	19.6			3/32	19.6			3/32	19.6		

遺物	グリッド	部位	基準	地上 高さ Hcm	時期	地質	層位 含 層	高さ mm	口径 mm	底径 mm	壁厚 mm	底面 形	内面 形	底面 色調	外側 色調	底面 表面	外側 表面	口縁文様等	底面・外側 文様	底面・外側 文様
539	■AS5n N上	中間	鉢 口~ 底	在地	3.32	21.4	22.3					深鉢	深鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁文	口下部: 素面 口縁: 錦織文			
540	■AS5m N下	中間	鉢 口~ 底	在地	5.32	25.0						浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
541	■AS5n N下	中間	鉢 底	在地								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
542	■BS5 N 下	中間	瓦釜	在地								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
543	■AS5m N下	中間	鉢 底	在地								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
544	■AS6 N上	中間	鉢 底	?								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
545	■BS5 N 下	中間	鉢 底	在地								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
546	■AS7 N上	中間	鉢 底	在地								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
547	■AS3 F	1004	中間	甕 口	折高	3.32	14.5	12.4				浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
548	■AS8n N 下	中間	鉢 底	?								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
549	■BS5 N 下	中間	瓦釜	中层								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
550	■AS8q N	中間	鉢 底	中层								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
551	■BS5b N 2	中間	甕 口	中层								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
552	■AS8m Y	中間	甕 口	中层								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
553	■AS8i Y	中間	甕 底	中层								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
554	■AS1 Y	中間	甕 口	東北	4.32	7.0						浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
555	■AS8q N上	中間	甕 底	東北								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
556	■AS8b F	中間	甕 底	東北								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
557	■AS8a N 2	中間	甕 底	東北								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
558	■AS8q N 2 -1	中間	甕 底	東北								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
559	■AS8b N 3	中間	甕 底	東北								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
560	■BS5b N 下	中間	甕 底	東北 (子)	5.32	15.6	12.2					浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
561	■BS5 N 4	中間	甕 底	東北	2.32	10.4	9.0	1.1				浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			
562	■AS8a F	中間	甕 底	東北 (子)								浅鉢	浅鉢	灰白	灰白	口上コテ 口縁: 素面	口下部: 素面 口縁: 素面			



(6c) 重複問題

## 石器類序表(1)

通称	標識	タリット	遺物No.	施主No.	施主上位	分類	工作	長さ	幅・径	厚さ	重量(g)	石材	文様	備考
1	5305	■AS2q	SRI10	1015	下	骨玉・骨石頭	1	42.0	59.0	49.0	154.96	褐色灰岩		
2	5302	■AS2l	SRI10	927	下	骨玉・骨石頭	1	61.0	52.0	57.0	123.80	褐色灰岩		
3	5306	■AS2q	SRI10	902	下	骨玉・骨石頭	1	49.0	50.0	45.0	130.00	褐色灰岩		No.5197と同一
4	5303	■AS2b	SRI10	922	下	骨玉・骨石頭	1	35.0	77.0	56.0	121.88	褐色灰岩		
5	5116	■AS2m	SRI10	992	下	骨玉・骨石頭	1	32.0	43.0	25.0	35.45	褐色灰岩		
6	5083	■AS2c	SRI10	1312	下	骨玉・骨石頭	1	17.0	24.0	38.0	15.56	褐色灰岩		
7	5298	■AS2n	SRI10	3222	下	骨玉・骨石頭	1	25.0	43.0	10.0	12.88	褐色灰岩		
8	5238	■AS2g	SRI10	928	下	骨玉・骨石頭	1	18.0	38.0	12.5	9.78	褐色灰岩		
9	5107	■AS1d	SRI10	1060	下	骨玉・骨石頭	1	21.5	35.0	10.0	9.06	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
10	5125	■AS2c	SRI10	304	下	骨玉・骨石頭	2	36.0	17.0	25.0	20.99	褐色灰岩		
11	5209	■AS2b	SRI10	809	下	骨玉・骨石頭	2	48.0	21.0	34.0	48.84	褐色灰岩		
12	5084	■AS2h	SRI10	1317	下	骨玉・骨石頭	2	35.0	24.0	16.4	17.50	褐色灰岩		
13	5112	■AS2g	SRI10	9235	下	骨玉・骨石頭	3	31.0	15.0	28.0	13.13	褐色灰岩		
14	5288	■AS2d	SRI10	3035	下	骨玉・骨石頭	3	27.0	22.5	23.0	13.31	褐色灰岩		
15	5123	■AS2l	SRI10	966	下	骨玉・骨石頭	3	26.5	20.0	18.5	10.01	褐色灰岩		
16	5128	■AS2b	SRI10	1316	下	骨玉・骨石頭	3	34.0	20.0	21.5	12.52	褐色灰岩		
17	5122	■AS1d	SRI10	339	下	骨玉・骨石頭	3	33.0	13.0	16.0	10.07	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
18	5240	■AS2q	SRI10	1913	下	骨玉・骨石頭	3	55.0	26.0	23.0	25.67	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
19	5104	■AS2w	SRI10	898	下	骨玉・骨石頭	3	34.0	20.5	16.5	10.72	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
20	5120	■AS2h	SRI10	944	下	骨玉・骨石頭	3	37.0	16.0	22.0	11.06	褐色灰岩		外社丸形片出刃端切面を伴ふ板状削形
21	5291	■AS2d	SRI10	1024	下	骨玉・骨石頭	3	26.5	17.5	15.0	8.43	褐色灰岩		
22	5296	■AS2d	SRI10	306	下	骨玉・骨石頭	3	43.0	17.0	18.0	13.02	褐色灰岩		
23	5301	■AS2h	SRI10	316	下	骨玉・骨石頭	3	25.0	16.0	16.5	8.97	褐色灰岩		打等の外社丸形片を含む
24	5127	■AS2l	SRI10	315	下	骨玉・骨石頭	3	39.0	10.0	14.0	14.0	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
25	5206	■AS2l	SRI10	965	下	骨玉・骨石頭	3	42.0	20.5	10.0	8.42	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
26	5246	■AS2q	SRI10	1314	下	骨玉・骨石頭	3	42.0	20.5	14.5	7.69	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
27	5289	■AS2d	SRI10	309	下	骨玉・骨石頭	3	(35.5)	14.0	13.5	(6.65)	褐色灰岩		上部破損
28	5131	■AS2h	SRI10	995	下	骨玉・骨石頭	3	36.0	14.0	10.0	6.25	褐色灰岩		
29	5244	■AS2c	SRI10	916	下	骨玉・骨石頭	3	36.0	10.0	16.0	8.47	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
30	5156	■AS1h	SRI10	1072	下	骨玉・骨石頭	3	30.0	6.0	19.0	2.64	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
31	5157	■AS1h	SRI10	1072	下	骨玉・骨石頭	3	40.0	19.5	13.0	8.72	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
32	5159	■AS1h	SRI10	1072	下	骨玉・骨石頭	3	40.0	12.0	9.5	3.64	褐色灰岩		No.5152と組合
33	5161	■AS1h	SRI10	972	下	骨玉・骨石頭	3	22.0	14.0	9.0	5.08	褐色灰岩		No.5153と組合
34	5200	■AS2d	SRI10	324	下	骨玉・骨石頭	3	29.5	16.0	16.0	6.70	褐色灰岩		打等の外社丸形片を含む
35	5134	■AS2b	SRI10	901	下	骨玉・骨石頭	3	23.5	14.0	13.0	3.43	褐色灰岩		
36	5162	■AS2l	SRI10	303	下	骨玉・骨石頭	3	23.0	10.5	13.0	5.01	褐色灰岩		
37	5292	■AS2d	SRI10	970	下	骨玉・骨石頭	3	34.5	18.0	11.5	4.88	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
38	5183	■AS2h	SRI10	943	下	骨玉・骨石頭	3	23.5	11.5	9.0	4.32	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
39	5142	■AS2l	SRI10	319	下	骨玉・骨石頭	3	25.0	12.0	8.0	2.43	褐色灰岩		
40	5290	■AS2d	SRI10	324	下	骨玉・骨石頭	3	29.5	12.5	10.5	2.57	褐色灰岩		
41	5105	■AS2b	SRI10	901	下	骨玉・骨石頭	3	23.5	11.0	14.0	3.00	褐色灰岩		
42	5282	■AS2l	SRI10	303	下	骨玉・骨石頭	3	23.0	10.5	8.0	2.02	褐色灰岩		
43	5182	■AS2h	SRI10	943	下	骨玉・骨石頭	3	21.0	7.0	5.0	1.76	褐色灰岩		自然端面、磨耗面
44	5168	■AS2b	SRI10	319	下	骨玉・骨石頭	3	(15.5)	8.0	10.5	0.86	褐色灰岩		下部欠損
45	5167	■AS2m	SRI10	5167	下	骨玉・骨石頭	3	24.0	6.0	7.0	0.56	褐色灰岩		
46	5229	■AS2l	SRI10	5168	下	骨玉・骨石頭	3	20.0	10.0	5.0	0.50	褐色灰岩		内側に凹溝
47	5146	■AS2l	SRI10	947	下	骨玉・骨石頭	3	20.0	8.0	6.5	2.13	褐色灰岩		
48	5166	■AS2l	SRI10	947	下	骨玉・骨石頭	3	31.0	7.0	7.0	1.98	褐色灰岩		
49	8321		SRI10			骨玉・骨石頭	3	30.0	4.0	4.5	0.32	褐色灰岩		

通称	質地	大きさ	遺物No.	出土No.	断面	分類	工具	長さ	幅・径	厚さ	重量(g)	石材	文様	備考
50 8343	■■■62m	SH110	1037	Y	管玉形内嵌切削	3	24.5	6.0	6.0	0.81	緑色灰岩			
51 1543	■■■62m	SH110	1014	Y	管玉形内嵌切削	3	22.0	6.5	4.0	4.0	緑色灰岩			
52 5348	■■■62m	SH110	1454	Y	管玉形内嵌切削	4	19.5	5.5	3.0	0.33	緑色灰岩		端部に細切削を持った角状部分	
53 5249	■■■62m	SH110	916	Y	管玉形	4	27.0	6.0	6.0	1.19	緑色灰岩			
54 5153	■■■62m	SH110	1003	Y	管玉形	4	21.5	6.0	7.0	1.37	緑色灰岩			
55 51589	■■■62m	SH110	8	Y	管玉形	4	22.0	6.0	7.0	1.30	緑色灰岩			
56 5094	■■■62m	SH110	8	Y	管玉形	4	23.0	6.0	7.0	2.26	緑色灰岩			
57 5094	■■■62m	SH110	8	Y	管玉形	4	17.5	4.5	4.0	0.45	緑色灰岩			
58 5216	■■■62m	SH110	1004	Y	管玉形	4	23.5	7.0	7.0	2.00	緑色灰岩			
59 5217	■■■62m	SH110	312	Y	管玉形	4	16.5	6.5	6.5	0.55	緑色灰岩			
60 5171	■■■62m	SH110	8	Y	管玉形	4	15.5	5.0	4.0	0.20	緑色灰岩			
61 8334		SH110	8	Y	管玉形	4	19.5	4.0	5.0	0.62	緑色灰岩			
62 8318		SH110	8	Y	管玉形	4	39.0	10.0	9.5	3.89	緑色灰岩			
63 5177	■■■62m	SH110	1275	Y	管玉形	5	11.0	4.0	4.0	0.23	緑色灰岩			
64 5160	■■■62m	SH110	986	Y	管玉形	4	16.0	7.0	6.5	(0.97)	緑色灰岩		下部欠損、断面不規則	
65 5256	■■■62m	SH110	329	Y	管玉形	4	22.5	7.0	7.0	1.70	緑色灰岩			
66 5098	■■■62m	SH110	8	Y	管玉形	4	36.5	6.5	6.5	2.40	緑色灰岩			
67 5189	■■■62m	SH110	1449	Y	管玉形	5	(5.0)	8.4	2.5	(0.06)	緑色灰岩			
68 8342		SH110	8	Y	管玉形	5	(11.0)	3.6	3.0	(0.18)	緑色灰岩			
69 8359		SH110	8	Y	管玉形	5	(18.2)	4.8	4.8	(0.02)	緑色灰岩			
70 8339		SH110	8	Y	管玉形	5	(11.0)	4.9	4.9	(0.11)	緑色灰岩			
71 8341		SH110	8	Y	管玉形	5	(11.0)	4.9	4.9	(0.11)	緑色灰岩			
72 8358	■■■62m	SH110	1318	Y	管玉形	7	9.0	3.0	2.9	0.12	緑色灰岩		片側が少しあらげ、0.7mm-0.9mm	
73 8338		SH110	8	Y	管玉形	7	9.5	2.1	2.1	0.06	緑色灰岩		片側が少しあらげ、1.5mm-1.0mm	
74 8340		SH110	8	Y	管玉形	7	11.5	3.0	3.0	0.14	緑色灰岩		片側が少しあらげ、1.1mm-1.0mm	
75 8349	■■■62m	SH110	8	Y	管玉形	7	14.7	3.0	2.8	0.18	緑色灰岩		片側が少しあらげ、1.5mm-1.3mm	
76 8350	■■■62m	SH110	8	Y	管玉形	6	31.0	4.3	4.3	0.64	緑色灰岩		片側が少しあらげ、2.2mm-1.5mm	
77 8362	■■■62m	SH110	8	Y	丸玉形	6	13.7	6.5	3.8	0.62	緑色灰岩			
78 8358	■■■62m	SH110	1052	Y	丸玉形	6	36.0	3.0	17.0	20.85	緑色灰岩		片側が少しあらげ、0.5mm	
79 6449	■■■62m	SH110	1315	Y	管玉形	2	37.0	26.0	18.0	41.76	緑色灰岩			
80 5038	■■■62m	SH110	8	Y	管玉形	1	26.5	33.0	30.0	16.50	緑色灰岩			
81 6517	■■■62m	SH110	982	Y	管玉形	1	25.0	30.0	32.0	42.87	緑色灰岩			
82 6462	■■■62m	SH110	937	Y	管玉形内嵌切削	2	37.0	10.5	2.5	8.53	緑色灰岩			
83 8003	■■■62m	SH110	8	Y	管玉形内嵌切削	2	28.0	26.0	16.0	12.12	緑色灰岩			
84 6475	■■■62m	SH110	978	Y	管玉形内嵌切削	2	34.0	37.0	18.0	17.75	緑色灰岩			
85 6477	■■■62m	SH110	293	Y	管玉形内嵌切削	2	37.0	26.0	16.0	12.25	緑色灰岩		板状部分を削った跡	
86 5036	■■■62m	SH110	102	Y	管玉形内嵌切削	3	34.5	30.0	18.0	14.21	緑色灰岩			
87 6471	■■■62m	SH110	1043	Y	管玉形内嵌切削	3	30.0	14.0	11.0	4.66	緑色灰岩			
88 6495	■■■62m	SH110	1067	Y	管玉形内嵌切削	3	(15.5)	10.0	9.0	(1.20)	緑色灰岩			
89 8391	■■■62m	SH110	923	Y	管玉形内嵌切削	3	27.0	10.0	4.0	1.12	緑色灰岩			
90 6465	■■■62m	SH110	981	Y	管玉形内嵌切削	3	17.0	10.5	9.5	1.94	緑色灰岩			
91 6493	■■■62m	SH110	299	Y	管玉形内嵌切削	3	(12.0)	11.0	6.2	(1.34)	緑色灰岩			
92 6506	■■■62m	SH110	1261	Y	管玉形内嵌切削	3	21.0	7.0	3.0	4.07	緑色灰岩			
93 8604	■■■62m	SH110	8	Y	管玉形内嵌切削	3	12.0	10.0	3.14	緑色灰岩				
94 8389	■■■62m	SH110	923	Y	管玉形内嵌切削	3	28.0	16.0	10.0	4.56	緑色灰岩			
95 8390	■■■62m	SH110	1023	Y	管玉形内嵌切削	3	28.0	13.0	8.5	4.05	緑色灰岩			
96 8373		SH110	8	Y	管玉形内嵌切削	3	25.0	14.0	10.5	3.24	緑色灰岩			
97 6487	■■■62m	SH110	981	Y	管玉形内嵌切削	3	16.0	17.0	10.0	2.42	緑色灰岩			
98 8372		SH110	8	Y	管玉形内嵌切削	3	20.0	6.0	7.0	0.97	緑色灰岩			
99 8368	■■■62m	SH110	923	Y	管玉形内嵌切削	3	19.0	6.0	5.0	0.71	緑色灰岩			
100 6454	■■■62m	SH110	1315	Y	管玉形	4	(17.2)	5.5	5.2	(0.60)	緑色灰岩			

## 石器類解説(3)

通数	骨角	アリット	遺物No.	施主No.	断面	分類	工具	長さ	幅・径	厚さ	重量(g)	石材	文様	備考
101	65.0	■ A62z	S8110	1021	Y	骨玉・球		4	16.5	7.0	0.94	致石灰		
102	65.20	■ A62m	S8110	292	Y	骨玉・球		4	20.6	6.2	4.4	致石灰		
103	85.81	■ A62i	S8110	951	Y	骨玉・球		4	17.0	6.0	6.4	0.87	致石灰	自然磨耗・凹凸感
104	65.19	■ A62n	S8110	1000	Y	骨玉・球		4	27.0	9.5	9.0	2.63	致石灰	自然磨耗・凹凸感
105	83.87		S8110	Y	骨玉・球		5	15.8	3.2	3.0	0.25	致石灰	○	
106	83.88		S8110	Y	骨玉・球		6	8.5	3.0	3.0	0.17	致石灰		
107	53.13		S8110	Y	骨玉・球		5	9.4	26.0	2.0	0.11	致石灰	13面研	
108	83.12		S8110	Y	骨玉・球		5	13.2	3.4	3.5	0.30	致石灰	体表に凹凸感があり底面かく10面研	
109	83.11		S8110	Y	骨玉・球		7	12.7	2.4	2.4	0.11	致石灰	万葉歌・下句	
110	83.10		S8110	Y	骨玉・球		7	1.0	2.6	2.6	(0.06)	致石灰	万葉歌・下句	
111	83.02	■ A62h	S8110	934	Y	玉串		18.0	16.0	1.30	3.44	致石灰	物板・自然磨耗	
112	13.508		S8110	Y	骨玉・球		4	14.0	5.0	4.0	0.29	致石灰	自然磨耗	
113	83.97		S8110	Y	骨玉・球		4	20.5	7.0	4.5	0.66	玉飾		
114	83.06		S8110	Y	骨玉・球		4	27.5	7.8	6.4	1.66	玉飾	自然磨耗・凹凸感	
115	83.38		S8110	Y	骨玉・球		5	111.0	4.0	3.1	(0.20)	玉飾	八角形・完全磨耗	
116	83.52		S8110	Y	石斧	完品	(7.7)	2.2	2.1	(0.06)	水晶	○		
117	83.51		S8110	Y	石斧	完品		30.6	2.6	2.6	0.27	マダラ	穿孔部から空気孔・先端に有	
118	73.45	■ A62c	S8110	947	Y	石斧・磨石		1	89.0	72.0	4.0	346.60	青銅時代の石斧	自然磨耗
119	66.45	■ A61i	S8110	1076	Y	石斧・磨石		1	73.5	76.0	17.0	83.83	青銅時代の石斧	自然磨耗
120	66.49	■ A62m	S8110	1259	Y	石斧・磨石		1	32.5	63.5	40.5	52.48	青銅時代の石斧	石斧磨耗・斜削
121	66.17	■ A61h	S8110	1044	Y	石斧・磨石		2	35.5	19.0	16.0	11.02	青銅時代の石斧	自然磨耗
122	66.09	■ A61c	S8110	1016	Y	石斧・磨石		2	30.5	24.0	11.0	8.10	青銅時代の石斧	自然磨耗
123	65.99	■ A61h	S8110	1065	Y	石斧・磨石		3	28.0	12.0	10.0	4.72	青銅時代の石斧	自然磨耗
124	66.18	■ A62m	S8110	999	Y	石斧・磨石		3	36.0	7.0	11.0	2.84	青銅時代の石斧	自然磨耗
125	66.03	■ A62x	S8110	1304	Y	石斧・磨石		3	(30.0)	14.0	9.0	(1.87)	青銅時代の石斧	下部欠損
126	66.16	■ A62z	S8110	1020	Y	石斧・磨石		3	36.0	14.0	13.0	8.76	青銅時代の石斧	木柄用
127	83.56		S8110	Y	石斧・磨石		3	12.0	3.5	3.5	0.16	青銅時代の石斧	斜削	
128	83.45		S8110	Y	石斧・磨石		3	16.1	4.2	3.1	0.26	青銅時代の石斧	自然磨耗	
129	83.76		S8110	Y	石斧・磨石		4	13.9	3.9	2.8	0.24	青銅時代の石斧	自然磨耗	
130	83.65		S8110	Y	石斧・磨石		4	19.0	4.0	3.5	0.31	青銅時代の石斧	自然磨耗	
131	83.47		S8110	Y	石斧・磨石		4	15.5	4.3	3.6	0.14	青銅時代の石斧	自然磨耗	
132	83.97	■ A62k	S8110	Y	石斧・磨石		5	7.8	2.5	2.5	0.07	青銅時代の石斧	斜削	
133	86.40		S8110	Y	石斧・磨石		70.0	32.0	9.0	21.06	金	斜削		
134	66.38	■ A62z	S8110	283	Y	断切刃		59.0	15.0	45.94	鍔打		刃長：下部55mm全	
135	53.25		S8110	989	Y	断切刃		79.0	66.0	8.0	35.20	鍔打	刃長：下部55mm全	
136	66.34	■ A62i	S8110	1310	Y	断切刃		88.0	31.0	8.4	34.32	鍔打	刃長：下部55mm全	
137	66.22	■ A61-i-022-n	S8110	1005	Y	断切刃		69.0	50.0	9.4	52.39	鍔打	鍔打	
138	66.41	■ A62w	S8110	1285	Y	断切刃		109.0	53.0	12.0	53.07	鍔打	刃長：下部55mm全	
139	66.22	■ A62s-x	S8110	1305	Y	断切刃		132.0	80.0	13.0	19.36	鍔打	刃長：下部55mm全	
140	53.29	■ A62w	S8110	1284	Y	断切刃		130.0	51.0	11.5	61.82	鍔打	刃長：下部55mm全	
141	66.37	■ A62m	S8110	989	Y	断切刃		67.0	62.0	14.0	54.92	鍔打	刃長：下部55mm全	
142	66.50	■ A62c	S8110	1310	Y	断切刃		105.0	31.0	7.5	2.91	鍔打	鍔打	
143	66.15	■ A61d	S8110	1061	Y	断切刃		98.0	22.0	12.0	2.41	鍔打	物板	
144	66.60	■ A62t	S8110	982	Y	断切刃		118.0	12.0	5.01	1.67	鍔打	自然磨耗	
145	66.14	■ A62h	S8110	935	Y	断切刃		21.0	20.0	17.0	9.0	鍔打	自然磨耗	
146	13.510		S8110	Y	断切刃		34.5	16.0	6.0	3.22	鍔打	自然磨耗		
147	13.509		S8110	Y	断切刃		31.0	25.0	11.0	9.34	鍔打	自然磨耗		
148	65.95	■ A62m	S8110	996	Y	断切刃								

通称	器用	タリット	遺物No.	出土場所	分類	工具	長さ	幅・径	厚さ	重量(g)	石材	文様・縫合	備考	
149	6008	■6562q	SH110	1012	Y	楔形石器	39.0	29.0	16.0	20.31	紫色灰岩			
150	6558	■6562q	SH110	930	Y	石器	23.0	(13.0)	4.0	0.80	紫色灰岩	S/2	○	
151	8405	■6562q	SH110	949	Y	石器	23.0	(13.0)	5.0	0.80	紫色灰岩		○	
152	8598		SH110	Y	石器	(25.0)	13.0	5.0	1.60	チエント		先端は丸頭		
153	8403		SH110	Y	石器	(32.0)	19.0	7.0	2.50	紫色灰岩				
154	8402	■6562d	SH110	Y	石器	(18.0)	(15.0)	6.0	1.40	紫色灰岩		○		
155	5404		SH110	Y	石器	(34.0)	19.0	6.0	13.10	黄色灰岩		○		
156	8401		SH110	Y	石器	(30.0)	17.0	6.0	2.30	紫色灰岩				
157	8400		SH110	Y	石器	(29.0)	(17.0)	5.0	2.40	紫色灰岩		○		
158	8399		SH110	Y	石器	(25.0)	15.0	7.0	12.60	紫色灰岩		北西側		
159	6465	■6562n	SH110	295	Y	石器	40.0	27.0	6.0	5.70	黄色灰岩		東側色	
160	5239	■6562g	SH110	9228	Y	石器	29.0	17.0	8.5	3.67	紫色灰岩			
161	5265		SH110	Y	石器	17.5	11.0	6.0	1.02	紫色灰岩				
162	6601	■6562d	SH110	1057	Y	石器	29.0	7.0	6.0	1.56	青灰色砂岩			
163	6642	■6562d	SH110	1271	Y	石器	60.0	56.0	27.0	11.77	紫色灰岩			
164	7289	■6562w	SH110	1286	Y	閃石	(88.0)	(72.0)	(56.0)	(284.00)	紫色灰岩		板根	
165	7943	■6562w	SH110	Y	閃石	113.0	98.0	51.0	803.20	紫色灰岩				
166	8708	■6562h	SH110	749	Y	閃石	113.0	88.0	41.0	439.19	紫色灰岩			
167	7940	■6562w	SH110	604	Y	閃石	108.0	78.0	60.0	594.03	紫色灰岩			
168	7941	■6562w	SH110	1313	Y	閃石	(130.0)	(71.0)	(33.0)	(343.10)	紫色灰岩			
169	8712		SH110	Y	閃石	122.0	63.0	(48.5)	(444.80)	紫色灰岩		板根		
170	7946	■6562r	SH110	1446	Y	閃石	90.0	98.0	72.0	720.60	紫色灰岩			
171	7944	■6562r	SH110	1281	Y	隕石	149.0	96.0	34.0	453.10	紫色灰岩			
172	13511		SH110	Y	隕石	38.0	41.0	26.0	511.15	紫色灰岩				
173	6567	■6562l	SH110	980	Y	不透明石器	21.0	28.0	7.0	3.71	紫鐵		一端に斜面ある箇所削離(抜き)付	
174	6575	■6562l	SH110	1283	Y	不透明石器	20.0	25.0	6.0	2.85	紫鐵		使用の跡有る部分削離(抜き)付	
175	6431	■6562l	SH110	85	Y	碧玉(青銅時代)	2	29.0	34.0	13.96	紫色灰岩		無此の跡を有する場合	
176	6954	■6562r	SH114	129	Y	碧玉(青銅時代)	2	57.0	35.5	16.0	31.80	紫色灰岩		
177	5617	■6562s	SH114	72	Y	碧玉(青銅時代)	3	35.5	12.0	9.0	3.04	紫色灰岩		○
178	8474	■6562s	SH114	P7	Y	碧玉(青銅時代)	3	41.0	22.0	11.0	4.00	紫色灰岩		○
179	5597	■6562s	SH114	58	Y	碧玉(青銅時代)	3	32.0	14.0	11.0	17.49	紫色灰岩		○
180	5600	■6562s	SH114	124	Y	碧玉(青銅時代)	3	34.0	13.0	4.47	紫色灰岩		自然崩壊	
181	5691	■6562s	SH114	160	Y	碧玉(青銅時代)	3	30.0	12.0	3.67	紫色灰岩		○	
182	5694	■6562s	SH114	124	Y	碧玉(青銅時代)	3	37.0	9.5	3.7	0.52	紫色灰岩		○
183	5614	■6562n	SH114	111	Y	碧玉(青銅時代)	3	30.0	6.5	4.0	0.96	紫色灰岩		内面に凹凸有
184	5615	■6562r	SH114	136	Y	碧玉(青銅時代)	4	40.2	18.0	7.0	2.93	紫色灰岩		○
185	5607	■6562s	SH114	143	Y	碧玉(青銅時代)	4	34.5	7.0	7.5	2.39	紫色灰岩		
186	5609	■6562s	SH114	143	Y	碧玉(青銅時代)	4	35.0	6.0	8.0	2.08	紫色灰岩		
187	5635	■6562s	SH114	125	Y	碧玉(青銅時代)	4	30.0	6.5	8.0	2.11	紫色灰岩		
188	5604	■6562n	SH114	109	Y	碧玉(青銅時代)	4	23.0	5.0	4.0	0.57	紫色灰岩		○
189	5634	■6562n	SH114	94	Y	碧玉(青銅時代)	4	18.6	4.0	4.8	0.56	紫色灰岩		○
190	5605	■6562n	SH114	157	Y	碧玉(青銅時代)	4	10.8	4.0	3.3	0.19	紫色灰岩		研磨・削
191	5659	■6562n	SH114	136	Y	碧玉(青銅時代)	4	10.8	3.6	4.3	0.33	紫色灰岩		研磨・削
192	8467	■6562s	SH114	136	Y	碧玉(青銅時代)	5	(6.3)	3.1	2.5	(0.96)	紫色灰岩		内面欠損
193	5656	■6562s	SH114	916	Y	碧玉(青銅時代)	5	(6.2)	3.4	2.1	(0.98)	紫色灰岩		一端欠損
194	8472	■6562n	SH114	109	Y	碧玉(青銅時代)	5	(9.1)	2.6	2.4	(0.12)	紫色灰岩		○
195	8444	■6562n	SH114	P7	Y	碧玉(青銅時代)	5	13.8	2.6	2.8	0.18	紫色灰岩		
196	8574	■6562s	SH114	5	Y	碧玉(青銅時代)	6	20.8	3.6	3.5	0.47	紫色灰岩		丸紐・1.4mm 肩紐孔
197	8472	■6562s	SH114	5	Y	碧玉(青銅時代)	6	22.0	3.6	2.6	0.27	紫色灰岩		丸紐・1.4mm 肩紐孔
198	8471	■6562s	SH114	131	Y	碧玉(青銅時代)	1	50.0	30.0	47.0	72.66	致密		
199	5538	■6562r	SH114	131	Y	碧玉(青銅時代)							内面無	

通称	質地	特徴	遺物No.	施主No.	施主	分類	工具	長さ	幅・径	厚さ	重量(g)	石材	文様	備考
No.		タリット												
200	55.07	■A6n	SH114	1113	下	骨玉・骨板切削片	2	31.0	22.0	5.0	9.81	軟玉灰		自然磨耗
201	55.41	■A6n	SH114	91	下	骨玉・骨板切削片	2	44.0	25.0	21.0	10.57	軟玉灰		自然磨耗
202	55.56	■A6n	SH114			骨玉・骨板切削片	2	27.0	22.0	20.0	11.27	軟玉灰		自然磨耗
203	55.40	■A6n	SH114			骨玉・骨板切削片	3	37.0	15.0	15.0	7.22	軟玉灰		自然磨耗
204	55.69	■A6n	SH114	159	下	骨玉・骨板切削片	3	20.0	18.0	16.7	4.74	軟玉灰		打削
205	55.55	■A6n	SH114			骨玉・骨板切削片	3	24.0	17.0	10.0	3.40	軟玉灰		自然磨耗
206	54.85	■A6n	SH114			骨玉・骨板切削片	3	21.0	8.0	6.7	1.62	軟玉灰		○
207	55.46	■A6n	SH114	139	下	骨玉・骨板切削片	3	14.0	7.0	7.0	1.06	軟玉灰		下部欠損
208	55.60	■A6n	SH114	92	下	骨玉・骨板切削片	3	17.0	8.0	5.0	0.98	軟玉灰		○
209	55.58	■A6n	SH114	175	下	骨玉・骨板切削片	3	22.0	8.0	6.0	0.73	軟玉灰		自然磨耗
210	55.46	■A6n	SH114	139	下	骨玉・骨板切削片	4	15.8	5.7	6.0	0.62	軟玉灰		○
211	54.83	■A6n	SH114	P14	下	骨玉・骨板切削片	4	17.6	5.0	4.8	0.66	軟玉灰		○
212	55.60	■A6n	SH114	102	下	石片・骨板切削片	2	48.0	36.0	13.0	27.85	滑面灰		自然磨耗
213	55.61	■A6n	SH114	90	下	石片・骨板切削片	3	36.0	16.0	21.0	17.64	滑面灰		自然磨耗
214	54.81	■A6n	SH114	P11	下	石片・骨板切削片	3	43.0	20.0	20.0	20.0	滑面灰		自然磨耗
215	54.96	■A6n	SH114	P11	下	石片・骨板切削片	3	30.0	15.0	10.0	3.71	滑面灰		○
216	55.70	■A6n	SH114	177	下	石片・骨板切削片	3	32.0	16.0	10.0	1.77	滑面灰		自然磨耗
217	55.22	■A6n	SH114	115	下	石片・骨板切削片	3	34.0	6.0	3.0	0.45	滑面灰		自然磨耗
218	55.41	■A6n	SH114	115	下	石片・骨板切削片	3	16.0	4.0	3.0	0.34	滑面灰		自然磨耗
219	55.21	■A6n	SH114	115	下	石片・骨板切削片	3	10.5	2.8	2.7	0.10	滑面灰		自然磨耗
220	54.91	■A6n	SH114	P10	下	石片・骨板切削片	4	13.0	4.0	3.5	0.29	滑面灰		○
221	55.50	■A6n	SH114			石片・骨板切削片	4	10.0	3.0	3.0	0.17	滑面灰		○
222	55.43	■A6n	SH114			石片・骨板切削片	4	10.3	2.0	2.2	0.07	滑面灰		○
223	55.13	■A6n	SH114	P11	下	石片・骨板切削片	4	11.6	4.7	2.4	0.10	滑面灰		研磨
224	55.66	■A6n	SH114	115	下	石片・骨板切削片	4	11.7	2.4	2.3	0.05	滑面灰		研磨
225	55.81	■A6n	SH114	85	下	断刃灰	171.0	50.0	10.0	10.04	滑面灰		自然磨耗	
226	55.74	■A6n	SH114			断刃灰	102.0	55.0	9.0	50.70	滑面灰		自然磨耗	
227	55.10	■A6n	SH114	87	下	断刃灰	69.0	40.0	7.0	25.30	滑面灰		自然磨耗	
228	55.70	■A6n	SH114	133	下	断刃灰	84.0	35.0	7.0	27.18	滑面灰		自然磨耗	
229	55.68	■A6n	SH114	84	下	断刃灰	121.0	83.0	10.0	127.10	滑面灰		自然磨耗	
230	55.78	■A6n	SH114	83	下	断刃灰	116.0	53.0	7.0	51.64	滑面灰		自然磨耗	
231	55.78	■A6n	SH114	189	下	鐵石	108.0	100.0	49.0	155.65	滑面灰		鐵頭	
232	55.77	■A6n	SH114	86	下	鐵石	55.0	40.0	15.5	29.80	滑面灰		鐵頭	
233	55.66	■A6n	SH114	80	下	鐵石	40.0	37.0	15.0	22.30	滑面灰		鐵頭	
234	55.78	■A6n	SH114	184	下	鐵石	34.0	15.5	12.0	7.35	玉髓		鐵頭	
235	55.81	■A6n	SH114			鐵石	29.5	20.4	9.5	7.37	玉髓		自然磨耗	
236	55.96	■A6n	SH114			鐵石	28.0	18.0	6.0	11.40	玉髓		自然磨耗	
237	55.94	■A6n	SH114			鐵石	(25.0)	11.0	6.0	11.00	滑面灰		自然磨耗	
238	55.16	■A6n	SH114	P7	下	骨玉・骨板切削片	3	120.0	70.0	5.0	1.07	滑面灰		自然磨耗
239	55.17	■A6n	SH114	P11	下	骨玉・骨板切削片	34.4	14.8	8.0	2.26	玉髓		一端自然磨耗	
240	55.06	■A6n	SH114	149	下	不规则石器	37.5	26.5	9.0	7.86	玉髓		鐵頭	
241	55.28	■A6n	SH114			不规则石器	109.0	47.0	41.0	300.10	玉髓		鐵頭	
242	55.07	■A6n	SH114			不规则石器	73.0	32.0	11.0	53.01	玉髓		鐵頭	
243	55.62	■A6n	SH114	296	下	骨玉・骨板切削片	1	49.5	36.0	33.0	48.59	綠色灰		自然磨耗
244	55.71	■A6n	SH114	391	下	骨玉・骨板切削片	3	31.0	20.0	14.0	8.72	綠色灰		自然磨耗
245	55.65	■A6n	SH114			骨玉・骨板切削片	34.4	14.8	8.0	2.26	玉髓		自然磨耗	
246	54.14	■A6n	SH114	285	下	骨玉・骨板切削片	(18.0)	12.0	6.8	3.99	玉髓		一端欠損	
247	54.13	■A6n	SH114			骨玉・骨板切削片	37.0	18.0	7.0	2.70	玉髓		自然磨耗	
248	54.15	■A6n	SH114	283	下	石器	(22.0)	17.0	6.0	11.50	綠色灰		先端欠損	

通数	骨角	アリット	遺物No.	施主No.	断面	分類	工具	長さ	幅・径	厚さ	重量(g)	石材	文様	備考
249	86259	■AR6b	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	1	35.0	27.0	20.0	22.43	緑色灰岩	自然端面	蛇形溝
250	63235	■AR6b	SH115		P8	骨玉-環形石鏡	3	36.0	21.0	18.0	13.6	(7.92)	自然端面	○
251	63111	■AR67c	SH115		P8	骨玉-環形石鏡	3	36.0	21.0	18.0	12.92	緑色灰岩	○	下部丸み
252	63077	■AR67c	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	3	38.0	20.5	16.0	16.0	6.11	緑色灰岩	○
253	63161	■AR67c	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	3	29.0	11.0	8.0	2.21	緑色灰岩	○	複数点
254	63110	■AR67c	SH115		P20	骨玉-環形石鏡	3	21.0	9.0	8.5	2.22	緑色灰岩	○	
255	54644	■AR67c	SH115		P20	骨玉-環形石鏡	4	34.5	27.0	7.0	6.97	緑色灰岩	○	孔径：1.4mm×1.1mm
256	84456	■AR67c	SH115		P20	骨玉-環形石鏡	6	12.4	3.0	3.1	0.18	緑色灰岩	○	一端丸み
257	84635	■AR67c	SH115		P20	骨玉-環形石鏡	6	(7.9)	(2.6)	(1.3)	(0.03)	緑色灰岩	○	一端丸み
258	84377	■AR67c	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	7	(7.6)	2.4	2.4	(0.05)	緑色灰岩	○	自然端面
259	61685	■AR67c	SH115		P20	骨玉-環形石鏡	2	(17.4)	13.5	6.3	(1.94)	黒色石	○	自然端面
260	61682	■AR67c	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	3	25.0	13.0	9.5	8.40	黒色石	○	複数点
261	84099	■AR6b	SH115		P20	骨玉-環形石鏡	3	18.0	6.5	4.0	4.51	黒色石	○	自然端面
262	61689	■AR67c	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	4	23.0	7.0	5.5	5.67	黒色石	○	一端丸み
263	61900	■AR67c	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	5	(8.0)	3.5	3.0	(0.12)	黒色石	○	自然端面
264	84388	■AR67c	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	2	47.0	29.0	30.0	9.86	黒色石	○	自然端面
265	63235	■AR67c	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	3	34.0	11.5	11.3	4.74	黒色石	○	自然端面
266	63277	■AR67c	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	3	34.5	9.0	5.0	1.02	黒色石	○	自然端面
267	63335	■AR67c	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	3	79.0	57.0	9.0	45.91	黒色石	○	自然端面
268	84644	■AR6b	SH115		Y	骨玉-環形石鏡	28.0	35.0	6.0	7.45	黒色石	○	孔径：下5mm全、上5mm全	
269	63228	■AR67c	SH115		P20	骨玉-環形石鏡	(55.0)	46.0	11.5	(40.45)	黒色石	○	複数点	
270	63295	■AR67c	SH115		P20	骨玉-環形石鏡	45.0	36.0	14.0	24.14	黒色石	○	自然端面	
271	84553	■AR6b	SH115		P20	骨玉-環形石鏡	(25.0)	21.0	6.0	9.350	ドライカット	○	(手付削込み部切口と呼ぶ)	
272	84111	■AR66de	SH115		Y	石鏡-圓形品	64.0	52.0	13.0	93.90	ドライカット	○	自然端面	
273	84311	■AR66de	SH115		Y	石鏡-圓形品	(72.0)	74.0	24.0	(250.80)	ドライカット	○	自然端面	
274	70965	■AR66de	SH115		Y	石鏡-圓形品	(68.0)	56.0	36.0	(94.13)	ドライカット	○	自然端面	
275	63235	■AR67c	SH115		Y	石鏡-圓形品	(135.0)	64.0	64.0	(29.0)	ドライカット	○	大刀削込み部削込み部切口と呼ぶ	
276	61932	■AR67c	SH115		2	四目-環石	47.0	42.0	25.5	52.72	黒色石	○	複数点	
277	70272	■AR67c	SH115		P8	四目-環石	63.3	15.2	8.0	4.71	黒色石	○	複数点	
278	63020	■AR67c	SH115		Y	四目-環石	182.0	80.0	64.0	(117.60)	黒色石	○	複数点	
279	84335	■AR67c	SH115		Y	四目-環石	34.0	18.0	6.0	2.30	黒色石	○	完形	
280	70987	■AR66de	SH115		Y	四目-環石	(86.0)	27.5	6.5	(15.34)	黒色石	○	複数点	
281	84122	■AR67c	SH115		Y	四目-環石	(89.0)	62.0	49.0	(448.01)	黒色石	○	複数点	
282	84088	■AR66de	SH115	~115	Y	四目-環石	(75.0)	(61.0)	(17.0)	(86.81)	黒色石	○	複数点	
283	70323	■AR67c	SH115		269	四目-環石	5 (11.8)	3.9	3.8	0.320	緑色灰岩	○	内側丸み削込み部	
284	63236	■AR66c	SH115		374	四目-環石	5 (17.0)	5.0	4.5	0.50	緑色灰岩	○	内側丸み削込み部	
285	81448	■AR6c	SK111		中	骨玉-環形石鏡	5 (26.4)	5.2	4.6	1.120	緑色灰岩	○	内側丸み削込み部	
286	81397	■AR6c	SK111		中	骨玉-環形石鏡	7 (6.0)	4.0	4.0	(0.11)	緑色灰岩	○	内側丸み削込み部	
287	81398	■AR6c	SK111		中	骨玉-環形石鏡	7 (8.8)	3.2	2.8	(0.17)	黒色石	○	内側丸み削込み部	
288	81437	■AR6c	SK111		中	骨玉-環形石鏡	13 (9)	3.3	2.4	0.18	自然端面	○	複数点	
289	81566	■AR6b	SK111		中	骨玉-環形石鏡	2 (19.0)	32.0	19.8	24.93	緑色灰岩	○	複数点	
290	83383	■AR6c	SK111		4	骨玉-環形石鏡	3 (30.0)	29.0	20.0	69.15	緑色灰岩	○	内側丸み削込み部	
291	83491	■AR6c	SK111		5	骨玉-環形石鏡	3 (35.0)	29.0	20.0	69.15	緑色灰岩	○	内側丸み削込み部	
292	83500	■AR6c	SK111		7	骨玉-環形石鏡	3 (66.0)	29.2	36.0	11.60	黒色石	○	内側丸み削込み部	
293	83522	■AR6c	SK111		10	骨玉-環形石鏡	3 (50.5)	20.5	24.0	29.66	緑色灰岩	○	内側丸み削込み部	
294	83488	■AR6c	SK111		11	骨玉-環形石鏡	3 (60.0)	31.0	16.0	34.43	黒色石	○	内側丸み削込み部	
295	83536	■AR6c	SK111		12	骨玉-環形石鏡	2 (60.0)	14.0	37.0	51.80	黒色石	○	内側丸み削込み部	
296	83537	■AR6c	SK111		13	骨玉-環形石鏡	2 (33.0)	7.0	5.0	39.62	アーチ	○	複数点	
297	83509	■AR6c	SK111		14	骨玉-環形石鏡	66.0	36.0	24.0	1.47	複数点	○	複数点	
298	83556	■AR6c	SK111		15	骨玉-環形石鏡	66.0	36.0	24.0	1.47	複数点	○	複数点	

## 石器類序表(7)

石器類序表											
通称	類別	タリット	通鑑No.	施上No.	断続	分類	工作	長さ	幅・径	厚さ	
No.	名稱	タリット									
299	8207	■A803	SK117	13	中	骨玉・骨頭石鏡	2	32.0	21.5	24.18	
300	8214	■A803	SK117	30	中	骨玉・骨頭石鏡	3	31.0	14.5	13.0	
301	8202	■A803	SK117	8	中	骨玉・骨頭石鏡	3	31.0	14.5	14.0	
302	8205	■A803	SK117	11	中	骨玉・骨頭石鏡	3	33.0	27.0	21.0	
303	8223	■A803	SK117	29	中	骨玉・骨頭石鏡	2	31.3	21.0	12.0	
304	8216	■A803	SK117	22	中	石片・骨頭石鏡	3	43.0	20.0	14.0	
305	8217	■A803	SK117	23	中	石片・骨頭石鏡	3	44.0	24.0	12.0	
306	8213	■A803	SK117	19	中	石片・骨頭石鏡	30.5	26.0	8.0	6.63	
307	8481	■A803	SK151	7	中	骨頭石鏡	(35.0)	5.5	(24.5)	(24.5)	
308	8467	■A803	SK128	7	中	骨玉・骨頭	5	(9.5)	2.8	2.7	
309	8455	■A803	SK129	7	中	骨玉・骨頭	6	12.1	3.4	3.0	
310	8432	■A803	SK157	7	中	骨玉・骨頭	6	(8.4)	3.1	3.1	
311	8468	■A803	SK157	7	中	骨玉・骨頭	6	27.5	4.4	4.5	
312	8461	■A803b	SK132	7	中	骨玉	12.8	2.4	2.5	0.11	
313	7903	■A803k	SK144	17-18	中	黑曜石	8.0	(128.0)	65.0	(689.38)	
314	8447	■A803c	SK106	7	中	石片・石鏡	4	(21.1)	3.2	0.12	
315	6285	■A803c	SK127	33	中	黑曜石	90.0	58.0	25.0	198.79	
316	8602	■A803v	SK104	中	石片	18.0	(6.0)	6.0	(1.40)	5.5	
317	8410	■A803	SK132	7	中	石片	27.0	15.0	5.0	1.40	
318	8409	■A803k	SK144	7	中	石片	(17.0)	16.0	3.0	(0.80)	1.11
319	7971	■A803n	SK152	7	中	骨玉	94.0	103.0	67.0	789.10	9.01
320	2466	■A803	SK14	7	中	骨玉・骨頭	36.0	12.6	8.4	2.90	8.17
321	2464	■A803	SK16	7	中	石片	(20.0)	17.0	6.0	(1.40)	5.5
322	350841	■A803c	SK16	477	中	骨玉・骨頭	6	(7.6)	3.2	3.1	
323	2071	■A803	SK16	7	中	石片	(18.0)	115.0	59.0	(169.00)	1.11
324	2393	■A803	SK17	7	中	骨玉・骨頭	6	(3.6)	3.7	3.6	
325	2390	■A803	SK17	7	中	骨玉・骨頭	6	14.8	4.9	5.0	
326	2384	■A803	SK17	7	中	骨玉・骨頭	6	7.5	11.0	6.7	
327	2343	■A803	SK17	7	中	石片	(22.0)	22.0	4.0	(1.60)	5.5
328	116	■A803	SK17	7	中	石片・骨頭	30.0	24.0	5.0	2.60	5.5
329	131	■A803c	SK17	7	中	石片	(36.4)	(32.8)	10.4	(12.03)	5.5
330	546	■A803p	SK16	50	上	石片	(28.0)	16.0	5.0	(1.60)	5.5
331	520	■A803p	SK19	68	上	石片	27.0	12.0	3.0	0.80	1.11
332	289	■A803q	SK13	426	上	石片	(23.0)	16.0	5.0	(1.20)	5.5
334	909	■A803r	SK13	941	上	石片	(26.0)	14.0	4.0	(1.60)	5.5
335	2068	■A803	SK13	109	上	石片	66.0	26.0	1.4	27.22	5.5
336	415	■A803p	SK13	640	上	骨頭	115.0	132.0	4.3	833.00	8.01
337	5429	■A803y	SK112	434	中	骨玉・骨頭石鏡	3	22.0	12.0	10.0	
338	5475	■A803q	SK112	715	中	石片	(55.0)	(46.0)	22.0	(44.97)	1.11
339	8408	■A803m	SK112	440	中	骨頭	44.0	49.0	26.0	(77.80)	1.11
340	422	■A803g	SK113	280	中	骨頭	32.0	30.0	11.5	12.24	1.11
341	7948	■A803g	SK112	454	中	石片	150.0	(162.0)	10.0	(269.00)	1.11
342	5635	■A803e	SK113	7	中	石片	(49.5)	(70.0)	14.4	(53.14)	1.11
343	8427	■A803j	SK113	7	中	骨頭	55.0	99.0	54.0	99.0	1.11
344	1785	■A803f	SK112	158	中	骨玉・骨頭	5.5	5.5	1.16	1.16	1.16
345	7203	■A803p	SK112	82	中	角玉・骨頭	12.7	5.4	5.1	0.65	1.11
346	7387	■A803n	SK112	386	中	角玉・骨頭	(7.8)	(7.8)	2.9	(0.16)	1.11
347	7592	■A803w	SK112	5	中	骨玉・骨頭	(11.1)	2.6	2.6	1.16	1.11

遺物	質地	大きさ	通鑑No.	層位No.	地上No.	層位	分類	工具	長さ	幅・径	厚さ	重量(g)	石材	文面	備考	
No.1	石	大リットル				N下	骨玉・核		5	(16.1)	5.3	5.1	(0.73)	鉄石系	○	
348 7586 三重55w	石	骨玉・核				N下	骨玉・核		6	18.0	4.0	4.0	0.57	鉄石系	一端欠損	
349 8449 三重55q	石	骨玉・核				N下	骨玉・核		5	(14.6)	3.8	3.5	(0.33)	ノック	△	
350 2468 三重65w	石	骨玉・核				N上	骨玉・核		5	(69.0)	65.0	20.0	(97.00)	緑色灰岩	一端欠損	
351 7837 三重65f	石	端打			10461	N上	端打			(144.0)	30.0	(596.50)	黒色灰岩	端打	端打	
352 8771 三重65f	石	端打				N上	端打		103.0	66.0	10.0	86.99	緑色灰岩	端打	端打	
353 8425 三重65f	石	端打				N上	端打		123.0	69.5	46.0	634.60	緑色灰岩	端打	端打	
354 11503 三重～P10-73	石	端打			1	端打			61.0	(35.5)	17.3	(39.71)	黒色灰岩	平分縫合	直角：13mm	
355 8422 三重65f	石	端打			N2	端打			69.7	67.3	23.0	(110.59)	黒色灰岩	一端削れ	一端に端打を残す	
356 7356 三重65f	石	端打			N	端打			(23.3)	14.0	5.0	(1.00)	緑色灰岩	○	○	
357 1710 三重65b	石	端打			II	端打			(31.4)	16.7	5.0	(1.60)	緑色灰岩	○	○	
358 1871 三重	石	端打				端打			(18.0)	18.0	5.0	(1.10)	真白	○	○	
359 1953 三重65f-1	石	端打			N	端打			32.0	18.0	5.0	(2.50)	緑色灰岩	完形	左端削り欠	
360 8421 三重65f	石	端打			N	端打			35.0	(38.0)	7.0	(11.00)	緑色灰岩	○	石端が少しある	
361 8420 三重65f	石	端打			N4	端打			22.0	9.0	6.0	(3.00)	緑色灰岩	○	左端削り欠	
362 26006 三重	石	端打			N2	端打			46.0	(19.0)	6.0	(1.00)	緑色灰岩	○	骨玉と刃利川 美松田	
363 8419 三重65c	石	端打			N1	端打			25.2	12.1	7.2	1.65	緑色灰岩	○	○	
364 6838 三重65f	石	端打			H	端打			39.0	14.0	9.0	2.70	緑色灰岩	○	○	
365 1709 三重65a	石	端打			N2	端打			28.0	14.0	12.0	4.76	鉄石系	○	○	
366 6532 三重65f	石	端打				Y	骨玉・核		4	14.8	5.6	3.7	0.33	緑色灰岩	○	
367 8468 三重65m-n-t-s	石	骨玉・核				Y	骨玉・核		5	23.2	3.3	3.3	0.45	緑色灰岩	△	
368 8460 三重65m-n-t-s	石	骨玉・核				Y	骨玉・核		5	18.5	4.7	4.6	0.70	緑色灰岩	△	
369 8467 三重65m-n-t-s	石	骨玉・核				Y	骨玉・核		5	(10.1)	2.6	2.6	(0.14)	鉄石系	一端欠損	
370 8459 三重65m-n-t-s	石	骨玉・核				Y上	玉頭部		27.5	22.2	13.7	10.71	緑色灰岩	△	丸頭に横板	
371 6844 三重65f	石	端打				Y上	端打		(20.5)	20.0	6.0	(4.50)	緑色灰岩	△	丸頭のみ	
372 8423 三重65f	石	端打				N2	端打・刃石持		47.5	29.0	7.3	21.88	鉄石系	△	△	
373 8424 三重65f	石	端打					端打・刃石持		21.0	14.0	3.0	0.50	緑色灰岩	△	△	
374 26007	石	端打					端打		5	(19.0)	4.0	4.3	(0.68)	鉄石系	○	一端欠損
375 10307 三重	石	端打					端打		6	(4.1)	2.5	2.5	(0.03)	鉄石系	○	丸形 1mm
376 10306 三重	石	端打					端打		6	10.4	4.8	4.9	0.48	鉄石系	△	△端打 0.9mm
377 10305 三重	石	端打					端打								-△端打 0.9mm	

## 木製品観察表(1)

通号	グリッド	部位	連続No.	海上No.	固	堅	硬さ	繊	材質	断面形	施工法	本体(1)
1	■ A1B58	上	SD118	67	組合せ用器具	59.5	11.2	1.9	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
2	■ A1B58	上	SD118	112	繩	23.7	2.7	1.9	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
3	■ A1B58	上	SD118	101	組合せ半綱	42.6	17.0	2.2	アカガシ 売屋	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
4	■ A1B58	上	SD118	5	繩	39.0	13.6	2.0	シキ 1	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
5	■ A1B58	上	SD118	25	繩	55.6	4.4	2.8	カエデ 売屋	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
6	■ A1B58	上	SD118	30	繩	4.4	6.4	2.0	シキ 1	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
7	■ A1B58	上	SD118	119	組合せ用器具	16.0	1.6	3.9	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
8	■ A1B58	上	SD118	78	繩	43.0	1.6	2.5	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
9	■ A1B58	上	SD118	80	1~6 組合せ用器具	130.0		7.0	ヤブツバキ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
10	■ A1B58	上	SD118	80	1~6 組合せ用器具	17.4	6.4	4.7	サクラ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
11	■ A1B58	上	SD118	108	番手の一部	27.2	4.2	4.2	サクラ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
12	■ A1B58	上	SD118	12	番手	25.5	3.1	3.1	サクラ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
13	■ A1B58	上	SD118	1	番手	6.1	4.1	1.5	アカガシ 売屋	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
14	■ A1B58	上	SD118	102	貴重品用綱	14.1	4.1	3.2	アカガシ 売屋	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
15	■ A1B58	上	SD118	85	因縁用綱	12.4	2.7	1.4	スギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
16	■ A1B58	上	SD118	85	因縁用綱	9.9	4.9	2.9	ヤマガラ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
17	■ A1B58	上	SD118	113	くび	10.6	3.0	2.6	三	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
18	■ A1B58	上	SD118	117	神木	13.3	4.8	4.8	サクラ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
19	■ A1B58	上	SD118	117	神木	17.6	4.4	4.4	サクラ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
20	■ A1B58	上	SD118	114	神木の商品	21.4	4.8	4.8	サクラ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
21	■ A1B58	上	SD118	116	神木の商品	34.4	1.8	0.8	スギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
22	■ A1B58	上	SD118	105	R.k3	45.8	2.8	2.8	イヌガヤ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
23	■ A1B58	上	SD118	106	神木	60.0	2.1	1.6	スギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
24	■ A1B58	上	SD118	107	神木	23.0	0.6	0.6	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
25	■ A1B58	上	SD118	57	神木の商品	9.7	5.6	1.1	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
26	■ A1B58	上	SD118	114	神木の商品	7.8	4.9	0.9	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
27	■ A1B58	上	SD118	116	神木の商品	11.6	2.0	1.6	サクラ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
28	■ A1B58	上	SD118	154	竹の枕板	34.3	2.1	0.9	スギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
29	■ A1B58	上	SD118	84	繩用道具(ヘラ・ガフ)	41.9	15.1	3.8	ムクロジ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
30	■ A1B58	上	SD118	109	糸色巻	57.6	4.3	2.0	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
31	■ A1B58	上	SD118	61	糸色巻	8.8	3.4	2.4	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
32	■ A1B58	上	SD118	109	糸色巻	15.6	2.1	0.6	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
33	■ A1B58	上	SD118	23.5	糸色巻	23.5	3.2	1.0	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
34	■ A1B58	上	SD118	104	繩用道具	6.7	0.9	4.0	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
35	■ A1B58	上	SD118	107	繩用道具	14.7	13.0	2.2	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
36	■ A1B58	上	SD118	53	繩用道具	26.1	2.7	0.6	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
37	■ A1B58	上	SD118	26	繩用道具	37.2	7.6	2.1	ヤギ	はねたれあり。丁寧にはねたれんじきの用ひ。馬の頭などが考へられる。●馬の頭を後頭-古橋頭頭につけた。	板目	
38	■ A1B58	上	SD118	50.0	6.7	1.5	ヤギ					
39	■ A1B58	上	SD118	81	繩用道具							

## 木製品検査表（2）

通 番 号	グリッド No.	部位 No.	連絡 No.	海上No.	規 格	規 格	規 格	材 質	規 格	施工状 況	本数(1)	備 考
40		上 SD018	36 建築木材	51.6	3.3	1.6	8ギ			柱目	なしは柱面で流れ、柱の本端面に柱頭の上部を留め、柱頭の端板を留め柱の上部を 下部で留める。	
41		上 SD018	58 板丸井	30.9	1.6	2.6	7ギ			柱目	柱頭を留めている。	
42	■ A1B58	上 SD018		14.4	1.2	0.6	8ギ			柱目	柱頭を留めている。	
43	■ A1B58	上 SD018		10.2	2.0	1.9	ケヤキ			柱目	柱頭を留めている。	
44	■ A1B58	上 SD018		21.5	1.7	0.7	8ギ			柱目	柱頭を留めている。	
45	■ A1B58	上 SD018	搭合木製品	6.1	0.7	0.6	六角形	全体				
46	■ A1B58	上 SD018		10.2	1.0	1.1	8ギ			柱目	上部に施釉あり。柱頭半周。	
47	■ A1B58	上 SD018	115② 不明	8.3	3.2	2.1	カガシ 原木			柱目	不規	
48	■ A1B58	上 SD018		13.7	4.8	1.1	スギ			柱目	柱頭から原木までアラフ。西側の工事用	
49	■ A1B58	上 SD018		8.8	9.0	0.6	8ギ			柱目	柱頭から原木までアラフ。左側に丸みが残されている。	
50	■ A1B58	上 SD018		8.8	2.7	1.6	広葉樹?			柱目		
51	■ A1B58	上 SD018	64	23.5	4.2	7.6	8ギ	円		丸木		
52	■ A1B58	上 SD018	59	9.3	2.1	1.4	8ギ			柱目		
53	■ A1B58	上 SD018		12.7	2.4	1.7	8ギ			柱目	端が削り落して底面に、下部もなになっている。	
54	■ A1B58	上 SD018	115③ 不明	14.6	4.4	3.8	カガシ 原木			柱目	柱頭が切欠いてある。ほそい部分が残っている。	
55	■ A1B58	上 SD018		8.8	3.0	1.2	8ギ			柱目	柱頭から原木までアラフ。柱頭部を削り落している。	
56	■ A1B58	上 SD018		7.9	2.5	1.2	8ギ			柱目	柱頭から原木までアラフ。柱頭部を削り落している。	
57	■ A1B58	上 SD018	1 不明	10.5	0.9	4.0	8ギ			柱目	丸木と柱と2.1・1.1・1.6mmをなすセリ。高さを削り落している。	
58		上 SD018	29	31.6	3.7	8.7	8ギ			柱目	外観: 荷物の包装紙に貼り加工。(5kg) 柱: 丸木、高さを削り落している。	
59	■ A1B58	上 SD018		18.0	4.1	8.6	8ギ			柱目	柱頭が切欠いてある。柱頭部を削り落した跡。	
60	■ A1B58	上 SD018		10.4	4.5	1.0	8ギ			柱目	柱頭を切欠いた跡。	
61	■ A1B58	上 SD018		8.7	4.2	0.9	8ギ			柱目	柱頭を切欠いた跡。	
62	■ A1B58	上 SD018	110① 間材	11.5	8.3	3.8	サクラ 原木			柱目	柱頭などは削り落して柱頭部を削り落す。	
63	■ A1B58	上 SD018	110② 間材	7.6	6.3	1.6	カガシ 原木			柱目	柱頭部が削り落され、高さなどを削り落す。柱頭部を削り落す。	
64	■ A1B58	上 SD018	111 間材	18.5	17.1	1.7	8ギ			板目	柱頭部が削り落されている。	
65	■ A1B58	上 SD018	110③ 間材	9.6	7.6	6.4	8ギ			心材柱材	上の端部も切欠かれていて。	
66	■ A1B58	上 SD018	内装部	6.1	4.1	2.8	カガシ 原木			心材柱材	柱・丸木の割り、心材を削りして使用。下部は全面からケタリがいる。上部ははからぬ角度で削られる。(61) 番地は?	
67	■ A1B58	上 SD018	不明	9.1	3.4	?				心材柱材		
68	■ A1B58	上 SD018	不明	8.5	3.7	3.0	8ギ			丸木		
69	■ A1B58	上 SD018	不明	15.7	4.8	4.0	8ギ	丸		上端部と全面	斜めに切欠いてある。	
70	■ A1B58	上 SD018	不明	8.9	7.1	6.7	8ギ			柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
72	■ A1B58	上 SD018	118 不明	13.1	2.3	1.0	8ギ			柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
73	■ A1B58	上 SD018	不明	23.0	2.3	1.0	8ギ			柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
74	■ A1B58	上 SD018	42 丸柱製品	22.0	1.0	1.0	8ギ	円		柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
75	■ A1B58	上 SD018	115① 不明	25.1	1.4	0.9	8ギ			柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
76	■ A1B58	上 SD018	46 不明	28.0	1.9	1.1	8ギ			柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
77	■ A1B58	上 SD018	44 不明	18.0	7.0	5.6	8ギ			柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
78	■ A1B58	上 SD018	不明	37.8	6.4	1.1	?	丸木 1 (楕円)		柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
79	■ A1B58	上 SD018	125 不明	42.5	5.9	2.0	ヤブニハ			柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
80	■ A1B58	上 SD018	不明	32.4	6.1	1.8	?	(楕円)		柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
81	■ A1B58	上 SD018	不明	39.6	2.4	8.1	8ギ			柱目	柱の表面を削り落して柱頭部を削り落す。	
82	■ A1B58	上 SD018	不明	45.1	3.9	2.1	8ギ			柱目	柱頭部を削り落して柱頭部を削り落す。	
83	■ A1B58	上 SD018	不明	31.3	5.9	0.9	8ギ			柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
84		上 SD018	柱	31.9	7.0	2.9	?	円		柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
85	■ A1B58	上 SD018	118 板材	54.9	2.7	0.6	8ギ			柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
86	■ A1B58	上 SD018	不明	43.0	2.0	8.6	8ギ			柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
87	■ A1B58	上 SD018	88 不明	45.7	2.7	2.6	8ギ	丸		柱目	柱頭部が削り落して柱頭部を削り落す。	
88	■ A1B58	上 SD018	不明	59.2	4.0	3.7	8ギ	丸		丸木		
89	■ A1B58	上 SD018	145 枝根	40.2	1.9	1.9	8ギ	丸		丸木		

## 木製品検査表 (3)

通	規格	部位	通査No.	施上No.	種	材	質	所用部	施工法	本体(1)	備考
No.	グリッド										
90	上	S0118		不明		66.4	2.1	1.9	入ギ?	円	丸木 一端を削り尖らせる。上部は斜面で仕切る。
91	■ A1B6	上	S0118	157 不明		77.6	3.8	内側部	丸頭部	丸木	
92	■ A1B6	上	S0118	74 不明		61.1	3.0	入ギ	下端部	丸木 一端を削り尖らせる。上部は斜面。	
93	■ A1B6	上	S0118	89 枝		83.1	4.8	入ギ		丸木	
94	上	SK11			枝材	36.9	11.6	2.0	入ギ?	丸木	
95	上	S0117	2010	枝材		30.3	1.5	2.0	入ギ	丸木	
96	■ A1F70	上	S0123	119 枝材		25.6	8.2	6.9	不規?	心材	心材で、枝元のうなぎ形をしたと考えられる。直角がある。
97	■ A1F70	上	S0123	121 L 枝元の部品		14.5	0.5	入ギ	枝元	枝材	心材で、枝元のうなぎ形をしたと考えられる。直角がある。
98	■ A1F70	上	S0123	123 連絡木材等		9.4	9.1	3.2	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる所が丸である。直角は手前でカットされている。
99	■ A1F70	上	S0123	123 連絡木材等		40.0	5.2	0.9	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる所が丸である。直角は手前でカットされている。
100	■ A1F70	上	S0123	121 不規		14.3	3.0	0.5	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる所が丸である。直角は手前でカットされている。
101	■ A1F70	上	S0123	121 不規		14.3	0.2	2.8	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる所が丸である。直角は手前でカットされている。
102	■ A1F70	上	S0123	不明		8.3	2.1	1.8	木口	枝材	直角がある。枝元と繋がる。上・下部は斜面で仕切る。
103	■ A1F70	上	S0123	不明		21.1	1.8	0.5	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
104	■ A1F70	上	S0123	2.1 不規		21.9	2.1	0.7	木口	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
105	■ A1F70	上	S0123	12 不規		42.3	2.1	1.2	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
106	■ A1F70	上	S0123	1 不規		46.7	0.6	3.4	木口	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
107	■ A526	下	S0110	不明		17.3	1.1	0.6	入ギ	丸木	直角がある。枝元と繋がる。
108	■ A526m	下	S0112	466 施工部品		27.6	1.8	2.1	アカシヤ直角	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
109	■ B626	下	S0112	474 不規		10.4	6.3	2.1	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
110	■ B626	下	S0112	4 不規		33.6	19.9	18.7	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
111	■ B626	下	S0115	P5	4 不規	33.6	8.0	6.0	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
112	■ A51w	下	S0115	P5	87 連絡木材	33.6	8.0	6.0	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
113	■ A51w	下	S0115	71 千枚		39.6	1.9	1.1	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
114	■ A51w	下	S0115	96 不規		17.9	11.8	5.8	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
115	■ A51w	下	S0115	103 不規		28.7	14.2	4.2	入ギ	丸木	直角がある。枝元と繋がる。
116	■ A51w	下	S0115	103 不規		23.6	3.7	0.5	直角	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
117	■ A51w	下	S0115	103 不規		18.1	2.9	1.9	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
118	■ A51w	下	S0115	103 不規		11.1	0.6	0.1	入ギ	枝材	直角がある。
119	■ A51w	下	S0115	87 連絡木材		29.3	2.0	2.0	木口	枝材	直角がある。
120	■ B606	下	S0115	54 枝?		42.4	3.8	2.0	入ギ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
121	■ A606	下	S0115	4 不規?		30.8	2.7	1.4	ヤマダグ	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
122	■ A606	下	S0115	38 石膏樹脂		14.1	4.8	3.8	ヤマダグ?	枝材	直角がある。枝元と繋がる。
123	■ A606	下	S0115	4 不規?		18.5	4.2	?	?	丸木	直角がある。枝元と繋がる。
124	■ A606	下	S0115	4 不規?		12.1	1.9	0.8	チ	枝材	直角がある。
125	■ A606	下	S0115	4 内側木部		10.0	4.0	2.1	?	枝材	直角がある。
126	■ A606	下	S0115	25 枝材		20.6	2.5	0.6	入ギ	枝材	直角がある。
127	■ B606	下	S0115	25 枝材		17.8	4.2	2.0	ヤマダグ	枝材	直角がある。
128	■ B606	下	S0115	15 枝材		25.6	14.4	3.4	入ギ	枝材	直角がある。
129	■ A606	下	S0115	1 不規		54.1	16.6	2.2	入ギ	丸木	直角がある。
130	■ A606	下	S0115	1 不規		19.6	8.1	6.0	入ギ	枝材	直角がある。
131	■ A606	下	S0115	1 不規		12.2	9.6	2.1	?	枝材	直角がある。
132	■ A606	下	S0115	1 不規		8.9	14.6	4.0	アカシヤ直角	枝材	直角がある。
133	■ A606	下	S0115	1 不規		15.6	1.8	1.5	入ギ	枝材	直角がある。
134	■ A606	下	S0115	1 不規		15.6	1.8	1.9	木口	枝材	直角がある。
135	■ A606	下	S0115	32 不規		35.1	4.3	4.0	入ギ	枝材	直角がある。
136	■ A606	下	S0115	32 不規		38.1	5.6	3.1	入ギ	丸木	直角がある。
137	■ A606	下	S0115	枝		25.9	4.9	2.6	入ギ	枝材	直角がある。
138	■ A606	下	S0115	35 枝材		15.6	2.0	3.0	ヤマダグ	枝材	直角がある。
139	■ A606	下	S0115	不明		26.2	10.3	5.8	?	丸木	直角がある。
140	■ A606	下	S0115	素?		33.0	12.3	6.0	アカシヤ直角	枝材	直角がある。

## 木製品観察表（4）

通路	グリッド	網位	漁網No.	海上No.	網	網	底き	底	底質	底	底	底	底
no.													
141	■ A92b	F-	SK152	49	不明		36.7	2.0	0.9	7.8'			
142	■ B100	F-	SK153	13	網		59.3	38.0					
143	■ A92b	F-	SK152		網		53.9	1.9	1.6	8.8'			
144	■ A92b	F-	SK167	丸-3			64.1						
145	■ A57w	F-	SK167		網		32.4	10.1	1.4	7.8'			
146	■ A57w	F-	SK167		網		14.0	3.5	3.1	7.8'			
147	■ A57w	F-	SK167		網		34.1	7.5					
148	■ A57w	F-	SK167		網		24.2	8.8	4.5	8.8'			
149	■ B100y	F-		2007	漁網材料	柱	39.1	18.8					
150	■ A57w	F-		2015			23.8	12.9	16.5				
151	■ A57w	F-		2006	柱		66.6	12.0	3.5	7.8'			
152	■ A92c-07	F-			網		3.2	3.0	?	円形	空地		
153	■ B105	F-			網		-43.3	2.6	1.6	8.8'			
154	■ A92	F-			杭		74.8						
155	■ B105c	F-			杭		18.5	2.0	1.4	7.8'			
156	■ B105c	F-			杭		158.7	12.3	5.0	7.8'			
157	■ B105c	F-		1	支柱		155.9		10.0	7.8'			
158	■ B105c	F-			杭		113.0	7.0	5.1	7.8'			
159	■ B105c-1	F-			杭		44.4	9.0	6.3	7.8'			
160	■ B105c-1	F-			杭		46.0						
161	■ B105c-1	F-			杭		25.9	4.2	6.9	8.8'			
162	■ B105c-1	F-			杭		46.0						
163	■ B105c-1	F-			杭		28.5	4.8	7.1	8.8'			
164	■ B105c-1	F-			杭		32.9	0.8	4.8	7.8'			
165	■ B105c-1	F-			杭		38.3	9.7	6.7	8.8'			
166	■ B105c-1	F-			杭		42.0	6.8	6.0	8.8'			
167	■ B105c-1	F-			杭		77.5	6.0	6.7	8.8'			
168	■ B105c-1	F-			杭		87.2	10.7	8.0	8.8'			
169	■ B105c-1	F-			杭		51.0	7.6	7.8	7.8'			
170	■ B105c-1	F-			杭		54.5	11.9	7.7	7.8'			
171	■ B105c-1	F-			杭		52.0	5.9	7.1	7.8'			
172	■ B105c-1	F-			杭		54.5	6.9	7.7	8.8'			
173	■ A92a	F-			杭		131.0	3.4	4.5	7.8'			
174	■ B105c	F-			杭		113.4	2.8	5.1	7.8'			
175	■ A92a	F-			杭		113.9	1.1	8.7	7.8'			
176	■ B105c	F-			杭		142.7	9.4	8.5	8.8'			
177	■ A92a	F-			杭		139.7	10.8	7.8	7.8'			
178	■ B105c	F-			杭		133.2	9.0	7.3	7.8'			
179	■ B105c	F-			杭		151.7	28.4	3.4	7.8'			
180	■ B105c	F-			杭		136.2	24.5	4.7	7.8'			
181	■ B105c	F-		31 - 3	杭		65.5	18.4	4.8	7.8'			
182	■ B105c	F-		9	杭		93.7	2.1	3.2	8.8'			
183	■ A92a	F-			杭		98.5	24.0	3.5	8.8'			
184	■ B105d	F-			杭		104.1	27.2	7.6	7.8'			
185	■ B105d	F-			杭		149.2	39.0	3.1	7.8'			
186	■ B105d	F-			杭		157.6	21.5	3.2	7.8'			
187	■ B105d	F-			杭		167.6	21.6	3.3	8.8'			
188	■ B105d	F-		2	杭		135.0	25.4	6.1	8.8'			
189	■ B105d	F-		7 - 8	杭		114.5	15.3	2.9	8.8'			
190	■ B105d	F-		4	杭		137.7	31.8	3.2	8.8'			

## 木製品検査表 (5)

通番	グリッド	部位	連番No.	海上No.	種	目	長さ	幅	厚さ	材質	所用部	施工部	本数(1)	備考
191		下	船底内-2	1	板	机	153.0	33.5	4.5	八角	内側面	板目		
192		Y	船底内-3	1	板	机	138.7	33.5	6.0	八角	内側面	板目		総合
193		Y	船底内-2	12	板	机	140.5	48.6	7.0	八角	内側面	内底面	板目	
194		Y	船底内-2	17	板	机	144.0	17.7	10.1	八角	内側面	内底面	板目	
195		Y	船底内-2	38	板	机	163.2	13.8	5.3	八角	内底面	内底面	板目	
196		Y	船底内-2	23	板	机	140.4	17.6	6.0	八角	内側面	内底面	板目	
197	■ A/B/po	Y	船底内2	9	板	机	127.6	12.4	5.0	八角	内側面	内底面	板目	
198	■ A/B/po	Y	船底内2	21	板	机	134.3	18.5	3.8	八角	内側面	久留部	板目	半分ほど切ってある。
199	■ A/B/po	Y	船底内2	23	板	机	94.3	13.9	5.0	八角	内側面	久留部	板目	
200	■ A/B/po	Y	船底内2	16	板	机	65.1	20.2	6.8	八角	内側面	内底面	板目	
201	■ A/B/po	Y	船底内2	20	板	机	73.3	9.5	3.5	八角	内底面	内底面	板目	
202	■ A/B/po	Y	船底内2	10	板	机	104.0	21.4	4.0	八角	内側面	内底面	板目	
203	■ A/B/po	Y	船底内2	18	板	机	126.0	17.7	3.7	八角	内側面	内底面	板目	
204	■ A/B/po	Y	船底内2	14	板	机	100.4	23.0	6.0	八角	内側面	内底面	板目	
205	■ A/B/po	Y	船底内2	7	板	机	87.5	34.6	3.0	八角	内側面	内底面	板目	
206	■ A/B/po	Y	船底内2	5	板	机	116.5	27.2	6.0	八角	内側面	内・外側面	板目	
207	■ A/B/po	Y	船底内2	13	板	机	110.4	14.2	6.4	八角	内側面	内・外側面	板目	
208	■ A/B/po	Y	船底内2	39	板	机	80.0	6.8	3.2	八角	内側面	内底面	板目	
209	■ A/B/po	Y	船底内2	31	板	机	163.2	13.3	9.5	△△△△△?	内形	久留部	丸木	
210	■ A/B/po	Y	船底内2	4	板	机	41.9	6.7	4.5	?	内側面	内側面	ミカゲ	
211	■ A/B/po	Y	船底内2	42	板	机	42.3	8.4	4.8	?	内側面	内側面	ミカゲ	
212	■ A/B/po	Y	船底内2	38	板	机	63.7	3.3	2.0	八角	内側面	内底面	丸木	
213	■ A/B/po	Y	船底内2	26	板	机	45.8	5.3	6.3	八角	内側面	内・外・中・外側面	丸木	
214	■ A/B/po	Y	船底内2	9	板	机	54.9	6.0	6.8	?	内側面	内・外側面	丸木	
215	■ A/B/po	Y	船底内4	7	板	机	21.2	6.2	7	八角	内側面	内底面	丸木	
216	■ A/B/po	Y	船底内4	9	板	机	104.1	8.1	6.1	八角	内側面	内底面	丸木	
217	■ B/B/po	Y	船底内5	7	板	机	79.6	6.6	6.3	八角	内側面	内底面	丸木	
218	■ B/B/po	Y	船底内5	8	板	机	77.7	5.9	4.2	八角	内側面	内底面	丸木	
219	■ B/B/po	Y	船底内5	13	板	机	82.0	6.4	4.9	八角	内側面	内底面	丸木	
220	■ B/B/po	Y	船底内5	6	板	机	88.2	5.7	4.1	八角	内側面	内底面	丸木	
221	■ B/B/po	Y	船底内5	10	板	机	89.5	7.2	4.1	八角	内側面	内底面	丸木	
222	■ B/B/po	Y	船底内5	12	板	机	94.2	7.0	6.1	八角	内側面	内底面	丸木	
223	■ B/B/po	Y	船底内5	9	板	机	98.6	5.0	3.3	八角	内側面	内底面	丸木	
224	■ B/B/po	Y	船底内5	14	板	机	109.8	6.6	2.3	八角	内側面	内底面	丸木	
225	■ A/B/po	Y	船底内6	-15	板	机	94.7	18.0	2.6	八角	内側面	内底面	丸木	丸木に穴開け?
226	■ A/B/po	Y	船底内6	-15	板	机	63.0	25.9	2.3	八角	内側面	内底面	丸木	
227	■ A/B/po	Y	船底内6	-15	板	机	59.5	11.2	2.6	八角	内側面	内底面	丸木	
228	■ A/B/po	Y	船底内6	-15	板	机	83.3	7.4	5.0	八角	内側面	内底面	丸木	
	■ H/DR													

# 図 版

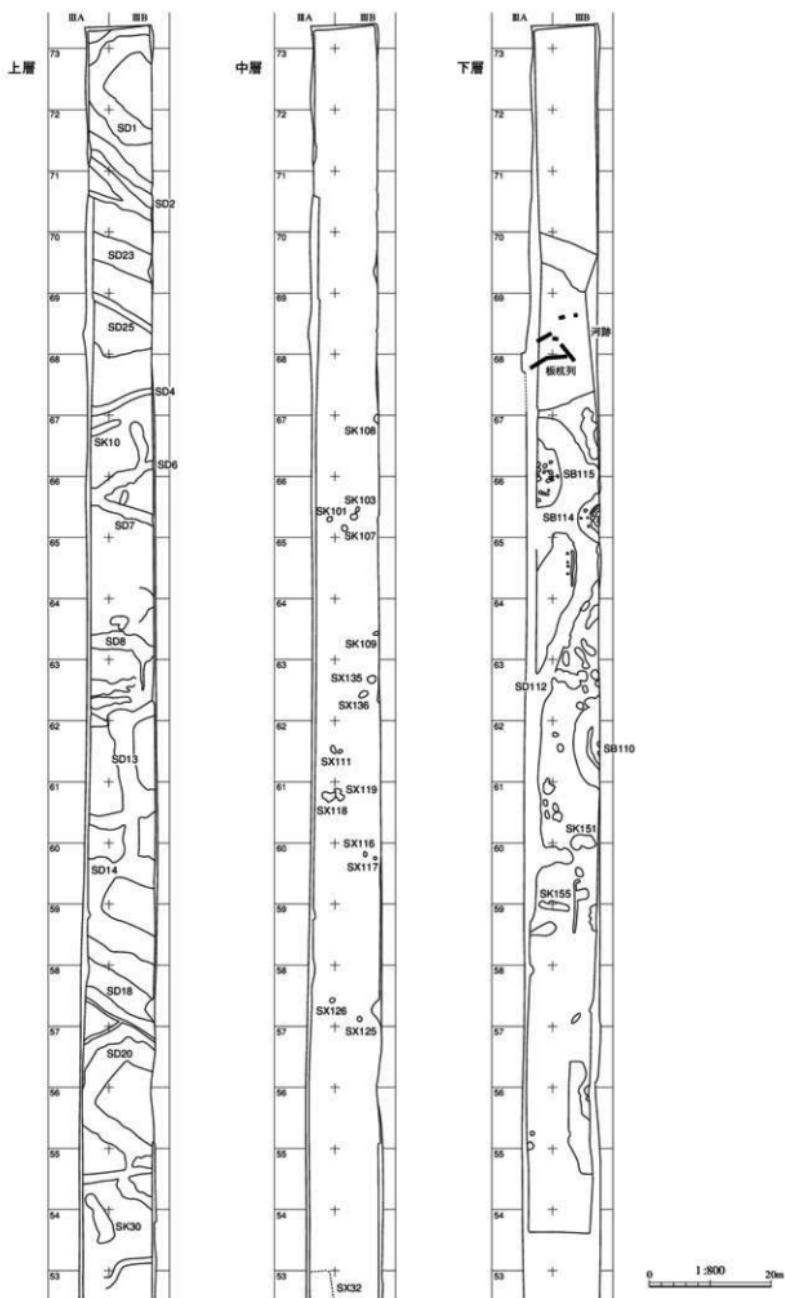
(遺 構)

## 凡 例

造構平面図は、全て上が北である。

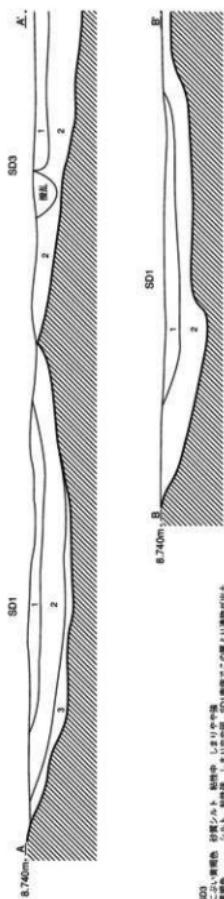
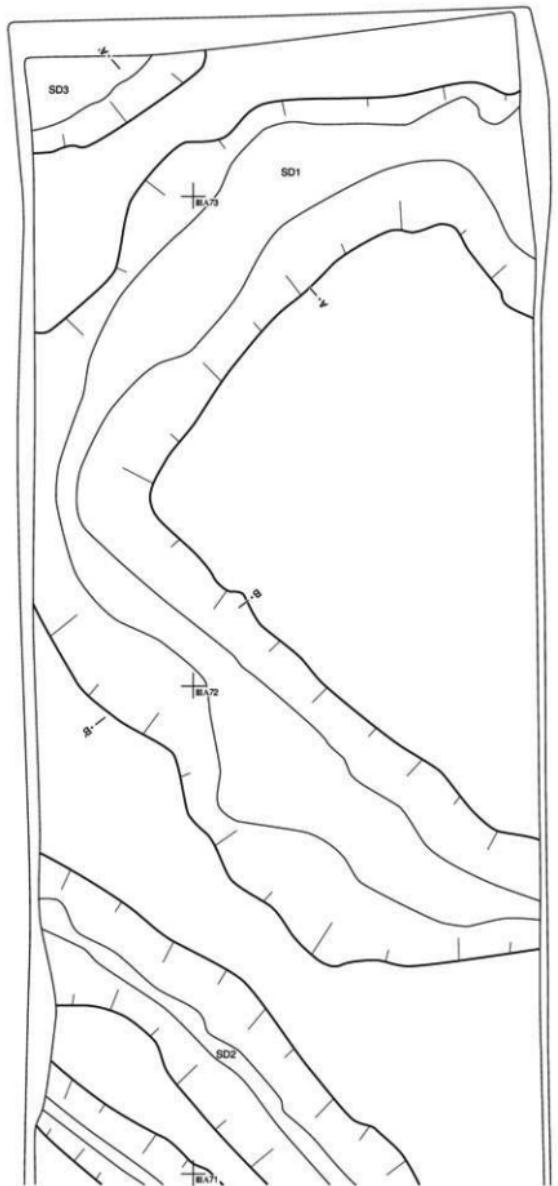
造構全体図 上層・中層・下層

図版1



図版2

遺構実測図 1 上層 IIIAB72～74区



SD1-IIIAB72  
SD1-IIIAB73  
SD1-IIIAB74  
SD2-IIIAB71  
SD3-IIIAB72

1 黒い褐色の  
谷底シルト、耕作中  
2 黄褐色  
3 黄褐色  
4 黄褐色  
5 黄褐色

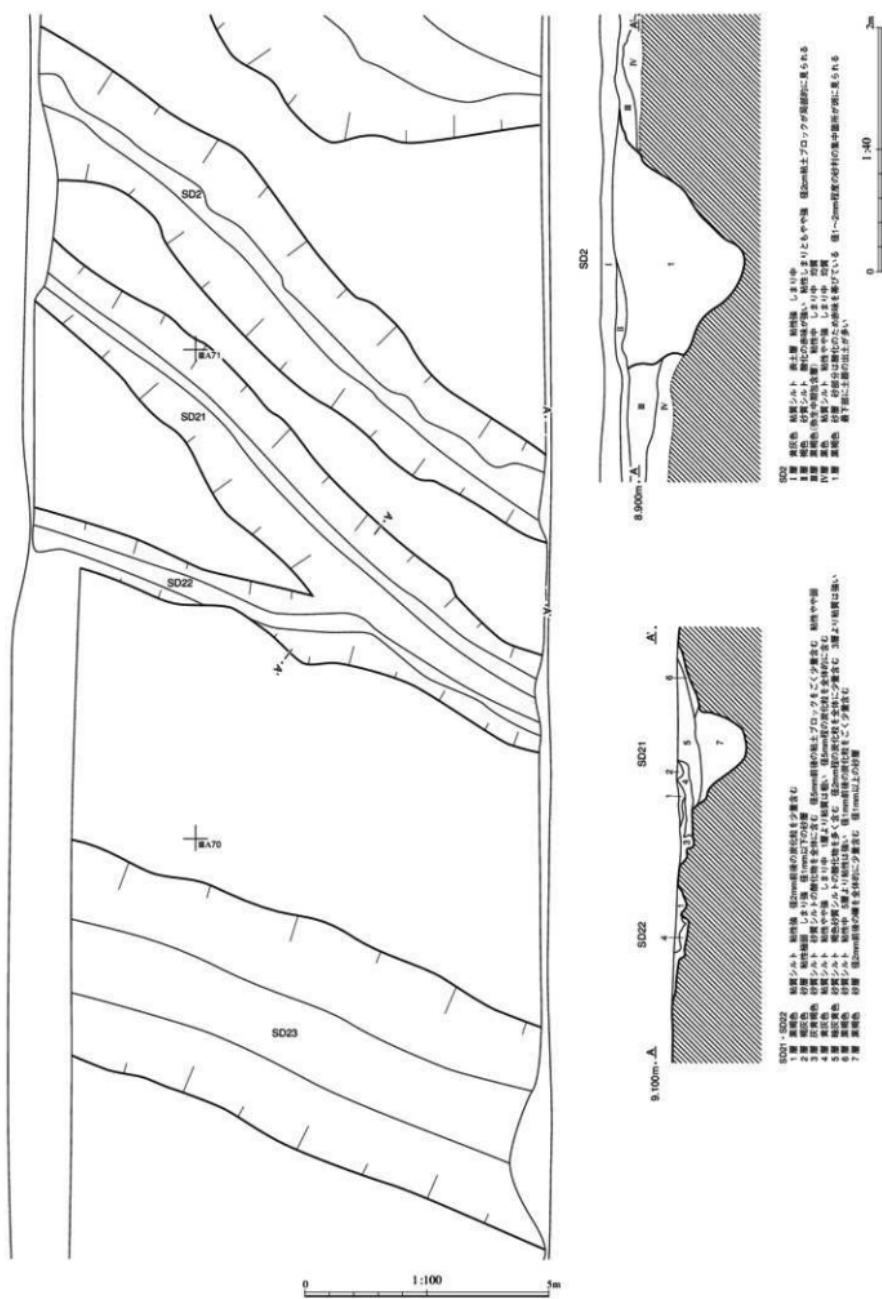
1.0  
0.740m  
A-A'

0 1:40 2m

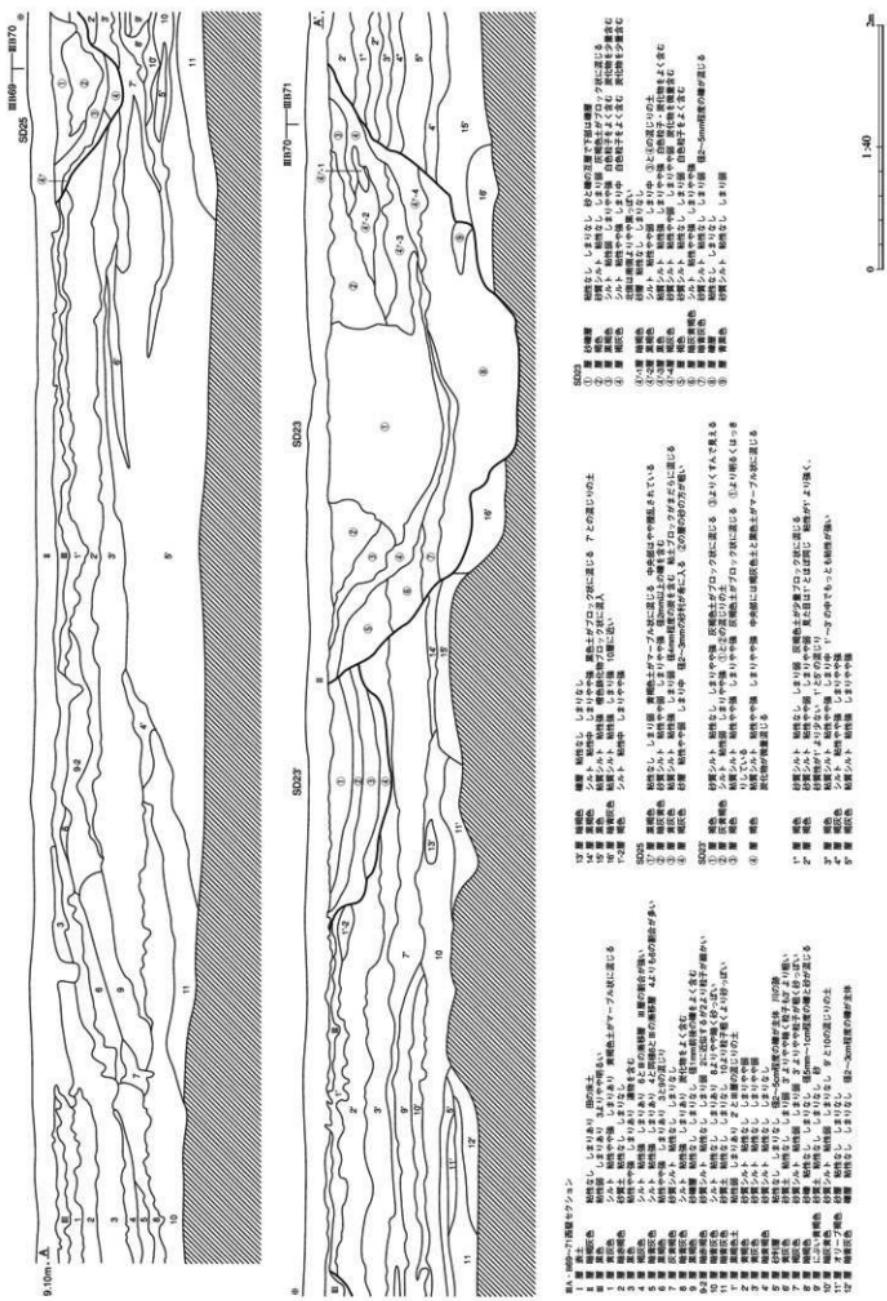
0 1:100 5m

造構実測図2 上層 MAB70~72区

図版3

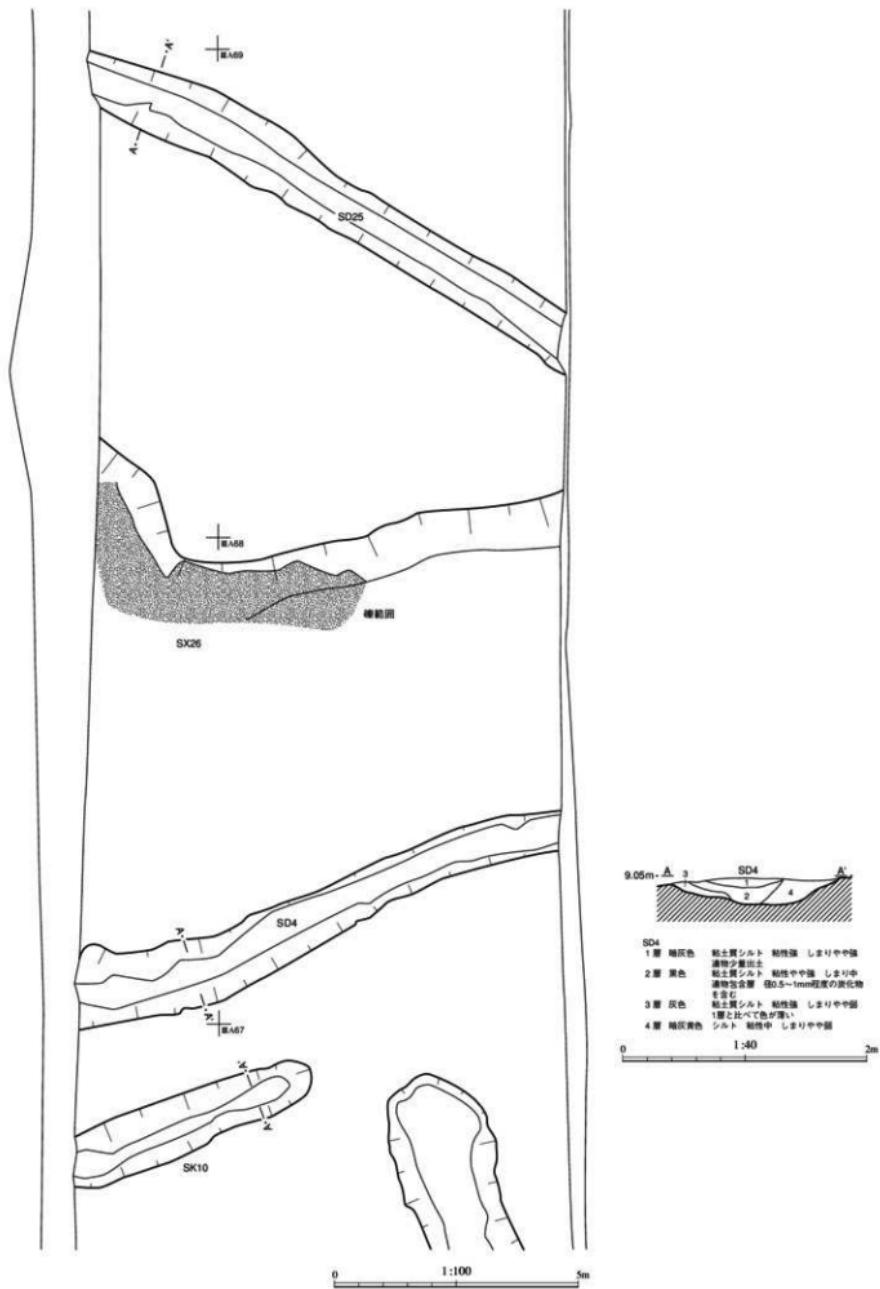


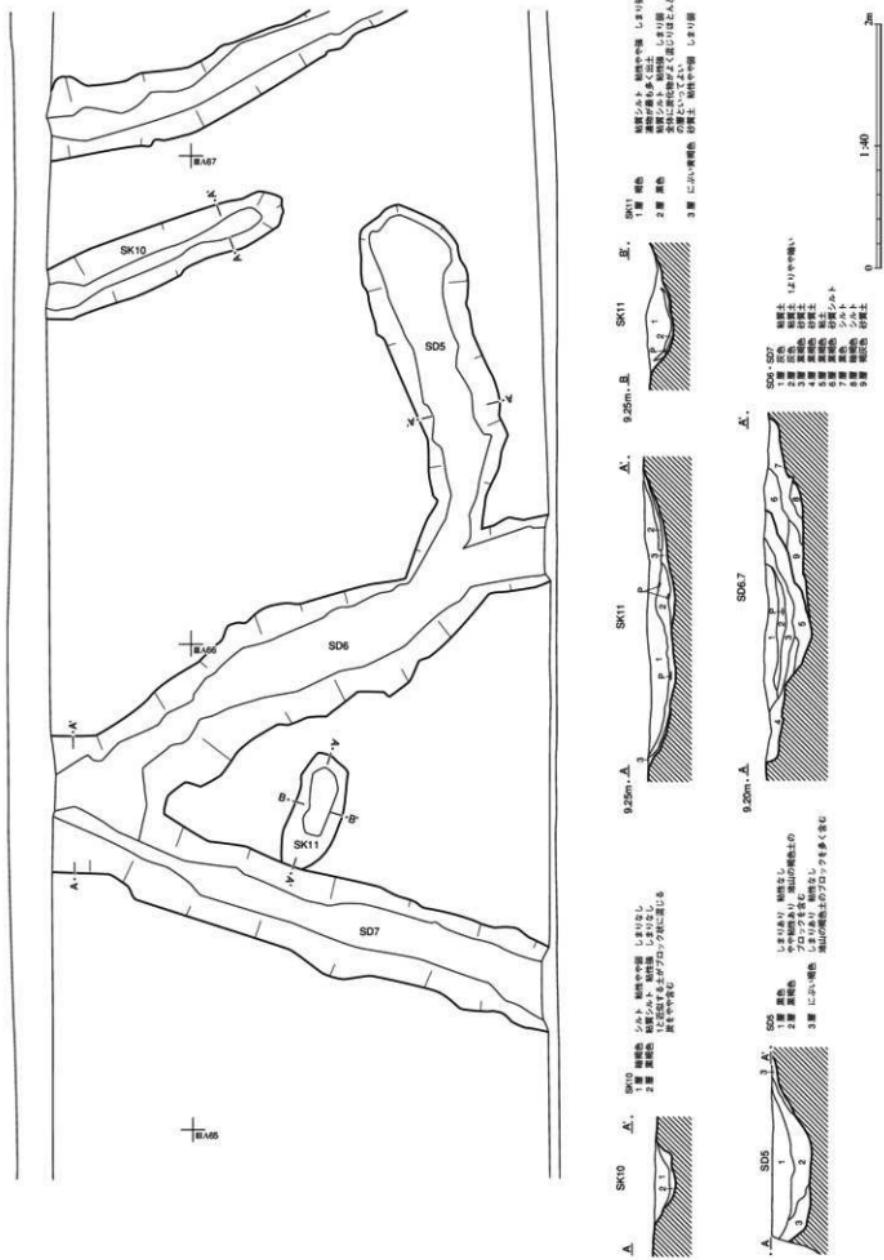
### 遺構実測図3 上層 69~71区東壁断面図

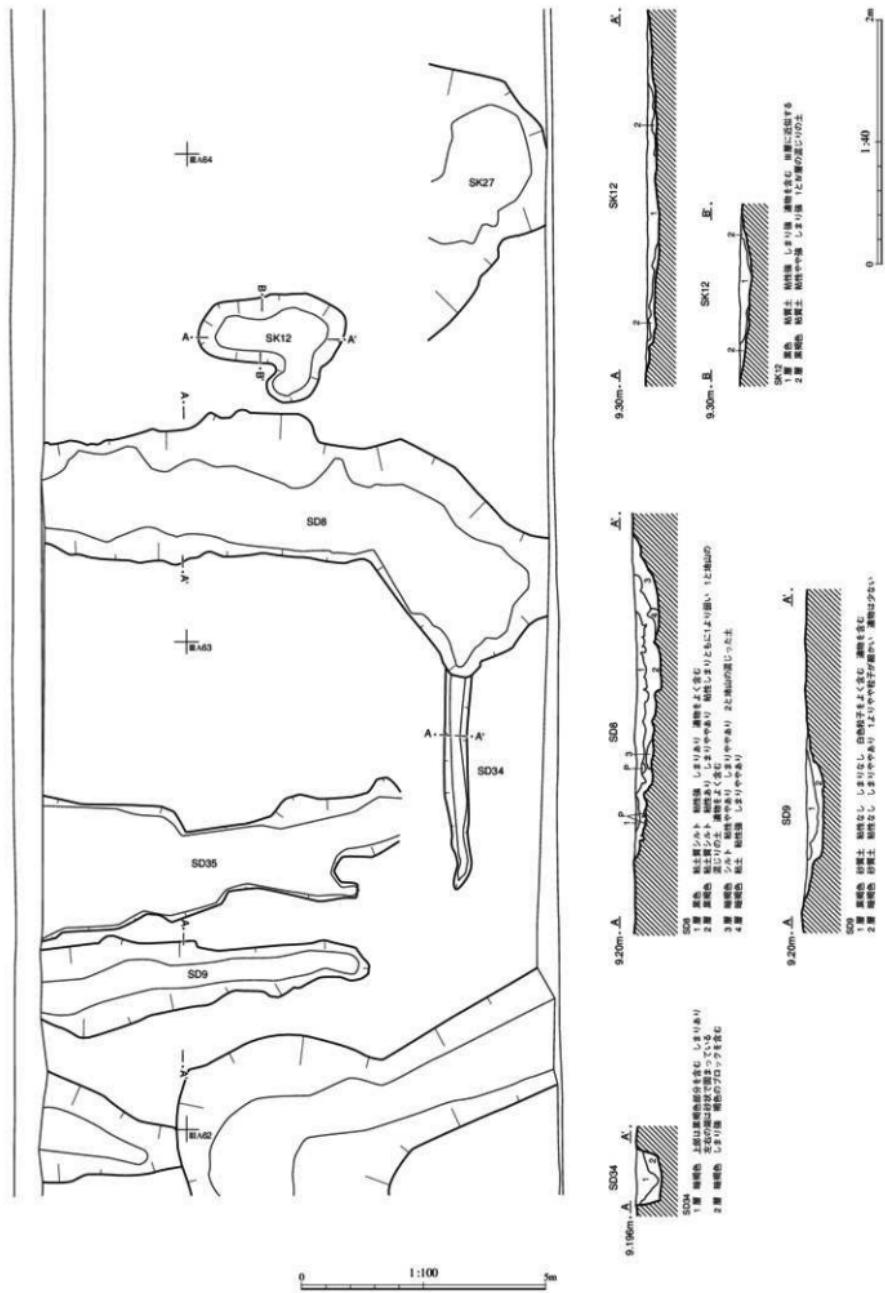


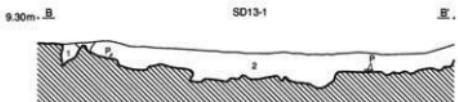
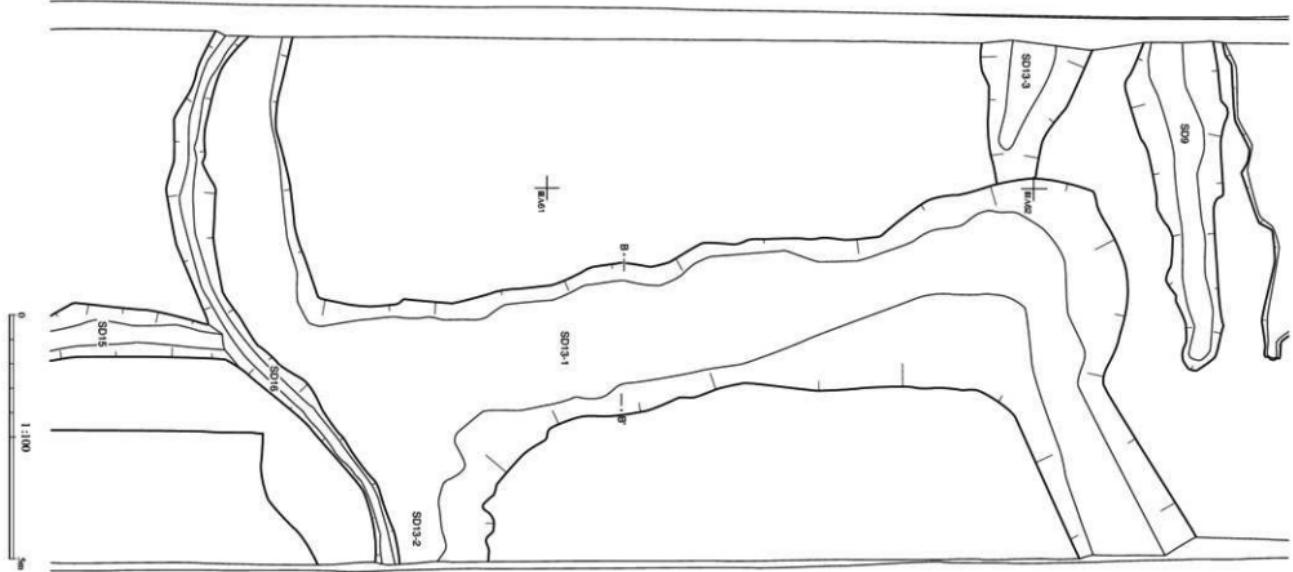
造構実測図4 上層 IIIAB67～69区

図版5

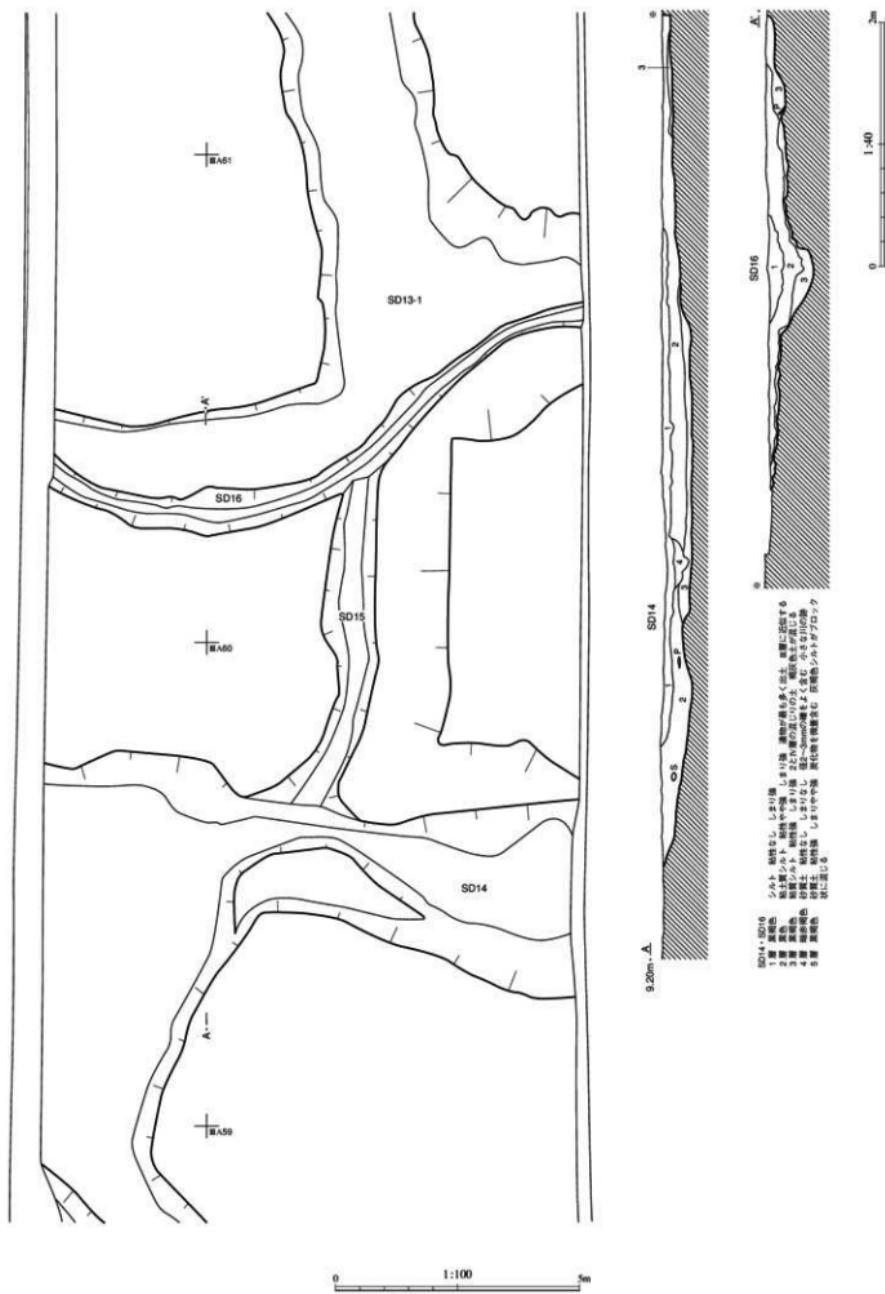






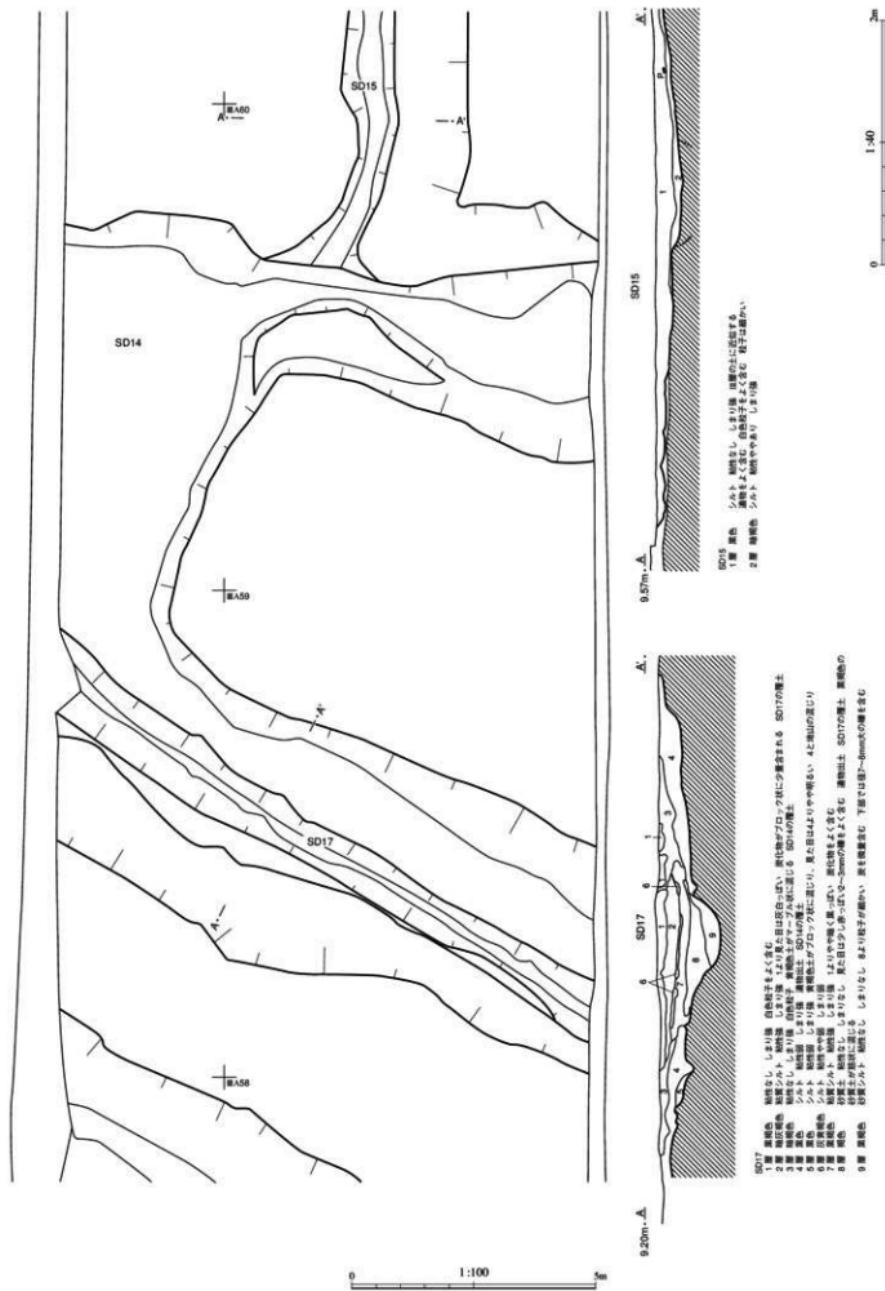


SD13-1  
1層 黄色、粘性なし しまり強、表面の土と混じ、表面の土が落ち込んだものと思われる  
2層 黒褐色 シルト、粘性あり しまり強 通物出土



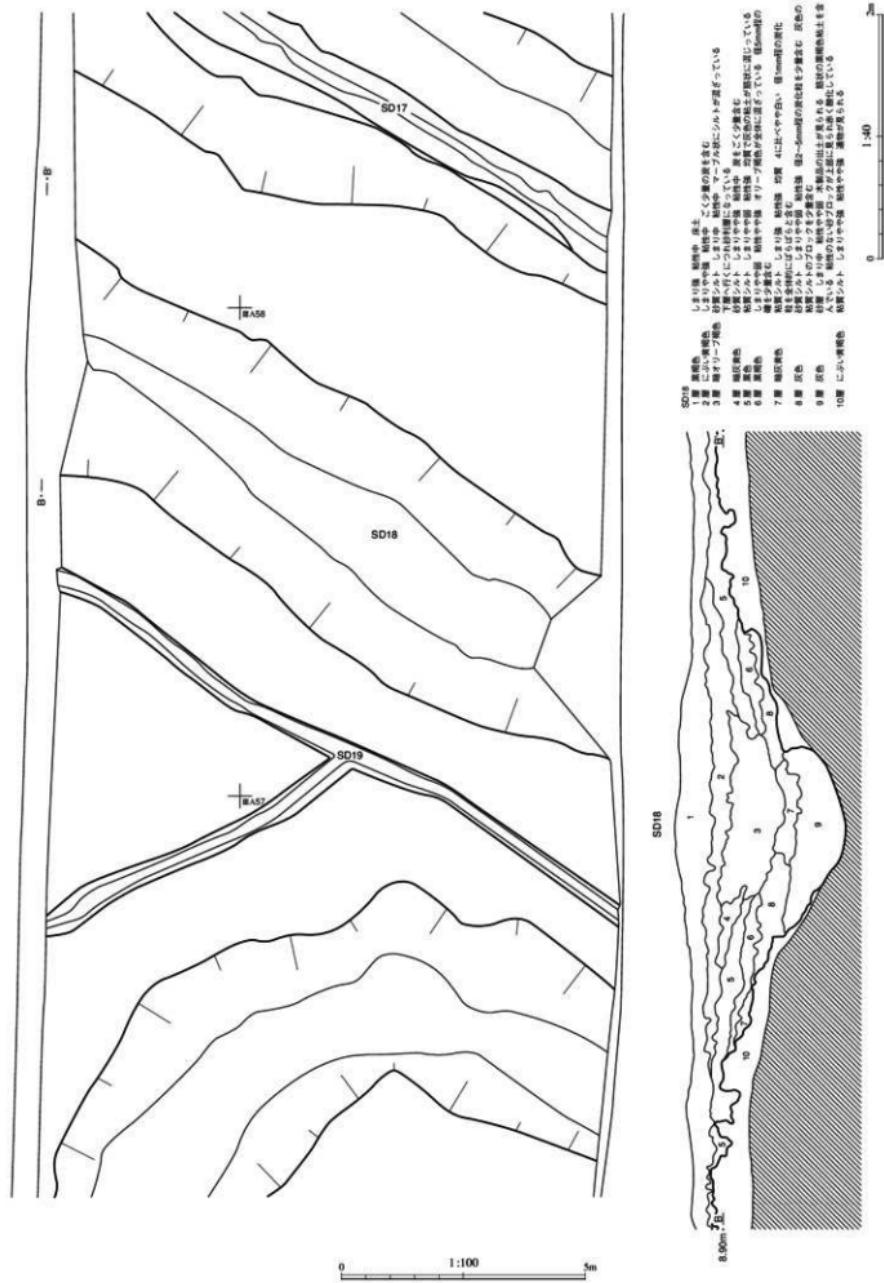
図版10

遺構実測図9 上層 IIIAB58～61区



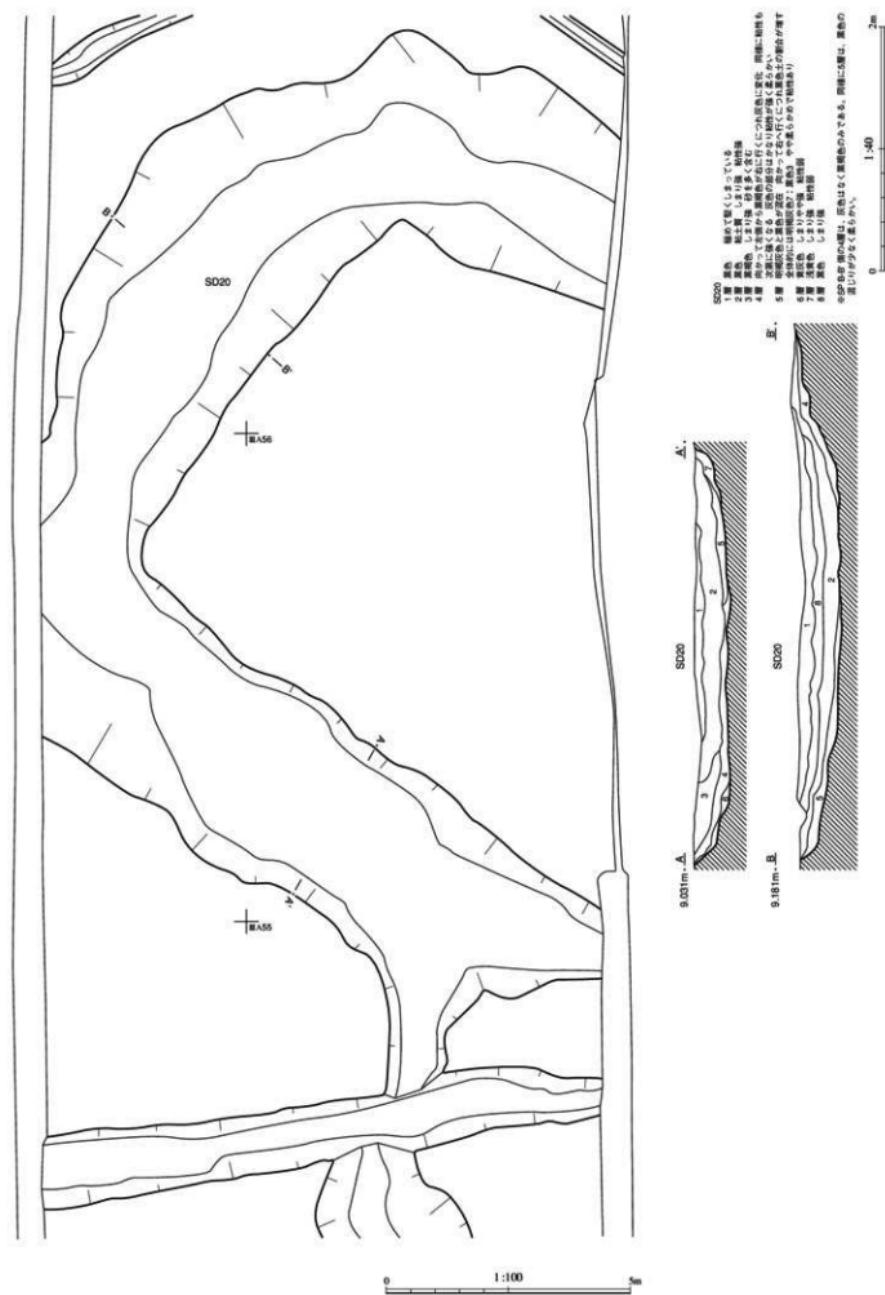
### 遺構実測図 10 上層 IIIAB57～59 区

図版11



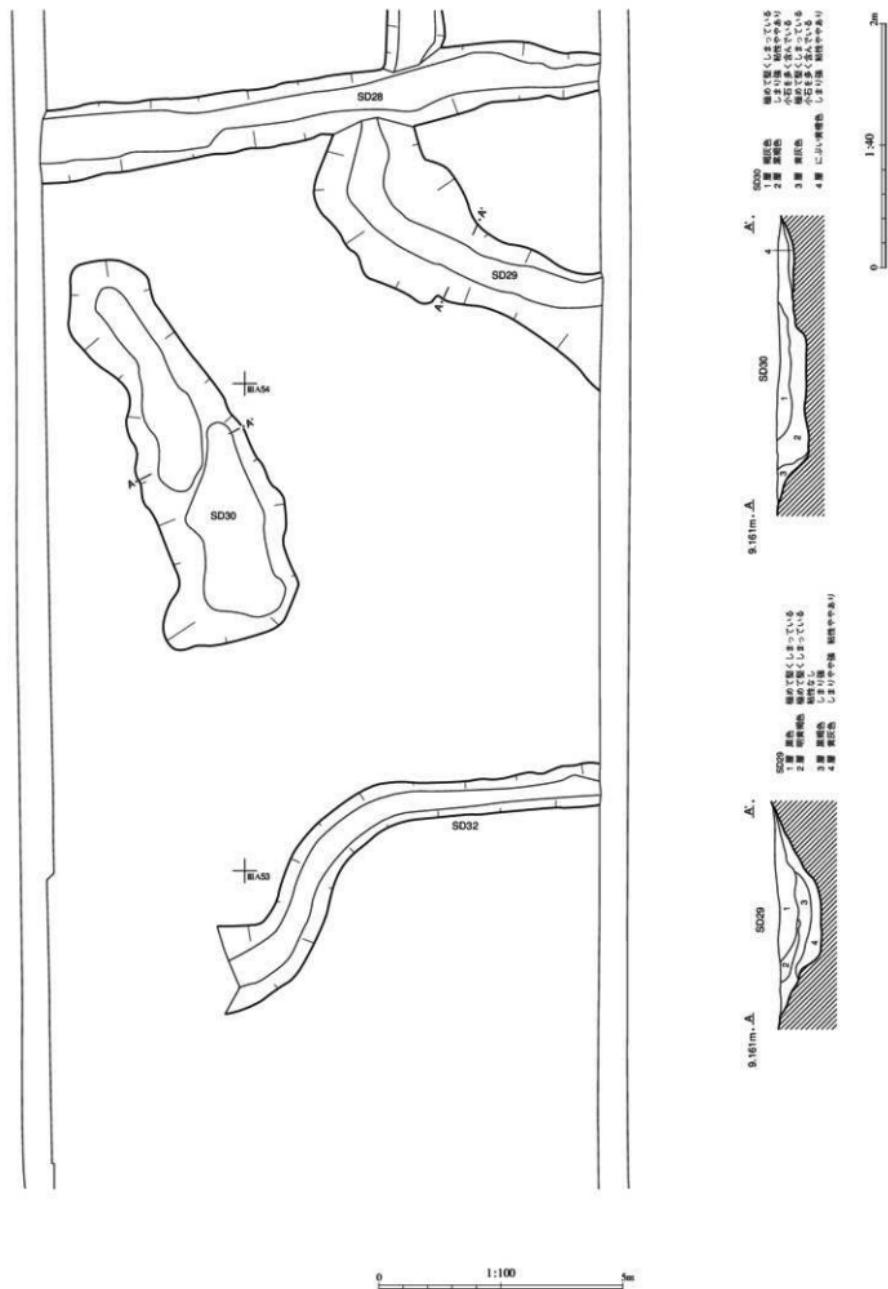
図版12

遺構実測図11 上層 IIIAB55～57区

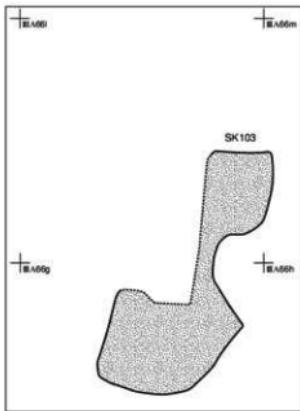
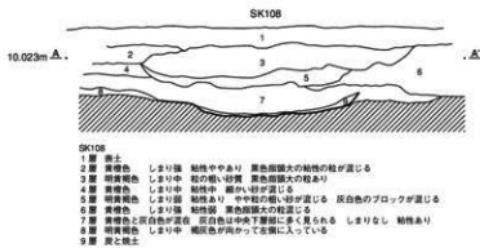
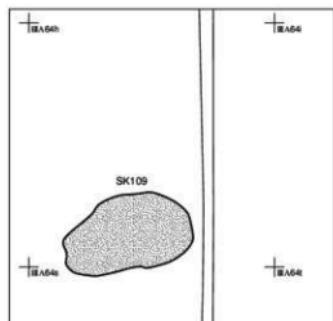
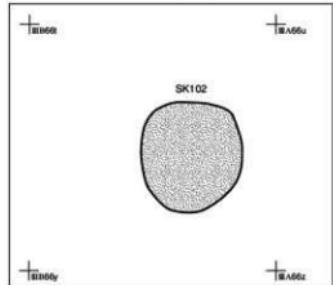
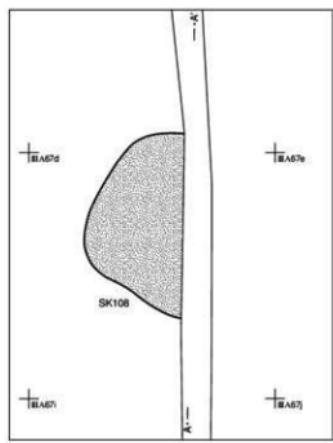


造構実測図12 上層 IIIAB53～55区

図版13

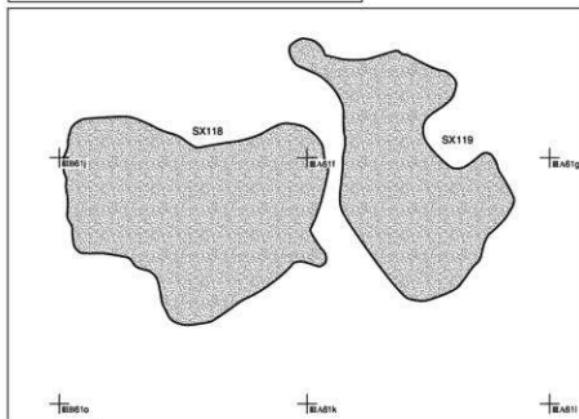
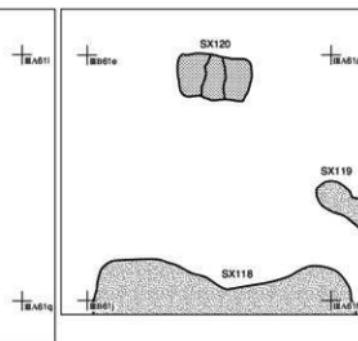
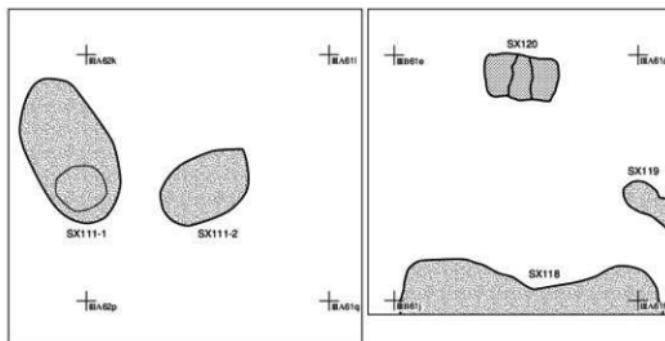


図版14

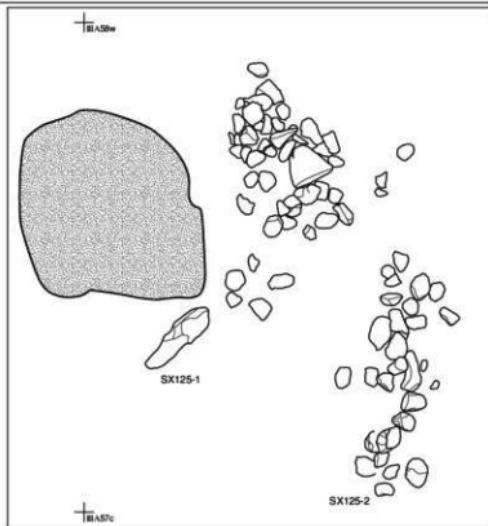


0 1:40 2m

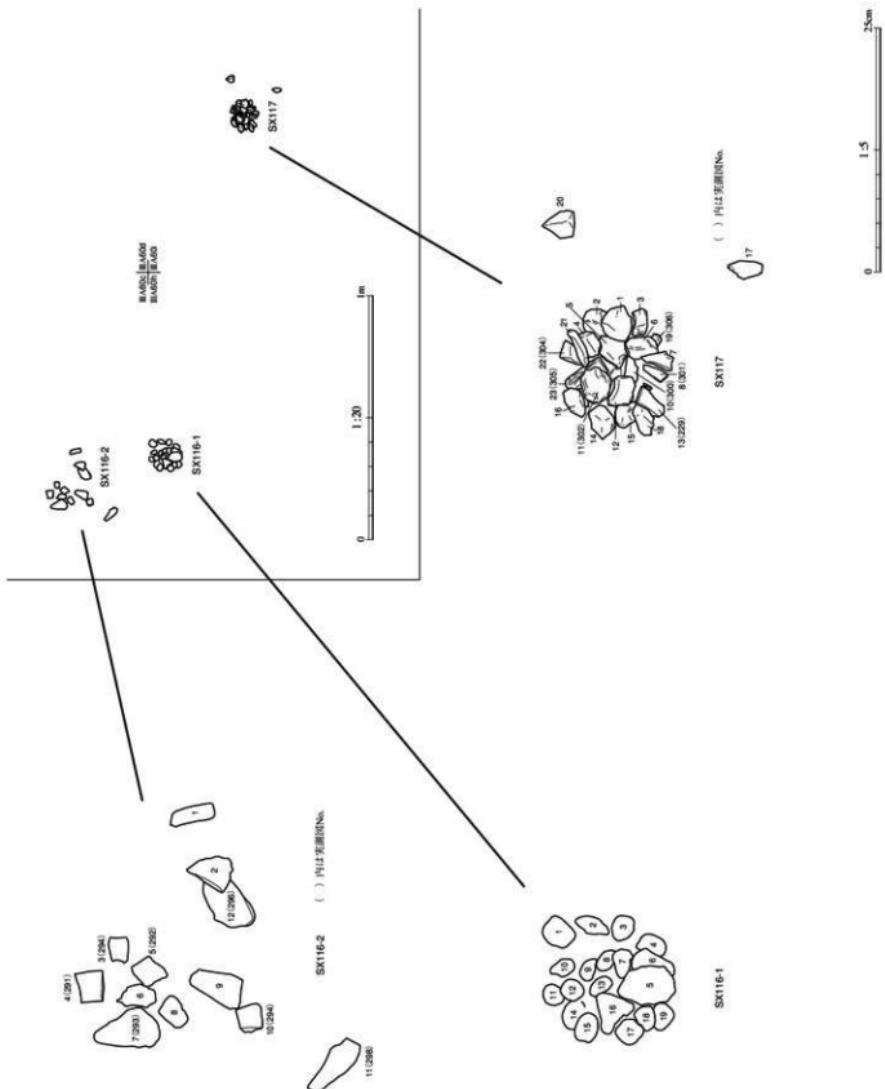
遺構実測図13 中層



0 1:40 2m

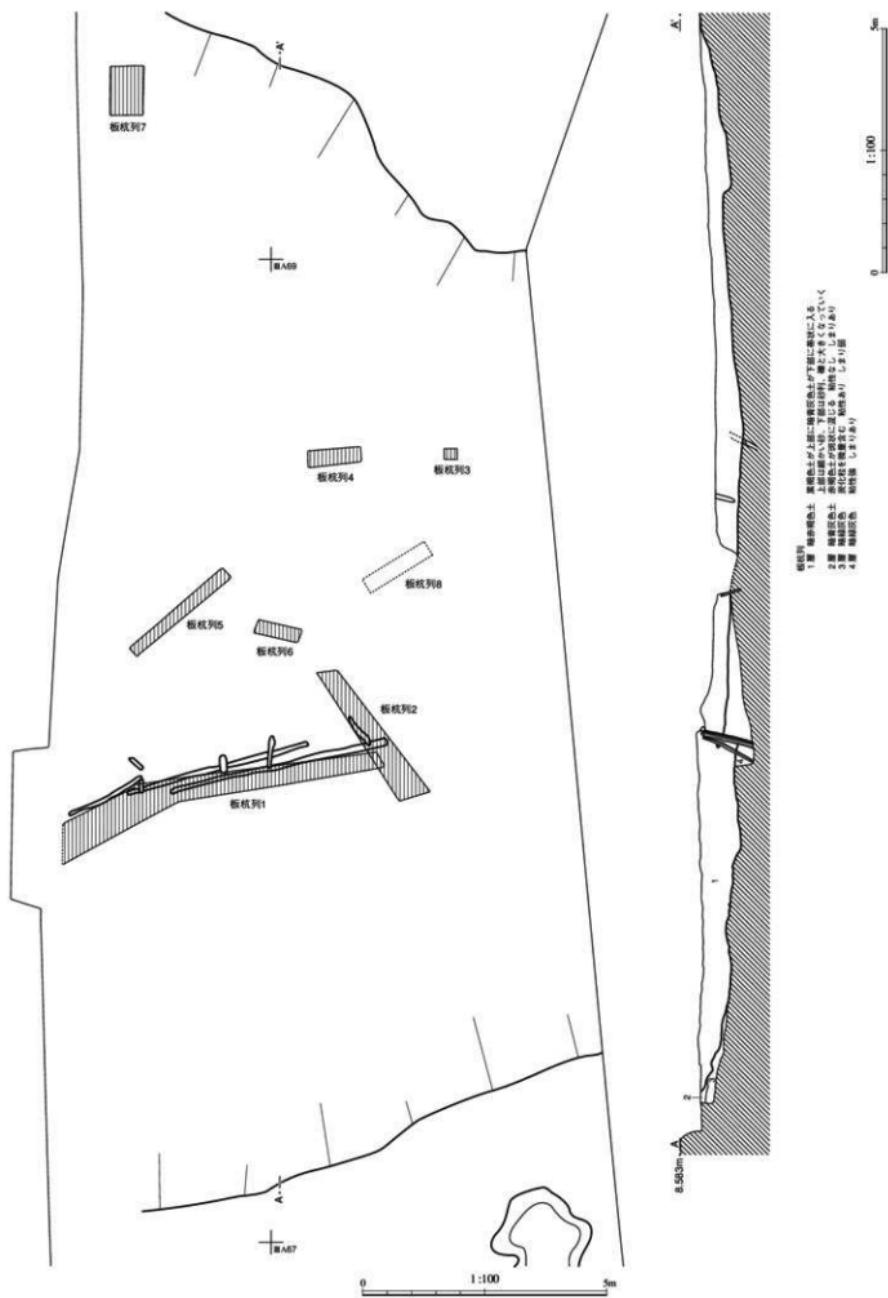


0 1:20 1m



造構実測図16 下層 ⅢAB67～70区 河川跡

図版17



+

mm

+

cm

+

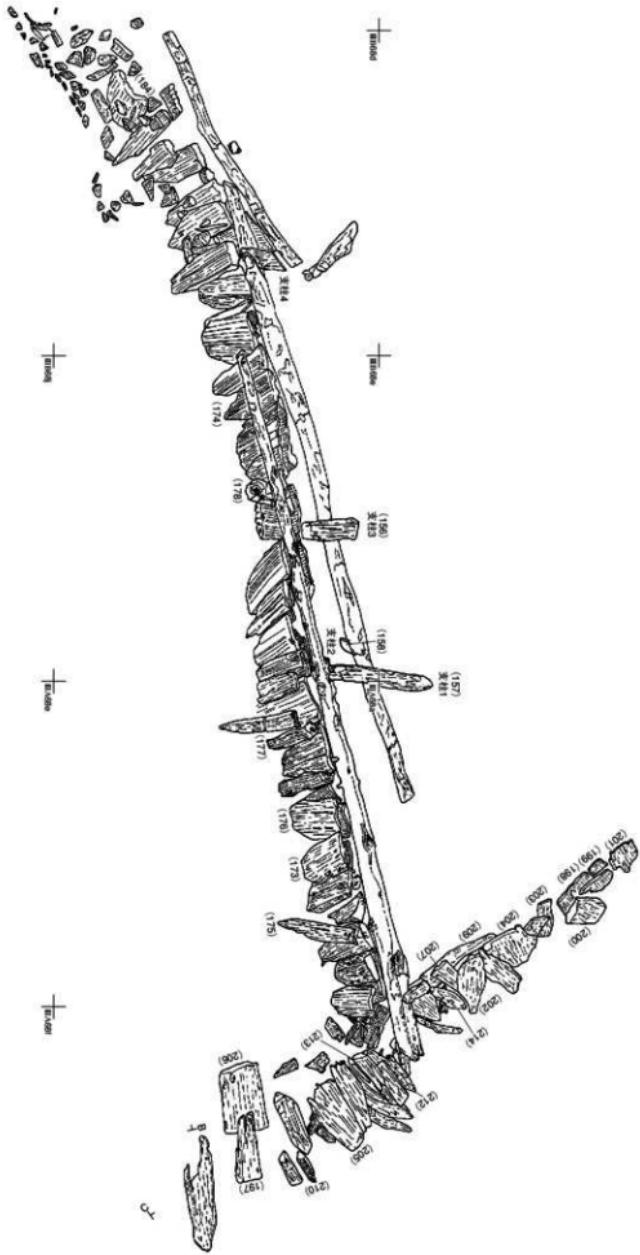
mm

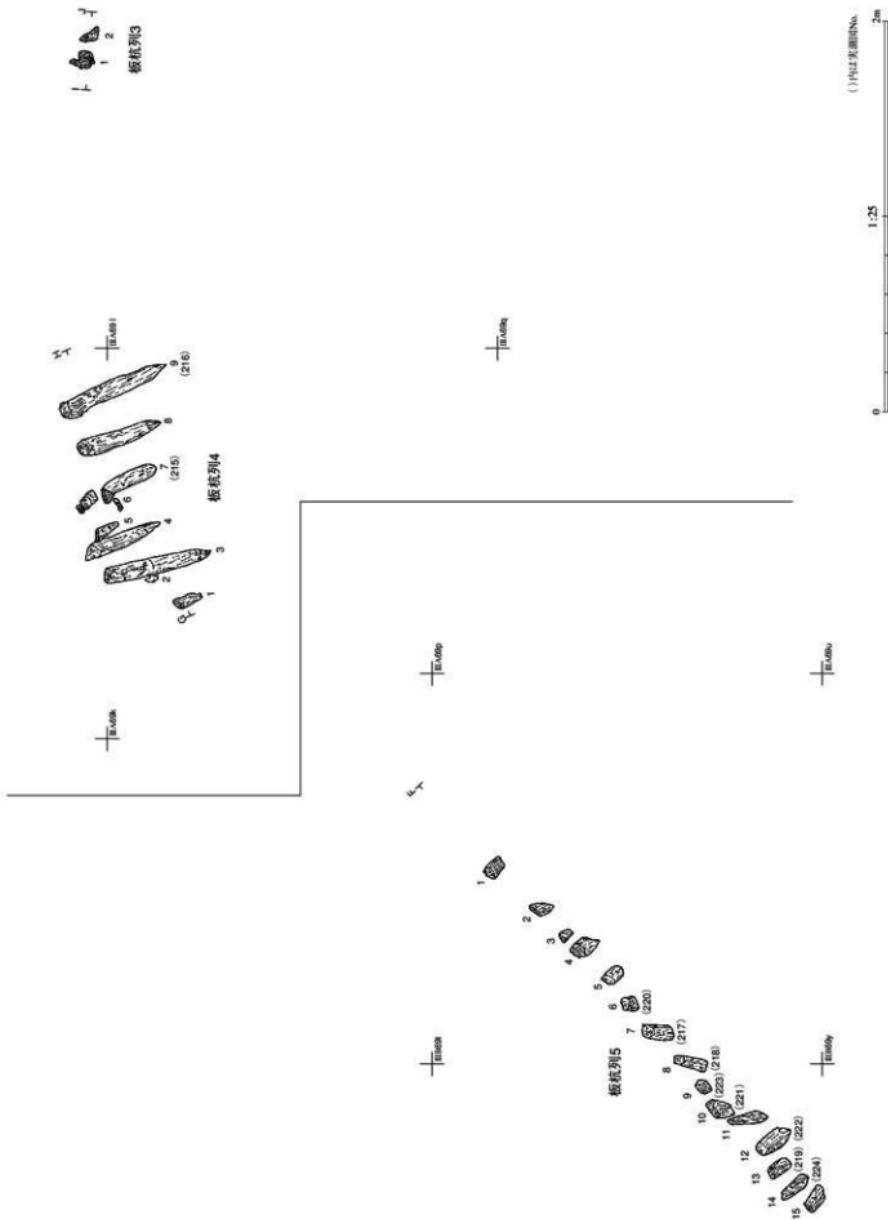
图版18

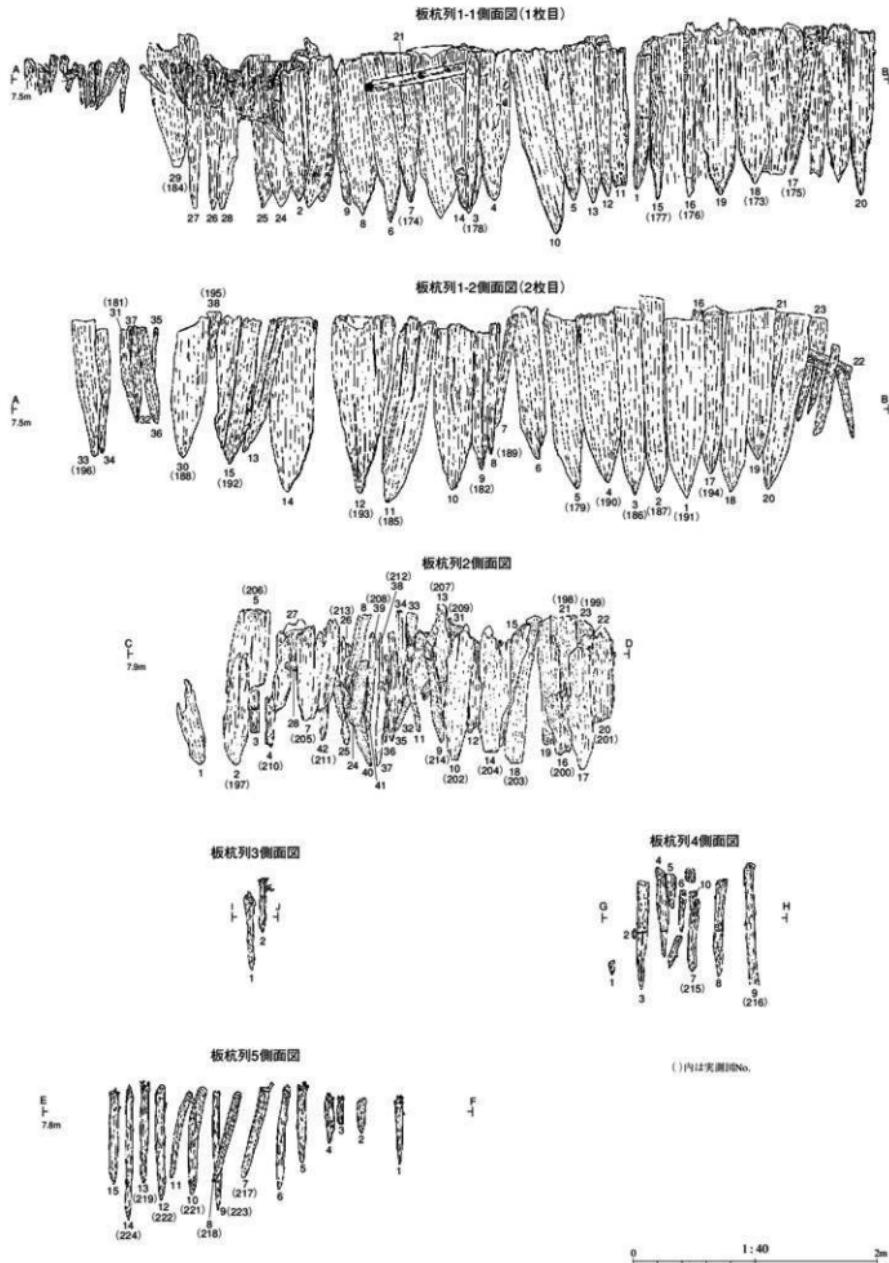
0  
1:30  
2m

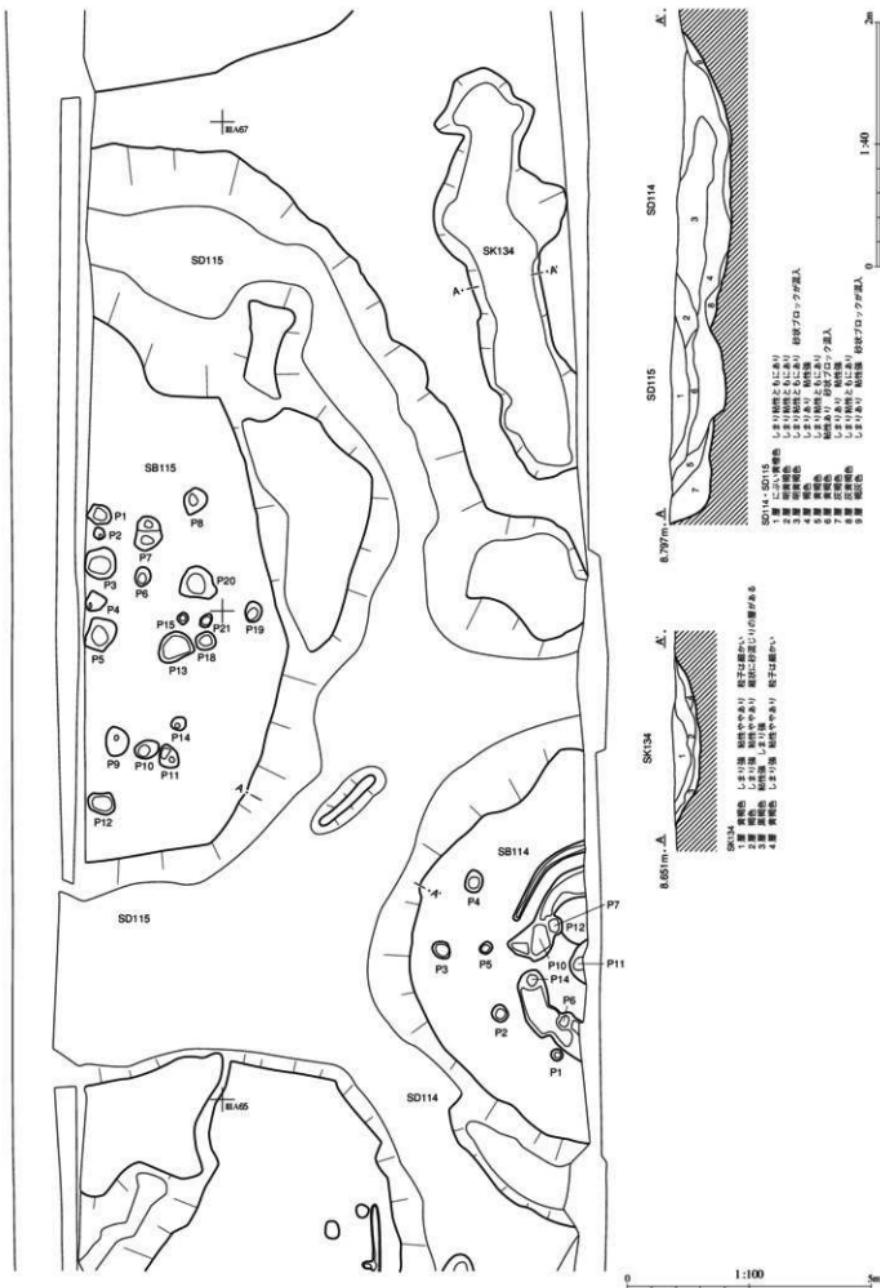
(1) 中生代地层

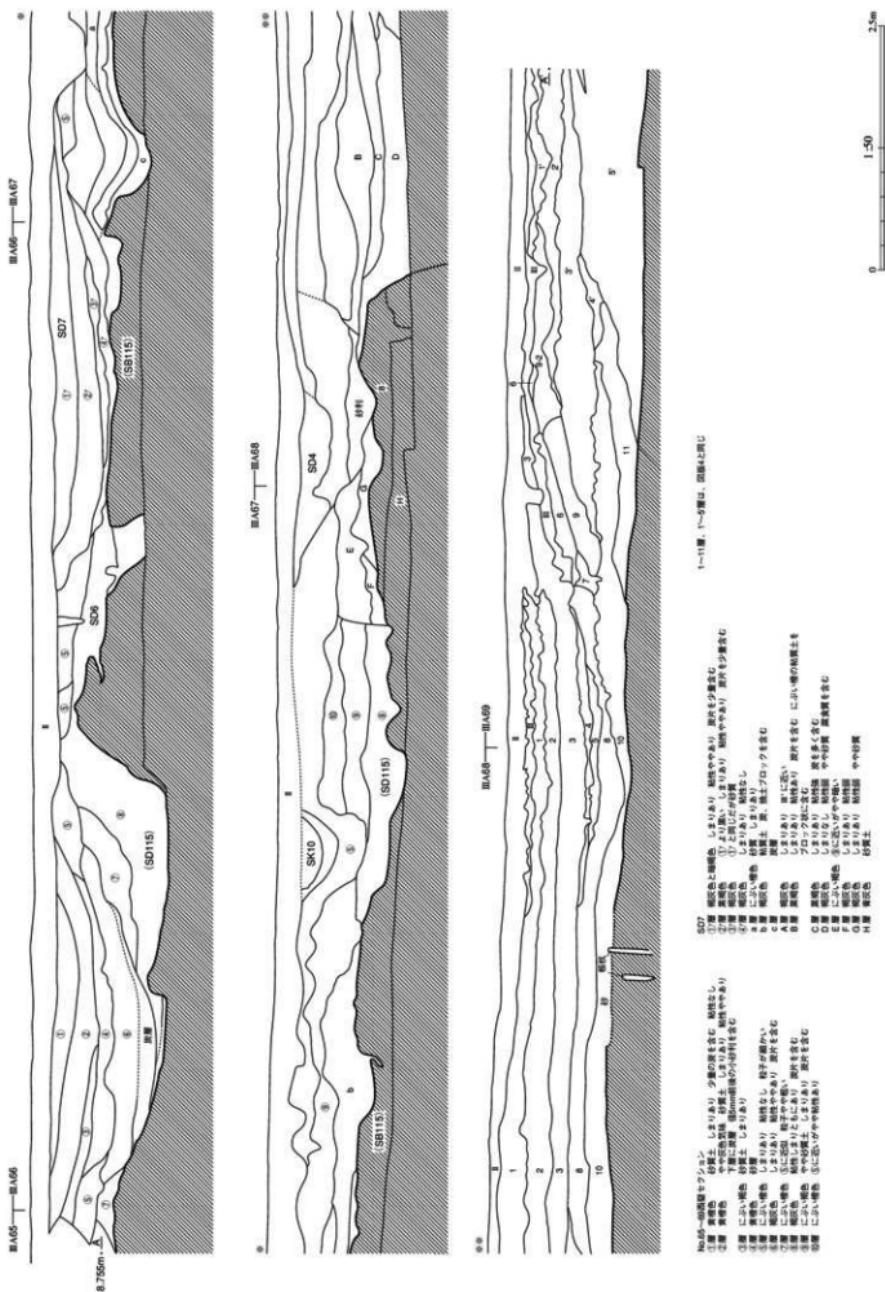
图版17 下层 IIIAB68、69 区 探坑剖面





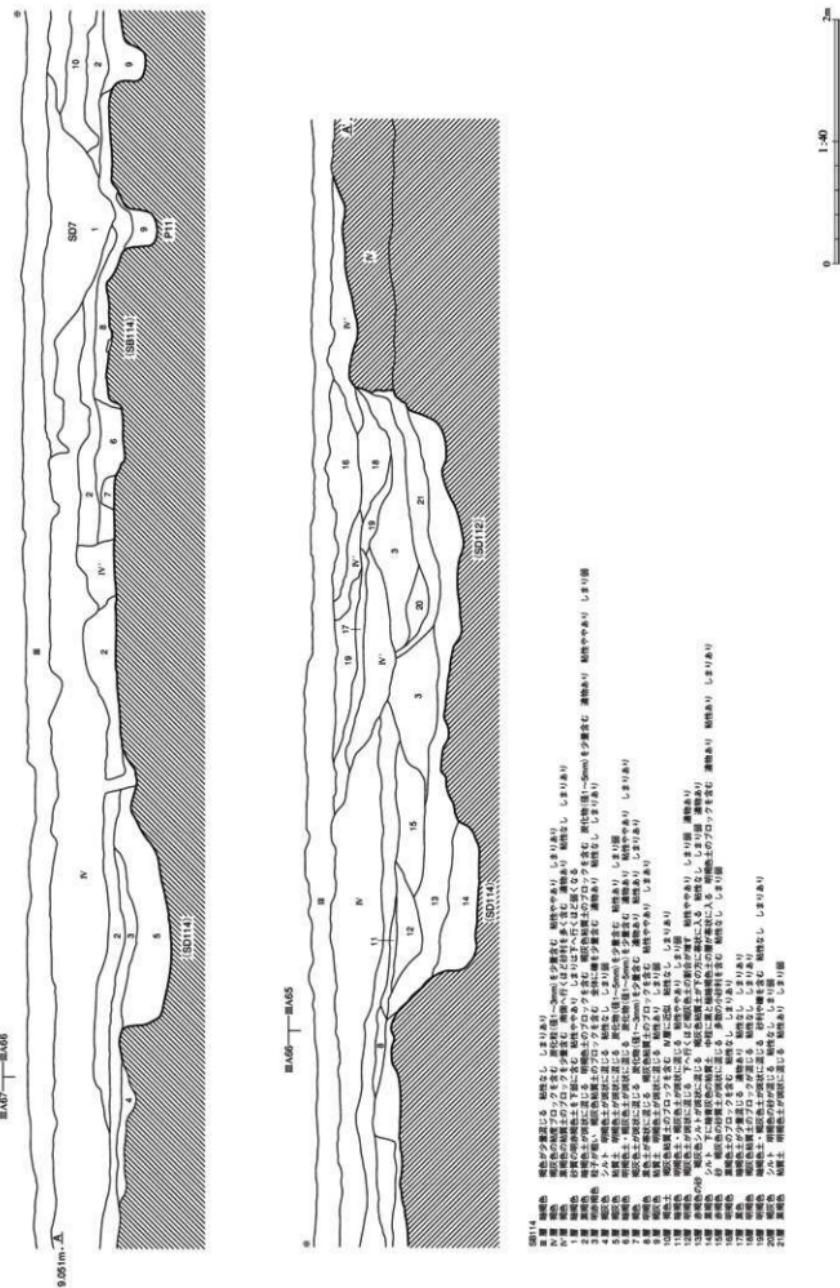






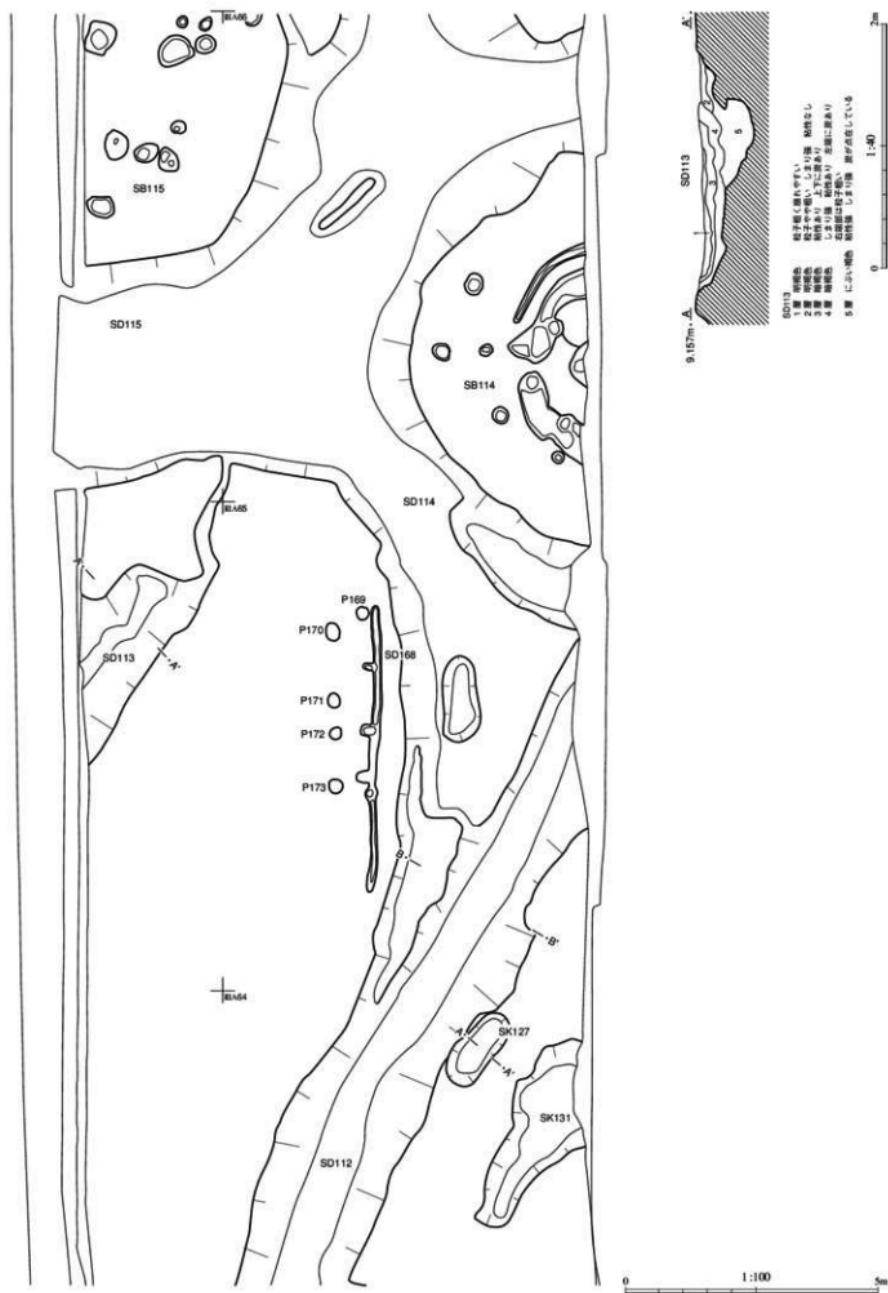
## 造構実測図 22 下層 SB 114 断面図

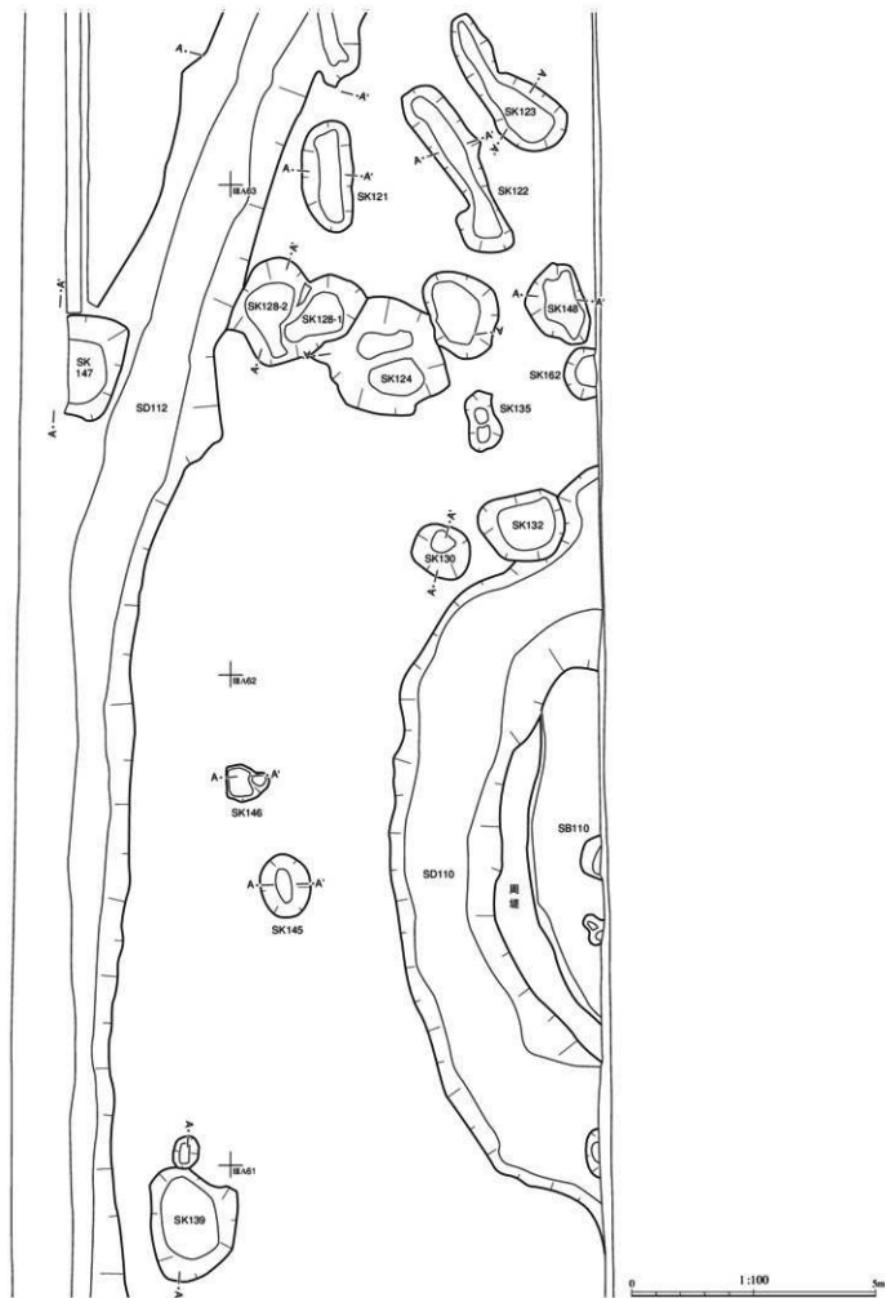
図版23

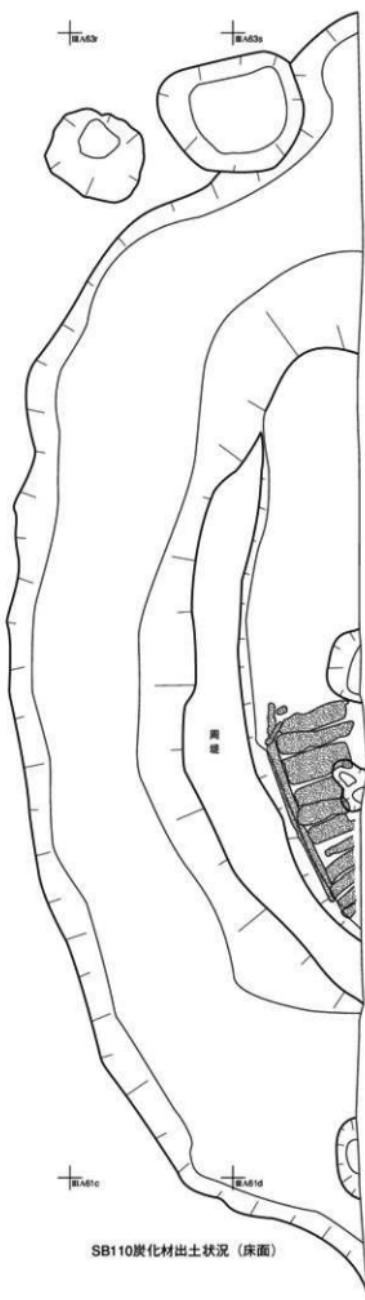
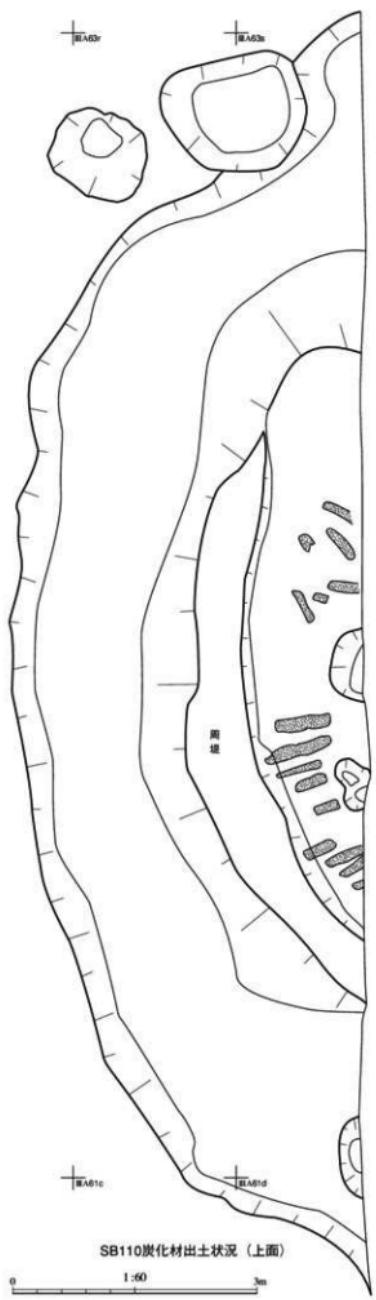


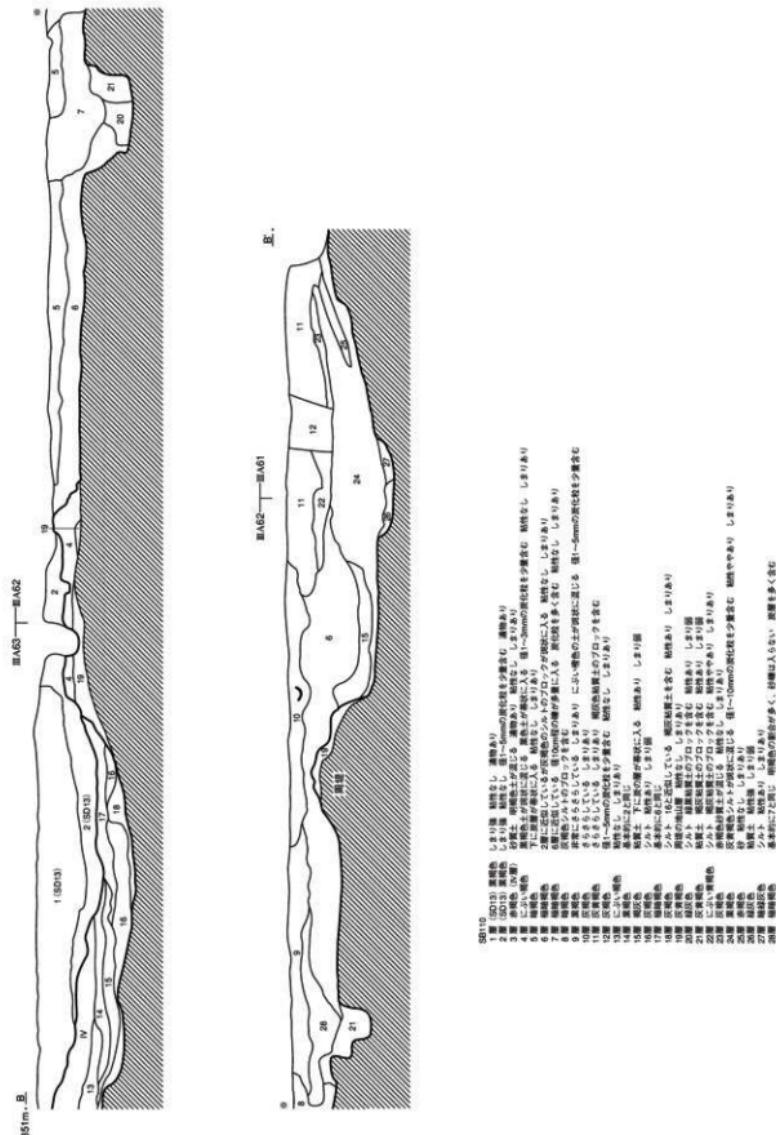
図版24

遺構実測図 23 下層 IIIAB64～66区



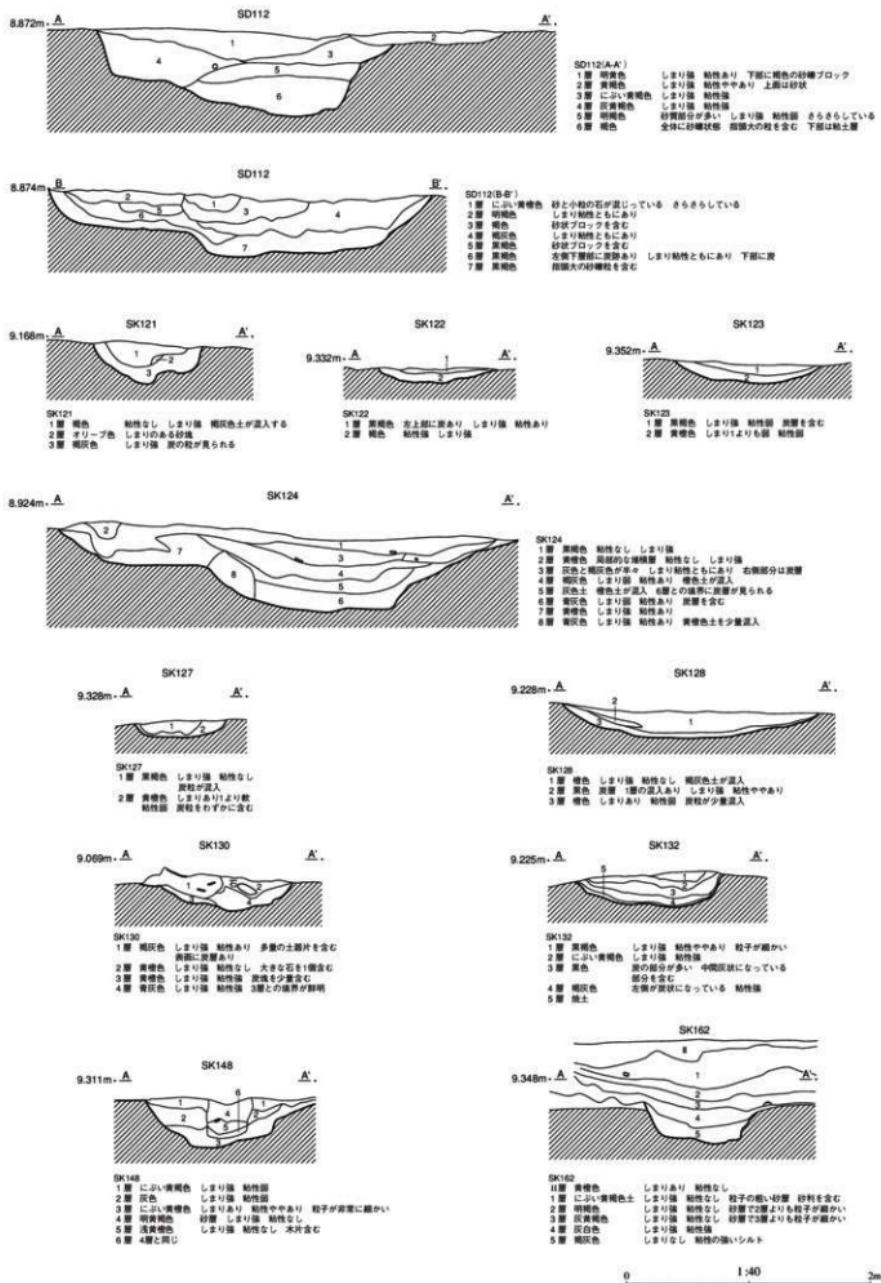


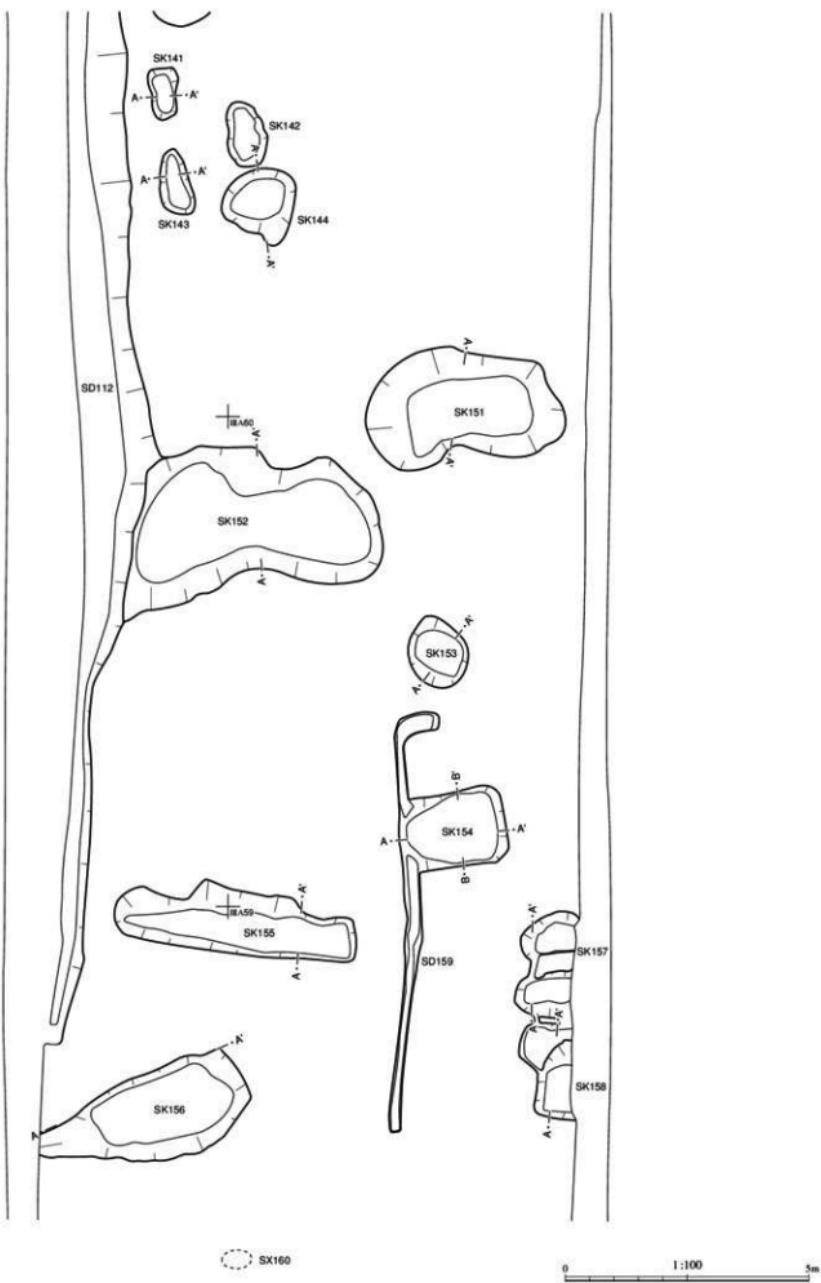




図版28

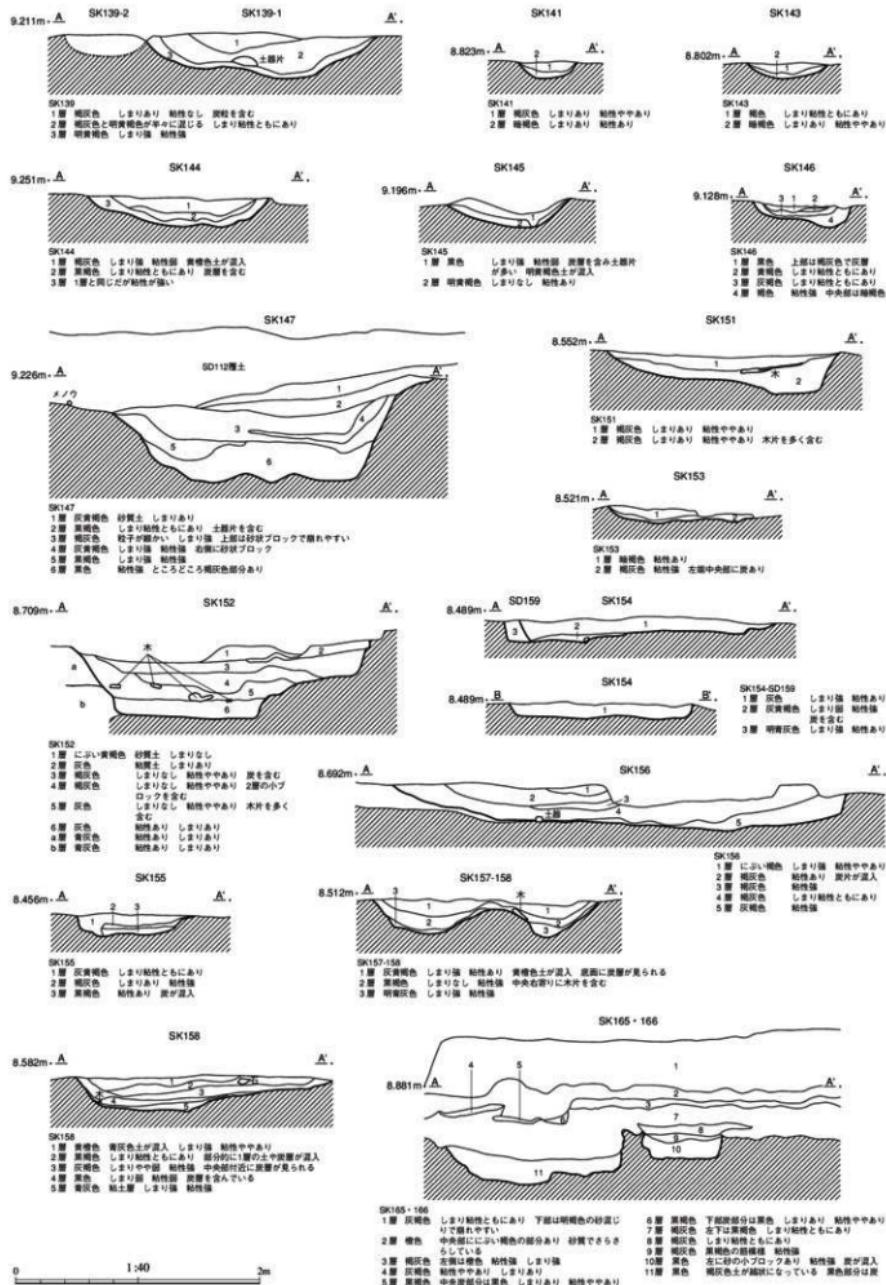
造構実測図 27 下層 各造構断面図

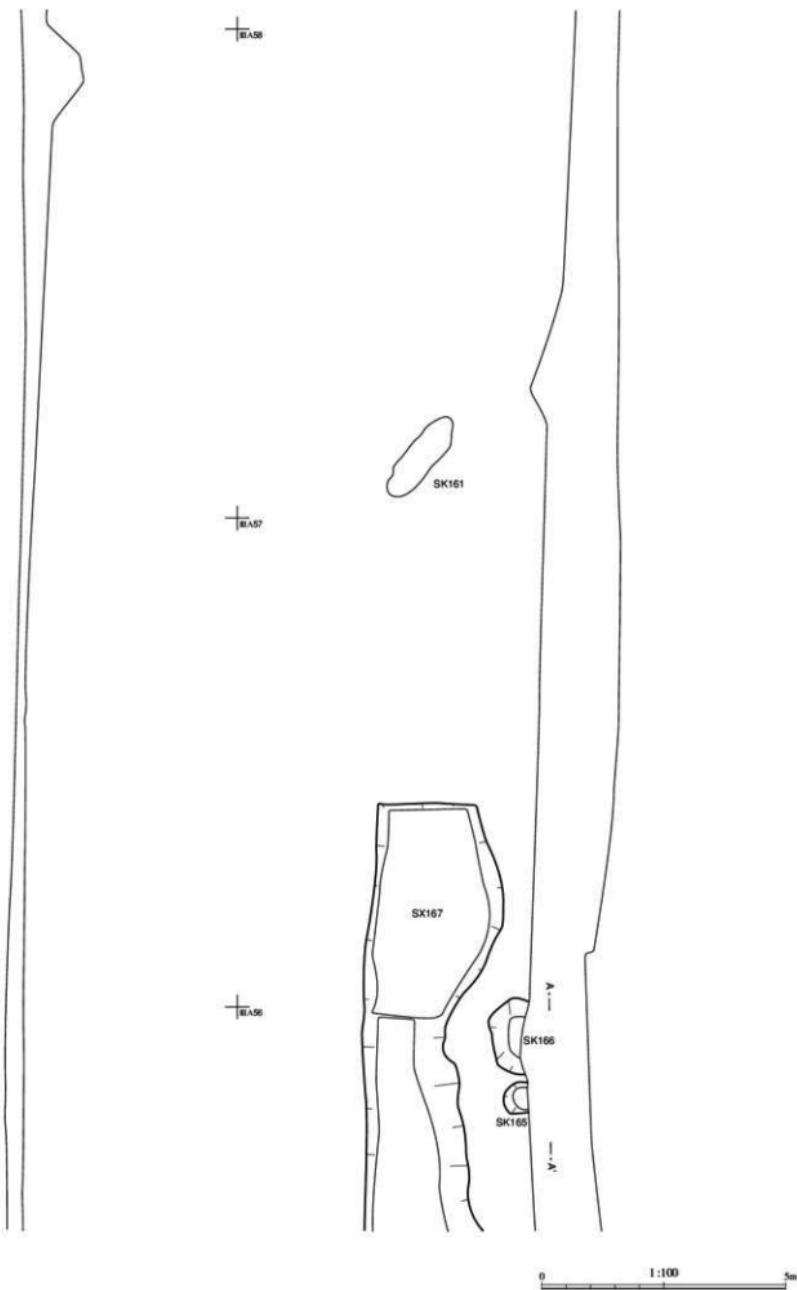




図版30

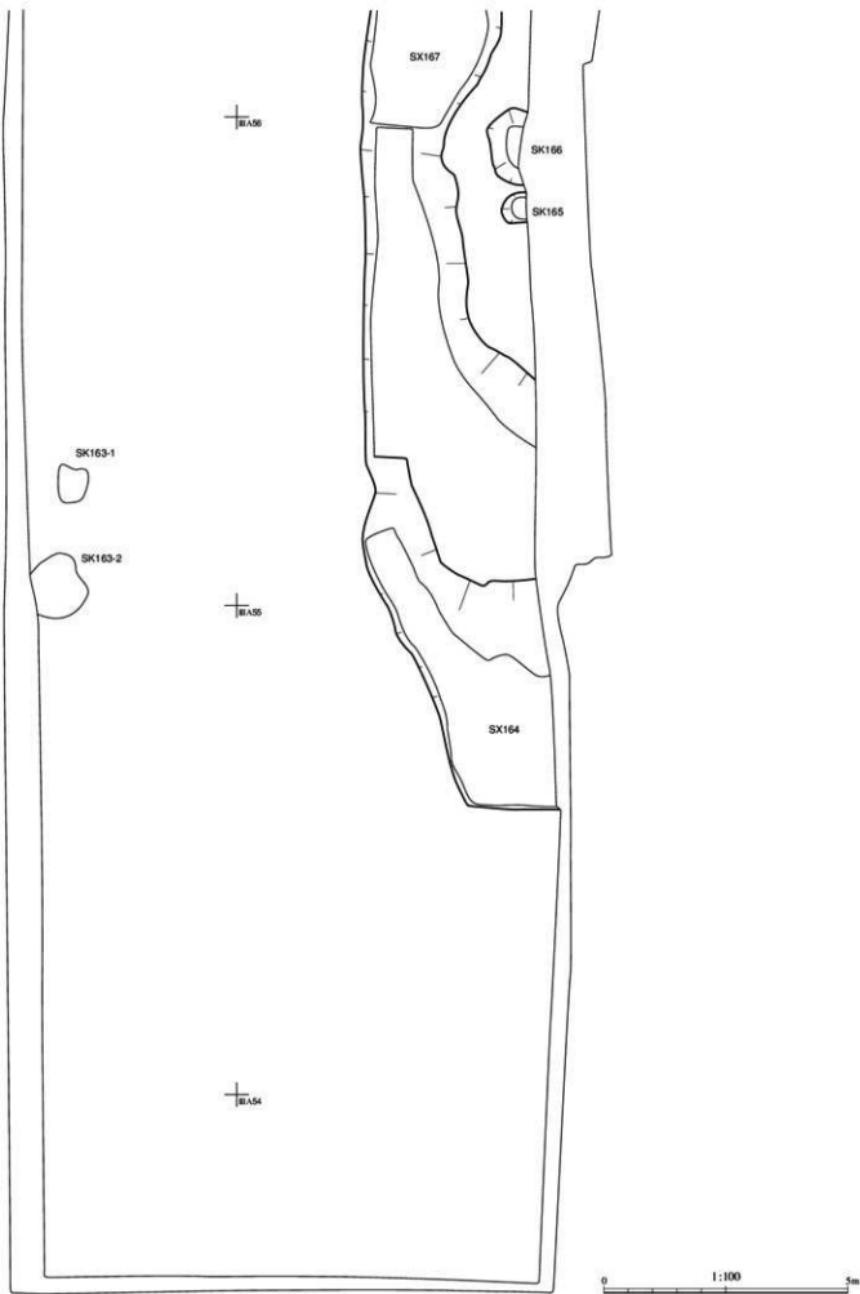
造構実測図 29 下層 各造構断面図





図版32

遺構実測図 31 下層 IIIAB54～57区



# 図 版

(遺 物)

## 凡 例

### (土 器)

・縮 尺 土器は実測図、拓本とも $1/3$ を基本とし、大型品は $1/4$ 、 $1/6$ とした。

土製品は $1/2$ を基本とし、小型品(2cm未満)は $1/1$ とした。

・表 現 中期土器はすべてフリーハンドで描き、後期土器の口縁部、稜線等は定規で描いた。  
赤彩は網掛けで表した。

・復元実測は、口縁部の遺存率が低く口徑復元が困難な場合、図の中心線と口縁部、稜線等の線を離した。

・断面観察により土器の作り方(貼り付け、接合痕等)がわかるものは、破線で記した。

### (石 器)

・縮 尺 器種と管玉類の製作工程により縮尺を分けた。 $1/1 \cdot 2/3 \cdot 1/3 \cdot 1/4$ で示し、各  
図版に縮尺を明示した。

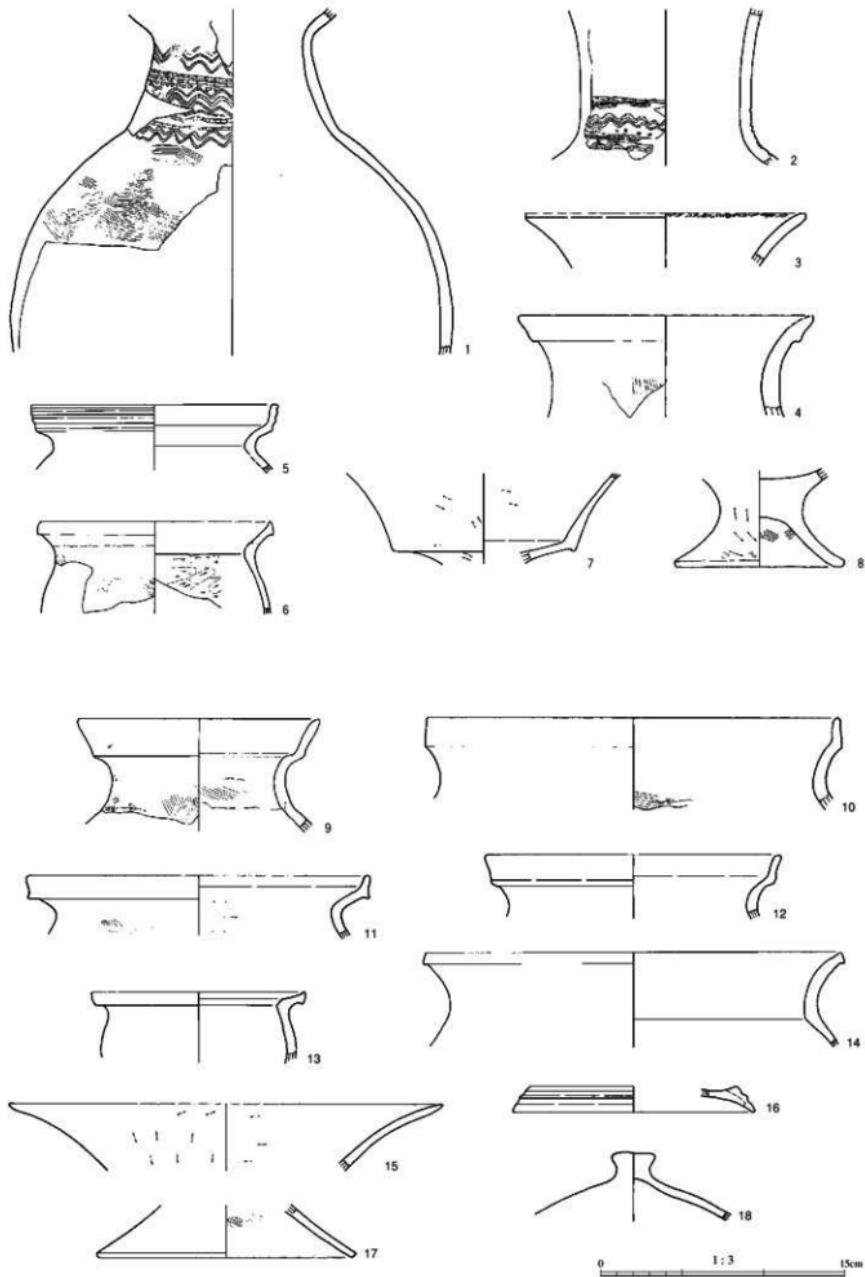
・表 現 磨面は網掛けで表した。節理面での剥離は斜線で表した。

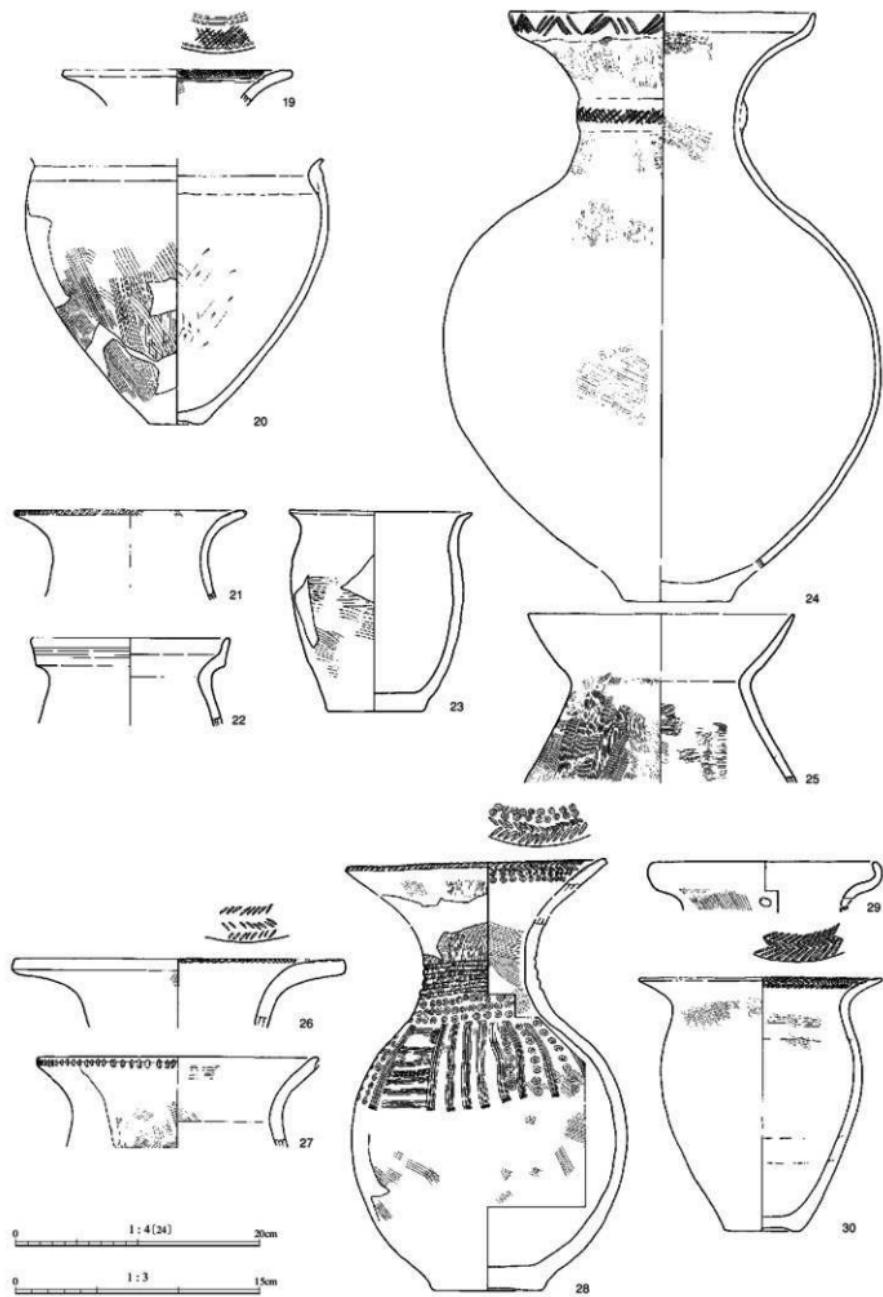
### (木 器)

・縮 尺  $1/3$ 、 $1/5$ 、 $1/10$ を採用し、各図版に示した。

・端部等が欠損しているものは、推定線を入れ、完形でないことを示した。

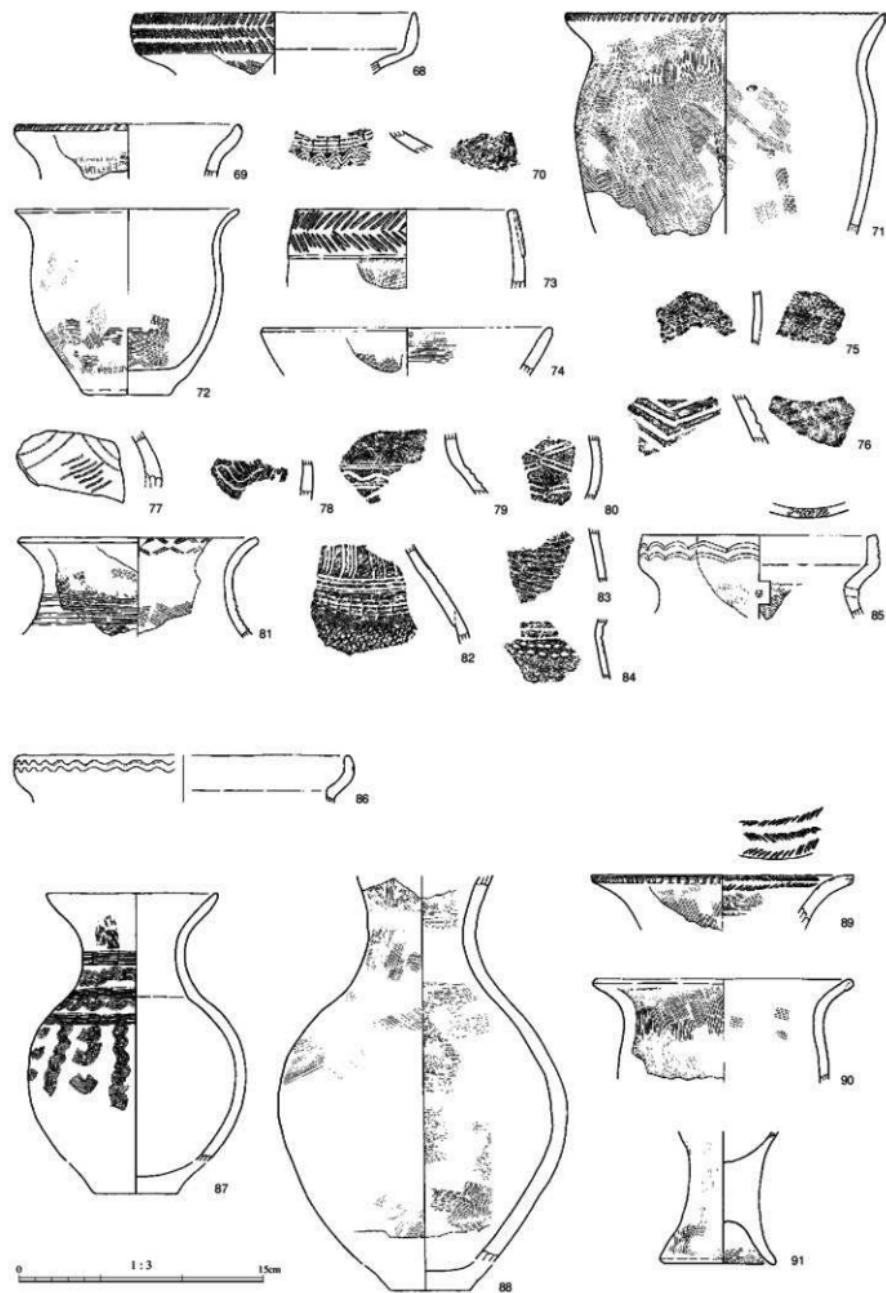
欠 損 ■■■ 樹 皮 ■■■ 炭 化 ■■■ 摩 滅 ■■■

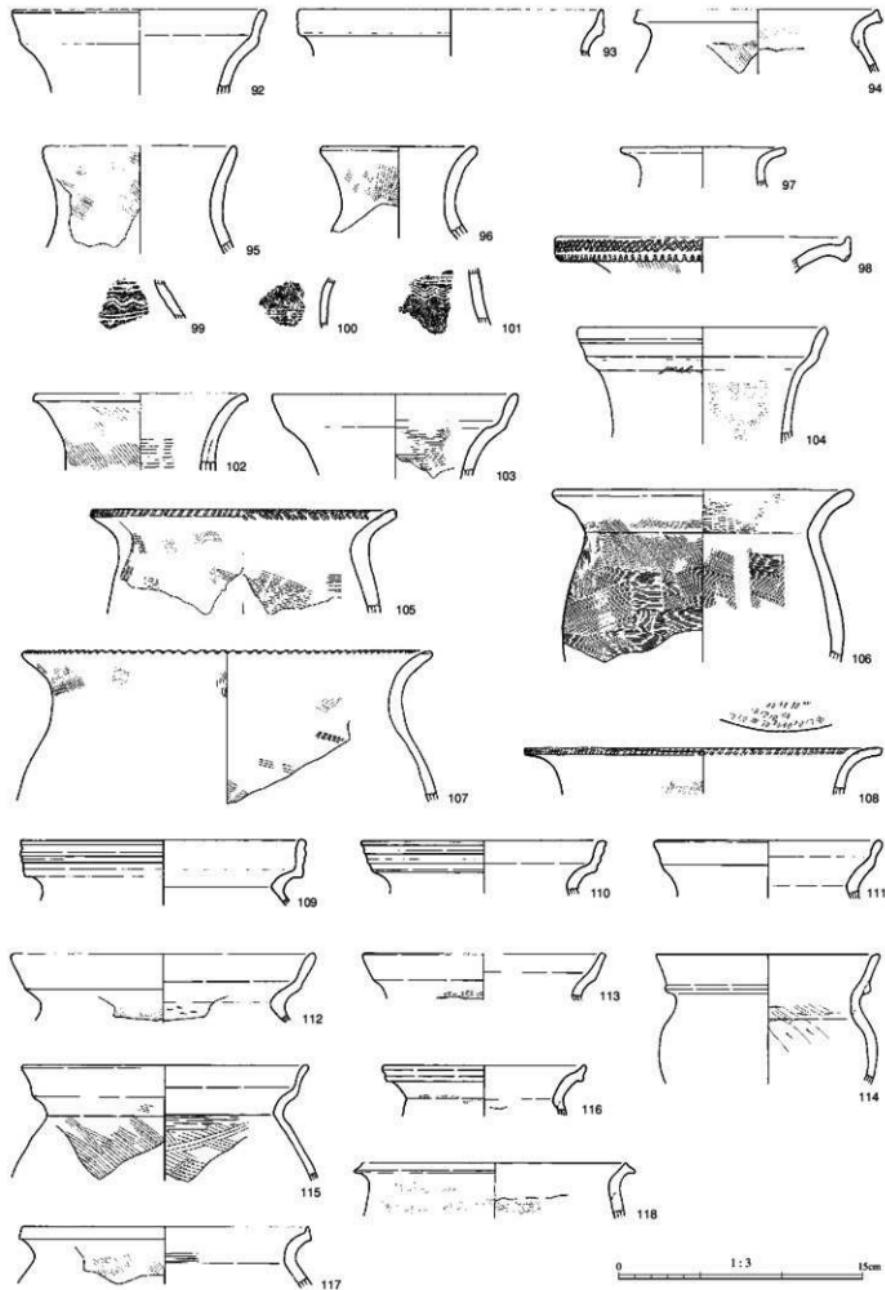


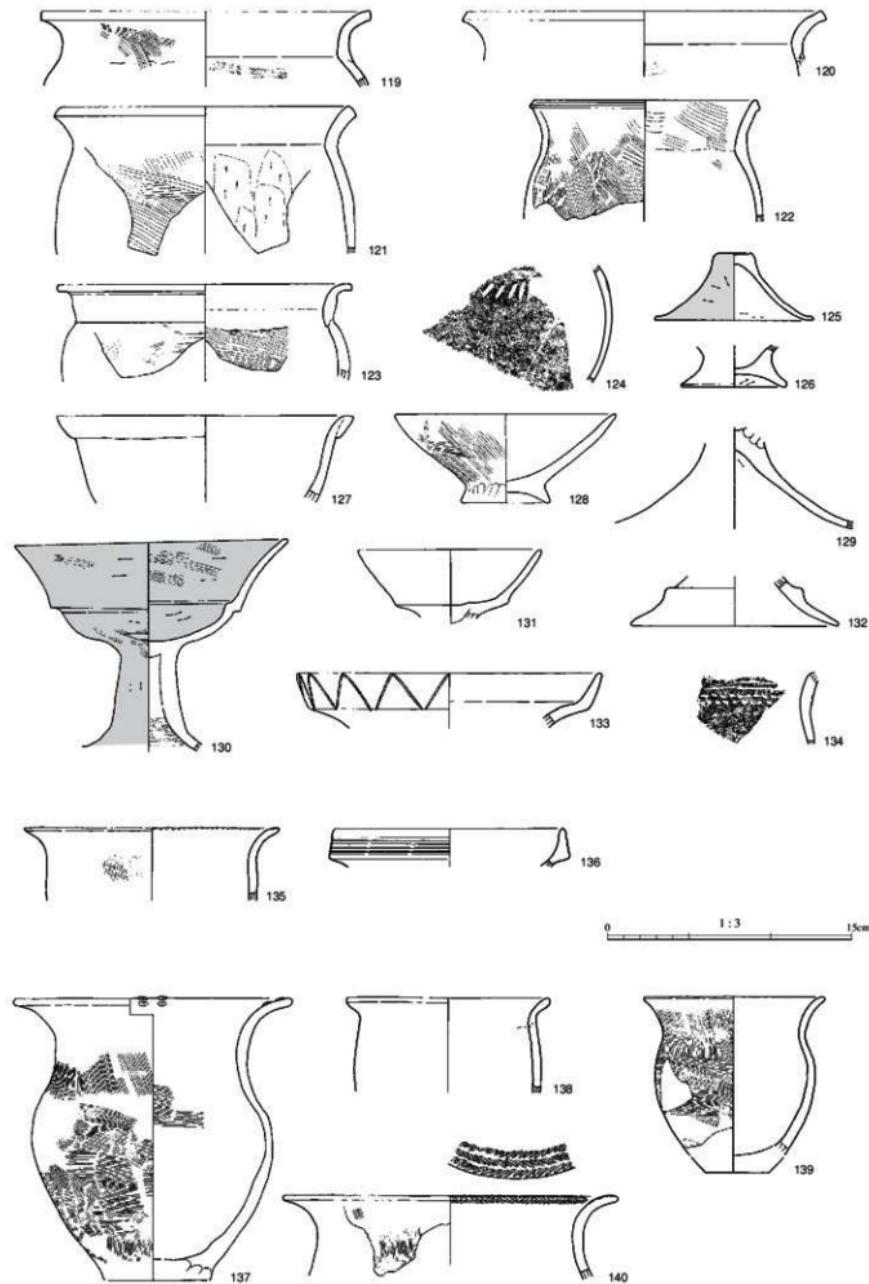


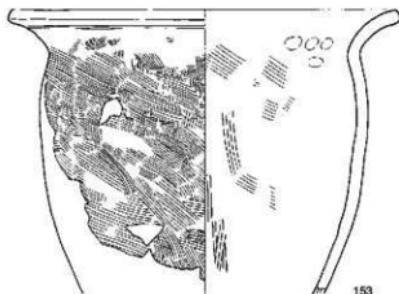
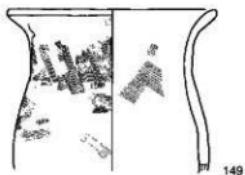
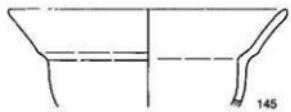
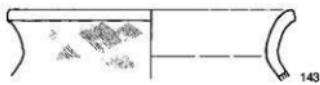
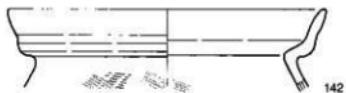


弥生土器実測図4 上層 SD 13 (44~53)・SD 14 (54~57)・SD 15 (58, 59)  
SD 16 (60~62)・SD 17 (63)・SD 18 (64~67)

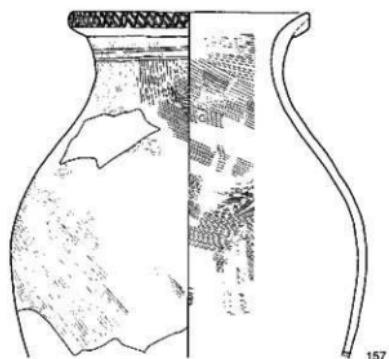




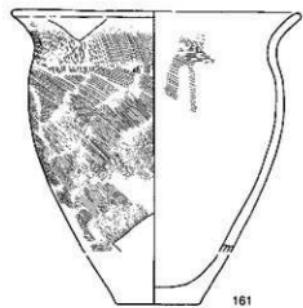




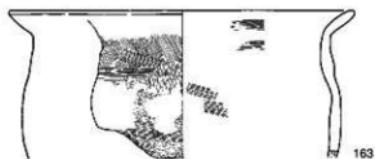
0 1:3 15cm



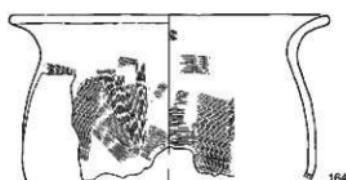
157



161



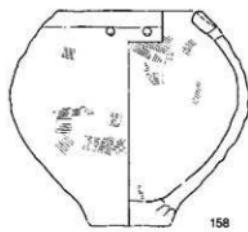
163



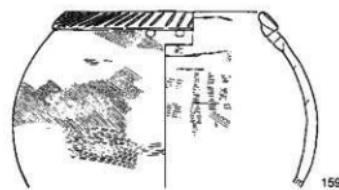
164



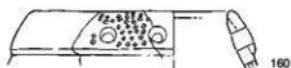
165



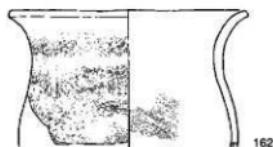
158



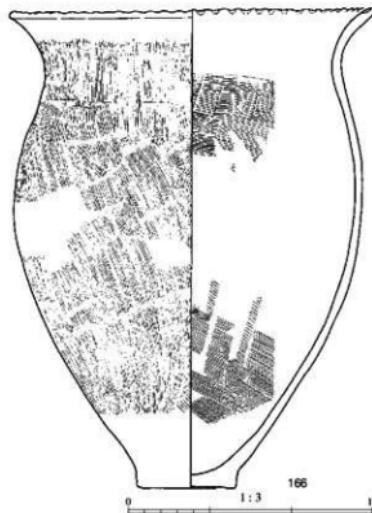
159



160

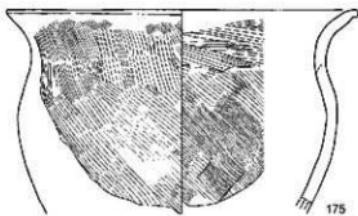
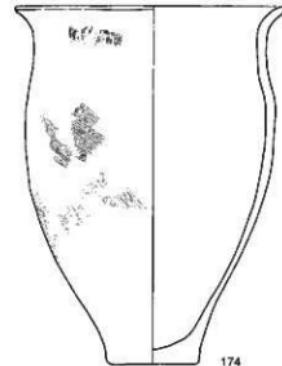
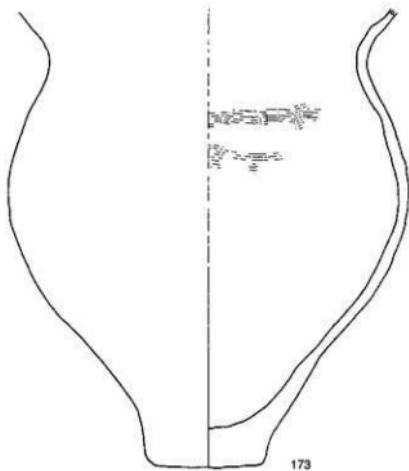
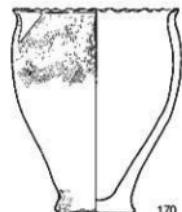
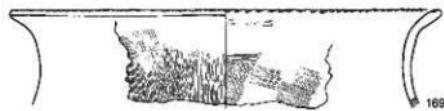
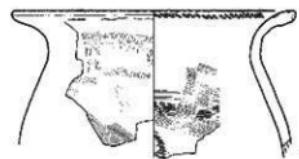


162



166

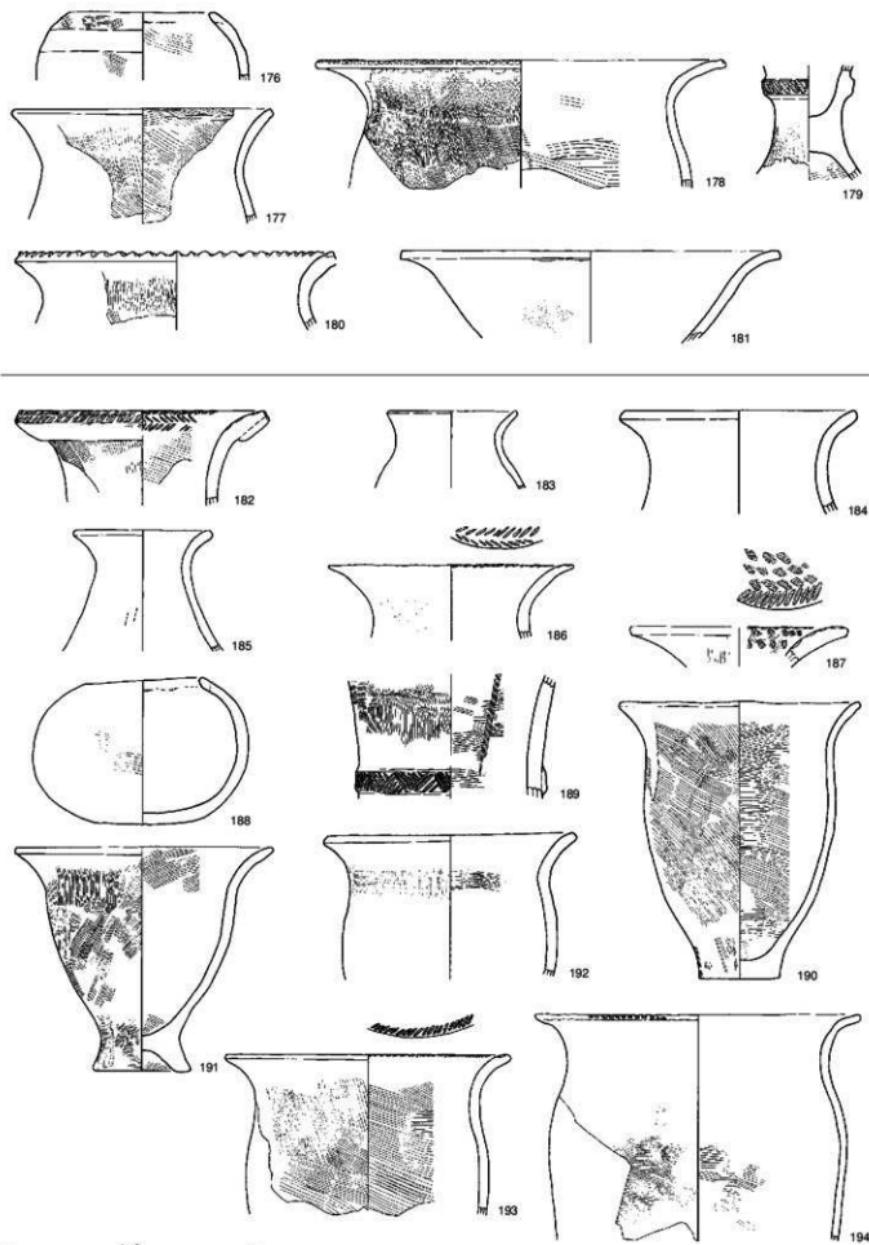
15cm

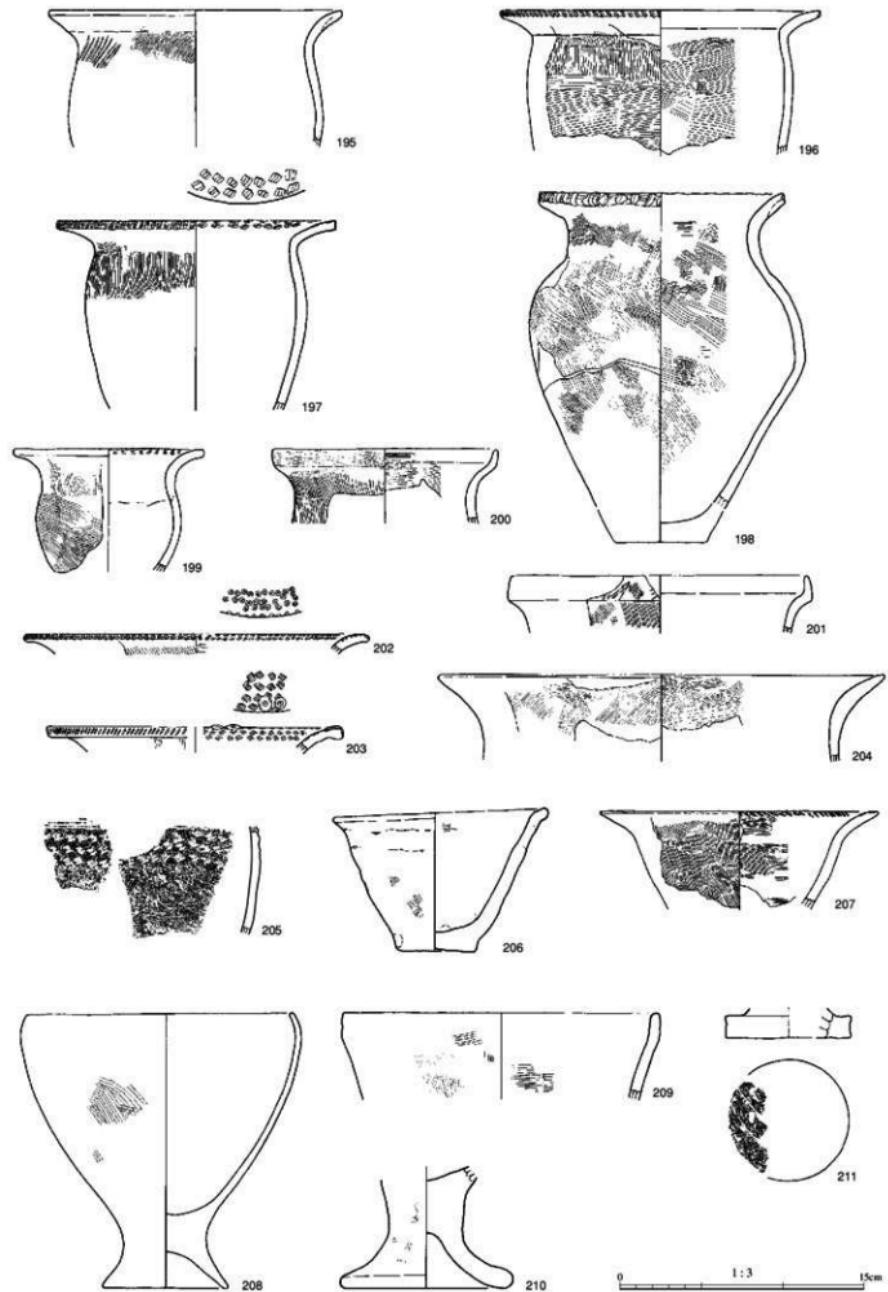


0 1:3 15cm

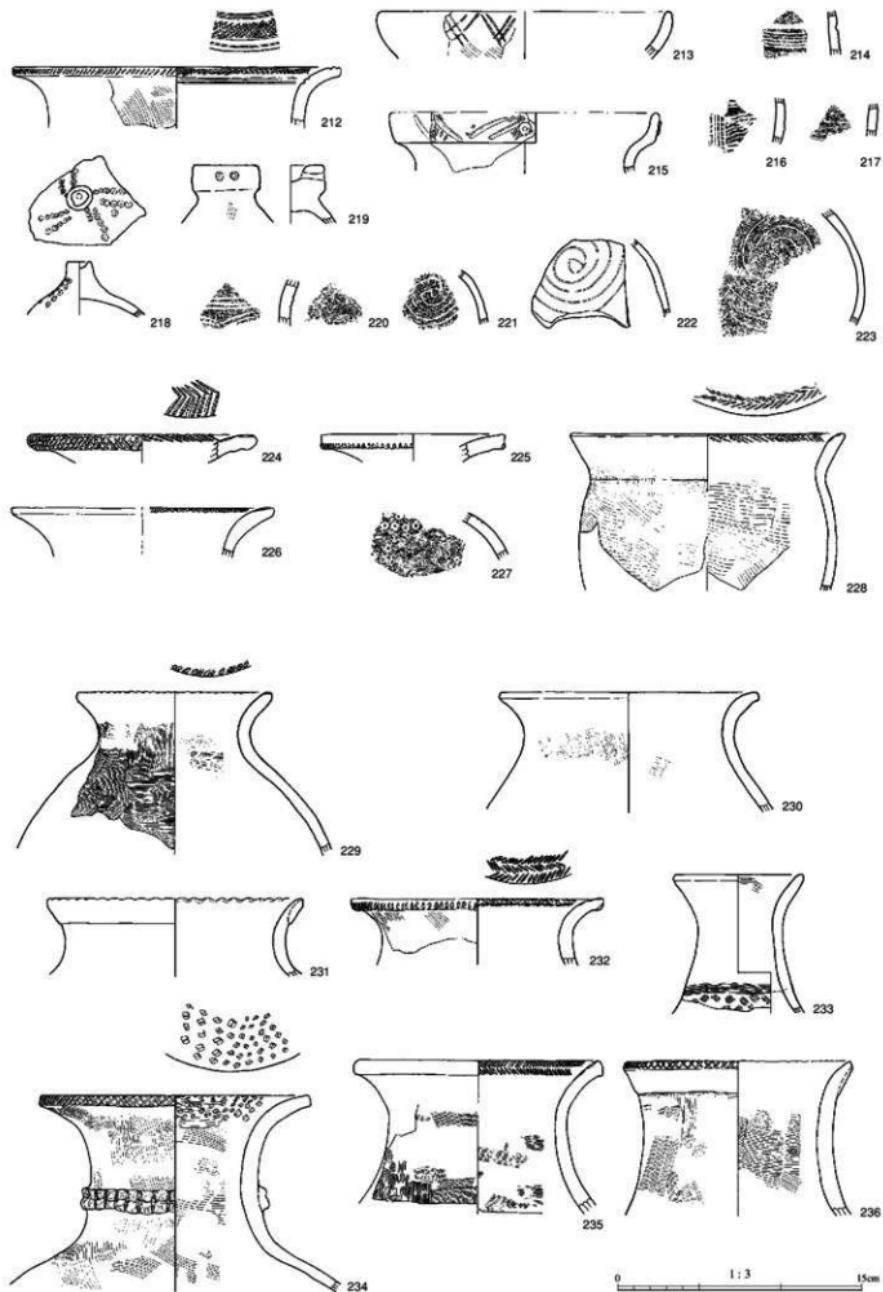
弥生土器実測図 11 中層 S X 111 (176~179)・S X 117 (180、181)  
下層 S B 110 (182~194)

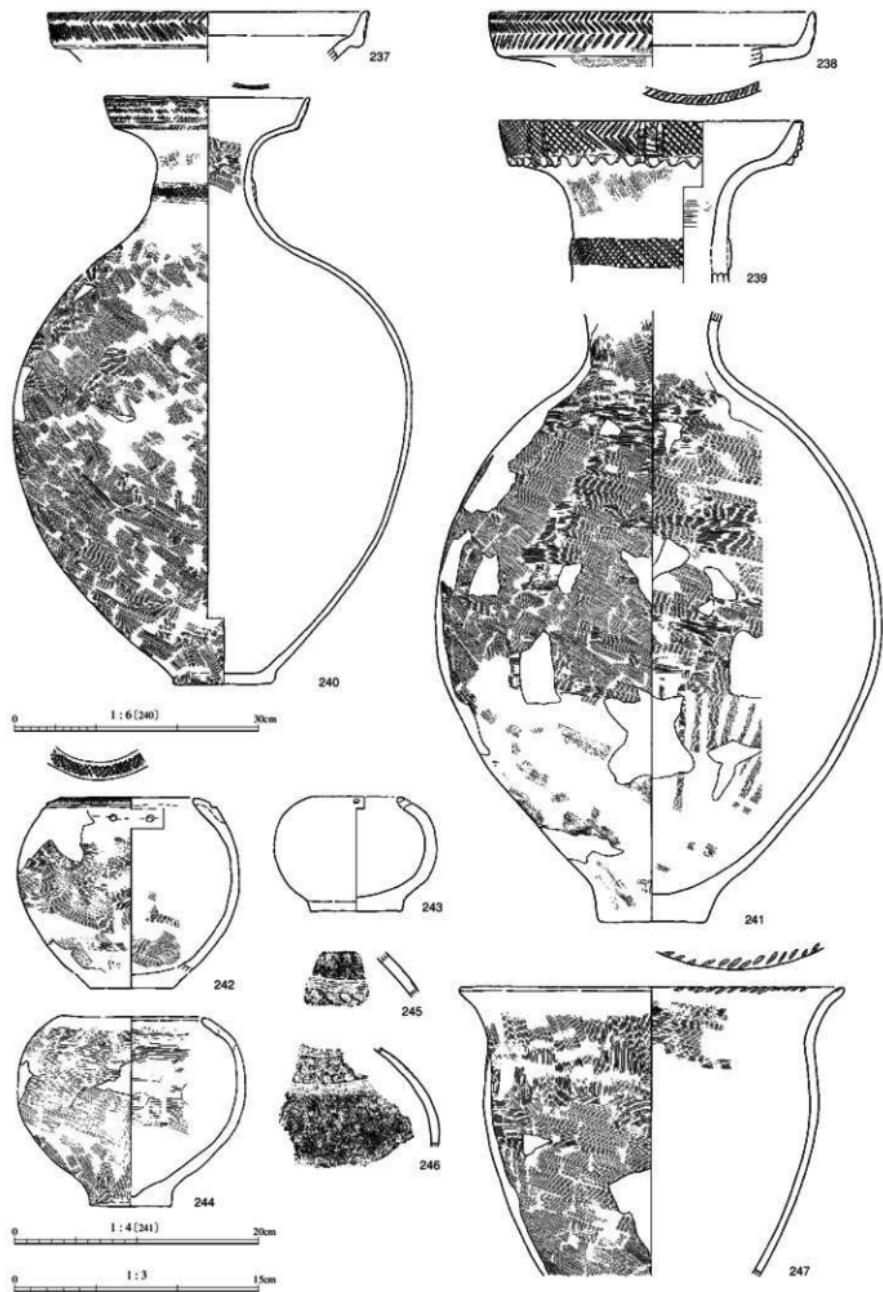
図版 43

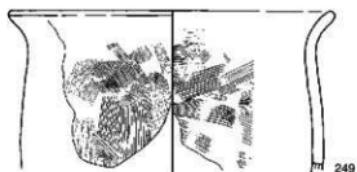




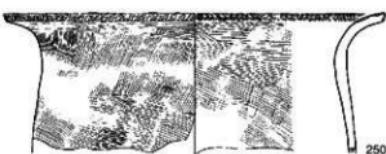
0 1:3 15cm







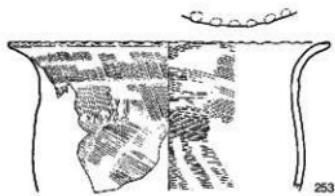
249



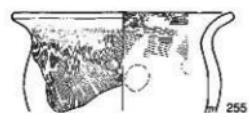
250



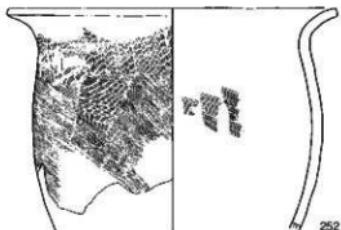
251



253



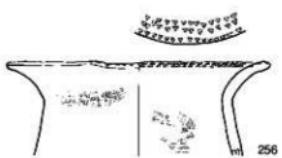
255



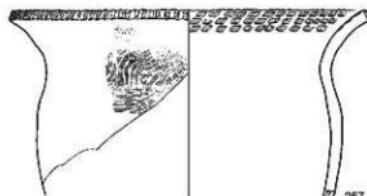
252



254



256



257

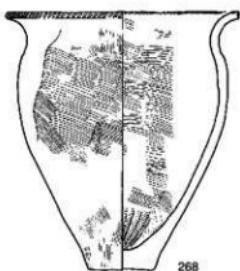
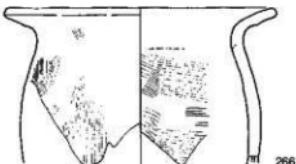
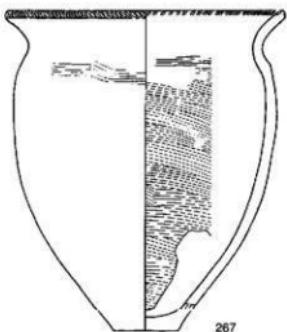
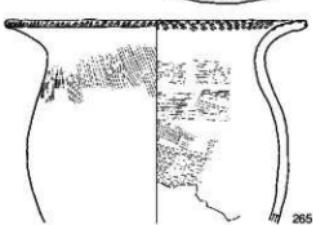
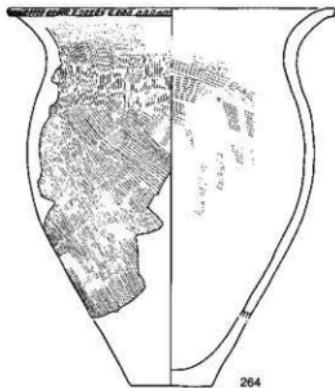
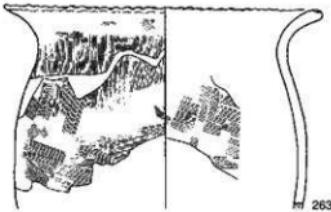
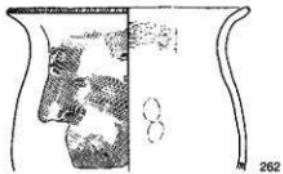
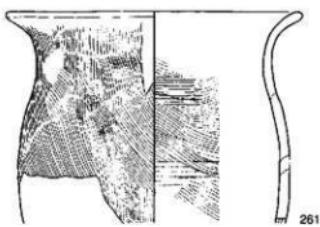
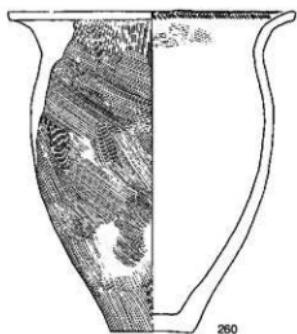


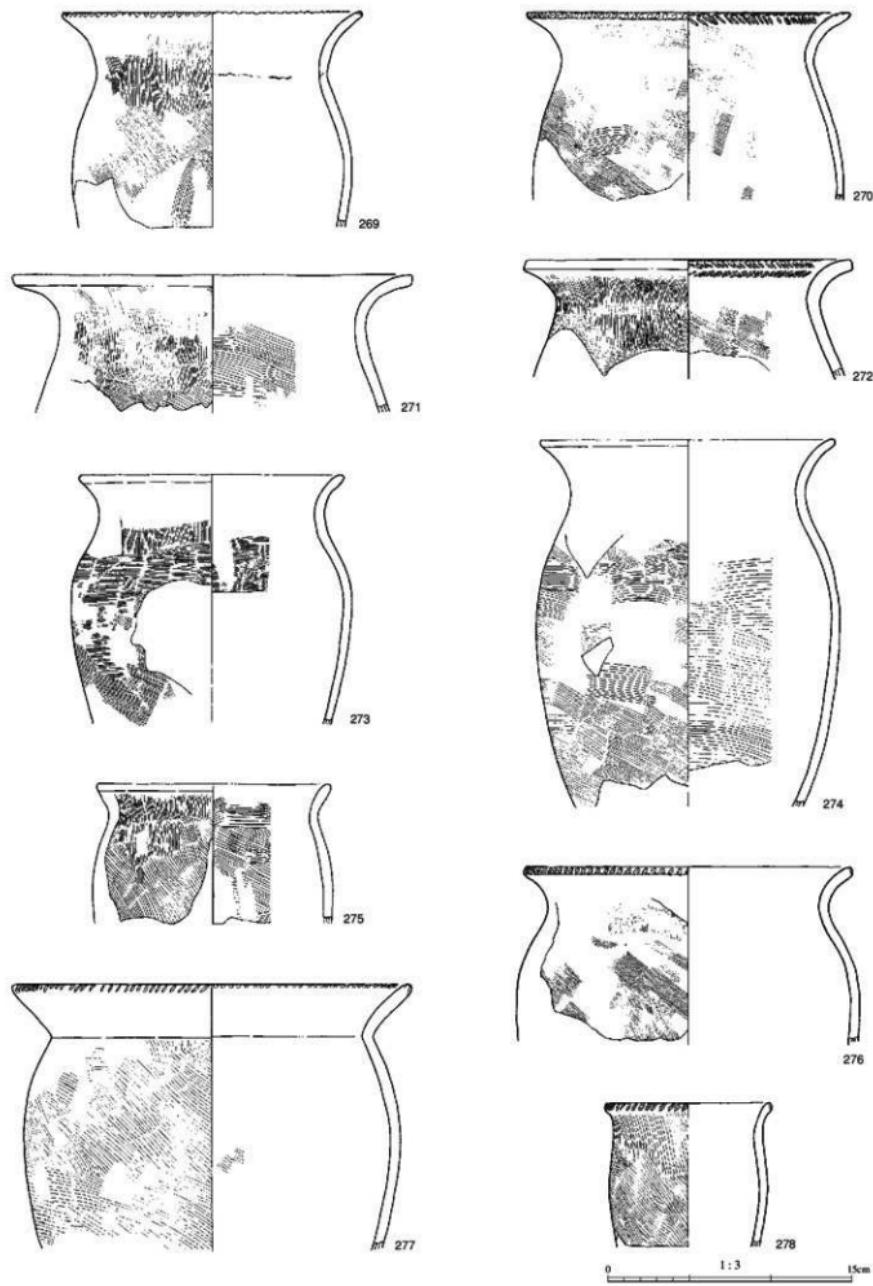
258

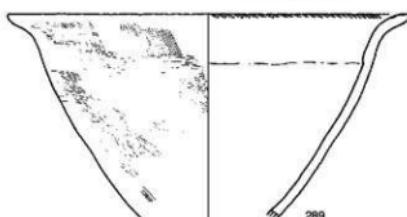
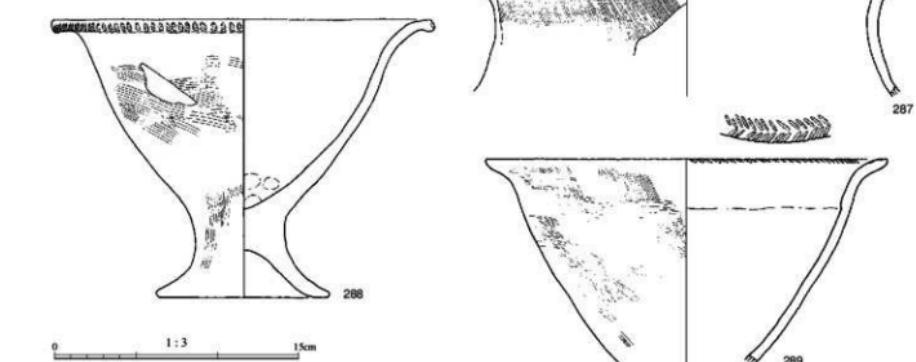
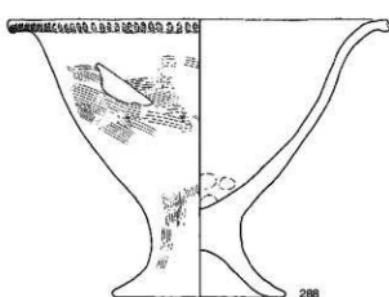
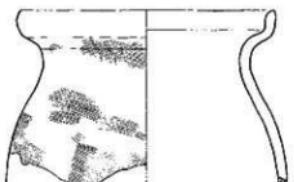
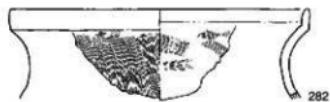
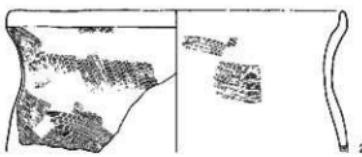
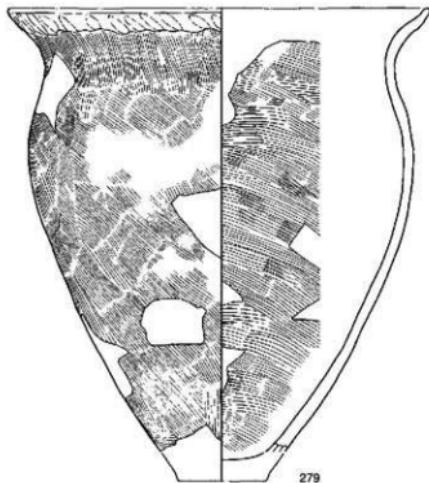


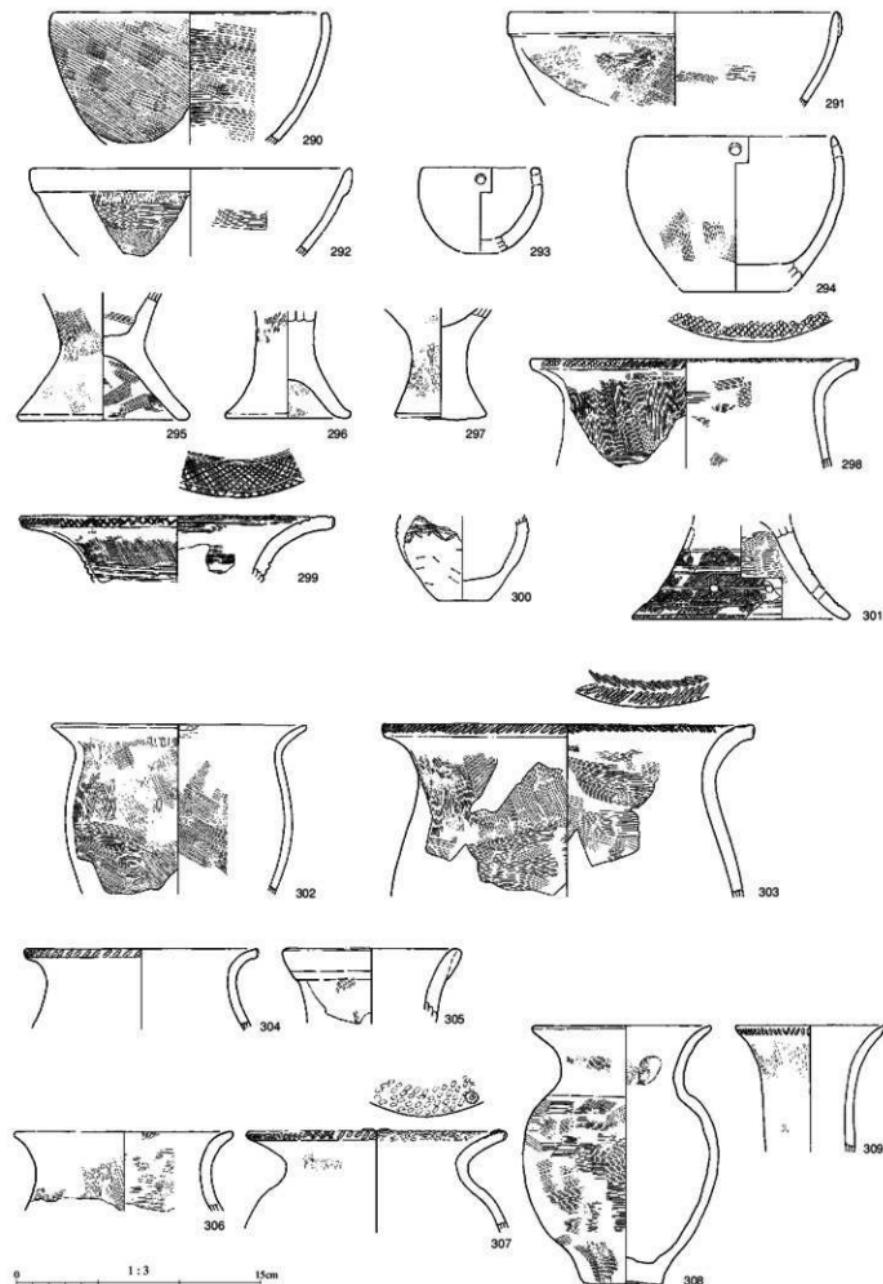
259

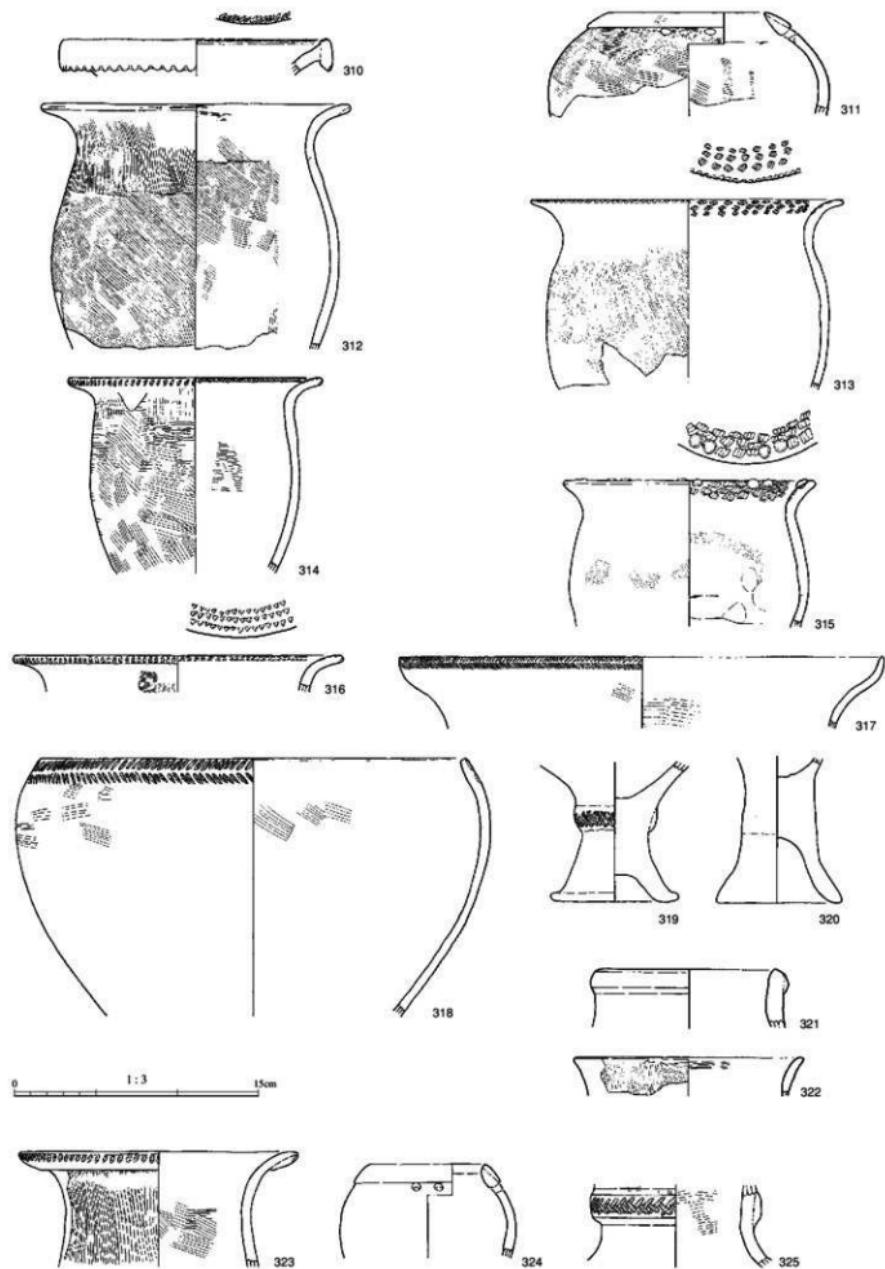
0 1:3 15cm

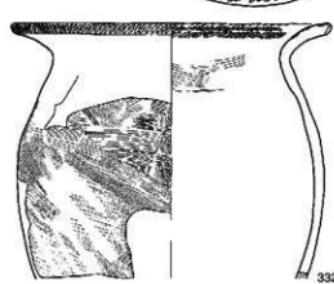
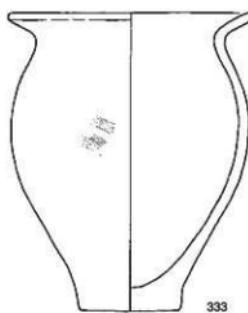
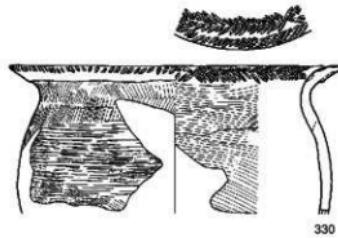
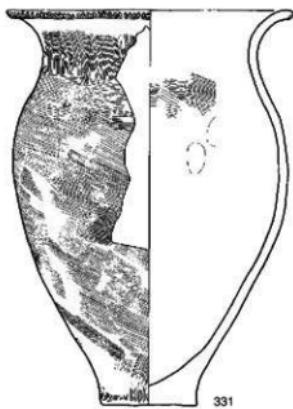
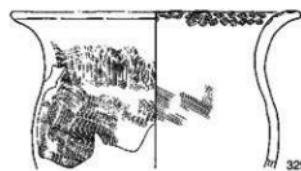
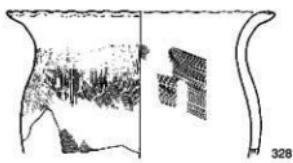
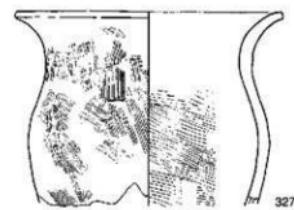
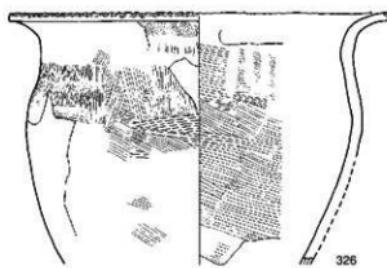


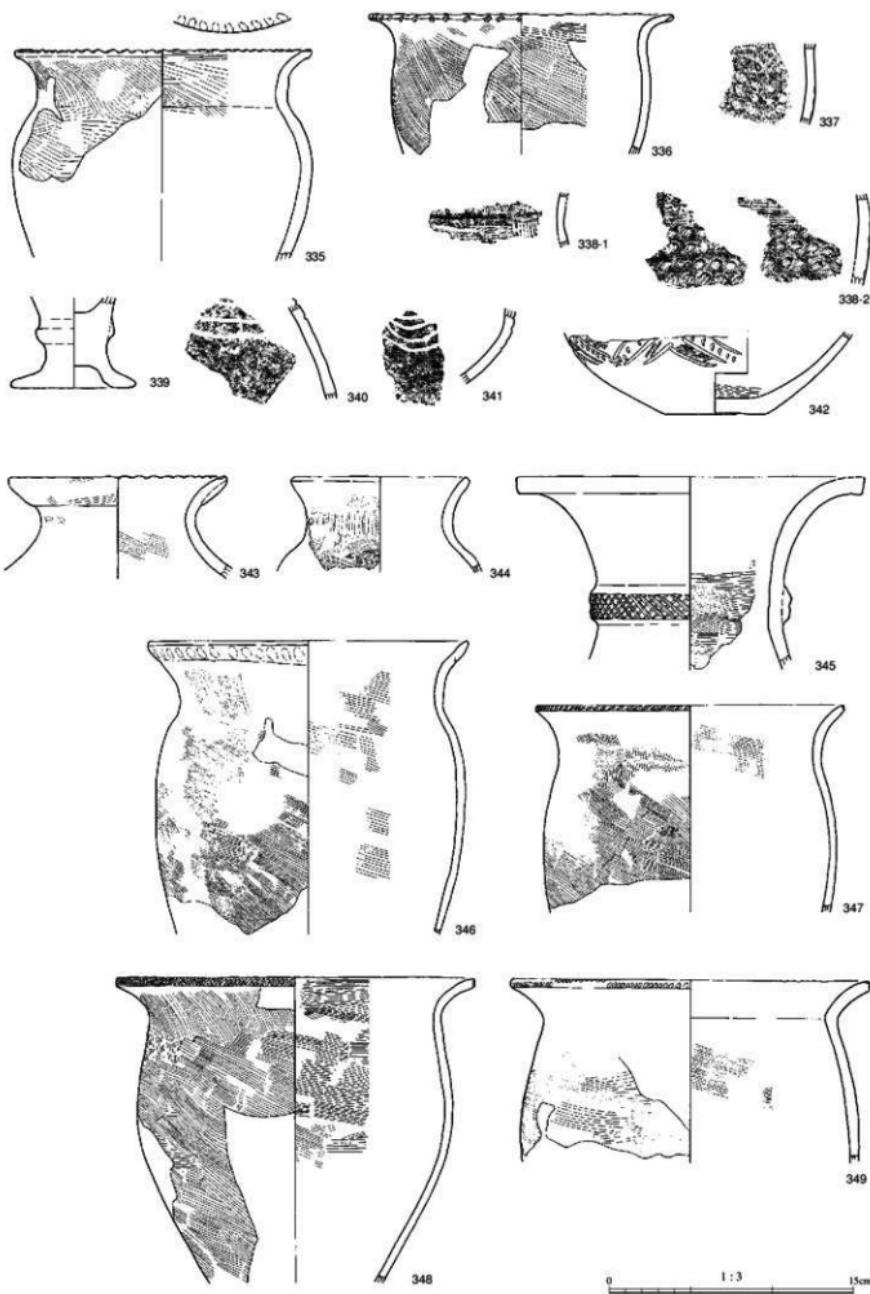


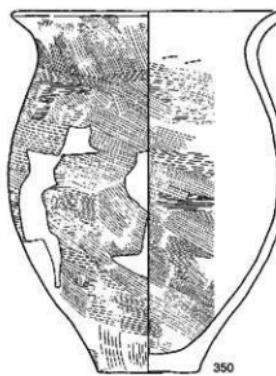








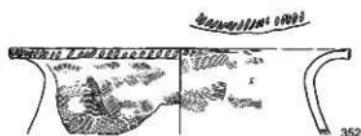




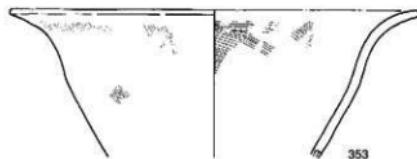
350



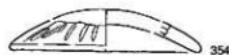
351



352



353

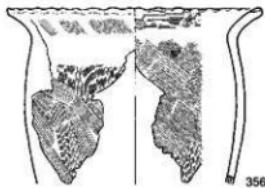


354



355

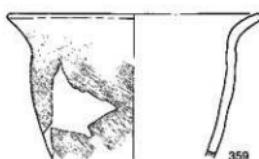
0 1:3 15cm



356



357



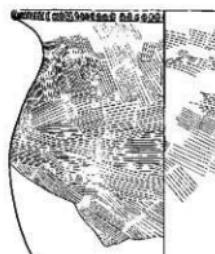
358



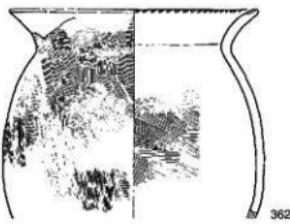
359



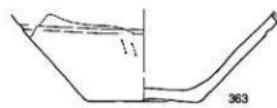
360



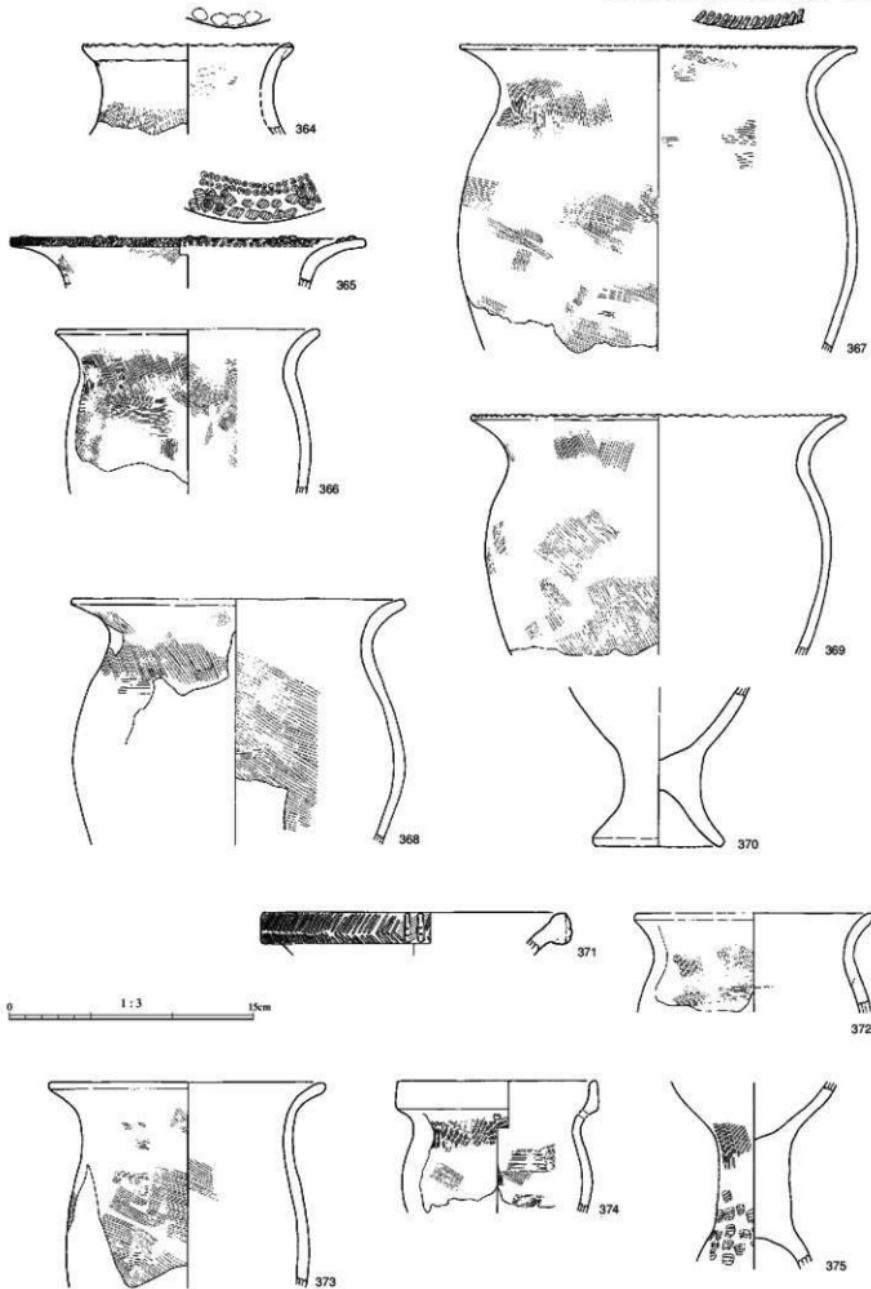
361



362

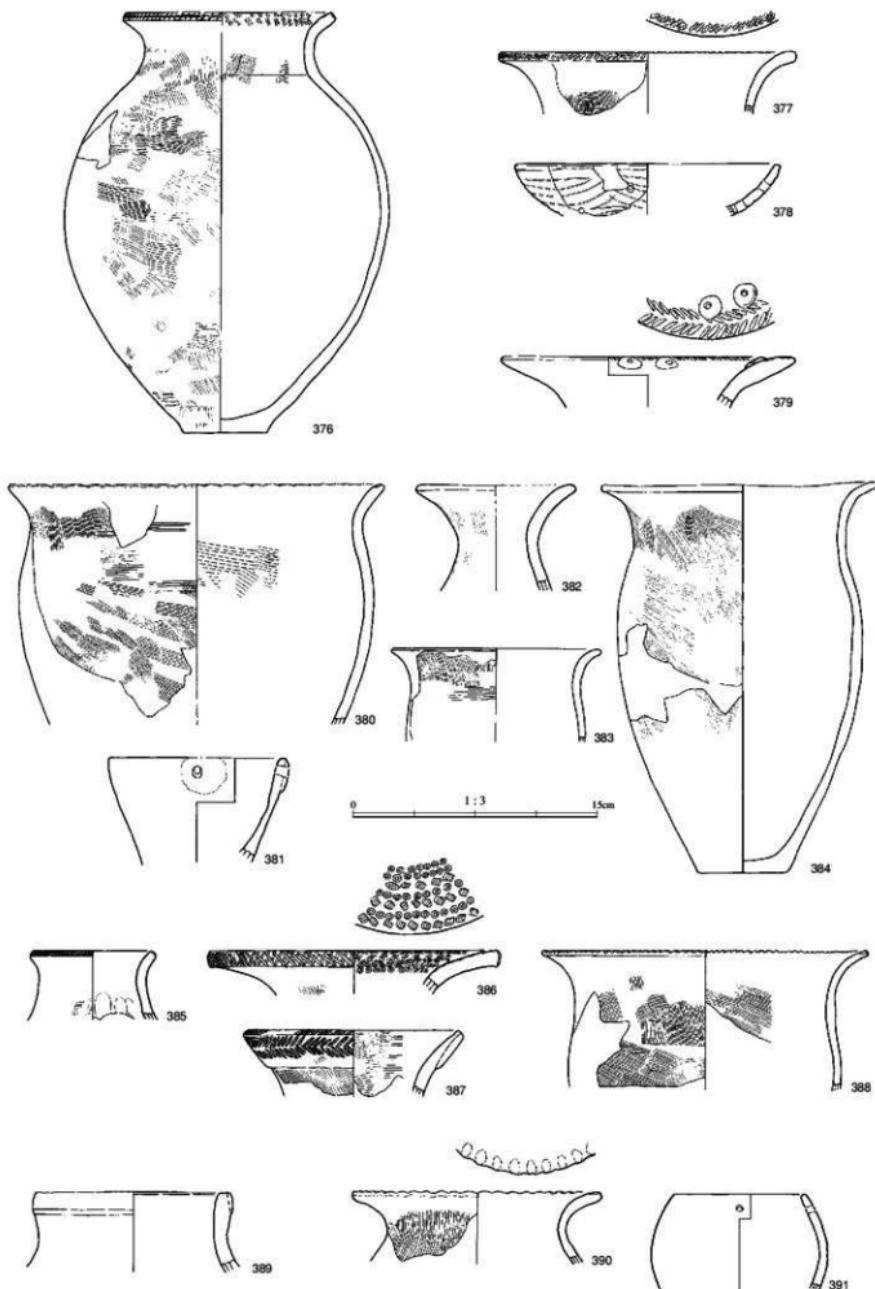


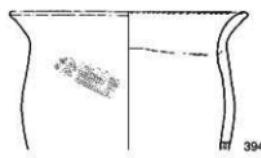
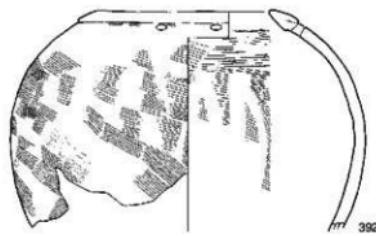
363



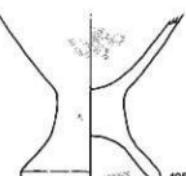
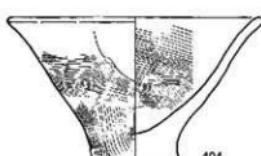
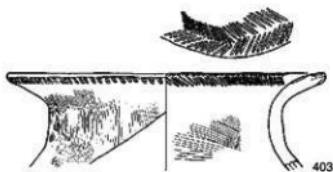
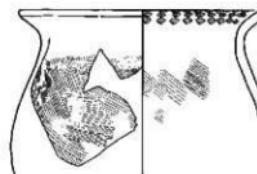
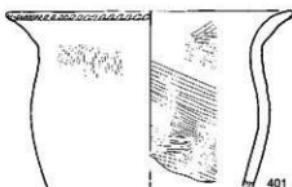
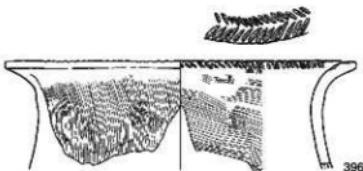
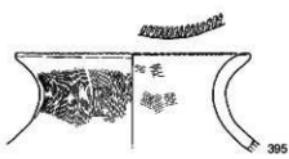
弥生土器実測図 25 下層 SK 139 (376~378)・SK 141 (379)・SK 142 (380~382)・SK 144 (383、384)  
SK 145 (385~388)・SK 146 (389)・SK 147 (390、391)

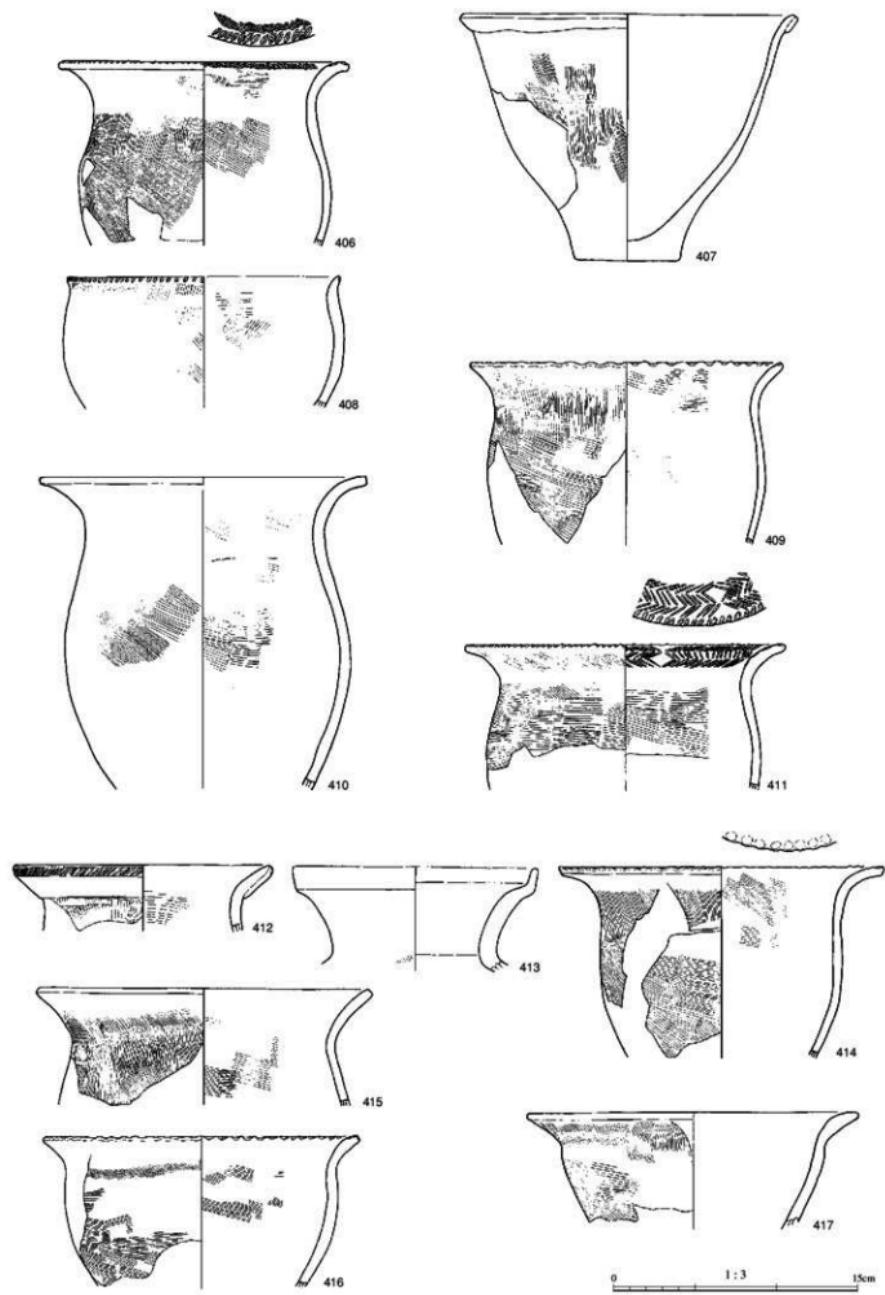
図版 57

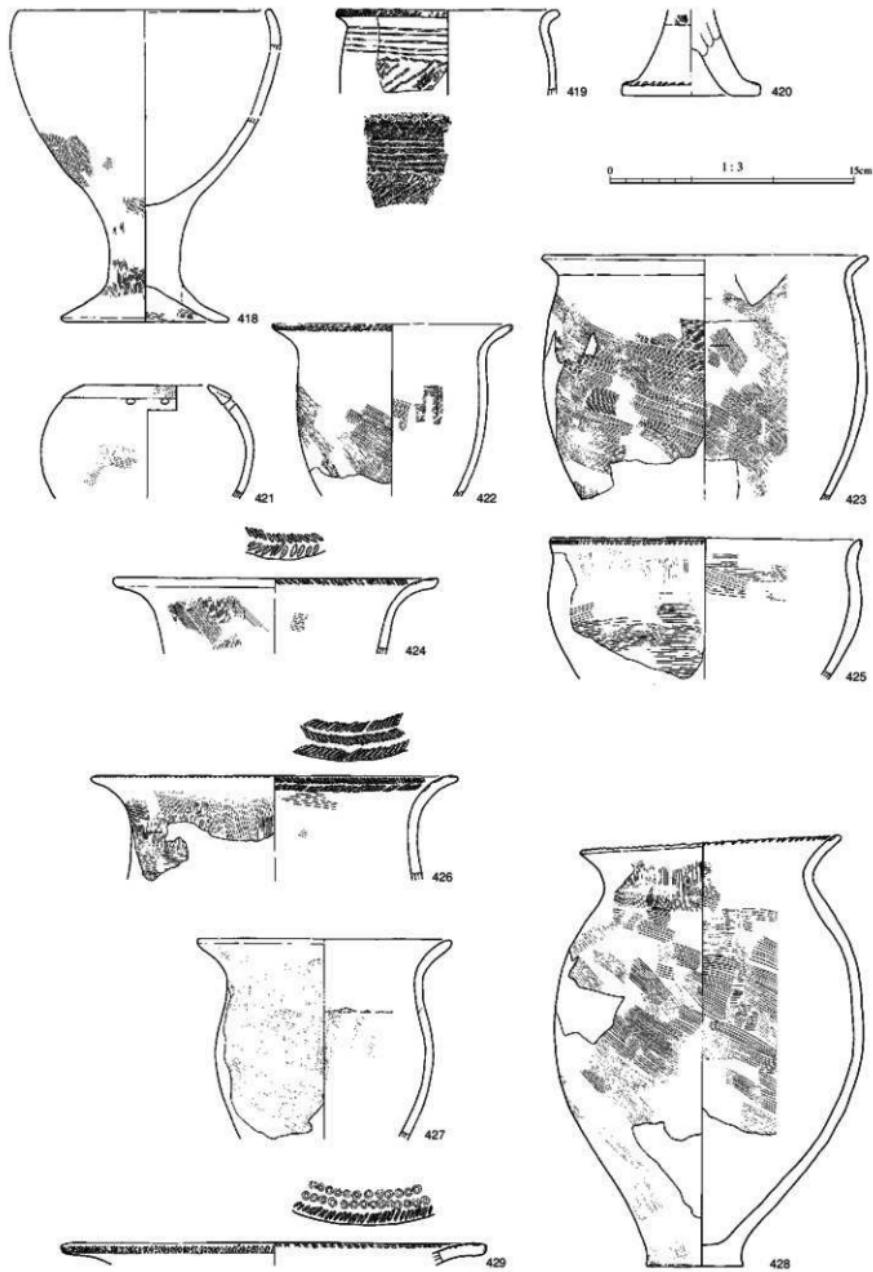


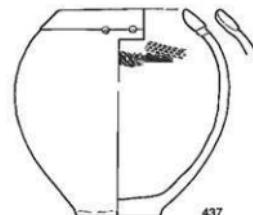
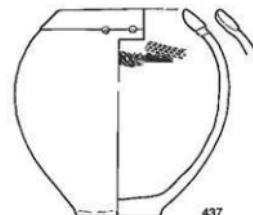
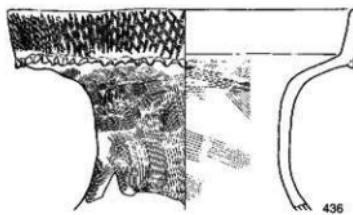
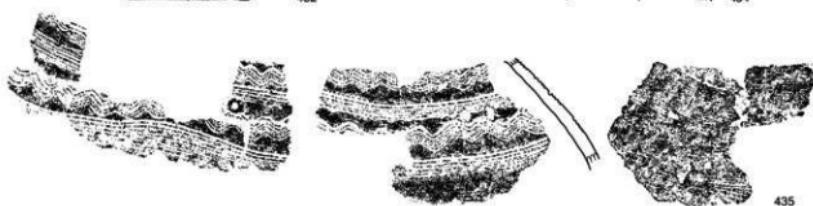
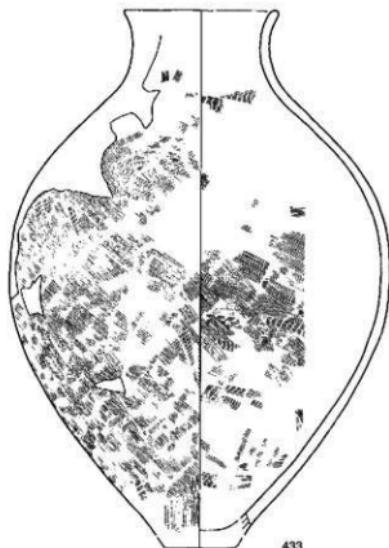


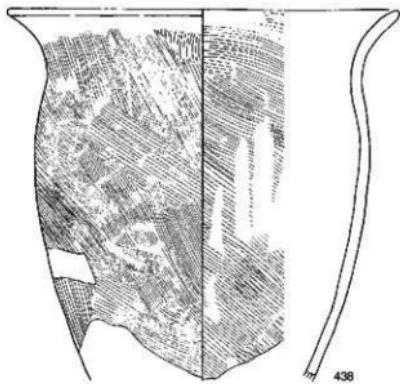
0 1 : 3 15cm



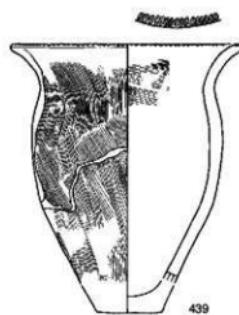




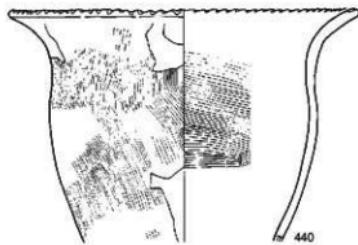




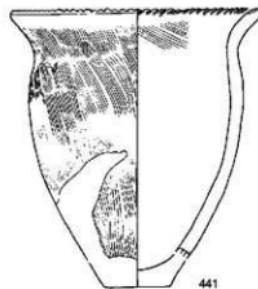
438



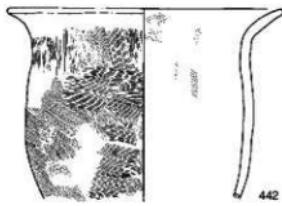
439



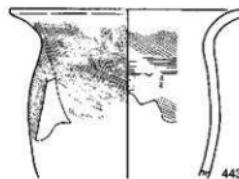
440



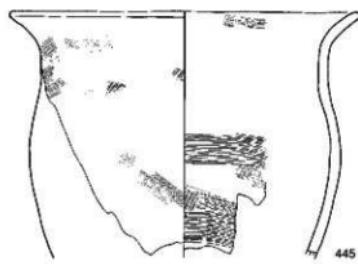
441



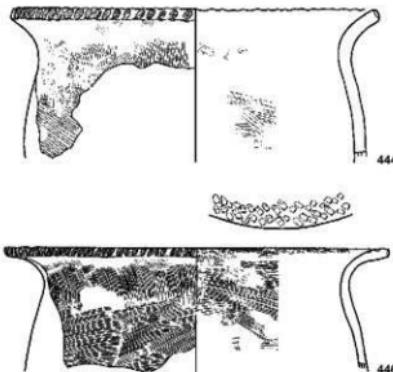
442



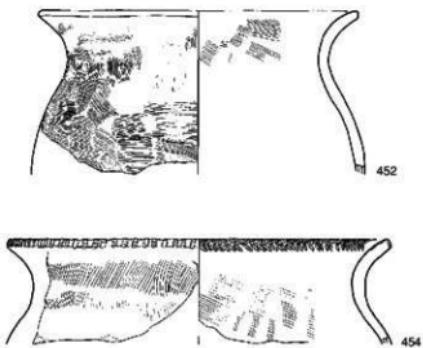
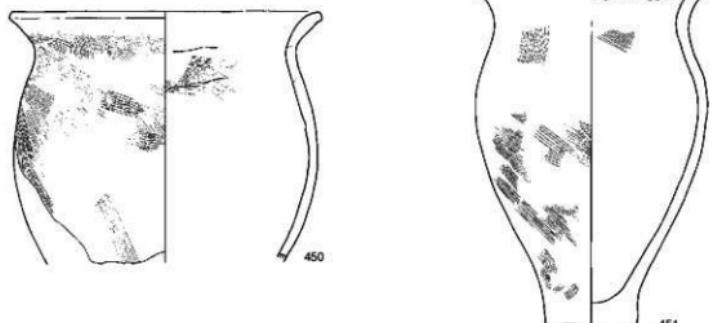
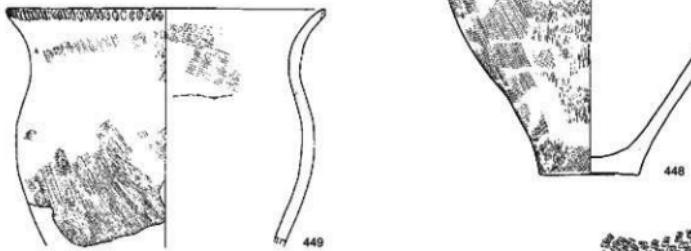
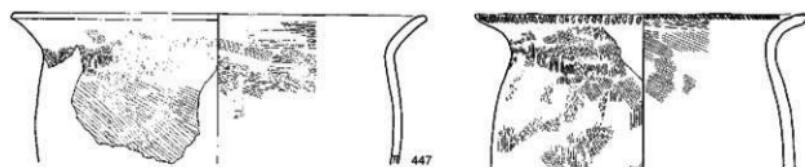
443



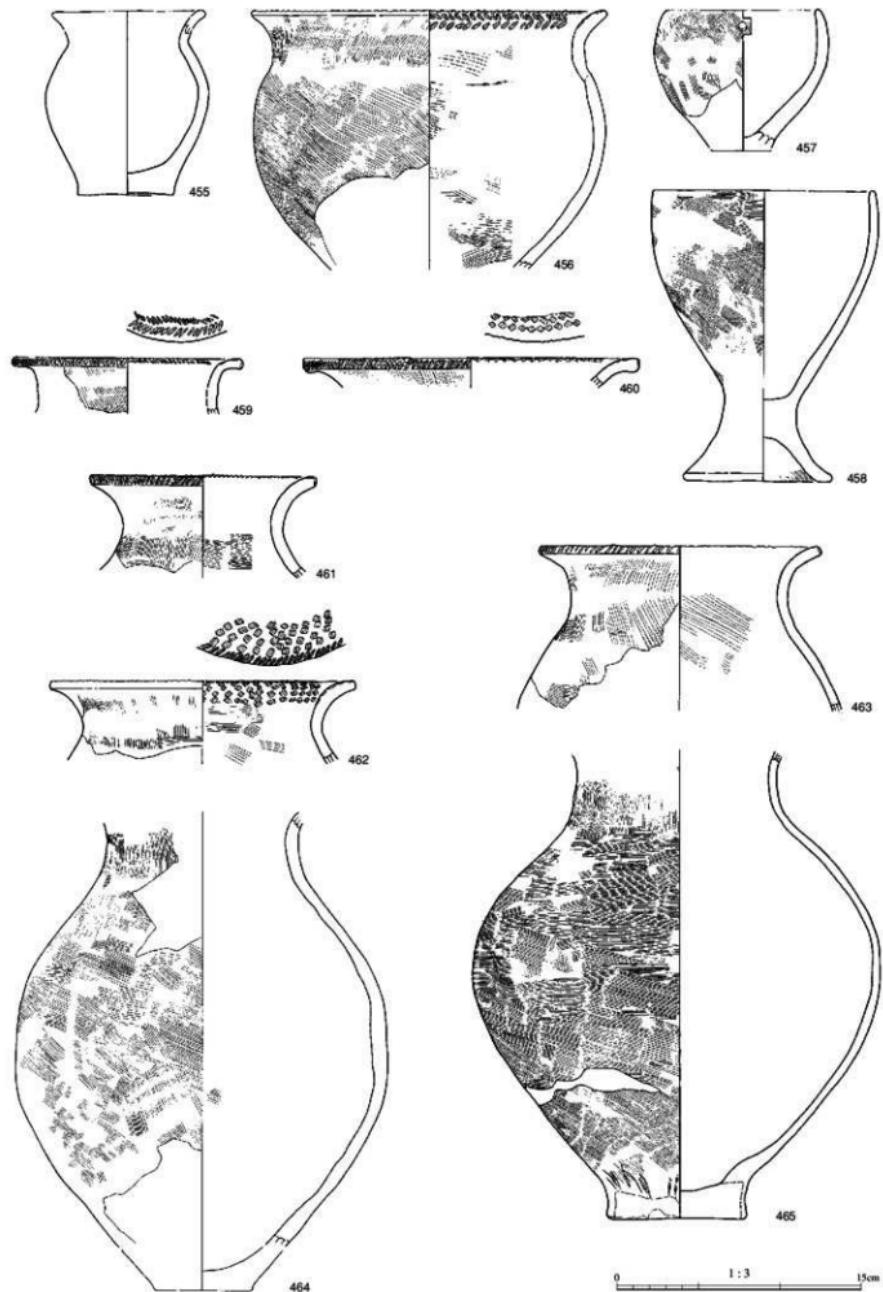
445

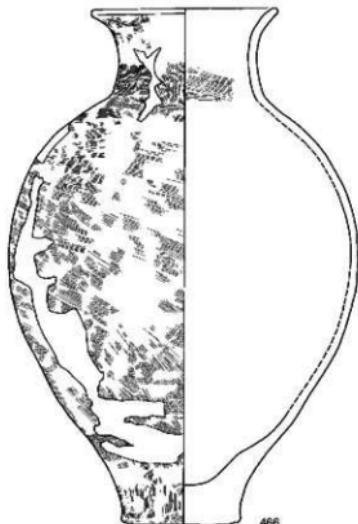


446

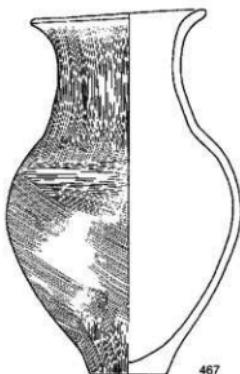


0 1:3 15cm

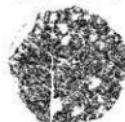




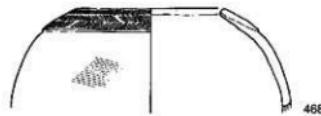
466



467



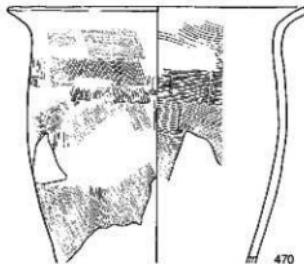
0 1 : 4 (467) 20cm



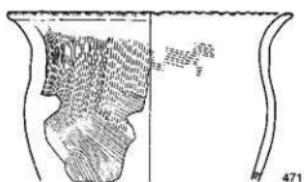
468



469

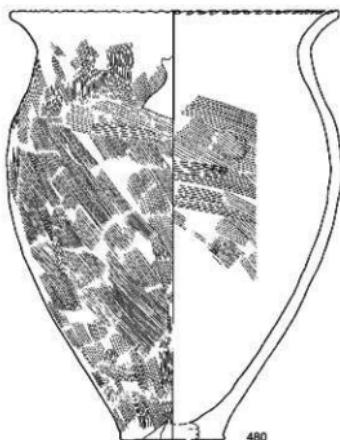
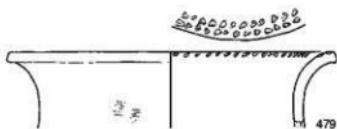
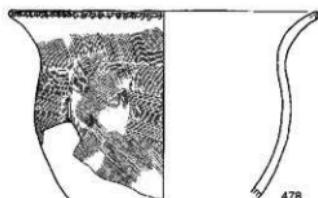
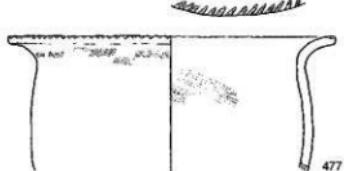
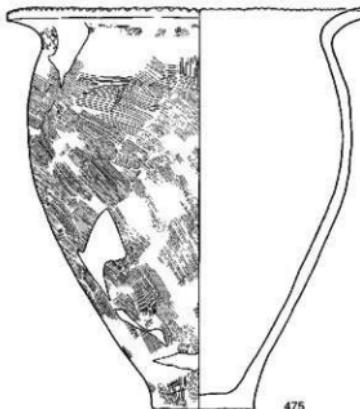
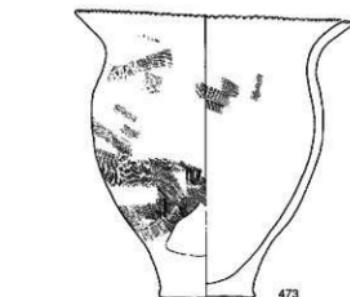
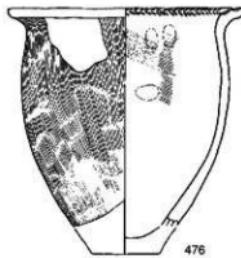
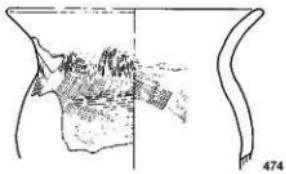


470

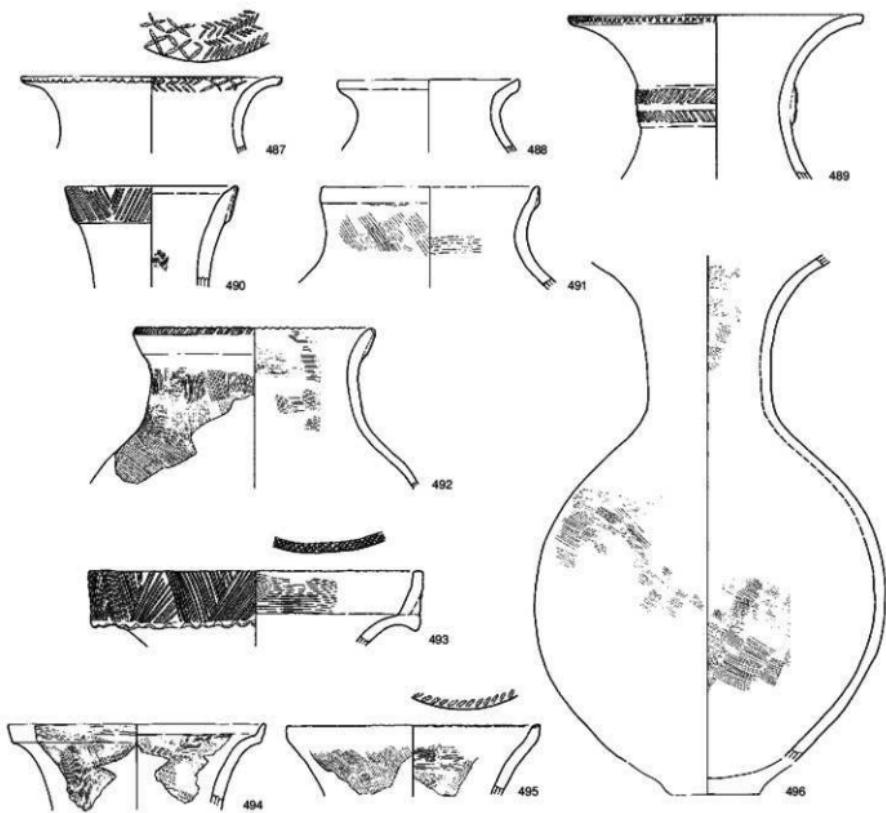
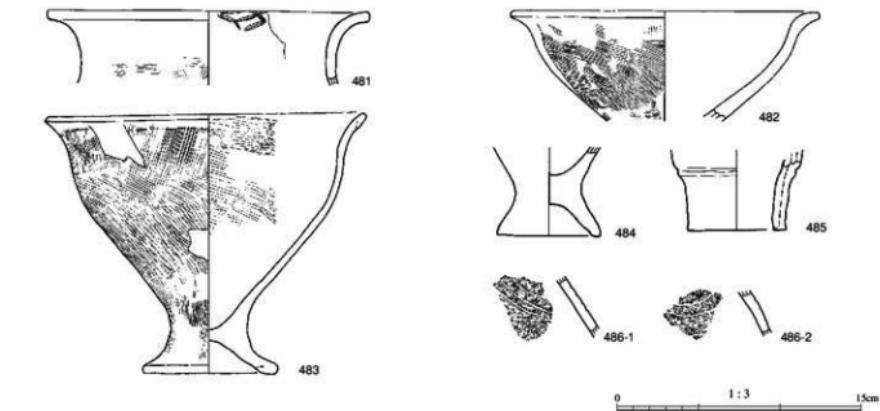


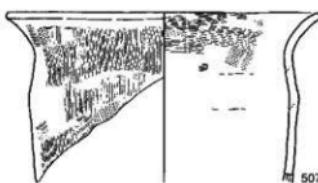
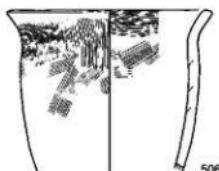
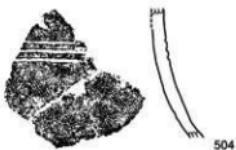
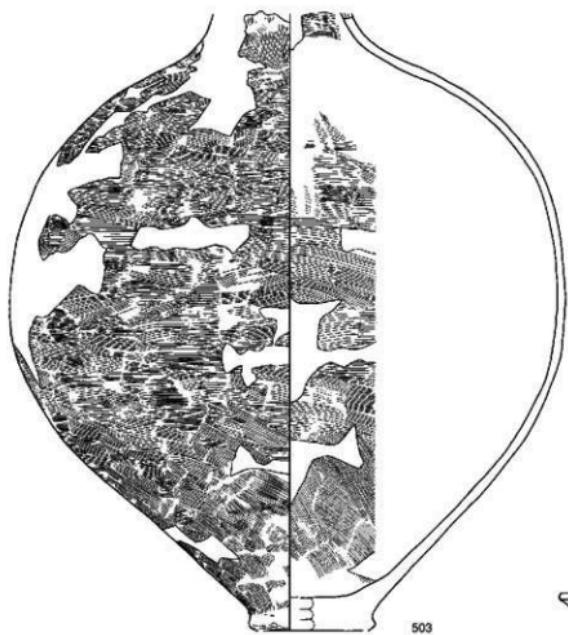
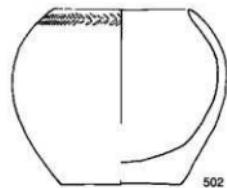
471

0 1 : 3 15cm



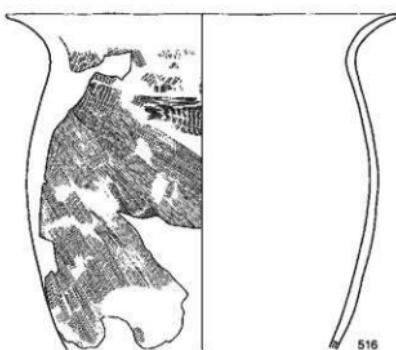
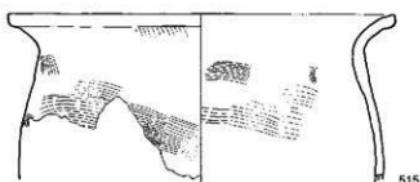
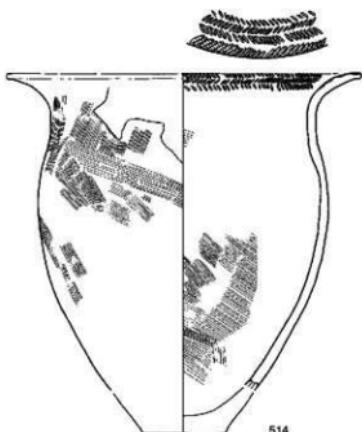
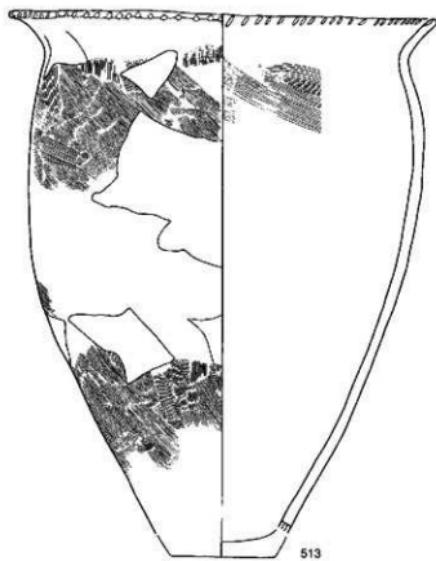
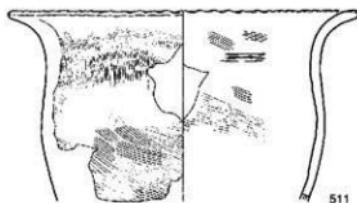
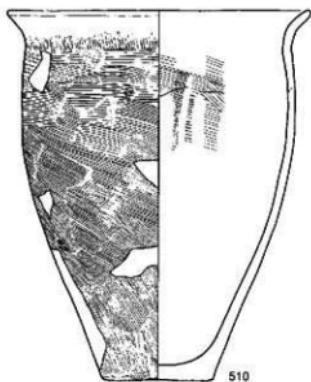
0 1 : 3 15cm

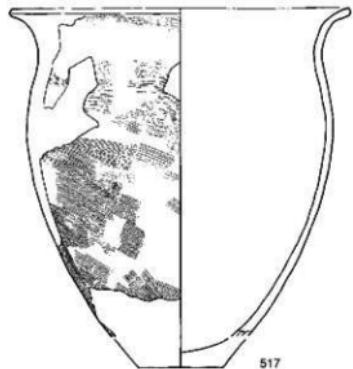




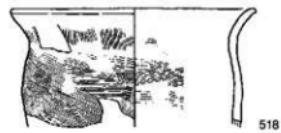
1 : 4 (503) 20cm

1 : 3 15cm

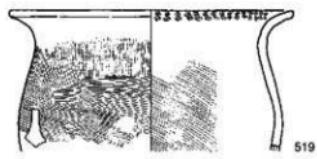




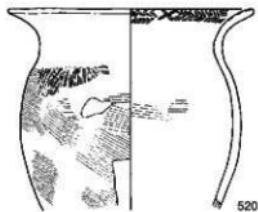
517



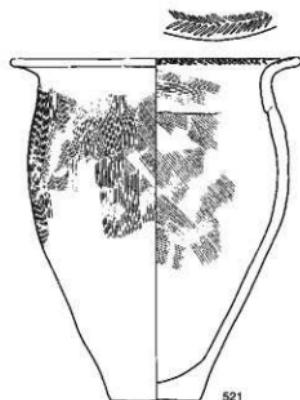
518



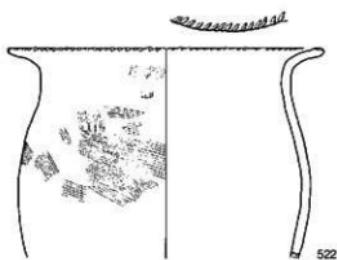
519



520



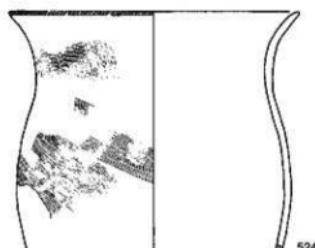
521



522



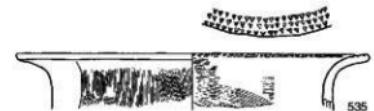
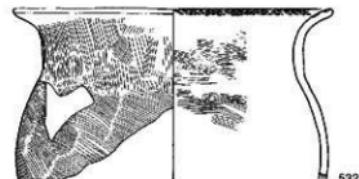
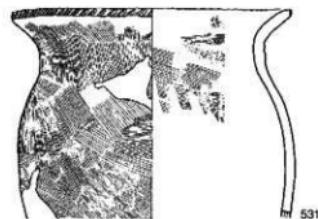
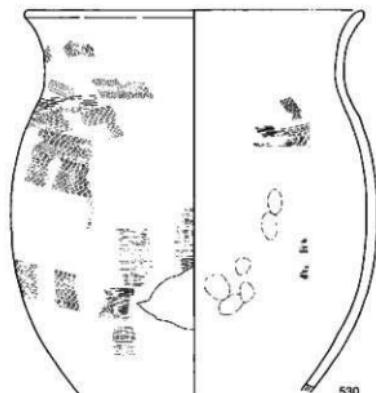
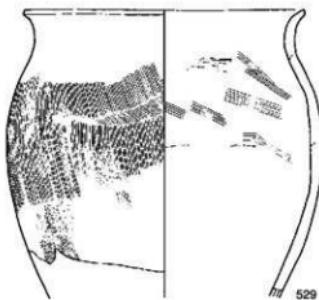
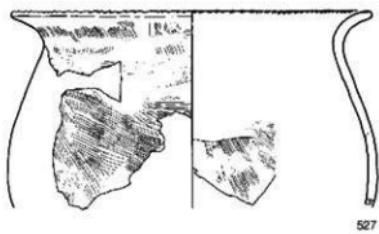
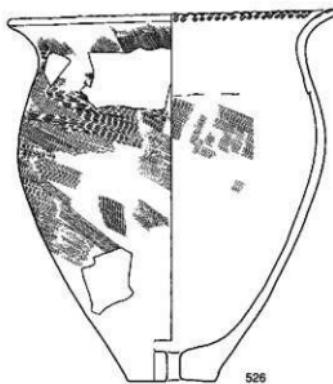
523

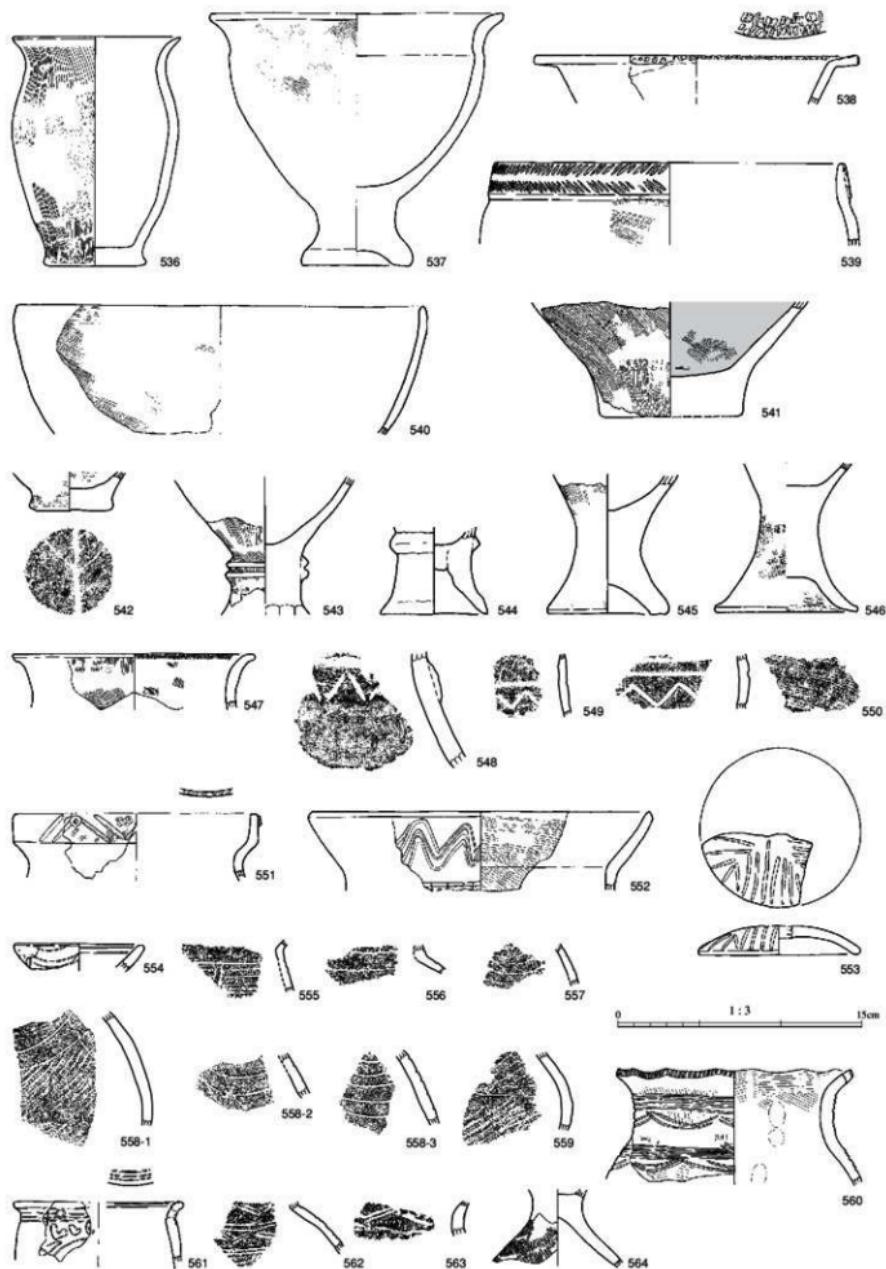


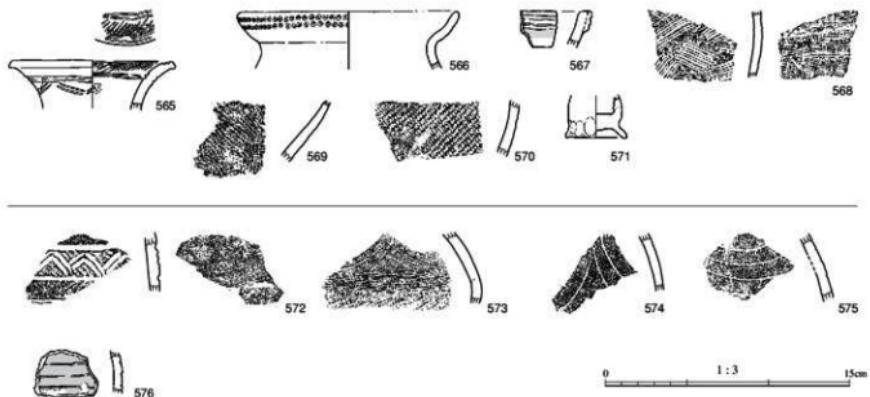
524



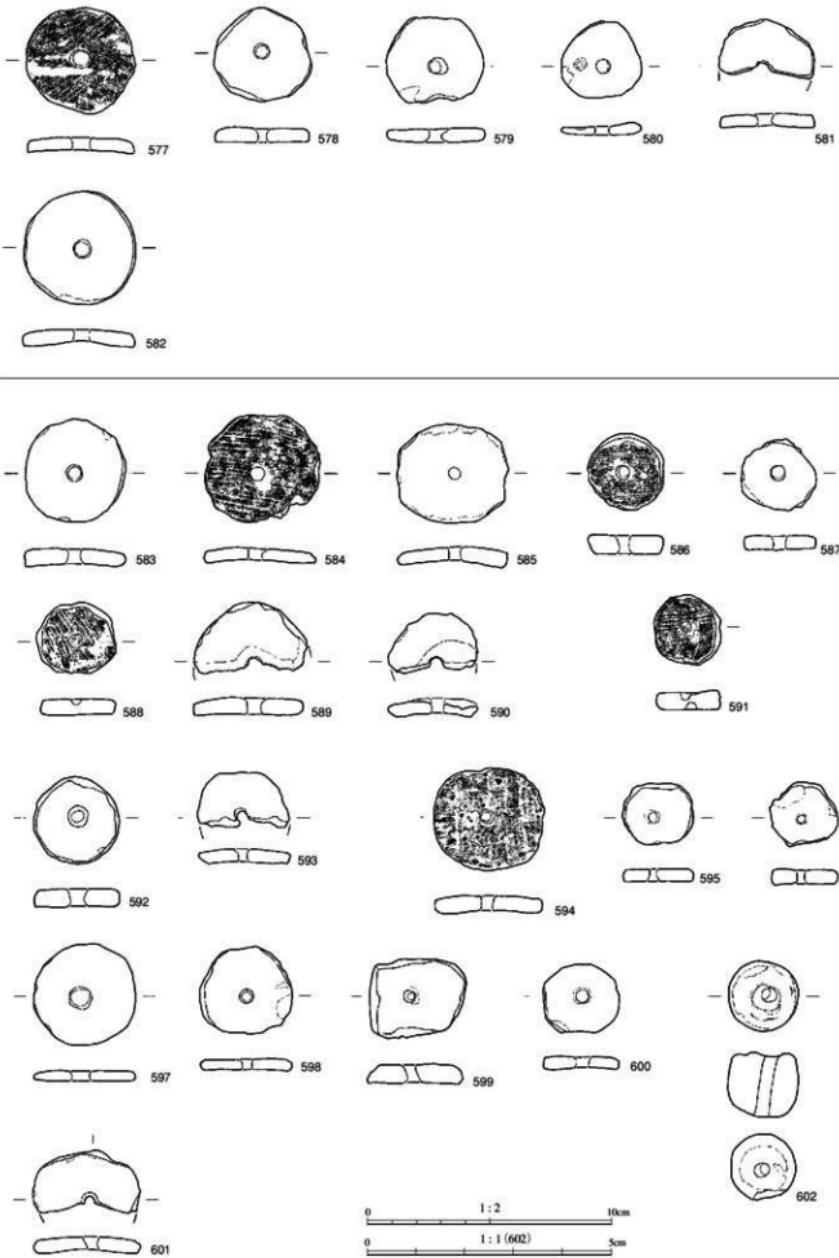
525

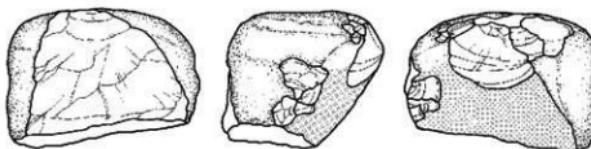




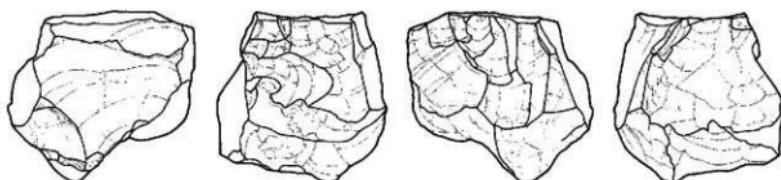


土製品実測図 上層 S D 13 (577～581)・S D 23 (582)  
 下層 S B 110 (583～590)・S D 112 (591)・S D 114 (592、593)  
 S D 115 (594～596)・包含層 (597～601)・S B 115 (602)

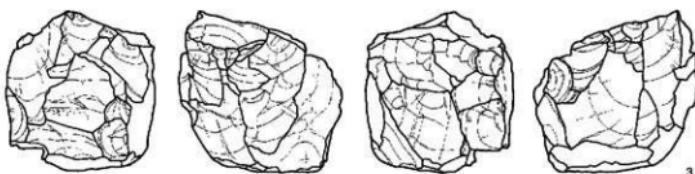
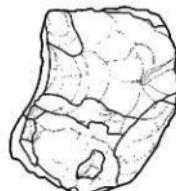




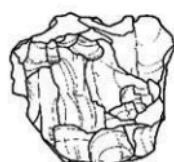
1  
組1



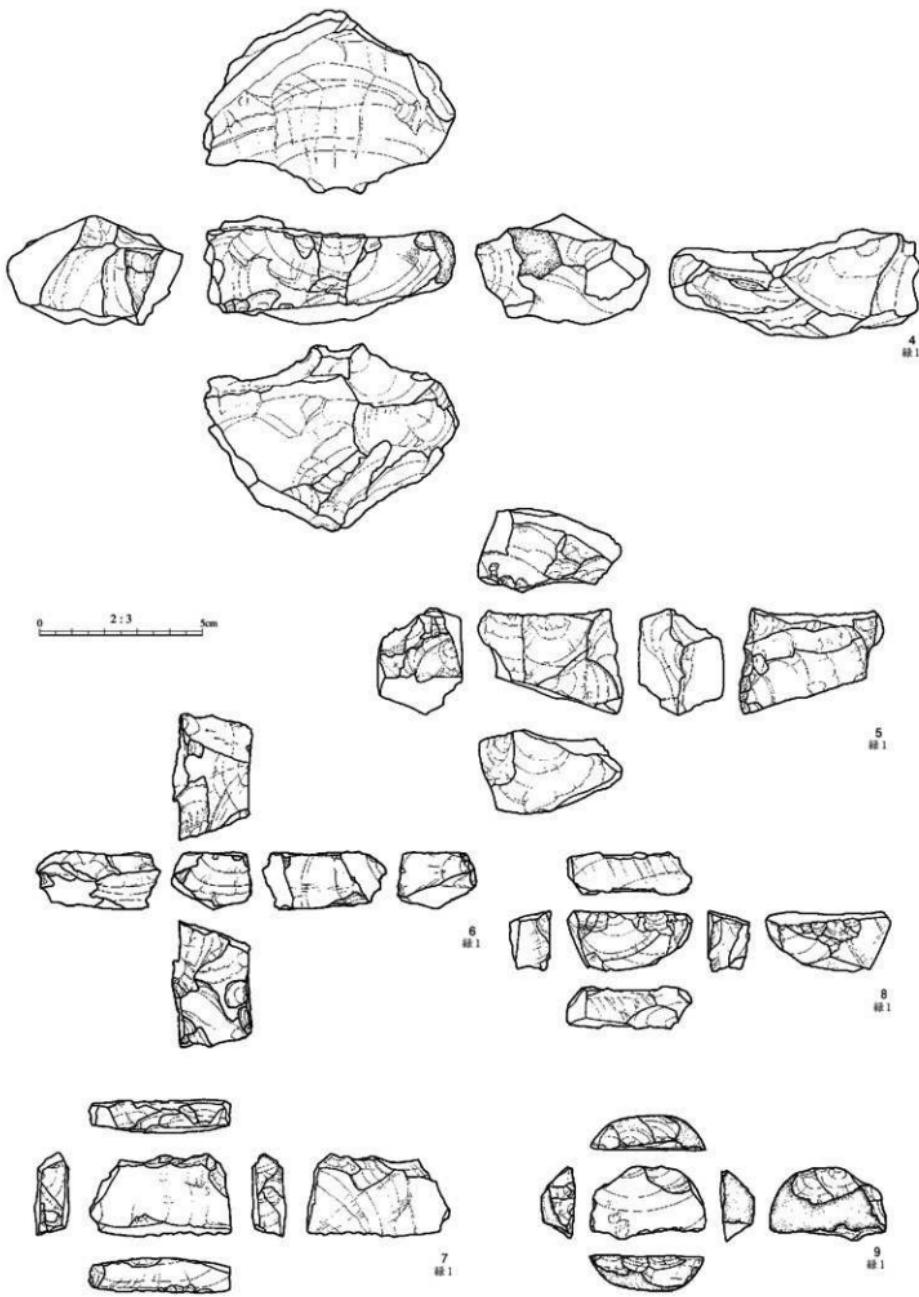
2  
組1

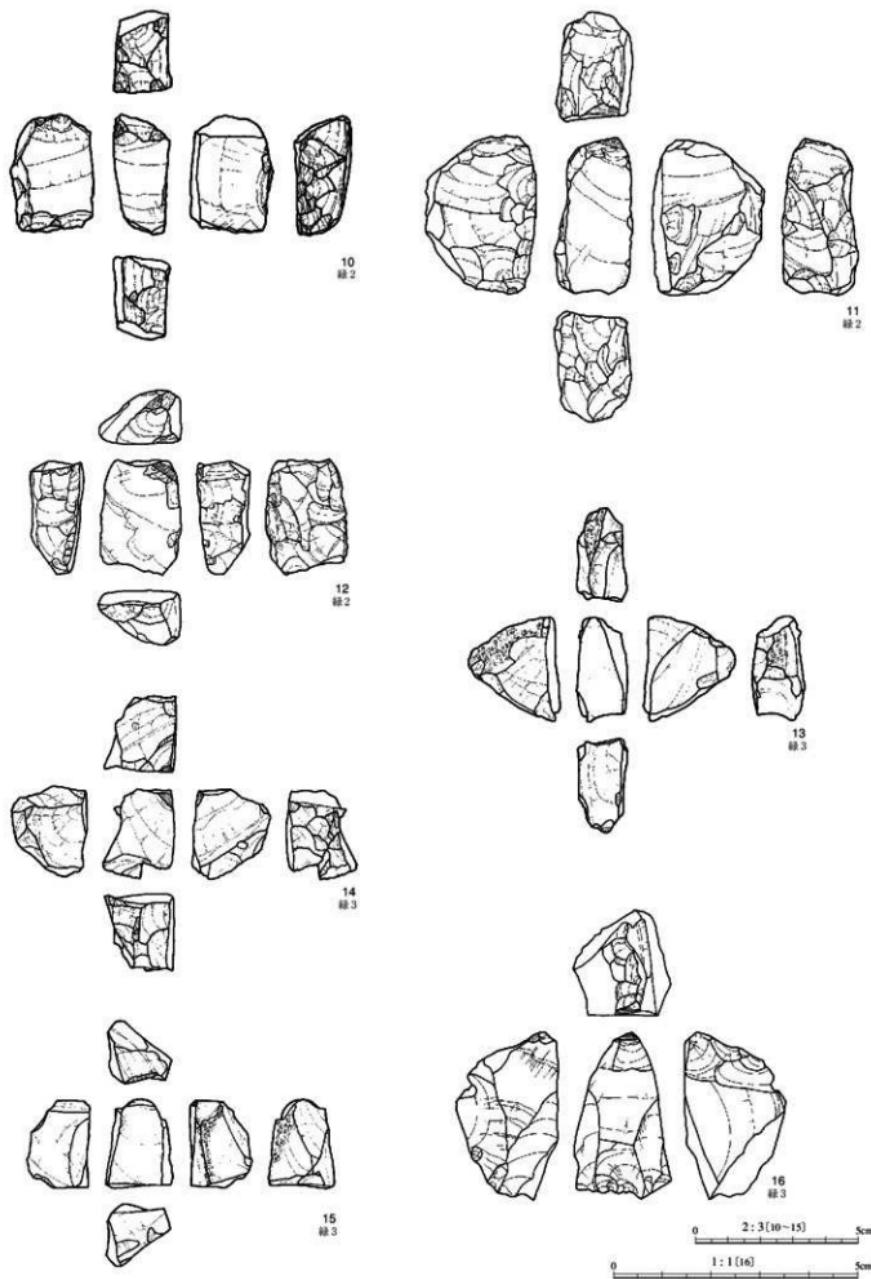


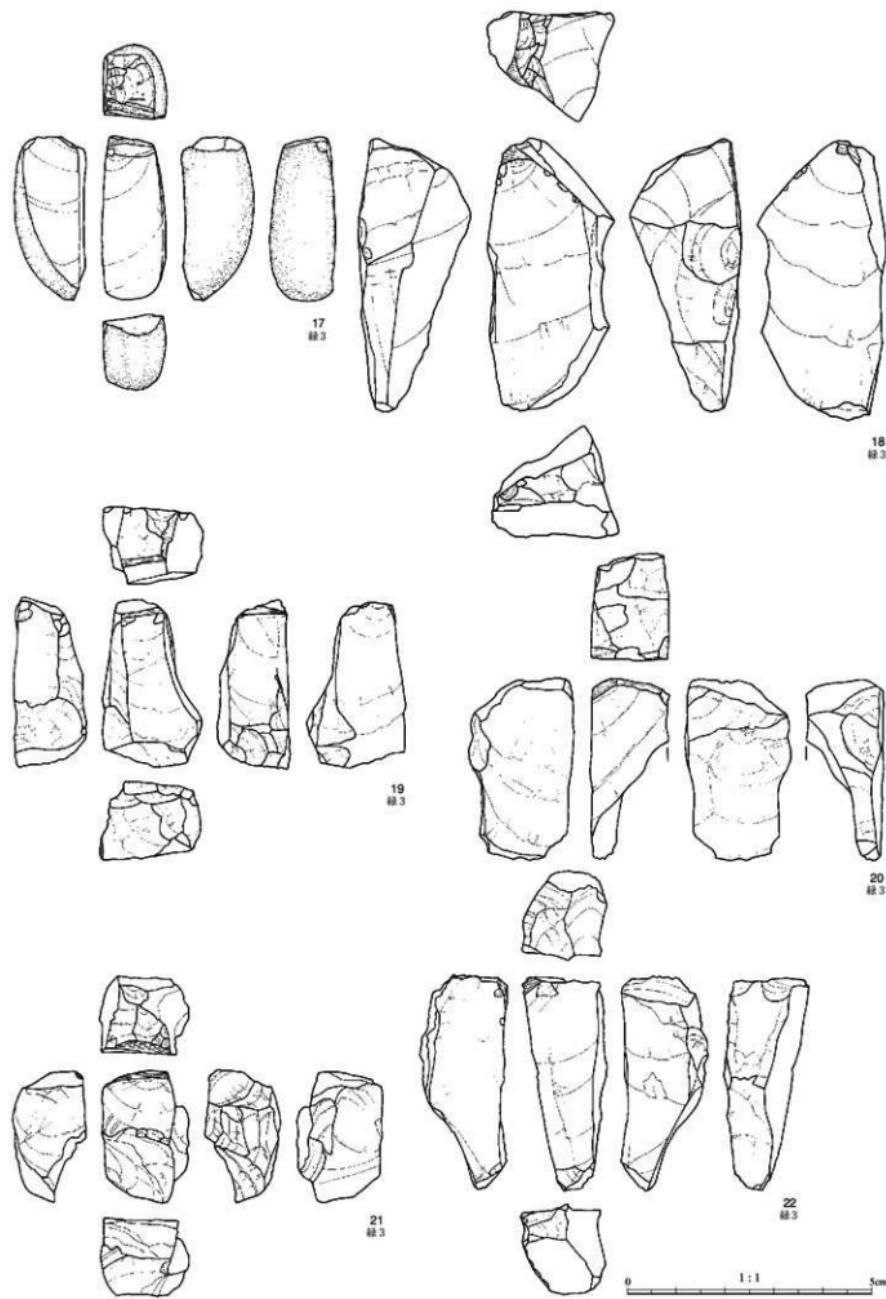
3  
組1

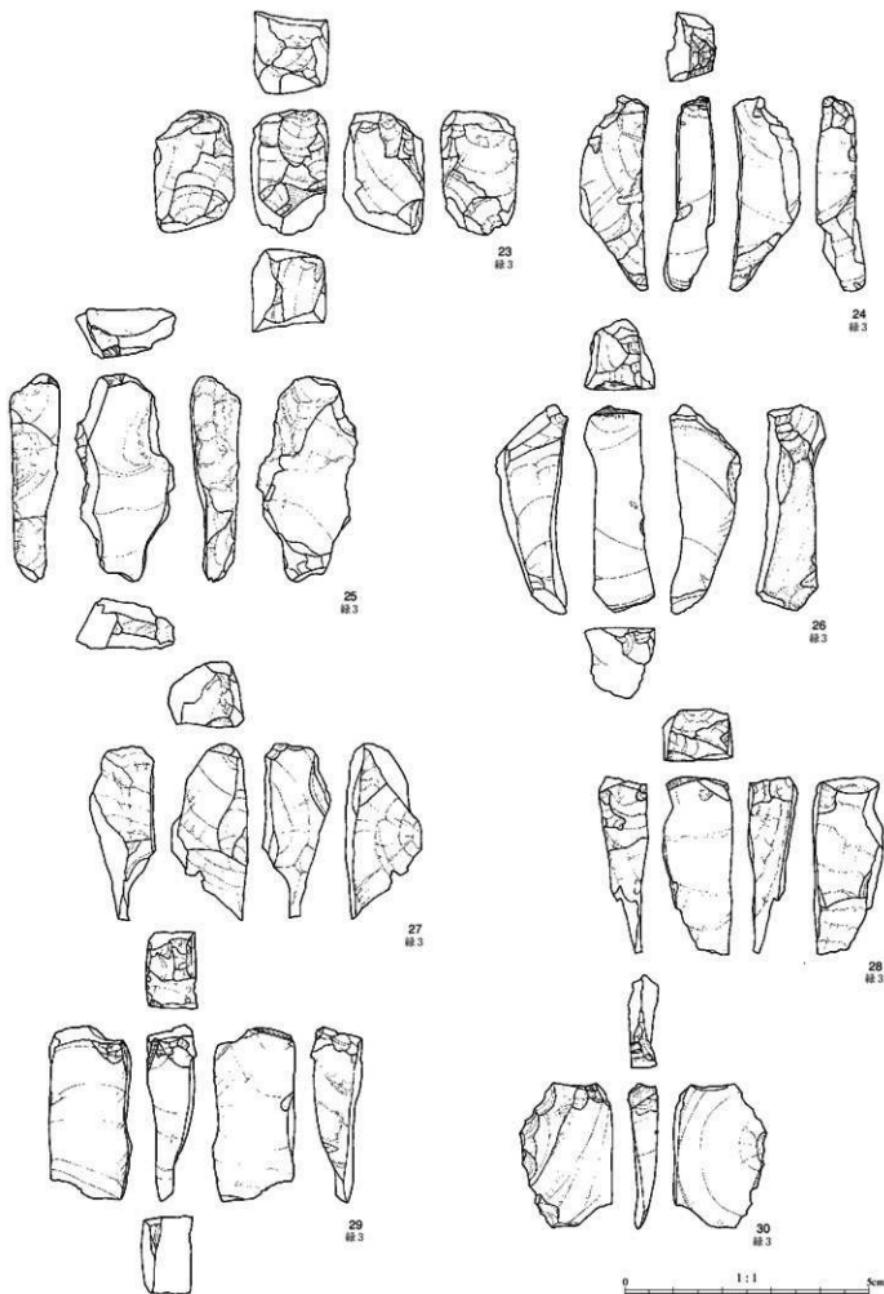


0 2:3 5cm



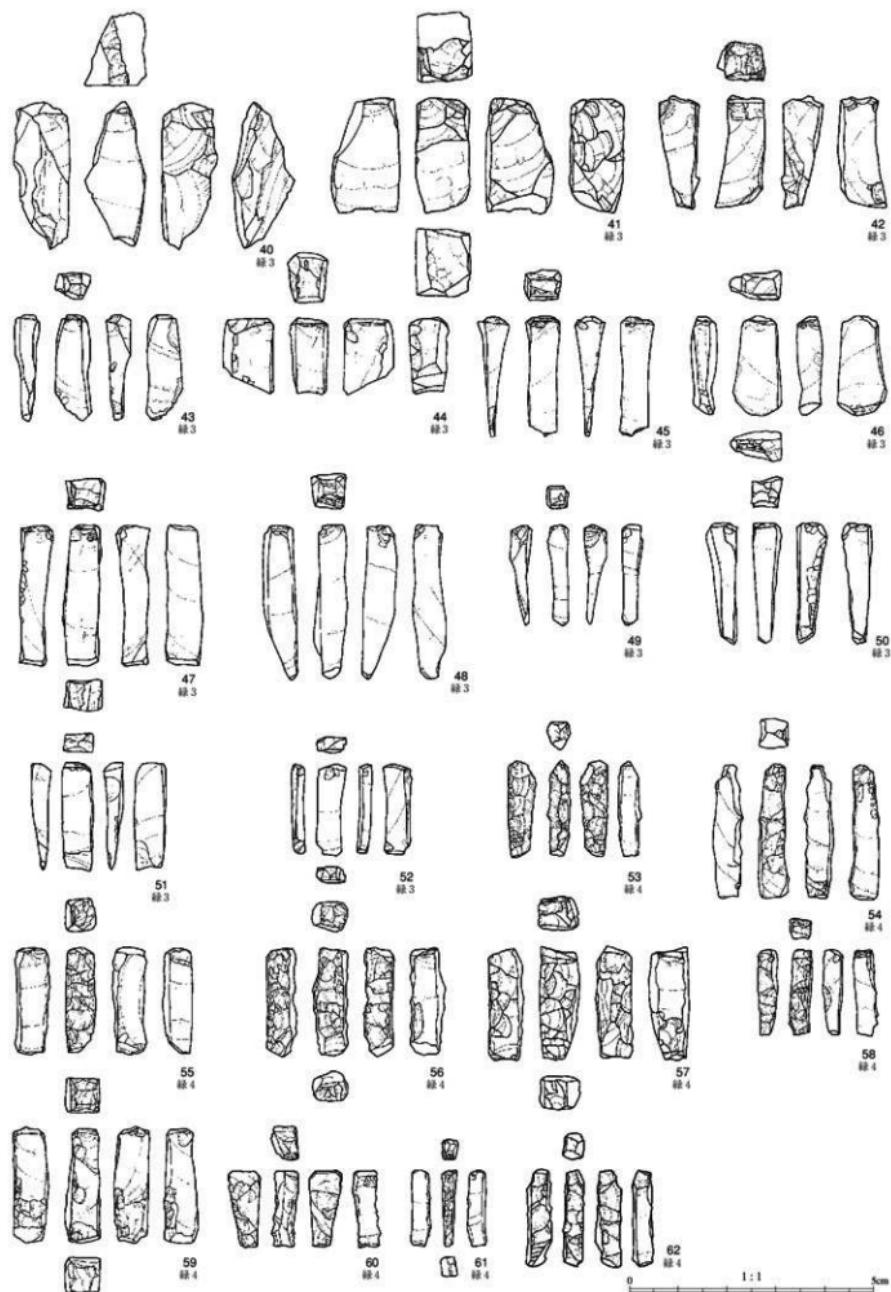


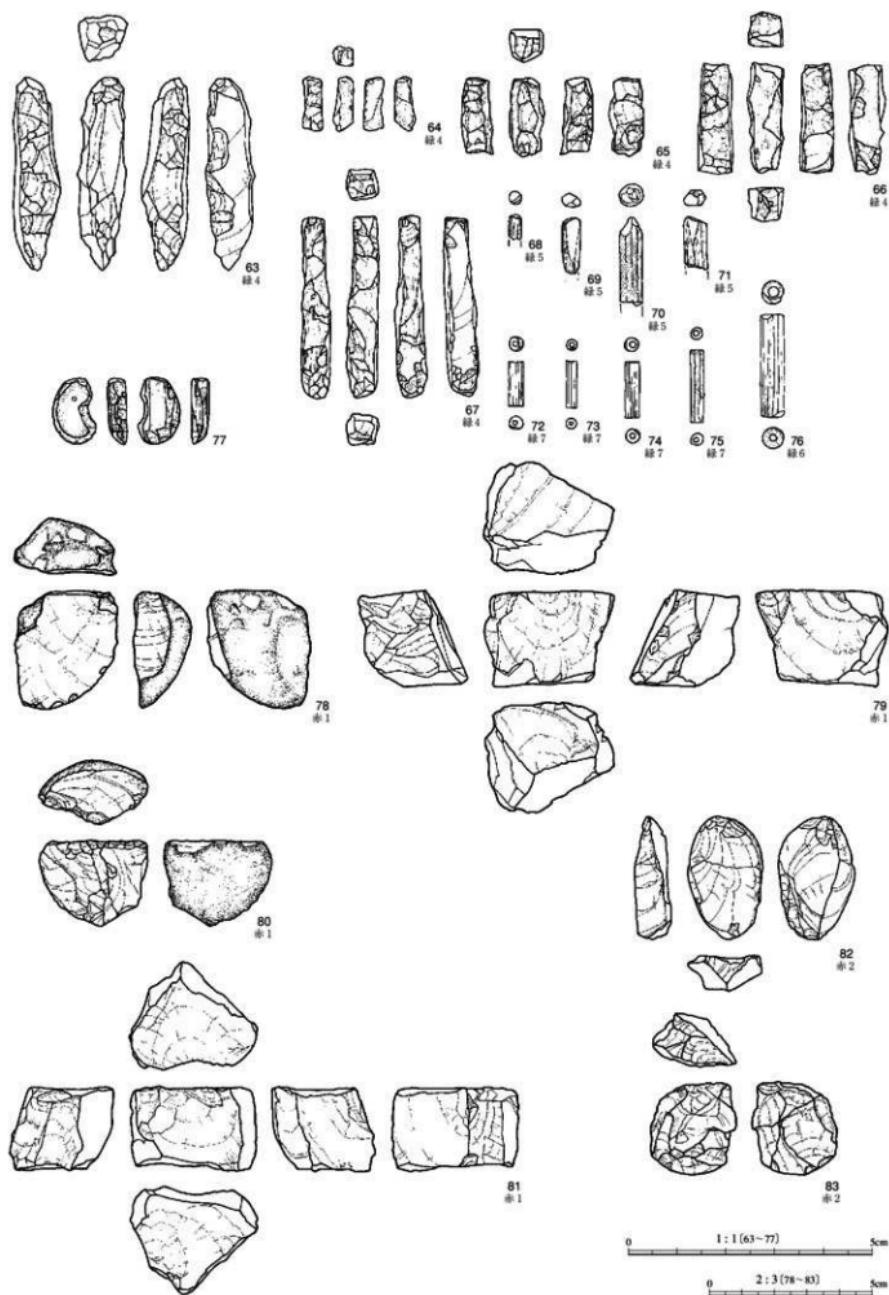


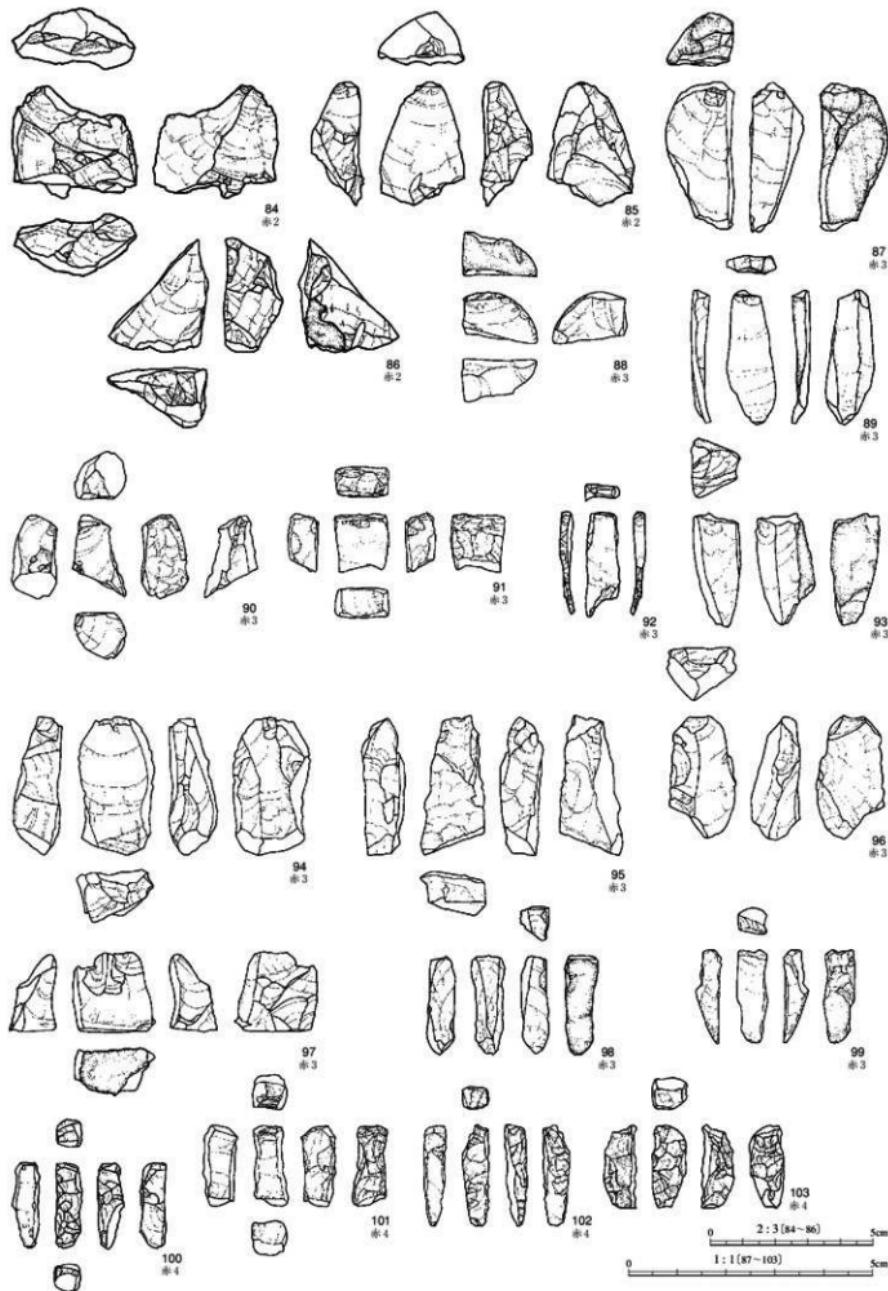


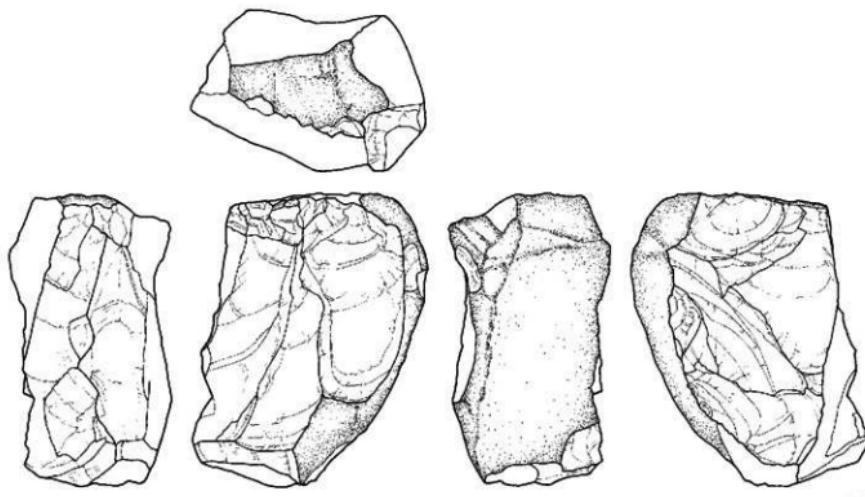
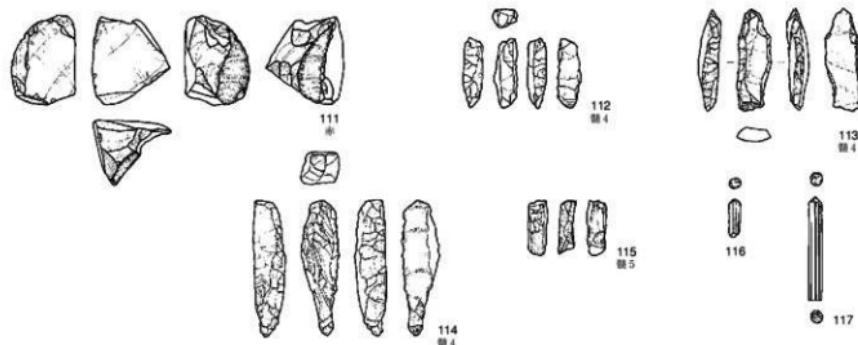
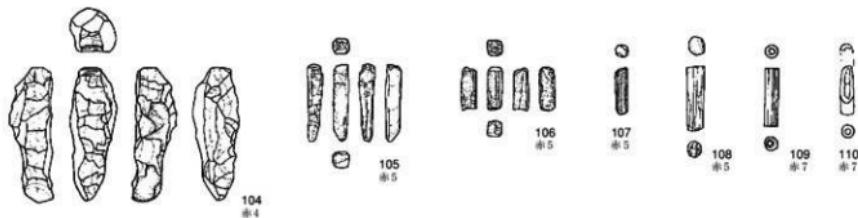


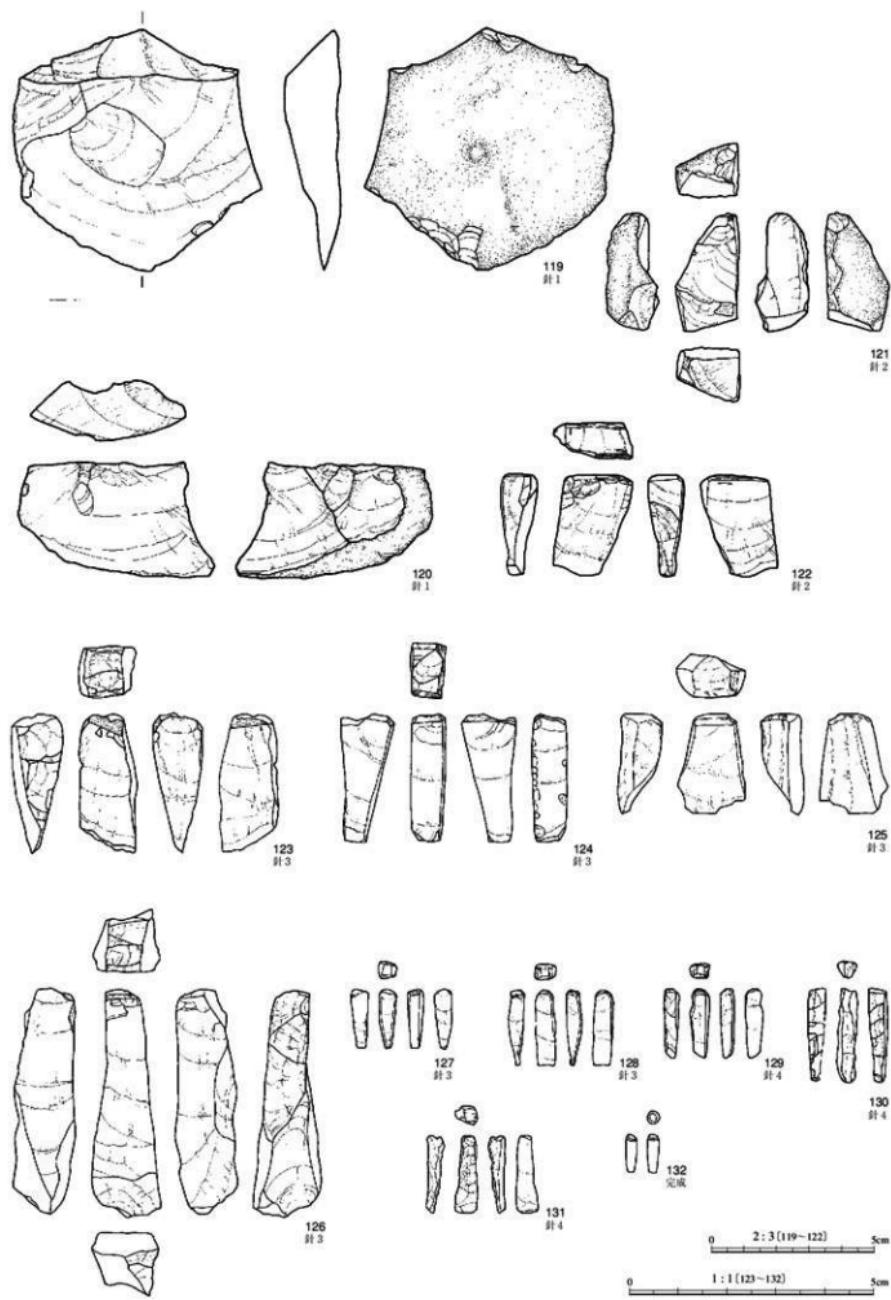
0 1:1 5cm

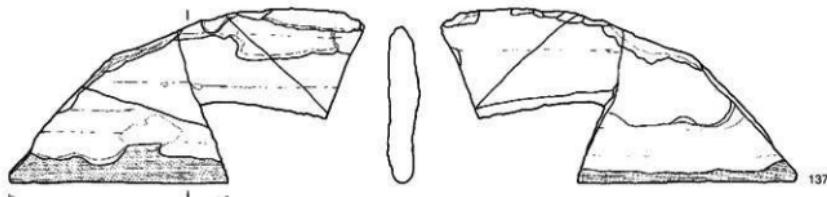
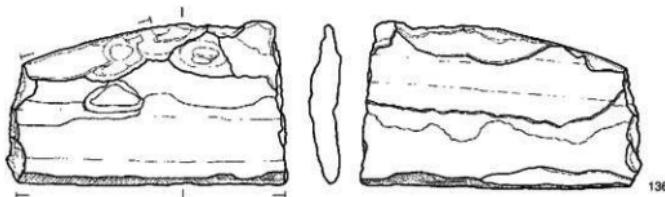
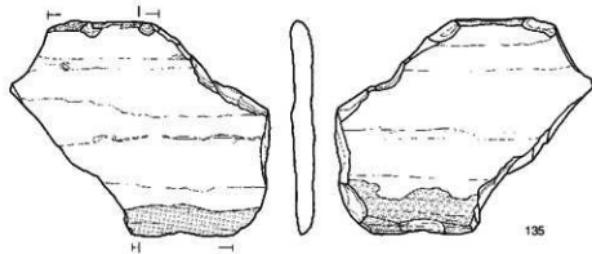
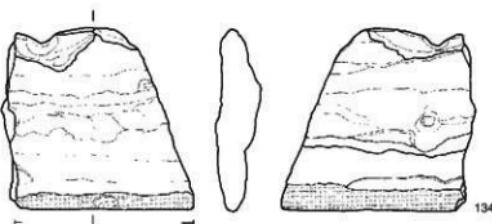
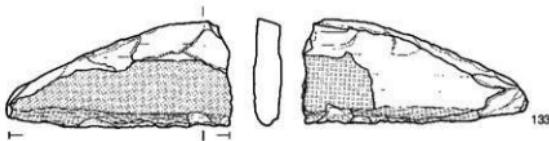




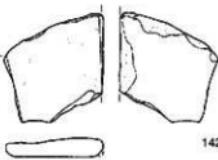
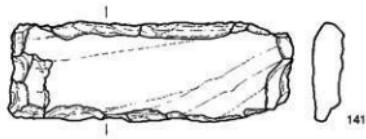
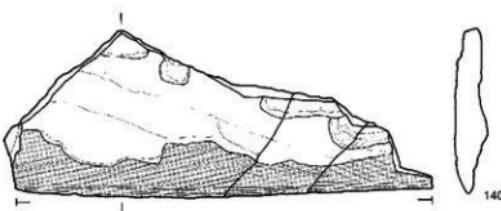
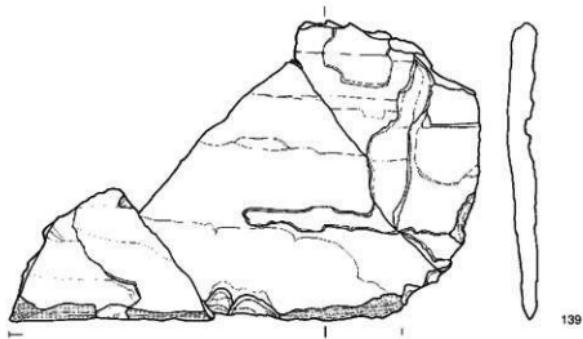
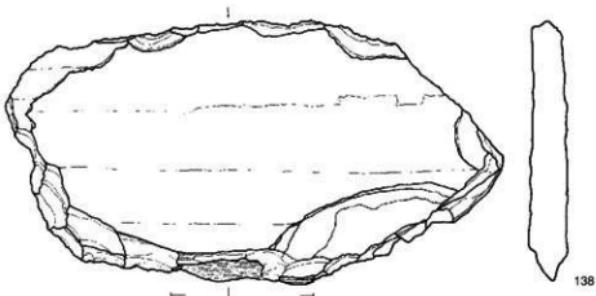






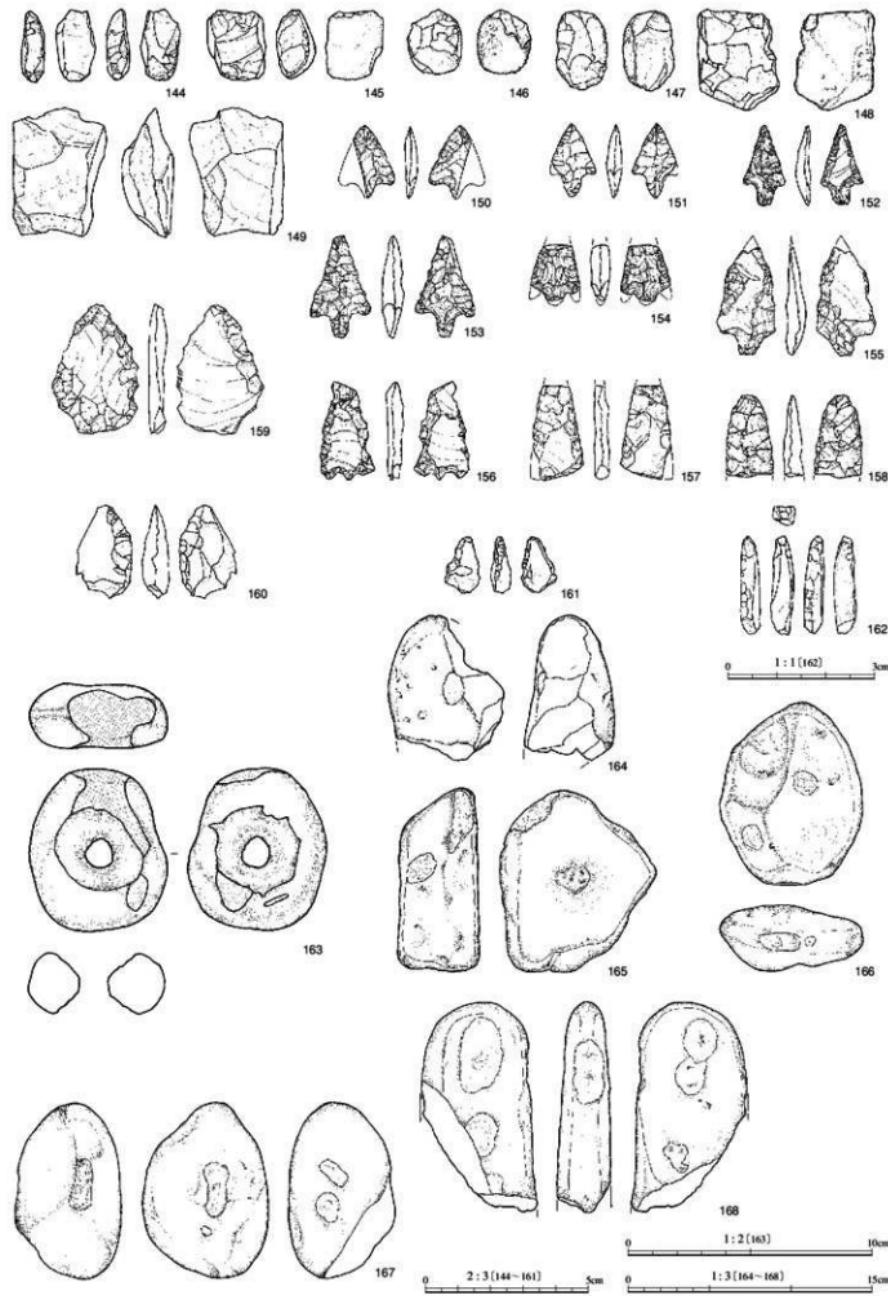


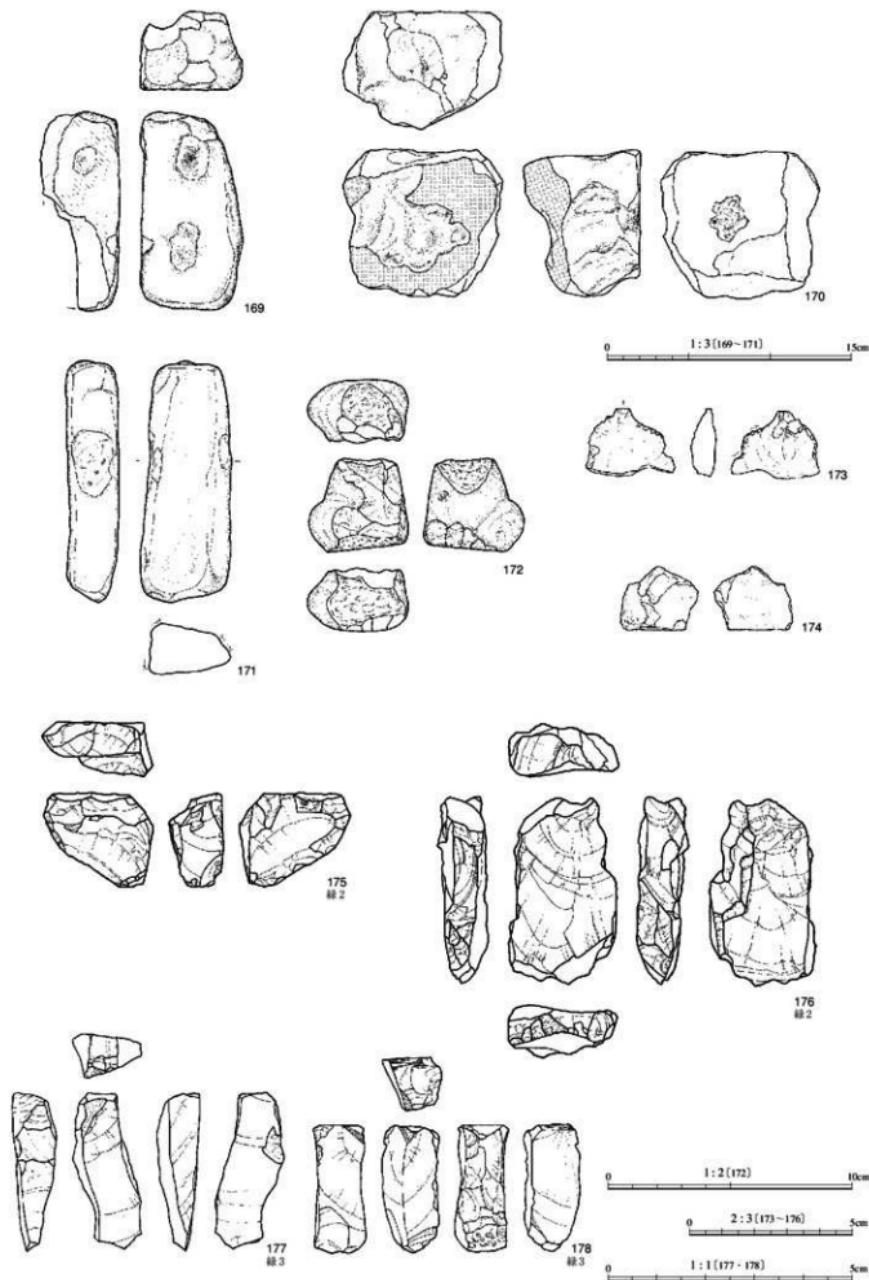
0 2:3 10cm

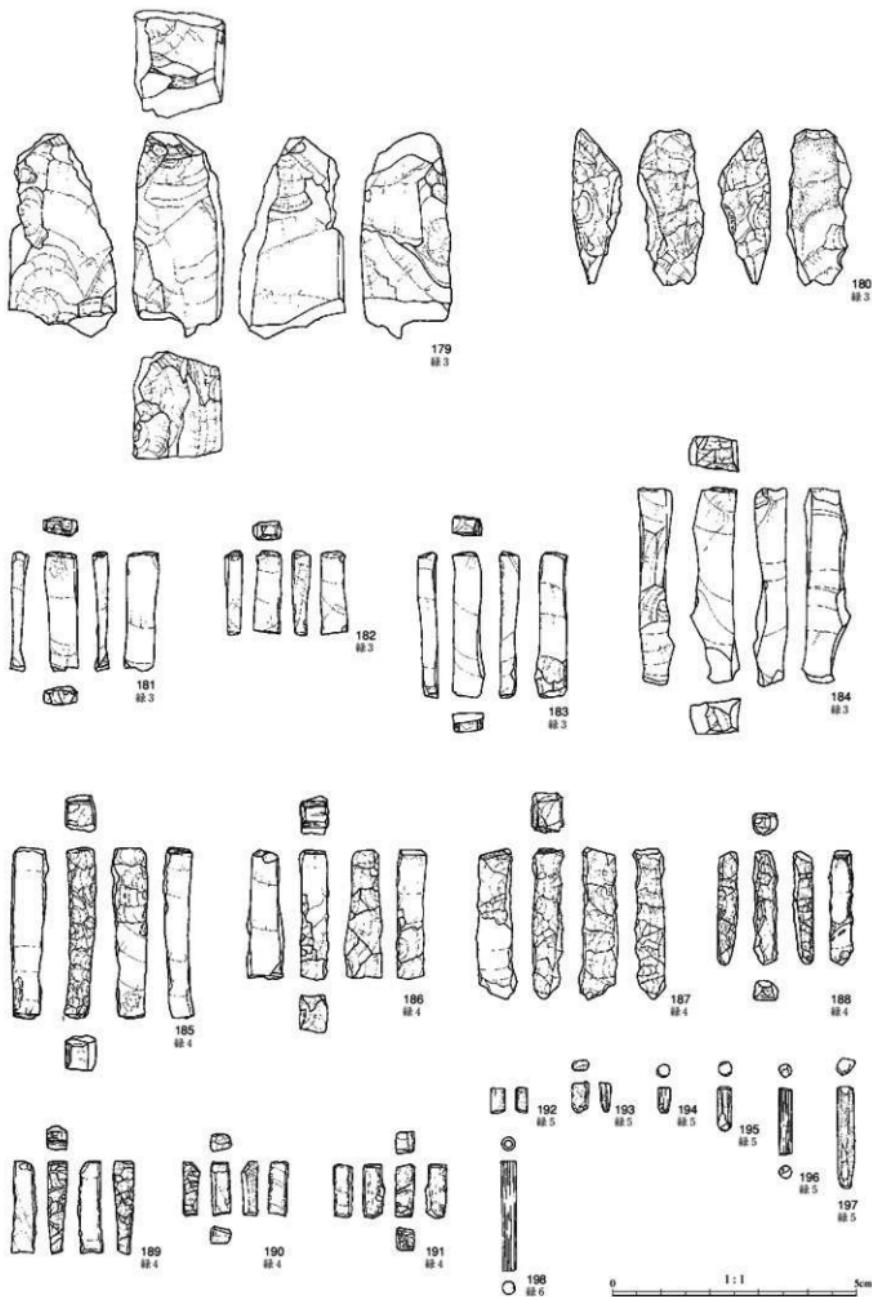


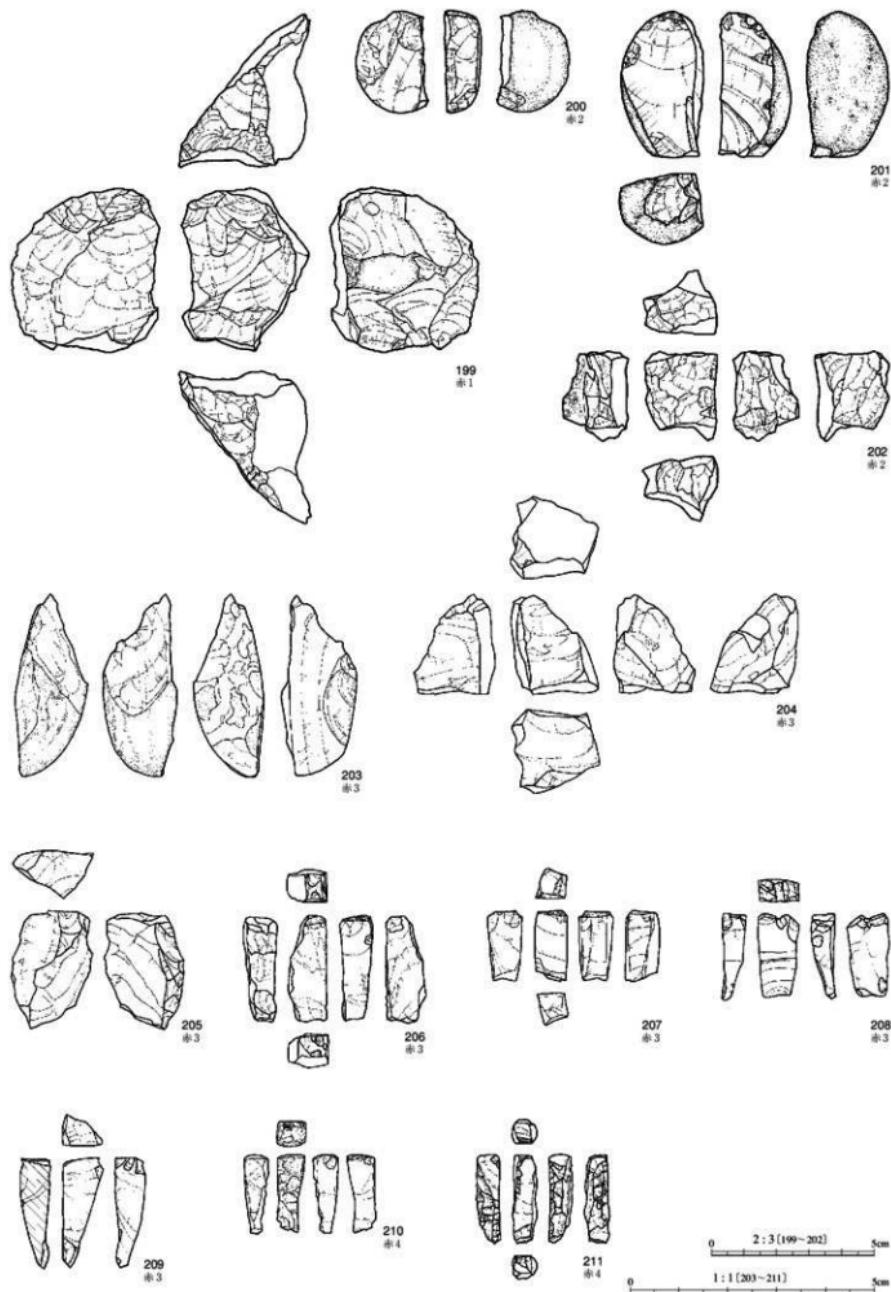
2 : 3 (138~141) 10cm

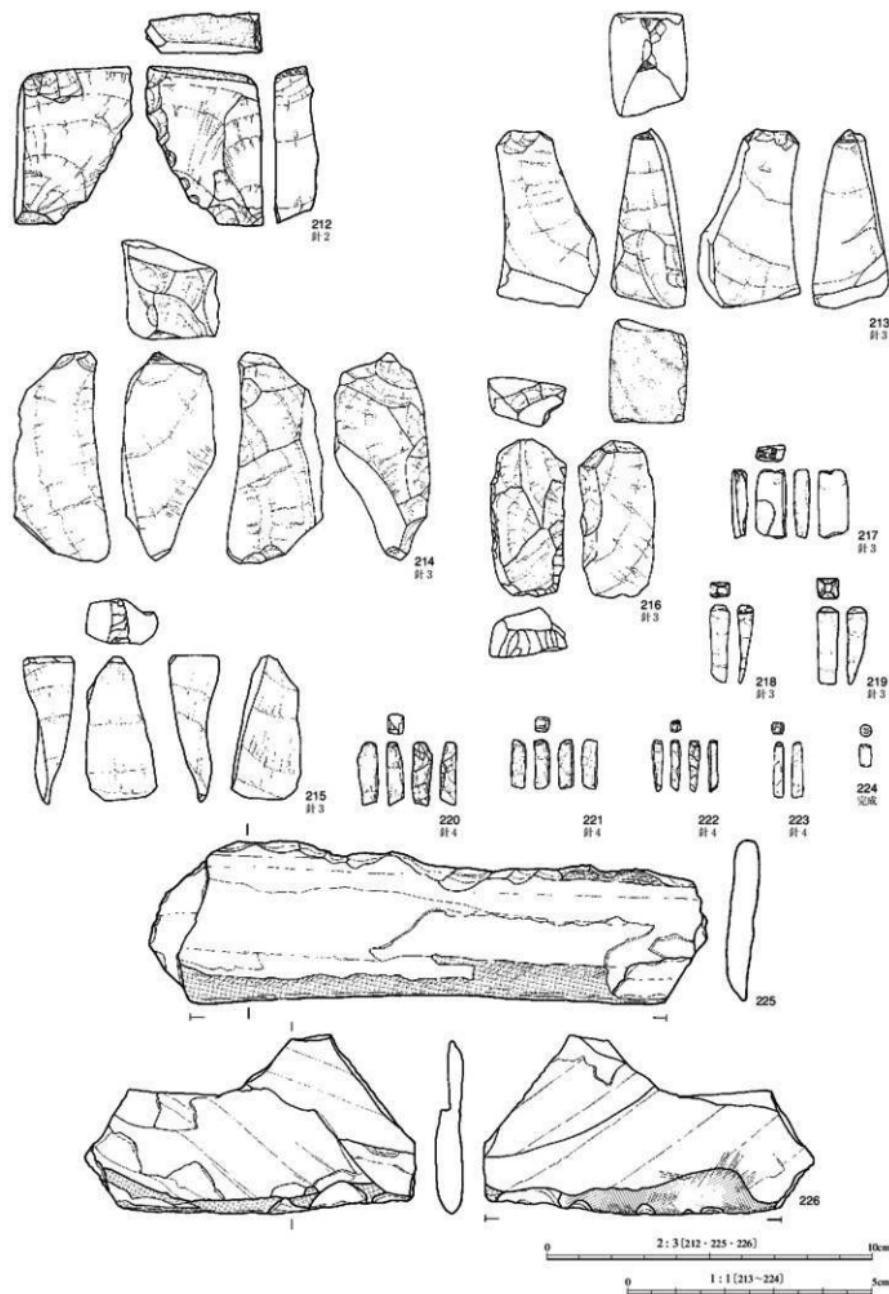
0 1 : 3 (142) 15cm  
0 1 : 1 (143) 5cm

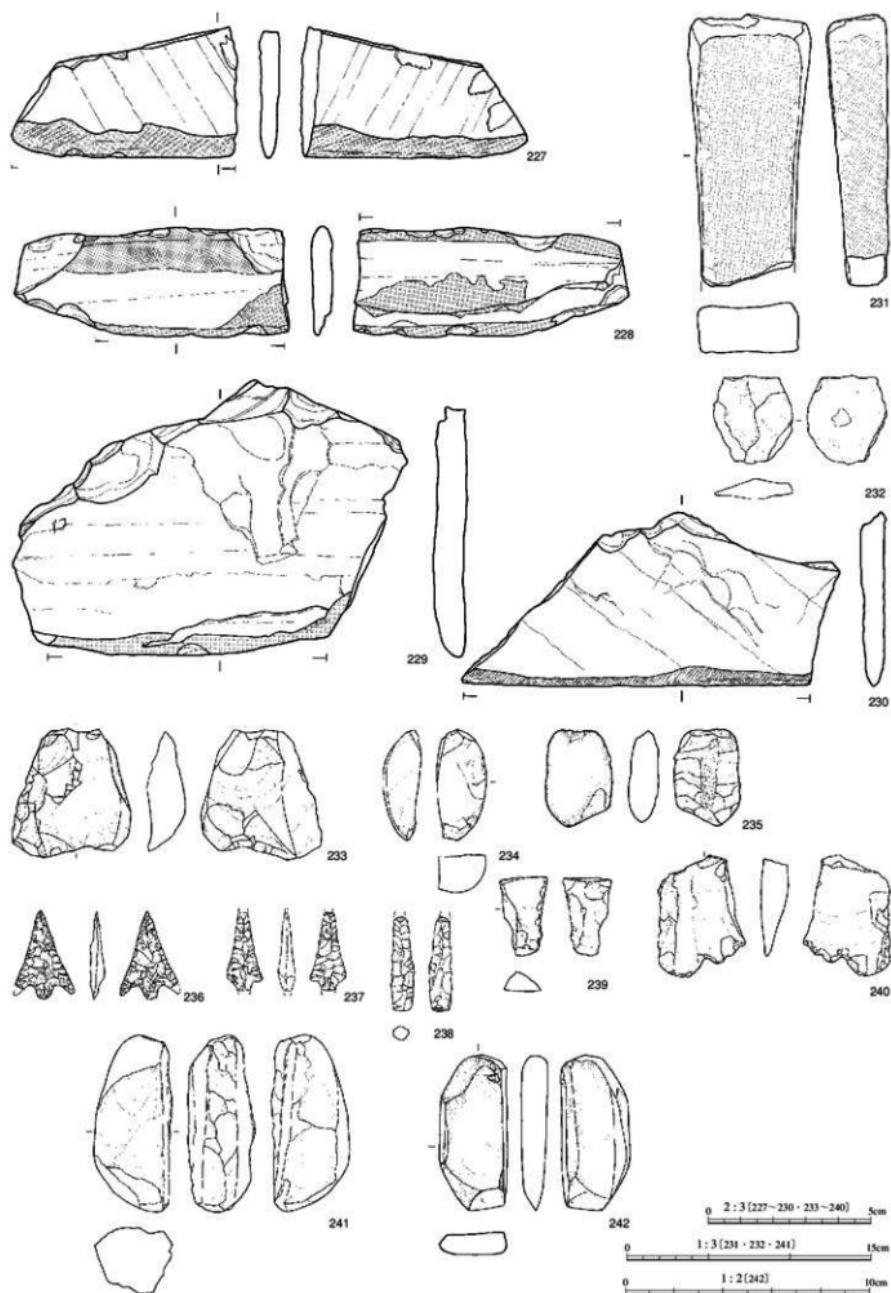




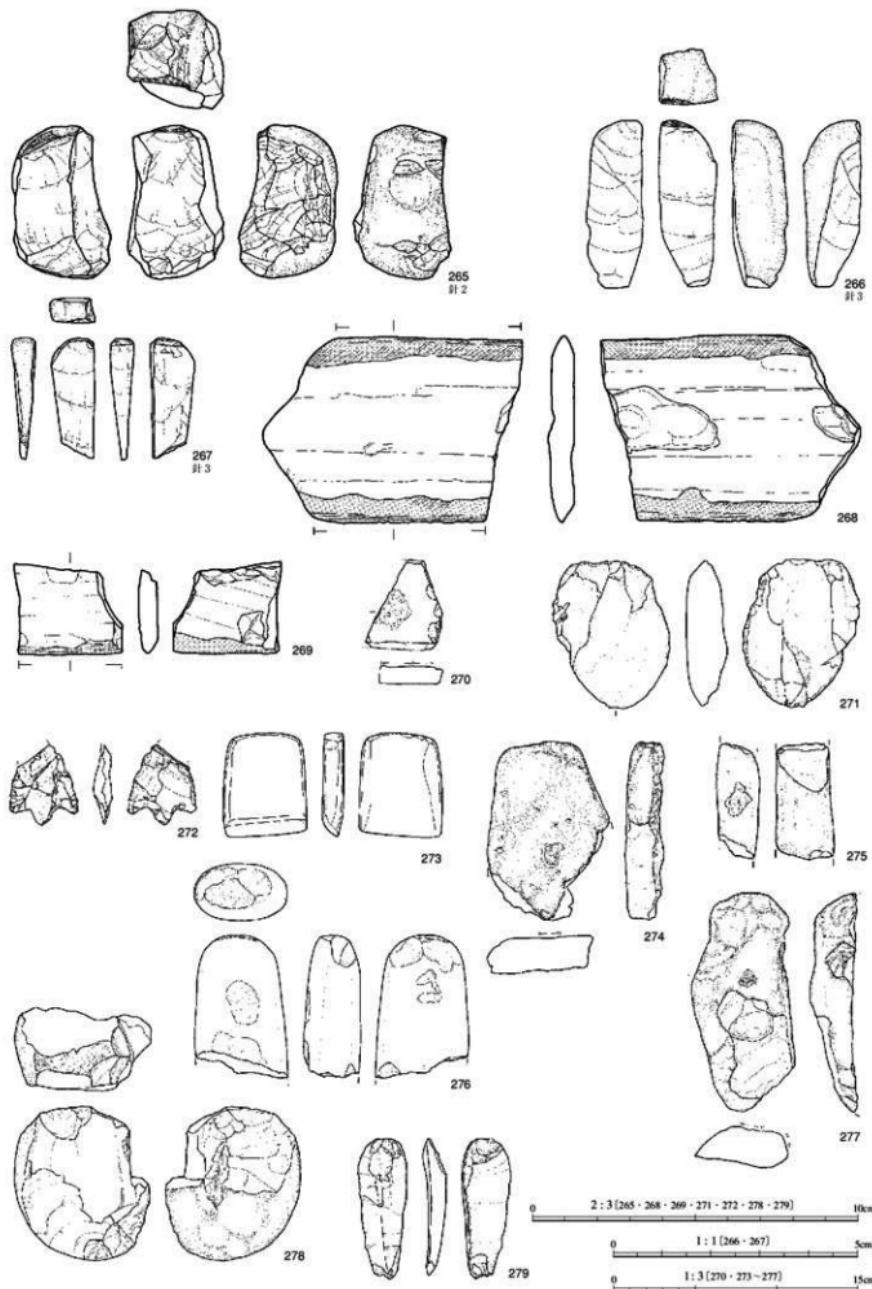




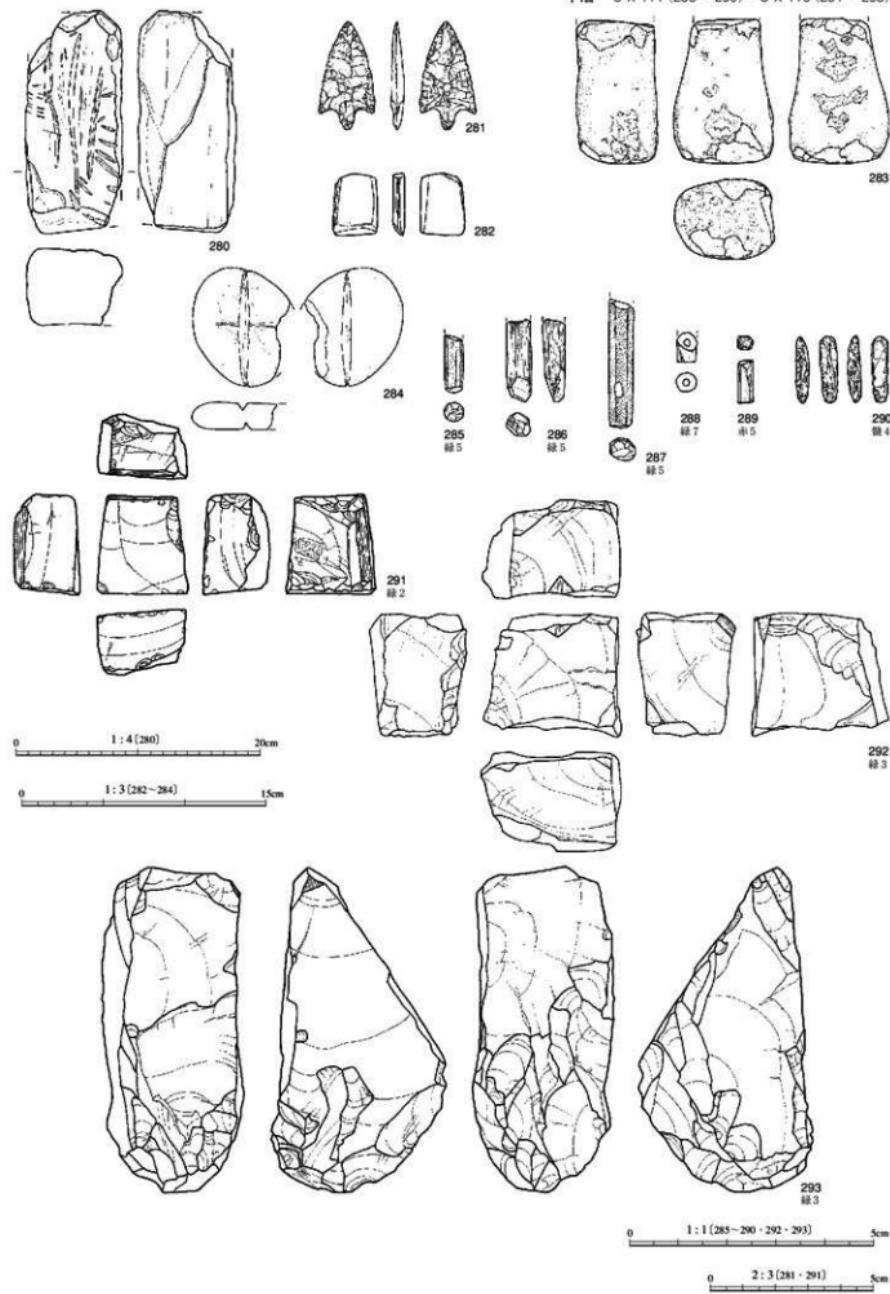


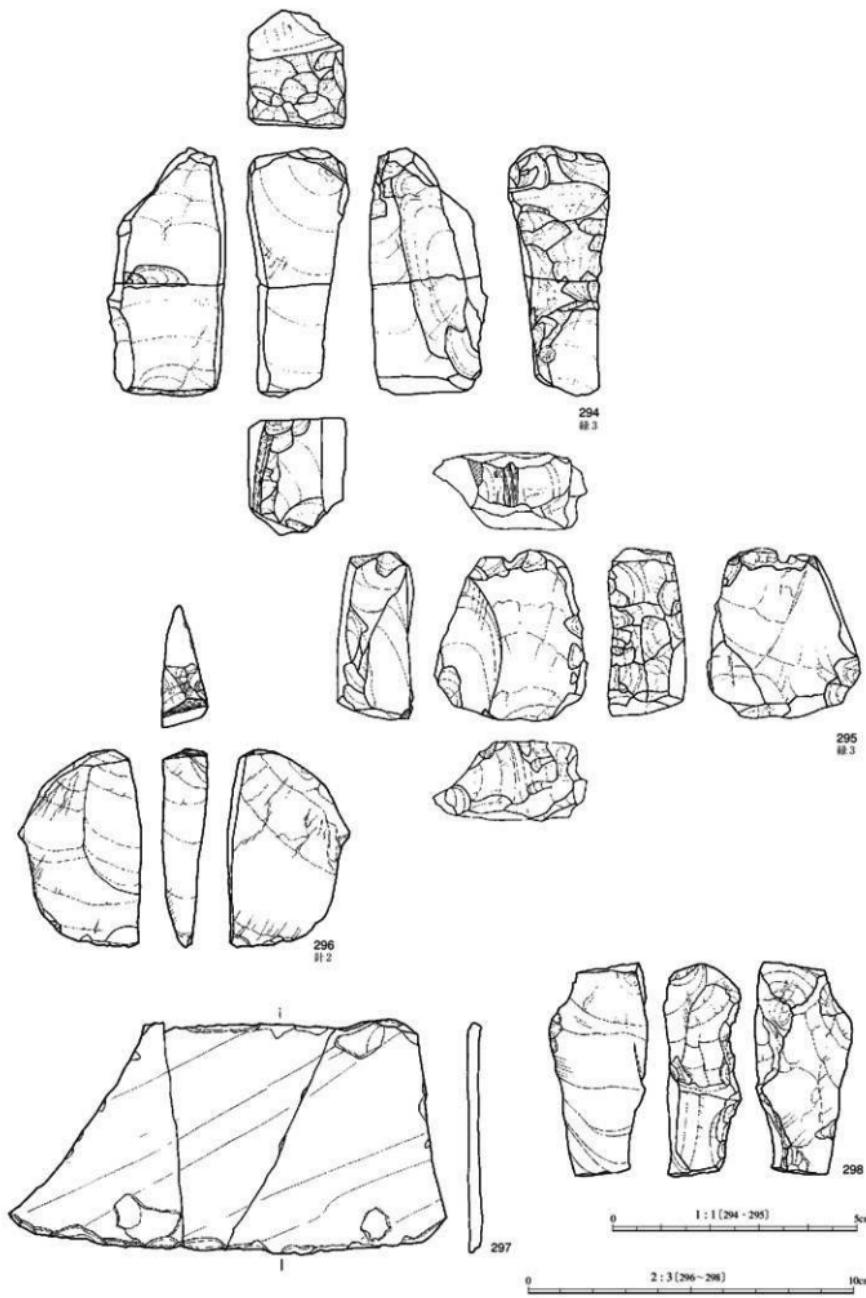






石器実測図 22 下層 SD 115 (280~284)  
中層 SX 111 (285~290)・SX 116 (291~293)



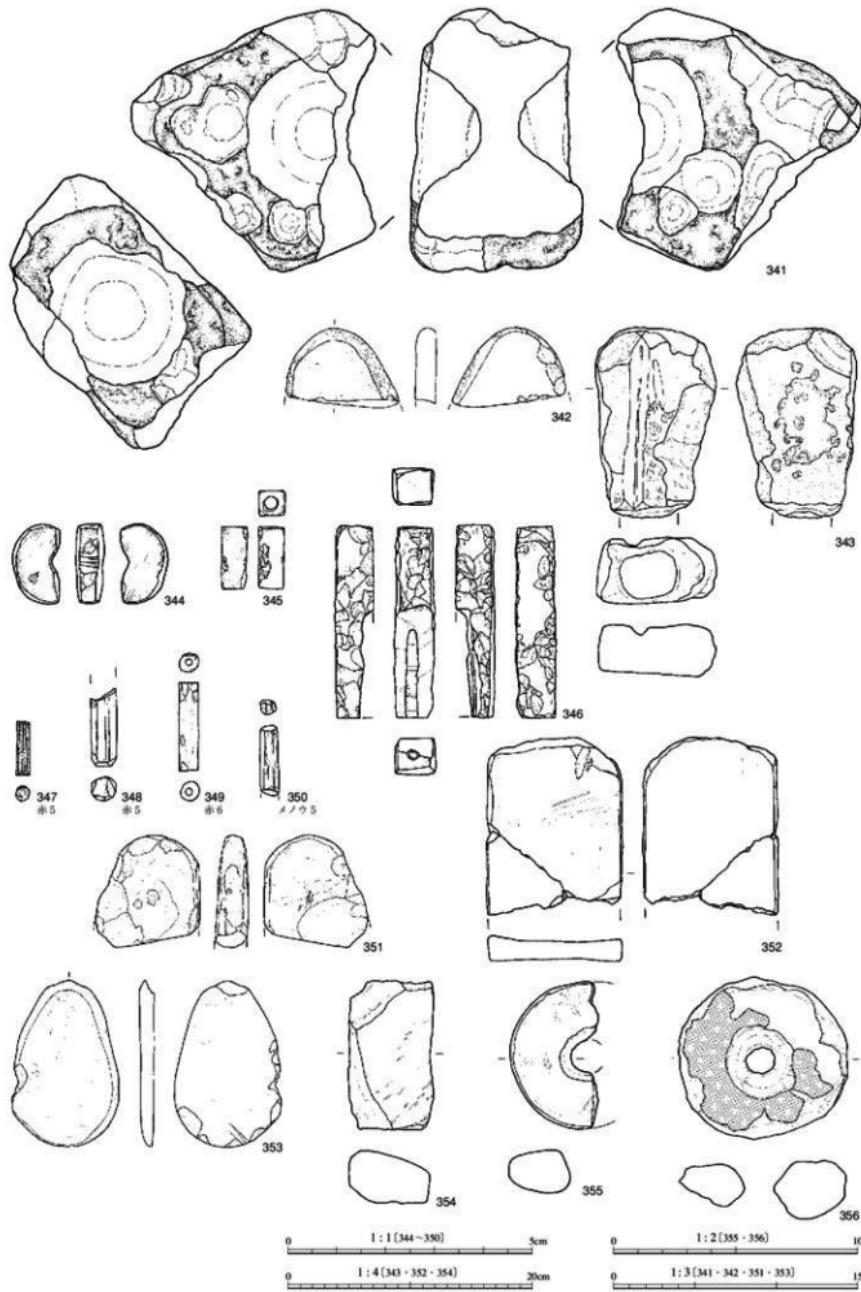


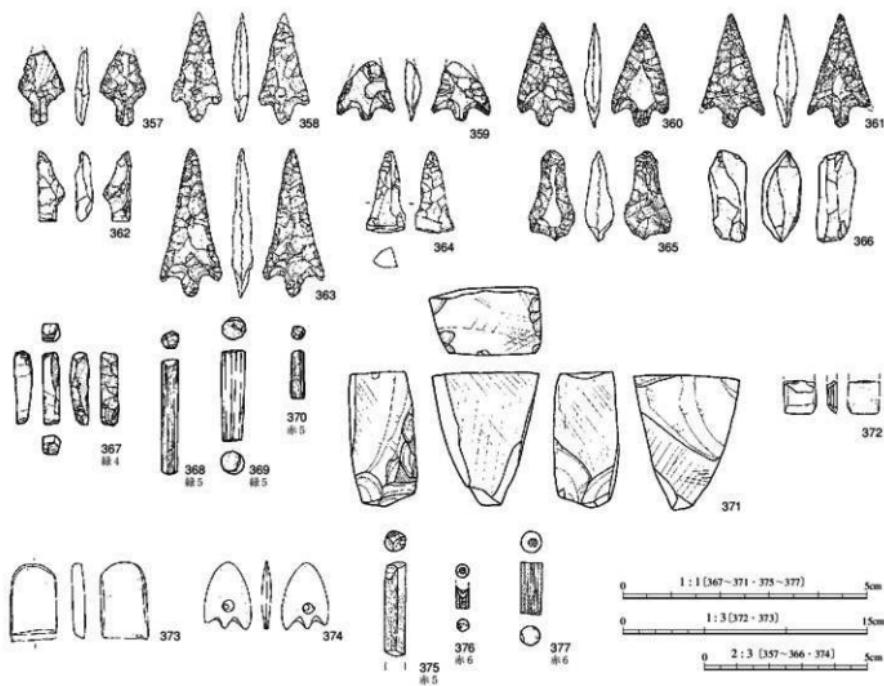


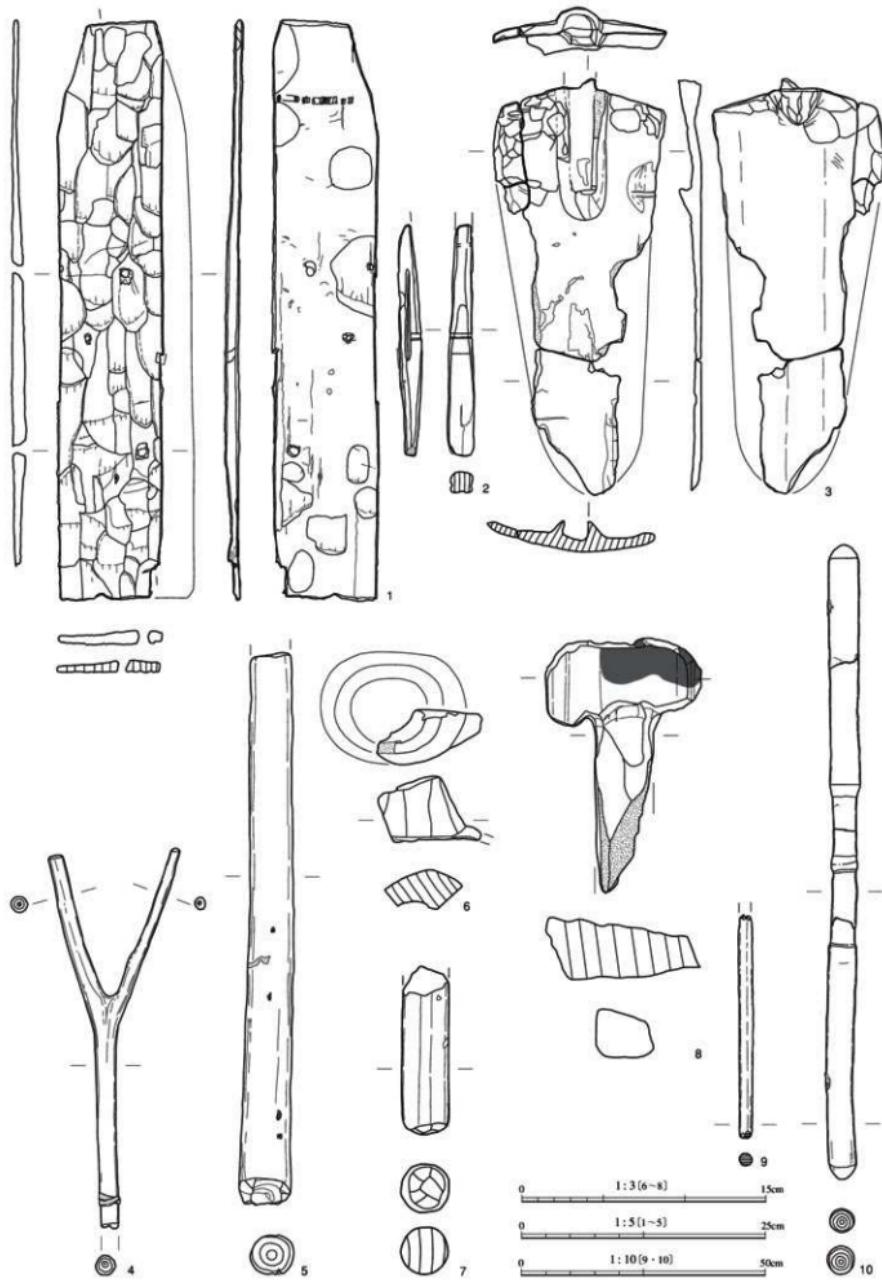
0 2 : 3 (299 - 303 - 306) 5cm

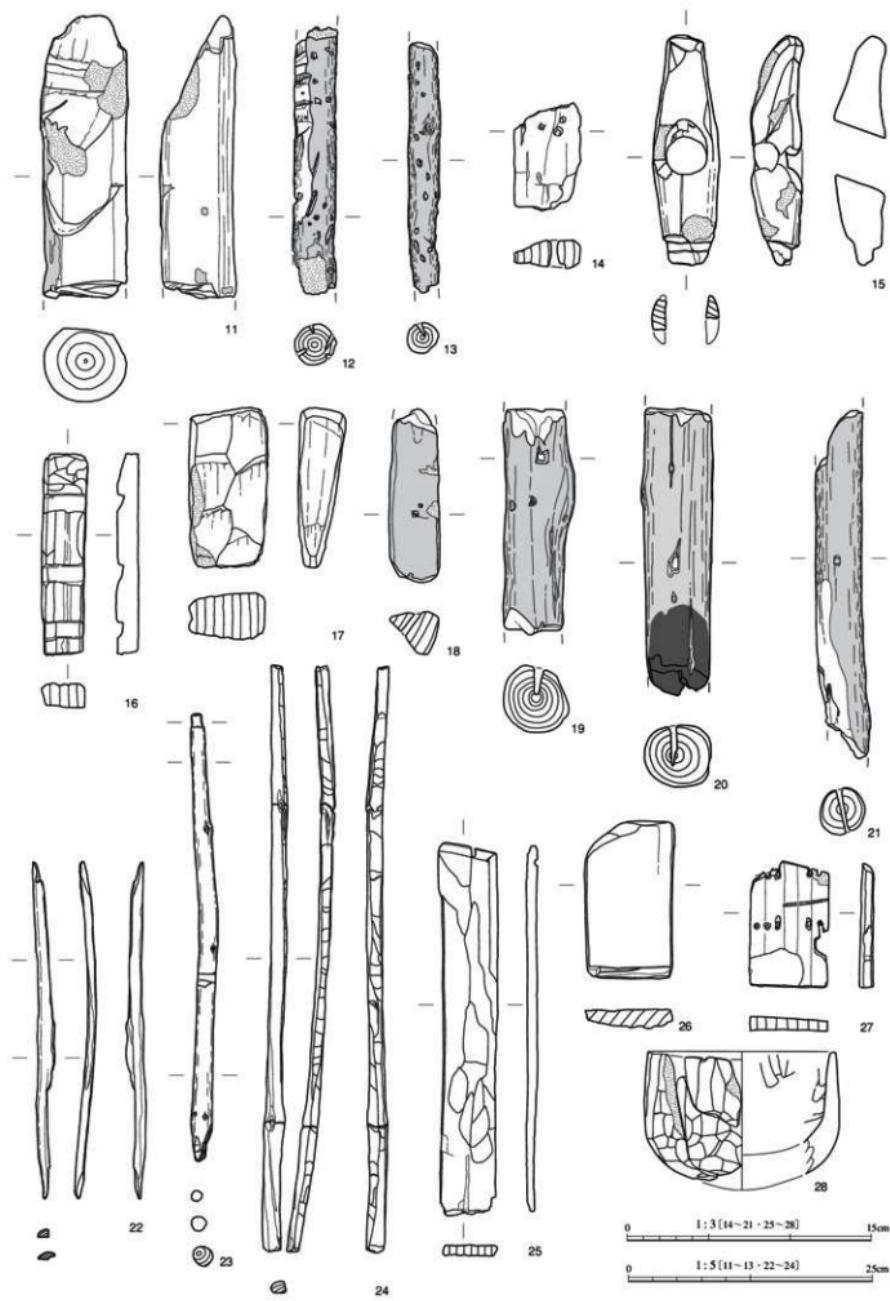
0 1 : 1 (300 - 302 - 304 - 305) 5cm

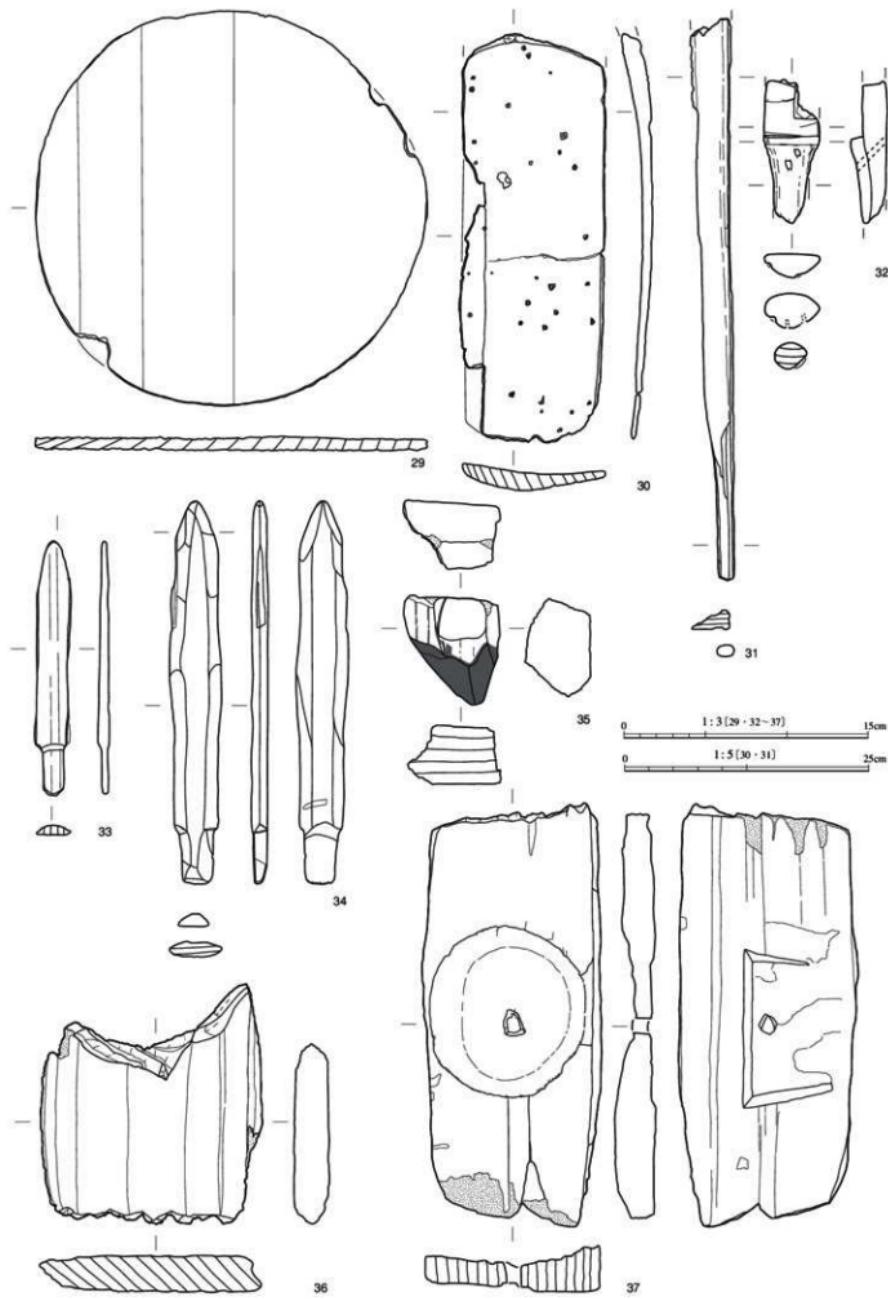


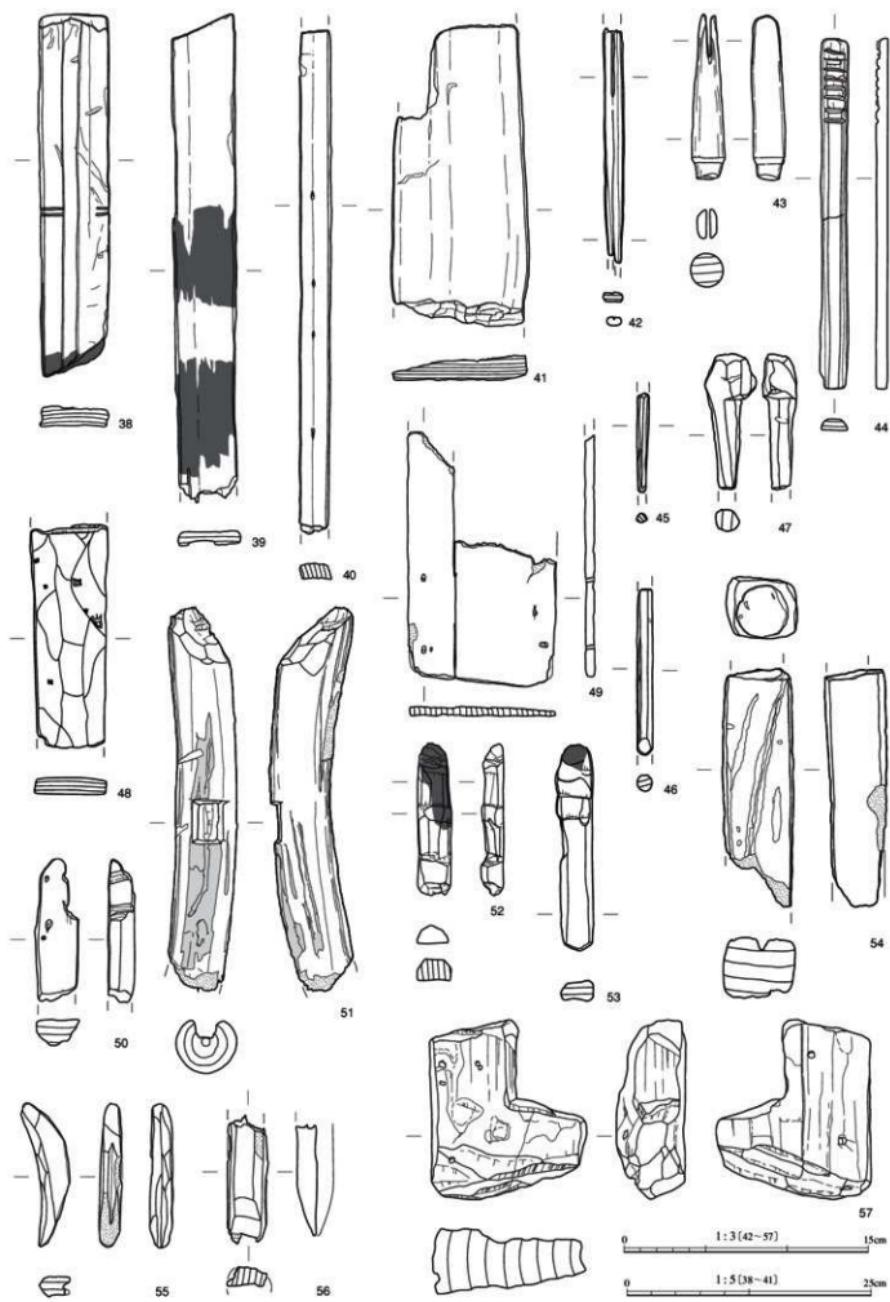


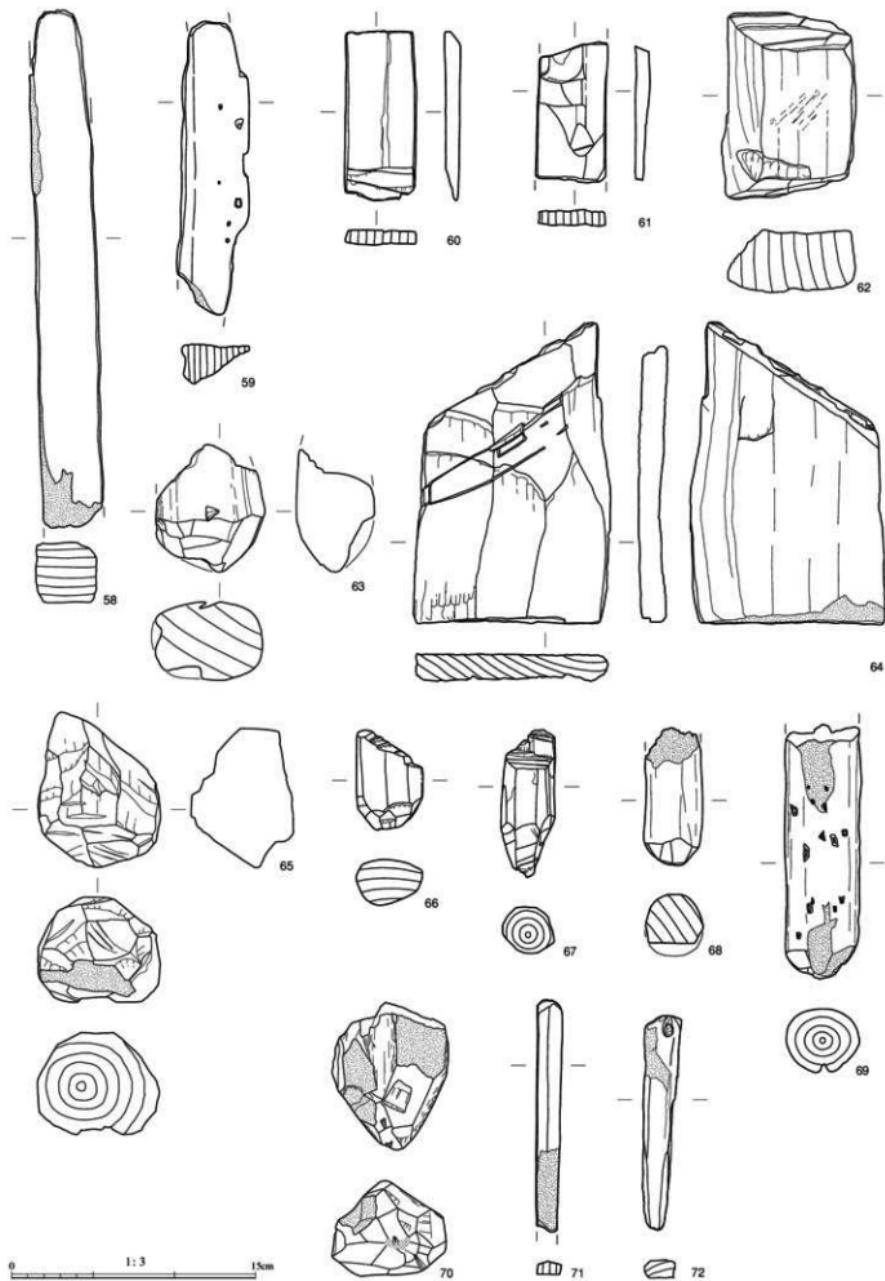


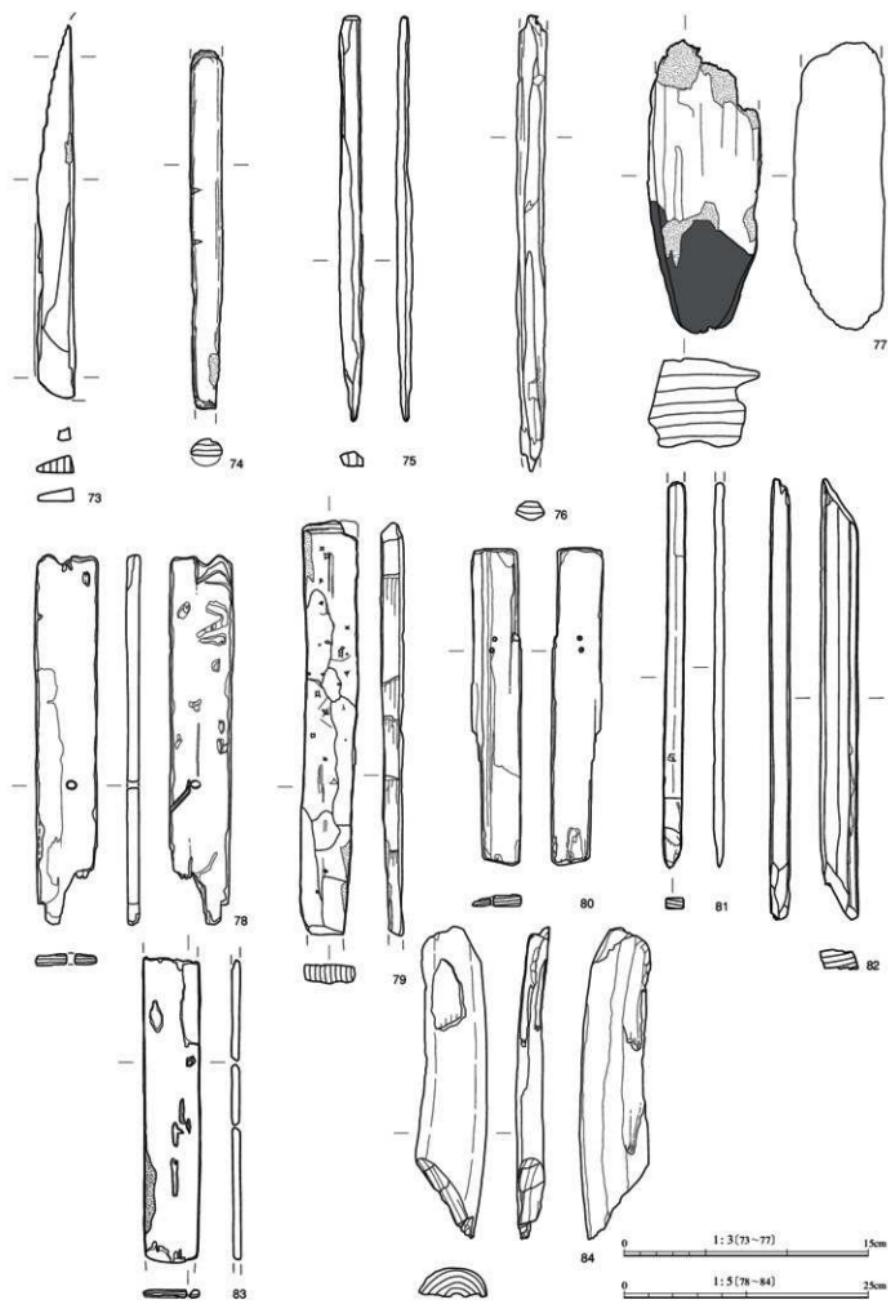


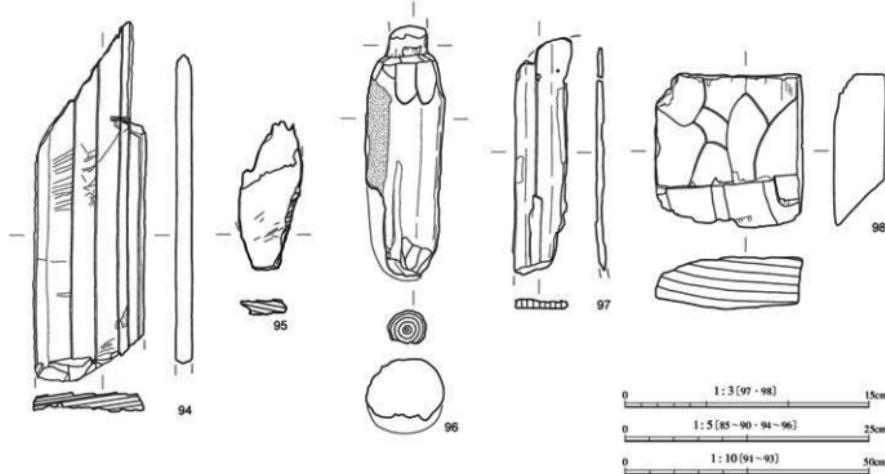
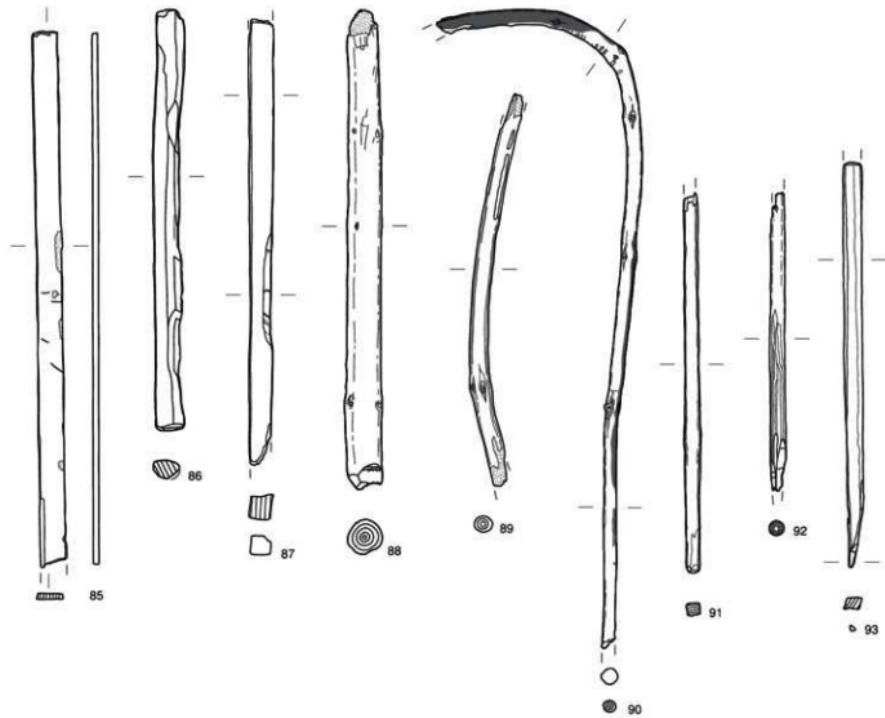






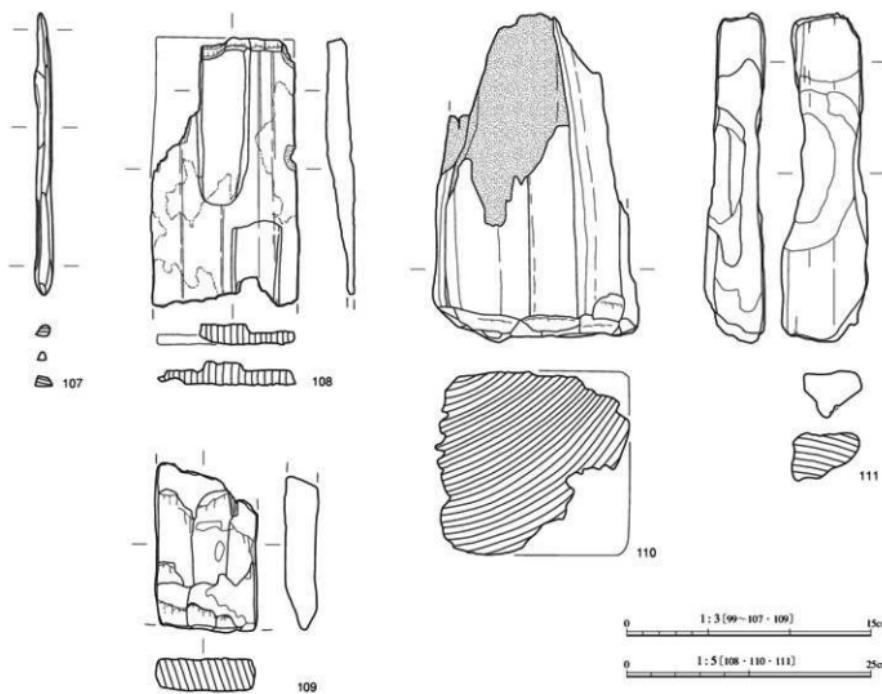
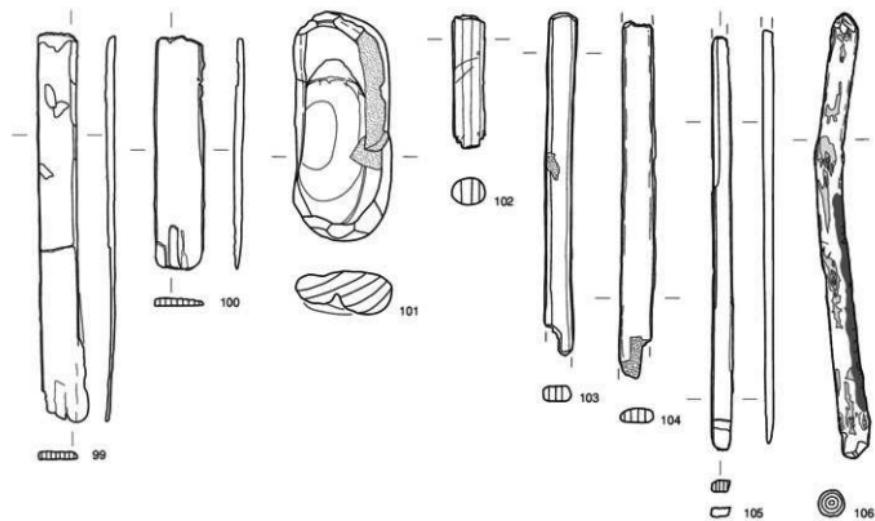






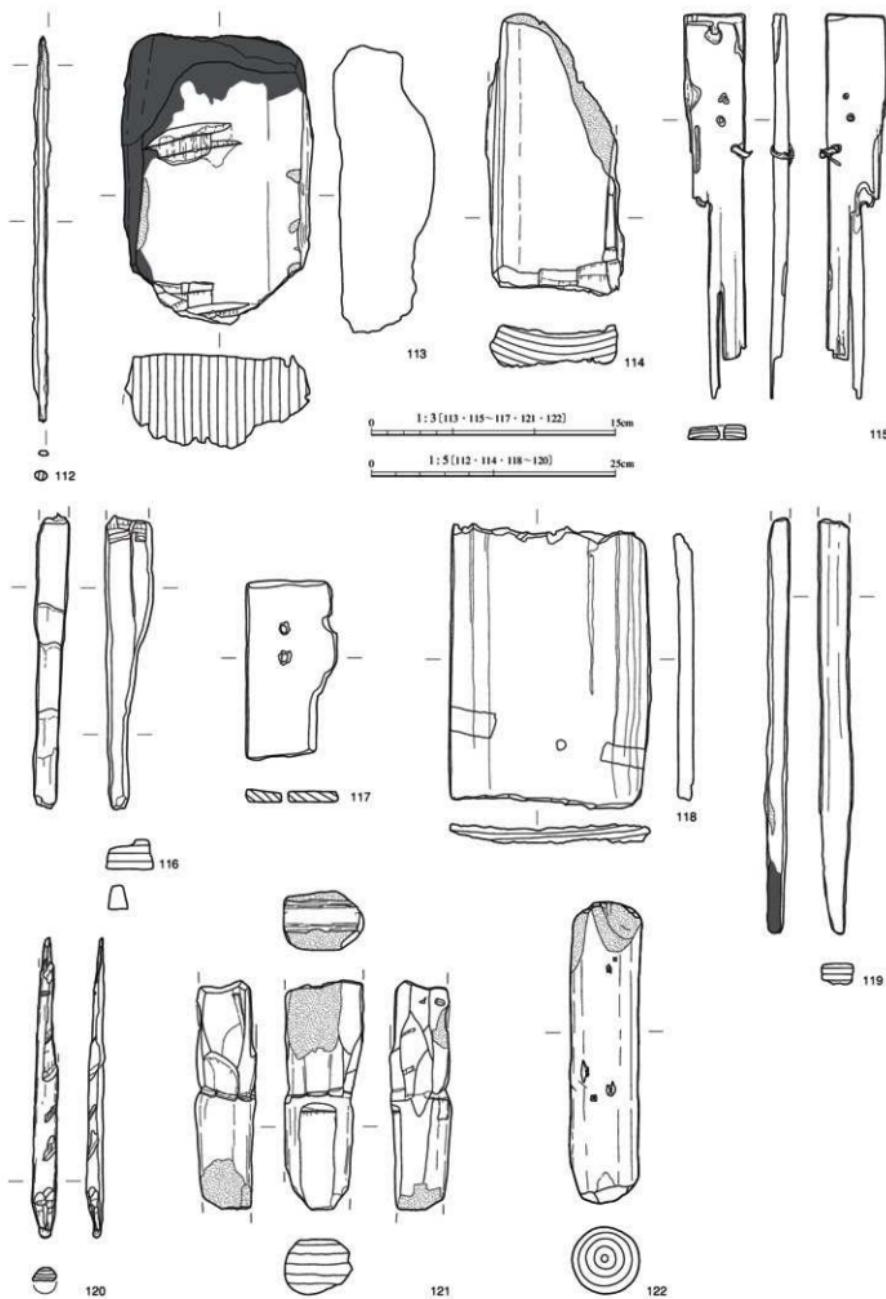
木製品実測図 8 上層 SD 23 (99~106)  
下層 SB 110 (107)・SD 112 (108, 109)・SB 115 (110, 111)

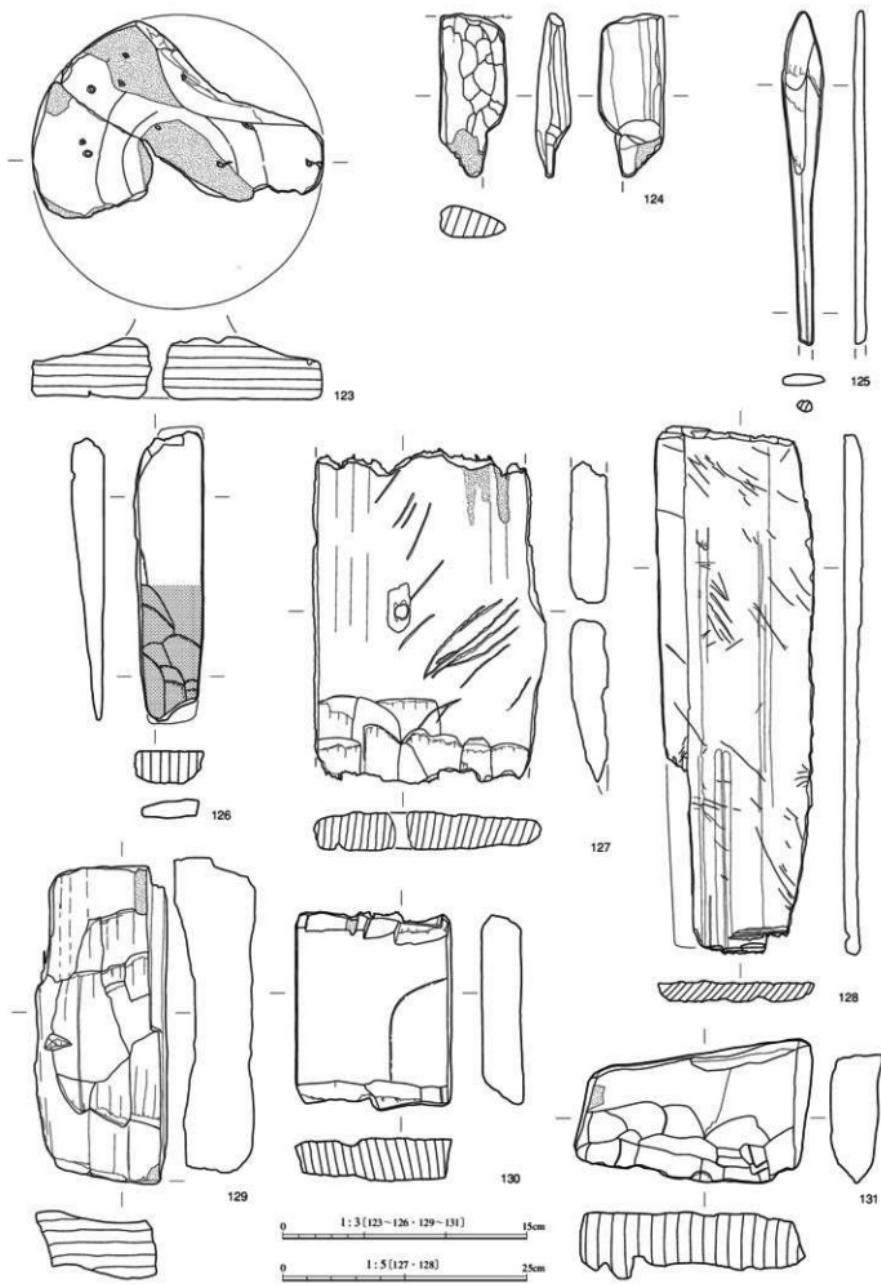
図版 109

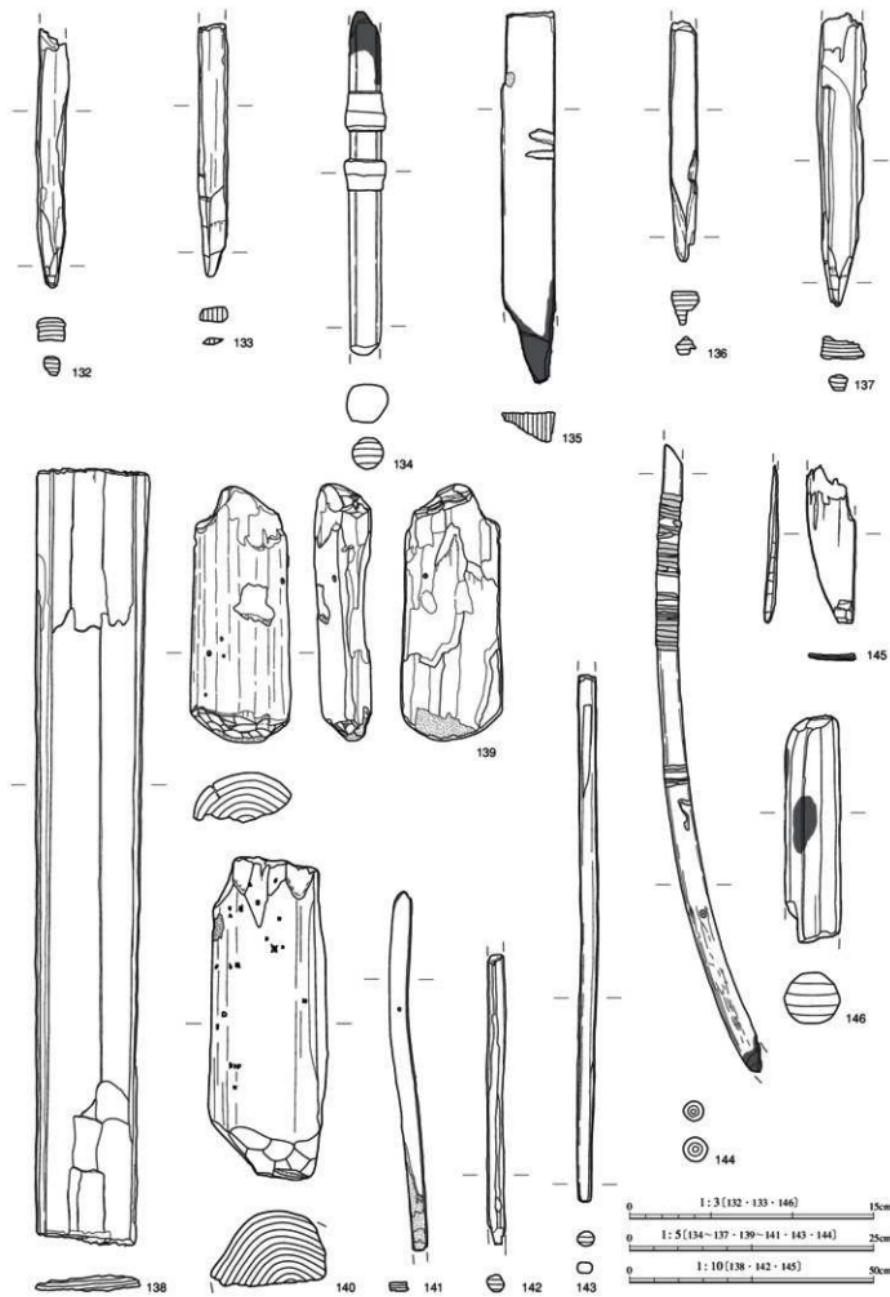


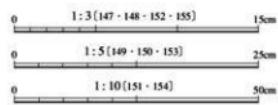
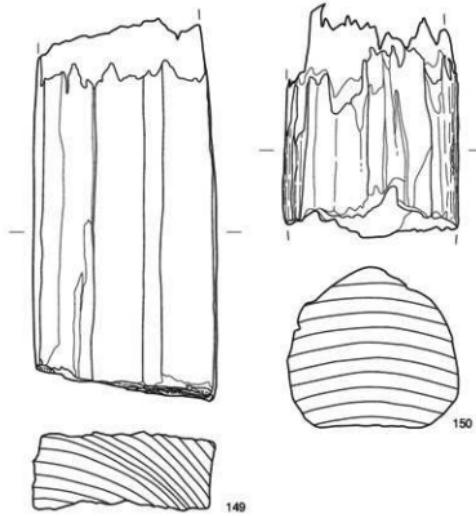
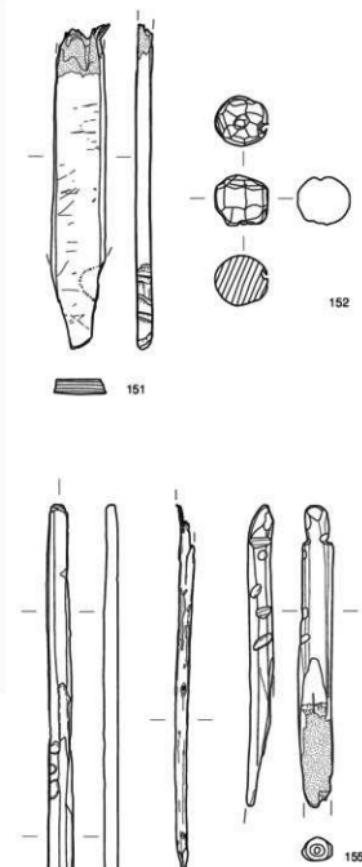
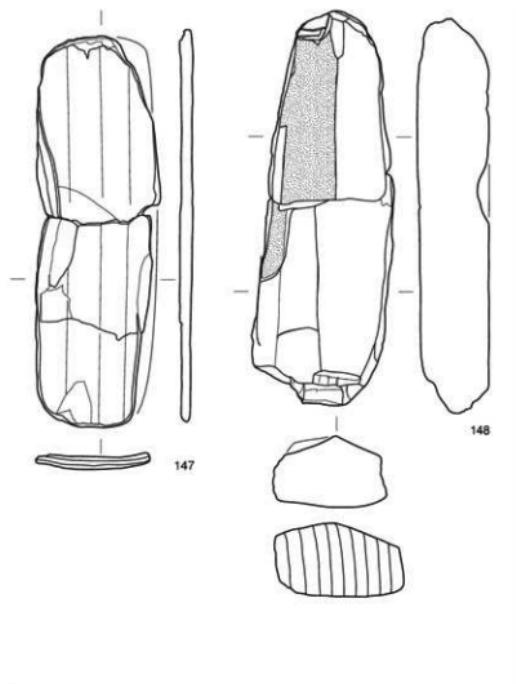
0 1:5 (108-110-111) 25cm

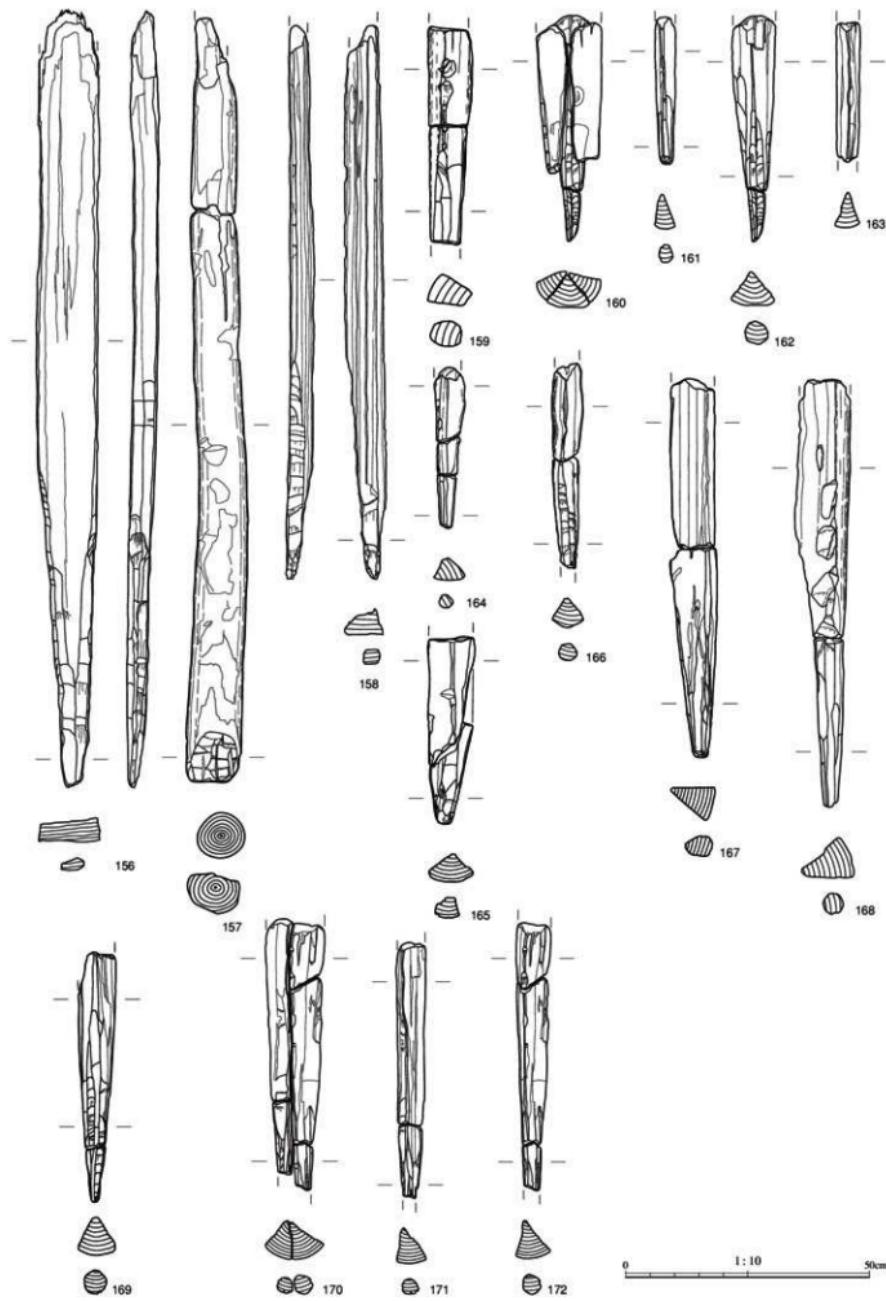
0 1:3 (99-107-109) 15cm

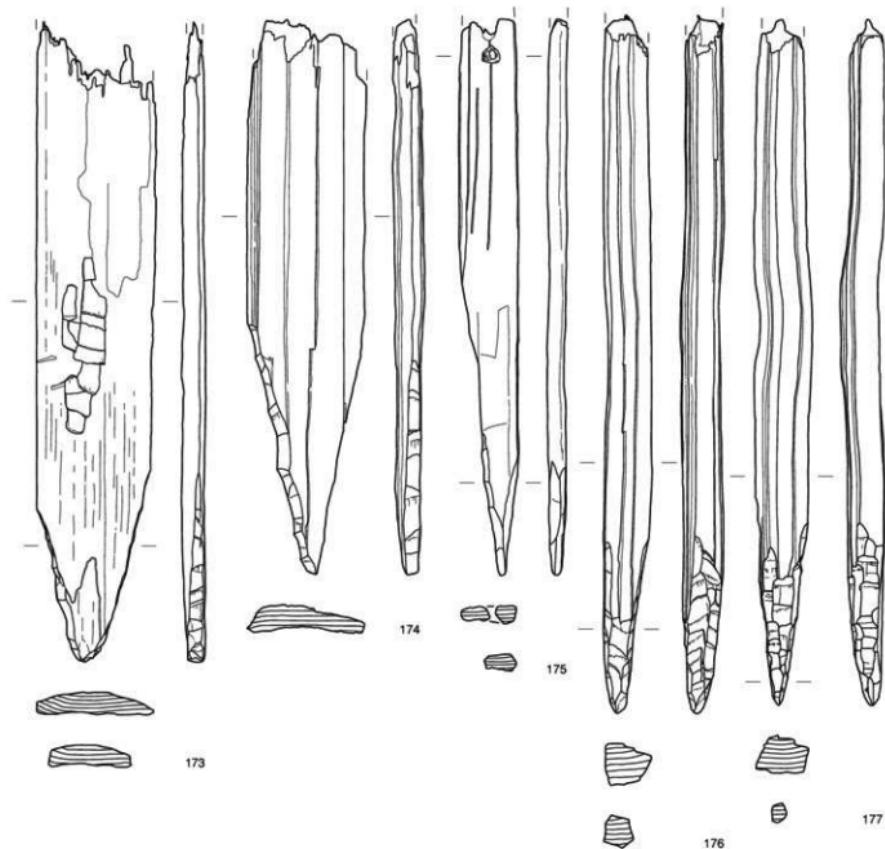


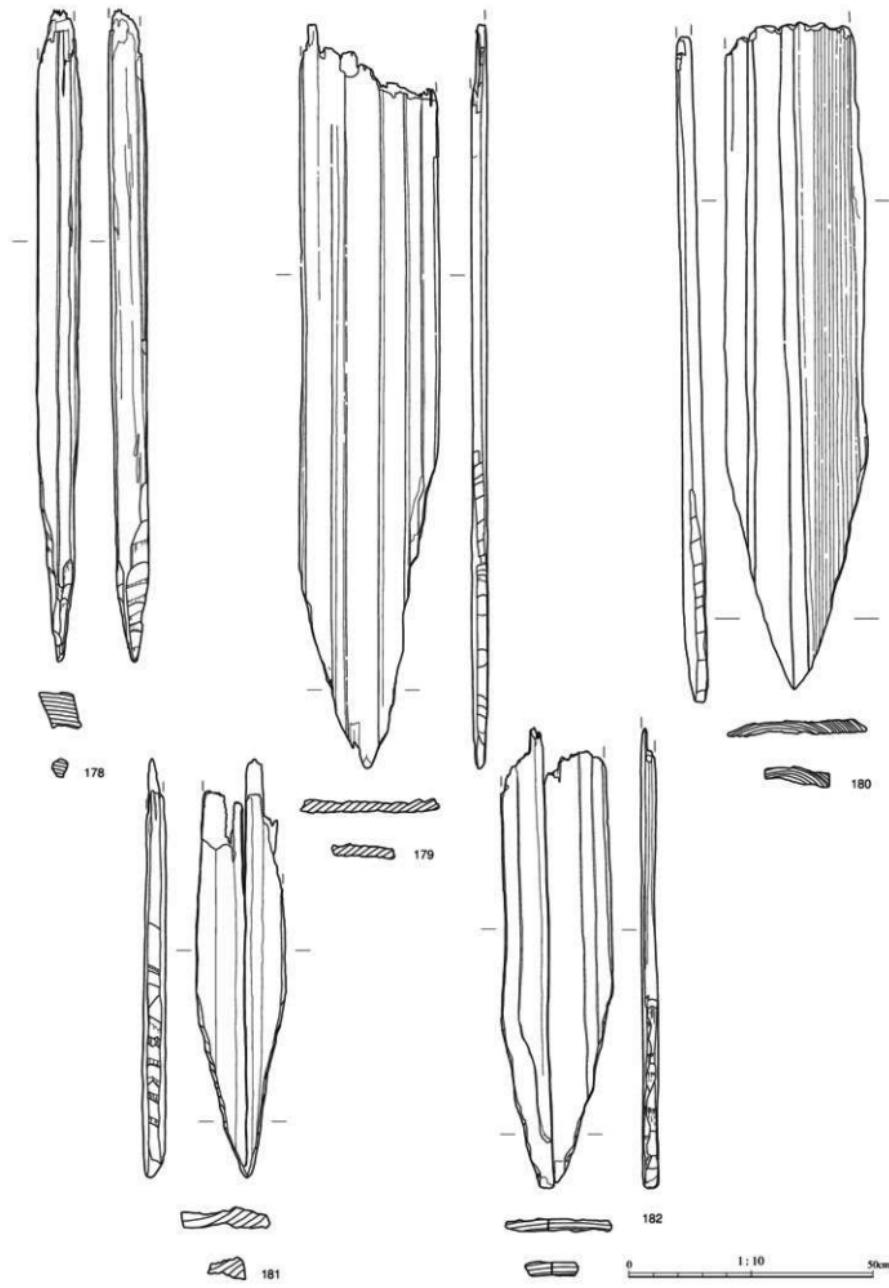


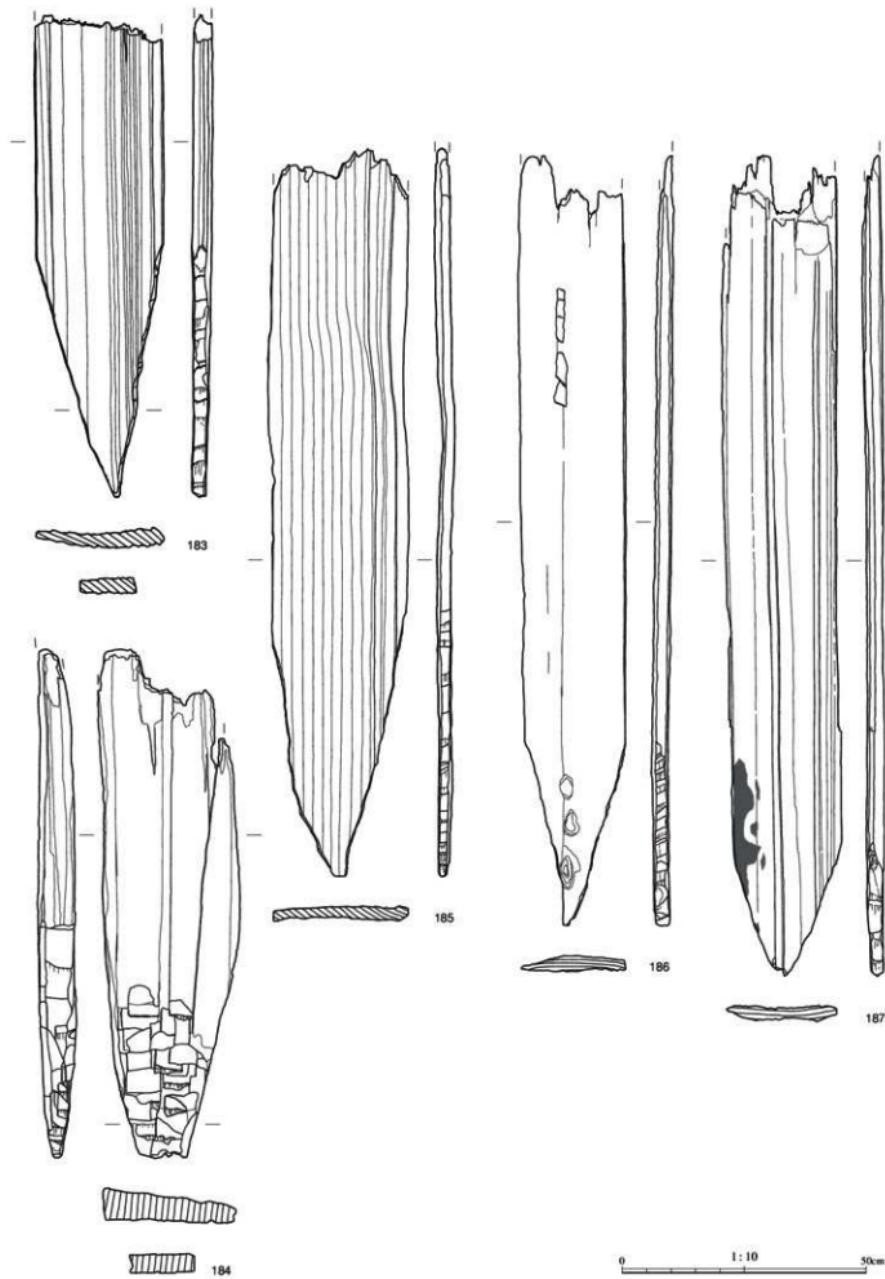


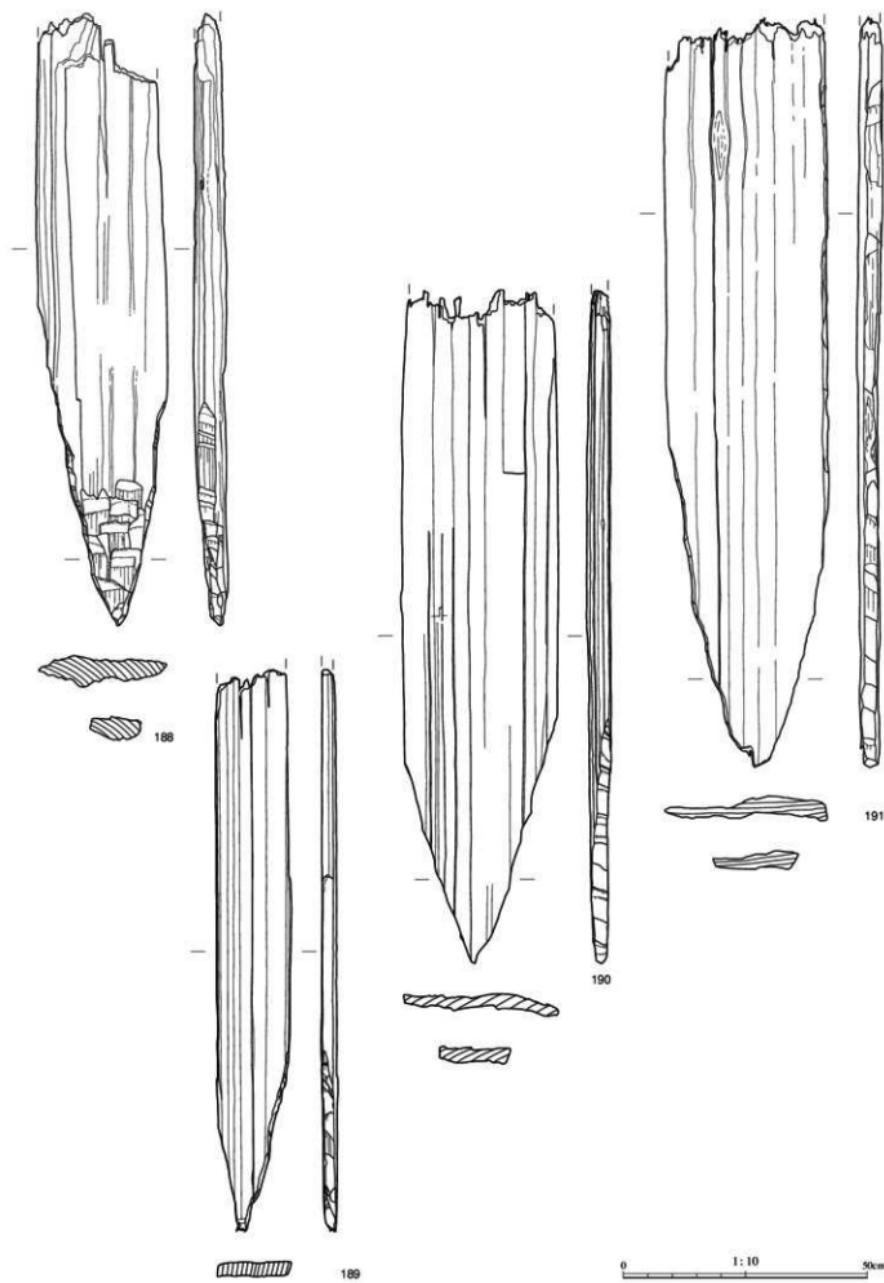


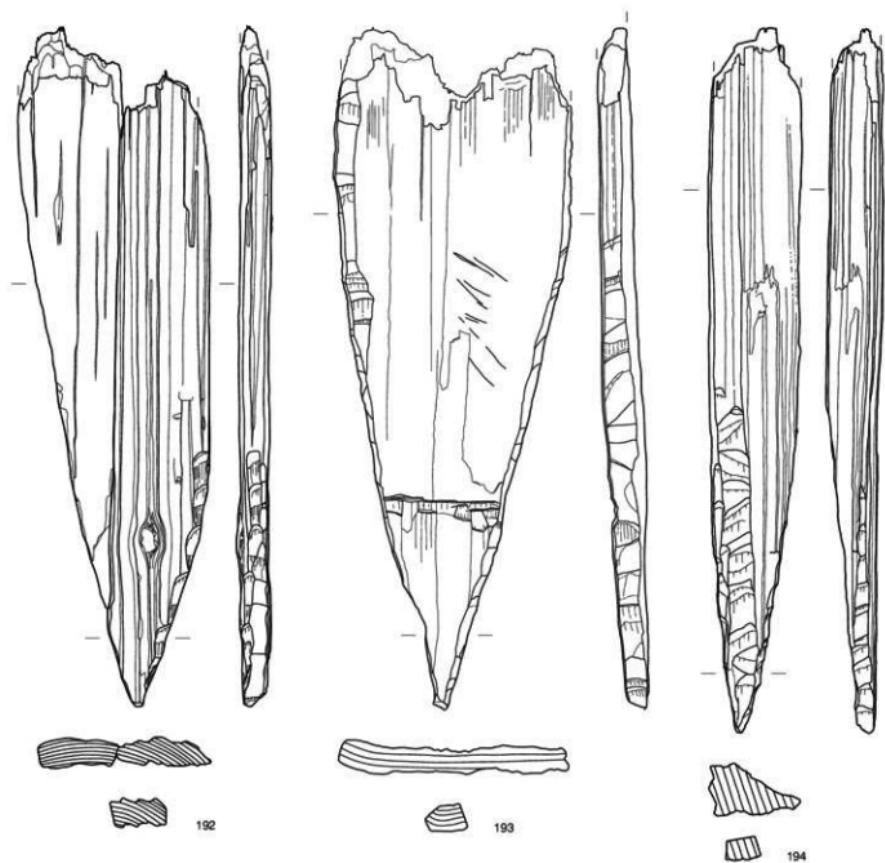


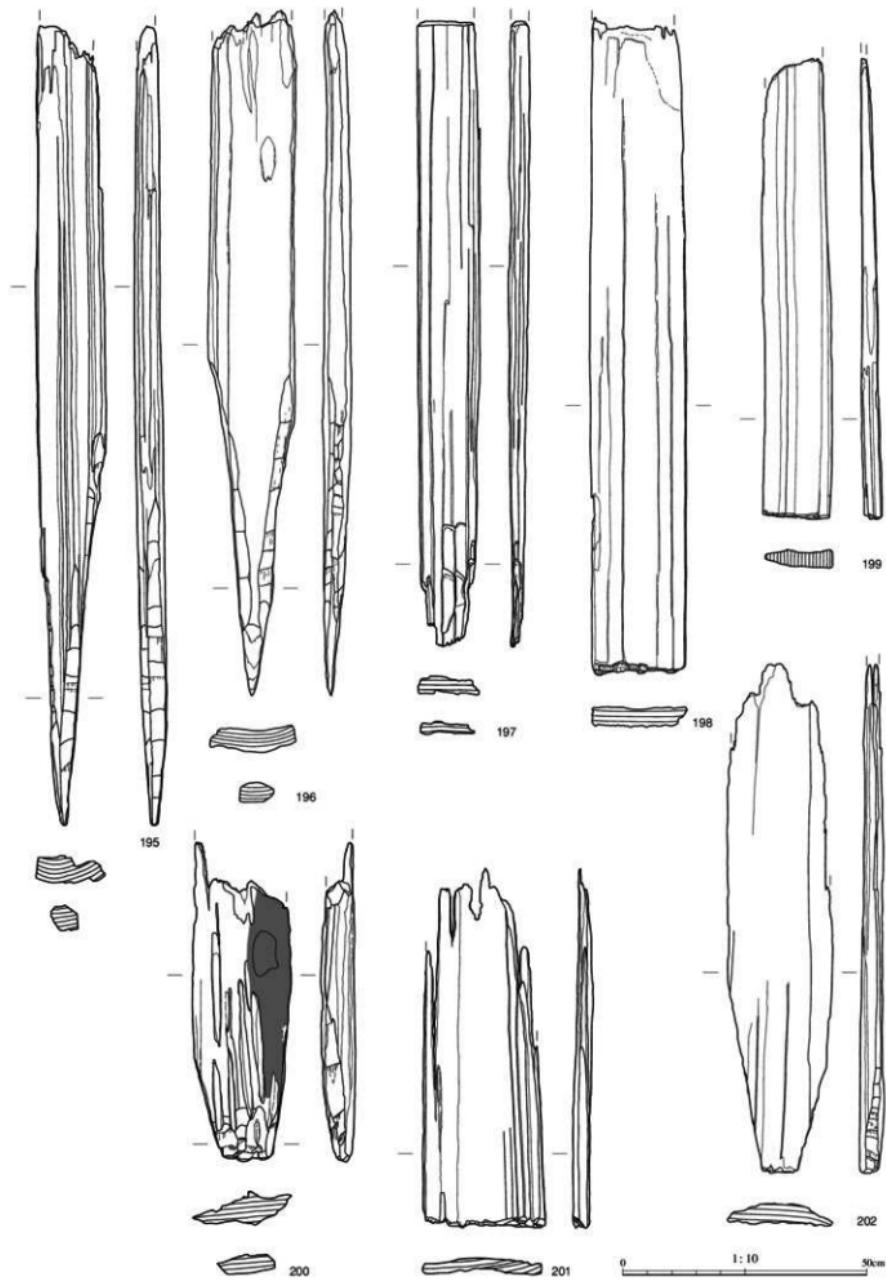


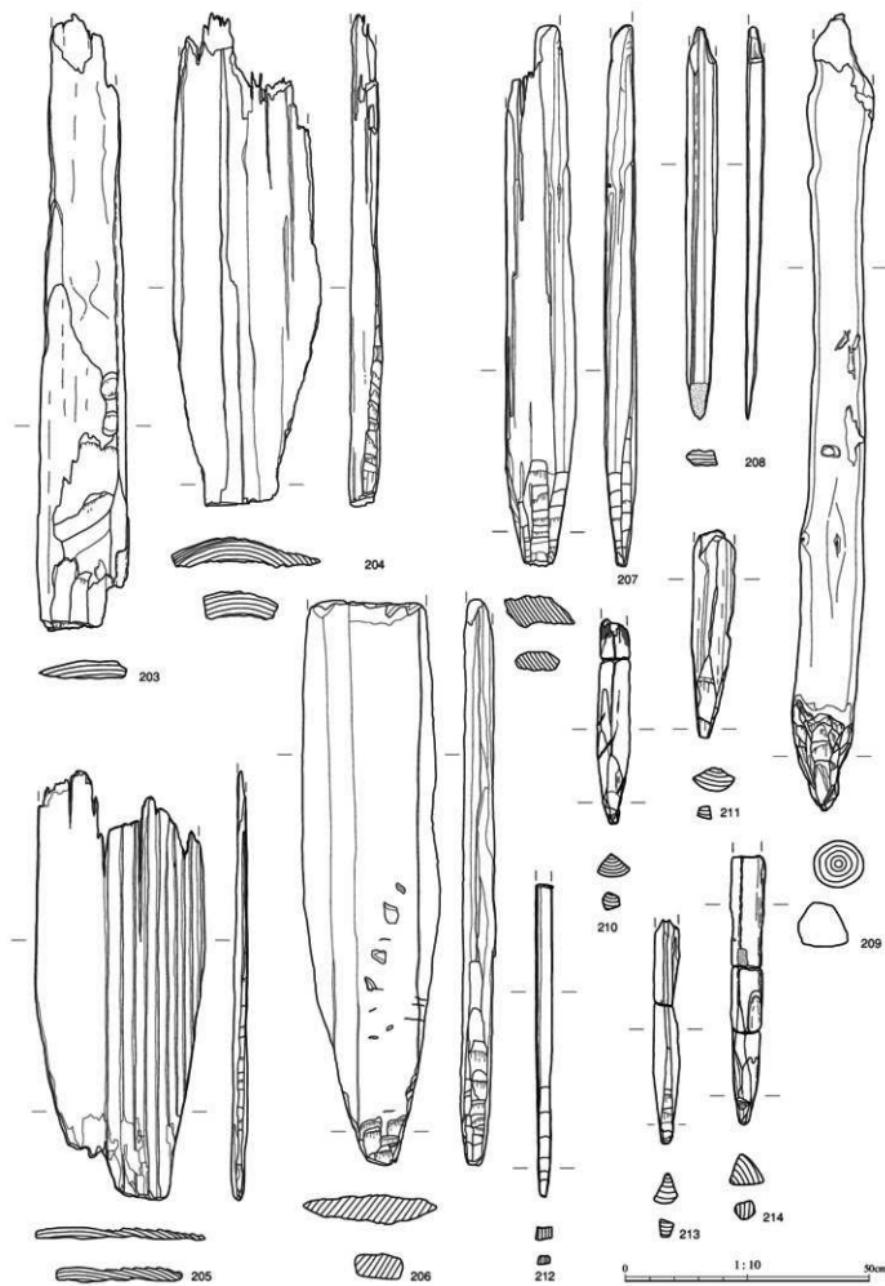


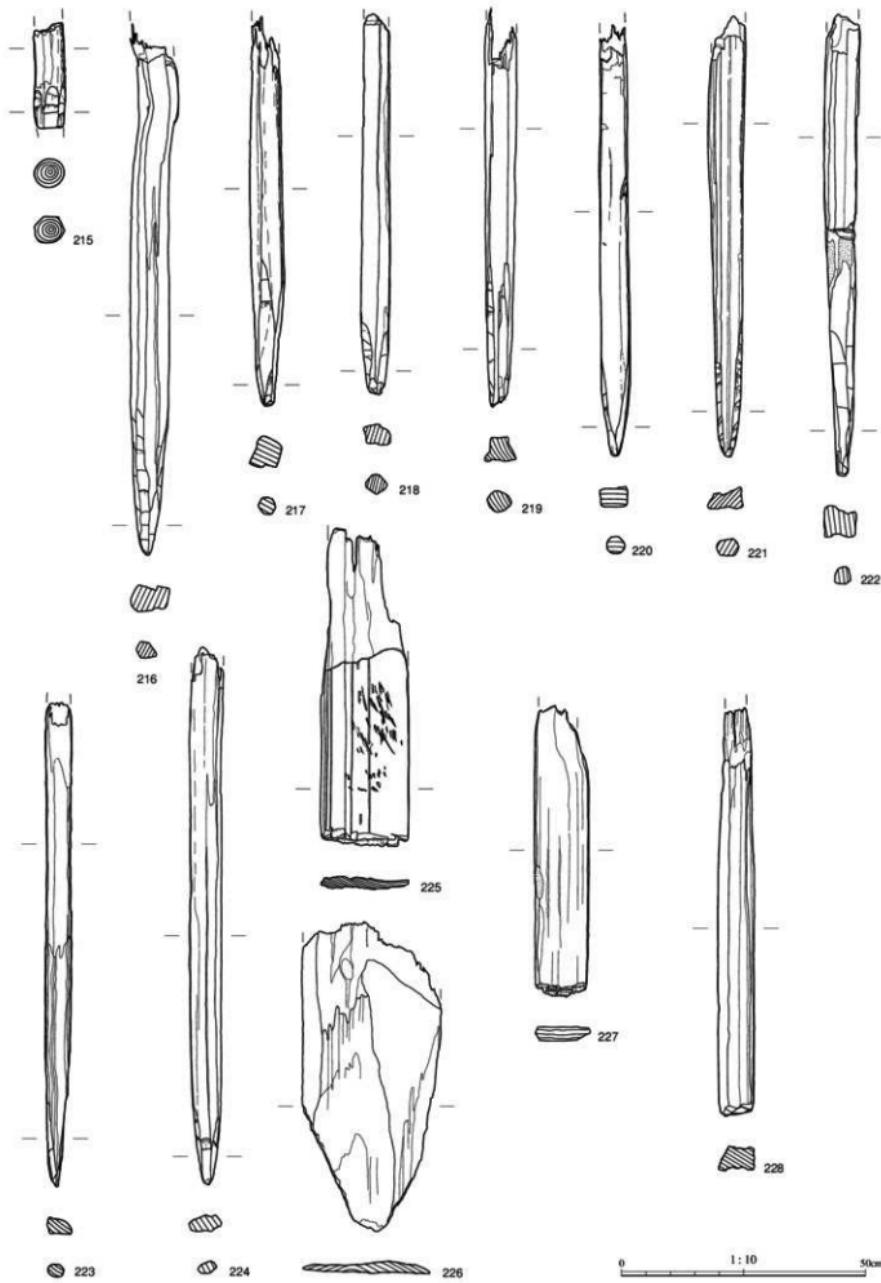












## 写真図版

### ・縮尺について

基本的に実測図と同一であるが、土器の小片は1/2としたため、頁下に縮尺を示した。

石器・木器は全て実測図と同一である。



496



432



466



137



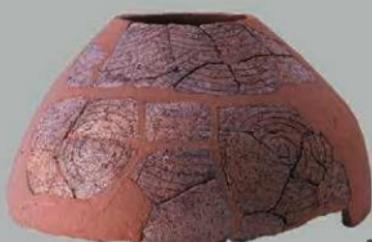
191



167



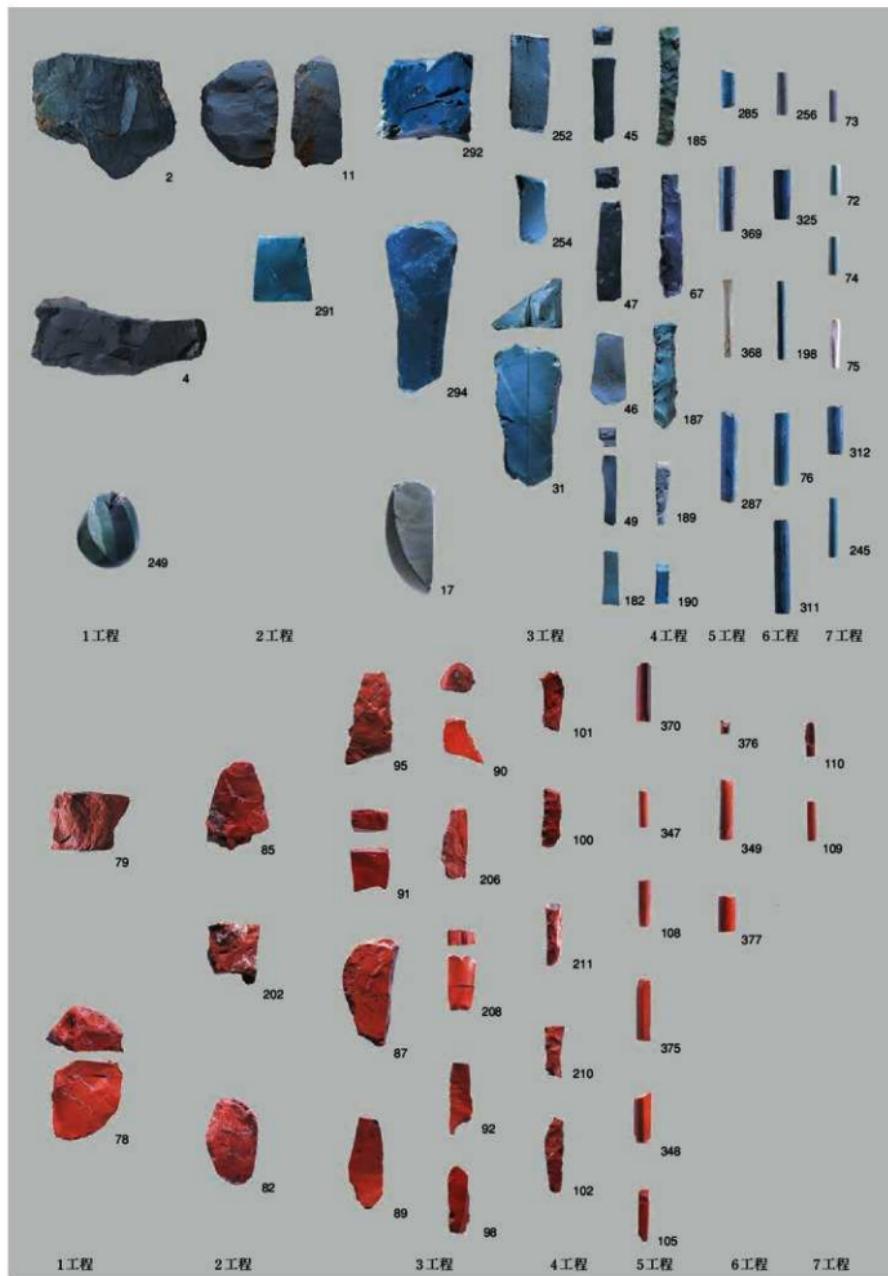
288



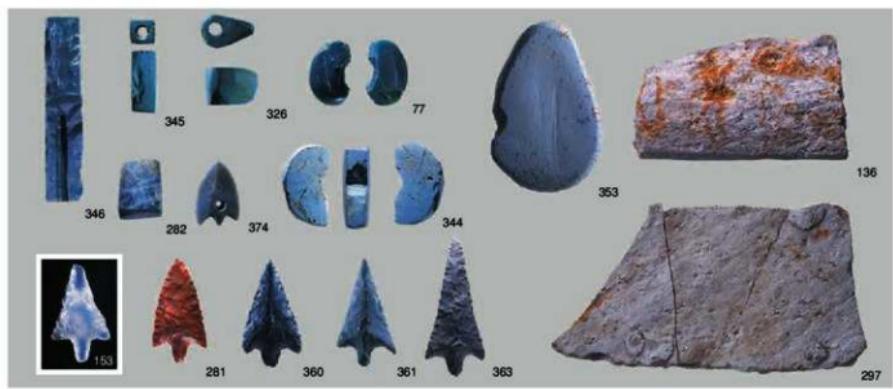
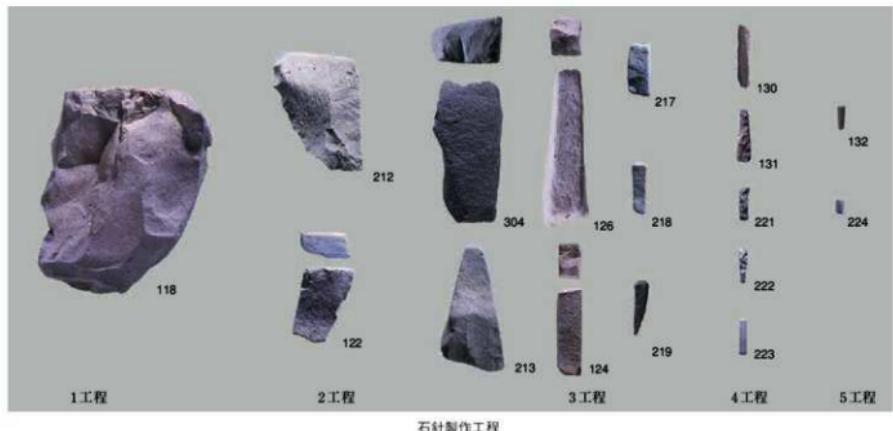
34

縮尺不同

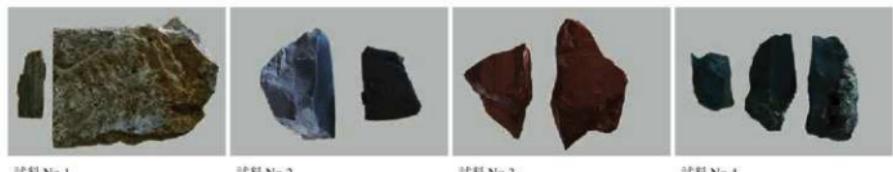
上段：壺形土器 中段：壺形土器 下段左：台付鉢 下段右：東北系の壺形土器



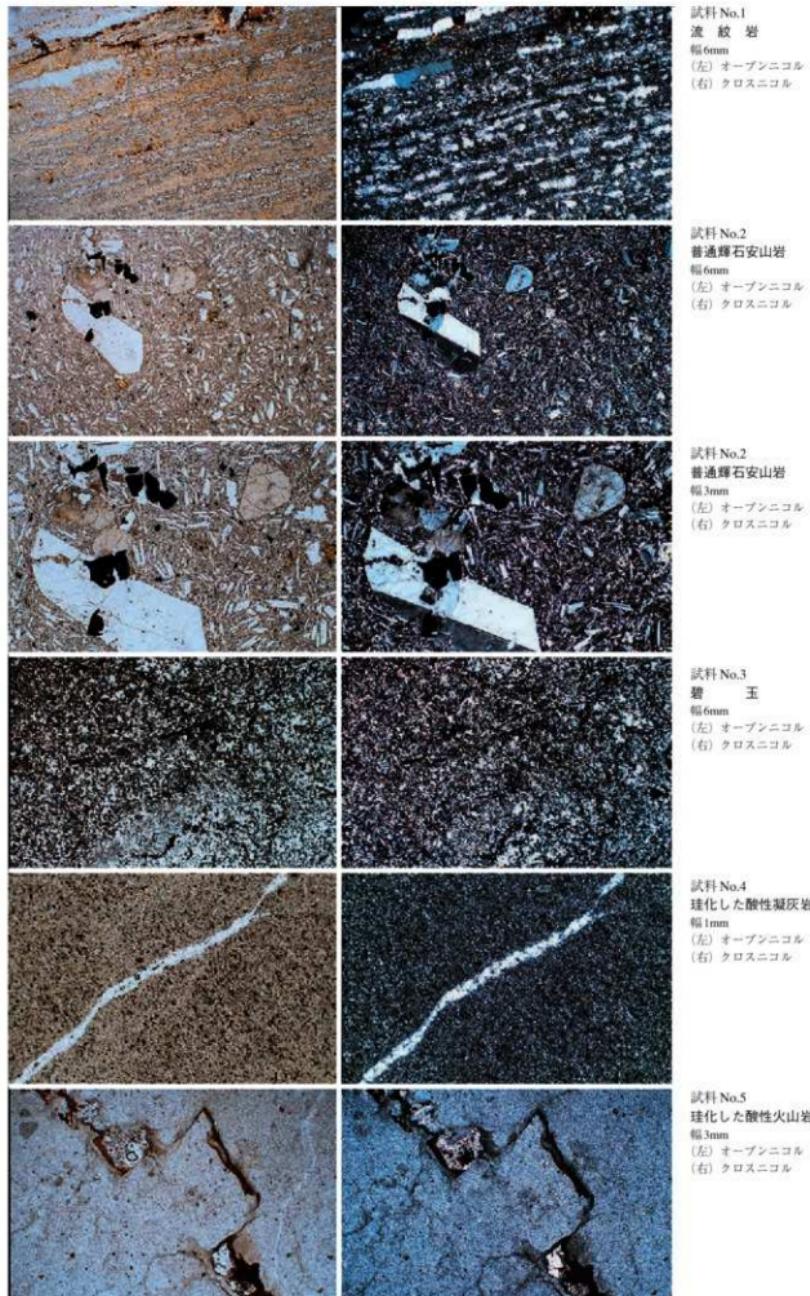
上段：緑色凝灰岩 下段：鉄石英

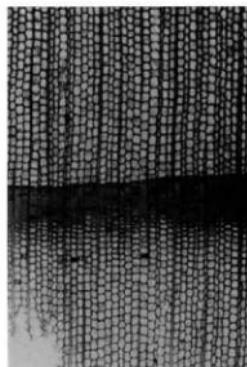


管玉・石針顕微鏡写真  
1・2 石針 約3.4倍  
3 片側穿孔の管玉と内部型取り (No.74)  
4 兩側穿孔の管玉 (No.110)  
5 管玉 7工程研磨 (No.109)

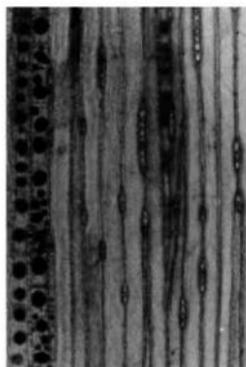


石材鑑定試料写真





1a スギ bar:1mm NGT310



1b スギ bar:0.4mm NGT310



1c スギ bar:0.1mm NGT310



2a イヌガヤ bar:1mm NGT311



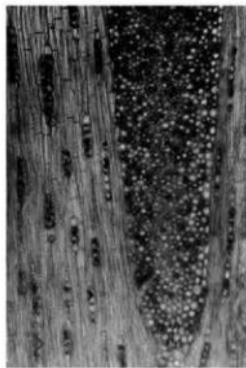
2b イヌガヤ bar:0.4mm NGT311



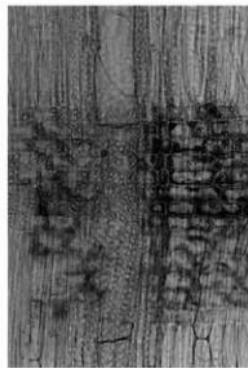
2c イヌガヤ bar:0.1mm NGT311



3a クヌギ節 bar:1mm NGT298



3b クヌギ節 bar:0.4mm NGT298

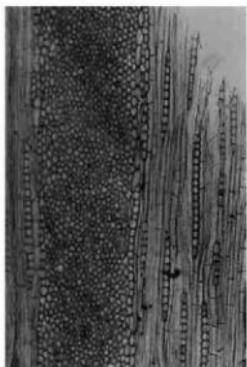


3c クヌギ節 bar:0.2mm NGT298

Bar :



4a コナラ節 bar:1mm NGT316



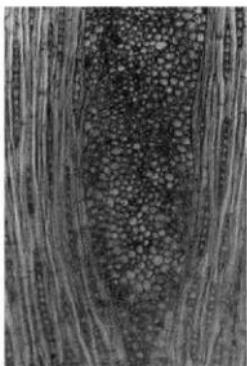
4b コナラ節 bar:0.4mm NGT316



4c コナラ節 bar:0.2mm NGT316



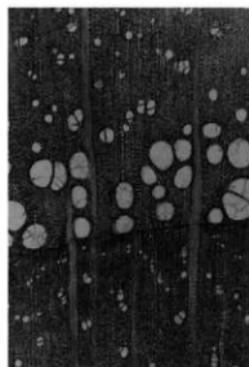
5a アカガシ亜属 bar:1mm NGT302



5b アカガシ亜属 bar:0.4mm NGT302



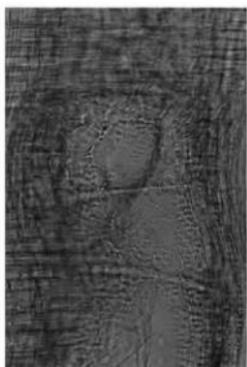
5c アカガシ亜属 bar:0.2mm NGT302



6a ヤマグワ bar:1mm NGT317

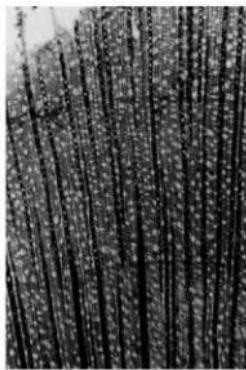


6b ヤマグワ bar:0.4mm NGT317

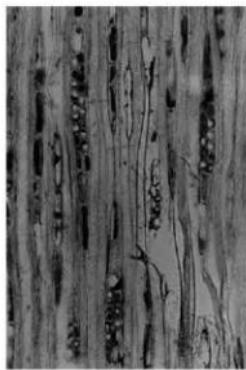


6c ヤマグワ bar:0.2mm NGT317

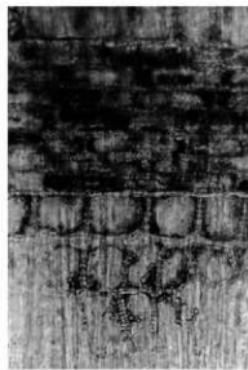
Bar :



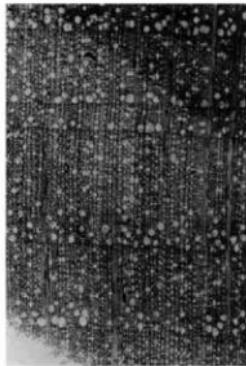
7a シキミ bar:1mm NGT290



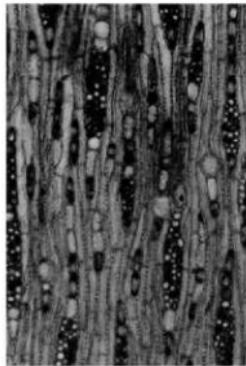
7b シキミ bar:0.4mm NGT290



7c シキミ bar:0.2mm NGT290



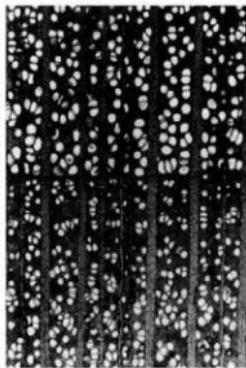
8a ヤブツバキ bar:1mm NGT300



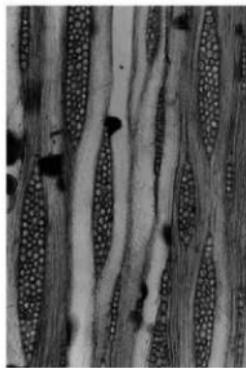
8b ヤブツバキ bar:0.4mm NGT300



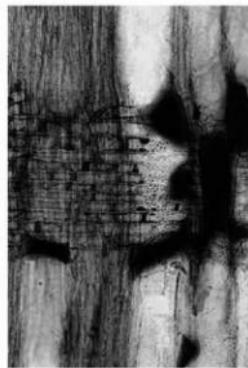
8c ヤブツバキ bar:0.2mm NGT300



9a サクラ属 bar:1mm NGT292



9b サクラ属 bar:0.4mm NGT292

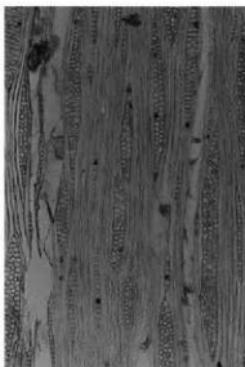


9c サクラ属 bar:0.2mm NGT292

Bar :



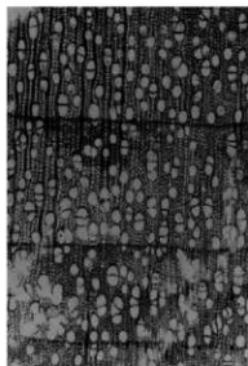
10a カエデ属 bar:1mm NGT301



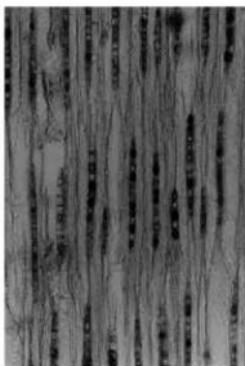
10b カエデ属 bar:0.4mm NGT301



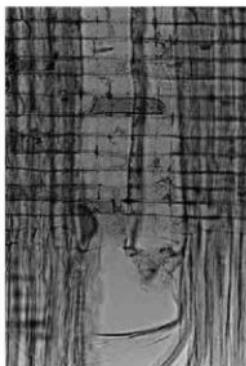
10c カエデ属 bar:0.2mm NGT301



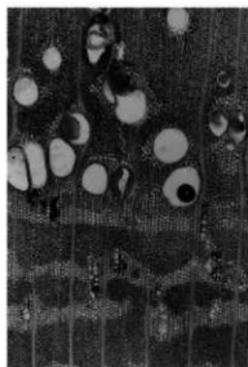
11a トノキ bar:1mm NGT297



11b トノキ bar:0.4mm NGT297



11c トノキ bar:0.2mm NGT297



12a ムクロジ bar:1mm NGT286

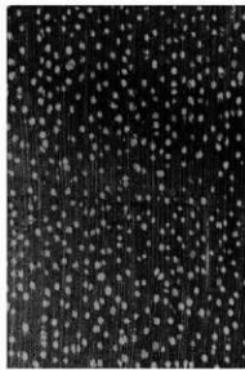


12b ムクロジ bar:0.4mm NGT286



12c ムクロジ bar:0.2mm NGT286

Bar: [ ]



13a ハイノキ属 bar:1mm NGT305

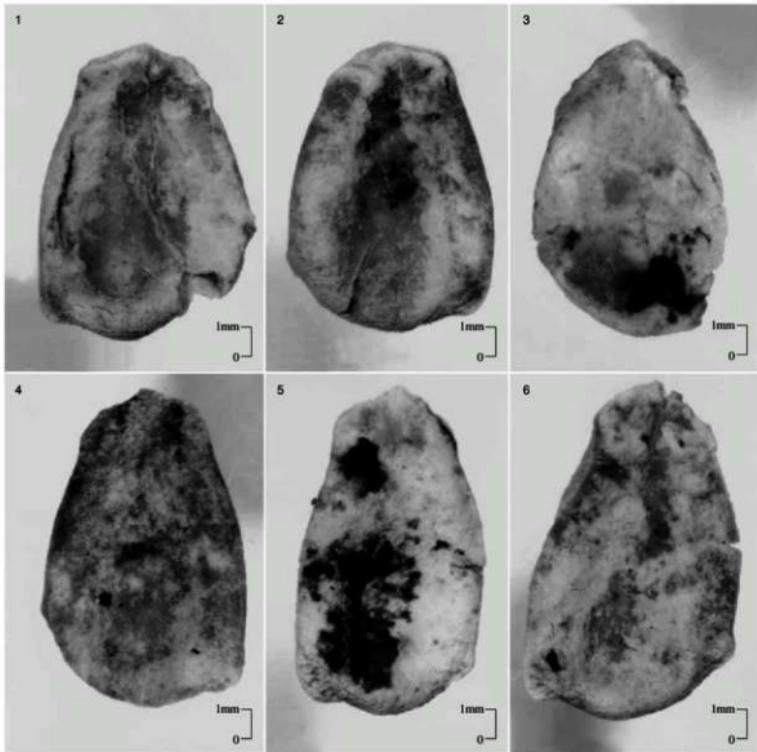


13b ハイノキ属 bar:0.4mm NGT305



13c ハイノキ属 bar:0.2mm NGT305

Bar :



ヒョウタン仲間、種子 SD115出土



1 SD1



2 SD1



3 SD2, 21, 22



4 SD4



5 SD5



6 SD6, 7



7 SD6, 7

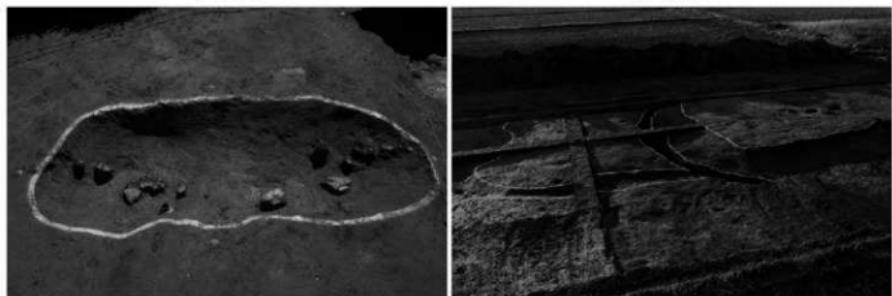


8 SD6, 7



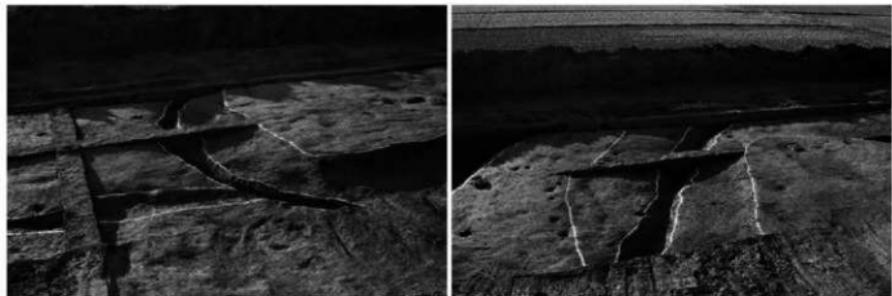
1 SK 10

2 SK 10



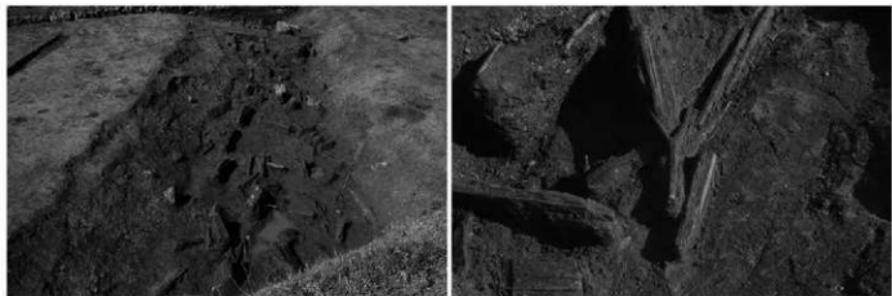
3 SK 11

4 SD 13～16



5 SD 16

6 SD 17

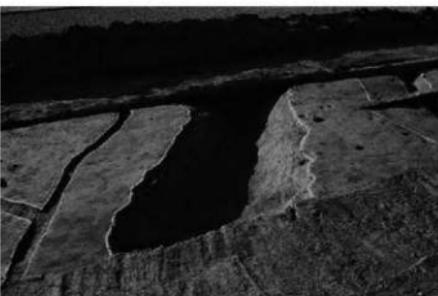


7 SD 18

8 SD 18



1 SD 18



2 SD 18



3 SD 19, 20



4 58～62区全景



5 SD 20



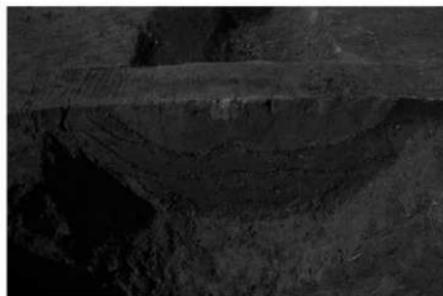
6 SD 21



7 SD 23



8 SD 23



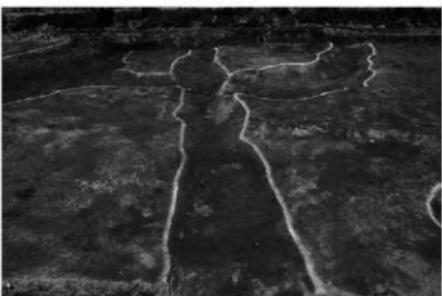
1 SD 25



2 SD 25



3 SX 26



4 SD 28, 29



5 SD 30



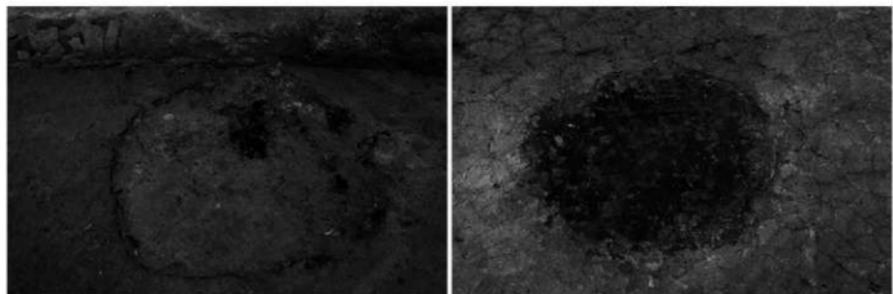
6 SD 34



7 SD 34

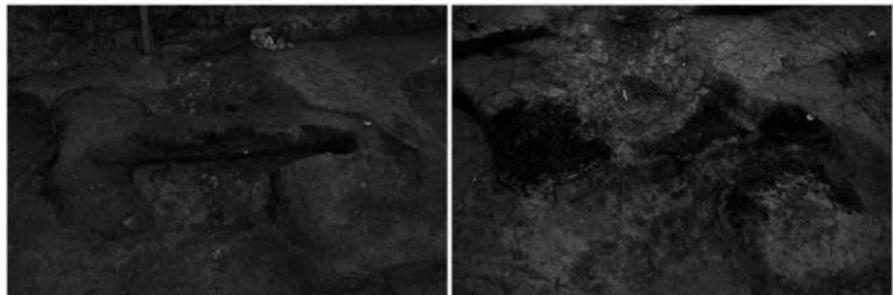


8 69～74区全景



1 SK 102

2 SK 102



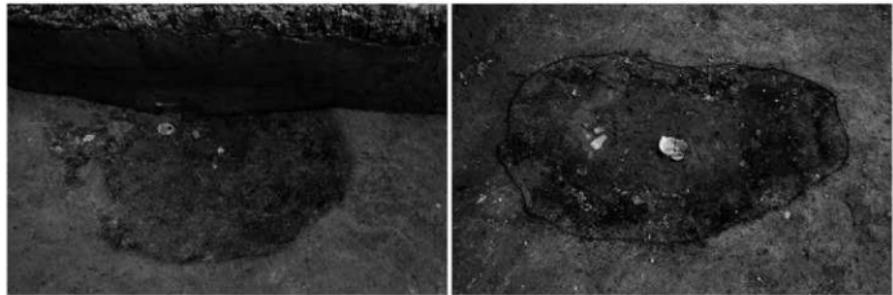
3 SK 103

4 SK 103



5 SK 107

6 SK 108



7 SK 108

8 SK 109



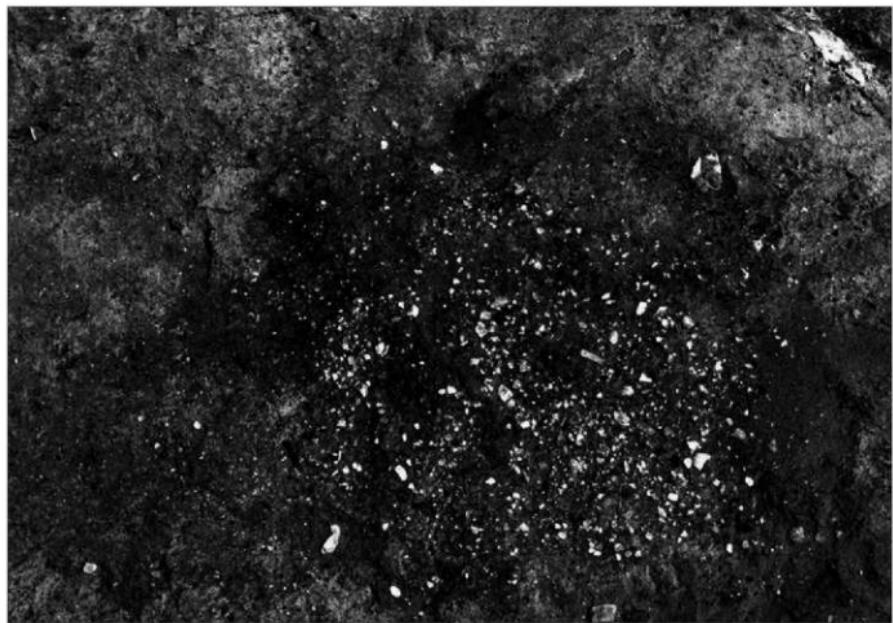
1 S X 116, 117 (玉作関連資料出土状況)



2 S X 116 (同上)



1 S X 117 (玉作関連資料出土状況)



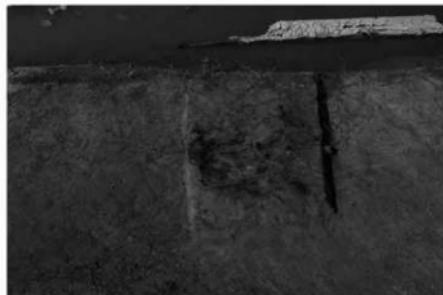
2 S X 111 (玉作関連チップ出土状況)



1 SX 118～120



2 SX 125



3 SX 126



4 SB 110



5 SB 110（周溝北）



6 SB 110（周溝南）



1 S B 110 (上面)



2 S B 110 (下面)



1 SB 110



2 SB 114



3 SB 114



4 SB 114 (周溝南)



5 SB 114 (周溝北)



1 SB 114



2 SB 115



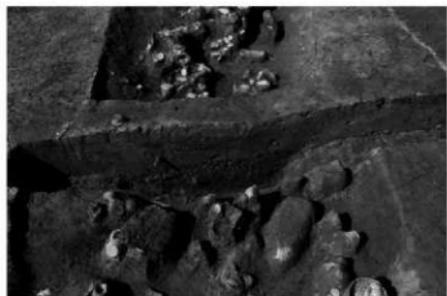
3 SD 112



4 SD 112



5 SD 112



1 SD 112



2 SD 112



3 SD 112



4 SD 112



5 SD 112



6 SD 112



7 SD 112



8 SD 112



1 板杭列1



2 板杭列1



1 板杭列1



2 板杭列1



3 板杭列2



4 板杭列8



5 板杭列1



1 板杭列1



2 板杭列1



3 板杭列1



4 板杭列7



5 S D 113



6 S K 121



7 S K 121



8 S K 122



1 SK 122, 123



2 SK 124



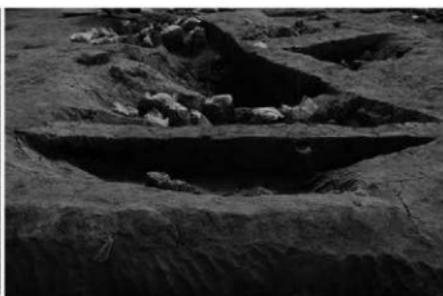
3 SK 124



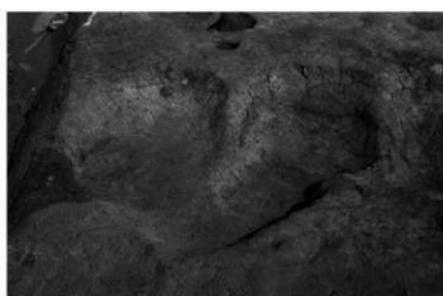
4 SK 127



5 SK 127



6 SK 128



7 SK 128

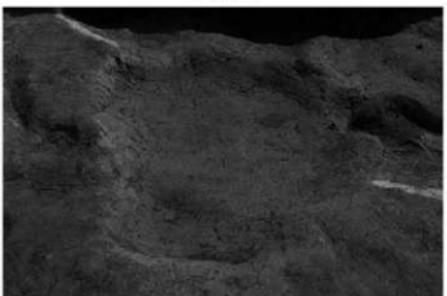


8 SK 130



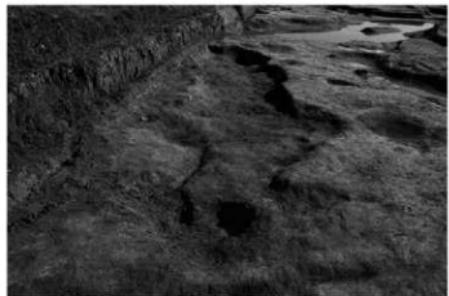
1 SK 131

2 SK 131



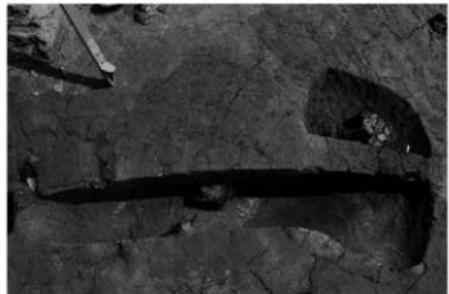
3 SK 132

4 SK 132



5 SK 134

6 SK 135



7 SK 139

8 SK 139



1 SK 141



2 SK 141



3 SK 142



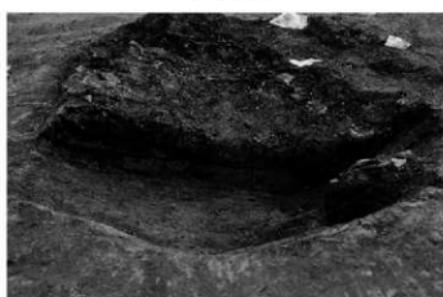
4 SK 143



5 SK 144



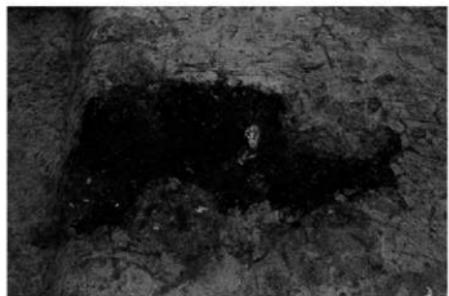
6 SK 144



7 SK 145



8 SK 145



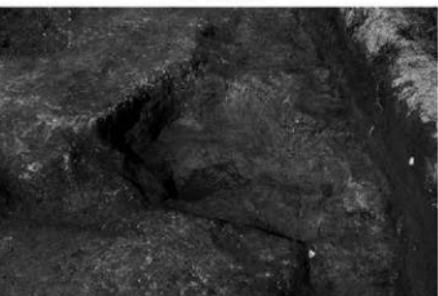
1 SK 146



2 SK 146



3 SK 147



4 SK 148



5 SK 151



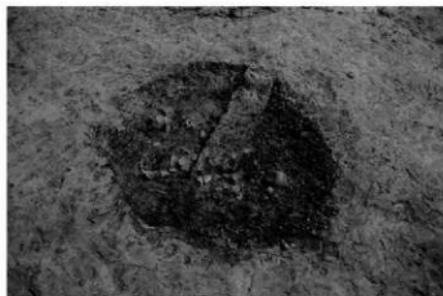
6 SK 151



7 SK 152



8 SK 152



1 SK 153



2 SK 154



3 SK 154



4 SK 155



5 SK 155



6 SK 155



7 SK 156

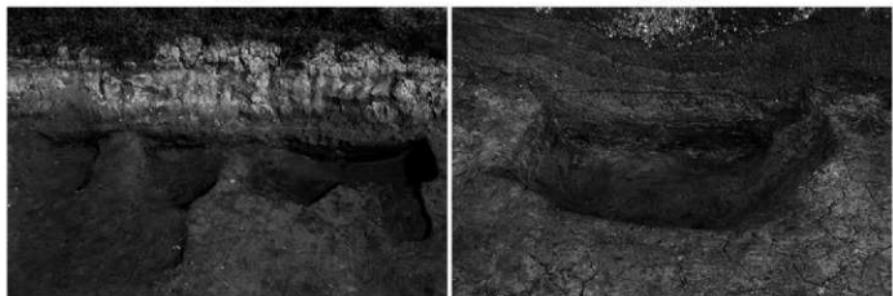


8 SK 156



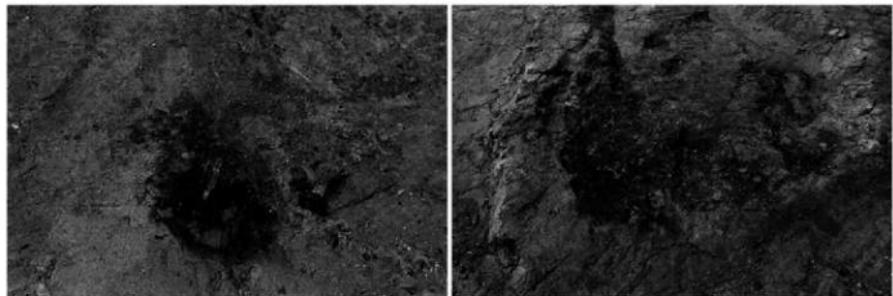
1 SK 157

2 SK 157



3 SK 157, 158

4 SK 162



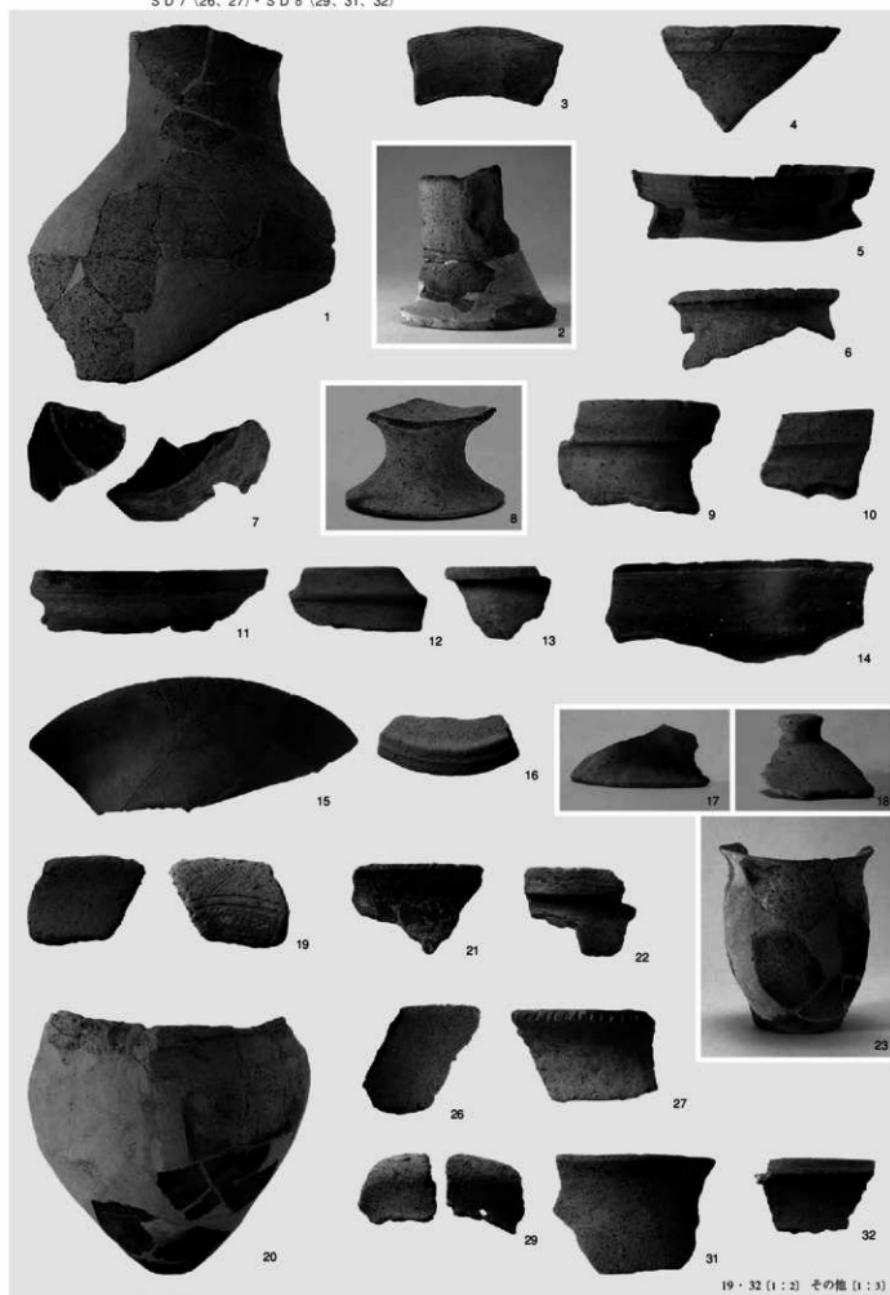
5 SK 163-1

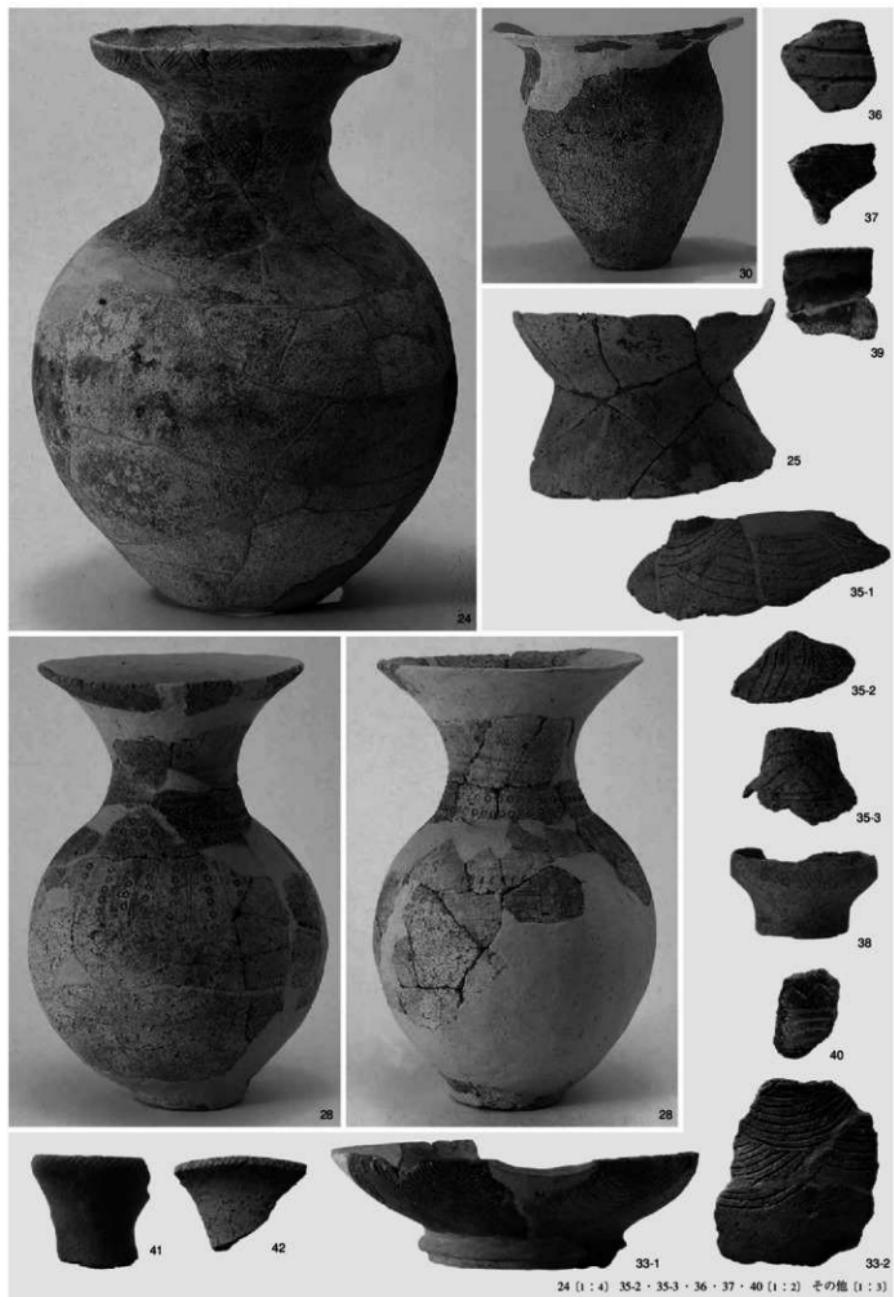
6 SK 163-2



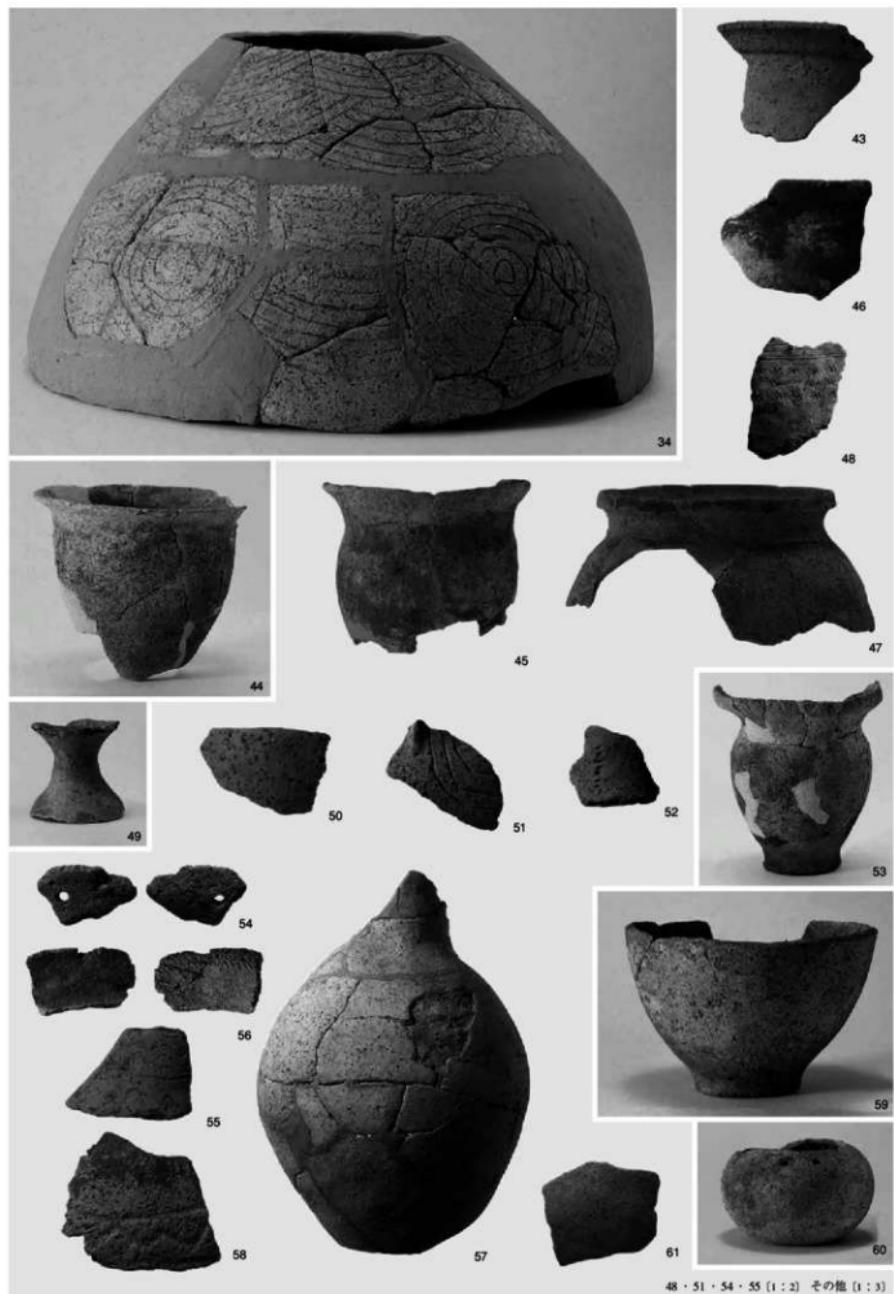
7 SX 164

8 SK 165, 166

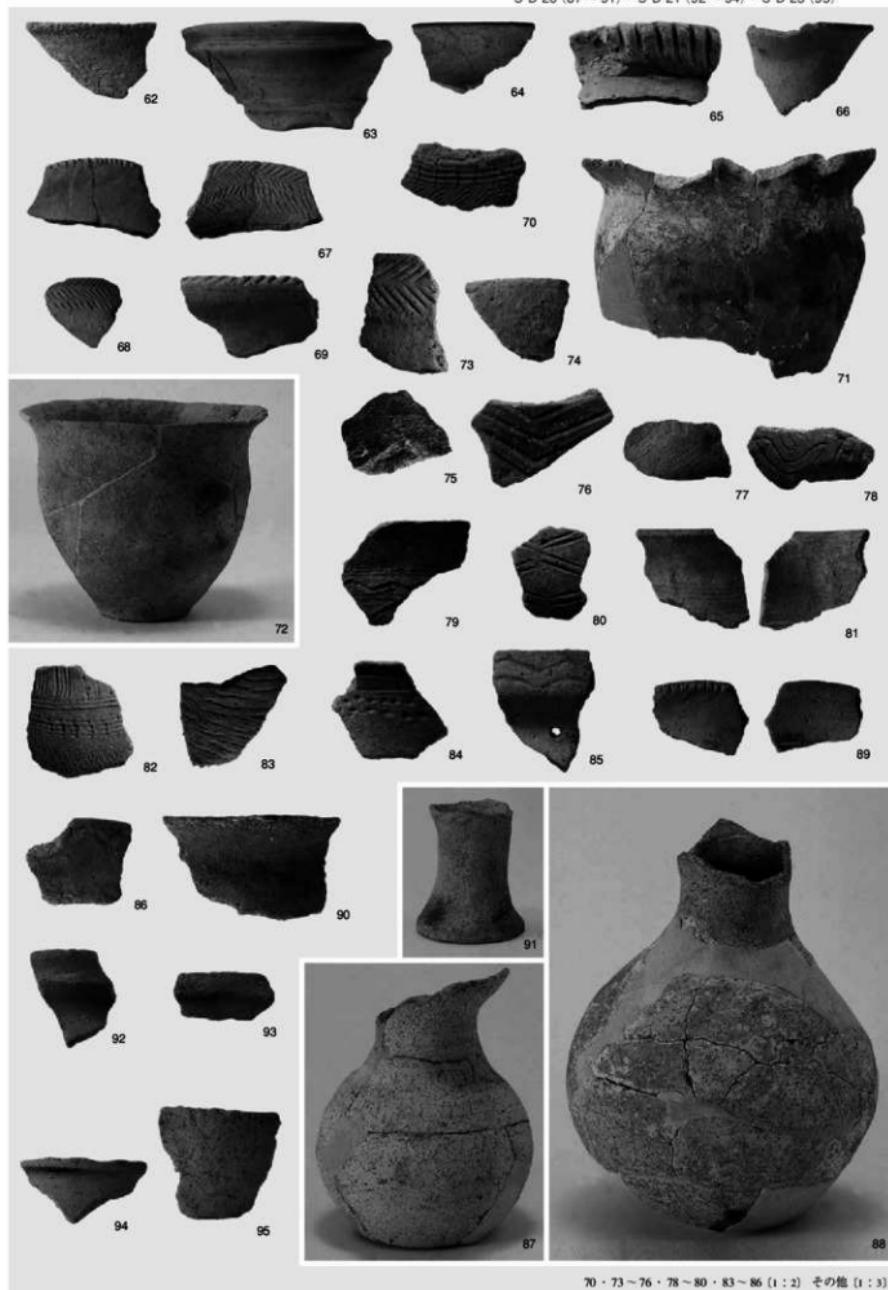


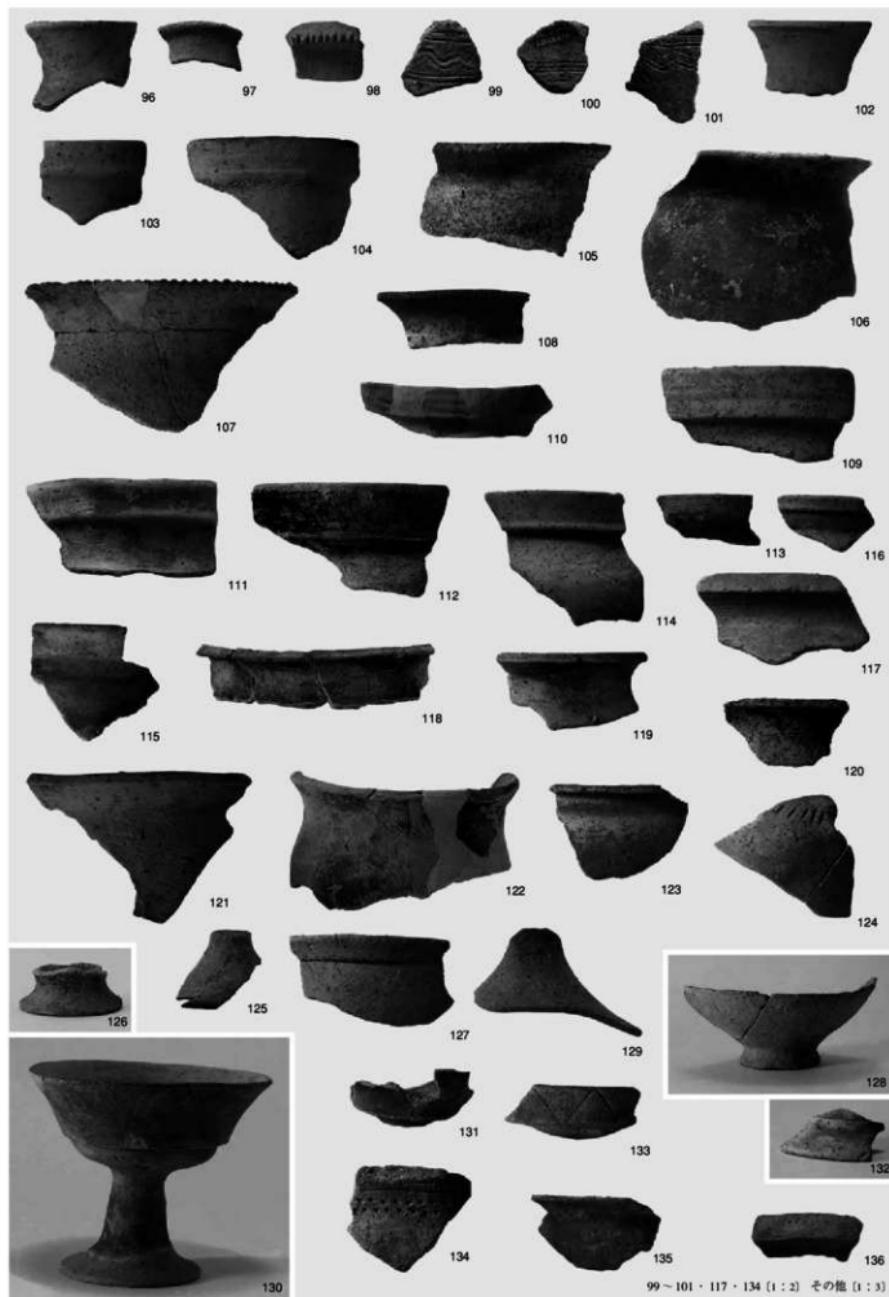


24 (1 : 4) 35-2・35-3・36・37・40 (1 : 2) その他 (1 : 3)

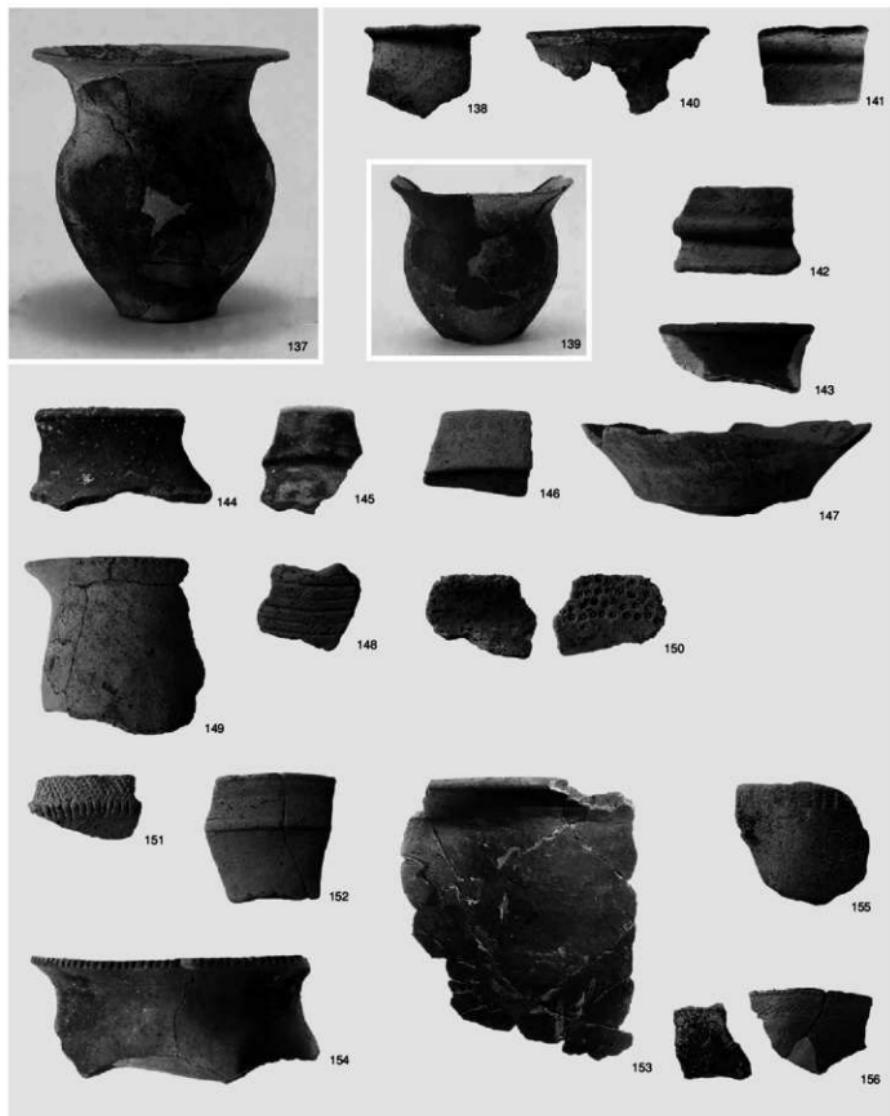


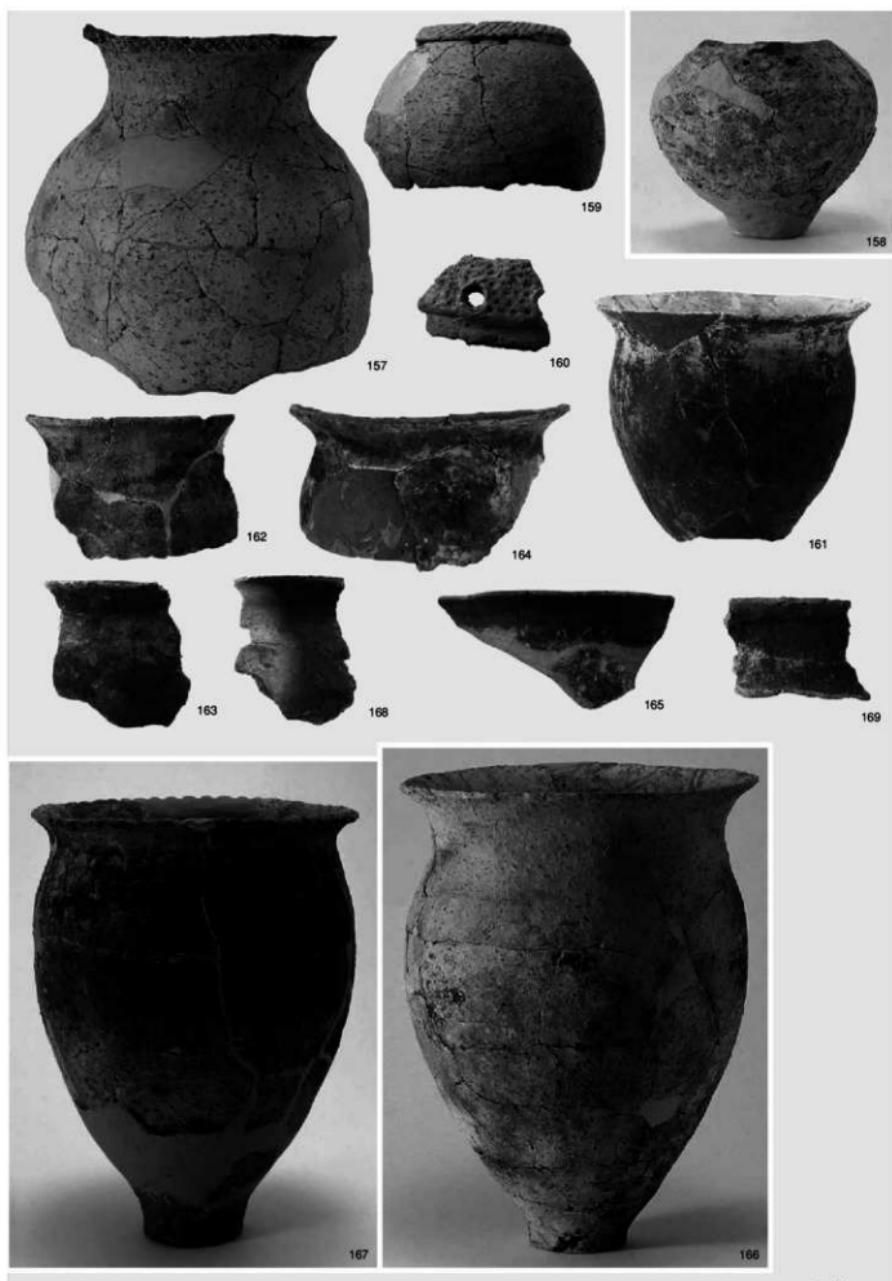
48・51・54・55 (1:2) その他 (1:3)

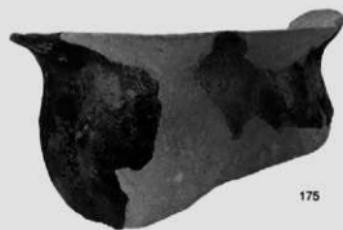


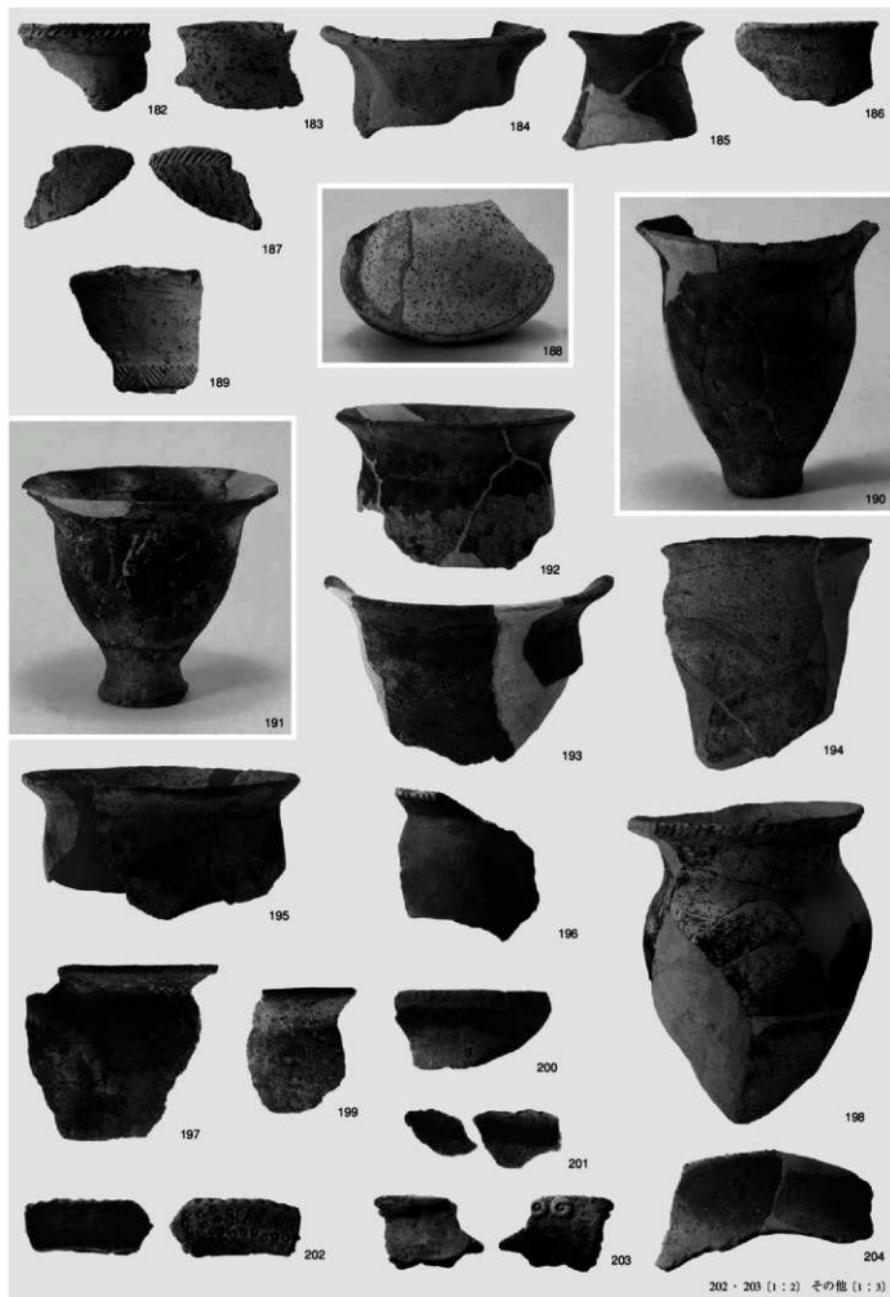


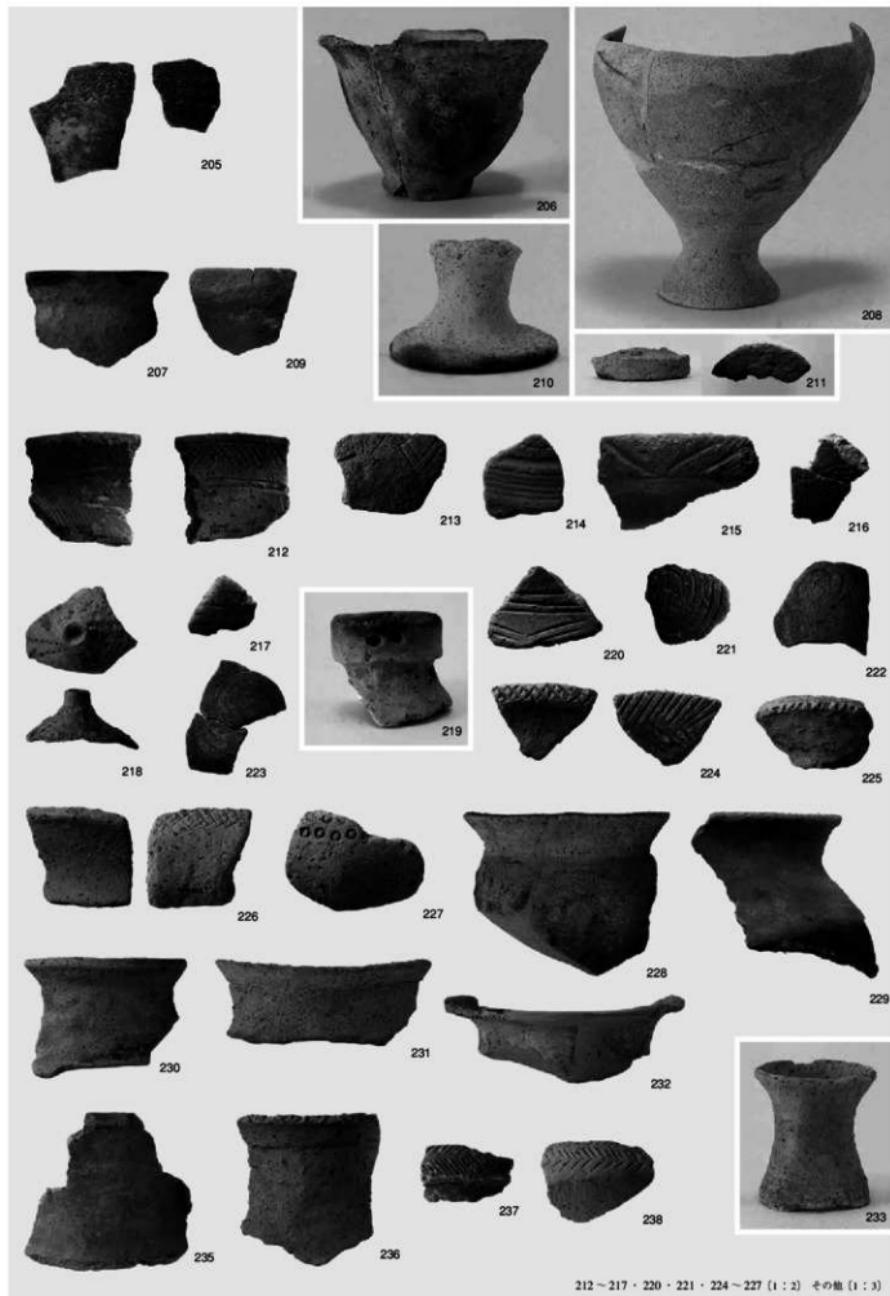
99~101・117・134 (1:2) その他 (1:3)



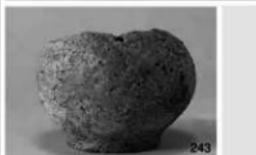




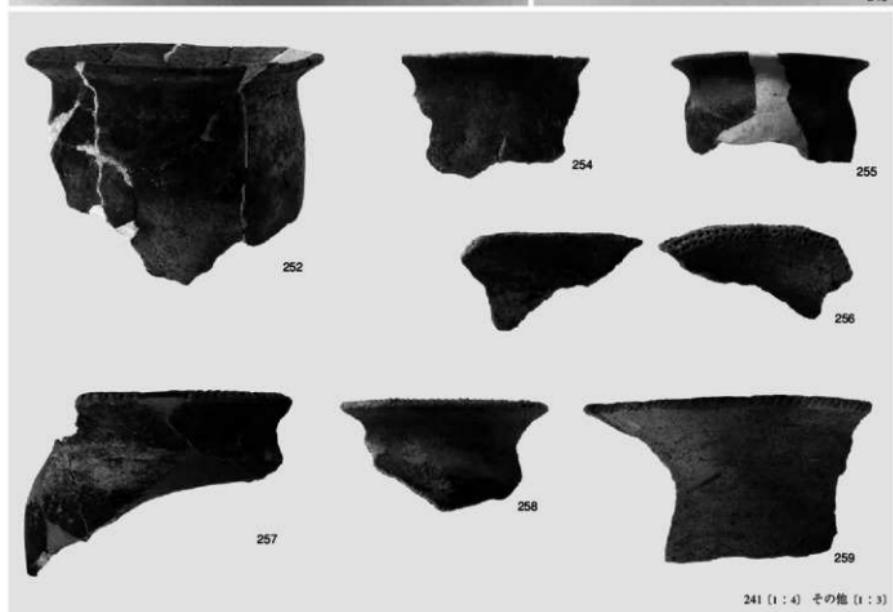




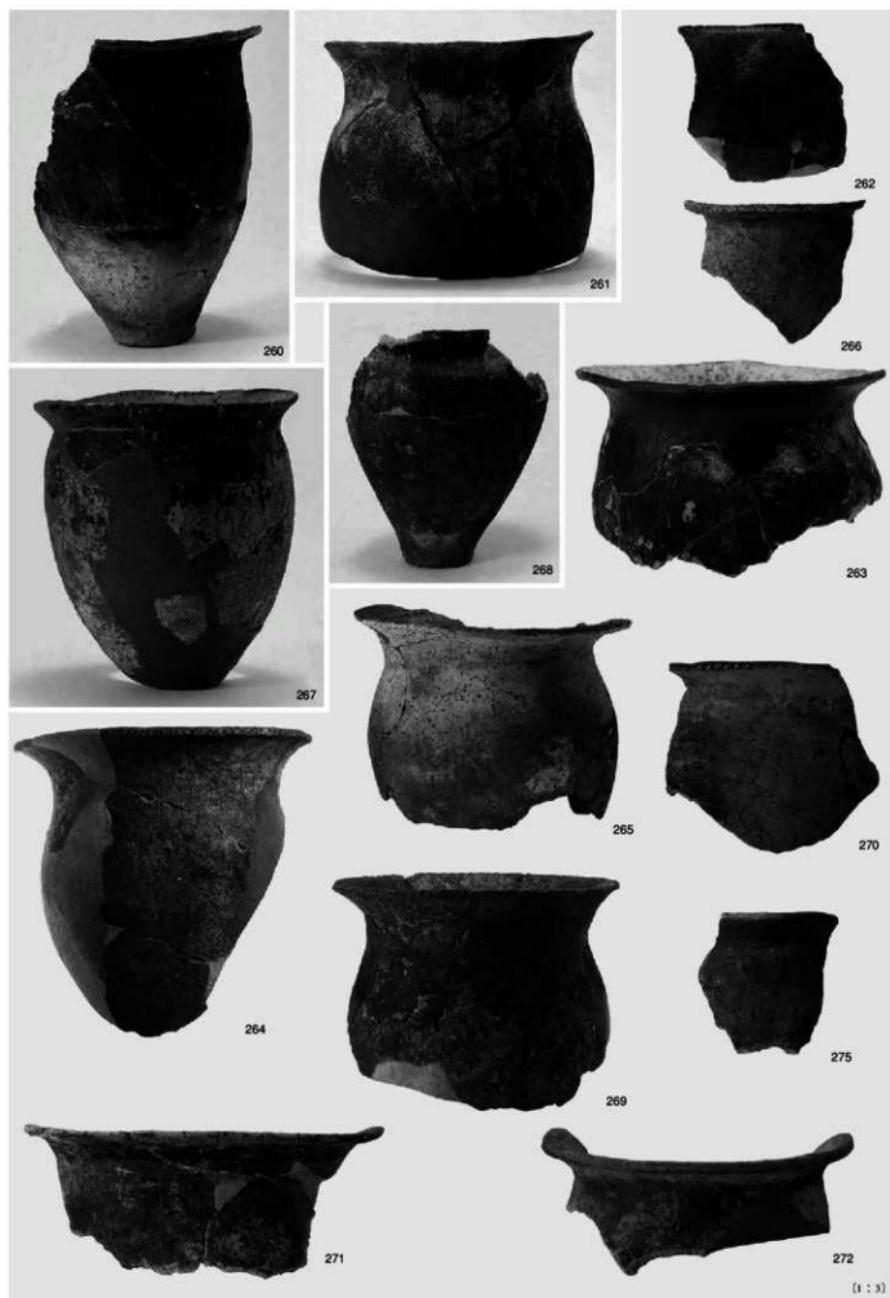
212~217・220・221・224~227 (1:2) その他 (1:3)

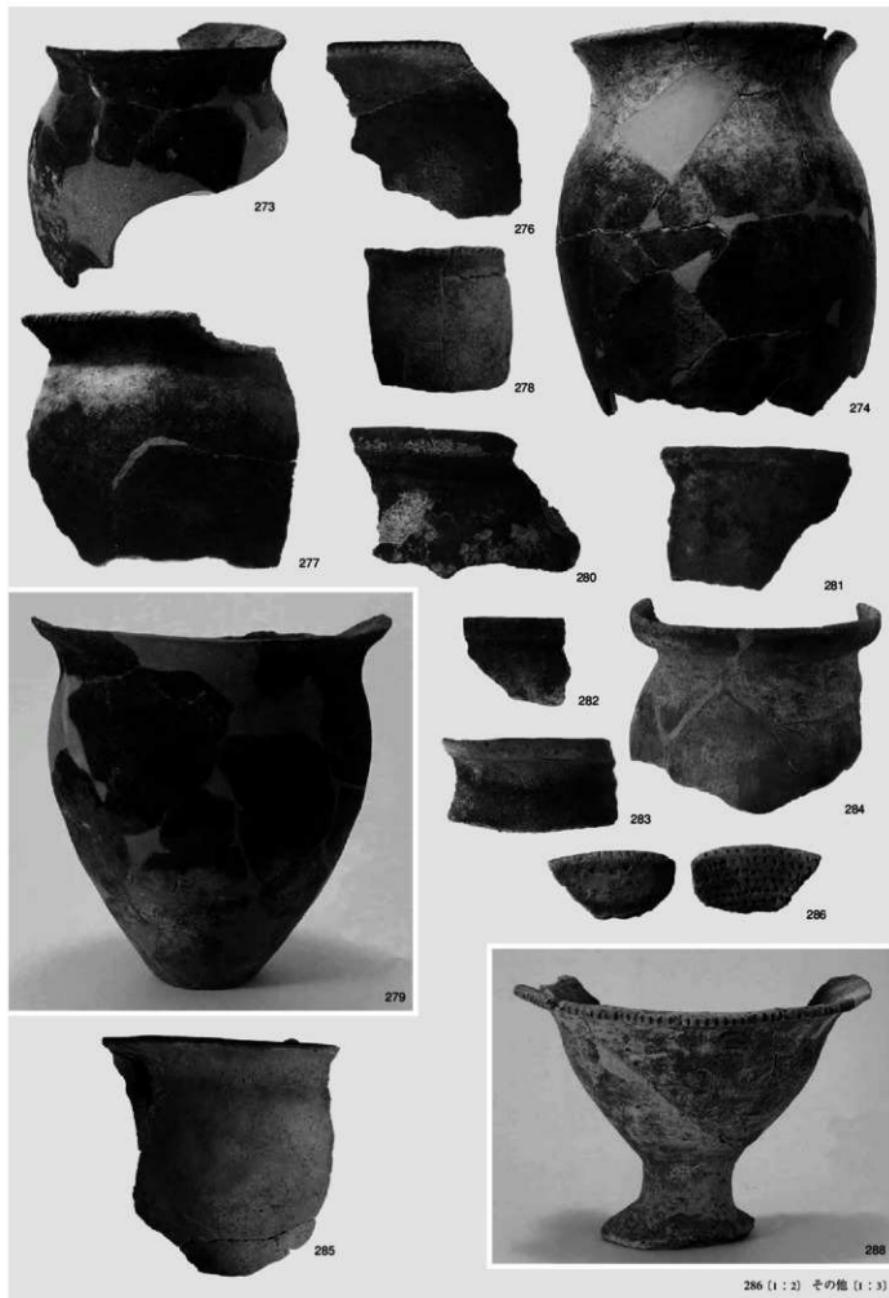


240 (1 : 6) 245 (1 : 2) その他 (1 : 3)



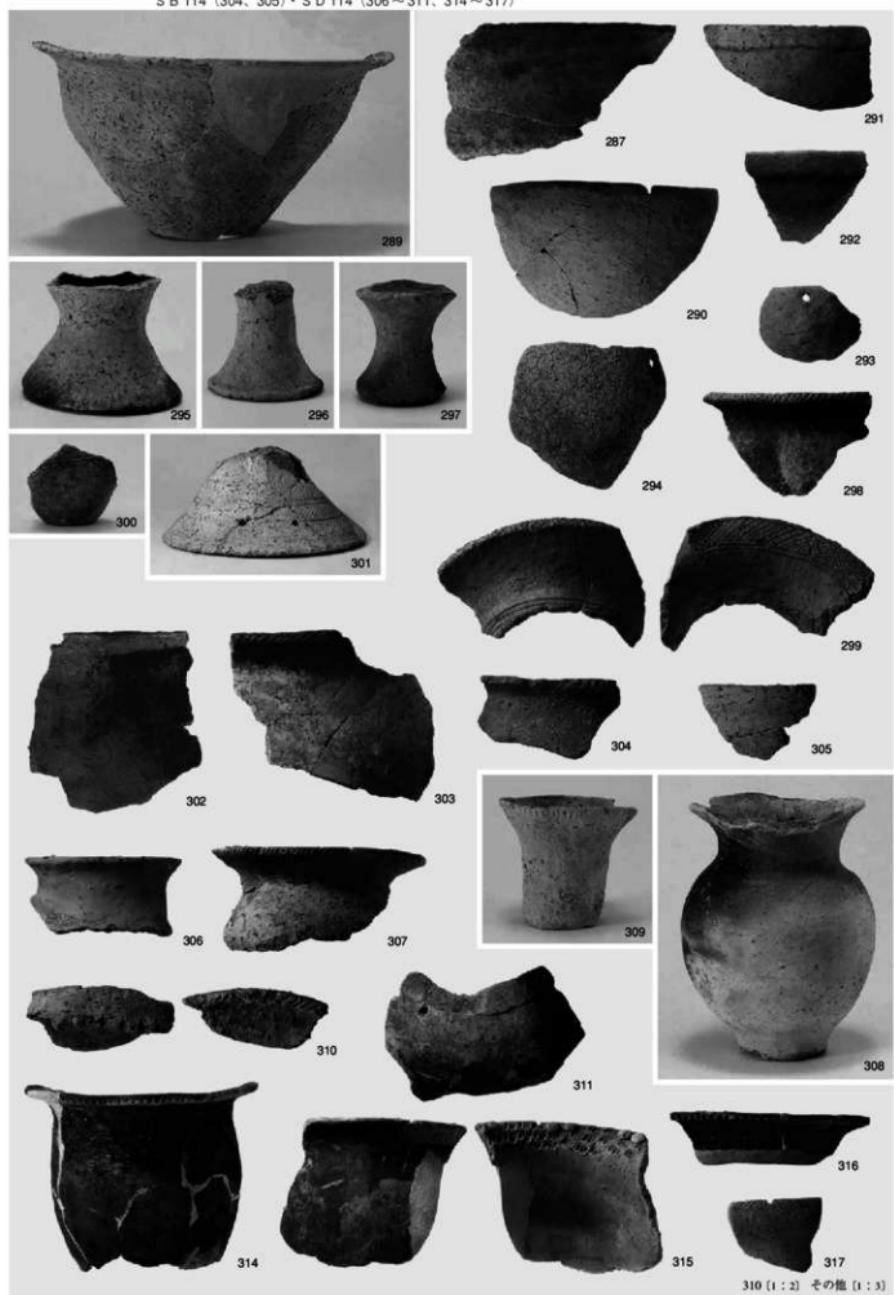
241 (1 : 4) その他 (1 : 3)

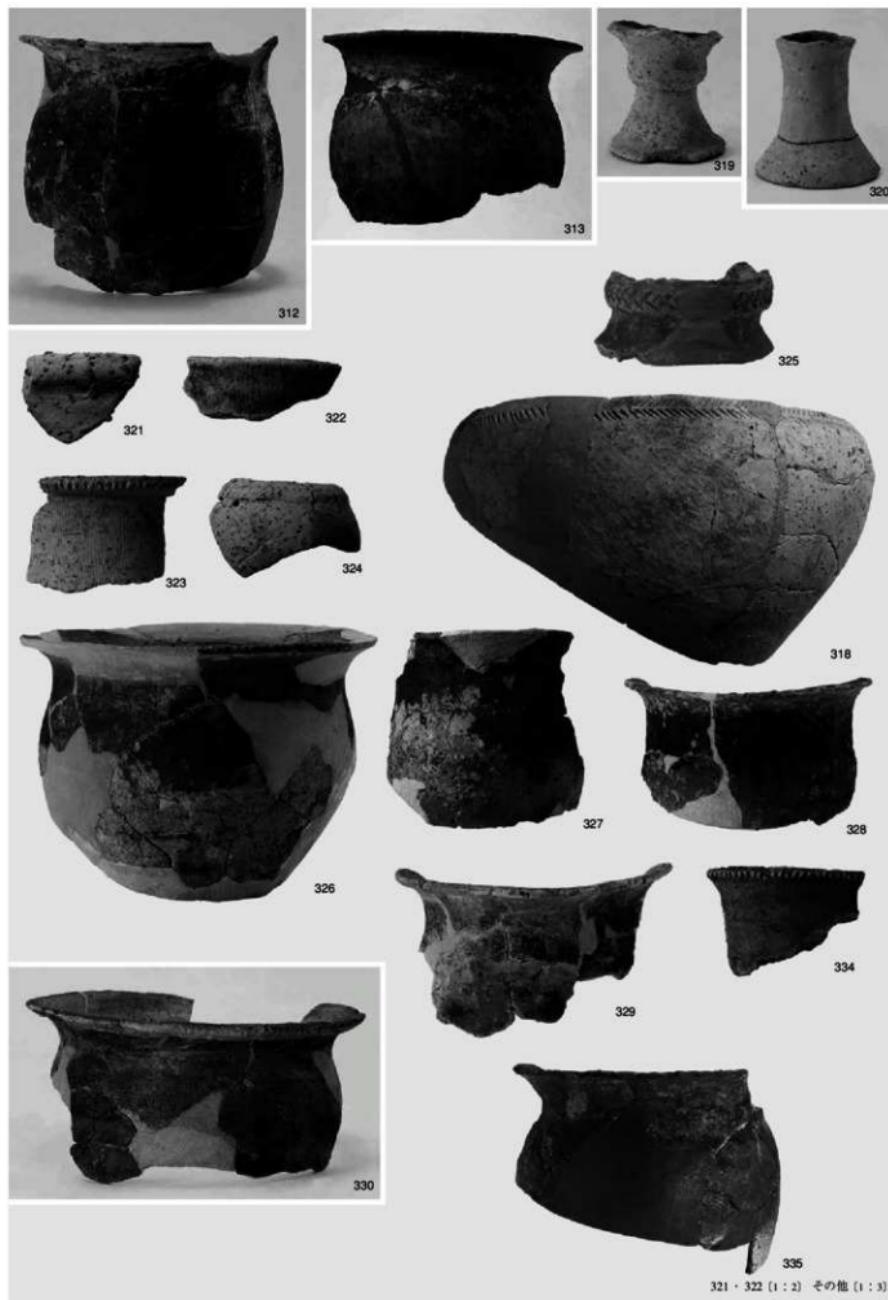




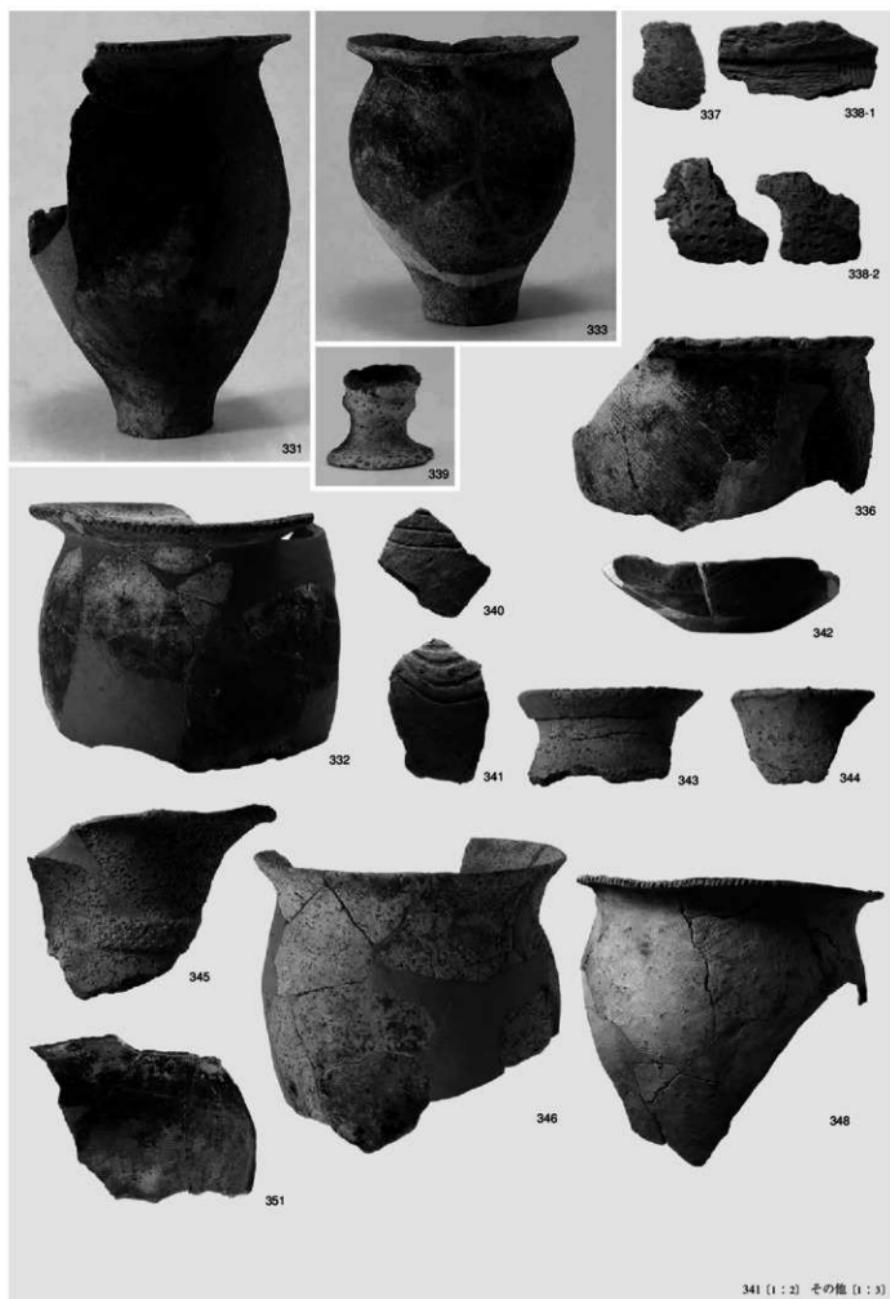
弥生土器15 下層 S D 112 (287、289～301)・S D 113 (302、303)  
S B 114 (304、305)・S D 114 (306～311、314～317)

図版167





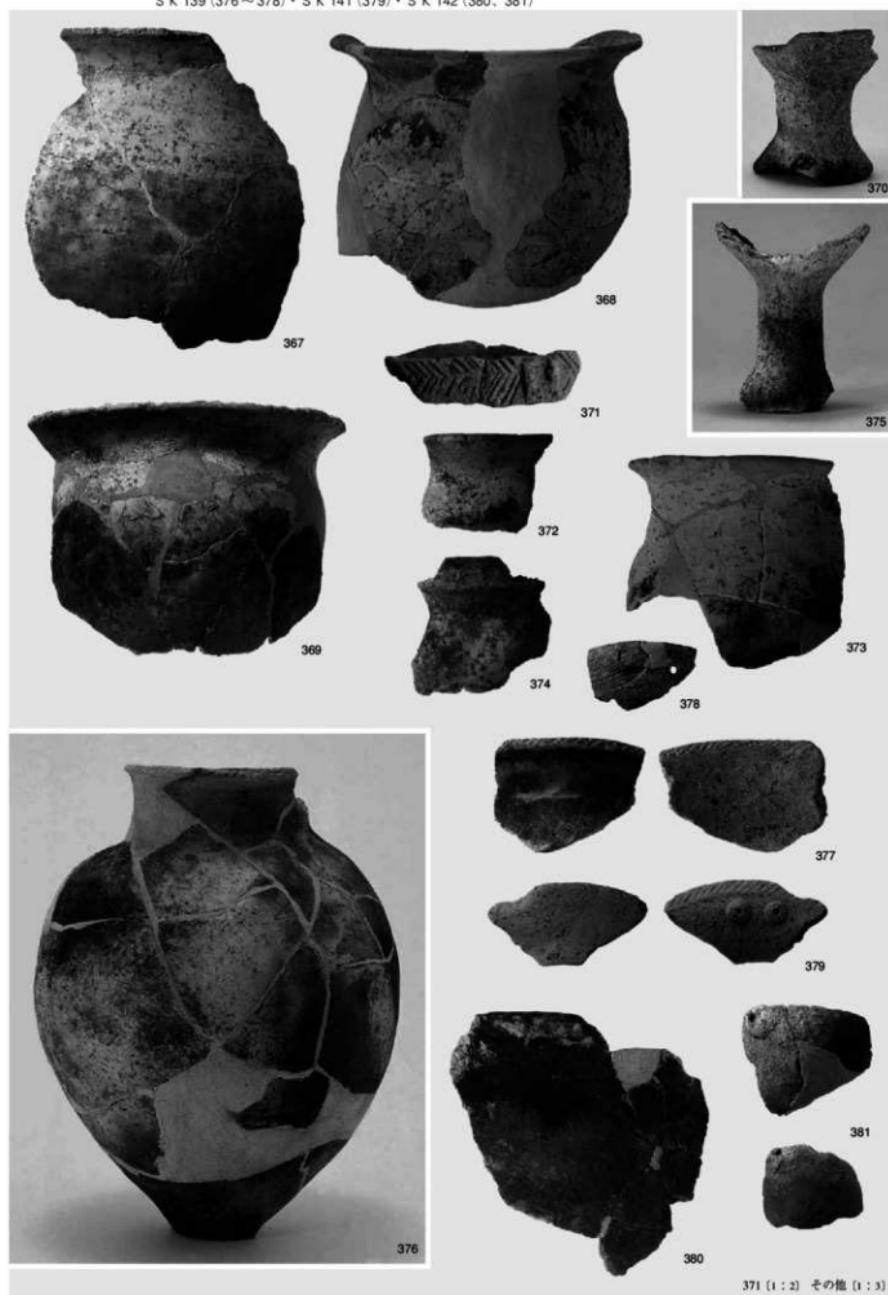
321・322 (1:2) その他 (1:3)



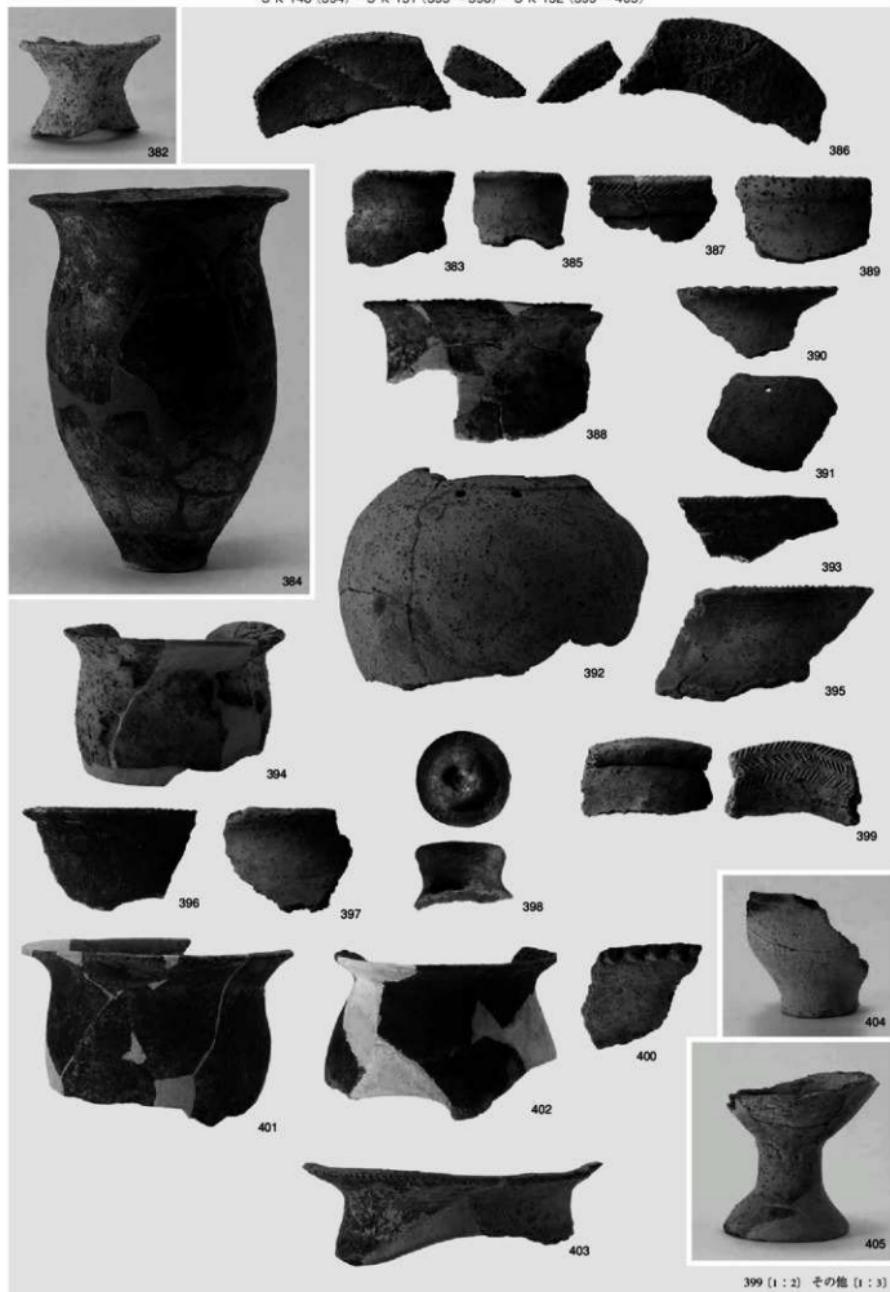


弥生土器 19 下層 S K 130 (367) • S K 131 (368 ~ 370) • S K 132 (371, 372) • S K 134 (373 ~ 375)  
S K 139 (376 ~ 378) • S K 141 (379) • S K 142 (380, 381)

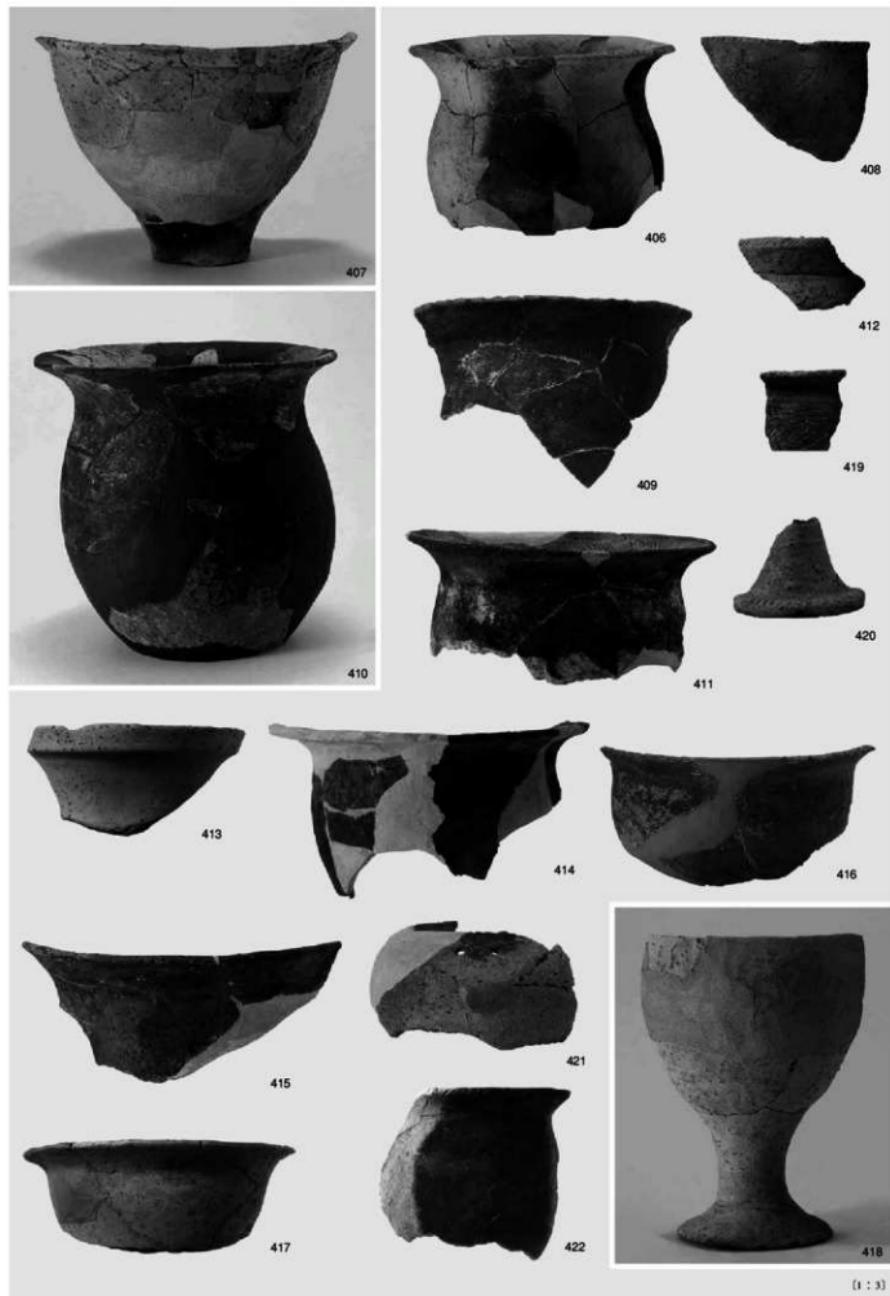
図版 171

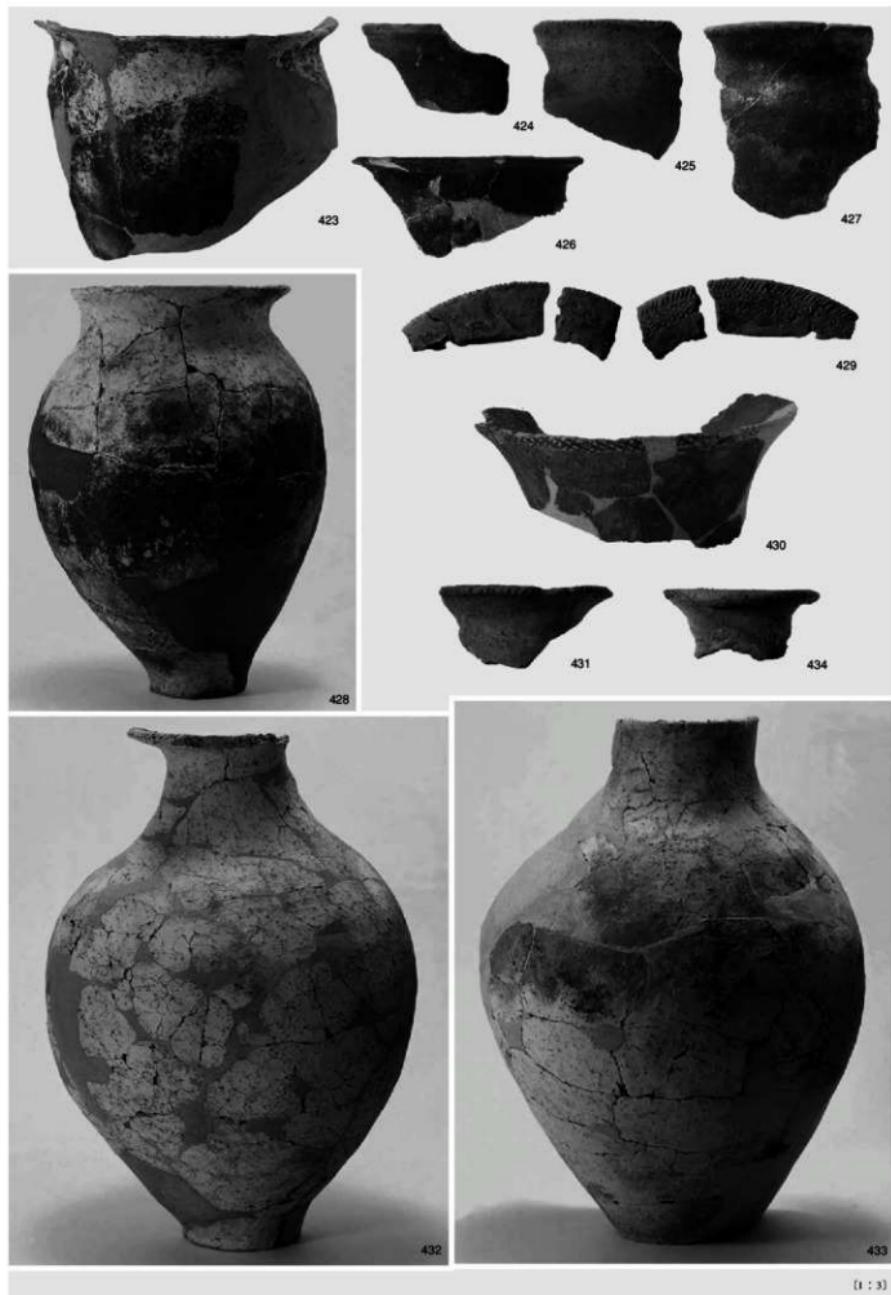


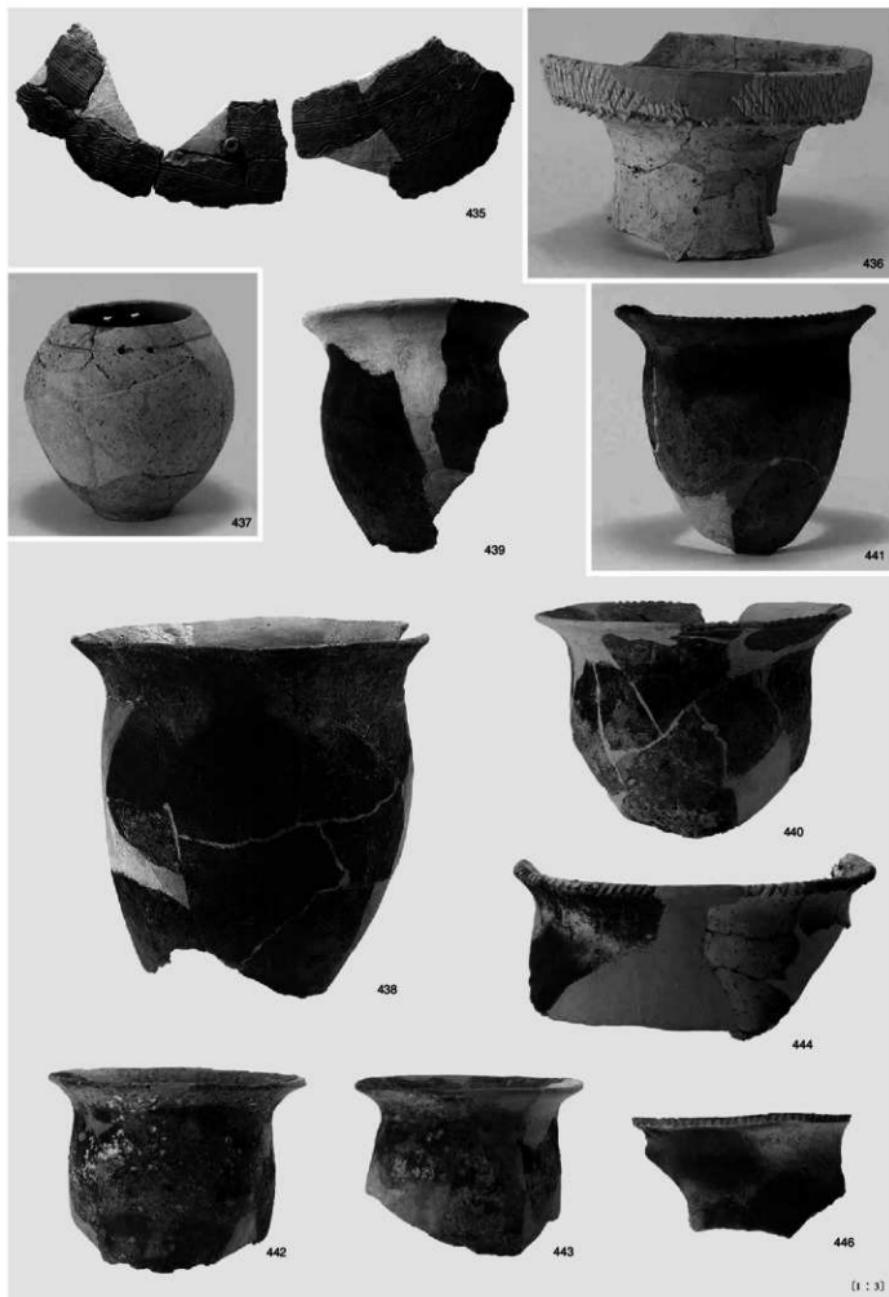
図版172 弥生土器20 下層 SK 142 (382)・SK 144 (383、384)・SK 145 (385～388)・SK 146 (389)・SK 147 (390～393)  
SK 148 (394)・SK 151 (395～398)・SK 152 (399～405)

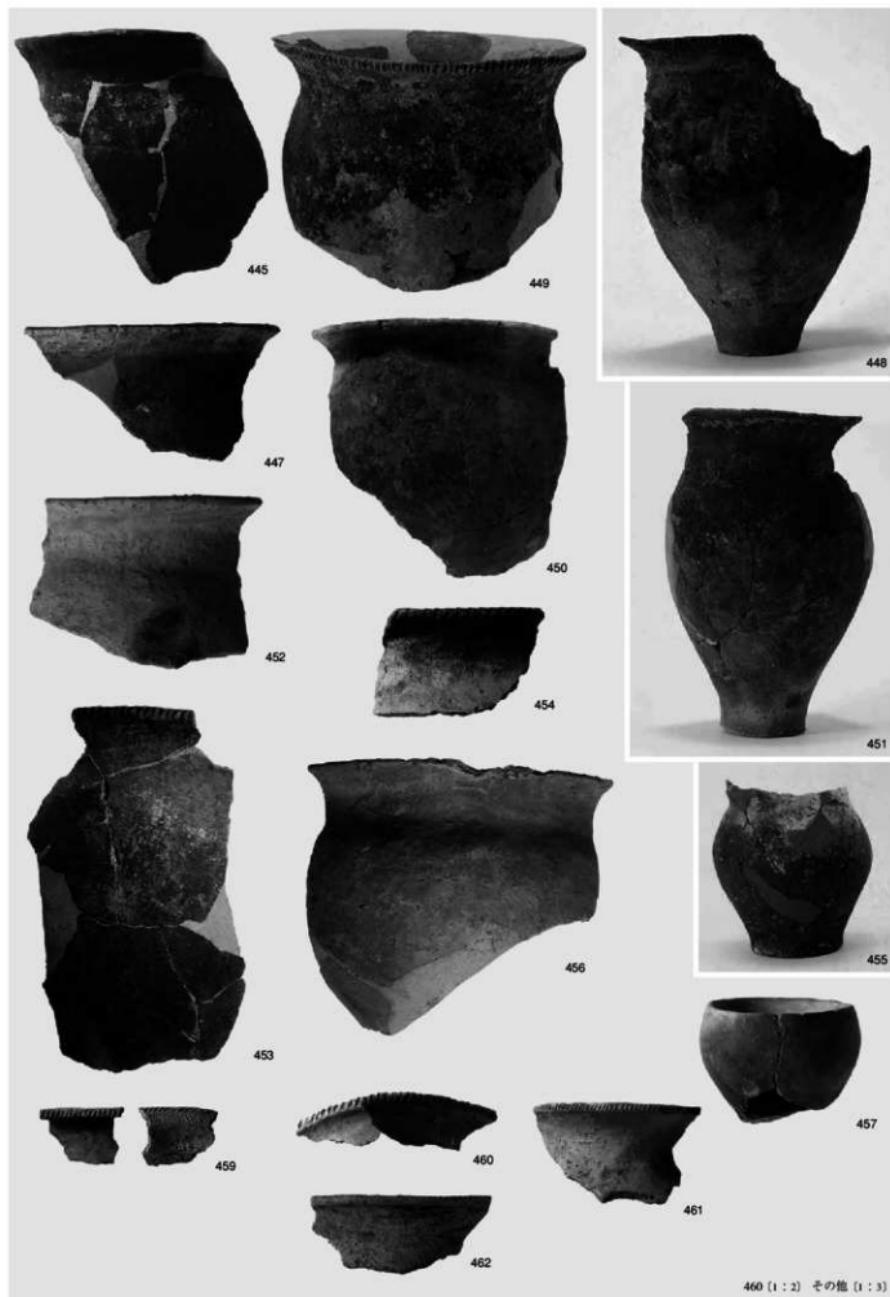


399 (1:2) その他 (1:3)





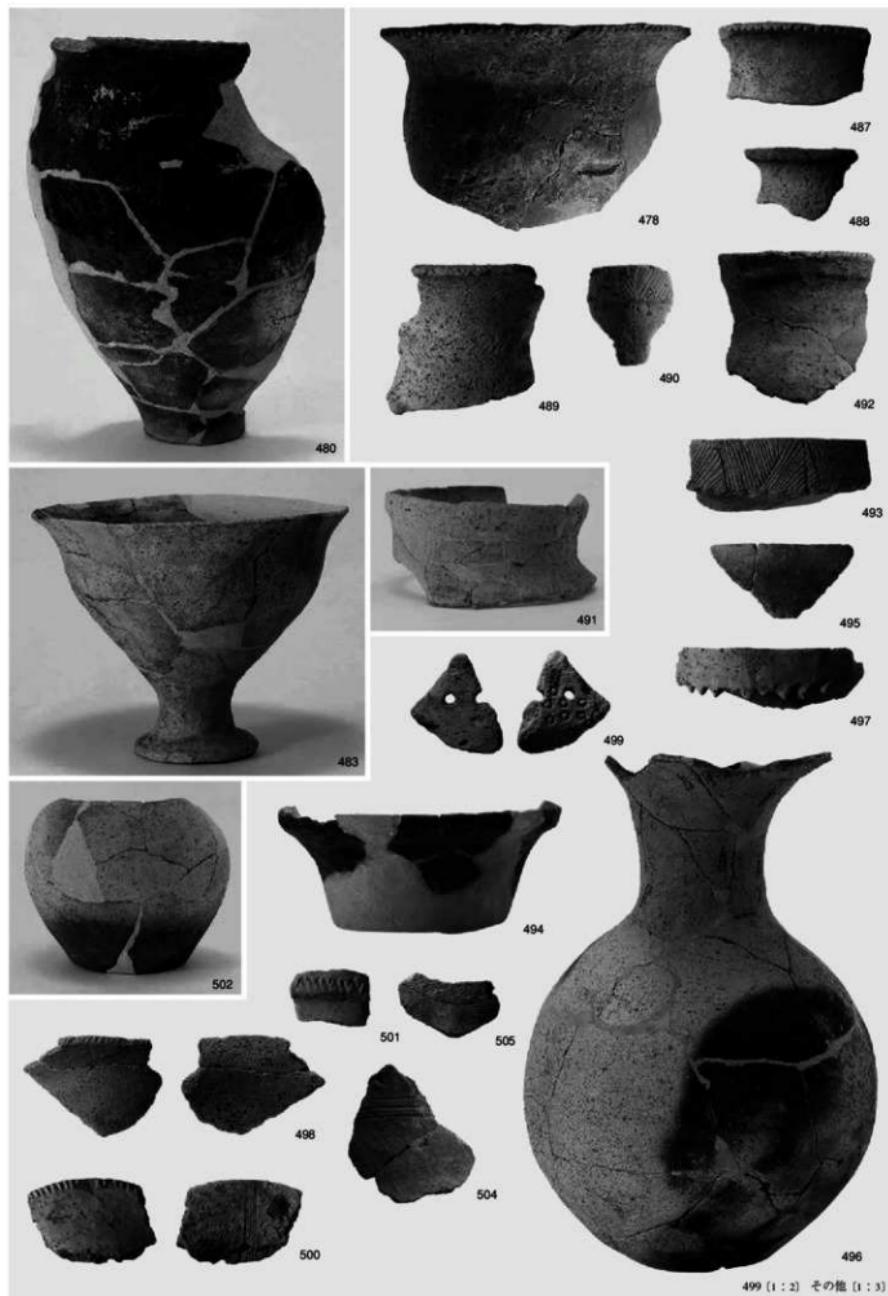








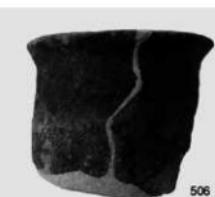
466 (1 : 4) 486 (1 : 2) その他 (1 : 3)



499 (1 : 2) その他 (1 : 3)



503



506



507



509



511

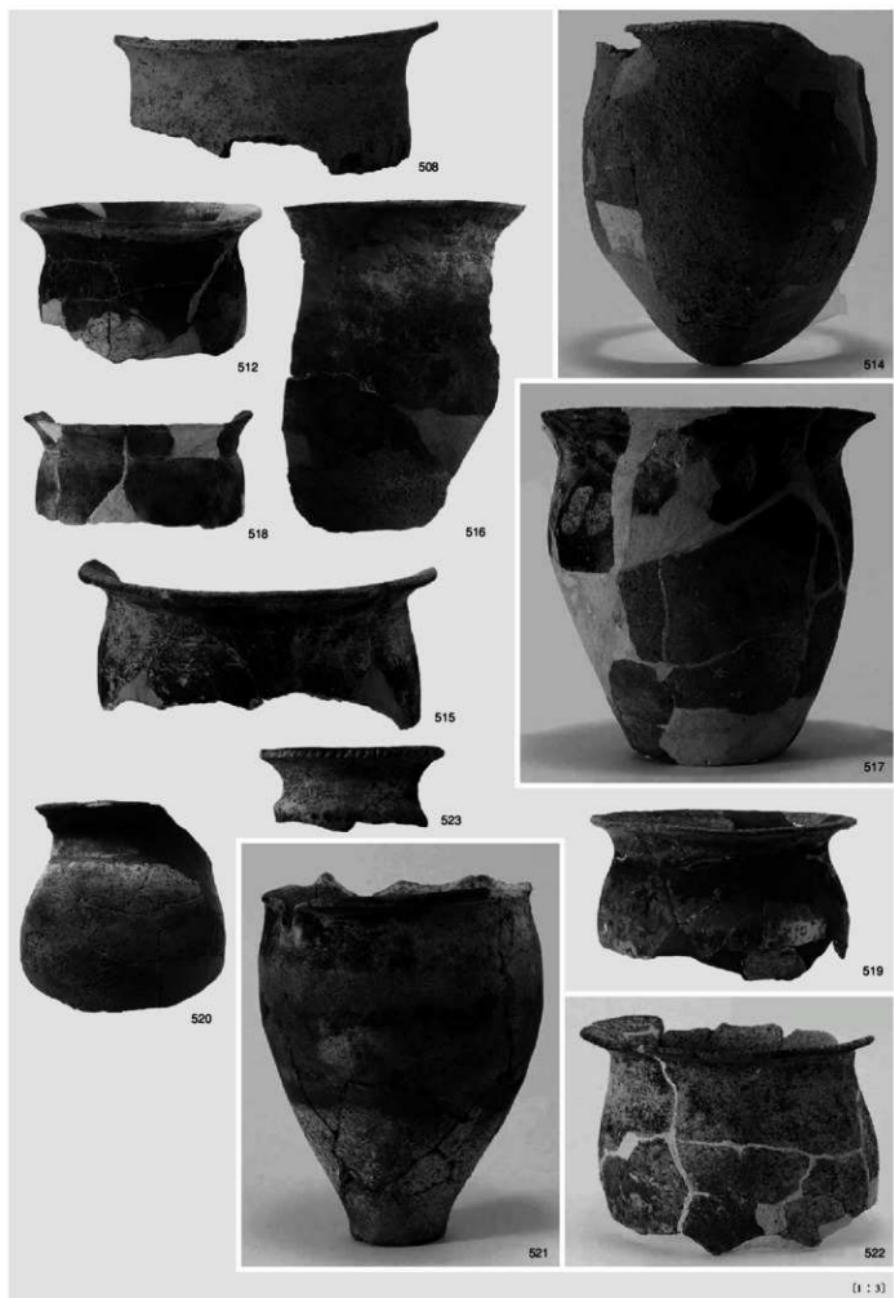


513



510

503 (1 : 4) その他 (1 : 3)





527



525



524



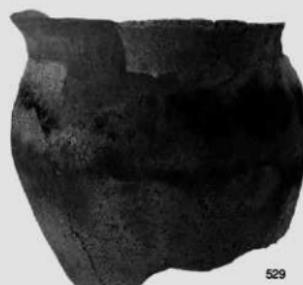
528



533



526



529



534



531



538



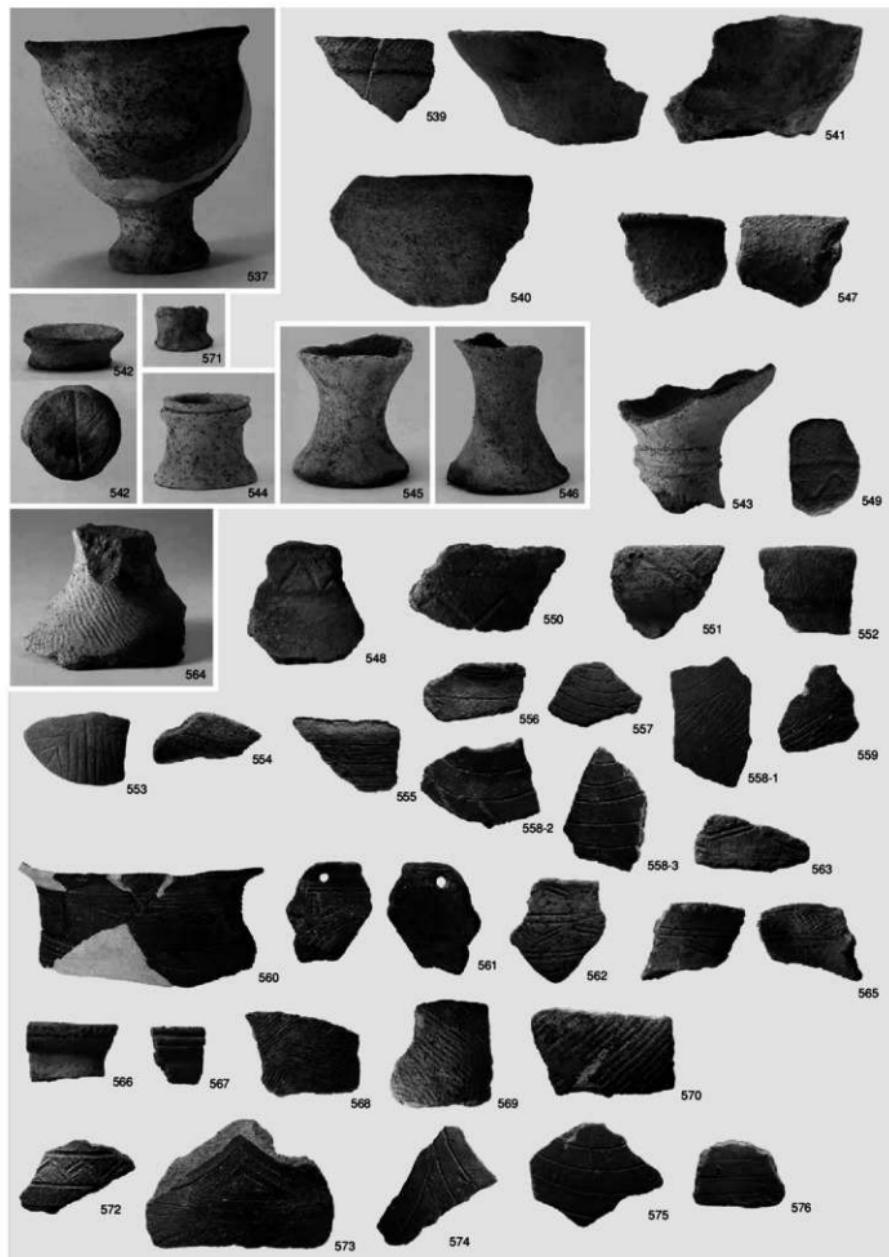
530



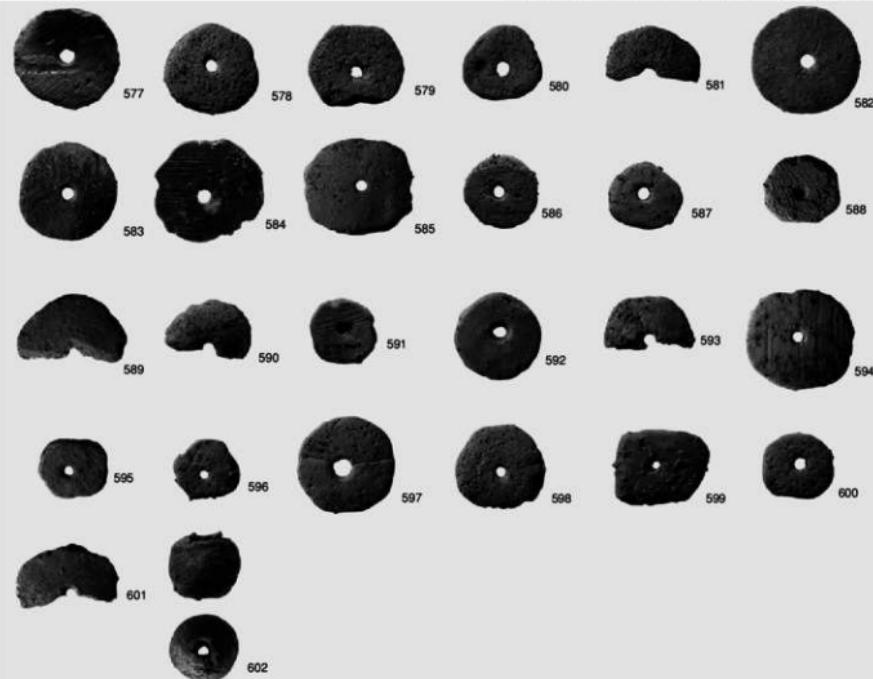
532



536

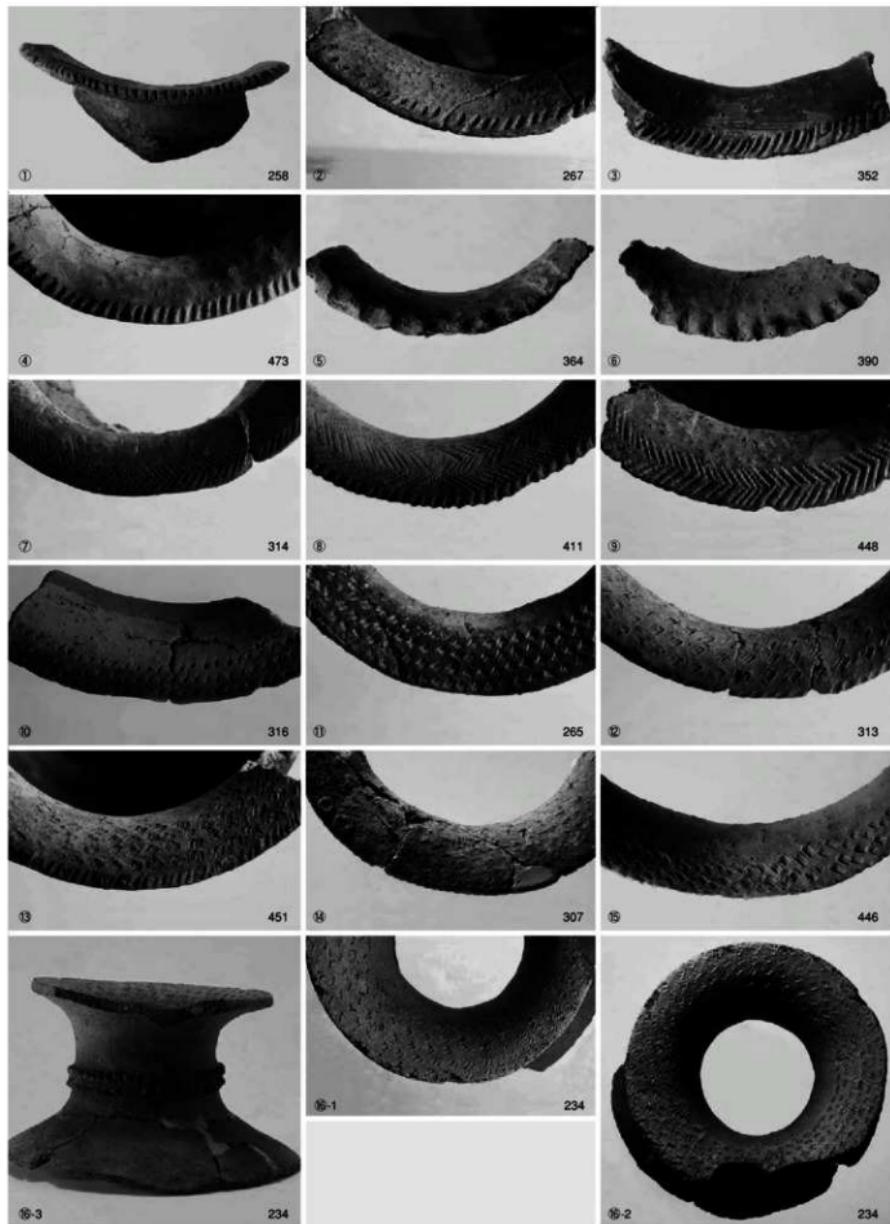


土製品 上層 S D 13 (577～581)・S D 23 (582)  
 下層 S B 110 (583～590)・S D 112 (591)・S D 114 (592、593)  
 S D 115 (594～596)・S B 115 (602)・包含層 (597～601)



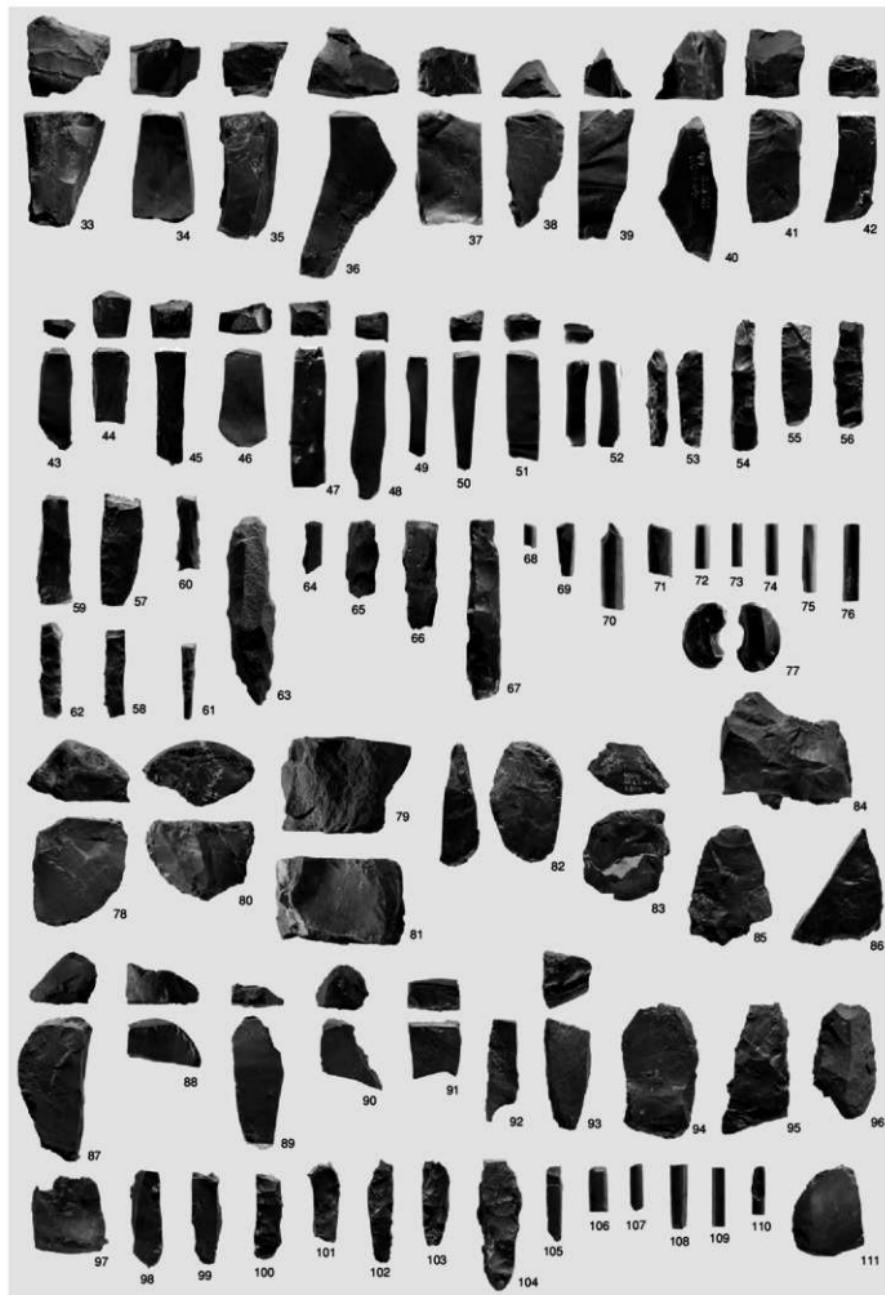
577～601 (1:2) 602 (1:1)

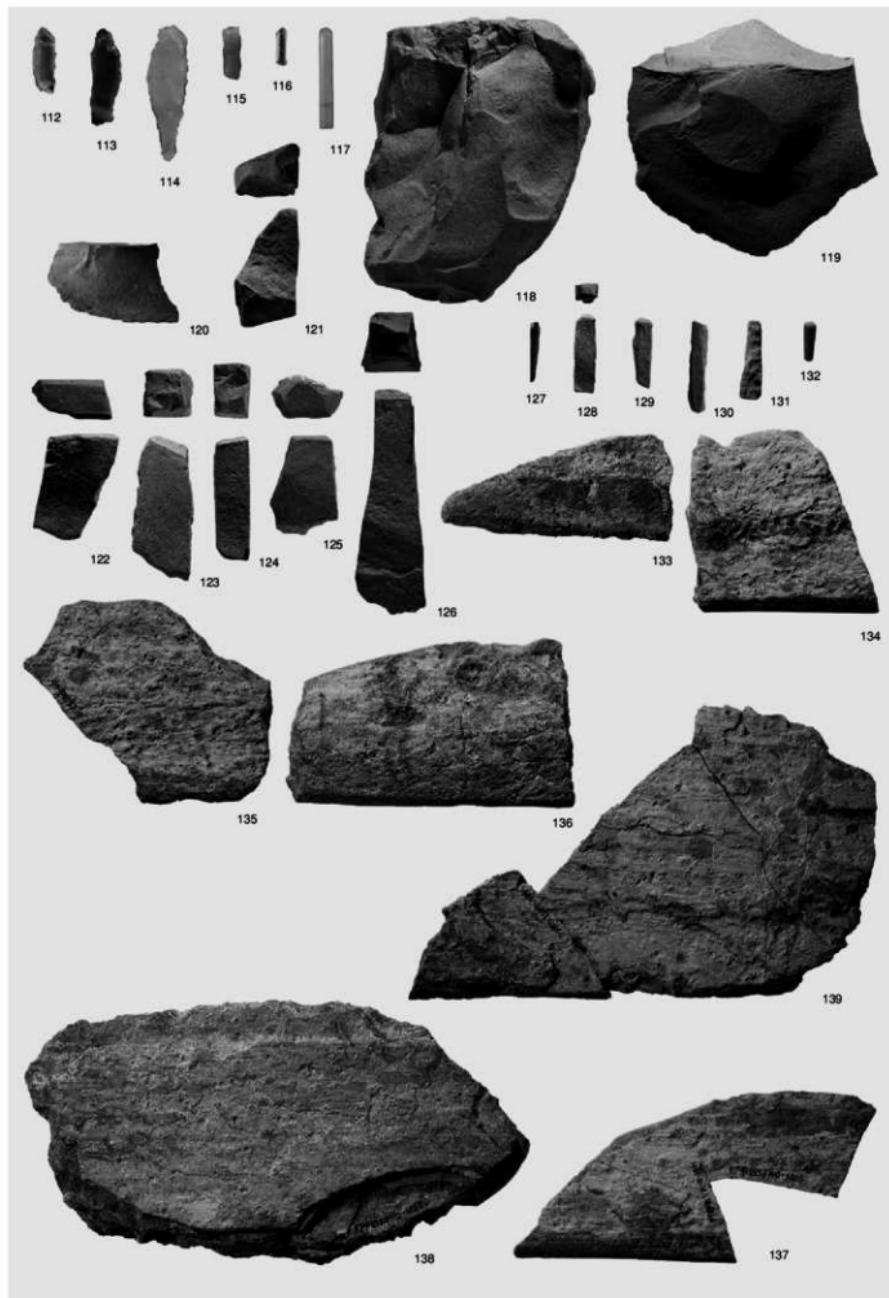


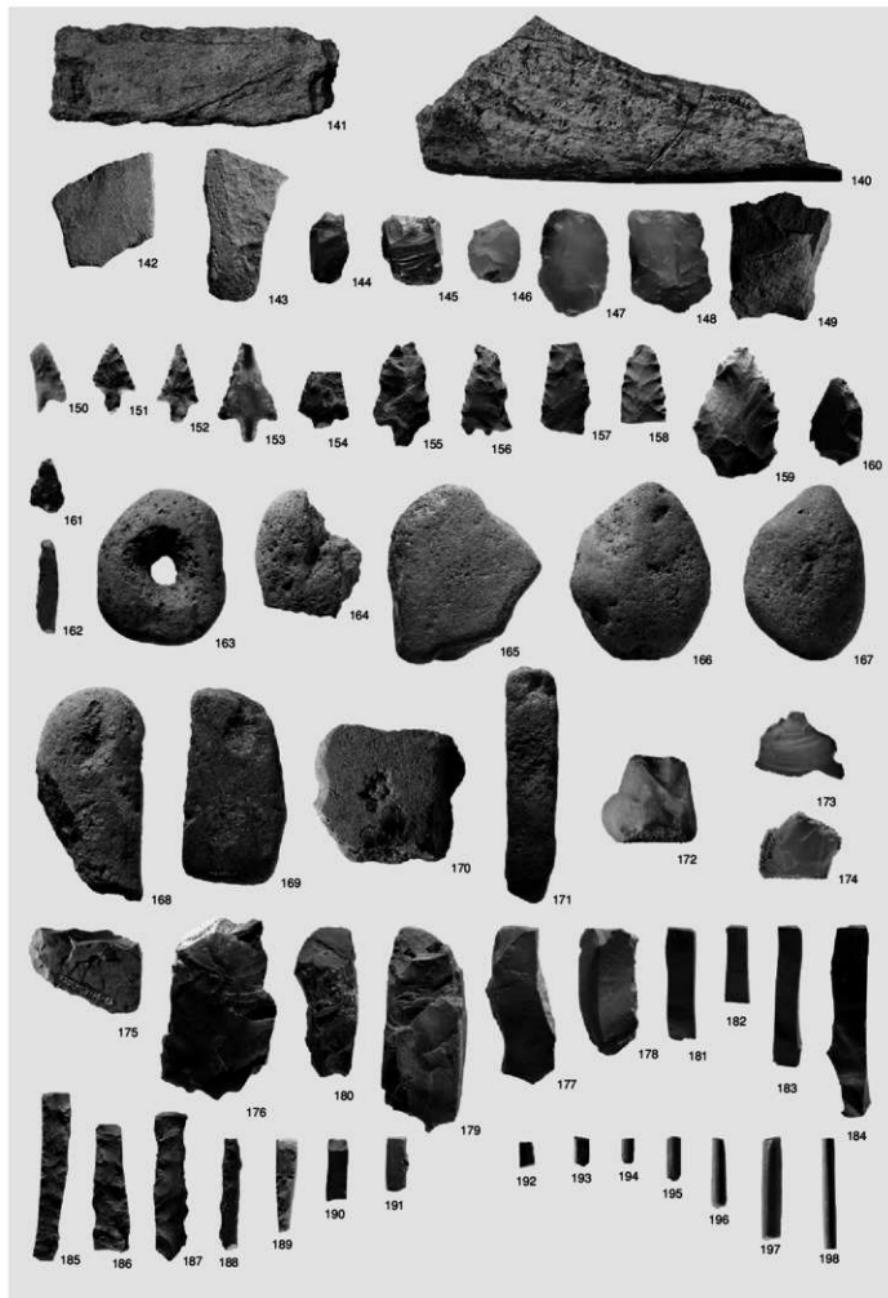


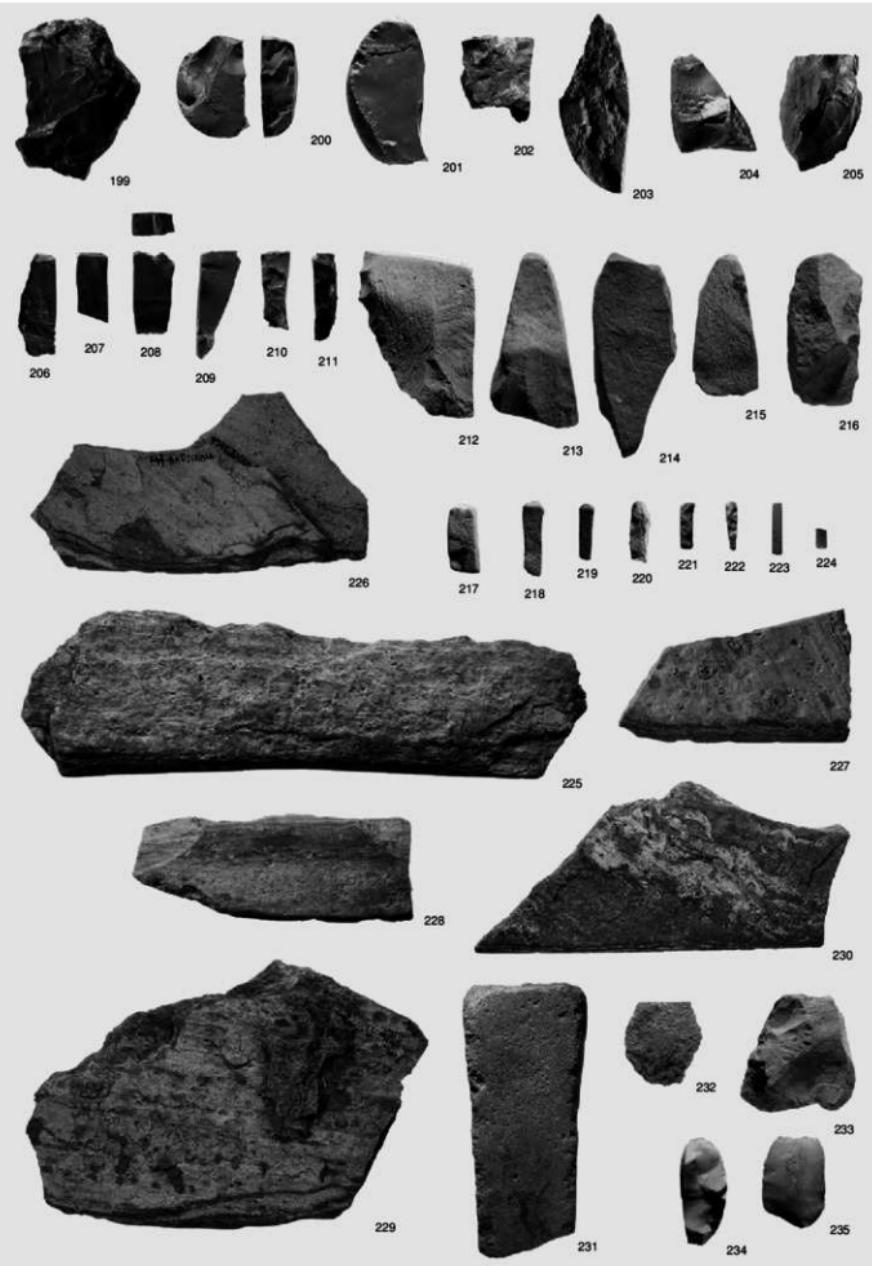
①～④ 内側刺突      ⑦～⑨ 線形状刺突      ⑪～⑯ 斜行短線文  
 ⑤・⑥ 内側押圧      ⑩ 三角形刺突



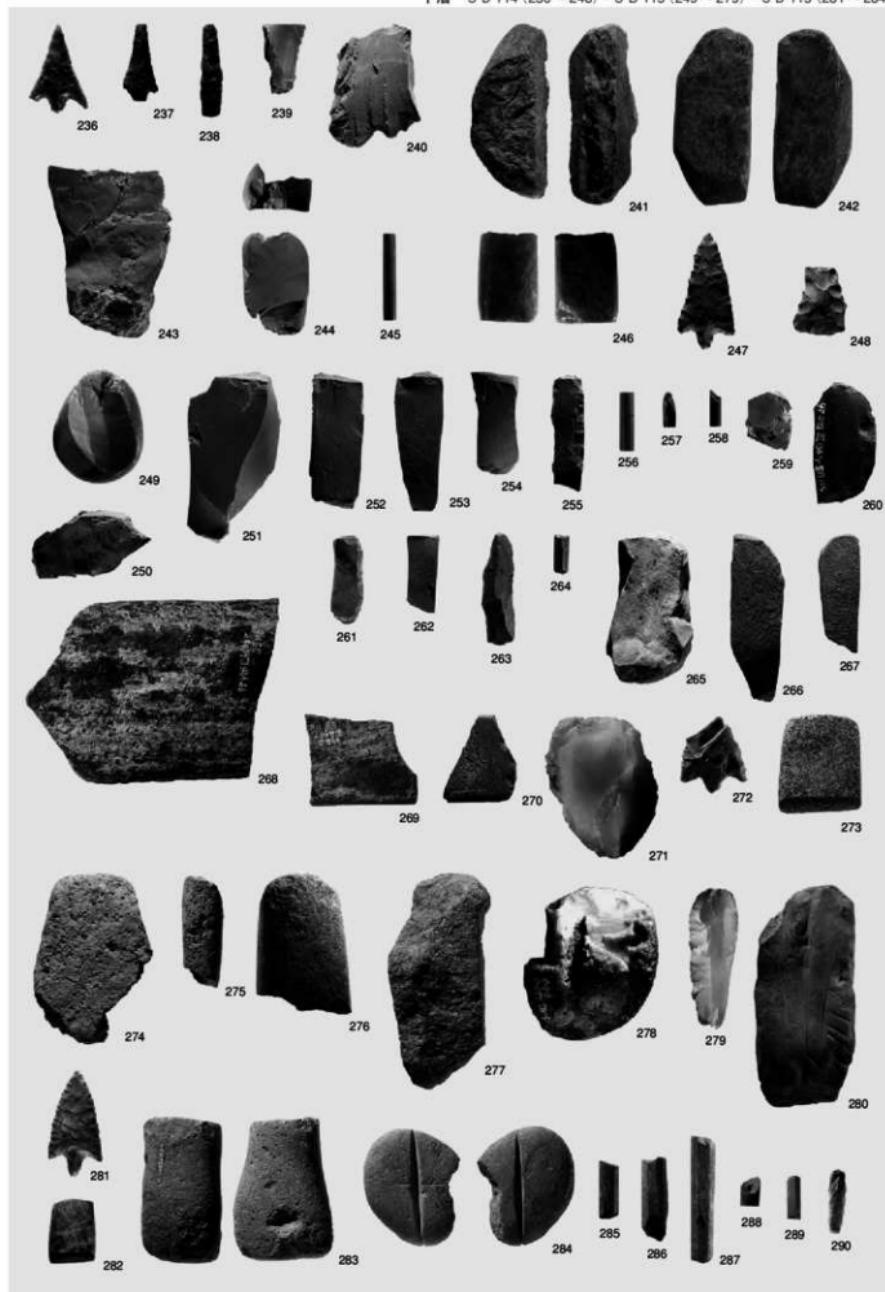


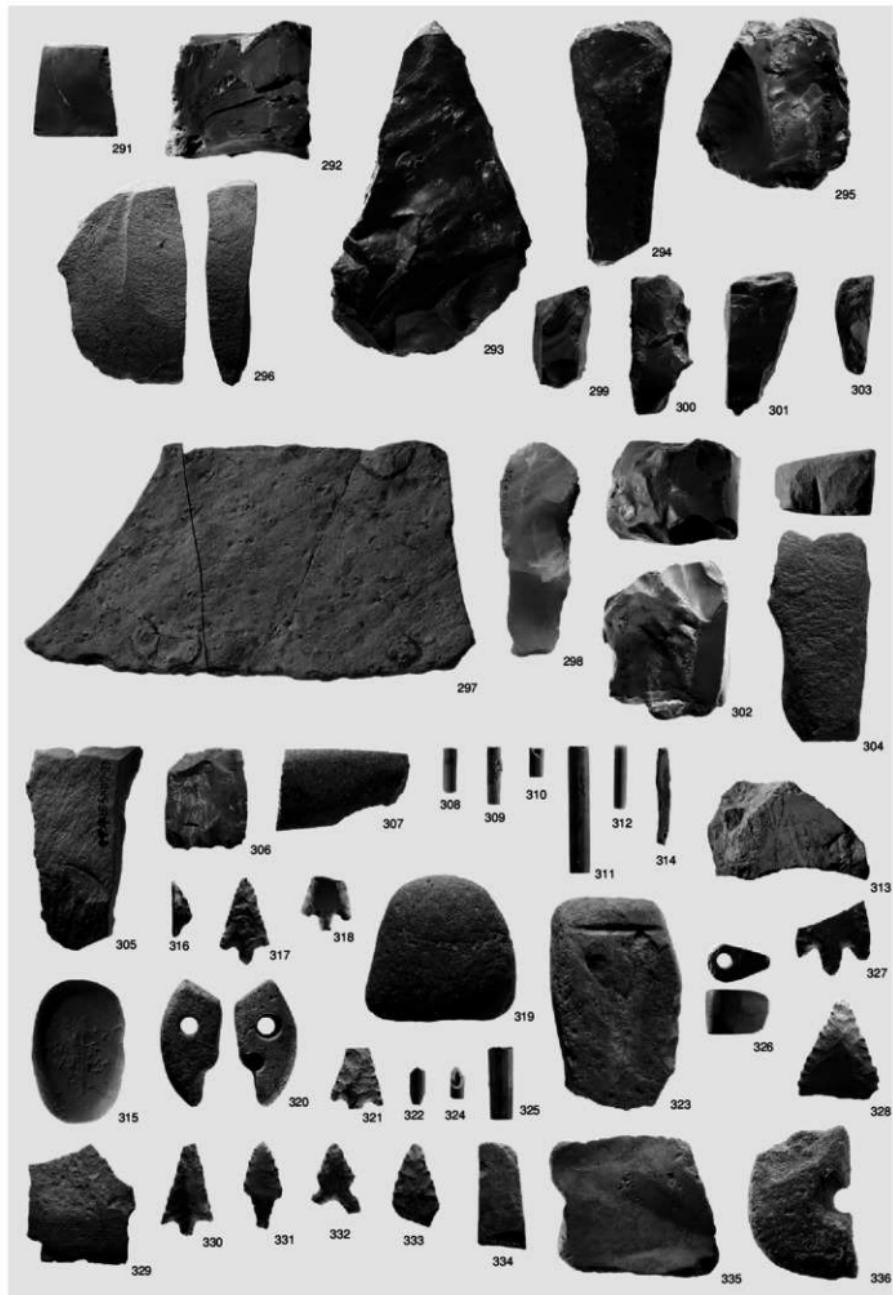


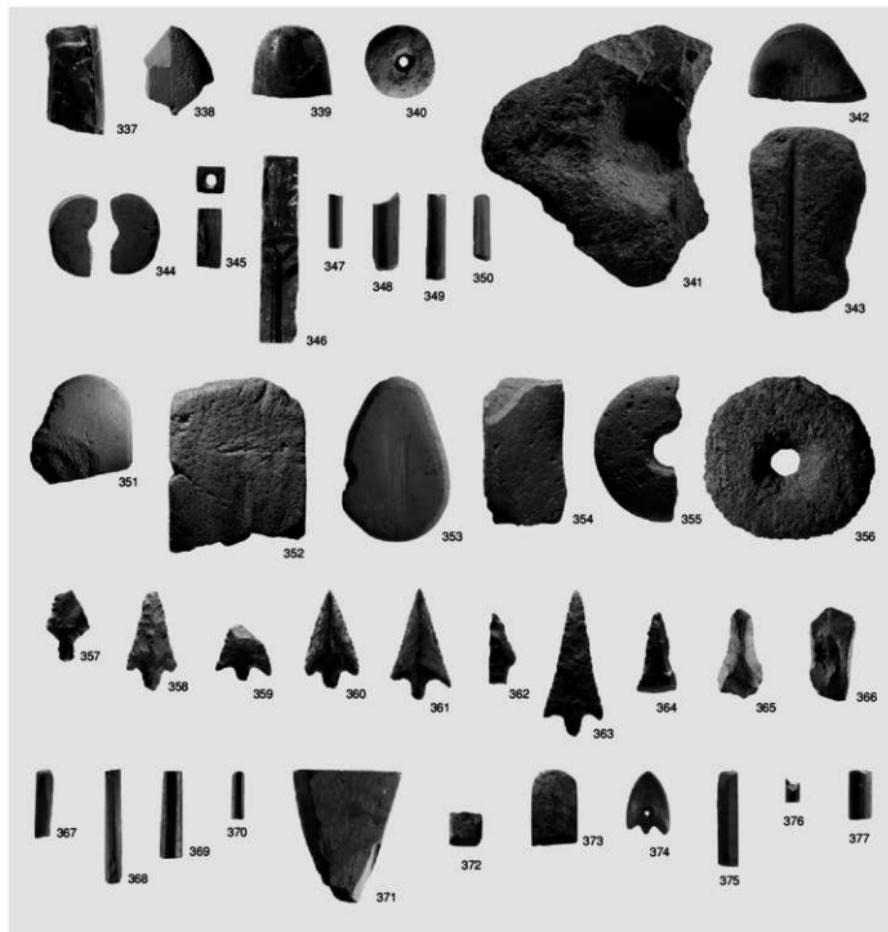




石器6 中層 S X 111 (280、285~290)  
 下層 S D 114 (236~248)・S B 115 (249~279)・S D 115 (281~284)

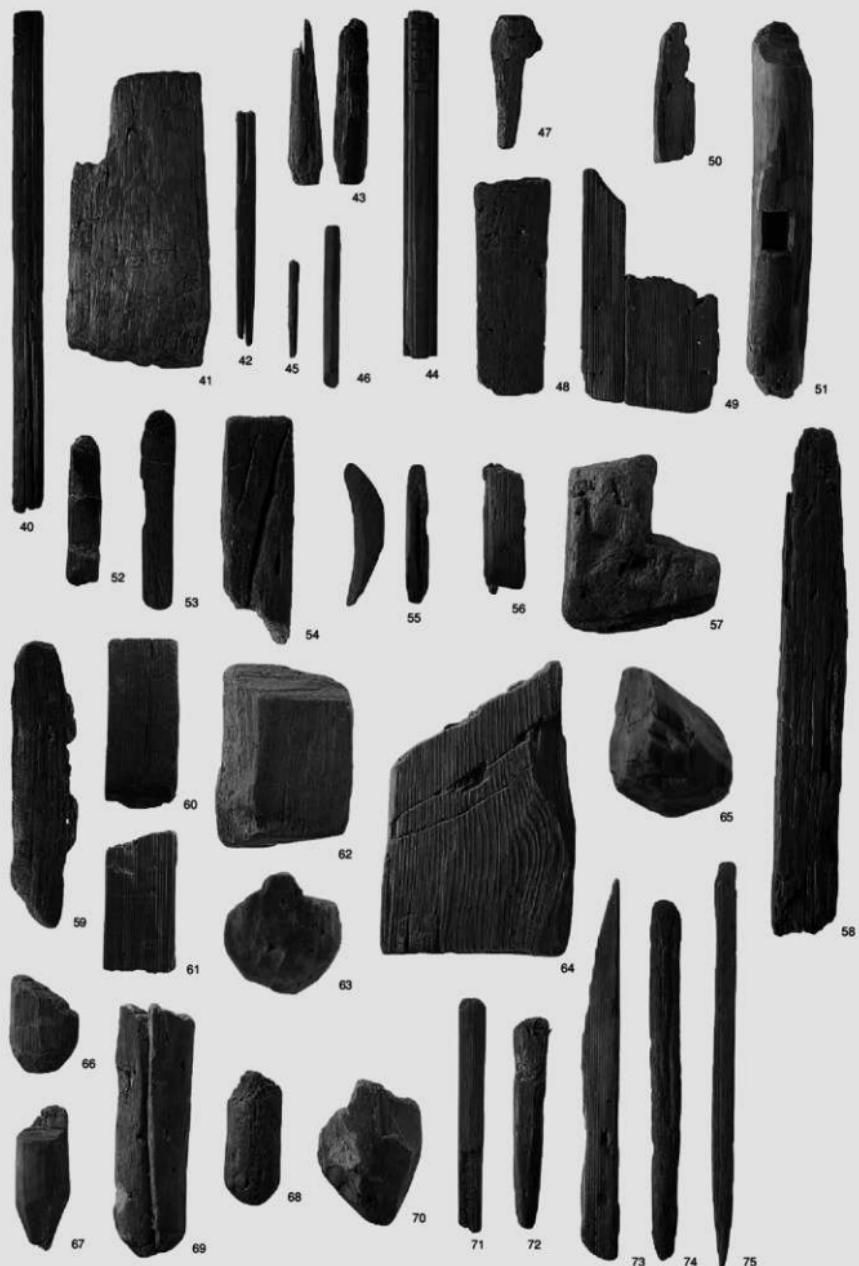


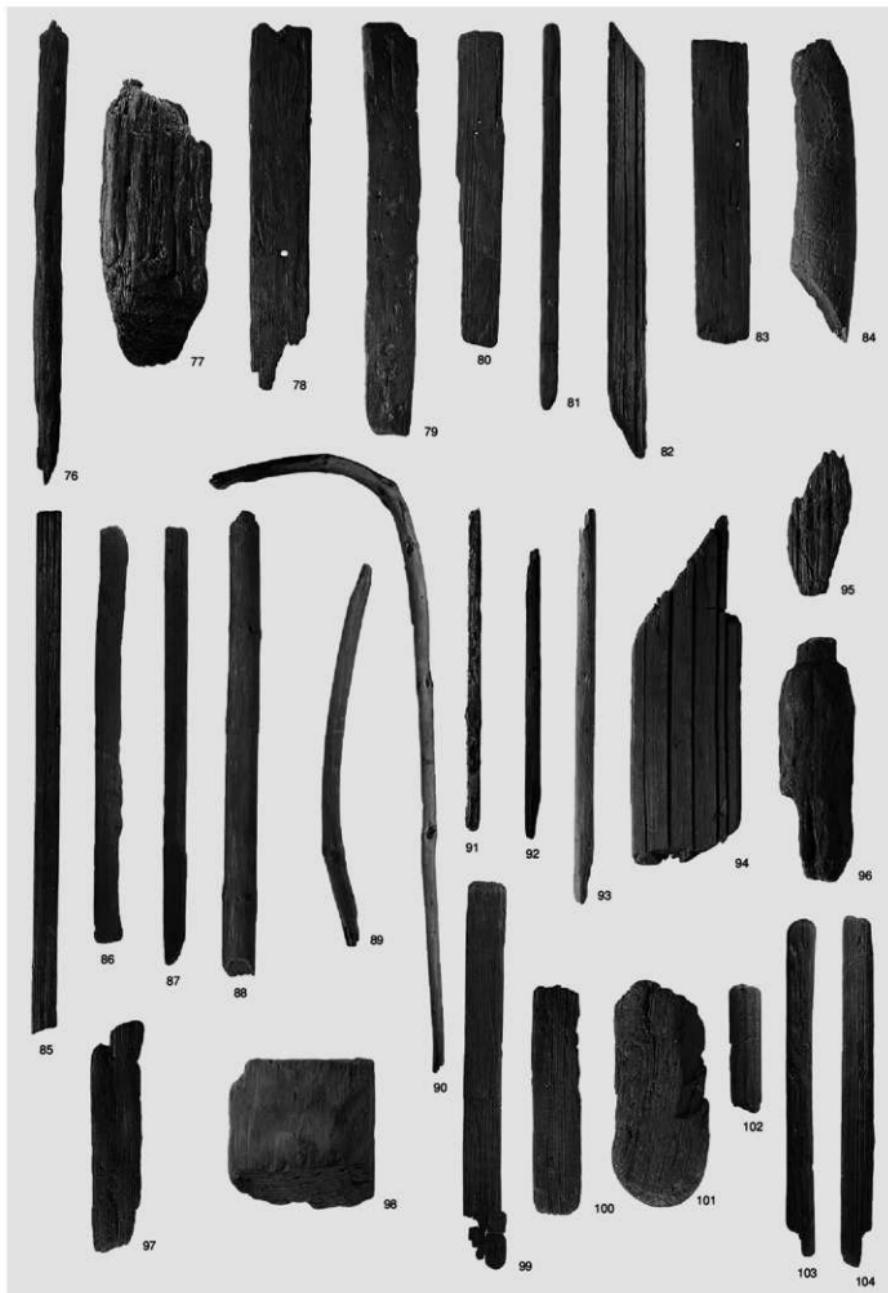










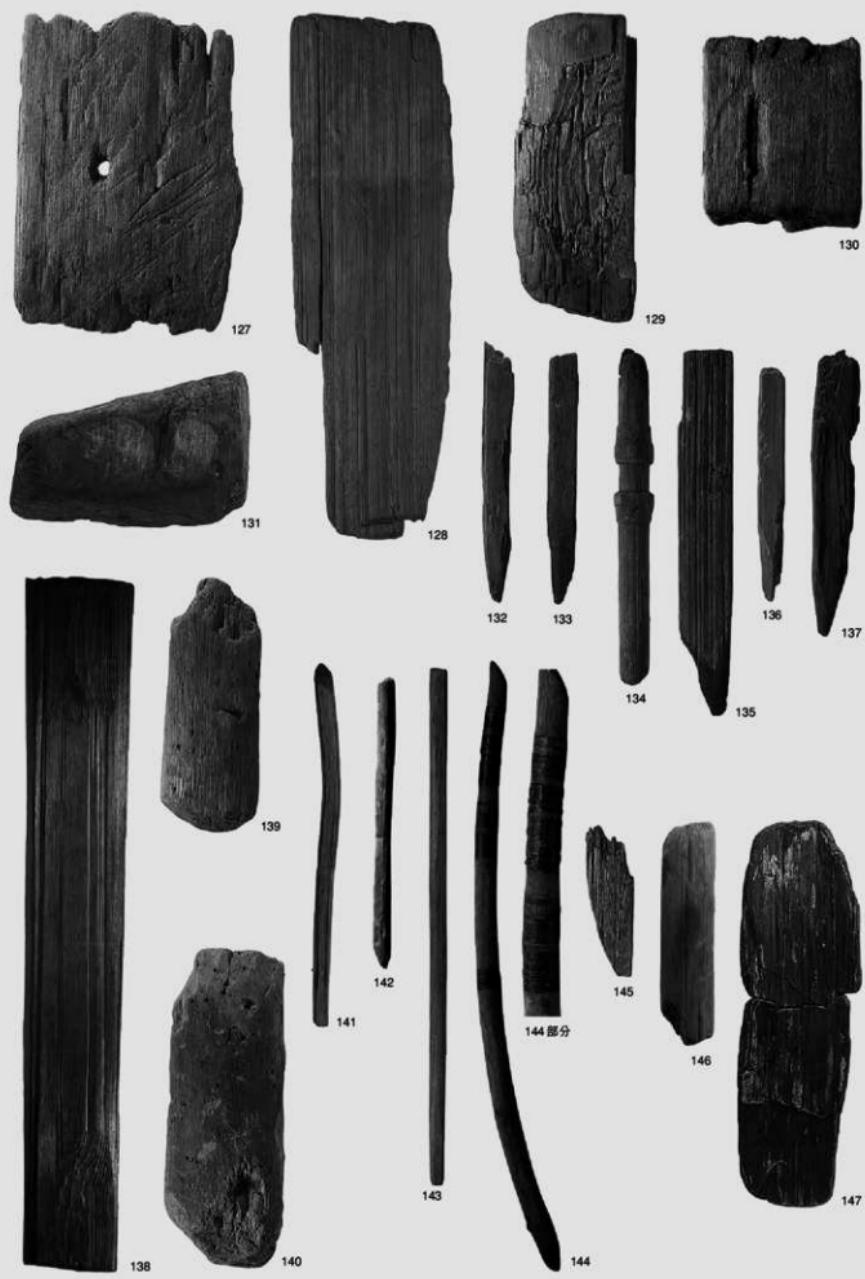


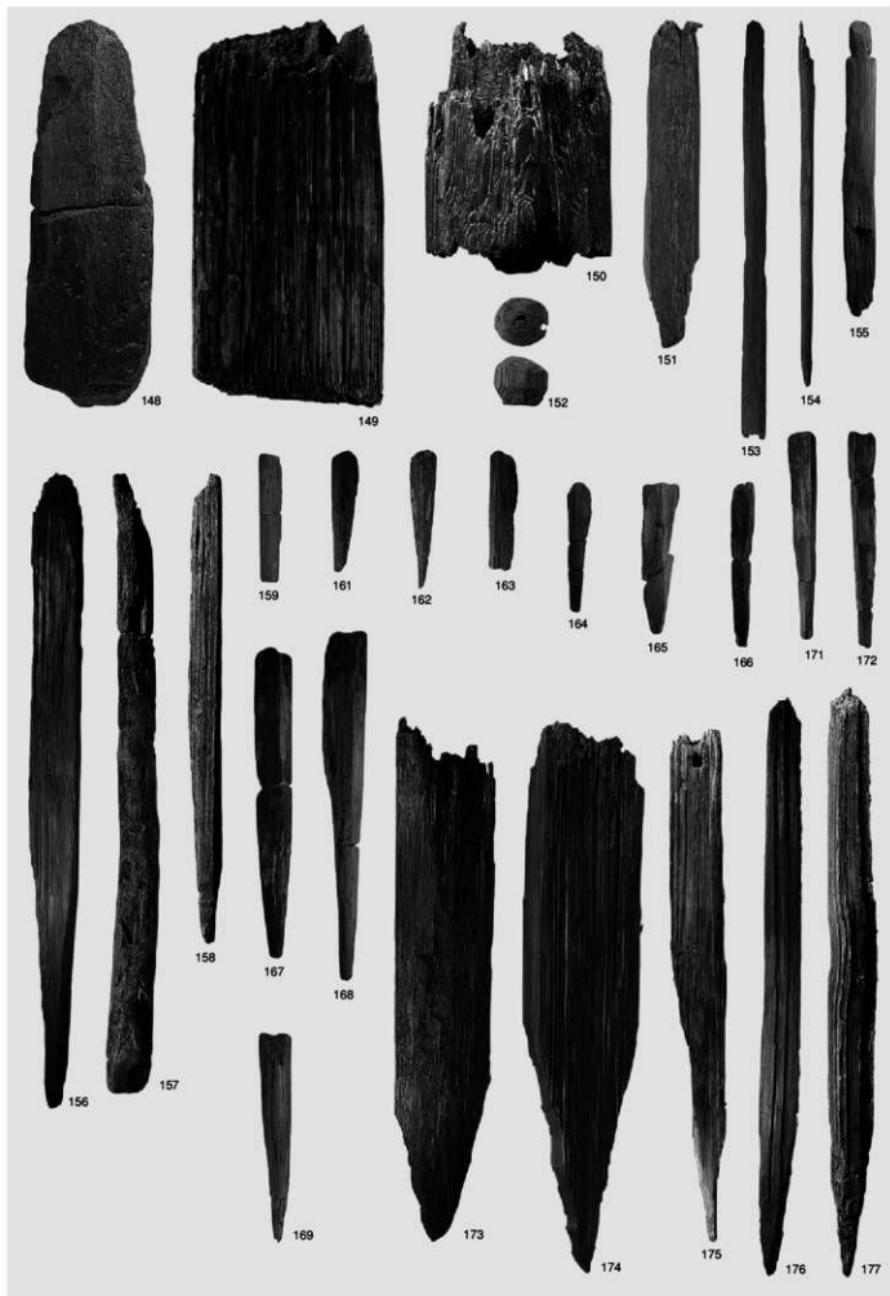
木製品 5 上層 SD 23 (105、106)

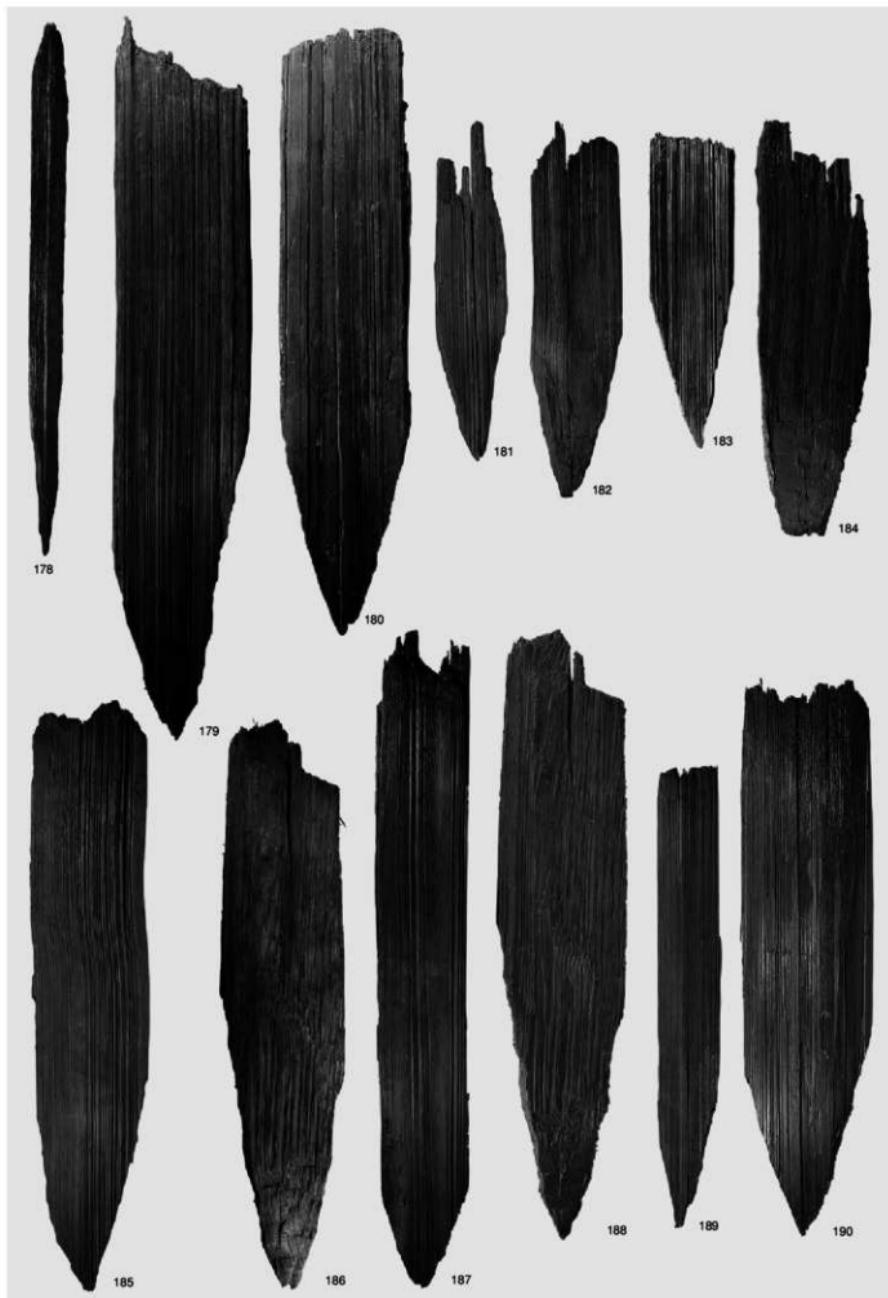
図版199

下層 SB 110 (107)・SD 112 (108、109)・SB 115 (110、111)・SK 151 (112～119)・SK 152 (120～126)











191



192



193



194



195



196



197



198



199



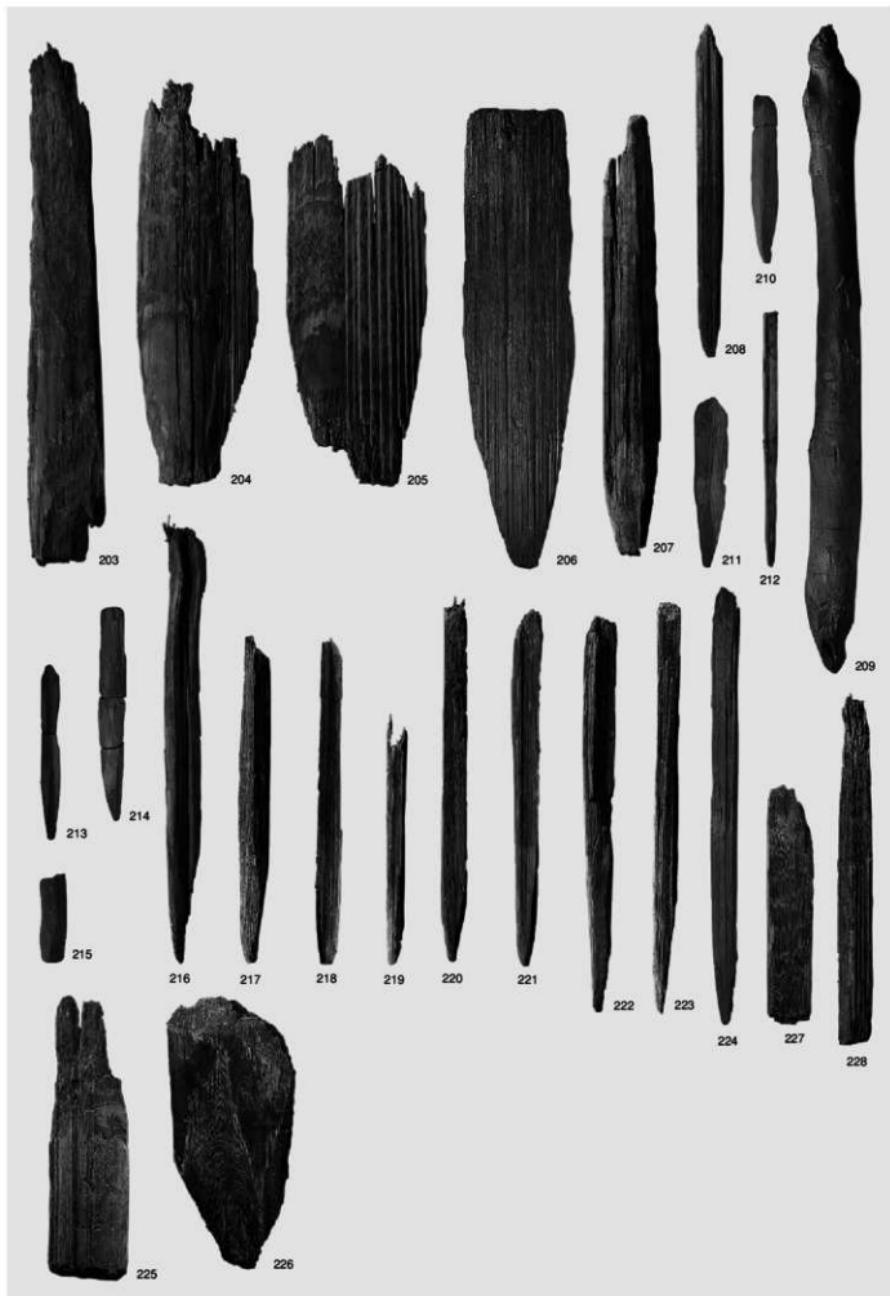
201



200



202



報告書抄録

書名	平田遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第98集							
編著者名	坂上有紀 田海義正 高橋保							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1							
発行年月日	平成12年3月31日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平田遺跡	新潟県佐渡郡 新穂村大字下 新穂336番 地1ほか	15-604	13	38° 01° 02°	138° 24° 28°	19960710～ 19961219 19970422～ 19971031	1,355m <sup>2</sup> 5,073m <sup>2</sup>	県営ほ場整備事業に伴う事前調査
	遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
	平田遺跡	集落跡	弥生時代 中期後半		平地式住居（3軒） 環濠（1） 土坑（44） 溝（34） 板杭列		弥生土器 石器（管玉製作工程品等） 木製品	細型管玉製作工程品と製作工具の多量出土

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第98集  
県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書  
平田遺跡

平成12年3月30日印刷 発行・編集 新潟県教育委員会  
平成12年3月31日発行 〒950-8570 新潟県新光町4番地1  
電話 025（285）5511

（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟市大字金津93番地1  
電話 0250（25）3981

印刷・製本 (株)セビアス  
〒169-0072 東京都新宿区大久保1丁目10番地8  
電話 03（5285）3430

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第98集

県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡

正誤表

頁	行・表	誤	正
2	第1表	国中層／国中平野	国仲層／国仲平野
21	下から7行目	図版225	図版25
48	上から15行目	図版51-306・52-320	図版51-306～52-320
75	第22図	62 糸魚川市一之宮	62 糸魚川市一の宮
104	第18表	遺物No.の列全て	別紙 シールをお貼り下さい。
107	下から15行目	細形管玉	細型管玉
109	下から16行目	廣野廣造	廣野耕造
図版125	石材鑑定試料写真	珪化した酸化凝灰岩	珪化した酸性凝灰岩